TC# 266232

East
Asian
Library
AP
95
J2T185
v.0.13
No.11
(1940)

UNIVERSITY OF CALIFORNIA-LOS ANGELES
L 010 705 687 1

大正五年九月十五日第三種郵便物認可 昭和十五年九月三日印刷納本 昭和十五年十月一日發行（毎月一回一日發行）富士 第十三卷第十一號

富士

9-1900
15-10

第八回 雜誌週間

國民擧って國策協力

新連載 時代の尖兵 大林清

十月號

ニキビ
ソバカス吹出物
色黒

誰れでも出來る美顏美身法

銃後の家庭へ青年男女の身嗜みとして最も質素に誰でも出來る美顏美身法を御敎へ致します、何人も見落して は一生の大損です。
最近世界醫學上の一大理論として發見された赫顏色黑油顏ニキビソバカス吹出物の原因と治療法ソレハ今まで の療法を根本から覆した一大發見であり化學の蘊奥を極めたスバラシイ福音と云わねばなりません。
從來單に顏面其他上皮斗りの疾患と考へられて居た色黑ニキビ吹出ソバカス等は兩親から傳わる胎毒や他から移植した惡血古毒が胃腸に發生する毒素と共に消化液へ混交して腸管から吸收され自然と顏面其他の皮膚上へ吹き出して來るものであると云ふ事が明かとなつた、從つて歐米醫學界では外面斗りの塗藥やクリーム等を止めて皆特殊の內服藥に依り內部から治療して大成功を收めて居ります
乍然肉食人種の外國藥は米食本位の東洋人に其儘では効果が無いので我醫藥學界に於て有名なる藥學博士島田耕一先生醫學博士谷口謙先生敷津先生水谷先生越澤先生等の五大博士學士は共に合議指導研究された結果遂にハルナーと云ふ藥物を發明されました。
此ハルナーこそ銃後の身嗜みとして白粉やクリームと異つた自然の美を增す眞の美身藥として全國有名なる藥局藥店で進で取次販賣して居る文明藥ですから是非一度御試驗の程を祈上げます。

五大博士大家發表

無代進呈！

ハガキ一本で ドナタへも進呈

上記の五大博士大家が記述された名著を御讀み下さい谷口博士の人體と血液に就て、島田博士の「白い人と黑い人と出來る眞理」、水谷先生の不思議なソバカスの實驗敷津先生の「顏の美と全身の美」、越澤先生の「ニキビ退治と藥物論」其他ニキビソバカスを治して色白く美しくなる理論方法の詳細記述種々有益な記事が滿載されてある書籍です何人も直にハガキへ（五大博士大家の書物送れ）と書いて御申込下さい喜んで無代贈呈致します。

東京市京橋區築地橋際む九五號
合名會社 濟生堂製藥所
電話京橋(56)一〇二七番
振替口座東京一七二〇一番

富士 昭和十五年十月號 目次

▲表紙――○希望……松下正甯色
▲多色口繪――○慰問袋……今村嘉吉畫　○時代の尖兵……玉井德太郎畫

（グラビヤ寫眞）
◇航空日本……三
◇南洋風物……八

富士グラフ
◇建設は進む……一二
◇高原開發畫報……一四
◇鍛錬時局色……一六
◇航空寫眞の出來るまで……一八
◇情の皇軍……二〇

◇伊勢大廟に額く……松岡洋右……九六
◇戰爭と體位向上……下村宏……七二

新東亞建設の理想小說
歐米心醉の夢から醒めよ、
時代の尖兵（新連載）……大林清……三〇

血の記錄、宜昌大作戰の從軍報告！
戰生少尉奮戰記……木村毅……一六〇

科學精神を生かした獨逸の軍人魂 見よ、
挺身第五列……北村小松……五六

防諜小說
跳梁する某國スパイをあばく、
花の露臺……北林透馬……二三四

●ぜいたくは國家の敵！……五二
●節食しても榮養は大丈夫……外岡和雄……九二
●スパイの手に乘るな……糧友會主事 藤倉常三……一一二

銃後物語　任俠鶴嘴部隊……安倍季雄……一〇〇
時代小說　傑物奇物……大倉桃郎……一八六
明朗小說　若奧さん大出來……南達彦……二〇四
映畫小說　鬪ふ男……朝倉貞夫……二三四
講談　長英と三次……大島伯鶴……二七二
新作落語　箱根山……柳家金語樓……一八〇

▲國家と雜誌と皆樣……九五
▲藝界噂話……二二六
▲笑話倶樂部……二四四
▲陣中和歌……二四四
▲人體に關する豆知識……二五五

將棋と碁
勘所の摑み方……花田八段……二〇二
筋の發見……瀨越七段……二二八

◎日滿支連絡航空路繪圖……澤井一三郎畫……二六

銃後に人あり

シミツタレナ旦那様（上野料一）…二九〇
東京驛頭の感激（木島 博）…二九一
片假名便り（池上三十三）…二九二

傑作コント集

◇指輪……北林透馬…一五〇
◇如何なる星の下に……葵龍之介…一五三
◇青眼鏡の男……松浦泉三郎…一五四
◇樽中有仙……鯱城一郎…一五七

海の荒鷲 **奇蹟の生還**……………湊邦三…二三八
陸の荒鷲 **飛行靴通信**……………山村邦利…一四一

滿洲事變十周年！ 輝き建設の思ひ出物語
東宮公館……………木蘭良二…二六

◎**爆彈を飲む日本兵**……………馬島俊積…二三一

國策協力の實例
▲**坊主頭から出發**……………上野驛長 富田政助…一四四
▲**惰眠を醒ます板鐘**……………宮崎縣小學校長 白川馨…二六八

◎朝の精神（詩）…佐藤惣之助…二九
◎節米日（詩）…サトウ・ハチロー…一四八
◎日本勤勞の歌……………五〇
◎南を想ふ（詩）…西條八十…一三三
◎頑張り音頭…内田つとむ…二〇二
◎感激の輸送機（感話）…井口靜波…一四三

冨士漫畫館

日本人なら出來ぬ筈……田村辰三…二二
贅澤品禁止……志村つね平…三三
もがく蔣介石……岡けんぢ…三三
防諜報國……吉野弓亮…三三
害虫驅除……白路うらら…三三
戰線銃後一體……をぎ原賢次…二四
東亞共榮……白路うらら…二四

時局早わかり **新體制になつて世の中はどう變るか**……丸山幹治…一四六
銃後よ頑張れ **在米日本人は叫ぶ**……遊佐敬三…一九八
科學界の誇り **無線界の父横山英太郎氏**……海野十三…一四二

評判の長篇小説

時代小説 **鶴龜武士道**……白井喬二…一二四
時代小説 **徳川家康**……鷲尾雨工…三三四
探偵小説 **亞細亞の鬼**……大下宇陀兒…二〇四
現代小説 **春告ぐる嵐**……川口松太郎…七六
現代小説 **拓士の妻**……竹田敏彦…一〇八

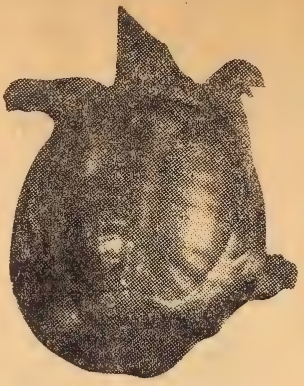
漫畫

△お勝手天下……川原久仁於…一四四
△陣中川柳……小野佐世男…六六
△川柳漫畫…谷脇素文……七四
△冨士漫畫會場……………三三〇

（禁複製——本誌に掲載せるものは無斷にて轉載・上梓・上演・映畫化・放送その他一切の複製行爲をなすことを禁ず。）

繪

食慾がなく、セキや微熱が出て
肺・肋膜で痩せる方が
◇芯から肥つて元氣になる◇



村上のスッポン

スッポンの生血と生膽が肺・肋膜にとつて絶對的治療強壯の働きをもつて居ることは誰方も周知の事ですが、併しスッポンもその產地と種類によつて非常に効果が異つて居りますから、スッポンなら何んでもよいとは申されません。

氣候に惠まれた肥沃な濃尾平野に產する村上のスッポンは藥用的價値に於いては斯界隨一の定評があります。我が村上理藥學研究所に於いては此の優秀な村上スッポンの生血と生膽の研究を重ね、遂に前名古屋醫專教授谷實拘博士の苦心によつて『スッポン血膽錠』の完成を見る事が出來たのであります。幾多の臨床實驗の結果、素晴らしい好成績、その眞價は世人の注目する處となりました。

服用すれば、胃腸の機能は根本から活潑となり、同化吸收力が強まり、肝臓を刺戟して膽汁の分泌が旺盛となりますから、食慾は面白いほど進む。喰べたものは直ちに血となり肉となつて衰弱した方も精氣が溢れ、血色は見違へるほどになります。

村上スッポンの血液を抽出研究中

又全身の細胞に活力を與へて、造血作用と殺菌作用を營みますので、白血球はドンく殖えて、新らしい血液となり、新陳代謝も旺んになります。ですから結核菌を殺し、中樞神經を冒す毒素はとれて微熱は下り、體力がついて寢汗も痰咳も治つて芯から元氣になれます。食慾なく、セキや微熱が出て、衰弱に苦しむ方は是非とも服用されるとよい。醫學博士、加藤普佐次郎先生は自らが肺を病んだ御體驗により、又近親の方が『スッポン血膽錠』によつて九死に一生を得た事實から、茲に有難い御推奨の御言葉を寄せられて居ります。

因に御希望の方は東京市下谷區下車坂町二番地、市電停留所前本舗村上友次郎商店（振替東京五四二〇一番）か東京市小石川區音羽町、講談社代理部（振替東京六六二九番）へ御申込下さい。市內のお方は電話根岸(87)三九〇一番へ願ひます。六〇錠入三圓、一一〇錠入五圓、二四〇錠入十圓、送料は內地十五錢、其他四十五錢です。

★無代進呈★

加藤博士自らの『肺病療養體驗記』並びに『スッポン血膽療法』の小册子を御希望の方は雜誌名御記入の上申込み下さい

一歩誤るとツンボ

何事も最初の一歩が大切です。耳病も軽いからと言つて一歩誤つて完全な治療をせずに置きますと、悪化して聞くだに恐しいツンボ、そして頭を侵されて白痴同様になる例も決して少くありません。

靴の上から掻く療法

耳病も慢性になると短時日の治療では捗々しく快くなりませんので兎角なげやりにしたり、一時抑への内服療法などを頼りますが、進行して居る耳病には靴の上から痒いところを掻くやうなもので、病氣の進行が速いので却つて手遅れになり勝ちです。

急所に適中した療法

耳病の原因は耳内のバイキンと炎症が原因で悩ましい耳鳴を起したり、耳づまりが絶へなかつたり耳だれがいつまでも止らなかつたり、低い音がサツパリ聴へなかつたり、又コマクが穿孔したりするのですから、耳内奥深くコマクを心地よく滲透して病源を除き、芯から中耳内を鎮静させて聴力の障害を一掃しハツキリと澄んだ耳に立ち至らせる獨逸點耳療法パピロギンこそ、斯うした慢性の方に訪れた唯一の決定療法であります。

低い音もハツキリ

斯うしてパピロギンによつて甦つた聴力は懐中時計のセコンドさへも軽々と聴へ、耳だれ耳鳴が眞に除かれて生れ變つたやうだと毎日本院へ實驗者から寄せられる感謝は大庭博士の御推賞と俟つて本劑こそ耳療中の決定療法だと好評の高い所以であります。最近では知名の方々や學校團體及び海外から大量の御用命を賜つて面目を施して居ります。

目下『試藥』及『耳療法』を無代進呈中ですから『富士』で見たと記して左記へ御申込下さい。

東京市豊島區西巣鴨二丁目向宮通り一九五〇

城北藥院

振替東京七〇三八

試藥進呈

藥價は非常に低廉で二圓五十（四週間）・四圓（八週間）・七圓（徳用大瓶）・又一圓五十（普通瓶）であります

（東京－玉置、大木、國友、松坂屋（上野、銀座）（大阪）－高橋盛大堂、丹平、大一にあり

慰問袋

『おい、見ろつ、可愛い別嬪さんが入つとるぞ』

「はつはは……、人形さんの嫁入りか、貴様うまいことをしをつたな、だが待て、皆いゝか、この手紙の文句を聞いて羨ましがるなよ」

慰問袋を圍んで、そこゝに、どつと起る無邪氣な笑聲。づつしりと重い袋の一つ〳〵から、兵士達は同胞の温かい眞心を掬みとるのだ。戰ひすんで和やかな大陸の夕べ、つはもの達は、暫し祖國の噂に我を忘れるのだ。見よ、赭顔に溢るゝその悦びを……。

陸軍歩兵大佐
今村嘉吉畫

時代の尖兵

「鳴濱、考へて見てくれ、俺はつく〲同胞相食む戰ひの愚を覺つたんだ。われ〱青年には外に爲すべき仕事が山ほどある無益に死にたくない――」金親多門の沈痛な訴へに、『何ッ、君は脫走する氣か？ おいッ！』鳴濱次郎は許すまじき氣色を見せて詰めよつた。――時は西南の役の最中、薩軍に對抗して田原坂攻防に激戰を繰返してゐる拔刀警視隊から物語が始まる。

國防作家聯盟の異彩大林　清先生の大傑作、これこそ愛國の熱情に燃える大理想小說だ。

（三〇頁を御覽下さい）

玉井德太郎畫

かんの強い夜泣き癖の兒を 體質を改造して 健康兒にした體驗

東京市目黑區唐ケ崎六一六　石坂ヒロ子

和子は始めての子丈けに育て方が解らず無中で育てて來たのでございますが、幸ひ四月生れで氣候が良かつたせいかスク／＼と育ち、お醫者の御厄介にもならず、夏も過ぎましたのでもう大丈夫と思つて油斷したのがいけなかつたのでせう。秋風が身にしむ九月の末、一寸した風邪からお腹をこわし、十日程お醫者にかかり治る事は治つたのでございますが、其後チョイ／＼風邪を引き、元氣がなくなり、寢付きが惡くなつて夜中に火のついた様に泣出すのでございます。

こんな日がズット續き、だん／＼ヒドクなつて、夜中に泣き出すとお乳をやつても、抱き上げて室中搖り乍ら歩き廻つても泣き止まず、仕方なしに泣き苦しむ和子を寒くない様におくるみでおんぶして、表の大通り迄出て二、三十分もお守りをし、漸く寢付かせて歸つたり突然ヒキツケて大慌てに慌てて、お醫者へ飛んで行つたりする事が、度重なる様になりました。

斯うして十月、十一月と過ぎて十二月の初め婦人倶樂部で『慈童』といふ小兒藥が大變かん、い、むし、い、ひきつけに効くと云ふ記事を見新らしいお藥だと云ふ事ですから、見本瓶を申込み送つて貰ひ服ませて見ました。私もどんなお藥かと一寸舌に當てて見ましたら迚も甘く美味しいのです。和子も嫌らず服みますし、氣のせいか見本瓶を服ませた丈けで、夜少々おとなしくなつた様に思へましたので、早速近所の石黑十全堂藥店で買ひ服ませ續けました。

斯うして十日廿日と服ませ續けます内、だん／＼夜よく寢む様になり、夜泣きも少くなつて、三月程したらスッカリ夜泣きも止り、夜中におむつを取りかへても知らず眠つて居ります程夜よく寢む様になりました。（中略）

お藥を服み始める前は、六・一八五粁しかありませんでしたのが、五月後のお誕生の時は、標準體重をはるかに越して八・七三〇キロになりました。

（後略）

こんなに丈夫になつた和子ちやんとお母様

因に『慈童』は藥價一圓、二圓、三圓、五圓（送料内地十五錢、海外四十二錢）で御希望の方は東京市神田區鍛冶町三ノ三大木合名會社（振替東京五四〇番）又は東京講談社代理部（振替東京六六二九）へ御申付け下されば急送いたします。尙各地有名藥店にも販賣して居ります。

無代進呈

慈童の口當りや效目を試されたい方は、講倶で見たと書添へ本舖へお申込になれば試藥と『愛兒を丈夫に！ 育兒體驗集』と云ふグラビヤ口繪入りの美本をお送り致します

武田麟太郎著

四六規格判 三〇〇頁

價一圓二十錢 ―送料內地十錢―

最新刊 幾山河

近來益〻圓熟の境を行く武田麟太郎先生が渾身の熱血をふるはれた問題の名小說!!

講談社の小說叢書

あゝ人生行路嶮し幾山河！四人の青年男女の越えゆく道を妖しくも描きつくして餘す所なし

富豪代議士の家庭敎師川瀨は、令孃廣子から思ひ染められ遂に二人は東京へ。一方川瀨の下宿先の娘で有名な陶工の遺兒初枝は、亡父の愛弟子で小泉といふ許婚があつたが川瀨を熱愛してその跡を追ふ。廣子は遂に川瀨の胤を宿した、それを知つて卑怯な手を打つ書生の塚本、小泉に戀慕する藝者の小花、而も廣子と川瀨の父同志は何か過去に秘密な確執があるといふ…事件は入亂れて幾變轉、果して彼らはいづこの地に幸福を求めんとするか？ ゼヒお早くご覽下さい。

既刊 講談社の小說叢書

- ▲菊池寛著 **女性本願** 價一・三〇 送內地・〇九
- ▲菊池寛著 **愛憎の書** 價一・〇〇 送內地・〇九
- ▲吉川英治著 **悲願三代塔** 價一・一〇 送內地・〇九
- ▲佐々木邦著 **紅白うそ合戦** 價一・〇〇 送內地・一〇
- ▲加藤武雄著 **春雷** 價一・一〇 送內地・一〇
- ▲賀川豊彦著 **日輪を孕む曠野** 價一・〇〇 送內地・〇九
- ▲川口松太郎著 **黑潮** 價一・〇〇 送內地・〇九
- ▲川口松太郎著 **愛染かつら** 價一・一〇 送內地・一〇
- ▲角田喜久雄著 **をり鶴七變化** 價一・一〇 送內地・一〇
- ▲角田喜久雄著 **風雲將棋谷** 價一・一〇 送內地・一〇
- ▲三角寛著 **裾野の山窩** 價一・〇〇 送內地・一〇
- ▲三角寛著 **縛られた女たち** 價一・〇〇 送內地・〇九
- ▲片岡鐵兵著 **四季の夢** 價一・〇〇 送內地・〇九
- ▲片岡鐵兵著 **榮華繪卷** 價一・〇〇 送內地・〇九
- ▲片岡鐵兵著 **瀑布** 價一・〇〇 送內地・〇九
- ▲竹田敏彦著 **熱情の翼** 價一・一〇 送內地・〇九
- ▲竹田敏彦著 **涙の責任** 價一・六〇 送內地・一四
- ▲竹田敏彦著 **紅痕** 價一・一〇 送內地・一〇
- ▲竹田敏彦著 **夢ならぬ戀** 價一・三〇 送內地・一四
- ▲竹田敏彦著 **日本の妻** 價一・一〇 送內地・一〇

☆いづれも四六規格判（各册分賣）

東京小石川音羽（振替東京三九三〇）

大日本雄辯會講談社

―全國書店にあります―

東亞無比 教學新體制（長距離）革新教授テレパカルト

自宅ニ居テ學校ニ學ブト同ジ教授

自宅セミナール制（研究組制）學校式確實教授
我國最大ノ綜合（各科ヲ合セタ）最完備大組織

小學校 中學校 女學校 卒業者が成功の登龍門

▼十科編成綜合最完備大組織最新教授
▼自宅に居ながら長距離最新式優秀教授

テレパカルト（Telepakult）とは、長距離最新式優秀徹底教授の意味であつて、即ち地方自宅に居ながら學校の教室にあつて學ぶと全く同樣に學力の徹底を期し、其の指導方法は眞に驚異的斬新獨特の教授法である。しかも本學の組織は我國最大の綜合最完備大組織であつて、小學校卒業者・中女學校卒業者は何人も自己の志望科を自由に選擇して入學することが出來、入學者は必ず志望を達成するを得

TELEPAK ULT
テレパカルト
商標權・第三一七七〇二號

本學は我國最大十科編成の綜合最完備大組織の下に昭和十五年度秋季新學生の入學申込受付を開始した。全日本青少年諸君は左記各科中一科を選定して即刻入學せよ

東亞大同學部（新設）

日滿支一體の教育的完成
本學の迅雷的大擴充敢行

滿洲帝國委任文官養成科
●滿洲國新試驗制度ニ準據シ甲種乙種行政司法委任文官（日本判任官）ヘノ資格獲得指導

滿洲帝國薦任文官養成科
●滿洲國新試驗制度ニ準據シ行政司法薦任文官（日本高等文官）ヘノ完全ナル資格獲得指導

滿洲帝國技術官（委任官）養成科
●滿洲國新試驗制度ニ準據シ甲種乙種ノ各種技術官（委任文官）ヘノ完全資格獲得指導

全青少年は日・滿・支官界に就任
日本皇國官吏（大增員）
滿洲帝國官吏（大增員）
蒙古聯合自治政府官吏（大增員）

中學科テレパ教授
募集人員 五百名
修了期間 一ケ年
●本科ハ小學卒業者ニシテ中卒・專檢・高檢資格ヲ得ントスル者ニ最短期間ニ中等全學科ノ徹底的完全指導ヲ爲ス

商業科テレパ教授
募集人員 五百名
修了期間 一ケ年
●本科ハ小學卒業程度ニシテ甲種商業卒・商業實務員檢定學力ヲ得ントスル者ニ最短期間ニ徹底的完全指導ヲ爲ス

工業科 機械科テレパ教授
募集人員 五百名
修了期間 一ケ年
●本科ハ小卒・中卒程度ニテ一躍工業界ノ優秀ナル技術者タラントスル者ニ短期間ニ機械工學全科ノ完全指導ヲ爲ス

旋盤工（仕上・製圖）養成科テレパ教授
募集人員 五百名
修了期間 四ケ月
●本科ハ小卒程度ニテ旋盤・仕上・製圖熟練工タラントスル者ニ完全ニ旋盤・仕上、製圖諸科ノ徹底的指導ヲ爲ス

日本皇國判任文官養成科テレパ教授
募集人員 五百名
修了期間 一ケ年
●本科ハ小卒・中女卒程度一般各省各府縣廳・各裁判所警察署・鐵道界等各官公署判任文官ヘノ資格獲得指導ヲ爲ス

鐵道員養成科テレパ教授
募集人員 五百名
修了期間 二ケ月
●本科ハ僅カニケ月間ニ日・滿・支鐵道從業員（傭員・傭人）ヘノ資格獲得指導ヲ爲ス 鐵道局ハ毎年一萬人募集

警察官養成科テレパ教授
募集人員 五百名
修了期間 二ケ月
●本科ハ僅カニケ月間ニ警視廳・各府縣道廳・植民地・皇宮警手・滿洲國警察官吏・同鐵道警護隊員ヘノ完全養成ヲ爲ス

高文資格科テレパ教授
募集人員 五百名
修了期間 十ケ月
●本科ハ小學校卒業者ニシテ高等文官資格試驗（高等試驗令第七條試驗）ノ受驗ヲ志望スル者ニ完全指導ヲ爲ス

大學部 法律學專修科テレパ教授
募集人員 五百名
修了期間 一ケ年
●本科ハ小卒・中女卒程度一般判事・檢事・辯護士・辨理士・計理士・滿洲國司法官等ヘノ資格獲得指導ヲ爲ス

大學部 日本皇國高等文官養成科テレパ教授
募集人員 五百名
修了期間 二ケ年
●本科ハ小卒・中女卒程度一般高等文官・辯護士・辨理士・婦人保護司・滿洲國高等文官ヘノ資格獲得指導ヲ爲ス

◇規則及入學案內書 無代送呈但し急を要す
備考 下記へ「志望科」ヲ記入シハガキヲ以テ請求次第急送

東京市下谷區上野櫻木町三九ノ二四
長距離通信教授 帝國綜合學院

番犬・獵犬に

日本犬のお奬め

（柴犬・猪犬・秋田犬・仔犬）

日本犬には米と肉は不用！

昔は日本犬にヌカを喰はせた昔の飼ひ方にもどりませう

獵期迫る

文部省・天然記念物
指定犬（三吉號）中型犬

日本犬は一主に仕へ一代主義で主人の爲なら身命を賭して仕へます。そして如何なる所から盜人が這入つてもその方向をむいて吠えるのでこれを日本犬の向ひ鳴きと云ひ、番犬には日本犬に勝るものはありません。

純日本犬は利口で他人のものは一切食べず丈夫で粗食で費用がかゝらず、洋犬の樣に夜中鳴きつゞけて近所に迷惑をかける樣なことは絶對にありません。一度日本犬を飼へば忘れられない程樂しみですが、仔犬から飼育しないと馴れません。

獵犬は世界に八百種ほどありますが、猪、熊、鹿等を鐵砲なしで食ひ殺すものは吾が日本犬のみです。又柴犬でも鳥、兎、狸、狐、貂等を捕へるから洋犬とは全く比較になりません。日本犬は愛玩用としても訓練に於ても一度教へると何でもよく覺え面白い程色々の訓練が出來ます。

日本犬の選び方について──日本犬でないものは、舌が黒く斑點があり、耳が丸くて尾が細く、臆病で性能が惡く、訓練が出來ない、これは支那のチヤウ〳〵の交りで純日本犬ではありません。日本犬で失敗するのはかうした犬を飼ふためであります。

當研究所の磯貝晴雄氏は曾てJOAKより日本犬に就てラヂオ放送をされた程の研究家で、日本犬の普及には寢食を忘れて奮鬪されて居ります。尚同氏著の日本犬訓練飼育、犬の見方圖解入は非常な好評で定價七十錢送料八錢です。

文部省では日本犬保存のため優良日本犬を天然記念物として指定して居ります。

（朝鮮、滿洲、臺灣、樺太、世界各國安着）

進呈

冨士で見たとハガキで申込めばこれだけのものを送る

ラヂオ原稿
訓練秘訣法
寫眞入カタログ
仔犬の選び方
仔犬定價表
犬舍畜犬器具の型錄あり

（眞の日本犬を研究せんとする方は本型錄でなければ解るものではありません。）

（申込所）
東京市澁谷區千駄谷三ノ五四九
日本犬柴犬研究所
藥劑師 磯貝晴雄
振替東京四〇七四三番

航空日本

↖今次歐洲大戰に於けるドイツ落下傘部隊の活躍に、われ／＼は驚異の眸を瞠つてばかりゐることはない。わが國に於ても早くからその研究が積まれてゐるのだ。見よ！これは東京洲崎飛行場に於ける軍國乙女の頼母しいパラシュート訓練ぶり。

↓遙かに浮ぶ比良の峯！

浪靜かな琵琶湖の水を切つて爆進する水上飛行機。指揮官の手旗信號のまゝに右へ、左へ――素早く體をかはす練習機。

やがては海の荒鷲として巣立つ海軍航空隊の若人たちの胸には、早くも制空日本の意氣が燃えてゐる。

制空

支那事變は近代戰と飛行機といふ問題を完全に解結してくれ
だわが荒鷲の活躍に就いては、今更喋々を要しない。見よ、山
する堂々の爆進ぶり、國防の第一線に立つこの颯爽たる威容の

た。世界戰史に燦然たる一頁を飾ん
獄地帶の惡氣流を衝いて雲海を翔破
前に吾々は只感謝あるのみである。

↑暗雲をはらんで太平洋の浪荒く、近來益々重要視されるわが南の生命線――南洋諸島と内地とを結ぶ川西式四發大形飛行艇は、航空日本が誇る新鋭純國產機で、旅客十七人の座席のほかに四人分の寢臺、その他いろ〱の娛樂施設まであるといふ空の豪華版だ。

→航空日本の名にそむかず、日に月に急上昇するわが航空路の伸展は、大陸から更に佛印、泰、南洋へと實に目覺しい。速くて安全、快適な空の旅に一しほ風情をそへる明朗なエア・ガールの存在は、正に大空の花である。

タッタ四十馬力の發動機、全備重量半トン足らずの豆飛行機が東京の野澤航空研究所で出來上つた。製作費は四、五千圓、蒼空を親子二人水入らずといふ時代も早晩訪れようといふわけ――。（寫眞は野澤式Z―一型機と搭乘の野澤三千子さん）↓

健康を語る

芙蓉軒麗花師は、浪曲の新機軸『浪謠曲』の創始者として有名で、その巧な節廻しに浪曲ファンを唸らせてゐる。寫眞は、去る一月巡業中、屏東市の蕃屋前にて撮影せるもの中央が芙蓉軒麗花師である。

浪曲と心臓
嬉しい體驗

女浪曲師　芙蓉軒麗花

私は、生れつき體が弱く、それに舞臺に於て腹一ぱいの聲も出さねばならず、體の芯が疲れ、とき〴〵動悸や息切がして胸苦しく困つて居りました。

それが『救心』を朝夕一粒づつ頂くやうになつてからは、心臓が丈夫になり氣力もつきお蔭樣で、氣候になれない臺灣巡業の際も、座員の者は種々の病におかされましたが、幸ひに私は一日も閉演なく元氣一杯で臺北陸軍病院及臺中にても兵隊さんに慰安口演が出來まして愉快でした。體重も僅に四ケ月で二貫目も増しまして、前から私の弱いことを知つて居られる人々は、近頃スツカリ元氣づいたのに驚いてゐます。

（附記）『救心』は麝香を初め數種の貴重動物のホルモン綜合藥で、心臓の强壯藥として評判。愛讀者には『救心』二日分一人一回限り無料で頒布される由。堀救心本舗は、東京市京橋區西八丁堀二丁目十七ノ四である。

南洋風物（その一）

南洋群島がわが委任統治の下に置かれて既に二十餘年、かつては熱帶植物の繁茂するにまかせた未開の島に過ぎなかつたサイパン島も、今日では立派な教會が建ち、舗裝道路まで完備して、全然面目を一新した文化生活が營まれてゐる。

クサイエ島に傳はる木の皮の編物細工、それは昔ながらの手工藝ではあるが、可成に巧な工藝品でもある。島民たちは、黙々と傳統を守りながらかうした藝術を生んでゐる。この島はポナペ島とヤルート島との航路の中繼地に當る重要な島である。↓

↑
サイパン島のチャロモ族——なんてい
ふと、腰に草を巻いた野蠻な土人の姿を
聯想されるかもしれないが、豈圖らん
や、こんな文化生活をいとなむ者もある
のだ。もつとも、これは上流家庭の一面
ではあるが……

→
凉風薫る椰子の木蔭に身をよ
せて、ひとり靜かに物想ふ島の
乙女。黒潮躍る海洋への憧れ
か、はた婚約者への戀情か——。
クサイエ島は南洋群島中隨一の
良灣をもつてゐる。寫眞はその
明媚なる風光。

南洋風物

(その二)

こゝには未だ千古の謎を秘めた晝なほ暗いジャングル地帶もある。果て知れぬその奥地には怪獸や怪魚の群れも棲むであらう。ぢつと耳をすませば、怪奇な鳥の音がかすかに聞えて來るやうに思はれる。開拓の餘地を殘して——南方躍進の意氣に燃える若人の心をそゝる神秘郷——

↓

→島民は先天的に手先が器用である、鑿一挺を自由にあやつり、子供でも立派な彫刻をやる。いま出來上つた作品を自慢さうに見せびらかしながら、ニコリと微笑むのはサイパン公學校の生徒たち。

→御稜威は遠くクサイエ島にも及び、日の丸の國旗を兩手に『金鵄輝く日本の……』と、紀元二千六百年奉祝歌を踊る同島公學校の女生徒たち。輝かしい躍進日本の姿はこゝにもある。

バナナ畑の前に立つクサイエ島の土人たち。寫眞を撮るといふので頭にレイ（花環）を冠り、ちよいと腕などを組んで、乙にすましたところ。←

（自力健康器）使用後の健康美

食慾が進み便通も良く神經衰弱も治り愉快！

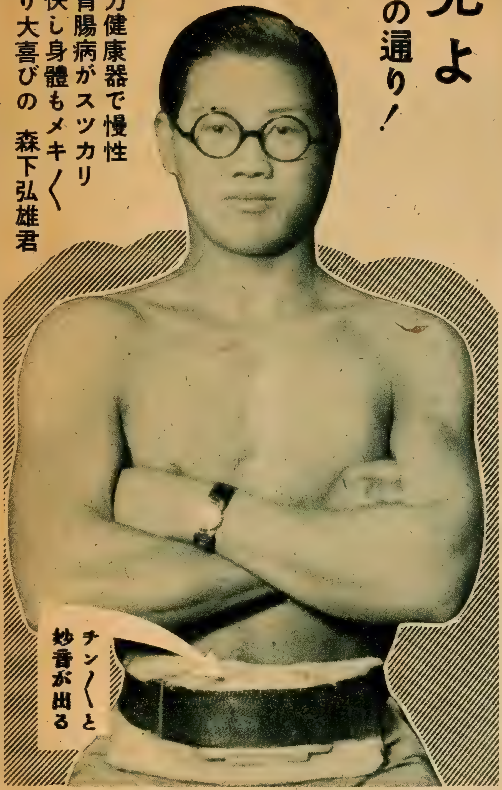
北海道　森下弘雄君

私は長年の間、胃腸を患ひ、それに神經衰弱が加はり、頭の具合が悪く、食慾は進まず便通もなく毎日苦しみ續けました。　而し幸ひにして、貴會の『自力健康器』を使用してからは、不思議に食慾が進み、頭脳の具合も日毎に良くなり便通も快よくあるやうになつて、夜はグツスリ安眠出來、全く生れ變つた様な氣がいたします。只今では胃腸は迚も丈夫になり、神經衰弱も治り毎日々々愉快に働いて居ります。

附記――『自力健康器』は藥も電氣も不用女も子供（十二歳以上）にも使用が至つて簡便仕事しながらでも使用出來る。只下腹部（臍下丹田）にシメて、下腹部の運動を行ふだけでよい。『自力健康器』は、使用第一日に於て成程効くと云ふ自覺を與へる所に一大特色がある。快眠と食慾の増進、それに伴ふ體重の増加と日を逐うて改造されて行く健康は、使用者のみの味得する歡びであると思ふ。

見よ　この通り！

自力健康器で慢性の胃腸病がスツカリ全快し身體もメキ／＼肥り大喜びの　森下弘雄君

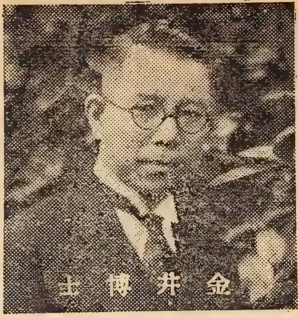


森下弘雄君

因に『自力健康器』は日・獨・英・米・佛・專賣特許の醫療器にて、定價金十二圓、新型高級品金十四圓送料（内地廿六錢・其他五十錢）全國の有名藥店、デパートにて發賣中です。もし品切れの節は、東京神田（中央大學前）國民保健振興會（振替東京七二一七）へ雑誌名を記入して御申込み下さい。尚御希望者には美本『自力健康法』を一冊宛無代で進呈されます。

骨髓炎・骨膜炎
關節炎・骨軟化症
骨の病の手當法

整形外科　金井良太郎博士談


金井博士

之れ等の病氣は急性に始まり慢性に移行するものと、最初から慢性の經路を辿るものとあります。

犯される場所は人體中の骨骼の何處とも限らず多くは黴菌の作用で發熱、發赤、排膿疼痛等を起し腕や手の不自由歩行不能脊髓強直彎曲等を伴ふもので、現代進歩せる醫學の力を以てしても相當長期の治療日數を覺悟せねばならぬものであります。

さうかと云うて之れ等の診斷を受けるともう不具となつた、不治の病に取付かれたなどと苦勞煩悶される人もあるがそんなに悲觀すべきものではなくその手當や治療宜しきを得れば案外豫想したよりは良き結果を得て喜び、再び社會的に常人と異らぬ活動家となり得るものであります。

骨髓炎と骨膜炎は一種の姉妹病で骨髓炎であれば大抵骨膜炎をも併發して居るものです。骨髓炎は名の如く骨の髓の腐る病で、骨膜炎は骨を包む膜の疾患です。共に脊椎や肋骨や腕や足等を犯します。

又關節炎は多く腕や足の關節部に起るもので、骨髓炎と同じこと熱も出たり膿もたまり痛み烈しかつたり關節が固着して曲らなくなつたりするものです。

骨軟化症は稀な病氣で、骨質が軟くて人並に骨の力がないものであります。

之れ等いろ〳〵の骨の病氣は醫診の結果手術や入院の必要なきものは靜かに家庭に於て保養してその回復を待つべきものです。然らば家庭に於てどんな注意をしどんな保養をなすべきか？　私は之れ等患者諸君の爲めその手當法を記した小さな本を著しましたからその御一讀を御勸め致します。此本の中には私の多年苦心研究製藥した家庭內服藥金井成骨丸のことも明細記入してあります。

前記金井博士の著された手當法の美本希望の方は東京市小石川區小日向台町二丁目二十七番地鈴木コンパニー宛ハガキで申込まれると無料一册づつ郵送されます。

淋病の悩み解決へ
全快の秋來る

東京市品川區大井坂下町二七六七ノ六、瀧井晴山氏は社務の爲め北海道へ旅行の際ヒドイ淋病にかかり非常に苦しみ色々な薬は勿論熱療器迄買つて手を盡したが治らず、永い間悩み暮して居る内にフトした事から有名な遠藤先生發明の人が氣づかぬ二種の良薬を教はり早速奉職し乍ら自分でひそかに試みました處、これが意外によく効き淋菌も淋毒も快癒、僅かの間に氣持ちよく治つて以來一寸も再發せぬ。

餘りの嬉しさに淋病と聞く人毎に親切にお世話して居りますが『お蔭で助つた。徴兵にも合格した。なぜもつと早くこの妙薬を知らなかつたか』など感謝の全快禮狀が續々よせられて居ります。

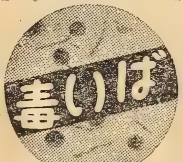
こんな譯ですから急性は勿論他薬で治らぬ慢性悪性の方々は是非一度自宅へ御來訪、遠方の方は『冨士』讀者としてハガキで『**試薬送れ**』とお申込なさい。同病相憐むの眞心から二種の良薬と内容公開書に苦心全快談も書き添へてすぐ秘密に送つて呉れます。

急性 淋疾 慢性
治療の新研究
久知原悦山先生著 (四六判美本)

淋疾を根本から治療しなかつた爲に起る惨害程恐しいものはない、どれ程この爲に苦しんでゐる人があるか？ 著者は多年淋疾治療の方法を苦心研鑽の結果新發見に成功、素晴しい治驗成績を得、玆にその全貌を詳述し難病者を救はんとしてゐる。但しこの治療法は女子には全然効果がなく、男子淋疾專門である。治療は簡易で何人でも手輕るに自宅で出來る。しかも學理的にも實際的にも治療の新研究に叛かぬもの、難病者に限り今回五百部無代送本す。東京市小石川區戸崎町五東京醫療科學研究所宛ハガキにこの雑誌名記入申込まれゝば密送す。

ハガキ一本で五百名に 無代領布

抜毛・耳鳴・吹出物・悪性腫物・悪性梅毒に
日本人の梅毒なら
體質に合つた煎薬が最もよい



◇…二三回の注射でよいと思つたのが悪かつた。吹出物や抜毛がヒドイので病院へ行くと第二期梅毒だと云はれて喫驚した。始め注射で失敗したので、今度は内服薬にしたが、錠剤も丸薬もスグ胃腸をこはして續けられない。斯うして散々困つた方々が、梅毒煎をのむと、成程胃腸にもよし、第一身體の調子がグット良くなつた。僅の間に吹出物も抜毛も止つて來たので、血液を檢査して見たら、血液がキレイになつて居た。薬が體質に合へば實際に良くきくものだと驚かれ其後澤山の人々に教へたが、誰も『大變良くきいた』と喜ぶ、實に珍らしい薬だとか。

◇…或は強い薬で心臓を悪くし、注射がうてないので、遂に毒が全身に廻り、頭は重く、聲は嗄れ、耳鳴がしてフシ〴〵は痛み、首と顔のデキモノが酷くて、人目に合ふも恥しく、色々な手當をしても駄目なので悲觀して居た御氣の毒な方々が、梅毒煎をのんで日増に輕快したとか。とても助からないと思つた悪性の毒が、こんなに早く取れて實に有難いなどと。各方面で大評判です。

此の様に評判の良い梅毒煎は、毎晩一回づつ服用する風變りな漢方薬です。梅毒、淋病、瘡毒、體毒、吹出物、よこね、かんそう、こしけを始め、梅毒が原因する動脈硬化、高血壓、糖尿病、腎臓病、脳梅毒、神經衰弱、神經痛、リウマチス、頭重耳鳴、肩こり、不眠、便秘等の原因療法として珍らしい良薬です。キヽメの早いのと、副作用のないのと、日本人の體質に最もよく合つてゐるのが特長です。

〇前記梅毒煎は東京市淀橋區柏木三ノ三四四1號日本健康協會(振替東京四九八五九番)へ申込めば、左の實費でお分けします。二十貼入三圓五十銭。四十貼入六圓五十銭 八十貼入十二圓、送料は内地十銭、領土海外は四十五銭、代金引換は二十銭増、満洲及海外は前金に限ります。容態を書いて申込めば身體に合つた薬を送ります。(別に漢方の丸薬あり)

薄毛の悩みで困る方へ
家庭で出來る正しい手當

毛生促進の原素療法

生れつき毛のうすい方、脱毛、ハゲ等にもお試し下さい

ハゲ薄毛を不治と諦めたり悲觀するのはまだ正しい療法を御存じないのですから決して落膽してはなりません。在來の發毛劑や養毛劑には學理と實驗がピッタリ合はないものが多く折角根氣よく療法を續けても期待するほどの効果が得られなかつたのです。素人のお方がお試しになるには必ず信頼の出來る專門家に御相談なさつた方が安心です。

毛根から活かす 養毛原素の効力

茲に御紹介する名古屋の齋藤先生は毛生專門の研究家で薄毛の方方に對しての親切な御研究は隨分以前からの貴重な御體驗でありますから賣名本位の療法でない事は申すまでもありません。齋藤先生の養毛療法は他の發毛劑と原理が異つて、カユミやイタミがなく、心地よく藥効が皮膚にシミ込みます。そして養毛原素の働きが旺盛になり、今まで皮下に休眠してゐた毛根が活氣づいて、恰も木の芽が吹き出すやうに發毛作用が促進されます。從つて段々と薄毛が濃くなり、短い毛が伸びてやがては人並に毛が發生しますから、全然諦めてゐた人でも正しく發毛した實例が屢々あります。

貴重な體驗が生んだ 正しい自宅療法

例へば一般のハゲ、薄毛、脱毛、等でいろいろ苦しんでゐられる方がこの養毛原素を用ひますと、キット御喜びなさいます。又美容上から言つても眉毛、生え際、ヒゲ等をよく生え揃はして、美しくする働きがありますので、女性にとつても男性に取つても重寶な療法です。齋藤先生の下へ色々と御相談に見えられますが、想像以上に多いので驚かされます。全國の女性から色々と薄毛に悩む御手紙を頂きますがいくら効果をお急ぎになると申しても氣が短かすぎます。根から眠つたり、衰へたりしてゐる毛を生やさうといふのですから、可成りの辛抱が大切です。

豫想外の好成績で 實驗者が大喜び

此の原素療法をお試しになつて、効めの解るのは他の療法に見られない反應のあることです。この徴候が見えて來たらしめたもので後は日一日と濃く毛が成長するのをお樂しみにお手當てを續ければよいのです。實際にお試しになつた人は恰で夢ではないかと疑ふほど豫想外に早く生えて大變感激されてゐます。タトヘ人妻となつても此の樣な薄毛でお悩みの方はこの正しい療法を御實行下さい。御婦人のハゲ、眉毛、生え際の惡い方、薄毛、脱毛の方等は詳しく樣子を書き左記宛御申込み下さい。自宅で秘密に手當ての出來る養毛原素を近くの局まで代金引替でお送り下さいます。

宛名　名古屋市專賣局前電車通り東側
ナオール藥院内　齋藤佐可江
電話南三四五三番

ぢ瘻を切らずに治し大喜び

ぢ瘻ほどつらい病は又とないかと存じます。

私はこの病にかゝり五年間不快な氣持ちに襲はれ步行、運動は勿論時候により坐つて居る事さへ困難になりその隱慘さはとても他人には想像もつかぬ事であります。

その間坐藥、家傳藥其他種々の手當をしましたが全部失敗し、もはや不治の病と諦めはしましたものゝせめて一時的にもせよ動作に苦痛の伴はぬ程度にでも効く藥はないかと始終念願して居りました。

處が偶然オーラムキンパスタの發明を知り早速送藥を乞ひ使用しますと第一回目の擦込みより効め現はれ二回三回と續ける毎に目立つて効めあり僅かの間に今迄どうしても除く事の出來なかつた苦痛が全部とれ肛門特有の小ジワも生じ緊括力も回復し永年患つた自分のぢ瘻がかくもたやすく治つた事は誠に不思議に堪へません。御蔭で今は如何なる力仕事にも差支へなく家族と共に喜んで居ります。（島根縣美濃郡佐々木和一氏）

小生儀昭和四年春からぢを患ひ色々の手當をしました。また數知れず試藥もしましたが効果なくその上職務の關係で酒に親しむ機會が多く、去る五月上旬が一脫肛出血週間もとまらず困難してゐたとき或雜誌でオーラムキンパスタを知り早速求め擦入しました處實に手輕に快治し今は毎日愉快に業務に服して居ります自分の體驗上惱める同病者がこんな手輕に救はれるなら幸と確信を以て御知らせ致します。（伊豆伊東驛長高橋綱行氏）

て居ります。

切らずに治せ！專賣特許新薬ロイド治療法の大發明

難治のるいれきを切らずに治した嬉しいたより

私は頸の兩側にグリグリが出來益々腫れて來たので驚いて土地の醫者に掛つた處おそろしい肺病になるもとのるいれきと教へられ一時は氣も遠くなつてしまひました。兎も角手術するのが一番とのすゝめに七里も離れた町の病院に出養生に行きグリ七ツ許り取つてもらひました處昨年六月になり又グリが出來二度目の入院手術の結果もよいので喜んで歸りましたそれも束の間又又發生しこんどは痙攣が起り熱も出、呼吸も苦しくなり、全く途方に暮れいつそ死んだ方がと何度考へたか知れません。處が幸運にも偶然雜誌でるいれきが家庭で手輕に治療出來るオーラムキンパスタの發明を知り、神の御引き合せと飛び立つ思ひで取り寄せ擦込みました處熱は下り呼吸も樂になり、あれ程惱み苦しんだグリが次第に消え全く健康を取り戻し私はもとより家內中パスタの偉効に大喜びで感謝して居ります。（高知縣幡多郡江口代次氏）

講評

我が有名な化學者佐藤禮先生が友人故野口英世博士の助言を目標に昔から靈藥と云はれて居た金を有効なる藥にせんと十八年の長年月研究の結果これをコロイドとしてその藥理作用を理想的に發揮さす事に成功、昭和九年東京帝大の醫學大會に於て結核性疾患に對する著しい効果を發表し學界に大好評を博し大新聞雜誌も稱讚の辭で報道した事は既に御承知の通りですが佐藤先生は更に二ケ年研究を重ね又又專賣特許の強力新治療元素硫金コロイドを發明しこれを主劑としオーラムキンパスタを完成し治療界に一大光明を點火しました。この元素は特に難症るいれき淋巴腺炎、ぢ瘻、ぢ核に適應し使用者の好評をあびて居ります。

御惱みの方は佐藤禮先生の研究室東京本郷區切通坂町五二ノ六〇オーラム金研究所（振替東京六一五一一番電話小石川四九二六番）にハガキで申込まれると効果證明の爲め一人一回限り試藥二十錢分と療養說明書を無代で送つて頂けます。

治療を御急ぎの方には藥（慢性重症には約六十日分五圓・輕症には廿日分二圓が好適です、送料各內地十五錢領土五十錢）も急送して頂けます。

尙藥は講談社代理部、東京白木屋、資生堂、伊勢丹、松坂屋、大阪道修町谷村商店、旭川銀座通西田藥局、根室港ホケン藥局、函館松風町トモヱ藥局、佐世保稻荷町武富藥局、山口小郡町能美藥局、鹿兒島大口西町尾上藥局、秋田通町佐野藥局、本莊町本莊藥局、能代港青柳藥局、四日市北條町ニコニコ藥局、岐阜彌生町トラヤ藥局、新潟糸魚川町玉田藥局其他有名藥店でも推奬販賣して居ります。

オーラムキンパスタ 試藥二十錢分無代進呈

富士グラフ

建設は進む

素晴しい建設の轟音だ！ 日章旗を翻して進むこの列車は北京から蒙疆に通ずる唯一の鐵道京包線の南口ー西橃子間開通の試運轉であるが戰火の蔭に建設の拍車は高鳴り、新東亞の動脈は生々しく呼吸づいてゐるのだ。かうした躍動的な建設風景に接する時、我々は改めて勇士の勞苦に感謝の念を捧げ、銃後奉公の熱誠を誓はずにはゐられない。

高原開發畫報

↑高原開發報國會では朝五時國旗掲揚、皇居遙拝、そして軍人に賜りたる勅諭を齊唱して一日の尊い作業が開始されるのだ。開發拓士としての精神がしのばれる。

↑農場の戰車トラクターの素晴しい威力！　三人がかりで一日もかゝらなければ掘返されない根株も、トラクターの强引な力で、見る〳〵中に引抜かれてしまふ、だから作業はグン〳〵進捗して行く。

大瀧邦雄氏の主宰する『高原開發報國會』は、同氏三十餘年に亙る研究の結果、日本農林行政指導を目標に、國内未開の高原地帯に大がかりな機械化畑作農業の模範的經營をし、あはせて國内開發の勢を作らうとする計畫の下に生れたものである。

長野縣南佐久郡南牧村野邊山原といへば、ハイカーに知られた八ヶ嶽高原の一角である。その高原列車野邊山驛附近一帯の地約五百町歩に向つて、昨年七月十日から開墾は着手され、毎日快いトラクターの響を四圍の山岳にこだまさせてゐる。

今第一次計畫百五十町歩のうち九十町歩はすでに開墾をはつて、玉蜀黍白菜などが見事に播かれてゐる。『これまで不可能視されてゐた高原にも、平地に劣らぬ立派な作物のできることが立證されました。今年の中には更に第二次計畫を相當に進める心算です』と主任平林保氏は、希望と抱負を眉字にひめて力強く語つた。

何町歩といふ廣い耕地に白菜がまかれると、その間びきだけでも容易なことではない。これは長野縣南佐久農産學校の生徒の間びき奉仕作業であるが、尊い開發の使命に銃後少年の熱意を沸ぎらせ、皆眞剣に作業を續けてゐる。

高原を彩る乙女達の雄々しい姿！附近の部落から農場に集つて開發のよき協力者となる娘さん達は、播種作業等を引受け銃後女性の確固たる信念と熱情を以て、この神聖な勞働奉仕に精進してゐるのは頼母しい限りである。

これはデスク・ハロウと云つて耕した土の表面をならしながら、なほ土を細かにする機械で、優しい娘さんが、その繊手にあやつるハンドルも鮮やかに、新鮮な土が盛り上る。新しい土の香も懷しく母なる大地の息吹きを送る。

時局鍛錬色

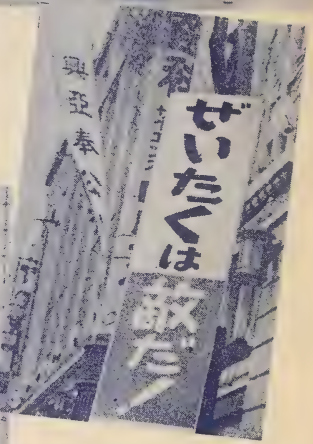
↑學習院生徒の勤勞奉仕、運動服姿も甲斐々々しく校庭に集合した生徒達は、トマトや隱元豆の美事に實つた作業園の草取りに尊い汗の奉仕を行つたが、賀陽宮文憲王殿下、賀陽宮章憲王殿下、東久邇宮俊彦王殿下、久邇宮邦昭王殿下の若宮樣方も御參加あらせられた。

→さツと振り下す一鍬ごとに建設の息吹きが盛り上る！ これは朝鮮忠清南道農村の女子講習所で作業中の半島の少女達であるが、彼女達の逞ましい四肢と、眞劍な奉仕は、新東亞建設の素晴しい原動力となり軈て興亞の實を結ぶ。

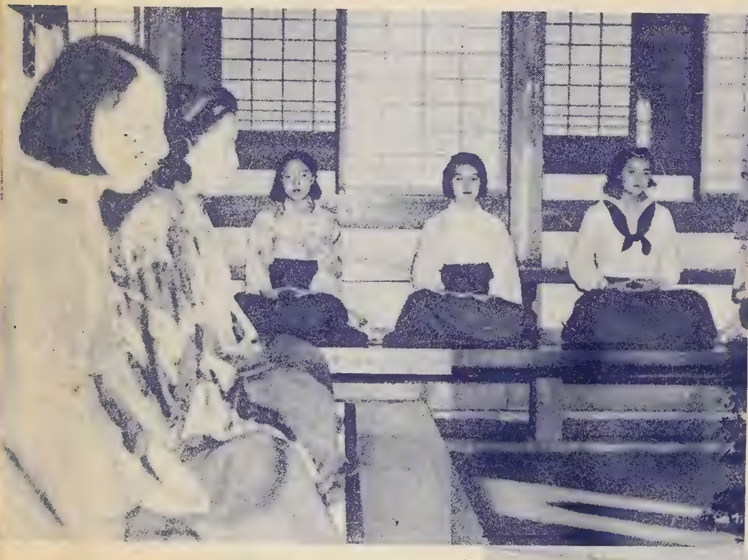
↑隆々の肉體美と、はちきれんばかりの闘志！ これは聖戰下の郷軍の一員としての心構へも頼母しく、巡業先の新京で簡閲點呼を受けたお相撲さん達で、新京商業の校庭にズラリ並んだ三十四人の巨體は胸のすくやうな偉觀であつた。

←出直し奉公日の結束は固く『ぜいたくは敵だ！』日本＊

⇧烈々たる祖國愛に目覺めた半島の青年達は、今事變勃發するや涙ぐましい奉公の誠を致してゐるが、これは朝鮮咸鏡南道の農民道場で猛訓練を受ける青年達で眉宇に漲る氣魄と熱情、そしてその眞劍な態度は敬服の他はない。



*人なら贅澤は出來ぬ筈だ！』等の立看板が街頭に砲列を布き、銀座マン等の心膽を寒からしめたが、流石に銃後の國民、整然たる自肅の中に意義ある一日を過した。



⇧非常時を乘り切る爲には先づ肚を練ることだ！ たとへ纖弱い女性でも今後は男性に伍して、建設の聖業に邁進しなくてはならぬ、そこで東京音樂學校の女生徒たちは、心氣鍛錬の爲に、神奈川縣鶴見の總持寺に參禪して非常時女性の活教訓を體得した。

⇨世界に冠たるわが陸軍士官學校の所在地神奈川縣『相武臺』下にある座間塾では將來の日本を背負つて立つべき人材を作り出さんが爲め、郷土並に陸軍士官學校勤務の青少年を集め火の出るやうな心身の鍛錬を行つてゐる。（寫眞は郷土幼年部の劍道）

航空寫眞の出來るまで

(知識のグラフ——ロンドンより)

(1)

敵地の上空を旋回し高射砲の洗禮を受けながら、果敢なる偵察飛行を行つて無事基地に歸還すると、直ちにカメラは寫眞班の手に渡される、千金にも換へ難い尊い收獲を得て歸還した飛行士は使命の遂行にほツと一息つく。

(2)

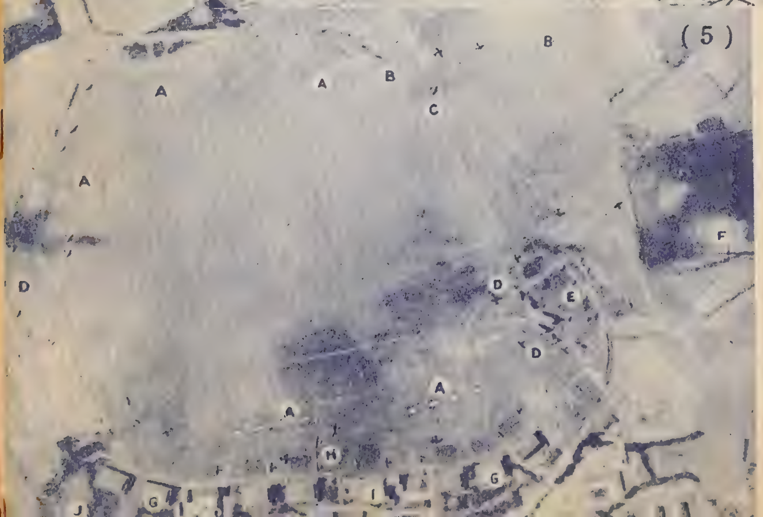
偵察飛行機還るの報にさツと緊張した現像技師は、カメラを手にするや、基地に待機してゐた自動車の暗室に飛び込み、間髮を容れず現像にとりかゝる。室は小さいがその設備の優秀と精巧なことは驚くべきものであると云ふ。

(3)

現像を終へると燒付けられた印畫紙は直ちに乾燥器に入れられる。生命がけで撮影した貴重な寫眞で微細な個所まで檢討され、それが重大な役割を果すので、少しの汚損も許されないから、取扱ひは極めて愼重だ。

(4)

愈々出來上つた寫眞は空軍司令部へ送られる、机の上一杯にひろげられた明細な敵地の地圖の上に寫眞が竝べられ、此處には何う云ふ施設があるかを克明に記入される。かうして刻々新しい情勢が報告され作戰が練られる。



(5)

これは英國の偵察機が撮影した獨逸空軍根據地の一つ、ムンスター飛行場の鳥瞰景であるが、點々と打たれたアルフアベツトは重要な施設を示して、一度戰火が交へられるや、この地點に集中猛爆が浴びせられるのである。

情の皇軍

一幅の名畫を見るやうな詩情豐なこの寫眞は、支那の子供が皇軍の勇士から好きなお菓子を貰つて『日本の兵隊さん』と慈父のやうに懷いてゐるところ。情に生きるわが武士道の片鱗は、かうした處にも現はれて、到る處日支融和の美しい情景が展開されてゐる。

半壞の家屋、足下に繁る雜草、何處からか虫の音でも聞えて來さうなうら淋しい農村。戰火に追はれて敗走した支那人が殘して行つた幼兒であらう、わが勇士に救はれて如何にも安心しきつてその愛の手に抱かれてゐる。勇士の胸にふと故鄕にゐる愛兒の顏が浮び上つた事であらう。

色黒、日焼、肌アレ、ニキビに

硫黄のマッサーヂ法

かうすればお化粧も樂な
色の白い美しい肌に！

残暑から秋にかけては空氣がすみ渡る關係で紫外線は眞夏よりも返つてお肌に強く感じ日焼、肌アレ、ニキビと言ふ具合に、お肌がすつかり痛められ勝です。このお肌の非常時に最も必要なお手當は正しいマッサーヂを續けて行ふのが効果的なよい方法です。

第一に衿脚ですが、この部分はとかくお手當を忘れ勝ちな上に最も日焼けが目立つところ、又目尻や口元に先だつて小ジワが出來易いといふ厄介な部分ですから、上手に手を効かしマッサーヂを致します。

次に口のまはりは唇下から渦のやうに下顎へ向けて指先を使ひます。つまりマッサーヂのコツは下から上へ、中側から外側へと言ふ原則でやるのです。

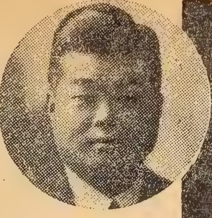
そこでこのマッサーヂの要領で、これに硫黄劑を使ふ美顔法が、只今知識階級方面で大變評判になつてゐます。これは普通の硫黄と違ひ、コロイド硫黄と言ふ從來の硫黄のもつ漂白力、殺菌力より更に數倍強い効力を持ち且つ、浸透力の強くなつてゐるものを用ひますので、日焼、色黒、ニキビ、肌アレ等の原因をつき極めて速やかに色白な艶肌を創るものです。

この効果を巧みに應用し、更に高貴榮養料で結ばせたのが、レオン洗顔クリームでこの少量を朝夕の洗顔時、入浴時に輕く泡立てゝマッサーヂ洗顔を行ひますと色黒や日焼、ニキビもない芯から色の白い、お化粧映えのする艶肌を得られるのでございます。

レオン洗顔クリームは、普通型一圓五十錢德用型一圓六十錢（送料各々内地十錢、其他四十二錢）で全國の百貨店、化粧品店にても販賣して居りますが、なるべく製造したばかりの効力の強いのを差上げたいと言ふ意味から、東京市神田區小川町ビル一ノ六株式會社レオン商會（振替東京八八一番）でも直接御注文を承はつて居ります。

悪性の淋病・消渇に素晴しい効果！

純漢方解淋散療法



妻と共に永年苦しんだ重症も
嬉しや全快の證明を受く

（埼玉縣川越市　佐藤嘉吉様報）

前略　私事長年の慢性淋病に日夜苦しみ居りました處たまたま知人より風變りな珍らしく良く効く薬が今尚世田ケ谷の平林家に傳つて居ると云ふ事を聞き、忘れもせぬ翌朝御宅へ伺つて、純漢方の解淋散特別徳用を求め服薬致しました處日一日と効め現はれ、長年取切れなかつた早朝の不快な膿も服薬毎に取り去られさしもの六年越の頑固な悪性淋病が今では尿の濁りも淋糸もキレイに取れ全部飲み終る頃には少しの異状もなくなりましたのでこれならばと早速貴本家様へ東京市衛生試験所の検尿を御願ひしました處、驚いた事にはもう淋菌は無いとの全快證明書を頂きました。其の時の私の喜びお察し下さい。お蔭で妻も迚も經過良くあれ程ひどかつたコシケもキレイに取れ昨今では過去の苦しみがまるで夢だといつて喜こんで居ります。後略（發表御承諾濟）

第四八七七號　試験成績書
一尿　壹種　依頼者　平林貞清殿
目的　淋菌有無
本所ニ差出シタル佐藤嘉吉尿ニ就キ試験ヲ遂グルニ其ノ成績左ノ如シ
法ノ如ク鏡驗スルニ淋菌ヲ認メズ
昭和十四年十二月十六日
東京市衛生試験所
（印）東京市衛生試験所

解淋散本家當主　平林貞清先生談

『純漢方』解淋散は從來の淋薬療法とは全くその性質を異にした、風變りな驚く程良く効く漢方薬です。これまで排膿疼痛淋糸が取り切れず日夜惱んだ方も服薬ごとに取去られる此の事實を御覧になれば誰方でもなる程これは良い薬だとその効きめの早いのに感服されます。これまで色々な療法で苦んだ方は此の薬を服用して尿を檢査して下さい。尿の色が清澄になるのを御覧になれば誰方でも『成程これは素敵な薬だ』と其の迅速な効果に驚かれます。百の理論よりも一回の實驗が尊いのです。迷はずに早く的確に効く事實を御試し下さい。尚滿洲支那をはじめ各地の全快者から感謝状や東京市衛生試験所の全快證明書などが毎日の様に澤山寄せられてゐます。御訪問の方にはこの事實を是非御覧に入れたいと存じます。御色んな療法で失敗してどうしても治らず御困りの方は一刻も早く試して頂きたい。（寫眞は平林貞清先生）

右御禮狀の家傳薬『純漢方』解淋散は七日分二圓五拾錢十四日分四圓五拾錢、二十八日分八圓五拾錢、特別徳用十五圓、（特に重症の方には十五圓分が最も徳用です）送料内地拾錢其他四十五錢東京市世田ケ谷區太子堂三三六3號、平林解淋散本家（別名平林貞清宛）振替東京一二一五七四番、電話世田ケ谷二二一九番へ『冨士』で見たと書いて振替かカワセで御申込みになれば、『淋病根治讀本』と共に密送致します。尚講談社代理部（振替東京六六二九）にても御取扱致します。

▲本家への道順▼
東京市内及び近縣の方で御訪問の方は市内電車澁谷終點又は省線澁谷驛下車、玉川電車にて『東太子堂』で下車停留所前の小鳥屋横丁入つてスグわかります。（澁谷から東太子堂まで電車で時間にて五分）

▲特に本薬の偉効を證明▼
特に本薬の偉効を證明する爲に三週間服用の方には、費用當家負擔で東京市衛生試験所の檢尿をして差上げます。

○檢尿の手續き
（早朝の尿を速達郵送又は持參のこと）

効めで評判の解淋散

無毒になつて元氣で働きませう

病毒で苦しむ方に

キ、メで評判の内服療法

梅毒

に罹り手當はしたが其後どうも身體がサッパリせず、絶えず頭重、耳鳴、肩凝り、便秘、吹出物、脱毛、聾唖れ、不眠等に苦しみ、まだそれ程の年でもないのに血壓が高くて困ると云ふ方々の血液を檢査して見るとその多くは初期の手當が不完全な爲梅毒が治り切つて居ないか或は遺傳梅毒で恐しい梅毒菌や毒素が血液や淋巴液を初め全身に潜在して居て色々な病變を起して居る事がよく解ります。

從つ

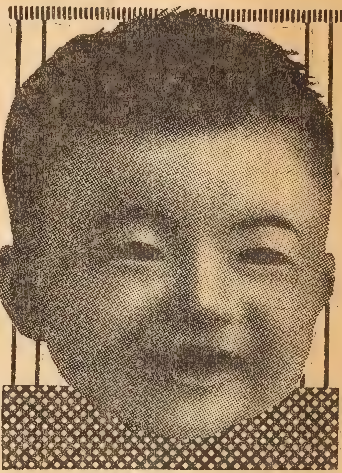
て前述のやうな病狀を梅毒とも知らず姑息な療法や見當違ひな手當を繰返して居ると病勢は次第に進行し一進一退の高血壓が續いて突然腦溢血や狹心症、心臟麻痺に襲はれたり、頭が馬鹿になつて發狂したり、足腰も立たぬよい／＼になつてしまひますから、一日も早く專門醫の手當を受けるか或は獨逸ベルツ博士で有名なベルツ丸を服用するかして徹底的に治療する事が大切です。

內服

藥ベルツ丸は梅毒治療の專門藥として遠く海外にまで效果の知られて居る內服藥で、梅毒菌の撲滅作用は申す迄もなく、新陳代謝の機能を旺盛にして、胃腸を初め凡ての內臟諸器管を強化する排毒力の強い內服藥ですから初期梅毒の治療には申す迄もなく殊に二期三期と進行した梅毒の治療には最も適して居ります。故に永年惱む梅毒體毒、しつ毒、冷え毒、潜伏梅毒、腦梅毒、遺傳梅毒、脊髓癆、動脈硬化、便秘、吹出物リウマチス等凡て梅毒性疾患に苦しむ方は是非一度ベルツ丸を服用下さい。服藥日を追ふて血液や淋巴液、脊髓液等は淨化され、恐ろしい毒素を大小便と共に體外へ排泄致しますから、胃腸は丈夫になつて食慾は進むやうになり、梅毒から來る頭重、耳鳴、肩凝り、便秘、吹出物、手足や節々の痛み等も自然に忘れ、血壓等も次第に下つて夜分も氣持よく安眠出來るやうになります。故に永年梅毒で惱み今迄色々な手當をしたがどうも結果が思はしくないと云ふ方は病氣の惡化進行しない內一刻も早くベルツ丸を服用され、元氣で働ける無毒健康體になつて頂き度いと存じます。

因にベルツ丸藥價は廿日分三圓、卅五日分五圓、七十五日分十圓、百六十日分廿圓、二百六十日分卅圓、送料內地各十五錢、海外四十二錢、全國藥店竝に百貨店で販賣してゐますが、直接本舗東京市日本橋區濱町三丁目鈴木日本製藥社（振替東京百五番）又は東京市小石川區音羽町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ御申込みになれば急送致します。

子寶



手術をせずに　九年振りに男兒を

～神戸市平野町　井筒月子～

以外の御無沙汰ですが、御當園樣のお蔭で去る四日午前二時十五分に男兒を安産致しました事をお知らせ申します。

一時は私に手術をと申されて居りましたのに、九年振りのこの非常時に男兒を擧げました事は誠に名譽です。

これも種々と御指導下さいました御貴園の御盡力とあの良藥のキ、メのお蔭です。主人を初め家中は大賑ひで名も駒太郎と付けました。幾久しく御付合を願ひます。

子供のほしい方に・・・嬉しいお便り・・・

生めよ・殖やせよ

世を擧げての非常時に、國民の一人々々が協力一致して政府の方針にしたがふ事が御國に盡す御奉公です。當局では節米だ：貯金だ：戰地の皇軍勇士を忍び贅澤はやめよ：と種々の奬勵です。その中にも最も大切な事は、伸び行く日本の建設を計る爲め第二國民を一人でも多く産み育て擧げる事が義務です。子は家の寶でもあり又國の力です。處が世間には結婚後三年五年は愚か十年以上も只一人の愛兒すら授からず肩身の狹い生活を續けて居られる方々も又決して尠くありません。

姙娠への第一條件

一般の子なき方に接して見ますと、自分は何ゆゑに子供が出來ないか：：と云ふ原因を少しも御存じない事に驚かされます。姙娠を妨げてゐる病氣や障害のある事をハッキリ知つてこそ初めてその原因に正しいお手當も又日常生活の注意も充分盡されることになり、やがて身は健康に導かれ、自然憧れた子寶も惠まれる事になるのです。女性と生れ、後れ勝にでも月のものが來潮する方であれば手當次第で子寶の惠まれぬ道理は御座いません。諦めてはだめです。

子なき方の一大福音

皆樣はすでに御存じの事でせう：：生駒の子寶藥で有名な淺井園の事を：：本園は永年の間子なき方の眞の味方となり多數の子福者をあげ、感謝の禮狀はもとより可愛いお子樣達の記念寫眞迄も澤山に戴き大變喜ばれて居ります。故に本誌讀者にて子供の出來ぬを不思議に思つてる方―病弱又は體の惡い方―流産早産又は一人出來後惠まれぬ方等は樣子を打明けハガキか手紙を下さい。ゼヒ知つて置かねばならぬ姙娠に關しての知識と尊い體驗ある家庭療法を無料で御返事申ます。迷はず今スグ。

奈良縣生駒町元町二〇

子寶本家　**淺井園**

電話二三三番

富士漫画館

建設時代

日本人なら出來ぬ筈

新東亜建設のため必死に働いてる人を外に、個人主義者たちのこの對內敵性行爲！

田村辰三

贅澤品禁止

志村つね平

贅澤を止めねばならぬのは、たゞ着飾らぬことだけではない。かゝる人間はたゞ法令に抵觸しまいとしてゐるだけだ！

もがく蔣介石

賴みとする船頭は溺れかけてるし、櫂はなくなるし、もはや顚覆を待つばかり。

岡　けんぢ

防諜報國

『この名刀と炬火があるからには、如何なる妖怪變化も恐るゝにたらぬ』

吉野弓亮

害虫驅除

大切な新しい葉を枯らすやうな害虫は、かうして退治してしまつた方がよい。

白路うらら

戰線銃後一體！

をぎ原賢次

『俺だつて戰地へ行けば立派に働いて見せるよ、ウイー』

全國民打つて一丸となり聖戰完遂に邁進しなければならぬ秋、戰線と銃後を別物に考へてゐる人間、認識不足といふの外はない。

東亞共榮

白路うらら

このしつかりと握り合つた手が、そんなことぐらゐで離れると思つたら大間違ひだ。

開運厄除

七難即滅 七福即生

生れ年による男女一代の守本尊頒布

大護摩御修行済

靈力無限なる守本尊の大威力よく

病難、火難、水難、剣難一切の災厄を救ひ給ふ！

人生としての一大事たる精神力
即ち正しき信仰を把握せられよ。

人はこの世に生を受けると同時に生れ年による各々守本尊の御守護を受けて居られます。潑剌たる信仰なくして國家の躍進は期待されず、信仰なき人々は靈魂なき屍です。こゝに於て我々は如何なる信仰を信奉すべきか、申上げる迄もなく男女一代生れ年による守本尊を各々日夜身につけられ常に御守護を受けられよ！

像なくば信ずるに由なく、像ありて信仰即ち定まる、況んや身に護持するに於ておや。

こゝに頒布せる男女一代の守り御本尊は**病難、火難、水難、剣難**一切の災厄よりのがれ健康に福運を得て一生幸福に暮せる樣に大護摩が御修行致して御座います。老若男女を問はず御一體を日夜肌身離さず御著け下さい。信仰なくして安心立命なく、信仰なき生活は暗夜に燈火なきが如し、信仰は力なり。神佛我と倶にありの信念の許に勇氣百倍この國難を克服せられよ。

× × ×

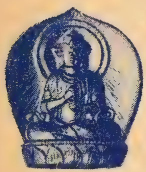
毎月一回日を定め、口をすゝぎ手を淨め守本尊を守袋よりいだし兩手にのせまゐらせ、そのまゝ兩手を膝におき神氣をおちつけ心靜かに一ケ月の我が身の行を神に問ひ胸に答へて反省し、善行破邪もつて修養の糧となし賜らば善因善果の理に叶ひ諸願成就健康福運我が身に必ず訪れん。

守本尊は金色
目方三匁附高サ一寸
砲金浮彫は鈴木岳三先生謹作

子年生れは 千手観音

午年生れは 勢至大菩薩

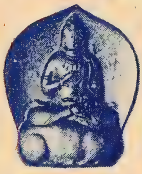
丑年寅年生れは 虚空藏大菩薩



未年申年生れは 大日如來

卯年生れは 文殊大菩薩

酉年生れは 不動明王



辰年巳年生れは 普賢大菩薩

戌年亥年生れは 八幡大菩薩

御希望の方は住所、年齡、御明記の上ハガキにて御申込下さい。

代金は守本尊御手許に安着の上御送り下さい。萬一御希望に添ひません節はそのまゝ御返送下さい。

（守本尊は携帯守袋付御一體）

金　屬　製　謹　作　金九十五錢

砲金浮彫最高級謹作　金壹圓九十錢

右いづれも同型開運厄除大護摩御祈禱濟

（申込所）

千葉縣成田山不動尊奥山下

守本尊謹刻所

振替東京一六二六五一番
電話成田二七五番
電話成田一一五番

日(にち)滿(まん)支(し)連(れん)絡(らく)

距(きよ)離(り)及(およ)び所(しよ)要(えう)時(じ)間(かん)表(へう)（東京より）

地名	距離 粁	時間 時・分	地名	距離 粁	時間 時・分
名古屋	二九六	一・五〇	臺北	二五三五	九・二五
大阪	四三五	二・四五	廣東	三四六〇	一二・五五
福岡	九二五	三・二五（直通急行）	仙臺	三三〇	一・四〇
京城	一四七五	五・三五	青森	六六〇	三・一五
平壤	一六七五	六・三五	札幌	九四〇	四・四〇
新義州	一八三五	七・二五	長野	二一三	一・一五
大連	二一〇八	八・三〇	新潟	三八〇	二・一五
奉天	二〇四五	七・五五	富山	四一三	—
新京	二三二〇	九・〇〇	金澤	四六三	二・三〇
咸興	一七四五	六・五五	米子	六一〇	二・一五（直通）
淸津	二〇三五	八・二〇	德島	五五八	三・四五
大邱	一二五五	四・四〇	高知	七二〇	五・一〇
青島	二〇九五	七・五五	高松	五七五	三・四五
天津	二五三五	—	松山	七二五	四・五五
北京	二六四五	一〇・〇五	別府	八五五	五・五五
上海	一八七五	六・四五	（橫濱より）		
南京	二一四五	七・四五	サイパン	二六一〇	一〇・〇〇
那覇	一八三五	六・五〇	パラオ	四一八〇	一七・〇〇

本表中、他に比して近距離であるのに長時間を要する所があるのは、途中の飛行場に着陸中の時間を含んでゐるからです。

航空路繪圖

大日本航空會社定期航空時間表ニヨル ―― 昭和十五年九月現在

澤井一三郎畫

陣中川柳

月が出て銃後の便り又開き
（滿洲・戸谷元治）
激戰が一段落で頭刈り
（南支・佐野孝平）
支那娘見よ東海をよく唄ひ
（滿洲・奥村廣光）
ビッコひき死んでもゆくと戰地なり
（北支・山川貞治）
滿月へ寫して見たい髯が伸び
（滿洲・岡田秀夫）
看護婦が母に見えたり姉に見え
（陸軍病院・松谷徳二）
SASEO

小野佐世男畫

肺病ろくまくの悩みから
一路健康へのこの指針

無代送呈

功徳山徳林寺住職　松永佛骨師著（佛教修養社版）

肺病治療の原理

―もくろく―

○結核菌とその傳染
●結核菌の保有者
○結核菌の天然免疫
●なぜ肺病となつたか
○釋迦の金言
●肺病は治せる
○結核菌を殺す藥物ありや
●大自然のふところへ

○治療の原則
●信仰について
○土の藥用方法
●水療法の行ひ方
○日光と空氣
●安靜療法
○榮養療法について

●喀血の原因と止血法
○發熱の原因と解熱法
●セキ止め法と袪痰法
○盗汗とその療法
●不眠と安眠法
○下痢と便秘の治し方
●脈搏について

○肺病は全身病なり
●療養生活上の注意
○肺病と和漢藥
●誰にでもとれる藥草
○家庭に常備する藥草
●野菜と果物の藥効

―以上―

上記内容の『肺患者全治指導書』と、藥草療法を公開せる『光明のあなたへ』といふ二冊の本を、今スグ『富士で見た本下さい』と書いて、左記へハガキを出せば肺患退治の弘願により無代進呈さる。

河内國布施市
功徳山徳林寺
電話布施三四五番・振替大阪二三五番

のどがはれる、目玉が突出する病氣

バセドウ氏病

甲狀腺腫特殊病
甲狀腺異常亢進

◉無代進呈（バセドウ氏病文献）

治り難い困難な御病氣ですが御悲觀には及びません。此病氣の起る原因から治す手當て及び專門藥の事を親切に御知らせします。婦人俱樂部讀者として御遠慮なく左記へ御申込み下さいませ。

神戸市平野上三條町祇園前　**寶來閣**

糖尿病

起る原因と治す手當て及び限食せずに、ヨクキク藥草製劑による治驗例を差上げます、今スグお申込下さい。

神戸市平野祇園前　**祇園藥草研究所**

男女 りん病

永年頑固な**りん病**。**せうかち**でお苦しみの方々へ。

酒屋に傳はる自慢の家傳藥
蝦蟇の妙藥を無代で差上げます

御望みの方は御遠慮なく葉書でお申込み下さい。服用法を記した印刷物を家傳藥と同封にて御送り致します。この藥は……効めは實に強いが副作用のないのが特長……今迄の痛み止めが精一杯のものと違ひ病源たる淋毒菌を小便と共に排除して極めて短期間に目的を達する自慢の家傳藥であります。コジレタ淋病の根本治癒を望む方は◻論より證據。**きくか　きかぬか**一度だけお試し下さい◻

水戸市榮町二丁目　**小河屋酒店**

淋病でお苦しみの方へ

一日十錢でキ、メの早い
自宅新療法のお知らせ

淋病を早く根治したいから……とお手紙や直接御來訪になつて御相談下さる方は一日に數十人を下りませんがこの多くの方が當所でお頒らした特殊の皇漢洋複合劑ゴルト藥によつて次々と病苦を救はれて行くのは誠に喜ばしい。

このゴルト療法がなぜ評判になつたかと申しますとコジレた慢性の淋病も服み初めると淋毒がグングン排掃されて芯から快癒に導くからで、しかも其の期間が割合に短くて濟むのと藥價が奉仕的に實費同樣なのは多くの人々の特に感謝する所です。

働きながら治す
（最近實例の一二）

靜岡の竹田弘造樣は思ひ惱んだ惡性の淋疾をゴルト藥を服みながらお仕事を一日も休むことなく家人にも知られずに治してしまつたと大層のお喜び。又東京品川の酒井茂樣は數年來の慢性で時候の變り目毎に再發して苦しんでゐたのがゴルト藥の服用で淋糸もスッカリ消失し飲酒しても再發せぬやうに治つて全く夢のやうだとわざ〳〵當所へ御來訪になつて感謝して居られます。**かうして次々と寄せられる澤山のお喜びの實例は全く藥効の素晴しさを物語るもの**ですから從來種々の治療も効無くお惱みの方々は一日も早くお試み下さい、ゴルト藥はこれ程强力なのに胃腸に害の無い飲みよい散藥なので尚更皆樣に喜ばれてゐます。

淋病・消渇・コシケに大好評のゴルト藥は二十二日分二圓・卅四日分三圓・家庭函六十日分五圓で書留送料十五錢海外四十二錢です。御希望の方には講談社代理部でも御取次しますが製藥元、東京市淀橋區諏訪町六六東京和漢藥研究所（振替東京六九貳貳番）へ直接御注文あれば何品か判らぬやう密封小包で即時送藥されます
特約店東京・玉置・大木・銀座淺草松屋藥品部
大阪・丹平商會

悪腦、悪疾より健腦明快への指針！

腦の病や異狀神経の方

腦疾良藥（試藥）と強腦實寶錄を無代進呈

幸福も成功も開運も、白痴、狂人、廢人人生の落伍者となるも大方は腦の作用如何に因る、本病の原因には睡眠不足や過度の勤勞、精神的打擊家庭不和、先天的には遺傳性の黴毒、飲酒家精神病系、中風筋等の家系に生れた運命病又血族結婚晩婚、酒呑等の兩親間や不自然なる男女間に生れた因果腦疾病等、世に治療法も色々あるが病を治すばかりでなくより積極的に眞の健腦ならしめ智力の發達强靱な意志、精神力を培ひ幸福と成功を齎らす力強い治療こそ眞の腦療法であります

腦が悪いと斯んな症狀が現はれる

この苦しみ！この悲慘！速やかに治療せよ

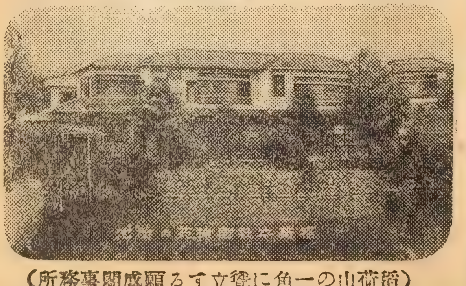
腦病神經病、腦神經衰弱、不眠症、ヒステリーてんかん、ヒキツケ、頭痛、頭重、のぼせ耳鳴腦力記憶力思考力判斷力活動力根氣力等の減退肩首コリ小事思考、取越苦勞、雜念妄想多夢症健忘症意志薄弱、小心小膽疾病異性長上等恐怖感情化變烈し心悸亢進、發作を起、痙攣卒倒す手足舌縺、食慾減退疲勞倦怠、胃腸障害便秘症

右腦疾病の症狀の苦痛ば本人のみが知り他人には到底想像も理解も同情もされない病質故治療も自分自身で信用ある良法を撰び進んで治療全快せしめねばならぬ、幸ひ茲に本病治療に最も理想的な家庭で手輕に人知れず短時日に治療が出來健腦明快に導く**正しい自宅治療法直傳の實寶錄と良藥健腦鎭靜光明丸半圓分を無代進呈**する（因に本良薬の藥價は貳圓參圓五圓拾五圓なるも買ふ前に先づ只今無代進呈中の五十錢分を試藥し効能を認めてから適當の分量を求めるが得策）兎も角、又と得難き此好機會に重症者も輕症者も何は措いても今スグ年齢容態を必ず記しハガキで申込まれたし。

腦神經症狀の解說は・松山秋山博士兩先生執筆

京都山城いなり山 願成閣

電話伏見一九四八・二二六七番



（稲荷山の一角に聳立する願成閣事務所）

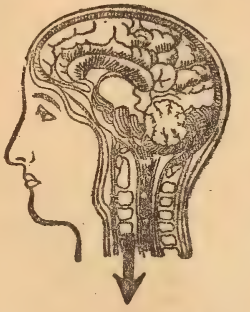
青年諸君の注意すべき
腦力體力の減退
神經衰弱を治せ

神童といはれた天才兒が、青春期に達すると共に普通人よりも低能になり、學校時代の秀才が社會に出てから急にボケたり、敏腕家で鳴らした人も、中年以後意氣地なしになつてしまふ――といつた例しは少くない。

かうした急激な變化は、年齢の推移といふよりも、むしろ他に原因する場合が多く、就中青春期の惡癖其他に依る男性的生理機能の缺陷に基くものがその大部分を占めてゐるといつてよい。

男子の生理的缺陷即ち性神經衰弱は、全身精力を衰退せしめ、病弱早老を招くばかりか精神的に及ぼす影響は一層甚だしいものがあつて、漸次頭腦の働きが鈍り、記憶力思考力は頓に衰へ、極度の神經衰弱症狀を呈する。

それぱかりか、男性の特質たる勇氣、膽力剛健、進取の氣性が次第に失せて、謂ゆる中性的な性格に一變し、遂に精神的變屈者となつて世に立つことも出來ず、實に一生の大不幸を招くに至る。



この男性最大の缺陷たる青春病の治療は從來適切なる療法少なく、却々救はれ難いものとされてゐたのであるが、多年苦心研究の結果、當所はこれを物理的二大原理に基く應用療器として「ホリツク療法器」を完成するに至り、遂に惱みは見事解消さるゝに至つたのである。

本器の効果に就ては、既に多數の醫學博士諸氏が推奬せらるゝ處で、從來の實驗者は數十萬に達し、悲痛の底に沈淪して居た人で救はれたものも多い、又海外輸出も益々盛んである。前記症狀の人は、今のうち急ぎ使用し青春を取戻して立派な男性の資格を備へらるるやうお奬めする。

どの男性も心得置くべき
治療書無代進呈

療器に關する詳細並に若き男性の心得置くべき『醫學知識』を解り易く說いた說明書をハガキで申込次第無代で密送致しますから療器を購入すると否とに拘らず、これだけは是非一讀して男性醫學に關する新知識を得られよ、キツト世の中が明るくなります。

東京市芝區神谷町十八の二
東京新療法研究所
電話芝三一三一番
三一三二番
振替東京七七三九番

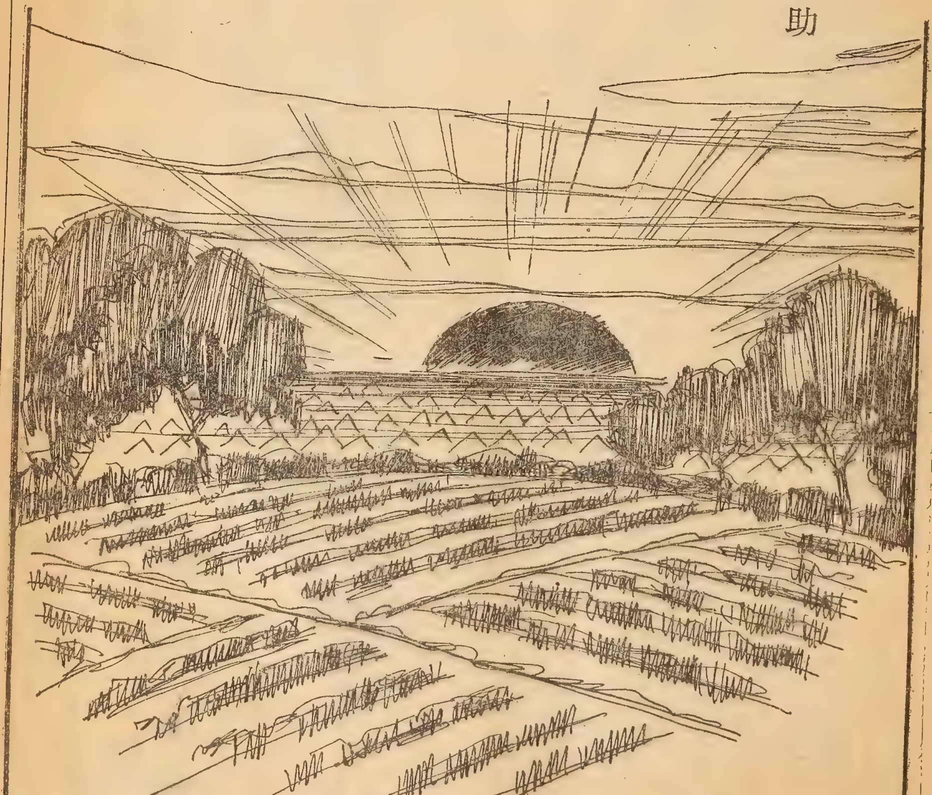
朝の精神

佐藤惣之助

朝を喜び、朝を愛する者に
天は露けき青空を與へ
清らかなる風を送り
更に明るき健康を配る
聖きかな、朝の光よ。

黄金たわゝに稲を刈取る人
みどりなす海に銀鱗を漁る人
凡ての交通機關を動かす人
ハンマーを振つて働く人
雄々しきかな、朝の力よ。

朝を喜び、朝を愛せ
朝は人生希望の第一歩なり
朝は歡喜と幸福の戸口なり
颯爽として、潑剌として進む
美はしきかな、朝の精神よ。



富田千秋畫

新掲載理想小説

時代の尖兵

大林清
玉井徳太郎畫

材を多難な明治に採つて、輝かしき祖國の前途、東亞の大

理想を具現する愛國熱血の大雄篇！ 人間の正しき生き方を血みどろな葛藤の中に描いて、而も國家の深刻な運命を表現する！ これこそ明日の日本を示唆する大衆文學の尖兵である!!

拔刀警視隊

一

銃聲がとだえると、地蟲も鳴かない寂けさがきた。

雨氣を孕んだ空のどこかに月があるらしい。右手につゞく二俣山から、谿一つへだてた田原坂まで、稜線がぼかしかけたやうに浮きあがつてゐる。

『なにしろ激戰だな。鳥羽伏見も上野函館も俺は知らないが、今度ほどぢやなかつたらう、え、どうだ、戊辰の歴戰者……』

同僚に聲をかけながら、傍目もふらず愛刀の手入れをしてゐるのは、東京警視廳から派遣された警視隊の中でも、有數の使ひ手といはれる一等少警部横芝六之助だ。精悍な顔立が、篝の灯影をまともに受けて酔つたやうに赤い。

『しかし氣組がちがふぞ、氣組が……戊辰の當時のわれ／＼は賊軍、今度は官軍だ、所詮は勝つといふ氣がある。』

草を枕にころがつてゐる者、焚火をかこんでゐる者、傷の手當をしてゐる者――そんな中から答へたのは、勿論この拔刀警視隊の大部分を占めてゐる舊幕臣あがりの一人だつた。それがやうやく疲勞の恢復しかけた一同の、雜談の緒口をほぐして、

『おまけに西郷軍の薩摩芋どもは父祖の仇ときてゐる。』

『なるほど、江戸の仇を長崎といふのはそこから出たのか。』

『なに、此處は熊本だ。』

ドッとくづれる笑ひの中から、

『ともかく横芝少警部殿の今日のはたらきはすごかつた、惡鬼羅刹といふのはあのことだよ。』

『さうでもないさ。ま、お互ひ手柄話は、俺達拔刀警視隊の手で田原坂を落してからにしよう。』

横芝は打ちかへし眺めてゐた刀をパチリと鞘へをさめ、ふと思ひ出したやうに、

『鳴濱！　おい、鳴濱ゐるか！』

『はア。』

少しはなれた場所で、黒い人影が懶げに起きあがつた。

『ちよつと來い。』

横芝は先に立つてあるきだした。

鳴濱は默々とついて行く。まばらな雜木林へ入ると、二人の頭上で飛び立つ鳥が、あわたゞしく樹々の葉をさわがせた。

『君にきゝたいことがある……』

横芝が急に立ちどまつてふりむいたので、二人は顔と顔をつきつけて向きあつた。

『君は當隊隨一の劍客だといふ噂だ。』

噂といつたのは、鳴濱が今度の西南役從軍について、はじめて、警視廳巡査を應募拜命してきた人間のため、横芝は直接その手並を知らなかつたからだ。

『いや、そんなことはありません。』

『ともかくさう聞いてゐる。それなのにこの四日間、俺達が參戰したはじめから、俺の見るところではまだ一人の敵も斬つてゐない、いや、おそらく刄をあはせもしてをらぬ。そのことについて君の辯明を聞きたいのだ。』

重苦しく一語々々を區切つていふ調子で、前から用意してゐた言葉であることがわかる。

『べつに辯明の言葉はありません。』

鳴濱は押しかへすやうな底力のある聲で答へた。

『ない筈はない、君は俺を盲だと思つてるのか。君はいつも味方の後へ〳〵まはつて逃げてゐるぢやアないか。何かの拍子に敵にぶつかると、敵の切先をかはして逃げまはる、腕が立つのになぜあんな眞似をする！』

『………』

『君も靜岡縣士族、舊幕臣だ、西郷軍の間諜とは思はぬ。しかし、こととしだいによつてはすゝておかぬぞ！』

横芝は語氣を強め、刀の柄へ拳をかけた。

『おつしやるとほりです、間諜ではありません、怖いのでもありません……』

鳴濱の聲は相變らず低い。

『ぢやア何だ！　何で逃げる！』

『あなたにだけいひます、僕はこの戰ひに疑ひを持ちはじめたのです。』

『なに？』

『戊辰の戰ひ、近くは佐賀、熊本神風連、秋月、萩の亂、同胞相殺戮する戰ひはそれでたくさんです。』

『そんなら何故應募してきた。』

『今も誰かゞいつてゐたやうに、戊辰の戰ひの父祖の仇を報いようと、血氣の勇にはやつたのです。しかし、こつちへ來てみて第一に感じたのは、戰ひがあまりに激しすぎる、死傷者が多すぎる、これなら、こんな無益な血を流すくらゐなら、むしろ他に、日本の外にこそ討つべき敵があつたのではないかといふことです。』

鳴濱の言葉は、押へきれぬやうに熱を帶びはじめた。

横芝の押しだまつた靜寂を、名も知れぬ山鳥が一と聲鋭く鳴いて過ぎた。

『僕は今まで靜岡にあつて、舊幕時代の夢ばかり追つてゐる連中の中で育つた人間です、僕の周圍を取りまいてゐたものは、新政府に登用されない舊幕臣達の、何の役にも立たない不平でした、繰り言でした。それが今度この戰場へ出てきて、はじめて動いてゐて世の中といふものに目がひらいたのです。横芝さん、あなたはどうお考へです、木戸大久保の內治改良論、西鄕の征韓論、いづれも一利一害とすれば、有爲の人材を殺傷し、貴重な國費を費やし、たゞいたづらに國力を消耗する今度の戰ひなどは……』

『馬鹿ッ、やめろ！　此處を何處だと思ふ！　屁にもならぬ政治論などをしてゐる場合か！』

『…………』

鳴濱はグッと唇を嚙んだ。自分でもどうにもならぬほど眼が燃え、肩がはずむのだ。

『鳴濱！　あらためていつておくが、俺達は薩軍拔刀隊に對抗するため、官軍の一員として參戰してゐる。一人でも多く殺し一人でも多く傷つける、これが俺達の使命だ。天下國家を論ずるのは戰ひに勝つてからのことだ。今後もし君が敵に容赦するやうなことがあれば、この横芝が味方の士氣のために斬るぞ！』

横芝ははげしく鍔を鳴らし、光る眼をすゑてゐたが、

『よし、わかつたら行け！』

息づまるやうな沈默の後で、鳴濱の跫音がしづかに叢を踏んで行つた。

雜木林を出ると、四邊は冴え〴〵と明るんでゐる。
鳴濱はふと眼をあげ、山の背に薄雲をすかして輝き出た半月を見たが、そのまゝ道を横にそれて、眞珠色の光を孕んだ谿間へ下りはじめた。

二

田原坂への街道を眼下に見下し、右手二俣山の薩軍陣地を睥睨する横平山は、敵味方にとつて田原坂口攻防の要地のため、此處ではその三月十五日以來三日間奪ひつ奪はれつの激戰がくりかへされ、今はやうやく東京鎭臺兵を主力とする官軍の手に落ちてゐる。
しん〳〵と耳の鳴るやうな寂けさの中を、田原坂との間に横たはる谿間へ下りて行くと、三晝夜目のあたりに見てきた血河屍山の死鬪、峰々谿々にこだました銃砲聲雄叫びが、鳴濱次郎にはまるで跡形もない一場の惡夢だつたやうに思はれる。
鳴濱はふと足をとめた。
はてな？　……
誰かゞあるいてくる。杣道につゞく熊笹の茂みが、かすかに上の方からそよいでくるのだ。
『誰だ！』
戰鬪員の本能が、鳴濱を鋭く叫ばせた。
『誰だ！』

熊笹のそよぎのとまつた方へ、姿勢を低くして刀を引きつけると、
『鳴濱……俺だよ、金親多門だ。』
辟易したやうな小聲と一しよに、月光をふり落して黒い人影が立ちあがつた。
『何だ、君か。今頃何處へ行く。』
鳴濱はあつけにとられて金親を見まもつた。たいして親しいといふほどでもなかつたが、金親とは同じ舊幕臣の子弟として靜岡に育ち、共に今度の警視隊へ應募入隊してきた間柄だつた。境遇が似かよつてゐる上に、年齡も同じ二十歳前後なので、鳴濱の方からは何かにつけて、腹の底を打ち割つた話相手にしてゐる。
『君をさがしてゐたんだよ、鳴濱……』
『俺を？　なぜ……』
『君が見當らんから俺一人で決行しようと思つた。しかしよかつた、君と二人なら心强い、君はきつと贊成してくれるだらう……』
金親はせか〳〵と落着きなくいつて、その間にも鳴濱の顏色を讀まうとあせつてゐるらしい。
鳴濱は妙にハッとしながら、その感情を押しかくすやうに笑つて、
『いつたい何がどうしたんだい、俺にやアさつぱりわからん。』

『鳴濱、考へてみてくれ。俺は君の議論に啓發されたんだ、同胞相食む今度の戰ひの愚をさとつたんだ。われ〳〵今の時代の青年には、こんなことよりもなすべき仕事が山ほどある、俺は無益に死にたくない……』

金親の聲が訴へるやうにせきこんできた。

『君は脱走する氣か？』

『……………』

『おいッ！』

鳴濱が何か防ぎきれない力に押されるやうに、刀の柄元をおさへて前へ進むと、

『ま、まて！　俺は、俺は君の議論を身を以て實踐しようとしてるだけだ！　君はそれとも、たゞ空理空論を唱へて、俺の心を惑はしたゞけなのか！……』

金親は後ずさりしながら必死に叫ぶ。

なるほど、それはそのとほりかも知れない。しかし、鳴濱の心の中に培はれた武士の正義感は、脱走といふ卑怯な行爲そのものを本能的に厭惡した。それが刀へ手をかけて金親へせまらせたのだ。

・が、金親の言葉にも理があつた。たゞ、それほどの決心をさせたほど、金親が彼の主義主張に共鳴したとは、日頃の樣子から推して信じられなかつたが……

『鳴濱！　頼む、頼むから君も逃げてくれ！　もし、もしそれが氣に染まぬなら、俺だけでも見のがしてくれ！』

『…………』

『萬一捕へられても君には迷惑をかけぬ。いや、一生恩に被る。今夜のこの戰ひの中だるみを逃しては二度と機會がない……』

鳴濱の心が動いた。自分の矛盾に氣づくと、何が何やらわからなくなつて、

『行かう、下まで下りてのことだ。』

と先に立たうとした。

と、何かの氣配が背後に起り、せまつた跫音が叢をかきみだして、

國民歌 興亞行進曲
陸軍省・海軍省・文部省後援
朝日新聞社撰定
篠原正雄編曲
決定的標準盤

長門美保
永田絃次郎
陸軍軍樂隊
指揮樂長 大沼哲
片面 1.85
KING
キングレコード

『脱走かッ、こら！』
ふりむいた鼻先へ白刃が光つた。
夢中だつた、いつ居合腰になつたのか、氣がついた時は横に拂つた一刀が、相手の腰骨の邊へガッと鈍く鳴つて、のめるやうに倒れる人影が見えた。
失敗つた！……
クワッと取りのぼせた鳴濱の眼には、たつた今そこにゐた金親の姿が見えない。
『金親！　おいッ、金親！……』
それに應へるものは、樹の間に隱見する宿營の篝の方角から、あわたゞしくせまつて來る人聲、跫音――鳴濱は拔刀を手にしたまゝ、杣道を谿間へころがるやうに駈け下りはじめた。

二

『横芝少警部殿だ！』
倒れた人影にいつたんつまづき、それを抱き起した巡査が叫んだ。
『なに、横芝！……』
おくれて駈けつけた年配の中警部が、
『横芝！　横芝！　傷は淺いぞ！』
『駄目です、中警部殿！　絶命されてをります！』
『さうか、聲がしたのはたつた今だ。お前等二た手にわかれて、この近邊と谿間をさがせ！　薩軍の斥候か何かだ、たいした人數ぢやあるまい。それから、おい、お前は本營へ報告！……』
巡察隊七八名の一行は、命ぜられるまゝ二た手にわかれ、一人は宿營の方へいそいで取つてかへす。
熊笹の茂みに息をひそめてゐた金親多門は、あとに殘つた巡査二三人が、拔刀を下げて近づいてくるのにギョッとした。
『その邊にひそんでやせんか、かまはん、突きまはつてみろ。』
中警部の聲がする。
いよ／＼最後だ！　脱走者！　裏切者！　斬罪！……目まぐるしく斷れ／＼にそんな文句が頭をかすめ、全身がネットリと汗ばんできた。が、ふいにひらめくやうに一策を思ひつくと、金親はやにはに差添を引き拔き、思ひ切り强く太腿へ突き立て、
『うーむ……うーむ……』
齒を食ひしばつてうめきながら、刀はすばやく血糊を拭つて鞘へ。
『やッ、うめき聲がするぞ！』
跫音は果してピタリととまつた。
『誰だッ、敵か味方か！』
『うーむ……四等、四等巡査、金親……』
『金親？　金親多門か？』
『ざ、ざんねん、やられた……』
いきなり熊笹をかきわけて、二人の同僚の顏がのぞき、それ

が金親にちがひないことをたしかめると、
『しつかりしろッ、何處をやられた！』
『俺はいゝ、俺より横芝少警部殿は……』
熊笹の中から引張り出されながら、傷の淺すぎるのが金親には氣になつた。
『金親か、相手はどうした！』
樣子を聞きつけて、中警部が倉皇と立つてきた。
『相手は、相手は何者とも知れません。横芝少警部殿と此處まで來ますと、誰何するひまも何もなく、いきなり斬りつけてきて……』
『二人か三人か？』
『一人のやうに……いや、私が見たのはたしかに一人でした。何しろ、よほど腕の立つ奴で……まつたく不覺でした』
『服裝は？』
『われ〳〵の服に類似のもののやうでした。咄嗟のことでハッキリとは……』
さすがの金親も、官帽の下に冷汗をにじませたが、その時ふと横芝の姿に氣づいた樣子で、
『おゝッ、横芝少警部殿！……』
左右から支へた同僚の手を拂ひのけ、横芝の屍骸によろめき寄ると、二た聲三聲その名を呼んでから、はじめて絶命に氣づいた風をよそほつて凝然とした。

その時、谿へ下りて行つた巡査達が、息せき切つて駈けもどつてきた。
『下の方には何處にも人影が見えません！ 林へでも紛れこんだのではないでせうか！』
『よし、本隊から應援がきたら、東京鎭臺兵とも連絡をとつて山狩りだ』
金親は耳をそばだてゝそんな會話を聞いてゐた。
俺の才幹を一巡査として朽ちさせてはならない、死ぬものか、くそッ……
饐ゑた古沼のやうな故郷の環境の中から泳ぎ出て、はじめて、新時代の息吹に觸れた金親が感じたのは、自分の才幹の生かしやうによつては洋々たる前途があるといふことだつた。
脱出の機會を逸したのは取りかへしがつくが、今此處で鳴濱が捕へられては身の破滅だ――さう思ふと、鳴濱のためではなく鳴濱の無事を、金親は日頃信じてもゐない八百萬の神々に祈りつゞけた。
その耳へ、急を聞いて山を下つてくる拔刀警視隊の、おびただしい跫音が轟きはじめた。

招かれざる客

一

部屋の中は路易王朝風の重々しい家具でかざられ、壁には豐滿な裸體の女を描いた西洋畫が掲けられてある。海の向ふの匂ひをまだたつぷりとふくんでゐるやうな華やかな色の厚ぼつたい絨毯や、棚に並べられた珍奇な形の陶器類や、そんなものの雜然とした配列が、ついこの間まで船乘だつたといふこの家の主人和泉倉吉の經歷を語り顏だつた。

さういへば、さうした洋風の家具調度の間から顏をのぞかせてゐる砂壁とか、くすんだ頑丈な長押とか、手のこんだ作工の障子とか――一口にいへば、舊幕時代さる旗本の下屋敷だつたといふこの家の素顏は、曾て舊幕海軍回天艦乘組士官の肩書を持つ和泉倉吉の前身にふさはしいものかも知れない。

だが、洋風の風俗習慣を取り入れるのにいそがしいこの時代――明治十八年代の東京では、かくべつ目をみはるほどの部屋の樣子でもなかつたから、鳴濱次郎はたゞいら〳〵と主人の現れるのを待つてゐた。

熊本橫平山の谿間に姿をくらましてから八年、鳴濱の顏は苦澁に似た翳を濃くしたやうにも見えるが、二十七歲の眼はまだ若々しく銳い。新聞記者、自由黨員、そして今また志士といはれる人々の中に身をおいて、常に信ずる道をあゆんできた閱歷が、縞目もわからぬ木綿の着物に小倉袴といふみすぼらしい服裝でゐながら、妙に貧乏書生とだけいひきれない昂然としたものを彼に感じさせるのだ。

廊下を控へ目な跫音が近づいて、障子がしづかに引きあけられた。

『ごめんくださいませ……』

鳴濱は思ひがけない女の聲に、はじかれたやうにふりかへつた。

『長いことお待ちねがひまして……』

青磁がかつた色の繻子地の舞踏服、お下髮の髮を桃色のリボンでとめた少女――いや、そんな裝ひが若くは見せてゐるが、二十歲には近いのだらう、部屋の中が急に明るんだやうな美しい娘だつた。

『なに、おいそがしいところをこちらこそ……』

まだ驚きの眼を無遠慮にすゑてゐると、娘の顏は當惑したやうにくもり、伏眼になつて、

『あの、實はお待たせしてゐるうちに、どうしても手の拔けない急用が出來まして、叔父は出かけてしまひましたんですけど……』

『お出かけになつた?』

『はい、よろしく申し上げてくれと申してをりました。』

娘の美しさに驚いてばかりもゐられず、鳴濱は苦い顏になるのをどうすることも出來なかつた。今夜は彼がその下で働いてゐる舊自由黨幹部大江健太郎にたのまれて、どうしてもすぐ返事をもらはなければならない書面を預つてきてゐるのだ。書面

の内容も鳴濱にはほゞわかつてゐた。それはかねてから大江達一味の間で秘密裡に計畫されてゐる武装渡韓――つまり志士達の手による征韓直接行動のため、大江と面識のある和泉の手で、日本郵船の船を出させようといふのだつた。

『で、お出先はわかりませんか？』

『それが、何とも申さないでまゐりましたものですから……ひよつとすると會社の方かも知れませんけど……』

『日本郵船ですね。』

『それもハッキリとは……』

『弱つたなア。』

待たせておいて出かけてしまふとは無禮にも程がある。だが、相手が女では憤る譯にもいかない。

娘は娘で、腕組をして考へこんでしまつた鳴濱を、氣の毒さうにみつめてゐたが、

『あの、こんなこと申していゝかどうかわかりませんけど、今夜叔父はあたくしと出先で落ちあふ筈になつてをりますの。』

『ほう、あなたと……それは何處ですか？』

『延遼館の夜會ですの。』

『延遼館……お濱の延遼館ですね。』

鳴濱はさう念を押しながら、今朝苦々しい氣持で見た延遼館の大舞踏會の新聞記事を思ひ出した。總理大臣江藤伯爵夫妻が、朝野の顯官名士を招いて催すものだつた。

『えゝ、九時からですけど、叔父はもつとおそくなると思ひます。』

『なるほど……』

『でも、あたくしがお教へしたとおつしやらないでくださいません？』

娘は鳴濱の顏が明るんだのを見ると、はじめてホッとしたやうに笑つた。片靨の出る笑ひが、野花のやうに可憐だつた。

『ありがたう、感謝します。あなたからお聞きしたことは口が裂けてもいひません。』

鳴濱は『では』ともいはず立ちあがつた。

娘も無言のまゝ送つて出た。

襖に青海波を描いた古風な玄關へ出ると、小砂利を敷きつめた前庭に、黒塗の箱馬車の待つてゐるのが見えた。

鳴濱はもう一度なるほどといふ氣持で、箱馬車と娘の姿とを見くらべた。江藤伯や外務大臣井野伯の歐化政策は、日頃不倶戴天の仇のやうにいふ鳴濱だつたが、きらびやかな舞踏會で花のやうに舞ふこの娘を、美しいものに想像することは樂しかつた。

『あら、雨ですわ！』

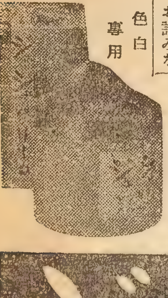
娘は戸外をすかして叫んだ。馬車の玻璃燈の明るみに、晩秋の夜の雨が銀鱗をひるがへしてゐたのだ。

『お傘お持ちになりません？』

『いや、結構です。あとであやまるのが厭ですから……』
『まア、どうしてゞすの？』
『傘は必ず失くす性分なんです。』
『ほゝゝ……』
『はつはゝ……』
戸外へ出ると、それほどの雨ではなかつた。
鳴濱は娘の澄んだ笑ひ聲を耳の底にのこしながら、芝新錢座の裏町通を方角もきめずにあるきだした。

二

その夜の延遼館大舞踏會は、さすが一國の總理が催したものだけあつて、何から何まで豪華づくめだつた。
まづ館の表門を入ると、玄關先の軒から軒へ紅提灯をかけつらね、玄關車寄には紫の幔幕を張りめぐらし、廊下の壁に一間おきに飾られた繪行燈の光は晝をあざむくばかり、その間を燕尾服、フロック、夜會服、振袖、思ひ〱によそほつた今宵の招待客達が、華やかな笑ひさゞめきの旋風を卷きおこしながら、ひきもきらず花瓦斯まばゆい廣間へ吸はれて行く。
光江があわてゝ、馬車を乗りつけた時は、もう舞踏の音樂が館内の空氣を浮き立たせてゐた。
いつも叔父と一しよで、一人では場馴れない光江は、客の出むかへにたゝずんでゐる江藤伯夫妻の前を、身もちゞまる想ひ

色白専用
失敗された方に！
これまでに
色白法に成功しなかつた方に
まづジュジュの御試用をお奬め致します。そしてしばらく經つてからお友達にお會ひ下さい。貴女のお肌にジュジュが如何に効果をもたらしたか、友の言葉がクリームに代つて語つてくれませう。
皮膚のサビを脱落して下さい
貴女の眞のお顔の美しさは、それを汚してゐるヒヲ色素を漂白するだけで得られるのですジュジュはそのサビを除る最高最良のものとして成功した色白専用クリームです
お肌をキメ細かに色艶をまし、どんなすばらしい白粉下の役目をするか、ぜひ一寸のお試みを
定價 八〇セン 一二〇セン


全國有名藥店化粧品百貨店にあり品切れの時は(雑誌名記入)直接本舗へ送料内地十錢他四十二錢
振替東京六八三四一
東京杉並區高円寺四
モンココ洗粉本舗
ジュジュクリーム

で會釋して通り抜け、上氣するほどきらびやかな色彩の入り亂れた廣間へ入つて行つた。

『やア、いらつしやい。』

ふいに燕尾服の白い胸が、彼女の前へ立ちふさがつた。

『今晩は一人？ 叔父樣は？……』

微笑つてのぞきこむやうにした顔は、外務省三等書記生金親多門だつた。

『え〻、あとからまゐりますの。』

光江は會釋ともつかず輕く頭を下げて、いつもながら外國使臣のやうに身じまひの行きとゞいた金親を、まぶしいほどみがきあげた靴の爪先までながめた。すると、急にをかしさがこみあげてきた——なぜか今日叔父をたづねてきた青年の無造作すぎる恰好を思ひ出したのだ。

『なにを嬉しさうに笑つてゐるんです、さアあなたがきたらもう放さん、今夜のヴルスを僕と殘らず約束してください。』

金親に腕をさし出されると、光江はしかたなくそれをとり、舞踏室の方へ人波の間をみちびかれて行つた。

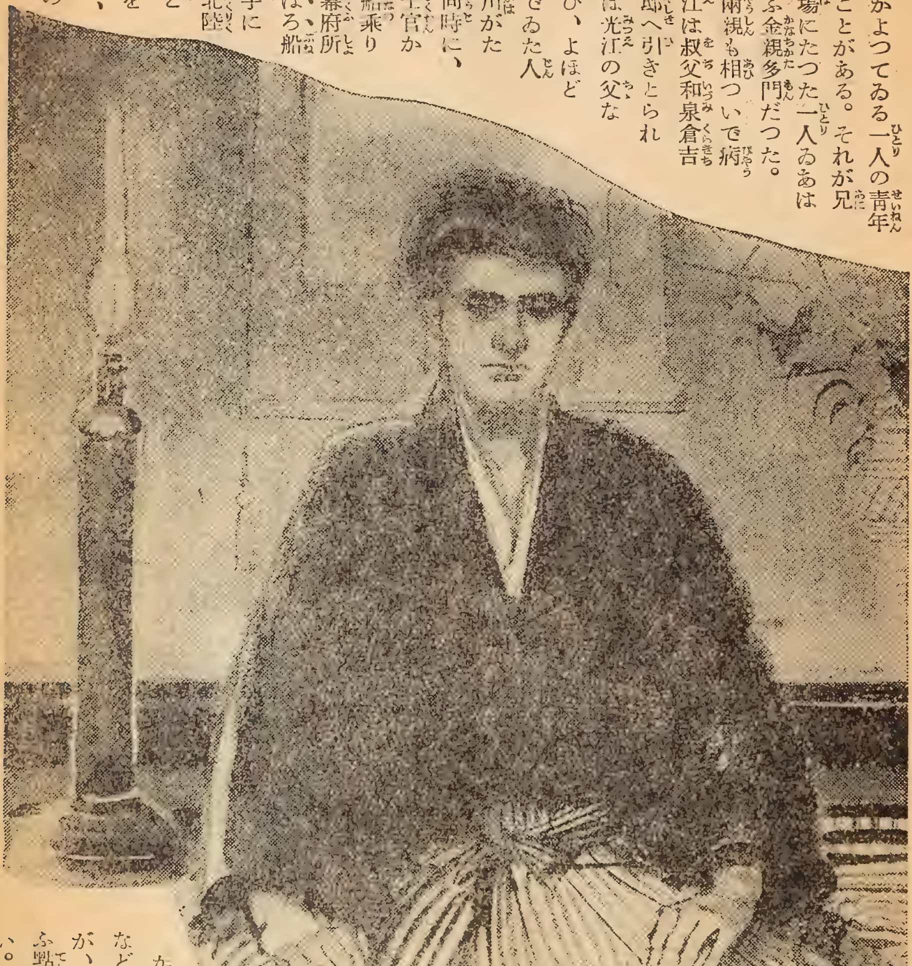
正直のところ、光江はこの金親があまり好きではなかつた。毎月日比谷の鹿鳴館で催される東京クラブの舞踏會などでは、外交官らしい端麗な容姿と、如才のない態度とで、夫人令孃達の間にかなり人氣のある金親だつたが、何處か薄つぺらなところの感じられるのが光江には厭だつた。

だが、さう思ひながらも、つい金親と親しくするやうな破目になるのは、光江と彼との間に不思議な因縁があるからなのだ。

兄の横芝六之助が東京警視隊の一員として、西南役に戰死した時、光江はまだ郷里靜岡に父母とともにゐて十二歳だつた。戰爭が終つて兄の最期が判明してから、彼女は老父に連れられて、東京の法

律學校へかよつてゐる一人の青年を訪れたことがある。それが兄の最期の場にたつた一人ゐあはせたといふ金親多門だつた。

その後兩親も相ついで病死し、光江は叔父和泉倉吉の東京の邸へ引きとられた。和泉は光江の父などとちがひ、よほど頭の進んでゐた人物で、德川がたふれると同時に、舊幕海軍士官からたゞの船乘りになり、幕府所有だつたぼろ船を二三隻手に入れて、北陸海運會社といふものを起したが、やがてこの方面に當時勃興の三菱會社の手が延びると、これも逸早く見切りをつけて三菱へ賣りつけ、やがて三菱會社と政府系の共同運輸が合同して出來上つた日本郵船會社に重役の椅子を占めるやうになつたのだ。私營の北陸海運會社時代、それを三菱へ高く賣りつけるために、大江健太郎達の手を通じて自由黨の手を借り、一時三菱をむかふにまはした貌に見せかけたことなど、世間では惡くいふ者もあつたが、ともかく目先のきいたやり手といふ點では一とかどの人物にちがひない。



その和泉は自分に子のないところから、光江を養女がはりに引き取つてわが子のやうに慈しんだ。近頃では彼女の器量よしが大の自慢で、其處此處の夜會へ引張つて行くのだが、ある時、鹿鳴館の月次舞踏會でヒヨツコリ再會したのが、外務省官吏に轉身して僅かの間に中録に榮進してゐた金親多門である。

『あの男はなか〳〵見どころがある、いまにきつと出世するぞ。』

叔父はさういつて、殊更光江を金親に近づけるやうに見えた。

そんな因果關係から、光江は妙に金親と接近するやうなめぐりあはせになるのだつた。

二た間を打ちぬき、下を板敷にした舞踏室には、舞踏者達の群がもつれたりひらいたり、白赤黄、色とり〴〵の夜會服の女達が目も綾にクル〳〵と舞つたり、カドリール舞踏が今たけなはだつた。

『叔父樣は御多忙でせうね。』

金親は光江の手をとつて、たくみに舞踏の群に入りながらさゝやく。

『えゝ、何ですか相變らず……』

『しかし偉いもんですよ、舊幕臣系から入つて、土佐系で固めてゐる三菱の重要人物にならうとしてゐるんですから、あなたの叔父樣は……』

『さうでせうかしら……』

『僕なども長州系だつたら、今頃何處かの公使ぐらゐにはなつてゐるかも知れない、はゝゝ、なにこれでも遠からず何とかなるでせうがね、はゝゝ……』

光江はまたはじまつたと思ひながら、うはの空で聞いてゐた。長州系とか幕臣系とか、薩摩系とか、榮進昇達とか、そんな話をするのがこの男の道樂らしい。

カドリールが終ると、次はヴルス、例のヨハン・シユトラウス作曲『美しく靑きドナウ』が、幕を引きめぐらされた次の間から、雄大なドナウの流れを想はせる旋律で奏でられはじめた。

金親が慇懃に會釋をして手をさしのべた時、人々を押しのけるやうにして、見上げるばかりの外國人が光江の前へたゝずんだ。

『お願ひ出來ませんか？』

肖像畫で見るリンコルンを肥らせて野卑にしたやうな顏を、愛嬌笑ひにくづして流暢な日本語だつた。

『ごめんください、お約束がございますから。』

光江はあわてゝ金親へ身を投げかけた。

『では、次のヴルスお願ひいたします。』

外國人はヂロリと金親をながめ、一禮して引き下つた。

外國人でなければ夜の日もあけないといふ當世、光江が外國人嫌ひなのは、多少彼女に天邪鬼なところがあるからかも知れない。だが、何といはれてもあの異樣な體臭や、毛ぶかい肌は、想つてさへゾツとする代物なのだ。

『まづいことをする、斷わらなくつてもよかつたのに……』

金親が急に激しい狼狽を見せて、表情を硬直させた。

『どうしてゞすの？　ヴルスは殘らずあたくしと踊つて下さるお約束でせう。』

理由はわからないながらも、金親の狼狽が光江には小氣味のいゝ觀物だつた。わざと空恍けていふと、金親は仕方なく苦笑して、ぎごちないステップを踏みはじめ、

『あれはヘンリイ・ウォーレスといつて、英國の有名な財團を代表する男ですよ。今度はまア個人で觀光に來てゐるんですが、いはゞ國賓級の人物ですよ……』

その時、胸に紅白のリボンをつけた接待員の、せか〳〵と近づいてくるのが見えた。

『金親さん、ちよつと……』

接待員は金親の耳もとへ口をよせ、何か二言三言さゝやいた。

『閣下が？　僕に？　……』

金親は思はず聲を高くして、みはつた眼を光江へもどし、

『ちよつと失禮します。』

といひのこして、あたふたと廣間の方へ人をかきわけて行く。

光江はしかたなく窓際の椅子へ腰をおろした。ふと、ドッシリと重く垂れたカーテンを指先でのけると、おびたゞしい雨滴の這つてゐる玻璃窓があつた。

すぐ目の前の庭先の樹立の中で、灯をともすつもりだつたらしい紅提灯が、みじめに雨脚にたゝかれてゐる。

あの方濡れなかつたかしら？　……

光江はまたしてもさつきの青年のことを思ひ出した。此處とはまつたくべつの世界のことのやうに想はれる。

ヴルスの次がポルカ、そしてまたヴルス。

『ヤア、どうも失禮……』

金親がなめらかな頬を上氣させて立つてゐた。

光江が機械的に立ちあがると、

『光江さん、今夜はあなたとヴルスを踊る約束を撤回します。そのかはりさつきのウォーレス氏とお踊りなさい。』

『厭ですわ、あたくし……』

『え？　どうしてゞす。』

反射的に強くいひきられて、金親は輕い狼狽を見せた。

『あたくし、あなたとお約束したんですもの、あなたはあたくしに恥をおかゝせになるおつもり？　……』

『いや、決して……』

その時、こつちへ巨體を運んでくるウォーレスを、視野の隅にみとめたらしく、急に早口に聲をひそめて、

『實は、ある大官が、あなたに是非ウォーレス氏の機嫌をとつてもらひたいといふんです。ウォーレス氏は英國政界に非常な勢力を持つてゐる人物です。ま、くはしいことはあとで……大官のお聲がかりですから。どうぞ……』

金親は胸のところでをがむ眞似をすると、いそいで身を引いた。それと入れかはりに、光江の前へ慇懃に腰を曲げたのはヘンリイ・ウォーレスだつた。

三

『あたくし、少し休ませていたゞきたいんですけど……』

言葉が不自由なせゐか、あまり相手がものをいはないのは幸ひだつたが、何かの拍子にリンコルン風の髭のある頰を押しつけられたりして、光江は三四囘たてつゞけに踊ると眩暈がしてきた。

『つかれましたか？ では、食堂まゐりませう。』

ウォーレスは返事も待たずに、彼女を抱きかゝへるやうにして舞踊室を出た。

その邊に立つたり、掛けたり、あるきまはつたりしながら、絶えず輕妙な愉快な話題をふりまいてゐる人々――外國使臣も、政府大官連も、紳商學者達も、ウォーレスの姿を見るといそいで道をひらき、何か愛想のいゝ言葉を投げかけたし、婦人連は驚きと羨望と嫉妬のまじつた眸で、たいして豪華でもないたゞ可憐なだけの、またそれだけにかへつて人目をひく光江を、見むかへ見おくつた。

ウォーレスは傲慢に見えるほど氣むづかしい顏をして、それらの人人にはろく〳〵挨拶もせず、光江を立食堂へみちびいて行つた。

『あなたなに好きですか？』

立食堂の横長い卓の上には、さま〴〵な美しい色どりで、輕い食物や飮物が並んでゐる。

喉のかわいてゐる光江が、氷菓の塔の前に立ちどまると、ウォーレスは巨軀に似合はぬ敏捷さで、クリーム色の塔を一と匙彼女の器へくづしてくれた。

光江にはかへつてそれが氣づまりになつて、折角の氷菓も味がなかつた。何とかしてウォーレスの手から逃れたいと思つてゐる矢先、ふいに眼に入つたのは、二三人の婦人達と食堂へあゆみ入つてきた金親の姿だ。

『ごめんください。』

口の中でいつて、そゝくさと食卓をはなれようとすると、

『お待ちなさい、お孃さん……』

ウォーレスの手がしづかに肱を捕へて、大まかな微笑をうかべながら、

『あの方、あなたの愛人ですか？』

『否！ 否！』

光江は思はずはげしく首をふつた。

『さう、それならわたくしと一しよでもよろしい。あちらへ行つてみませう。』

反抗のしやうがなかつた。金親へ救ひを求めようとしたが、いつも自分のそばをはなれない彼が、今夜はわざとらしく視線もむけずに談笑してゐる。

晝間なら庭のむかふに東京灣の見晴せる緣先へ出ると、雨夜の外氣の冷たさに、たゞ雪洞の灯影だけがいたづらに明るい。

『お孃さん、わたくしあなた大變美しいと思ひます。』

ウォーレスはいきなり兩の掌に、光江の小さな手を握りしめた。

光江はギヨツとすくんで、はじめてウォーレスの顏をまともにふりあふいだ。

『わたくし、お國の人みんな厭ひです、男も女も……みんな卑屈です。しかしあなたは好きです。』

『………』

『あなたには政治ありません、政略ありません、わたくしさう思ひます、私の可愛い小鳩！……』

怖しいほど落ちくぼんだ眼、鷲の嘴のやうな鉤鼻、髭に覆はれた赤い肌――到底光江の常識の中にある人間とは思へぬ顔が、クシヤ〳〵に笑みゆがんで、

『わたくししばらく日本にゐます。その間、わたくしのお友達になつてください。あなたの叔父様わたくしよく知つてゐます。』

光江は怖しさに聲をたてさうになるのを、ヂッと歯を食ひしばつてこらへてゐたが、ウオーレスが握りしめた手へ唇をつけようとかゞみこむと『いやですッ、はなして！……』

夢中でふりもぎつたのと、走りだしたのと同時だつた。

呆氣にとられた男や女の顔が、目の前に幾つとなく現れては消え、何人ともない人にぶつかりながら、それでもやうやく光江は玄關へ走り出てゐた。

はげしい雨脚に打たれて我にかへつてみると、見おぼえのあるわが家の馬車が、車寄からはみだした門際にすぐ眼についた。

『お嬢様！ お嬢様！……』

玄關わきの控部屋から、うろたへて追つてきた馭者の聲に、

『歸るのよ！ いそいで頂戴！』

『へッ、でもそのお姿では……お帽子も、お外套も……』

『いゝから早くしてつたら！』

光江は今までの不快をぶちまけるやうに叫んで、自分から小走りに馬車へ駈けよつた。

が、扉の把手をひいて、踏板へ足をかけようとした時だつた。

『あッ！』

身も凍る想ひのしたのは、座席の上へムク〳〵と起きあがつた黒い人影があつたからだ。

『やア！』

相手も叫んだが、聲には何處か聞きおぼえがあつた。

と、何も知らずに向ふ側へまはつた馭者が掲げた玻璃燈の灯影が、その姿形をおぼろに浮きあがらせた。鳴濱次郎だつた。

『まア！』

光江はもう一度、今度は驚きの中にも安堵を混へた聲で叫んだが、その時、玄關から誰かの走り出てくる氣配に、思はず追ひ立てられるやうに鳴濱の横へ乘りこんでしまつた。

『爺や、早く！ 早く！』

笞が鳴つた。車體が大きく一と搖れすると、鐵輪が癇癪を起したやうに小砂利を嚙みはじめた。

本會獨特の通信教授により三ヶ月で上達す
秘傳公開
尺八

京都市大宮三條北七
大日本尺八音樂會
內容說明書
無代進呈
見よい吹きよい評判五錢音譜
紀元二千六百年　出征兵士を送る　太平洋行進曲　日の丸行進曲　君ケ代三重奏　夕日は落ちて　鹿兒島小原節　愛國行進曲　大陸行進曲　愛馬進軍歌　赤城の子守唄　軍國の子守唄　美しき天然　上海だより　佐渡おけさ
關の五本松　二上り新内　五段くづし　草津かへし　日本陸軍　進軍の歌　露營の歌　祇園小唄　荒城の月　櫻井の驛　大阪音頭　男の純情　御詠歌　安來節　父よあなたは强かつた
博多節　滿洲娘　島の娘　螢の光　小原節　草津節　鎗さび　奴さん　木曾節　串本節　春雨　詩吟　深川　靑柳
（他に色々あり・音譜目錄進呈）
◎どれでも一曲五錢均一・送料五錢（送料として五錢添附の事）
◎御注文は必ず前金で振替口座大阪四一二三七番へお拂込の事
◎切手代用一割增・十曲以上御買上の方に輕便音譜挾み進呈す

人影はもう窓のところへきてゐた。何か叫びながら外から扉を開かうとする。それが金親多門なのだ。

『爺や、構はないから早く！』

光江は夢中で把手を押へながら叫び立てた。

馬車は振り落すやうに金親の姿を後へ殘し、木立の間を拔けて橋へかゝつてゐた。

鳴濱がいきなりきいた。

『今のは誰です。』

濕つた座席の空氣に、海の香が匂つてきた。

もう大丈夫だ、馬車は掘割を左に見て、お濱の海岸通を快適に走つてゐる……光江はグッタリと氣拔けした氣持だつた。

『いゝんです、なんでもないんです。』

鳴濱はそれを追及する前に、急に我に返つた樣子で、

『いかん、僕は困る、僕はあなたの叔父さんに會はなきやならんのだ……』

『いゝえ、あの、叔父はまだですもの。』

光江は鳴濱に去られることが、譯もなく不安になつて、しつかりとその袂をおさへたが、

『まア、ぐつしより……』

『あんまり濡れるんで、あなたの馬車の中をちよつと拜借してゐたんですよ。そのうちつい寢こんでしまつたんですがね……』

光江は知らぬ間に微笑んでゐた。なんといふ呑氣な、大膽不敵な人だらう！ ……

『さういへば、あなたも濡れてるぢやないですか、夜會はまだ終りぢやないんでせう』

『えゝ、まだですけど……』

『そりやいかん、僕はやつぱり和泉さんを待ちます。』

『あら、よろしいぢやありませんか、宅でお待ち遊ばせな、そのうち戻りますわ。』

自分ながらハッとするほど、馴れ／＼しい調子になつてゐる。鳴濱はそれへ親愛の情で應へるやうに、白い齒を見せて笑ふと、

『お宅へも勿論またうかゞひます。』

と彼女の手を輕く引き離し、扉の把手を押すと見る間に、闇の中へ身を躍らせた。

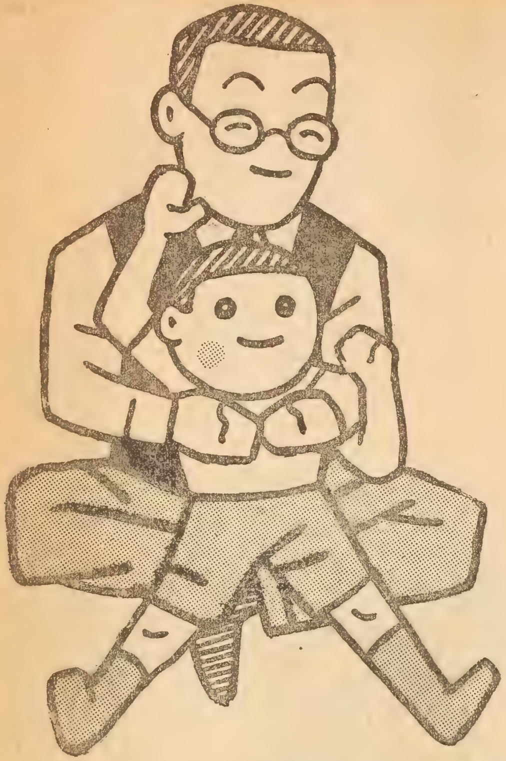
『あッ……』

光江はその離れ業に膽を冷し、と同時に心の一部を、ふいに持ち去られたやうな淋しさに襲はれて、後の窓をふりかへつて見た。

が、闇は若者の姿を何處へ呑み込んだのか、玻璃の上を這ひ落ちる雫が金剛石のやうに映え、濱御殿のあたりに木立越しの延遼館の灯影が瞬いてゐるばかりだつた。

（つゞく）

豪放磊落な鳴濱次郎、輕薄卑屈な金親多門――めまぐるしい時代の變移は、同じ拔刀警視隊員であつた二人をかくもはつきりと變へてしまつた！ 世を擧げて滔々たる歐米心酔の嵐の中に、二人は如何なる道を辿つて行くか？ 一方宿命の娘光江は、自分の兄を斬つた男とも知らず鳴濱次郎に好意を寄せんとする？ 雄大な構想の下に絢爛と繰り展げられる愛國の熱血篇！ 切に御期待下さい!!



毎日二球で
ハリキリ坊や

日影の草の様にヒョロ〳〵してゐて、始終風邪をひいたり、お腹をこわす子供さんを丈夫にする事は國家の爲にも大切です。
子供さんの弱い原因は大抵體にビタミンAとDが不足してゐる爲ですから、本劑の純粹ビタミンAとDを毎日二球飽きずに服ませてゐると、見違へるばかりに丈夫で元氣な子供さんになつて來ます。

一月量　二圓
三月量　五圓半
六月量　十圓

理研ビタミン球

總代理店　株式會社　玉置商店

日本勤勞の歌

財團法人 勤勞者教育中央會撰定

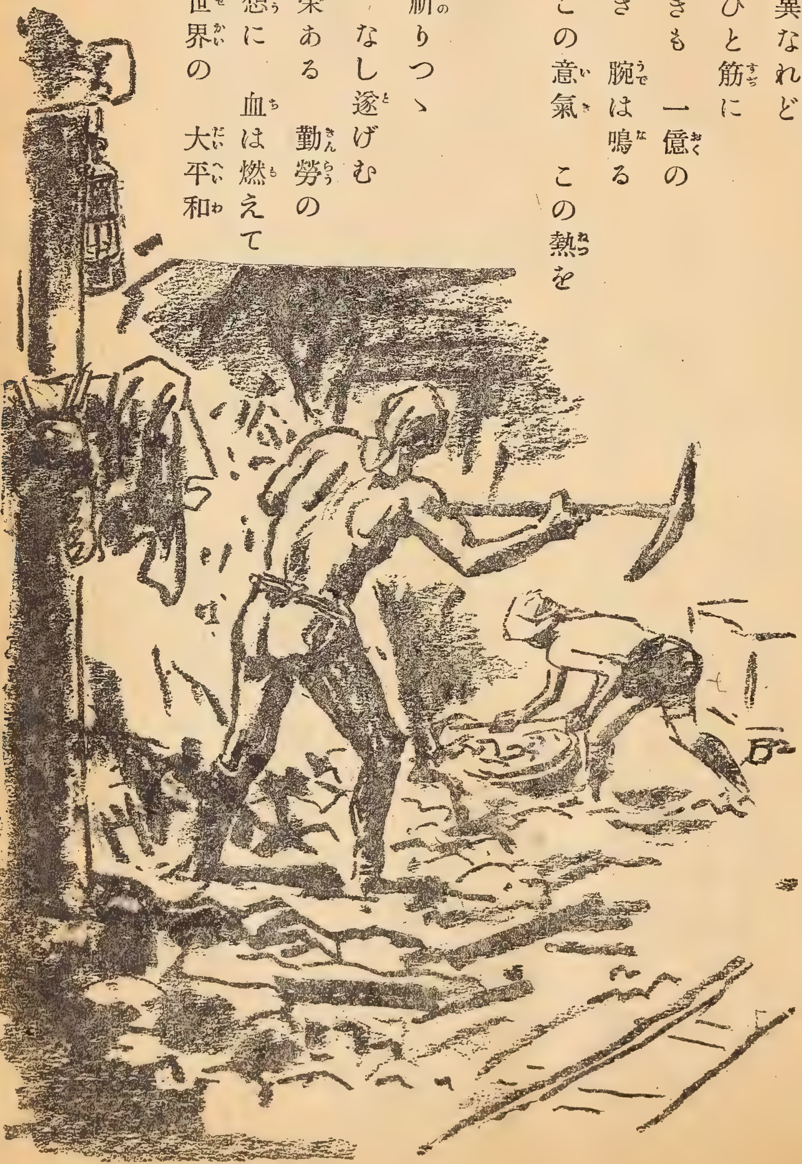
一、
御稜威あまねき　大御代に
清く正しく　生ひ立ちし
御民我等が　感激の
この一鍬に　一鎚に
こもれ興亞の　大使命

二、
朝日輝く　大空に
高く揭ぐる　旗の下
今日も明るく　朗らかに
いざ肇國の　精神を
生かせ我等が　勤勞に

三、勵む勤は　異なれど
同じ心の　ひと筋に
老も若きも　一億の
胸は轟き　腕は鳴る
見よやこの意氣　この熱を

四、國の彌榮　祈りつゝ
曠古の聖業　なし遂げむ
希望光榮ある　勤勞の
高き理想に　血は燃えて
樹てよ世界の　大平和

（右の歌はキングレコード（四七〇三七）に吹込まれました）



齋藤五百枝畫

ぜいたくは國家の敵！

質實剛健な新しい國民生活を打ち建てませう

『多くの國は奢侈の病床にて息を引取れり』

私共が歴史から學ぶ最大の教訓はこれであります。宋を亡ぼしたものは蒙古族ではなくて、宋國內を腐敗させてゐた奢侈安逸の生活でありました。大ローマ帝國を瓦解させたのも、かつての質實剛健なローマ人を柔弱な國民に墮落させてゐた貪婪贅澤の生活でありました。近き例は佛蘭西をごらんなさい。獨逸軍が迫りつゝあるのに巴里の婦人達は脂粉の粧ひに憂身を窶してゐたといふではありませんか。

國策完遂に

奢侈は實に國家の最も恐るべき敵であります。

それは國民の精神を墮落させるからであります。人は何故贅澤がしたくなるのでせうか。心の大切なことを忘れると、德によつて己を高めることもせず、住居や衣裳や食物やその他豪華な外物の力を借りて己を他に誇示したくなるのであります。心の貴さを忘れさせるこの奢侈生活は、柔弱、感傷癖、無信仰、無信念、不道德等一切の所謂文明病の溫床であります。

奢侈の黴菌は非常な傳染力を有つてゐます。

一人が贅澤をすると、多くの人々が之を眞似するやうになり文明病は次第に都會から田園に進んで、土に生きる者の剛健な精神をも蝕まうとするのであります。戰線の勇士が最も心を勞することは何でありませう。それは銃後の一部にでもこの文明病がありはしないか、華美な服裝の裏に不眞面目な精神が宿つてはゐないかといふことであります。

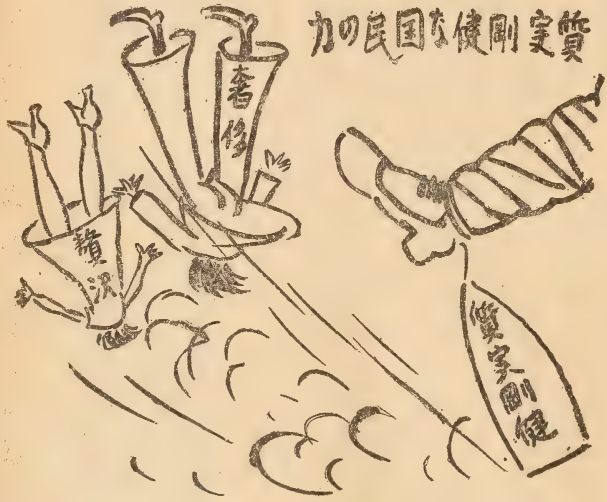
銃後の緊張ほど戰線を鼓舞するものはなく、銃後の不眞面目ほど戰線を沮喪させるものはありません。

不眞面目な精神は贅澤生活から生れるのであります。銃後の奢侈生活は內臟に巣喰ふ病魔のやうなもので、知らず識らずの內に國民の戰ふ氣力を奪つてゆきます。實に怖るべきはこの內なる敵であります。

協力しませう

昔から、物質よりも精神を尊んで來た我等日本國民は、贅澤を罪惡視するの氣風をかつて失つたことがありませんでした。私共大部分の國民の衣食住は、他の文明國に比べれば遙かに質素儉約でありました。そして質實剛健な精神が、我國を今日の如く强大にして來たのであります。然るに國家の興隆は一方に於て、國民生活を物質的に向上させ、動もすると質素儉約の精神から遊離させようとしたのみか、奢侈贅澤の風をさへ生ぜしめたのであります。支那事變は正に天與の啓示でありました。國民は直ちに傳統の精神をよく自覺して、この國民性に反した風潮はだん〳〵抑制されて參りましたが、未だ習慣の餘勢が殘つてをります。

私共は今この習慣の餘勢を一思ひに拂ひ棄てゝ、純粹な質素儉約の生活に入らねばならない。



それによつて質實剛健の精神を一層高め、我が日本を更に更に强くしなければならないのです。四隣をごらんなさい。我に敵性を抱く諸國はいづれも虎視眈々我をねらつてゐます。我が日本は、彼等よりも常に數倍の力を備へてゆかなければ、とても新東亞を建設することは出來ません。それでなければ東亞の盟主として東洋の平和を永遠に維持してゆくことが出來ないのであります。

茲に於て、政府は去る七月七日、支那事變三周年記念日に**奢侈品製造販賣の禁止令**を發しました。今日は贅澤をしないといふだけでなく、進んで純粹の簡素生活に入らねばならないのであります。

私共は知らず識らずのうちに簡素儉約の生活から幾分でも離れてはゐなかつたでせうか。

ある程度の贅澤は贅澤とも思はない習慣になつてはゐないでせうか。

强大な日本の基を築いた我等の祖先ほど、質實剛健な生活を

してゐるでせうか。

今歐洲に新秩序を建設しつゝある國の國民ほど、質素な生活に堪へてゐるでせうか。彼等に劣るやうなことがあつてはならない。何故なら、簡素倹約の生活に堪へる度合は、精神の健全の度合を意味するからであります。

現在禁止品であると否とに拘はらず、實用以上に高價な物や差當つて生活に必要のない品物は買はぬやうに致しませう。

さうすれば左樣な贅澤品や不急品不要品を製造してゐる人々は、その勞力を生活必需品や軍需品の製造に向けることができます。今日は勞力や物資がいくらあつても足りない時であります。無駄な品物を製るために貴重な人手や物資を使つてゐる時ではありません。飾り品や不急品不要品を買はなければ、私共は自然貯金が出來ます。國債が買へます。貯金や國債は經濟的に國家を强めることになります。奢侈品を買はぬことは勿論、たとへ持つて居るのだからと云つても贅澤品を使用することは止めませう。飾り品によつて獨り味はふ樂しみは低く小さく、自分は國家に協力してゐるのだ、國家と共に進んでゐるのだといふ自覺から生れる悦びは高く大きいのであります。

時勢は變つてゐます。派手でなくなりました。すべてが地味になつて來ました。私共はお互ひにこの質實になりつゝある時勢の伸びやかさ、心地よさを感じ始めました。人の心を物質の奴隷にしようとするところの虚飾から離れつゝあるからであります。例へば、今日は大きな繼の當つた服やシャツを着て人前に出ることを、自らも氣にかけず、人もなんとも思はないやうになつてゐます。寧ろそれが人の手本になるのであります。

私共は虚飾のために勞する必要のなくなつた心の餘力を、精神の向上に、知識の蓄積に、技能の錬磨に、肉體の鍛錬に、その他種々の有益なことに振向けていきませう。これが新時代の生活であります。七月七日の奢侈禁止令は國民を擧つてこの新しい生活に入らしむる重大な警鐘であります。

警鐘は打ち鳴らされてゐます。私共は一擧に舊い習慣の惰性から離脱して、この新しい明るい然かも剛健な生活に突入しませう。伸びゆく民族は常に新しい良い生活に向つて飛躍しなければならないのであります。私共は衣裳によつて人柄が判斷されるやうなことのない社會を作りませう。町に村に山に里に、質實剛健の氣を漲らせませう。それによつて日本をいよ〳〵强大にしませう。**偉大なる國家は質實剛健な國民の力によつて築かれ、維持され、發展させられるのであります。**

大日本雄辯會講談社

冨士編輯局

巨匠武者小路實篤先生力作
一讀心魂に徹する七大傳記

楠木正成

『これは歴史ではないのだからごたごたした事件はなるべく避けたそして正成の精神、人格を出來るだけ如實に書いた』と著者は曰ふ。眞に人間正成の生命が脈打つ、力作中の力作である。

價1.50 〒内.14 他.15

西郷隆盛

著者は大西郷の眞面目を描出しようとして、燃ゆるが如き文學魂を以て、この巨人と四つに組んだ。五十一歳城山に悲劇の最期を遂げる迄、その全生涯を描いて流石に人間西郷の面目は全卷に躍動し、讀者の肺腑を衝く。

價1.80 〒内.14 他.15

二宮尊徳

尊徳の本は隨分多い。しかし之程親しみを以て讀める本は少ないであらう。この本は徒らに尊徳を神樣扱ひにせず、人間尊徳の本當の偉さをしみ〴〵と感じさせ、本氣になつて生きることを敎へる本。

價1.30 〒内.09 他.09

大石良雄

『彼は奧床しい、實力のあつた、意志の強い男の中の男で、自分は、復讐しかたの中に表はれた彼の人間性を愛する』といふ著者は特に大石の心情を尊重し、元祿快擧を繞る彼を至情熱を傾けて描破した

價1.50 〒内.10 他.12

一休・曾呂利・良寛

深刻な人生を洒脫な法衣に包んだ一休。滑稽諧謔の中に處世人情の機微を暗示した曾呂利。純眞、恬淡大愚に徹し、人生に悟入した良寛。虛僞を排し眞實に生きた三人を描いて大きな示唆を與ふ快著。

價1.50 〒内.10 他.12

トルストイ

幾多の傑れた文學作品を殘し、又大思想家として今に魂の父と敬慕される哲人文豪大トルストイの劇的八十餘年の生涯は彼に私淑せる先生の情熱こめた筆によつて、この書に遺憾なく描出された。杜翁傳中の最も傑れたものの一つ。

價1.50 〒内.14 他.18

釋迦

これは生硬な、聖人釋尊の傳記ではない。人類の至寶である佛陀の人物を——吾々と同じ人間として苦しみ惱んだ人間釋迦を、むづかし過ぎたり、簡單すぎたり、子供じみたりしないで本當に親しみを以て讀めるやうに苦心した名著であつて、それだけに一字一句に生命が躍り、その偉大な誕生から輝かしい晩年に至るまで、宛ら生ける釋尊に接する思ひがある。

價一・五〇 〒内・一四 他・一五

◎東京小石川 大日本雄辯會講談社・版 (振替東京三九三〇)

挺身第五列

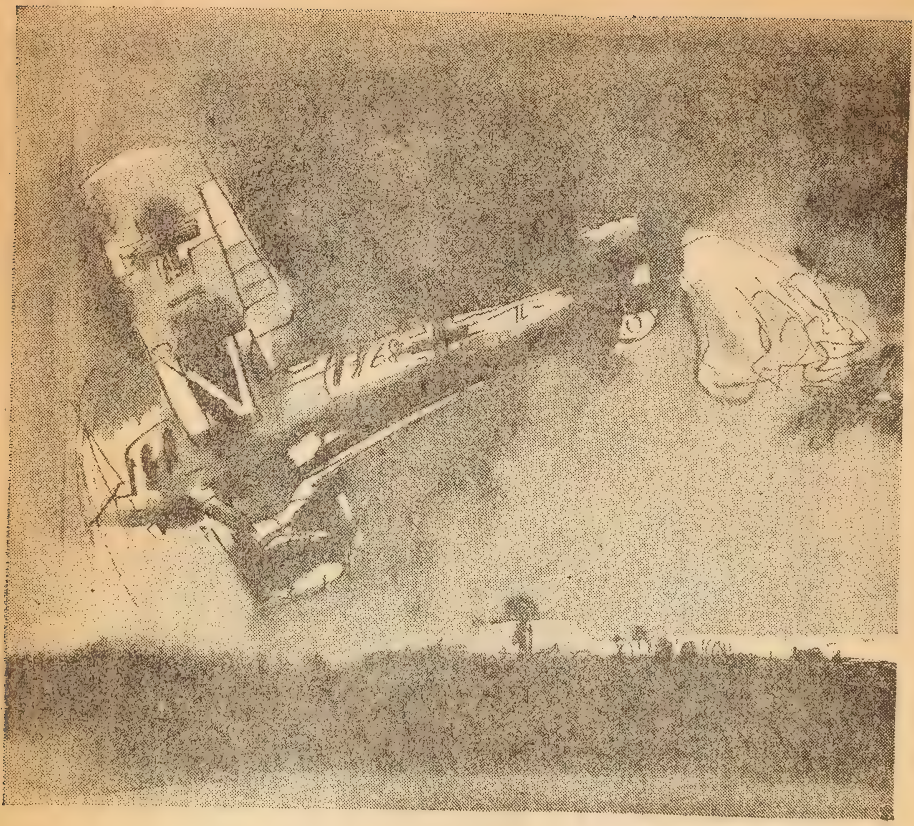
北村小松
松野一夫畫

世界に誇る獨逸の科學戰術と、第五列の正體とが、こゝに餘すところなく曝露された。……これこそ魂と科學の織りなす恐るべき近代戰の橫顏である。

何が彼をさうさせたか？

英國空軍のブラウン大尉は、その夕方、敵、獨逸諜報機關と連繫のある嫌疑をうけて銃殺に處せられる所であつた。

ブラウン大尉は、その前夜で、飛行基地警備の週番が終る筈で、今朝の八時まで何事もなければ、ゆつくりと背のびをして、熱いコーヒーでも飲めた所



であらう。——所が、もう三時間半で、自分の重任が終る、と云ふ所で、飛んでもない事件が突發したのだ。

その出來事のために、狂氣の樣になつたまゝ、ブラウン大尉は、司令部へもつて行かれ、いかなる辯解もとり上げられず『銃殺』と決つてしまつたのであつた。

所が、どう云ふものか、ブラウン大尉が、死人同樣な顏色で、目かくしをされたまゝ、刑場に立たされた時も時、司令部から一臺のオートバイが飛んで來て、ブラウン大尉の刑を一等減じる旨の通達が、とゞいたのである。

ブラウン大尉は、まるで何が何やら分らなかつたが、命が助かつた、と思つたとたんから氣が遠くなつたと同時に、少し精神の方が妙になり、今度はそのまゝ病院送りとなつてしまつたのだ。

一體全體、何が、ブラウン大尉を精神異狀者にしてしまつたのか。——それには、獨逸軍が電撃的にベルギーに進出する直前の一つの興味深い話がからまつてゐるのだが、まあお聞き下さい。

夜間寫眞偵察機

高射砲の閃々ときらめく彈幕の中を、ぐつと操縱桿を握つたまゝ突破しつゝあるドイツ空軍の若い中尉、ハンス・ロイエンベルグの顏には、流石に汗がにじんでゐた。

暗夜、六千米の高空を飛んでゐる中尉は、考へて見れば、汗などかきさうにはない。六千米の高空は、顏を出してゐれば、吐息まで凍りさうな低氣溫の筈なのである。だが、密閉した座席の中にゐて、電熱の通つた飛行服をつけ、酸素を吸入してゐる中尉は、呼吸も苦しくはなければ、冷寒も感じてはゐない。だが、あまりにもはげしく周圍に炸裂する敵の高射砲彈のために、心理的に、こんな風に脂汗がにじむのであらう。

幸な事にはスロツトルをしぼり爆音を消しながら高度を下げたので、まだ敵の探照燈の光芒の中に捕へられない事だ。青白いその光芒が、時々自分の機の通つて來たコースの中で、炸裂してしまつた高射砲彈の綿の樣な煙を、白々と捕へてゐるばかり……

『どうだね、調子は……』

敵の探照燈の光芒が、まるで見當ちがひの方向を求め出すと、ロイエンベルグ中尉は、傳聲管で、かう云ひながら、寫眞偵察者のベルケ中尉を見かへつた。

『大丈夫、ドンドン撃つて呉れるんで、高射砲陣地は細大もらさずつかまへてしまつた！』

ロイエンベルグ中尉の耳にベルケ中尉の笑ひ聲が響いて來た。

『だが、一體、こゝは、どのあたりなのかね？』

『オスタンドと、ブリユージユの間だよ、もうやがてブリユージユだらう！』

『おやッ！　又始まつたぜ！』

ベルケ中尉は、透明な天蓋から暗い大空を見上げながら云つた。

『五百米も上を撃つてるぜ！』

『うむ！』

見上げると、暗夜を飛行してゐる、この寫眞偵察機の上空に、花火の樣な高射砲の彈幕が張られ始めてゐる。

ロイエンベルグ中尉は、更にスロツトルをしぼつて少しづつ方向を變へた。

所が、そこで、二人の坐乘してゐる飛行機は、下からではなしに、上方から思ひがけない打撃をかうむつたのだつた。——炸裂した高射砲彈の破片が落下して來て、飛行機の機首をぶちぬいてしまつたのである。

螢火の樣に青白い微光を見せてゐた夜光計器をつけてゐる計器板の一部が飛び散つて氷の樣に冷い空氣が突入して來た。そればかりでない。今まで轟々とした音響に充ちてゐた周圍が、急に、しーんと靜りかへつたのだ。

とりもなほさず、發動機が回轉を止めてしまつたのである。

ロイエンベルグ中尉は、とつさにスロットルを調整して始動機のスヰッチを押た。――だが、發動機はプスンとも云はない。――計器板の上に殘つてゐる電流計を見ると、それはすでに生命を失つてしまつてゐる。して見ると、飛行機を直接擊墜せしめるほどの力のない筈の片彈ではあるが、發動機にとつては生命である點火系統を破壞してしまつたに相違ない。

發動機が停止してしまふと、上空の靜けさの中に聞こえるのはつゞけ樣に打ち上げられる高射砲彈の炸裂する音だ。

『おい、飛び下りるんだ！』

飛行機を滑空させながら、ロイエンベルグ中尉が、ベルケ中尉の方に叫んだ。

『飛び下りてブリユージユの街に潜入しよう、……フイルムをとり出してポケツトへ納ひ給へ！　一緒に飛び出すんだ、いゝかい。機體放棄の準備をするぞ！　……飛行機をこのまゝ滑空させて、接地する前に自爆する樣に、時限爆彈のスヰッチを入れるぞ！』

『了解!!』

ベルケ中尉が答へた。

『フイルムは大丈夫だ。高度は？』

『四千五百……さア！　出給へ！』

『よしッ！』

ベルケ中尉は、天蓋を押しあけて座席を立つた。

ロイエンベルグ中尉は時限爆彈の安全機を外しガソリンパイプのコックをゆるめて、座席内にガソリンを流出させた。爆彈が爆發すると同時に機體が火災を起す樣にするためである。

それがすむと、二人は、座席から、ぬけ出して翼の上に足をつけた。

『協同落下だぜ！』

『よし……』

『一、二、三ッ！』

自爆する愛機

氷の樣な冷い空氣の激流が、――今まで訓練を受けた協同落下を實際に實行しつゝある二人の體を包んだ。

『一、二……一、二……一、二……』

ロイエンベルグ中尉が鋭い聲で時間を數へる。……日本ならば『一、二、三ツ。』で落下傘の曳索鐶を引くのだが……。同じ樣に一、二を三つ數へた所で二人は同時に、曳索鐶を引いた。

小さな補助傘が暗の空にスラスラ……と消え、その後から綿の樣に主傘が暗の底に伸びて行つたと思ふと、バーン、と云ふ樣な音をたて、二人の體は空間に、もんどりうつて吊り下つた。

相當の衝擊だつたが、二人は安全に、而も協同で並びながら空中を未知の方向に向つて移動しつゝあるのを意識した。

『……あの探照燈が、俺達を捕へたら、それで本當の「お休み

なさい」になるな。』

ベルケ中尉が、傍に浮んでるロイエンベルグ中尉の束帶をしつかりと片手で摑みながら喉の中で笑つた。

『大丈夫だよ、奴つこさん達、やたらと高い所ばかり探してるるからな……』

空間を流れながら見上げると、靑白い探照燈の光芒がはるか高い空に、いそがしく交錯しては又、音もなくその方向を移動しつゝある。

『だが……もうぢき接地する……大聲で話す方が探照燈より怖いぜ！』

『うむ……しばらく無言の行か……』

二人は、それつ切りだまり込んだ。たゞ、自分達の耳を、激流の樣にかすめて行く空氣の音を聞いた。

二人は、やがて、黑々とした大地が夜の目にもせり上つて來るのを見た。……だが、自分達が、どれだけの高度にゐるかをたしかめる事は困難だつた。たゞ、もし樹木でも見えた時の用意に手をのばして吊綱を摑んだ。

だが、心配した樹木はなかつた。幸運な事に二人は、障碍物のない敵地の平地に接地したのだつた。

少しばかり引きずられて、やうやく落下傘を地べたにへばりつかせると、あたりは、しいんと靜まりかへつてゐる。

『しめた！』

ロイエンベルグ中尉が、やがて、自分の傍に忍び寄つて來たベルケ中尉にさゝやいた。

『幸運だつたぞ！　さ、この次は、こいツをどう仕末するかだ……』

云ひながら、ロイエンベルグ中尉は、もう手早く、自分の落下傘をたゝみ始めてゐる。

『どつちにしろ消滅させてしまひたいな。』

ベルケ中尉も手早くロイエンベルグ中尉と同じ動作を始めた。

突然南方にあたつて、すさまじい閃光が見え、そのあかりが、黑々と地平線の伏起を示すのを二人は見た。――次に來たものは、その閃光が發した炸裂音の渡つて來る震動だつた。

『あゝ……愛機の最期だ！　……あすこまであれは滑空して行つてしまつたんだ！』

ロイエンベルグ中尉は、急に不動の姿勢をとると、今まで自分達をのせて敵地に潛入してゐた愛機の、最期の方向に向つて擧手の敬禮をした。

ベルケ中尉も同じだつた。

『さア、これで、この近邊の警戒員は、皆あつちへ向つて馳け出して行くのだ！』

ロイエンベルグ中尉は苦笑した。

『この半哩四方はガラ空きになる。その上奴等はあの飛行機の

搭乗員は、機と共に粉々になつたと信じるんだ。――さア行かう……右手が線路だ。ブリユージユまで半哩そこそこの地點だぜ！』

『君は、どうしてそんな事が分る？』

ベルケ中尉は目を丸くして、スタスタと歩き出したロイエンベルグ中尉の後を追ひながらさゝやいた。

『君は、この土地をよく知つてるのかい？』

『この地形を熟知してゐればこそ、僕は今夜の特殊撮影飛行の操縦者に選ばれたのさ……向ふの線路傍の小屋の裏に古井戸がある筈だ。落下傘や飛行服は、一塊の石と共にあの古井戸の底に埋れる事になるんだ！』

ベルケ中尉は、たゞ啞然とした様に、かう云ひながらこの敵地の夜を、自分の生れ故郷の土地でも行く様に歩くロイエンベルグ中尉のさしづに自分の運命をまかせた。

『然し、これが夜間だつたからよかつたのさ、晝間だつたら、接地するまで生きて居られなかつたかも知れないぜ、對空看視員や巡邏兵や、防諜員が、かうやつて我々を歩かせておいちや呉れないからな！』

『…………』

ベルケ中尉は、無言のまゝうなづきながら自分達が今、どんな立場で、どう云ふ所を歩いてゐるか、と云ふ事を、夢の中で不思議な土地を歩く様な感じで、くりかへしくりかへし思つて

四百有餘の醫學博士諸先生の御推奬賜る
胃腸病・胃潰瘍・胃擴張に
森田醫學博士發見 大病醫院採用の理想的榮養食餌 專賣特許テルニ

胃潰瘍、胃擴張、慢性胃腸病など食物が攝りにくい病人方に始めて理想的食餌が惠まれた。森田醫學博士發見の完全榮養食物、專賣特許『粉末テルニ』こそそれです。どれほど胃腸が惡うても何の障りなく易々收まつてしまひ胃腸に十分の休養と保護を與へて最も合理的に損傷を取戻し、而も完全な榮養を補給して見ん事！胃腸も體も強くする驚くべき食養効果は醫界の最新學說『完全榮養食物で胃潰瘍胃擴張は治る』にピツタリ合致するものです。

定價十食分一圓廿錢五十食分五圓送料內地十錢其他四十二錢、講談社代理部（振替東京六六二九番）及び各藥店に販賣、本舗大阪市西區京町堀通二丁目 笹屋商店（振替大阪二二七番）

冊子 病氣の征服法 並に 試食品 本舗へお申越次第無料で進呈します

ゐるのだ。

五軒目の家

燈火管制をした街が目の前にあつた。

ロイエンベルグ中尉は大膽にも、その街の通りへはいつて行くのである。

どこを、どう歩いたか、ベルケ中尉には、皆目方角も何も分らなかつたが、ある横町をまがると、ロイエンベルグ中尉は、暗い、五軒目の家の戸口まで近づいて行つてその呼鈴のボタンを押した。

その家の入口の横手は黒々とした影の中でその影の中に立つてる二人の姿はどこからも見えない。

扉が靜にあいて女の聲がした。

『どなた？……御用ですの？』

ロイエンベルグ中尉は、影の中から忍び出て、ベルケ中尉の耳にはなじみの少いフレミツシユ語で答へた。

『クリスチン……僕だよ、ハンス・ロイエンベルグと友達だよ。』

言葉のない驚愕の間投詞が、女の唇からもれたのをベルケ中尉は聞いた。次の瞬間にはロイエンベルグ中尉の手が、ベルケ中尉の手をひつぱつて、暗い、戸口から、その家の中まで導き入れてゐたのだ。

美しい女だつた。どう見てもベルギーの女だ。――彼女は、その美しい瞳で、ロイエンベルグ中尉をのぞき込みながらその手をしつかりと握つてゐる。

『ハンス、ハンス！　神かけて……あなたは、こんな場所で何をしてゐるところなの？……分るわ……きつと、さつきから高射砲にねらはれてゐた飛行機に乘つてゐたのね。……下りたのね……だけど、なんて恐ろしい所へ下りて……そしてまア、ヒヨコヒヨコとこんな所まで來られたものねえ……防諜員が、どこにもかしこにもウロウロしてゐる中を……兵隊で一杯の街を……この街の者だつて、ウツカリ街の通りさへ恐ろしくて歩けないのに……まア……ヘルマンはゐないのよ。あの人は對空看視員ですもの……でも夜中すぎれば歸つて來るわ、下へ行つて待つてゐた方がいゝわね……』

かう云ひながらも、ベルケ中尉の方を見るクリスチンの目は、疑ひ深さうだつた。

ロイエンベルグ中尉は、何の説明も加へず、たゞベルケ中尉だ、と一言紹介した切りだつた。

クリスチンはうなづいた。

『あなた方の身柄を、どうすればいゝかつて事は御存知だわね……』

彼女は、さう云つて二人の中尉を室の奥の納戸の中に入れて扉を閉ぢてしまつた。

中は眞暗だつた。

ベルケ中尉は、一言も口を利く事が出來ない中に、今度は、自分達の立つてゐる納戸の床が、沈んで行く樣に感じ出した。

『下へ下りるんだよ……階段さ……』

ロイエンベルグ中尉が笑つた。

ベルケ中尉は、自分達ナチスの組織力が、どんな所まで行つてゐるか、と云ふ事を今更らの樣に思ひ返すだけだつた。ブダペストの、ダニューブ河のほとりにあつた大きな、アパートメントが、ドタン場へ來るとナチスの要塞だつた事……そしてそのアパートからダニューブの河へ地下道が出

來てゐた事を、世界が愕然と發見するまで、ナチス黨員だつた自分達ですら知らずにゐた事などをベルケ中尉は思ひ出さずにはゐられなかつた。

戰爭を遂行するためには、物の組織も、精神の組織もしつかりと鐵の様に出來上つてゐなければならない。その組織が壓倒的に敵地にまで伸びて行かなければ、近代戰の戰果は上らないであらう。

ベルケ中尉が、こんな感慨を抱く間に、床は沈み切り光のある狹い室が、自分達を包容してゐた。

二人が、その今まで立つてゐた床から、この別の床に下りると、床は、靜に上つて行つて、天井と化してしまつた。太い、頑丈な鐵の閂がその天井をピタリと下から止めてしまふ。

『さア……これでいゝんだ、しばらくの間は、こゝに罐づめの覺悟を決めて貰ふんだ！』

ロイエンベルグ中尉が笑つた。

『驚いた！』

ベルケ中尉が、沁々とした吐息と一緒に云つた。

『一體全體、これは何事が我々に起りつゝあると云ふわけなのかね？……一體全體君は何者なのかね？ ……君は操縦將校なのかね？ それとも第五列の一員なのかね？』

『何でもいゝ。たゞ君が、敵地で見た、今夜の事を、原隊に歸つても一言も洩らしてはならない事だけは、僕は積極的に云へる。原隊に歸つてからでも、もし君が、今夜の印象の一つでもを洩らしたら、それは善良な男女市民數名の命を吹き飛ばす事になる。と云ふ事だけは、はつきりと覺えておいて貰ひたい。……僕は子供の時代こゝで育つた。僕の父親は長らくこの土地に住んでゐた人物だ……僕は、父の代からこの土地に親しんでゐた男だ。――これで充分だらう！』

ロイエンベルグ中尉は、意味あり氣に、さう云つて笑ふのである。

『父は軍人でも諜報員でもなかつた。――父の知人達も同じだ。善良な、そして祖國と民族に忠實な商人だつたのさ！ それだけで充分なんだ。祖國の重大時機には、商業的な組織が、その組織の力を極度まで發揮すればそれでいゝんだよ。我々の精神は、ガッチリと一ッの理想と信念によつてすでに組織されてゐるのぢやないか！』

この市民

赤い、小さな電燈が天井で點滅した。

微かな物音が聞こえて天井の一方が下りて來る……

ベルケ中尉は、無言のまゝ不安げにそれを見つめてゐる。

天井から下りて來たのは、頭の頂から足の先まで、ベルギーの小市民である一人の柔和な中老人だつた。

『ハンス!!』

下りて來たその中老人は、さう云つて、ロイエンベルグ中尉の手をとつた。

『君の愛機は、美事に、街の南方へ自爆したな！』

『ヘルマンさん、この男はベルケ中尉！』

ロイエンベルグ中尉は、やはり、たゞ一言かう、ヘルマンに紹介した切りすぐ、自分達の放棄した飛行機について、どんな風な觀察がな

されてゐるかと云ふ事を尋ねたのだつた。

『低空に發動機を切つて襲撃して來たドイツ機を、直撃撃墜した、と報告された樣だ。彈丸は、その置備せる爆彈に命中、乘員、機體とも粉碎せり……とな……。……然し君の方の報告も承はらにアならん……』

『第一に、仕事がありますよ、ヘルマンさん！』

ロイエンベルグ中尉が云つた。

『ベルケ中尉は、赤外線寫眞のフイルムを携帶してをります。これを現像して、すぐにベルリンに送らなければなりません。』

『よろしい！ そのフイルムを頂いてすぐ現像しよう……私が、フイルムの操作をやつとる間に、君はベルリンに報告をしておいた方がよい。』

ヘルマンは、かう云つた切り、ベルケ中尉が、大切さうにポケットからとり出した重大な偵察フイルムを受けとると、この部屋から姿を消して行つてしまつた。

肺ろくまく
治療參考書無代贈呈
餘りお金を使はずに自宅で秘密に早く治す事が出來る大變有益な治療參考書を無代で差上ます
大阪市港區石田布屋町二ノ二 角田正直

すると今度は、ロイエンベルグ中尉は、狹い部屋の一隅においてあつた、キヤビネットの前へ行つて、その蓋をあけた。

狐につまゝれた樣な思ひでベルケ中尉がのぞき込むと、そこには、小さな、白色に光る輕金屬に包まれた機械がそなへつけてある。

ロイエンベルグ中尉が、スヰッチを入れると、その輕金屬の一面に赤い明りがつく。……彼の指先が、その明りの下のダイヤルを、注意深くまはすのだ。

數秒……ベルケ中尉はやつぱり無言のまゝロイエンベルグ中尉の指先と、そのたしかに無電らしい機械を見つめてゐた。

『……十……七……』

突然、明瞭な男の聲が、その小さな輕金屬の箱の中から流れ出した。ベルケ中尉が、思はずハッとして室內を見まはすほど明瞭な肉聲そのまゝの聲だつた。

『七、八、二……』

ロイエンベルグ中尉が、その機械に向つて答へた。——一寸又、機械が沈默したが、次に聞こえて來たのははつきりとした言葉——ドイツ語だ。

『よろしい。七、八、二……繼續……』

かう云ふと、ロイエンベルグ中尉の相手は感情を含んで話し出した。

『ハンス！ 一體全體君はブリユージユあたりで何をやつてゐるんだ。特殊任務飛行をやつてゐるとばかり思つてゐたのに……』

『實は、それをやつてゐたんです。』

ロイエンベルグが微笑した。

『所が、高射砲にやられましてね。ベルケ中尉と二人で落下傘降下をした所がこゝなんです。……機體の方は時限爆彈で接地前に粉碎してしまつたのは確實です。ヘルマンが發見してをります。ヘルマンは目下赤外寫眞のフイルムを現像中です。現像出來次第、電送しますから、本部へ傳達の手配をして下さい。……勿論「至急重要」です……』

『ヘルマンは何かニュースを摑んでゐるかね？』

『まだそれは聞いてをりません。まだ何を話すひまもないのです。』

『よろしい、準備出來次第寫眞の電送をたのむ。……君達の今後の行動に對する本部の處置はすぐ傳達する樣にしよう。御機嫌よう。』

一歩前を

『一體全體……』

ロイエンベルグ中尉が、たしかにラヂオ通信である、この明瞭な連絡を終ると、ベルケ中尉があきれ返つた樣に、かう云ひ出した。

『こんな通信をヌケヌケとやつて、どうして敵側にキヤッチされないですむのかね。波長を摑へられたら、その場所の方向探知は、一瞬間で出來るぢやないか！　……冗談ぢやない！　それに一體こんな場所でどこから電力をとるんだ？』

ロイエンベルグ中尉は、やつぱり微笑したまゝ、やうやく一本のシガレットをとり、それをうまさうに吸ひながらベルケ中尉を見上げた。

『君はラヂオ、と云ふものを常識的にしか考へてゐないからさう思ふのさ……有線電話しか知らなかつた人が、無線電話を最初聞いた時の樣にさ！　我々のエキスパートは、いつでも世界の常識より一歩進む事を念願において仕事をしてゐるんだよ。……この裝置だつて、普通のラヂオから一歩進んでゐる……それだけで、常識的な裝置では、摑めないわけなんだ。いゝかい……このラヂオの波長が問題なんだよ。……この裝置の波長は今までの無電界に知られてゐる、どの短波よりも、どの長波よりも、はるかに別種のものだ、と云ふ事しか、實は僕自身も知らないんだ。たゞ、獨逸の科學を我々は信じてゐていゝのだと云ふ事はたしかだ、だから、敵側の、どの無電機だつて我々の通信の電波は感受出來ないし、したがつて方向探知機も、何の役にもたゝないわけなのさ。——この理窟は分るだらう？　……人工の防害からも、自然の……たとへばデリンヂヤー現象の樣な防害も、この裝置は受ける事がない。……更に、これは使用する電力は極くわづかのヴォルテーヂで結構なんだ。——この裝置が、第一に我々の第五列に非常な組織力を與へてゐる事も確かだよ。』

ロイエンベルグ中尉が、驚異の目をみはつてゐるベルケ中尉に、こんな事を説明してゐる間に、作業室からヘルマンが現はれて來た。

『この赤外寫眞はすばらしいよ、どうして夜、夜中にこんなに地上の情況が撮影出來るものかね……こりアわしにはまるで神秘そのものだよ。』

ヘルマンがもつて來たフイルムはすでに完全に乾燥されてゐるのだ。

『我々の國の寫眞術と云ふものは遂にこゝまで來てしまつたのかね？』

——自分の行なつたラヂオに對して、ベルケ中尉が、驚異の目を見はつたのと同じ樣に、ヘルマンの方は、ベルケ中尉が撮影した赤外線寫眞の方に驚異の目を見はるのである。——だが、自分のたづさはつてゐる分量以外の世界に、自分達が驚異する程のすばらしい科學的伸展が、こんな風に役立ちつゝあるのだ、と云ふ事がベルケ中尉を、どんなに心強くさせ、祖國ドイツと云ふ國、ゲルマン民族と云ふものに對する信頼を高めさせて呉れたか知れないのである。

『これを電送でやるのですか?』

ベルケ中尉は又驚いた樣にヘルマンの方を見上げた。

『さうです。陽畫にして送るよりも陰畫のフイルムから送つた方が正確ですからね。さア始めようか。』

ヘルマンは、さう云ひながら、ベルケ中尉が撮影したフイルムの電送の用意を初めたのであつた。

命令

ロイエンベルグ中尉と、ベルケ中尉に對する本國からの命令が、戰場の空を渡つて、この秘められた地下室の輕金屬の箱の中から傳へられたのは、ヘルマンが、寫眞電送を完了して間もなくの事であつた。

『ロイエンベルグ中尉と、ベルケ中尉は、NO5の指揮下に入り適宜の處置をとるべし……』

と云ふのが、その命令の內容であつた。

『NO5と云ふと?』

ベルケ中尉がまづ疑問を發した。

『要するに、ある組織に於ける命令系統の一ツの據點にある人物なのさ。それが誰であらうと、我々は「祖國」と云ふものを第一として行動すればいゝんだ。』

ロイエンベルグ中尉は又微笑しながら、かう答へるばかりだつた。

『さア、我々の仕事はこれで一とくぎりすんだと云ふものだ。そこで少し、雜談と行かうかね?』

どこまでも市民的な、ヘルマンの言葉だつた。

『あんた達はともかく、出來るだけ本國へ歸つて第一線に働く方がよいと思ふが、どうかね? 空中作戰では猫の手一つでも借りたい忙しい時機がすぐ來るよ……』

『勿論我々は、第一線に働きたいですとも……』

ロイエンベルグ中尉がまづ答へた。

『何かいゝ方法があるでせうか?』

その後からベルケ中尉が低い聲でヘルマンの方をのぞき込みながら云つた。

『さうさね。』

ヘルマンは、煙草を吸ひながら、しばらく小首をかしげてゐたが、やがてロイエンベルグ中尉の方を見上げた。

『ハンス。君は、英國の飛行機を操縦出來るかね?』

『五分間計器類の配備をのぞき込んで、操縦桿を一寸握つて見るひまがあれば、どの國のどんな飛行機だつてやれますよ。……だけど、そいつをやる機會がありますか? 奴等の飛行機のどれかに、五分間でも忍び込める樣な機會が……』

流石に、ヘルマンの言葉に暗示された内容が、ロイエンベルグ中尉を興奮させた。

『無い事もなからう。さう云ふ機會は作つて見る價値は充分にあるね！』

ヘルマンは柔和な聲で、而も、こんな大膽な事を云ふのである。

『なにしろ、二十年もこの街に住んでゐるわしは、對空看視員の一人だし、そのために街はづれの飛行場には行きつけてゐる。……巡邏に行くんだがね。——午後の四時から夜中の十二時までが、このわしの勤務時間だ。どうかね。この時間の間に君達忍び出して敵機の中にもぐり込むと云ふ事にしちや……夜明け一時間前行動を開始して君達は空へ上るんだ！』

『然し、そんな事をして、もしあなたに嫌疑がかゝつたら？』

ベルケ中尉が不安げに云つた。

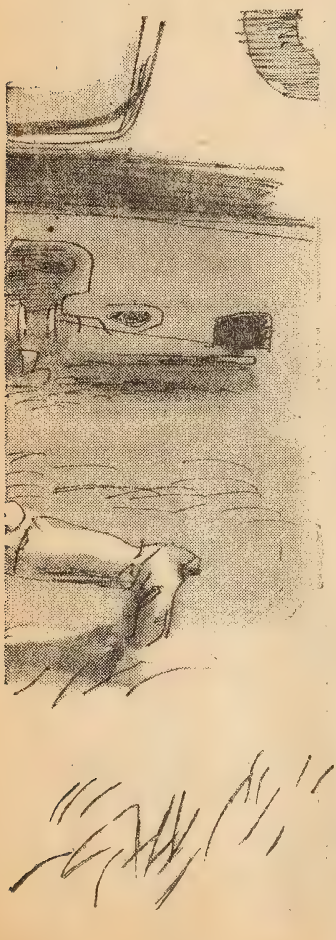
『嫌疑？……この戰時下のこの街で嫌疑と云ふものを怖れたら何一つ出來ない。生きてゐる事さへ出來ないさ！』

ヘルマンはかう云つて笑つた。

『嫌疑と云ふ奴は、價値のある行動をしようとしまいと來る時はやつて來る。だが、勿論、十二分の用意は必要だがね。一つその機會を作つて見るか！』

『やりませう！』

ロイエンベルグ中尉が、眞面目に云つた。



『冷え切つた發動機を始動して飛び上るまでが問題だが……やつつけませう。……出來る事なら、複座の快速機が頂きたいものですね。……そして我々がうまく飛び上つて本國の方に向つたら、國境の看視員に通報して頂きたい……』

『勿論……あとはこのわしにまかせておいて貰はう……』

『あなた方は、まるでもう敵機をぶん取つて乘り込んでしまつた樣なお話をなさるが……』

ベルケ中尉が苦笑した。

『飛行場には勿論飛行場警備の兵員がゐませうが……』

『勿論、それを勘定に入れてやるのさ。それが戰略でもあり我々の戰術の見せ場さ！』

ロイエンベルグ中尉は、ベルケ中尉の肩をたゝいて笑つた。

『ねおい、思ひ出し給へ、僕達はすでに、あの夜間偵察機ですでにこの世をはつた筈の人間なんだぜ……「死」はいつも僕達の前後にゐる。何事を決行せんでも、十分後に死ぬかも知れぬ我々だ。祖國のた

めに、何事でもやるのさ！』

『然し、NO5の命令は……』

『すでに發せられてゐる！』

　ロイエンベルグ中尉は更に啞然としてゐるベルケ中尉の肩をたゝいた。

戰史に出ぬ戰略

然し、來る日も、來る日も二人の若い中尉は、あの夜はいつた切りの地下室から一歩も外へ出る事が出來なかつた。この狹い地下室へ食事を運んで來て吳れるものは美しいクリスチン！……彼女の訪問だけが、二人の地下室生活者には唯一の變化だつた。あのラヂオは、ベルケ中尉の撮影した地上の寫眞が、味方の作戰に重大な役割を演じた事を報じ、來るべき電擊進軍が着々準備されてゐる事を報じた。

『……この頃の防諜員の狂氣ぶりつたら日ましにひどくなつて來ましたわ……今日も數名の市民が、色々な嫌疑で秘密警察へもつて行かれましたわ……』

　その夕方、食事を運んで來たクリスチ

ンが、熱を含んだ樣なまなざしで二人を見ながらさゝやいた。
『もし……もしこの地下室でも分つたら、一體、どんな事になるだらう？』
思はずベルケ中尉が、クリスチンとロイエンベルグ中尉を見比べながら云つた。
『その時は、光榮の焰の中に何もかもを燒きつくすまでですわ！』
クリスチンの美しい眉がキリリと上つた。
ベルケ中尉は、この美しい淑女のこの短い一言と眉の動きに、言葉以上の大きな內容を一種の感動でもつて感じ取らずにはゐられなかつた。
眞夜中少し前だつた。ヘルマンから二人の所へ一つの指令が來た。二人の中尉は、その指令通りに、すでに用意されてゐた英國空軍士官の制服を着て、夜の街へ忍び出たのだつた。
ロイエンベルグ中尉は、やはり、この街を生れ故鄉の街でも步む樣に、ベルケ中尉を、飛行場までつれて來てしまつた。
どう云ふ手配が、ヘルマンの手で行はれてゐたのか、勿論、二人の中尉は知る由もない。たゞ、二人が、何の支障もなく、プロペラと發動機にすつかり覆をかけられた、双發の快速偵察機が、並んでゐる、飛行場に忍び込め、而も、その一機の中にもぐり込めたのは事實だつた。
ロイエンベルグ中尉は、操縱座に坐つて、小さなペンライトで、計器板を讀みはじめ、操縱桿を入念に動かして見た。
『誰か來る！』
二人はハッとペンライトを消して息をのんだ。こゝまで來て警備員に捕るのか！……と。
『幸運を祈るよ！』
閉ざした座席の外からヘルマンの低い聲だつた。
『燃料も彈藥も充分だ。撮影機もついてゐる……幸運を祈る！』
それつ切り、足音は又、忍びやかに消え去つて行つてしまつた。
夜明け近くまで、この機體の中に潛んでゐる事は決して樂な仕事ではなかつた。――あの地下室での數日よりも更に長い長い時間が自分達の上にのしかゝつてゐる樣な氣もちだつた。
だが、やがて時が來た。
ベルケ中尉が、座席から忍び出て、プロペラと發動機の覆を外した。
『行くぞ……』
再び彼が座席につくとロイエンベルグ中尉が決然とさゝやいて、發動機の始動機のボタンを押した。
キユーン、キユーン、キユーンと云ふ銳い始動の音が、夜あけ前の靜寂な飛行場の空氣の中に鳴り出す。
後座のベルケ中尉は、機銃の槓杆をガチリと鳴らして、來るべきものに對する射擊の體勢を取る。
今が生死の岐路にある重大な數分間である。
兵舍の窓にパッと灯がともつた。――警備の兵員の耳に始動機の音が聞えたのだ。
人影があわたゞしく動く……
だが、その時だつた。冷えてゐた發動機が轟然と回轉を開始したの

は……。

ダダダダ……

ベルケ中尉が、すでに、この機に接近しようとして兵舎をとび出して來る兵員に一連の機銃彈を打ち込み出してゐる。

飛行機は重々しく動き出した。と同時に、一條の探照燈の光芒が、東に向つて滑走速力を增加して行く二人の奪取した飛行機を追ひ始めた。

ダダダ……ダダダ……

ベルケ中尉は、行きがけの駄賃に、並んでゐる飛行機に彈丸を浴せかけてゐる。

二人の飛行機は尾翼を上げた。やがて數秒——機は大地を離れて、黑々とした夜明け前の空中に浮び上つたのであつた。

そして…………

英國空軍のブラウン大尉が『銃殺』を宣告されたのは勿論、この『敵に奪取された飛行機』が、更に數機を機銃掃射して、いづこへともなく飛び去つた事の責任を問はれたものである事は、すでに讀者諸君も御了解の事であらう。

だが、その大尉が、なぜ『銃殺』をまぬかれたか？

それは、ドイツ側のラヂオが、丁度、その飛行機が、白、獨國境を越える頃、

『我防空陣は今曉五時十七分國境を突破せんとした英空軍單獨偵察機を擊墜炎上せしめたり……』

と放送したのを英空軍基地でキャッチした故である。

だが、そのラヂオが、本當にドイツ國內から發せられたのか、或は又ヘルマンの地下室から發せられたのか、誰も知らない。更に、ヘルマンの地下室のあのラヂオが、

『計畫は完全に成功した。貴下の周到なる處置により英國機の完全鹵獲及び我々の生存をすら抹殺された事に對し、敬意と感謝を捧げる。』

と云ふロイエンベルグ中尉の聲を傳へた事などは誰一人として知るものは無からう。

ドイツ軍が大擧ベルギー國境を突破し電擊戰に出たのは、それから二十四時間を出ない中であつた——。

（をはり）

防諜標語

一、防諜は一億我等の注意から
一、吾等も一役防諜戰士
一、職場は戰場、洩らすな軍機
一、乗るな流言洩らすな秘密
一、秘密で語つた秘密は洩れる
一、流言蜚語はスパイが造る
一、紙屑もスパイにとつては價千金

戰爭と體位向上

健康報國は國民の重大使命である……

大日本體育協會會長　下村宏

今日の日本として、考慮しなければならないことは色々あるが、その中の一つとして、體位の向上といふことを忘れてはならないと私は思ふ。戰爭の時に、體位の向上が何故必要であるかといへば、戰爭になると、物資がどうしても次第に不足を告げ勝になる。綿物がス・フになるといふやうに、人間も戰爭になれば數が減り、又質が多少とも下つて來る。第一線に出かける人達は、國民の中堅であつて、さういふ人達が戰死をしたり、風土病に犯されて死んだりする。又更にさうした人達が、病を得て、卽ち體位が下つて內地へ引上げて來る。一方、銃後における我々の生活はどうかといへば、これも平時に比べて、幾分榮養が劣つて來ることは止むを得ない。

この前の歐洲大戰から例を取るならば、獨逸の如きは今囘と違つて强度の經濟封鎖を受け、食料品が思ふやうに國內に入つて來なかつた。御承知のとほり、當時露西亞へは獨逸の軍隊が侵入して居り、同時に佛蘭西の國內にも進出してゐて、第一線では、獨逸軍が頗る優勢であつたが、四ケ年半の後に、何故に獨逸が敗れたかといへば、結局するところ食糧の不足、卽ち兵糧攻めに遭つたからである。

獨逸では、戰爭によつて、二百萬の人間を失ひ、餓死によつて、約八十萬人を失つてゐる。これに反して、支那事變に於ける日本は經濟封鎖に遭つてゐるわけでもなく、食糧に於ても大體、自給自足の出來る國であるから、未だ一人の餓死者が出てゐるわけでもないがそれでも食糧は、平時のやうに豐かであるとは言へない。そこへ前に言つたやうなわけで、一般の體位が下つて來る、玆に於て私は、戰時下に於ける國民の體位向上の必要を痛切に感ずるのである。

又、獨逸に例を取るが、第一次歐洲大戰で、御承知の通り、獨逸は植民地の全部を失ひ、領土は減ぜられて、加ふるに二百八十萬の生命をも失なつてしまつた。私は大正十四年に伯林に行つたことがあるが、當時伯林ではこの人口をどう取り返すか、この榮養不良に陷

つた國民の體位を、どう恢復するか、といふことに就て、或は失望の聲を擧げる者もあつたが、一般に非常な努力を續けねばならないといふ氣分が、充ち滿ちてゐたのである。

ところで、御承知の通り、あらゆる方面に於て、人口の增加と、體位の向上といふことに力を入れて、世界に誇る今日の獨逸國家は再建されたのである。その間に於て、最も力を注いだのは、クラフト・ドウルヒ・フロイデ即ち歡喜力行といふことで、これは働くのでも唯力んで働くばかりでなく、愉快に娛しみながら働くといふ遣り方である。

映畫でも音樂でも芝居でも、又は旅行でも——現に旅行では今年若しオリムピック大會が東京で開かれたならば、二十六隻の船で二萬人の獨逸勞働者が日本へ來ることになつてゐた。(お前たちは四萬マルク稼げ、そしたら東洋の夢の國日本を見せてやる)といふので、勞働者は娛しんで働いてゐた。又一方には、あらゆるスポーツを奬勵して、非常な効果をあげつゝある。オリムピック伯林大會は、全世界から五十一ケ國の選手が集つて、此處で十六日間の競爭を續けたが、それまでは必ずしも、第一流とは言へなかつた獨逸人が、この前の歐洲大戰で、人的に最も致命的な打擊を受けた獨逸人が、この競技で第一位を占めたのである。

嘗て戰ひに敗れた獨逸が、戰ひに勝つた英佛を相手に今日壓倒的な勝利を何故占めたかといふことは、四年前の伯林オリムピック大會が如實に示してゐると私は思ふ。

オリムピック大會といふのは、オリムピック委員會で、四年目每に今年はロサンゼルス今年は巴里、今年は伯林、今年は東京といふやうに、委員會がその市へ委託して催すのである。所が、伯林大會では、伯林の市がやつたといふよりも、獨逸國家がやつたのである。更に云へば、ヒトラア總統が眞先に立つて、やつたのである。

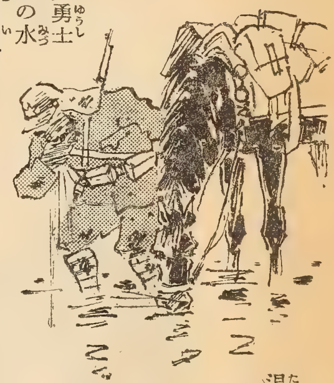
これは國民全體に對する非常なスポーツの奬勵であると思ふ。その結果として、國民全體の體位が向上したゝめに、その多數の中から、又強い選手が出て來たのである。そして、遂に前期歐洲大戰で、最も傷けられた獨逸國民が、第一位を占めてしまつた。この邊からも、國民の體位向上が、國家の運命に重大な影響を及ぼすことが、痛切に感じられる次第である。

下村宏氏

ヒトラア總統はオリムピック大會十六日間連日スタヂアムに出掛けてゐた。そして勝つた獨逸選手を接見し、激勵し、非常な喜びと興奮とを以て、大會のプログラムを終了したのである。この時の陸上競技は、五十一ケ國の中で、獨逸と日本と亞米利加の三ケ國に於ける競爭であつたのである。君が代は幾度か奏せられた。日章旗も幾度か揭げられた。日本のスポーツが、諸外國に比して、劣つてゐるとは思へないが、さうかといつて、遙かに優つてゐるとも言へない。國家非常時のこの際、國民の一人のこらずが一層體位の向上に留意して、輝かしい新東亞の建設に、逞ましく邁進されんことを、心から希望する次第である。

宿營の花瓶に活ける野戰流（北支・松原生）

戰友の床屋に部隊虎になり（しんぢ）



わが勇士泥田の水に渴を醫す（功）

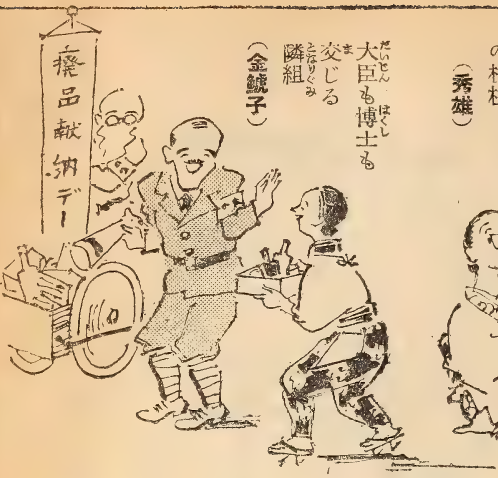
勳族の誇に生きてミシン踏み（道男）

退屈の白衣少しは編めるなり（覺朗）

子の貯金箱が待つてる月給日（勝也）

伸びて行く子供興亜の杖柱（秀雄）

大臣も博士も交じる隣組（金鯱子）



奥様も奉仕となればこの力（年男）

日本兵支那でも日本晴と言ひ（信之）

留守すれば征父に手紙を書く子供（軍蔘）

便毎に大きくなる〱子の手形（三星員）

川柳漫畫　谷脇素文

投句歡迎（用紙ハガキ）掲載句には薄謝呈上。

春（はる）告（つ）ぐる嵐（あらし）

川口松太郎

島司郎畫

最後の願ひ

一

『私が平田でございます、行き屆きませんけれども、出來るだけのお世話はさせて頂きます。』

型通りの挨拶であつた。

實子は珍しげに、まじ／＼とくに子の顏を見上げてゐたが、恒吾は棒を吞んだやうに體を硬くして突立つてしまつた。

『可愛いお孃ちやんですこと。五つでいらつしやいますね。』

『えゝ。』

『お父さんと御一緒でようございましたねえ。』

恒吾の脣が血の氣を失つて紫色に變つてゐるのを、くに子は冷然と見返して、

『お丈夫さうで好いお孃さま。お母さんはどうなさいましたの。』

『お風邪なんで、お父さんが來たの。』

『さうですか。』

『明日はお母さんが來ます。』

『何でもよく判るのねえ、お父さんはお勤めのお出先に送つて下すつたのでせう。』

『えゝ。』

『ではお父さんをお送りいたしませう。』

子供の扱ひに馴れてゐるのか、打ちとけた物の云ひ方で、

『教室や運動場を御覽になりますですか。』

と、恒吾の方へ目をむけた。

態度も、口のきゝ方も、未知の人に接するのと少しも變らぬ白々しさで、

『人違ひかしら。』

と思ふほどに冷たかつた。

『いえ、いづれ又、おうかゞひいたします、何分よろしくおたのみ申します。』

しどろもどろで挨拶もそこ／＼に、

『お戯をするんぢやありませんよ。』

『えゝ。』

『先生のおつしやる事をよく聞くんですよ。』

『えゝ。』

『ぢや、お父さんは行くよ。』

『お父さんに行つてらつしやいとおつしやるんでせう。』

『行つてらつしやい。』

『はい、行つて來ます。』

愛情のあふれる父子の會話を、笑ひながら見てゐるくに子の面には、穩やかな微笑が一杯に浮んで、疑ひ深い物の影は一片も見られなかつた。が、恒吾の顏は眞靑だつた。

平然とはしてゐても、昔のくに子に間違ひはない。

別れてもう五年になるが、昔のまゝの面影が、今もやつぱり美しかつた。

信州の田舍では代用教員をした事のあるくに子が、幼稚園の保姆になるのも不思議ではない。

が、これが、大阪へ來て實子の通ふ幼稚園に勤めてゐようとは――。

『たしかにくに子に違ひないが。』

顏色も變へないのが不思議と云へば不思議でもある。

同名異人があれほどに似通ふ筈もあるまいし、章子が病氣で、自分が代りに行つたのも何かの因緣に思はれる。

『章子とくに子が逢つてゐたらどうしただらう。』

考へただけでも、ぞつとして來る。

前號までの梗概

鄕黨の名士堤氏を賴つて上京した高山恒吾は、その令孃章子から純愛を寄せられたが、同じ邸の女中に、前年故あつて相別れた戀人くに子がゐたので、過去の愛は急速に甦り、二人は永久の誓を交してしまふ。

と、そのうち堤氏が急逝し、而も章子を恒吾に嫁せよといふ遺言狀が發見された。驚いた恒吾はくに子と謀り、邸を去らうとしたが、何故か彼女は、獨りだけで姿を晦ました。

取殘された恒吾は、日増しに募る章子の求愛に悶え、遂にくに子との始終を彼女に告白する。聰明な章子は、一旦は駭いたが、忽ちに一切を諦める氣になつた。と、そこへ忽然くに子が姿を現し、持ち分の同じい章子と恒吾の結合を圖る爲にこそ、自分は敢て身を退くのだと主張し、再び姿を消し去つた。

これが端緒で、章子の心境は俄に一變し、母の反對も押切つて恒吾と結婚して了つた。さうして恒吾は某新聞社に就職し、希望多い日を送つて居る折柄だつた、圖らずも彼は、以前の堤家の女中の口から、あのくに子が今恒吾の胤を生み落し、しかも非常な經濟的苦境にあるといふ報せを受ける。

愕然とした彼は、直ぐに總てを章子に告白した。すると章子は、自らくに子に會つた上生み落した子――實子といふ女兒――を引取つて歸つて來た。聰明にも寛厚な彼女の計らひではある。

かくて又數年が過ぎた。今は大阪の支社詰となつた恒吾は、折柄病臥中の妻に代り、實子の幼稚園入園式に臨んだ所、そこで無心の園主から引き合された擔任の保姆、あゝ、それこそは、他ならぬくに子ではなかつたか！

『今日、逢はなくつても、明日は顔を逢はせる。逢つたら二人が何と云ふだらう。』

會社へ出て行く電車の中でも、支局の机にむかつても、恒吾は少しも落付けなかつた。

輕い風邪氣味で、アスピリンでも飲んで置けば、すぐに癒つてしまひさうな微症では、幼稚園へも出て行くにきまつてゐる。

女中に任せて平氣な章子ではないのだ。

幼稚園の保姆になつて自分の實子を教育する、名乘りもせずに、先生と生徒で、毎日顔を見合せる。

『そんな事が長くつゞいてゐたら、末にはどうなるだらう、くに子にも、だん／＼愛情が出て來るのではなからうか。眞實に血のつながつた親子が、何時かは、本當の事を話し合ふのではなからうか。』

さま〳〵な疑ひが、次第に不安の芽をふいて來る。

机へむかつても氣になつて仕事が手につかず、幼稚園の教室に腰をおろしてゐる實子の姿ばかりが思ひ出される。

『歸つたら章子に話をすべきであらうか、默つてゐる方が好いのだらうか。』

そんな事までが、氣になつて來ると、仕事の途中で會社を飛び出して、もう一度、幼稚園の近くへ引返してしまつた。

實子の體が不安になつて、仕事をつゞける心持も起らない。

『母親らしい愛情から、もしも實子を連れて行つてしまつたら……』

あり得ようのない馬鹿々々しい考へさへも湧上つて來る。

今日は初めての日で、お辨當が要らないので、園兒たちも歸つてしまつたらしく、廣くもない園内がひつそりして、人影もなかつた。

『實子も歸つたらしい。』

安心に似た氣持の底には、二人だけでくに子に逢つて、話し合ひたい心持も動いてゐる。

お互ひの氣持をはつきりさせて、無用の不安を失くしたかつた。

『くに子に逢つて話し合はう、幼稚園からの歸りを待つて話し合はう。』

覺悟をきめて恒吾は、物陰にかくれながらくに子の歸りを待ち受けるのだつた。

二

『平田さん！』

『はあ。』

『僕です。』

『……』

『高山恒吾です。』

『……』

午後の一時だつた。

幼稚園の前から、電車の終點へ通ずる眞晝の道だつた。

『ちよつとお話したい事があつて、お歸りを待つてゐたんです。こんな形で話しかけて好いかどうか、失禮とは思ひましたけれど、默つては居られないので、恐縮ですが、少しだけ、話を聞いて下さいませんか。』

追ひかけるやうに歩きながら、

『さつきはあまり突然だつたので、何も申上げる事が出來ませんでした、會社へ出て、いろ〳〵考へた上で、引返して來たのですが……』

『何にもおつしやらないで、頂きたう存じます。』

くに子は足もとめなかつた。

恒吾の姿を見返りもせずに、

『何もうかゞふ事はございません。係りの保姆としてお子さんをお預りしてゐるだけの御縁と思つて頂きたうございます。』

『無論、さう思つてお話をしたいのです。』

『保姆の御用事でしたらば、園の方へお出で下さいますやうに。仕事をはなれたところではお目にかゝりたくございません。』

毅然たる態度が、白々と冷たかつた。

昔の事實を肯定してゐるやうでもあり、否定してゐるやうでもあり、何かしら割り切れぬ物足らなさを感じさせる。

『まさか、あなたが保姆をしていらつしやらうとは思ひませんし、そこへ實子が入園するのも、あんまり不思議な偶然で、僕は全くどうして好いか判らないのです。』

『私はたゞの保姆です、どなたのお子さんがお出でになつても同じ心持でお預りをいたします。必要以上のお心づかひはお止めになつて頂きたうございます。』

『あなたに取つて本當の子供が入つて來ても平氣で居られますか。』

『…………』

『實子はあなたの產んだ子ですよ。あれが、あなたの……』

『高山さん。』

きつぱりと言葉をさへぎつた。

ちやうど電車の停留場で、繁つた柳が靑々と長い小枝をしたたらせてゐる。

『昔の事はおつしやらないで下さい、うかゞつても役には立ちません。實子さんは、お宅のお孃さま以外の誰方とも思ひません。公私の別を辨ずして、仕事の上に私事の感情をまじへたくありません。』

『然し……』

『これ以上は何もうかゞひません。御心配が深ければ、外の幼稚園へお上げになつて下さい。』

『…………』

『どんな事がありませうとも、お子様に餘計なお話なぞはいたしません。それだけは御安心下さいますやうに……』

『…………』

『電車がまゐりましたから失禮をいたします。』

云ふべき事を云ひ切つて、さつさと電車へ乘り込む氣魄には、恒吾の方が壓倒されて、一言の返答も出來ないのだつた。

六年以前のくに子を思ふと、その違ひの甚だしさが、夢のやうにも思はれる。お宅のお孃さん以外の誰方とも思はない、仕事に感情を交へたくない――さう云ふ言葉の裏の意味は、

『自分の産んだ子であらうとも今は立場も違つてゐる、昔を振返つて、女々しく泣きはしないのだ。そんな意氣地なしじはないのだ。』

と、はつきり云ふのと同じなのだ。

恒吾の胸は全く混亂してしまつた。昔を忘れて現在の職責に忠實ならんとする

くに子を、妻の章子が理解するだらうか。

『自分はこれでも好い、くに子の態度を立派だと思ふに些かも躊躇はせぬが明日になつて章子が幼稚園へ行つたら、妻が何を云ふだらう。くに子はどんな應對をするであらう。』

そんな事を考へ出すと、不安の種は際限もなく擴がつて行く。くに子の乘つて行つた電車を見送つてぼんやりと柳の下に立つてゐたが、まだ一時半。會社には時間も早いし殘して來た仕事もある。氣のすゝまない心持を引き立てて事務所へ戻つて行くと、

『何處へ行つてたんだい、高山君！』

『友達に逢つたもので、一緒に晝食を食べて來ました。』

『家から電話がかゝつてゐるんだよ。』

『さうでしたか。』

『奥さんが病氣だと云ふぢやないか。』

支局長が電話口へ出たと見えて、

『直ぐに家へ歸つてくれと云ふのが二度もかゝつてゐるんだから、よつぽど悪いんぢやないか。』

『そんなに大した事はないと思ひます。』

『兎も角、歸つて見給へ。女中さんの聲らしかつたが、大分あわてゝゐるやうに聞えたから……』

落付を失つた恒吾の胸へ、もう一つの不安を重ねるやうな電話の傳言だつた。

三

初めの内はたゞの風邪だと安心してゐたのが、案外、性質の悪い肺炎に變じて、病狀も思つたよりずつと重かつた。

近所の町醫者も、さのみ手重くは診なかつたが、九度近い熱が三日もつゞいて下らないと、恒吾も心配になつて、大阪病院の内科部長にたのみ込んで診察をして貰ふと、

『直ぐに入院をさせなければいけない、今でさへ手遅れの感じがある。』

一目で眉をひそめられて、有無を云はさず病院差廻しの寢臺車に乘せられてその日の内に中之島の大阪病院へ運ばれてしまつた。

『重くなつてから持ち込まれると醫者は迷惑をします。』

病院でも不服さうに、

『もつと早く診せてくれなければ困るぢやありませんか。』

相手が新聞關係だけに、扱ひにも特別で手當も十分に行き屆いたが、病狀はさう簡單にはいかなかつた。

恒吾も病院へつきつきりで、支局へも二三時間しか顏を出さなかつた。が支局長の好意で、

『仕事はどうにでもするから、當分、看病し給へ。』

と、親切に云つてくれて、友達が多勢で仕事もそれ〲に分擔して助けてくれてゐる。

『私の方から好いと云ふまでは子供を病院へよこさないやうにして下さい。』

醫者の命令で、實子は、留守番かた〲、女中に任せられて幼稚園へ通つてゐる。

思はぬ章子の急病で、くに子とのめぐり逢ひも、當分の延期になつた。
くに子の方でも覺悟の下準備があつたのであらう。
『お母さんはどうなさいました。』
と、四五日を經てから、
『まだ一度もお見えになりませんね。』
さり氣ない調子で實子に聞いた。
『御病氣なんです。』
實子も眉をくもらせながら、
『大阪病院にゐますのよ。』
『まあ、そんなにお惡いんですか。』
『だから、私はお留守番なんです。』
『それは大變ですわねえ。』
病氣入院で幼稚園へも來られないのだ。恐しい事が少し先へのびたやうな氣がして、くに子も何やらほつとしてゐた。
章子に逢つても、恒吾に答へたのと同じ返答の出來る自信があつて、動搖はしなかつた。
實子を高山家へ渡した時から、運命をあきらめて、幼稚園の保姆になつて、他人の子供の世話をやきながら、我が子を失つた淋しさを救はうと思つたのだ。
それが保姆になつた動機なのだ。
別れてから、五年目に、ゆくりなくもめぐり逢つた我が子を見てもさのみの動搖を感じなかつたのも、運命をあきらめた結果であつたらう。
『お母さんが入院してゐては、お父さんもお留守でせう。』
『やつぱり病院にいらつしやるの。』
『それぢやア、實子さんとお女中さんだけ……。』
『え〻。』
『お淋しいでせう。』
『とつても淋しいわ。』
『そんなら、もつと、遊んでいらつしやい。みなさんが歸つてしまつても、先生がお相手

ニキビ
吹出物に
ニキビ吹出物に！
非常によくきくので「にきびとり美顔水」が大評判です。
▲美容藥としても！
この藥は美容藥としても大へんよく、入浴後洗面後等につけるとても爽快で、ニキビ吹出物を防ぎお顔が非常に美しくなります。
▲蚤蚊毒虫等のカユミ止めに
この藥は、蚤・蚊・南京虫・家ダニ等の毒虫にさゝれた時にも大へんよくきゝますので廣く賞用せられてゐます。
本舗 東京・大阪 桃谷順天館
にきびとり美顔水
9—106
化粧用美顔水
アブラ顔のお化粧下に第一等！

をして上げますわ。』

『でも、歸ります。』

『お留守番をなさるの。』

『え〻。』

『お偉いわねえ。』

淋し氣に目を伏せる姿がいぢらしかつた。二人だけ對ひ合つて話をしてゐると感情がこみ上げて來る、多勢の園兒が並んでゐる中で見る時にはさほどにも感じないのだが、一人だけを離して見ると、血潮のつながつてゐる愛情が堪らなかつた。

『さやうなら、先生！』

可愛い聲の挨拶。

『さよなら、氣をつけていらつしやい。』

『さよなら。』

玄關には女中が迎へに來てゐる。

父も母もゐない留守宅へ歸つて行く姿が、しよんぼりと哀れに見えて悲しかつた。

四

『どうも、少し、容態が思はしくありません。』

主治醫の北島博士が首をかしげたのは、入院四日目の夜だつた。

熱は四十度が昨日から少しも下らない。

『萬一の事があるといけませんから、お逢せするお方があつたら今の内にお呼びして置いて下さい。』

廊下の隅でさ〻やいた博士の顏も緊張し切つて、

『今が今、どう斯うと云ふのではありませんが、熱が高いので、心臓が大分弱つて來てゐます、萬一の時の用心をして置いて頂きたいんです。』

昨日あたりから、章子の顏色がすつかり變つて來てゐる。

萬一を豫想させる狀態の惡さは、おぼろげに判つてゐた。

『お子さんだけはいけません。お子さんはお連れにならないで下さい、菌が强烈で傳染の危險が多いんです。』

今は、何事も醫者の命令に從ふより外はなかつた。鎌倉の、秀子未亡人に電報を打つ外は、知らせる要のある者もゐなかつた。

秀子未亡人とも、五年前に親子喧嘩があつて、殆んど往來をしてゐない。くに子との間に出來た子供を引取つたのが喧嘩の原因で、未亡人にすれば、當然の不服かも知れなかつたが。

『そんな不行跡な者を聟にしたくない。』

と、はつきり恒吾を非難して、鎌倉への出入りを禁じられてしまつたのだ。

僅かな間にげつそりと衰へが目立つて、看護づかれの體をうと〳〵させてゐる恒吾の耳へ、

『貴下！』

病人が目をあけて呼んだ。半睡半生の内に、寢るともなく、さめるともなく、激しい病魔と鬪つてゐる章子が、

『お風邪を召すといけません、そんな所でうた〻寢をなすつて……』

夜半の一時でもあつたゞらうか。

『おやすみになつて下さいませんか。』

『僕の事なんぞ心配しなくつても好いよ、早く快くなつてくれなくちや困る。』

叱るやうに云ふと、病人は悲しさうに首を振つた。

一時間毎に氷を替へなければ、どん／＼溶けてしまふほど、看護人の手數がかゝつて、二人の看護婦が交替で夜もずつと付切つてゐる。

昨日も一昨日も、恒吾は殆んど寢てゐなかつた。

『私、もう駄目かも知れません。』

首を振つた章子の唇がから／＼に乾いてゐる。

吸呑に入れた番茶を注いでやると、うまさうに咽へ流し込んだ。

『あなたの御親切は忘れません、決して……』

『何をつまらない事を云つてゐるんだ。』

『このまゝ、死んで行つても本望だと思ひます。こんなに好くして頂いて、私、倖に死んで行けます。』

『馬鹿な事を云ふもんぢやないよ、死ぬだなんて、不吉の事を口にして、看病してゐる僕たちの氣持が滅入つてしまふぢやないか。』

言葉を荒くして云ふと、まだ何か云ひかけてゐたのを、途中でやめて、淋しさうに目を閉ぢてしまつた。

『神樣！』

恒吾も目を閉ぢて口の中で、神の名を呼んだ。

信仰を持たぬ恒吾が、生れて初めて神を呼んだのかも知れなかつた。

植物ホルモンの力で

安全 無害

肥り過ぎが治る

やせたい人に嬉しい便り

夏！海に山に輕裝でお出掛の時お家でも出來る文薄物を召れる際、何といつても姿の美しさが第一。スラリとした夏姿こそ、繪にも歌にもなる魅力です。それを思ふにつけ肥つたものに夏程嫌な時はありません。しかし心配は無用です。貴女は世界一有名で、信用のある、私達のレヂユーサーを御存じですか。世界でたつた一つの無害なやせ藥です。日本で發賣されて素晴らしい好評。貴女のお友達はよく御存じでせう。今度アメリカ本社から來たレヂユーサーは皆樣の體驗をもとに日本人の體質に合ふやうに工夫してありますから驚くほどの効果を持つて居ります。御承知の樣にレヂユーサは植物學の大家バーバンク博士に發明され米國バーバンク製藥會社で發賣されてゐる、世界一信用のある瘦身劑です春から夏にかけ、脂肪が歎かになつてゐる時が一年中で一番効果が早いのです。惱んだり、苦しんでゐる時ではありません。今すぐ御試しになるのが第一です。

植物エキスから發見

レヂユーサーは世界唯一の絕對無害な鈍植物性ホルモン分泌促進劑で、アメリカの映畫女優に實驗された名藥で日本で賣り出されて素晴らしい信用を得て居ります。婦人倶樂部の愛讀者の皆樣からも絕對的信用を頂いて居ります。その作用は頗めて自然な生理作用でホルモン分泌を促し、脂肪を溶しエネルギーにかへ、此の藥を御服用になると水や果物が欲しくなり三日目頃から百匁位減り始め一月一貫匁は減り、絕對副作用なきことは保證つきです

乳の大きい人
脚の太い人
腰の太い人
尻の太い人

●是非御試しなさい。相談は左記商會で無料親切ヒミツに致します

レヂユーサーの藥價は百錠(六日分)三圓、二百五十錠(半月分)七圓、五百錠(一月分)十三圓で送料荷造費共内地十五錢、其他四十二錢、御希望の方は東京銀座西五ノ二、バーバンク會社(振替東京一三九七四四番)へ振替又は爲替で申込下されば密送致します東京小石川區音羽町大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九番)でも御取次致します。

無代進呈

前記商會宛ハガキで御申込になれば美本を讀者に進呈致します。

『人事をつくして天命を待つ』とか『苦しい時の神だのみ』とか、通俗な俚諺が、馬鹿にならぬ眞實をもつて迫つて來る。

主治醫までがあんな事を云ふやうでは最惡の場合も豫想をされるし、未亡人が馳けつけて來れば、病人の相像ももつと惡くなるのだらう。

『章子はもう死期をさとつてゐる。はつきり覺悟がついてゐる。』

何か云はうと

して叱られてやめたのが、明らかな證據だ。

『貴下！』

目を閉ぢても寢られぬのであらう。

『實子はどうしたでせうか。』

『幼稚園へ通つてゐるよ。』

『今夜は家へ歸つておやすみになつて、明日は實子を見てやつて下さいませんか。』

『實子は大丈夫だよ。光も、きみもついてゐるから心配はない。』

光と云ふのは、東京からずつとついて來てゐる女中だつた。

『ちよつとでも好いから見てやつて下さい、そして、又いらつしやる時に、實子の寫眞を一枚持つて來て下さい。』

『實子を連れて來てやらうか。』

『いえ、いけません。子供は危險なんですから、あなたがお歸りになる時にも、よく消毒して、惡い菌を持つて行かないやうに氣をつけて下さい。』

夜が更けてゐるのに、歸つて實子を見てやつてくれと、やかましく云はれるので、抗ふのも心ない氣がして、あとを看護婦にたのんで、夜更けの町へ出て行つた。

タクシーをひろつて守口へ歸つて見ると、實子は無邪氣にスヤ／＼と寢てゐる。女中たちにも、留守宅にも變りはなかつた。

その夜は、實子と並んで、何にも知らずにぐつすりと寢入つた。實子を見てくれと云つたのも、良人に休養を與へようとする章子のやさしい心づかひであつたのかも知れないのだ。

『お父さん！』

翌る朝は、實子の聲で目がさめた。

『お母さんはどうしたの。』

『まだ病院にいらつしやる。』

『お父さんだけ歸つて來たの。』

『實子が心配だから、昨夜、おそく歸つて來て見た。實子が元氣なら又、病院へ戻つてお母さんの看病をして來るんだ。』

『實子は大丈夫。とても元氣ですつて、お母さんにさう云つて。』

『うん、お母さん喜ぶだらう。』

實子までが氣をつかつてゐるやうな氣がして、却つて淋しかつた。

『幼稚園へ行つてゐるのかい。』

『えゝ、これから行くのよ、今日はお辨當を持つて行くの。』

『そりやあ素的だなあ。』

『平田先生。とつても親切よ。』

『さうか。』

『毎日、お母さんの事を聞いて下さるの。』
『病氣だつて云つたのか。』
『云つたわ、だつて、お母さんが行かないからへんでせう、幼稚園へお母さんが來ないのは、實子だけ。外の生徒は、もうみんな來てしまつたの。』
『…………』
子供心の淋しさが、言葉の外にはみ出して聞える。
にじんで來る涙を押へるやうにして、
『平田先生によろしくつてな。お母さんが癒つたらすぐに來ますと云つとくんだよ。』
『もう、さう云つたわ。』
『お父さんはもしかすると、今夜も歸らないからね、病院で泊らなければならないから。』
『えゝ。』
『ぢや、行つといで。』

『行つて來ます。』
光と一緒に幼稚園へ出て行く姿を見送つてから、恒吾はすぐに病院へ引返した。小さな額に入つた實子の寫眞と幼稚園で作つた折紙細工やクレオン畫などを、一まとめにして、小風呂敷へ包んで――。
『病氣になつたお蔭で、くに子に逢ふのが少しのびた。』
と思ひながら病院へ來て見ると、鎌倉の未亡人が、章子の枕元に立つてゐる。
流石は母子で、電報を見ると直ぐ、その夜の汽車に乘つて來たのだ。
母の下阪が、章子には又、新しい衝激になつた。
死期近い自分をはつきり感じたやうで、實子の寫眞を見ると聲を放つて泣き出して、
『もしもの事があつたら、實子だけはおたのみします。』
母や看護婦のゐる前でも構はずに、取亂して泣くのだつた。
疲勞は依然として思はしくなく、熱は少しも引かなかつた。

野間清治氏
八著

榮え行く道　定價七十錢送料九錢
出世之礎　定價三十錢送料六錢
修養雜話　定價三十錢送料六錢

私の半生(增補版)
定價二圓五十錢　送料十四錢

迷ふ勿れ！
斯くせよ！
斯く進め！
著者三十年の苦闘の體驗による、眞心の底から迸る、信念の叫び!!

世間雜話
定價五十錢　送料九錢

處世之道　定價三十錢送料六錢
體驗を語る　定價三十錢送料六錢
野間清治短話集　定價三十錢送料六錢

文部省推薦竝認定
野間恒著
劍道讀本
『劍は人なり』著者はその一生を劍と共に生きた人である。本書は自己精進練磨の體驗から劍道全般に亙つて解說せる書。好個の劍道讀本として處世讀本として諸大家絕讚大評判!!
定價一・二〇（特製二圓）送料十四錢

書店に品切の節は直接本社へ
大日本雄辯會講談社發行
（振替東京三九三〇）

『貴下！』
『何だ。』
『お母さんは……』
『一先づ宿へお歸りになつたよ、大阪ホテルだから、用があれば、すぐ迎へにやる。』
『いゝえ、お母さんのゐない間に、お話して置きたいんです、看護婦さんたちにも廊下へ出て頂いて下さいな。』
熱は高くても意識がはつきりしてゐるので、胡魔化しやうがなくて、
『何の話だ。みんな外へ出て貰つたよ。』
『さう。』

キングは―
國策の傳令・戰線銃後の慰問！
○時局の正しい知識が得られる
○時局に添ふ修養と慰安が得られる
是非！　キングを御覽下さい！
十月號いよ〳〵評判！　お早くお求め下さい。

熱つぽい目で、ぢいつと恒吾を見つめてから、
『お願ひが二つあるんです、眞面目に聞いて下さいな。』
それが遺言だと云はぬばかりに、恒吾の手を握りながら、
『もし、私に萬一の事がありましたら、平出くに子を探して、結婚して上げて下さい。』
『な、何を、馬鹿な。』
『眞面目に聞いて下さいと、たのんでゐるのぢやありません、私も眞面目に云つてゐるんです。』
『然し、そんな……』
『それが一つと、もう一つは、私が死んでも、實子には、本當のお母さんだと思はして置いて下さい、くに子と結婚しても、くに子が眞實の母であるとは知らせずに何時までも私を本當のお母さんだと思はせて、私にもそれを信じさせて、この世を終らせて下さいまし。』
『……』
『實子の本當の母親で死んで行きたいのが、私の最後のお願ひなんです。』
恒吾は何にも云へなかつた。
この世へ殘す願ひはたゞ一つ。眞實の母で死にたいいぢらしい望みばかりであつたのだ。

（つゞく）

こゝに崇高な二人の母がゐる！　歩んだ道は夫々に異つてはゐるが、物質を超越して精神の世界に生きる聖なる母性の姿に變りはない。二人の將來は果してどうなるのであらうか！　それは運命の神が握る秘密の鍵であり、作者の筆の進展にまつより外はない！

私の治病法

夜食の習慣から起つた胃酸過多症を治した體驗

＝眞壁質店の御主人が語る簡易治療法＝

胃酸過多症は胃病の中でも非常に多い病氣ですが、なか〳〵治り難く、養生には手を燒くものです。けれども左に御紹介する眞壁甚三郎氏は、飲食の不攝生から起つた胃酸過多症を極めて手輕に短期間の養生で、治療の實を擧げられました。この眞壁氏の貴重な御體驗は、必らずや世の多くの同病者の方々のこよなき治療方針となることゝ信じます。この一文によつて、快々と慢性胃腸病の痛苦に憂鬱な日々を嘆じてをられる諸兄姉の一人でも多くが健康の悅びに蘇生されゝば、この上ない仕合せに存じます。

×　×　×

山手線の惠比壽驛から近い下通の市電通りを一寸横に折れたところ、紺暖簾が下つたさつぱりとした廣やかな構への店――東京市澁谷區下通三ノ一六番地眞壁質店の格子戸を開けると、帳場に坐つてをられたのは恰度御主人の眞壁甚三郎氏、肩幅の大きなよく肥えた堂々とした恰幅に、艶々しい見るからに健康色に輝いた圓い溫顏を振向け、記者の訪問に應じられて、左のやうな御體驗談を披瀝して下さいました。

苦いゲップ

『御覽の通り、私は質店を營んでをりますが、何ぶん夜遲くまでかゝる商賣ですから、いろいろ夜食を攝る習慣がついて、それがため胃腸を壞してしまひました。

空腹時になるとお腹がチク〳〵痛み、苦いゲップが絕えず出る。食事は强ひて食べれば食べられぬことはありませんが、そんな調子で氣が進まず、自然不振の狀態になり、體重も減りました。胃酸過多症といふやつですね元來私は丈夫な體質で、目方は二十貫と下らなかつたのでしたが、この時はいさゝか瘦せました。それは恰度昨年の二月頃のことです。

胃散を服みましたが、どうも一時的のやうで、治る確信がもてません。しかし胃腸病は大事にならぬうちに治しておくことが肝腎なので、何かいゝ藥はないかと切實に求めました。

食慾が增す

その時、何かの雜誌に「錠劑わかもと」が

胃腸によく効くといふ記事が出てゐるのを讀んで、藥屋から試しに買つて服んでみることにしました。

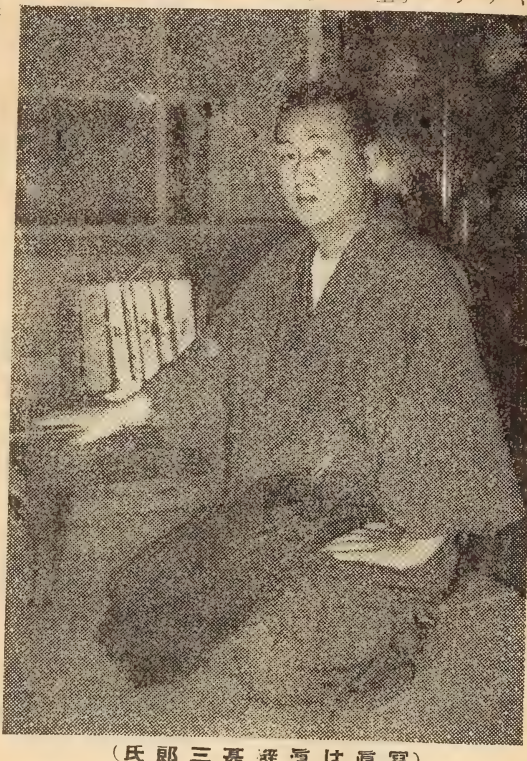
するとどうでせう。だん〳〵お腹が空くやうになり、食慾が增して來ました。同時に苦いゲップも次第にをさまり胃のチク〳〵した痛みも止りました。ですから胃腸全體の具合がとてもよく、氣分も爽快になり、食事が美味しく、目方も增えて、すつかり健康を取戻しました。今では目方が二十二貫あります が、この通り丈夫でそれ以來病氣をしたことがありません。』

と、ガッチリした逞しい腕を擦られました。

『で、今も「錠劑わかもと」をお服みになつてをられますか？』

と記者が尋ねると、眞壁氏は頷かれて、

『えゝ、今も服んでをります。「錠劑わかもと」は胃腸にいゝばかりでなく、榮養もたんと含まれてゐるので、常備藥として家中で食事每に服んでをります。この藥は他の藥と違つて、繼續すればするほど効果があるので、病を豫防し、健康を保つ上に持つてこいの藥だと信じてをります。』



（寫眞は眞壁甚三郎氏）

細胞を強める

眞壁氏が服用された「錠劑わかもと」は、二十五日分一圓六十錢で東京市芝公園わかもと本舗から發賣され全國藥店にある本邦唯一の複合藥用酵母菌劑で、既にその聲價は各方面に高められてゐますが、この藥を服用すると、細胞原形質賦活作用といふ獨特の働きによつて、胃腸の組織細胞を實質から強め、消化機能を正常化し、疾病異常を除きますから、胃酸過多症やその他の慢性胃腸疾患を治癒に導くことが出來るわけであります。

それと共に「錠劑わかもと」には、ビタミンB複合體を始め、ビタミンADE、アミノ酸、脂肪、カルシウム、燐、鐵の十數種の活性消化酵素やその他の榮養素を各種に亘つて多量豐富に含んでをりますから、この藥の服用によつて、よく日常食物に不足しがちな榮養を補給し、全身の抵抗力を強め、健康を增進いたします。

ですから眞壁氏が胃酸過多症を治された御體驗は、まことに合理的な次第で、この方法によれば極めて安全に且つ簡便に治療効果の實を擧げることが出來ます。

セキリ・エキリ・無害内服豫防劑
ヘテロゲン一號
腸チフス・パラチフス・ヘテロゲン二号

節食しても榮養は大丈夫

糧友會主事　外岡和雄

無駄はないか

『腹が減つては戰さは出來ぬ』と云はれてゐるが、現實には、今日ほど、節米、節食の必要が痛感されてゐる時代はない。この事は一見矛盾してゐるやうにも思はれるが、實はやり方によつては、ちつとも矛盾はなく、少く食べて、却つて能率を擧げることも出來るのである。物資の豐かなアメリカでさへ、第一次歐洲大戰の時には、玉蜀黍の粉で拵へたヴイクトリーブレッド、卽ち『勝利のパン』といふ物で滿足し、多量の小麥や砂糖や、肉類などを歐洲の戰場に送つた。それで、國内の元氣が失はれたかといふと、さうではない。益々士氣旺盛だつたさうです。今日わが國では旅館、料理屋などでは晝食には、米飯を出さない。デパートや會社などの食堂でも、晝は代用食にしてゐる。といふやうに、米の消費を節約してゐるが、まだ／＼犬、猫などを飼ふ人が減らない。

又お魚は、骨とか臓物とか頭とか尾鰭とか、平均四割も捨てられてゐるし、野菜類にしても其の二三割は無駄に捨てられてゐます。これでは可けないのだ。いたづらに犬猫などを飼ふことは止め、又無駄に捨てられる所を生かして用ひねばならぬ。工夫して、その榮養價を極度に生かすやうにやらねばならぬ。野菜類には血を綺麗にするところのヴイタミンCがありますが、是は非常に熱や鹽に弱いから、あまり長時間煮ないこと、漬物にしても卽席漬とか一夜漬とかにして食べることです。さうすれば、榮養價値を失はず、燃料の節約も出來ます。又大根の葉や、魚の頭のやうに食べ難いものは細かく切り團子のやうにまるめて、コロッケにして食べれば不味いものも美味しく食べることが出來ます。此のやうに、廢物利用の料理法を工夫研究していつたなら、量に於ては、少くなつても、質に於て榮養價の充分にある食物を攝ることが出來るのであります。

過食してゐないか

食べ物の量を少なくしたからといつて、すぐ痩せ細つたり、仕事の能率が低下するやうに考へるのは間違ひだ。從來、習慣から、滿腹

感を滿たすために不合理に詰め込み過ぎてはゐなかつたか、或は、自からの要求で必要以上に食べてゐたといふことはなかつたらうか、さういふ人は量の限定をすることによつて却つて健康になる。

今まで筋肉勞働をしてゐた人々が、新兵として入營する際に、軍隊では飯を澤山くれないと云つて心細く思ふさうですが、成る程、一升飯をたべてゐた人々にとつては、軍隊の飯の量はずつと少い。然し軍隊生活に慣れて來ると、量に於て滿足感を得るばかりでなく、猛烈な肉體的訓練と、精神的の緊張とを二ケ年半も繼續して、しかも除隊する時には、入營した時よりもみんな體重が殖えてゐるといふことです。軍隊の食べ物程、榮養の上から見て、又保健の上から見て、合理的に研究されてゐるところは恐らくないでせう。

軍隊ばかりでなく、工場や、農村に於ける農繁期の共同炊事などで、大勢の賄をやつてゐる所の成績を見ますと、合理的の食べ物は、その分量が從來よりも少いが、健康は却つて增進してゐる事がはつきりと現はれてゐます。

この合理的な食べ物を作るといふことは決して難しい事ではなく、その心掛さへあれば、毎日の新聞や、毎月の雜誌、或はラヂオなどを通していくらでも必要な知識は得られるのであります。

脂を食べて結核豫防

それについて、具體的に二、三言つて見るならば、精白米を食べると、ヴイタミンBの缺乏から脚氣を起します。ヴイタミンBの不足は脚氣ばりかでなく結核にも罹り易い體質にします。ですから是非とも糠や芽のついた黑い米（玄米、七分搗米、半搗米）を食べることです。

都會の人は概して御馳走を食べ過ぎる人が多く、從つて血や肉の元になる蛋白質を攝り過ぎるので、腎臟を疲らせ、早く老衰病を起すことになつたり、仕事の能率を低下させたりすることになります。血や肉を作るに必要な蛋白質は、魚肉で云ふなら大體一日に切身一つで足りるのです。これ以上食べる人は大體食べ過ぎだといふ事を考へて然るべきです。お魚と云つても、鯛とか鮪とかのやうな上等な魚よりも、鰯とか鰊と云つたやうな魚の方が安くもあり、榮養價も多いのです。農村の人や勞働をする人々は、主として蛋白質を米から攝つてゐますが、米には蛋白質が少いから澤山の米を食べないと、お魚一切だけの榮養價が得られないのです。從つて七合、八合、若しくはそれ以上大量の御飯を食べる事になります。

然し合理的な保健食でありますと、いろ〳〵の物から適當に榮養を攝りますから、米の量は從來の三分の二、又は半分に減る譯で、然も榮養價に於ては從

航空日が制定されました。今年は**九月二十八日**です。

來よりまさるといふ事になるのです。
　次に日本人は一體に脂の食べ方が少い。最近結核が多くなつて、大きな社會問題になつてをりますが、脂を相當量食べるといふ事に、結核豫防にもなるのです。現在の日本人の用ひる脂の量では甚だ不足してゐるのであります。初め一時に澤山食べるといふことは、消化の上からも、臺所經濟の上からも、工合が惡いでせうから、少しづつ殖やして行き、少くとも一ケ月一軒の家で一升位は消費すべきものだと思ひます。
　此のやうに榮養上缺けるところがないやうに心掛けて行きますと、食べ物の分量は最低の必要量で足りる事になり、此の理解さへあれば、節米といふ事もさほど難しい問題ではないと思ひます。
　勿論節米の問題については、麥、その他の雜穀、或は薯類、野菜類をまぜて炊くとか、パン、麵類を用ひるとか、色々の方法もあります。いづれにしても、米ばかりを主食とせず、何でもある物を食べ、しかも習慣的な過食を改め、食物榮養の配合に過不足ないやうにしたいものです。
　榮養研究の結果から見ても、又各地の人々を調べて見ても、米を主食としてゐる所より、雜穀や、雜穀の混食をしてゐる所の方が、健康狀態はずつといゝといふ事です。寧ろ米を少くして雜穀や薯などで、適當に補つて行く、そして量を減らしても却つて我々の榮養や健康を維持增進させるやうにしたいものです。地方の情況によつて、それ〴〵事情が違ふでありませうし、こゝでは、具體的に細かには述べられませんが、各自が、合理的に科學的に工夫研究して、ぜひ工合よくやつていただきたいものです。

（終）

△**英國の敗亡近し**
「その後に來るべき世界はどうなるか、日本はどうする、右に關する一流權威の大座談會は現代十月號にあり。

現內閣の異彩
△**橋田文部大臣とは**
「どんな人か、明快なるその人物評論は現代十月號にあり。

△**第一回航空日來る**
「興味と感激の特輯記事は現代十月號にあり。

△**戰勝獨逸は如何に**
「準備したか、その詳細記事は現代十月號にあり。

△**讀切小說傑作八篇**
「吉田絃二郎氏、榊山潤氏外六氏の名篇現代十月號にあり。

（**現代は八十錢　九月十三日發賣**）

全國の愛讀者皆樣、九月七日から二十日迄恒例の『雜誌週間』が催されます。此の機會に私共は皆樣と共に、國家の此の大發展大飛躍の時に際し、雜誌の使命が如何に重大であるかに想をめぐらして見たいと思ひます。

國家と雜誌と皆樣

世界の中で吾等國民ほど美しい傳統精神を持ち續け、知識慾の旺盛なる國民はありません。個人に於ても知識慾旺んな人は心は常に青年である如く、國家も同樣、吾が日本が二千六百年の堅固なる礎の上に立ち、常に潑剌たる青春の熱と勢ひとを以て躍進又躍進を續けて參つた所以は、國民が傳統精神を重んじつゝ旺盛な智的活力を縱橫に働かせて來た爲であります。今皆樣が手にして居られる此の雜誌、これ又國民の傳統を重んずる精神と若々しき知識慾の證明であります。

愛讀者皆樣、今や吾等は傳統の智的活力を一段と力強く發揮しなければならぬ時であります。吾が國はその潑剌たる若さを愈々強く維持すべく新體制に入らんとして居ります。新體制を實現するためには、全國民の協力が絶對に必要です。そして眞の協力は眞の認識から出發します。

國家の新しい仕組みに伴つて、吾等の日常生活は如何に改善すべきかを充分に知らねばならないのです。知れば進んで國策に協力して、此の新體制を一日も早く實現させようといふ心構へが湧上つて參ります。故に先づよく知ることが第一です。私共雜誌の仕事に携る者は全力を傾けて、皆樣に國策を分り易く興味深くお傳へするために努力致します。どうか皆樣におかれては、雜誌を讀むことは自身に力を付けると同時に、國家に力を付けることだとお考へ頂きたい。さうして、國家の發展に協力することに依て御自身を發展させて頂きたいのであります。

更にまた私共は、雜誌に依る慰安の價値を重要に考へる者であります。活動的な國民ほど慰安を必要とします。慰安は疲勞を恢復させ、次の活動のための元氣を蓄積するからです。獨逸でも『樂しみを通しての力』といふ國民慰安の施設が出來て居るのであります。

慰安の方法はいろ〳〵あるが、雜誌ほど、健全で有效で一般向きで、しかもこの位費用の少い慰安は恐らく無いでせう。私共は戰線に銃後に、國家のため日夜大活動を續けられる皆樣の元氣の泉となる樣な面白い樂しい讀物を出來るだけ澤山載せて參ります。

愛讀者皆樣、どうか國家と雜誌と皆樣との間の緊密なる繫りに思ひを致され、今後益々御協力賜らんことを切願申上げます。

大日本雄辯會講談社
富士編輯局

伊勢大廟に額く

外務大臣
拓務大臣　松岡洋右

紀元二千六百年の八月、私は親任報告のため皇大神宮、橿原神宮、桃山御陵、熱田神宮に參拜して新たなる感激をおぼえた。伊勢では森嚴なる內宮、外宮の神域は折柄の雨に靜もり、一入の神々しさを加へ、かしこみ、をろがみまづる我が身も心も清められて、皇運の彌榮と、國運の隆昌とを祈り奉つた。また大和では橿原神宮に參拜して肇國の大業を偲び奉り、八紘一宇の大精神のいよ〳〵光輝を加へんことを祈り奉つた。私が茲にとくに述べたいと思ふのは、此の伊勢參宮の折、內宮の神樂殿に於て拜觀した三つの神舞に就てである。

內宮の神舞については、七年前、私がゼネーブに於ける國際聯盟會議に全權として派遣された歸朝報告に參拜した節、はじめて之を拜觀して極まりなき感銘を受けたので、當時、當局者に向つて、これだけの立派な神舞が日本にあるといふことを何故國民に知らさないのか、之を映畫化して一般國民に見せ、國民が日本に古來此の樣に立派な神舞があるといふことを知つたならば、恐らく西洋流の輕佻なダンスなどは霧消するであらうと、折入つてお願ひしたのであつたが、今回再び之を拜觀する機會を得ていよ〳〵その感を深くしたのであつた。固陋な考からすれば、神舞を映畫化するなどと云へば、何か神聖を傷つけることの樣に思はれるかも知れないが、決してさうではない。之を廣く國民に知らすことは、國民精神を振興する捷徑であると信ずる。

私共が拜觀した三つの神舞は、倭舞、人長舞、倍臚の三舞である。

倭舞は、緋の長袴を穿き、白の千早を著け、紅梅の天冠をいたゞき、右手に五色絹を飾つた榊を持つた八人の巫女が『みやびとのさせる榊をわれさしてよろづよまでにかなであそばむ』といふ倭歌に合はせて舞ふのであるが、ほの暗い神樂殿に伴奏

の笛、篳篥の妙なる音にまじる神さびた和琴の調べを聽きつつ此の優美な神舞を觀るのは、まことに伊勢にふさはしい神事であつた。私には固より森嚴な神舞の意味は分らないが、私かに此の倭舞は、日本女子の貞節を象徴する舞であると解釋してゐる。

次に人長舞が舞はれた。此の舞は上古から我國獨特の神事舞として尊重されてゐたもので、卷纓の冠に綏をつけ、小忌衣に太刀を佩き、手には御鏡に擬した白い輪の附いてゐる榊を持

伊勢神宮參拜の松岡外•拓相

つたゞ一人の人長（神樂人の長）が『そのこまぞや•われにわれに、くさこふ、くさはとりかはん、みづはとり、くさはとりかはん』といふ歌に合はせて力強く舞ふのである。私は之を拜觀して非常に心をうたれた。森嚴雄大と評すべきか、私は、これは誠に我が肇國の精神を象徴した神舞であると拜察する。換言すれば、八紘一宇の精神を舞の形にあらはせば即ち此の人長舞になると私は拜察する。『上は即ち乾靈の國を授け給ひし德に答へ、下は即ち皇孫の正しきみちを養ひ給ひし心を弘むべし。然して後に六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲さむこと亦可からずや』と宣り給ひし彼の神武天皇の御德をたゝへて此の舞人は舞ふのである。此の神舞を拜觀してゐる間に私の心は自ら我が悠久の建國の古にかへつてゆくのであつた。私には、また此の舞人が天の浮橋に立つて滄溟をさぐる神々の姿をここに現じて舞つてゐる樣にも見えた。

彼の日本書紀卷の第一にある『伊弉諾尊と伊弉冉尊と、天の浮橋の上に立たして、共に計らひてのり給はく「底下に豈國無からめや」と宣り給ひて、すなはち天の瓊矛を指し下して探り給ひしかば、こゝに滄溟を得き。その矛の鋒より滴瀝りし潮凝りて一つの島に成れり。名づけて磤馭盧島と曰ふ』云々といふ壯大な大八洲國出生の神話が此の神舞を拜觀してゐる間に自ら思ひ浮べられたのである。私はかういふ森嚴雄大な舞を伊勢大廟以外に於て拜觀したことはない。まことに畏きことで

ある。

私は出來れば此の舞だけでも早く映畫化して國民に知らせたいと思ふ。私は此の舞を拜觀して感銘の餘り拙いながら次の樣な句を作つた。

『昭和庚辰の年、初秋吉日に大廟內宮神樂殿にて人長の神舞を拜觀して建國の神勅を目のあたり奉ずるの心地しければ、

天のはしに滄溟さぐる黎明かな』

此の人長舞の次に四人の武人が舞ふ倍臚の舞がある。これは金襴の鳥甲を冠り赤色の裲襠裝束に太刀を佩き、鉾と楯とを持つた武人が勇壯活潑に舞ふのであつて、推古天皇の御代より今に傳へられ、古來戰勝祈願、凱旋祝賀等の際に用ゐられ、八幡太郎義家は出陣毎に此の曲を奏して士氣を鼓舞したといふ。これは近年久しく行はれなかつたのを日清戰爭の平和克服の御祝宴に、明治天皇が特に宮中で、此の舞を奏せしめられた由、洩れ承る。私の解釋にすれば、倭舞が日本女子を象徴した舞であるとすれば、これは日本男子の勇武を象徴した舞である。而もその勇武の舞の中に於てさへいふにいはれぬ穩やかさがたゞようてゐて沈毅の相がその中に現はれてゐる。これが日本民族の國民性そのものであると私は信ずる。八紘一宇を象徴する神舞を中に挾んで優美と勇武の神舞があり、此の三つを併せ見て實によく日本精神があらはされてゐると感ぜしめられる。私は此の神舞を見て我が外交についても大に考へさせられたのである。

人長舞

從來我が國の外交は歐米の糟粕を嘗めて來た。否、切言すれば歐米の糟粕中でも一番惡い所をも餘程とりいれたといつても過言ではない。これが我が外交の根本の病であつた。今此の神舞にあらはれた日本人の姿を見ると、おほらかな、人に迫らぬ心の姿勢の中に、自ら底力のある沈毅の態度を藏してゐる、日本の外交も此の姿勢でなければならぬ。即ち此の日本民族の眞の心と形とを、政府と一億國民が一致協力して發揮するのでなければ我が外交もほんものにはならないと信ずる。私がゼネーブから歸朝以來、我が國民は須

らく伊勢大廟に參拜して自分の心と形とを神鏡に映して之を正せと叫んだ所以もこゝにあつたのである。私は、以前から、支那問題に就ても、又歐米問題に對しても、日本人は決して人眞似をするな、彼等のやり方を眞似たのでは結局眞似で駄目だ。眞似は鍍金に過ぎないと云つてゐる。日本人は日本人の血管を流れてゐる古來の血、卽ち我が日本民族の本然の流れに從つて進む以外に道はないと私は信ずる。

我が國民は神武天皇肇國のはじめより二千六百年の間、その御詔勅に仰せられた八紘一宇の理想を以てすべての國策の指導原理とし來つたのである。これは總てに對する正當にして公平なる平和を意味する。卽ち各國民が他から干涉又は障碍をうくることなしに各〻その道を行かしめ、その所を得る樣にせしむる世界平和——之が我が國が古來その理想として掲げ來つた平和の理想である。此の理想を吾人は先づ大東亞の地域に實現せんと欲する。東亞共榮圈の建設が卽ちこれである。これは征服や搾取とは凡そ正反對の考である。吾人は此の眞の世界平和の理想が大東亞のみならず世界のいかなる地域に於ても實現されんことを熱望して止まない。これが我が八紘一宇の理想であり正義にして眞正なる平和實現の途である。

（終）

何うなるものか、この天地が。もう人間の個々の振舞ひなどは秋かぜの中の一片の木の葉だ。

巨匠吉川英治不朽の名作！

宮本武藏

普及版全八册

定價各册 一圓 送、一〇

↓之はあの八巻に亙る大作『宮本武藏』の書出しだ。然もこの一句こそ、現下の非常時國民すべてに通ずるものではないか。知るべし、本書が銃後文學の最高峰として、聲價いよ〳〵高く、賣行いよ〳〵增大する所以を。正に日本人の魂を磨く名著！

●吉川英治著 親鸞

天の巻、地の巻二巻各二圓五〇、送一四

源平盛衰を背景に、人間親鸞の苦業、煩惱情熱信念を描く正に萬人の心を淨める名書

東京・小石川（振替東京三九三〇）

大日本雄辯會講談社

銃後物語

任侠鶴嘴部隊

安倍季雄
高木清畫

二年ぶり

『いふまいと思へど今日の暑さかな——昔の人はうまい事をいつたもんだなあ。いふまいと思へど今日の暑さかな。全くだ。戰地で苦勞してゐなさる兵隊さんの事を考へると、じようだんにも、暑いなんて言へた義理ではないが、やつぱり凡夫のあさましさだ。わしのやうな肥つちよはかなはんよ。』

『本當ですわね。でも泣き言は禁物よ。南支では、兵隊さんのかぶつてゐる鐵甲が火のやうに燒けて、うつかりさはると、火傷をするといひますからね。』

話半ばに、格子戸をがらりとあけて、どや〳〵と入つて來たのは外山組の配下の面々だ。

所は淺草の藏前、主人は外山市助といつて、任侠で賣出した快男兒、同業者仲間にも、相當、顏の賣れてゐる土木請負業者だ。

『親方、唯今歸りました。』

取締格の辰藏の音頭で、一同は異口同音に頭をさげた。どの顏も、陽にやけてまつ黒だ。

『おゝ、歸つたか〳〵。』

配下思ひの市助は、眼を細くして、

『いや、御苦勞々々。誰も病氣をしなかつたと見えるな。うむ、よかつた〳〵。さあ〳〵素つぱだかになつて、寛げ〳〵。』

『御苦勞さん！　まあどんなにくたびれたらうねえ。それに、近頃はどの汽車もこんで、大變ださうぢやないか。』

『へえ、おかげさんで――。留守中は家のやつらにまで、いろいろお心付け下すつたさうで、有難うござんした。』

『あれから丁度二年ぶりだな。――やれ石炭だ、電力だと、政府をはじめ國中が一生懸命の折柄だ。お互の働きが、少しでもお國のお役にたてば、こんな嬉しい事はない。』

一介の土工からたゝきあげたといふ經歷の主人公だが、人一倍配下思ひの市助だ。昔のまけじ魂は、年齢と共にすつかり圓熟したが、はや還暦をこえた昨今でも、事あれば國防服に身をかためて、町内の先頭に立たうといふ評判の元氣者である。

『そこで早速凱旋祝ひに、何はなくとも一杯といふところだが、今日は生憎と興亞奉公日だ。酒抜きの一汁一菜、しかも外米七割のボロ〳〵御飯だ。がまんして腹一ぱいやつてくれ。』

ならべられた人數だけの御膳の上は、文字通りの一汁一菜だが、主人夫婦の溫情は、山海の珍味にまして一同を喜ばせた。

『御馳走さんです。俺等だつて日本人でござんす。一寸の虫にも五分の魂とやら。かうしなくつちや國が立つてゆかねえとなりやなんの、酒や煙草ぐらゐ、今日にもきつぱりやめて御覽に入れますよ。なア兄弟！』

『さうとも〳〵。はじめて御目にかゝる外米さんだ。喜んで頂戴いたしますよ。』

腹のへつた時にまづい物なしの喩どほり、外米も七分づきもあらばこそだ。食ふわ〳〵。給仕役のおよしも女中のお米も、手のあくひまもないほどのいそがしさだ。

たちまち七八杯ペロリと平らげて、舌鼓をうつた辰藏は、爪楊子をつかひながら、ふと思ひ出したやうに、

『さう〳〵、汽車といはれて思ひ出したが、ねえ親方、今日、郡山から上野までの汽車の中で、珍しい方に御目にかゝりましたよ。』

『ふーむ、珍しい方つて、誰だね？』

『そら、親方がいつも噂をしておいでなさる磐代炭鑛の遠山さんと支配人の元田さんですよ。』

『なに、遠山の旦那にお目にかゝつたつて？　そりや珍らしいな。どうだつたい、相變らず御繁昌のやうすだつたらうな？』

『へーえ、それがねえ……』

と、辰藏はいさゝか口ごもりながら、

『何しろまあ、早い話が、あつし等と同じ三等の客車に、ツクネンと坐つておいでなさるんで、最初はあつしも、つい氣がつかなかつたやうなわけなんです。』

『はあてね。もと〳〵ぢみな方ではあつたが、それにしても赤

切符はちと變だな。どうかなすつたのかな。』

思はず腕ぐみをして考へこんだ市助の眉には、解きれぬ謎がのこされてゐた。

舊恩人

それもその筈、今しも二人の話題にのぼつた遠山爲次郎といふのは、福島縣きつての炭鑛主といはれたほどの人で、外山組をして今日あらしめた大恩人なのである。

『まだかけ出しの儂が、わづか二三年で羽根をのばすやうになつたのも、みんな遠山の旦那に引立てゝ戴いたおかげだ。』

時をり市助がさう述懐する通り、やつと獨立したばかりの外山市助を引きたてゝ、その經營する炭鑛の開鑿工事を、次から次と請負はせてくれたのは、當時、日の出の勢ひの遠山であつた。

それから數へて二十幾年、世と共に人もうつり、やがて東京に根をおろした外山市助は、その後も季節ごとの見舞は怠らなかつたが、東京と福島と、遠く隔つてゐるだけに、いつとはなしに互ひの消息もとだえがちではあつた。併し、遠山の恩は一日とて忘れる時はなかつたのである。

『するとまあ、お見受けしたところ、あまりお盛んの樣子ではなかつたといふんだね。』

『へーえ、さうなんで……。あつしはまだ小僧の時分でしたけれども、あの頃の遠山さんの御威勢といつたら、すばらしいもんでしたからな。その時分にくらべると、お身なりといひ、御樣子といひ、まるで別人のやうなおかはり方なんで、實はあつしもびつくりしたんですよ。』

『どうなすつたんだらうなあ。人間萬事塞翁の馬で、浮き沈みは誰にもある事だが、あれほどの御器量人が、まさかそのやうに零落れなさらうとは思はれないが……。なあおよし！』

『人間の運といふものは分りませんからねえ。もし事實なら、本當にお氣の毒ですわねえ。』

しんみりとかういつたおよしは、

『ねえお前さん、東京においでになつてゐるのなら、一度お訪ねして見たらどう？　辰どん、お宿をきかなかつた？』

『元田さんのお話では、たしか上野の長生館とかいつたやうですが……』

『うむ〳〵、長生館々々。遠山さんの昔からの定宿だよ。――何はともあれ、久しぶりの御上京だ。御不沙汰の御詫かたがた、是れから直ぐにおたづねして見よう。』

市助はいつものせつかち、さういふ間にもうたちあがつて、身仕度もそこ〳〵、

『では出かけて來るぞ。お前たちも腹を拵へたら、早く宅にもどつてかみさんや子供たちを喜ばせてやるがいゝ。何といつても二年ぶりの御歸館だ。みんなが首を長くして待つてゐるにち

げえねえ。――おゝ忘れてゐた〳〵。およし、さつき銀行から出して來た金子を、みんなにわけてやつてくれ、いゝな。ぢや、みんな、あとでまたゆつくり會はうぜ。』

挨拶もそこ〳〵、ガラリと格子戸をあけて急に氣がつき、

『おいおよし、忘れ物だ〳〵。財布々々。年をとるとだらしがねえや。』

表は相變らずの蟬時雨、どこかで夕立がしてゐるらしく、遠雷の音が斷續して、ごろ〳〵〳〵、ごろ〳〵〳〵。

浮き沈み

上野驛前の長生館といへば、昔から地方人にはなじみの商人宿だ。

その奧まつた一室に、先刻からしめやかに語り合つてゐるのは、はる〴〵上京した問題の遠山爲次郎と、驛まで出むかへた娘の多喜子――女子醫專で勉强してゐる末の娘だ。

『人間の運勢といふものは、下り坂となるとガラ〳〵だ。する事、なす事いすかの嘴、自分ながら愛想が盡きたよ。一時はわしもあきらめたが、病氣が癒つて見ると、ぢつとして居られないのが儂の性分だ。老後の思出に一旗あげて、もう一度、お國のお役にたちたいと、かうしてのこ〳〵出て來たわけなんだがね。』

われとわが身を勵ますやうな笑聲さへうつろにきこえて、部屋の調度にふさはしからぬ貧しい老父の姿が、親思ひの娘の眸には一層悲しくうつるのであつた。

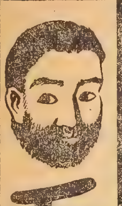
『でもお父樣、私、お父樣のおからだが一番心配なのよ。そりや事業も大切でせうけれども、そのために、せつかくお癒りになつた御病氣が、またぶりかへすやうな事があつたら、どうなさるおつもり？ せめて兄さんでもゐて下さればいゝけれども、南京攻擊で名譽の御戰死……。

ねえお父樣、此の際、さつぱりと思ひあきらめて下さるわけにはいきません？ 私だつて學校をやめて働きさへすれば、お父樣一人ぐらゐどうでもなるわよ。決して御不自由はかけないつもりよ。』

『ハッ〳〵〳〵、何をつまらん事をいふんだ。年こそとつたがわしはまだ、お前の厄介になるほど老いこみはせんぞ。』

『あら、厄介だなんて……わたし、そんな意味で言つたんぢやありませんわ。』

『まあいゝ〳〵。果報は寢てまてといふ


新しい時代には新しい除毛劑にて

殿方の硬毛に、御婦人の深毛へ

毛深

近代人待望の除毛劑出現！ 男女毛深く不愉快の方は是非一度お試しを乞ふ。注意從來の脱毛劑とは其の性能を異にす。雜誌名記入申込次第説明書急送す。

東京市淺草區千束町一の十九

芙蓉堂

諺もある。大船にのつたつもりで、お前は勉強をつゞけるがいゝ。それが何よりの親孝行といふもんだ。』

老父はこゝでちよつと言葉をきつて、

『多喜子や、お父さんはなあ、自分が榮耀榮華をしたいために思ひたつた仕事ではないんだよ。お前も知つての通りの御時世だ。場合によつては、金銀よりも、一塊の石炭の方が貴いくらゐのものだ。その大切な資源を開發して、國家の御用にたてるのが、最後の御奉公だと、わしは信じてゐるのだ。』

身體は衰へても、老人の意氣は決して衰へてはゐなかつた。話に油がのつて來ると、しぜん、顔色もいき／＼と輝いて來る。

『それはよく分つてをりますわ。……それで、今度お掘りにならうといふ山は、どこですの？』

『例の三番坑だよ。五年前につぶれたつきり、廢坑同樣になつてゐる、あの豐富な炭層を、此の際、是が非でも掘出さうといふ計畫ぢや。あれさへ復舊して國家のお役にたちさへすれば、わしはいつでも笑つて死ねるんだ。』

『でもお父樣、あの三番坑といふのは、とても大變な落磐だつたやうにおぼえてゐますけれども……。そんなにたやすく復舊する見込みがありますの？』

多喜子の顔には、なほ一抹の不安と憂色があつた。子供心にふかくきざまれた當時の慘事、――急激なる地辷りによつて、坑道の大半を埋めつくされた、あの大きな災厄が、今まざ／＼と眼の前によみがへつて來たからだ。

『無論、たやすくといふわけにはゆかないが、資金と人手さへあれば、必ず成功するにきまつてゐる。

あの當時は、お前も知つての通り、馴れない石油事業に手を出して、散々失敗した直後の災厄だ。殘念ながら手も足も出せなかつたのだ。』

『その資金の出所がありますの？』

『ある！　今に元田が歸つて來れば、委細の樣子が知れるよ。既に兩三回、書面で先方と打合せた上での上京だ。今度は間違ひないよ。』

『それが出來れば結構ですけれども……』

『大丈夫だといふのに！　ハッ／＼／＼。若いに似合はず、お前も案外取越し苦勞屋だな。』と一笑したが、

『それにしても、元田はどうしたらう？　もうとうに戻つて來てもいゝ頃だが、ばかに遲いなあ。』

とつぶやきながら、俄かに時計を出したり、ひつこめたりする父の樣子を見ると、多喜子は、此の上根掘り葉掘りして、父の心をみだす氣にはなれなかつた。

『本當に遲いわねえ。どこかに寄り道でもしたのか知ら？』

いつも影の形に添ふがごとく、父のそばをはなれた事のない老支配人が、大切な主人の用を抱へて、途中で道草をくふ筈はない。

『もしや……？』と思ふと、多喜子の腰は落着かなかつた。

『多喜子、お前、氣の毒だが、先方に電話をかけて、こちらの元田といふ男が伺つてをりませんかと、ちよつときいて見てくれないか。えゝと電話は……』と、机上の手帳をとりあげた時だ。

『遅くなりました。』といひながら、しほ〳〵と入つて來たのは待ちかねてゐた元田支配人であつた。

『おゝ待つてゐたよ。結果はどうだつた……』といひかけた遠山老人は、元田支配人の顔色を一目見ると、

『駄目だつたのか？』と一言、かたく結んだ唇の色は變つてゐた。

『旦那、申譯がありません。何もかもめちや〳〵です。』

『うーむ、今になつて、太田さんがいやだといふんだな。』

『いゝえ、そんな事ではないんです。太田さんが、一昨日、腦溢血でお倒れになつたのです。』

『うーむ、卒中だね。そして、經過はどうなんだ？　よつぽどお悪いのか？』

『取次に出た執事の話では、二度目だから今度はむづかしからうと醫者が言つてるさうで、すつかり途方にくれてしまひました。』

元田支配人はたまらなくなつて、思はずハラ〳〵と落涙した。

珍客到來

死のやうな沈黙が、一座の心を一層暗くした。

『萬事休す焉！　わしの運命もこれつきりか。』

つぶやくやうにかういつて、遠山老人は、やゝしばらくは身動きもしなかつたが、ふと多喜子のすゝり泣きに氣がつくと、

『いや、何ごとも天命だ。今さらあわてたところで仕方がない。今日は今日、明日はまた明日の風が吹かうといふものだ。今度の事は潔く斷念して、直ぐに國に歸る事にしよう。ひとつ汽車の時間をしらべて下さい。』

『でもお父様……』と、多喜子が何かいひ出さうとした時、廊下に手をついた係の女中が『お客様でございます。こちらにお通ししてもよろしうございませうか？』

『お客様？　何といふ人かな？』

『お名前はおつしやいませんでしたが、でつぷり太つた、まるでお角力さんのやうな方でございます。』

『その通り〳〵。』と、後から笑ひながら、遠慮なく入つて來たのは別人ならぬ、外山組の親方、外山市助であつた。

『おゝ、外山さんぢやないか。これは〳〵珍らしい。よく、わしの上京がわかりましたな。』

『わからんでなんとしませう。人間には匂ひといふものがあります。勘といふものがあります。ワッハッ〳〵〳〵。』と大笑した市助は、急に改まつて、

『これは〳〵、お挨拶もいたしませんで、とんだ御無禮！　思ひながらとかく御無沙汰ばかり申上げまして、何とも申譯がありません。實は辰のやつが、汽車の中で旦那方と御一緒だつたさうで……』

『うむ〳〵、辰藏さん〳〵、今やつと思出しましたよ。汽車中で思ひがけなく挨拶されたが、こちらにはさつぱり見當がつかない。先刻も元田とその話をしてゐたところですよ。あの人は、たしかあんたの一の子分だつたな。』

『ハッ〳〵〳〵。親方づらも面目ありませんが、手前が外山組とか何とかたてられるやうになりましたのも、みんな旦那のおかげだと、いつもうちの若い者等に話しをしてをりますんで、辰藏が歸る早々、早速の報告、がまんにもぢつとしては居られませんや。おつかれの處を御迷惑とは存じながら、しやにむにお邪魔にあがつたやうなわけで、へい。』

『いや、よくおたづね下すつた。かうしてお目にかゝるのも何年ぶりでしたらうなあ。』

『月日といふやつには、關守がございませんで、御同様、年をとりましたなあ。早い話がお嬢様……これが一番末のお嬢様でいらつしやいますか。わしがお目にかゝつたのは、やつと這ひ〳〵がおできになつた頃、それがこんなにお大きくおなんなさるんですからなあ』と、今更のやうに成人した多喜子の様子を見まもりながら、

『して、今度御上京の御用向きは、無論事業の御擴張でございませうな。どうでせう、長い間のおなじみ甲斐、是非もう一度お手傳ひをさせて戴きたいもんですが。昔とつた杵柄とやら、かう見えても、鶴嘴

を握らせては、まだ／＼若い者にヒケは取らないつもりでございますよ。』

『いや、有難う。御厚志はまことに辱けないが、外山さん、此の儂はもう昔の遠山ではありませんのぢや。人間は七ころび八起きといふが、人間一度おち目になると、まことに――たわいもないもんでなあ。現に此度の上京にしても……』と前置きして、不運と病魔と戰ひながら、雌伏十年の苦境から脱して、今度こそはと立あがつた最後の望みも、頼みにして來た金主の重患……。

『何もかもおしまひです。遠山の運もこれつきりと、今も今とて歸國の汽車時間を調べてゐるやうなわけでな。』

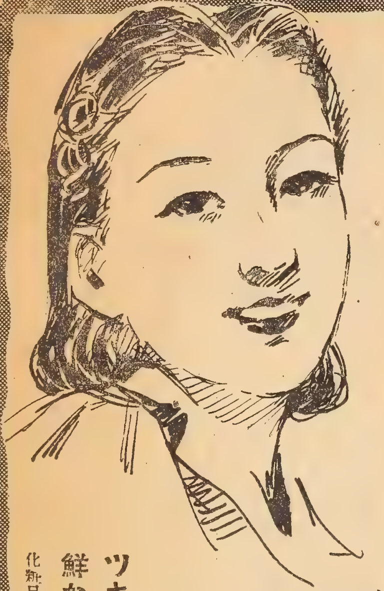
默つてきいてゐた市助は、やがて靜かに兩手を疊の上について、

『旦那、お願ひでございます。その三番坑の復舊工事を、此の外山にお委せ下さるわけにはゆきますまいか。市助も男でございます。生命にかけても、必ず仕遂げて御覧に入れますから……』

『ま、ま、まつて下さい。どうぞ／＼その手をおあげ下さい。いつにかはらぬあんたの御親切は、身にしみて嬉しく思ひますが、今度だけはどうにもお願ひができんのです。二千や三千の端金で濟むやうな手輕な工事なら、やせてもかれても遠山爲次郎、どうにでもやりとげて見せますが、至難中の至難工事、三番坑の復舊たけは、しつかりした金主がつかない限り、手のつけやうがないのです。』

皆まで言はせず市助は、

『ぢや、お前の手には負へないとでもおつしやるんですか？』と、わ


清楚な健康美に！
銃後女性のお好みにピッタリ適つた豊かな色合！

口紅
ローズ・ダーク・オレンヂ・ローズオレンヂ・セリーズ・ライトレッド・ナルビーカラー
小判型・角型・丸型・筋入型・BG・ケース・黒罐・角型

頬紅
ピンクローズ・ダーク・オレンヂ・ローズオレンヂ・メヂューム・ローズ・インデアン・カーミン・サンバーン
蝶番罐・新型・ホイル入

ツキ・持ち・伸び潤ひ新鮮な色調すべて滿點！

東京市日本橋區蠣殼町二ノ五
發賣元 鈴木福次郎商店
電話茅場町三六七三番
振替東京三五三二番

化粧品店・講談社代理部にあります品切の節は發賣元へ

ナルビー
☆口紅☆頬紅

ざと氣色ばんでから反問したが、直ぐといつもの笑顔になつて、いきなり遠山の前につき出した二本の腕。

『旦那、御安心なさいまし。年はとつても、市助の腕はまだしなびちやをりませんぜ。憚りながら此の腕が、外山市助の全財產、かけがへのない生命です。そりや、なるほど、今直ぐこゝに何十萬圓の金をつんで見せろとおつしやられたら、へーえ、左様ですかと、頭をさげて引下る外はありませんが、身體ごとぶつかつてゆく仕事なら、どんなむづかしい仕事だつて、びくともするわけぢやござんせん。旦那！人間、恩を忘れたら、犬畜生も同様ですぜ。外山市助は日本人です。こんな時にだまつて引込むやうな骨なしとは違ひますぜ。まして仕事は、時局になくてならない大切な石炭だ。日本國として、だまつて、指をくはへて見て居られますか。旦那！　かう見えても市助は自分の身體以外、眼に見えない尊い財產を持つてゐますぜ。あつしの爲なら火の中へでも、喜んで飛び込まうといふ若い者が、百人あまり居るんですぜ。失禮ですが食扶持から雜用一切こちら持ちで、立派にやつてお目にかけませう。夜晝ぶつとほしに頑ばつて、秋までには屹度目鼻をつけてお目にかけますよ。』

誰かいふ、人情薄き事紙の如しと。任俠は必ずしも德川時代の特產物ではない。一度恩に感ずれば、水火をも辭せざる此の俠氣よ。この熱情よ。

感きはまつた老支配人は、思はず疊に額をすりつけながら、

『あゝ、よく言つて下すつた外山さん！　地獄で佛とはこの事です。この通りです／＼。』

元田支配人は、手を合せて拜まんばかりだ。

『外山さん！　まけをしみを言はずに、喜んで御厚情を受けませう。この御恩は一生忘れません。』

年をとると、誰でも淚もろくなるものだ。ましてこの場合に於いてをやだ。

　　おちぶれて、袖に淚のかゝる時
　　　人の心のおくぞ知らるゝ

人生、意氣に感ずるといふ。こんな時に泣かなかつたら、泣く時はない。惡のむくいは惡、善のむくいは善、他人にはできるだけよくして置くべきだ。報いを求めるためではない。人は、できる時に、もろもろの德をつんで置くと、思ひがけない時に、神の手、佛の手がのびて來るものだ。

『旦那！　御恩だなんて、何です。受けた御恩の萬分の一、こんな時にお役にたゝなかつたら、外山市助は人間ぢやありません。お孃さんも御安心下さい。一旦あつしがお引受けした以上、中途でヘコたれるやうな眞似は決していたしません。さあ、景氣直しに一杯やりませうか……』といひかけて、ふつと氣がつき、

『あツ、今日は興亞奉公日だ。いけねえ／＼。代りに柏手、旦那も元田さんもお孃さんも、一つお手をおかし下さい。一つ景氣よくシヤンシヤン／＼とやりませう。』

『シヤン／＼／＼。も一つおまけでシヤン／＼／＼。』

折柄きこゆる隣のラヂオ、『めでたかりける事ともなり。めでたかりける事どもなり……』

大行進

それから一時間とたゝない頃だ。

淺草藏前の外山組から、今しがた解散したばかりの歸還部隊に、慌しい傳令が飛んでゐた。

『何だらうなあ。たつた今おいとまをしたばかりなのに……』

『何だか知らないけれども、親方が出先から至急の電話、直ぐ皆に集つてもらひたいといふおかみさんのお言傳なんです。』

『ふーむ。そいつはたゞ事ぢやねえぞ。何か仲間にもめ事でも出來たかも知れない。こりやかうしちや居られないぞ。』

親分思ひの配下の面々、女房や親達と、碌ずつぽ話をするひまもなく、とつてかへした親方の家、

『ど、ど、どうしたんですおかみさん、親方のお身の上に、何か變つた事でも出來たんですか？』

『それともまた、金筋野郎にでも絡みつかれたんですか。』

金筋といふのは、この社會でいふ强請の事だ。それなら眼にもの見せてくれんずと、仕事が仕事だけに氣も荒い。

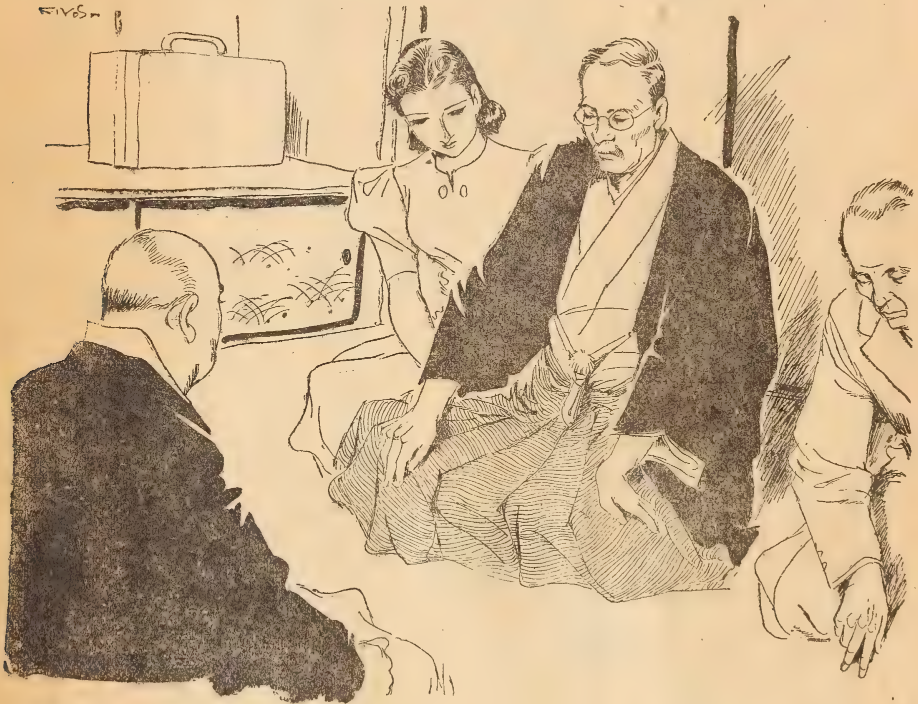
『おつほゝゝゝ。そんな事ぢやないんだよ。ほら先刻うちの人が遠山さんのお宿をたづねるといつて出ていつたらう。何かその事で、お前さん方に賴みたい事があるらしいんだよ。』

『さうですかい。それならいゝけれども至急の御用だといふんで、あわくつてかけつけたわけなんです。』

はなし半ばに、大急ぎで歸つて來た主人の市助、

『やあ、皆そろつて來てくれたか、有難う〳〵。せつかくかみさんのそばに落着いたばかりなのに、すまない〳〵。』

爐ばたにどつかと坐るが早いか、



『時に、籔から棒で、さだめしびつくりするだらうが、わしから折入つてお前達に頼みたい事があるのだ。無理は承知でこの通り頭をさげる！』

　いきなり兩手を疊についたから、驚いたのは配下の面々だ。

『とんでもない！　親方、そんな他人行儀はよしておくんなさいよ。どんな話かは知らないが、親方がかうしろとおつしやりや、こちとらは、火の中、水の中へだつて喜んで飛び込まうといふ連中だ。死ねなら死ねと、はつきり言つて貰ひたいね、親方！』

　單純と向う見ずで通つてゐる彼等の社會にも、昔ながらの仁義だけは、その儘に殘されてゐるのだ。

『有難う！　そこを見込んで頼む。わしの男を立てさせて貰ひたい。』

　かう前置きして市助は、大恩ある遠山の窮境と、自分の心情を殘らず話したあとで、

『といふわけで、わしは此の際、家屋敷を叩き賣つてでも、遠山の旦那のお仕事を助けてあげようと決心したのだ。一つには遠山の旦那に對する御恩がへし、一つには、石炭增産の國策に沿うて、御國の爲めに幾分でも御奉公がして見たい。といつて、わし一人の力ぢやどうにもならぬ。そこでお前達への懇願だ。二年ぶりでやつとわが家に歸つたばかりのお前達に、こんな無理な事を頼むのは、さぞ思ひやりのない男だと思ふだらうが……』

『親方、分りました。親方のために恩人なら、あつしらの爲めにも大恩人だ。その大恩人が、死ぬか生きるかといふ場合ぢやありませんか、殊には、遠山さんの息子さんは、南京で戰死をなすつた勇士ときいちや、默つてゐたつて默つちやゐられませんや。その上、石炭がどんどん出りや、お國の爲めにもならうといふ、願つてもねえ話ぢやござんせんか。

　えゝ、やりますとも！　たてとおつしやりや、今からだつてすぐにたちますよ。給金なんか一文だつていりません。是非どうぞ一緒につれてつておくんなさい！　なあおい、みんな！　みんなも異存はないだらうな。』

『異存も異論もあるもんですか。死ぬも生きるも親方まかせ、何でもやらしておくんなさい！』

　言葉は荒つぽいが、強い信頼と責任感は、よく言外にあらはれてゐた。

　妻のおよしも、思はず眼をうるませながら、

『ほんとに御苦勞さまだねえ。骨も折れようけれども、是非お願ひいたしますよ。その代り留守中の事は、萬事わたしが引受けて、決して不自由はさせませんから。』

『その方はよろしくお願ひいたします。なあに、骨が折れるどころかこんな暑い都會の中に居るより、坑道の中の方がどれだけ樂だか知れません。一文いらずの避暑旅行、却つてお禮をいひたい位のもんですよ。はつ〳〵〳〵』

　此の意氣の前には、如何なる難工事と雖もお茶の子だ。――さう思つて、義に勇む鶴嘴部隊は、堂々たつて大行進をはじめたのである。

（をはり）

結核

慢性胃腸疾患
腺病體質に…

結核菌の毒作用抑止
エネルギの酸化機轉
胃腸整調・成長促進
濃厚―易消化吸收性の
ビタミンB_2複合體

ビタミンB_2は單一に非ずしてフラビン・ニコチン酸ビタミンB_6及F因子の複合體なることは既に學界の認むる所であるが、天然物殊に酵母中のビタミンB_2複合體は蛋白質と固く結合し消化困難である。理研ビタス錠は牛肝臟及び米糠より抽出したるB群を一錠中〇・三瓱含有し消化吸收良効の製劑！

100錠	2.50
300錠	7.00
900錠	20.00

理研 ビタス 錠

總代理店 株式會社 玉置商店 東京・大阪

スパイの手に乘るな

スパイは何をする？

今日のスパイは、從來のスパイ映畫などに出て來るやうな、官憲との血みどろな爭鬪やあらゆる苦難を突破して、對手の機密を盜み出すといつた個人的のものではない。ちやんと組織が出來てゐて、本國には本部があり、そこからいろ〳〵な司令が出て、組織的に活動してゐるのです。今日ではどんなに有能なスパイでも、個人一人の働きでは本當にその目的を果すことは出來ない。どうしても組織網が必要なのです。一般にスパイ網といふのがそれです。

諸外國のスパイは、我が國のいろ〳〵な情報をとつたり、宣傳をしたり、或ひは謀略にかけたりして、我が國を不利に陷れようとしてゐるのです。このスパイの行ふ諜報、宣傳、謀略に引懸らぬやう、そして我が國防の安全を確保することが此の際最も大切なことで、これを防諜といふのです。

諜報 といふのは、對手に目的を知らさずに情報をとることで、こつそりやつたり、公然とやつたり、又合法的にやつたり、非合法的にやつたりします。一般の人は、秘密なことを非合法的にやることだと思つてゐるが、それは諜報の全部の仕事ではない。

外國關係の會社とか、いろ〳〵の機關から『業務上の參考にするから統計を下さい』とか『貿易上必要だから會社の內容を知らせて下さい』とか、又は『出征家族に慰問品を贈りたいから住所氏名を知らせて下さい』等々の照會も、裏へ廻つて見れば皆巧妙な諜報行爲なのです。

謀略 といふのは、やはり目的をかくして策略を用ひ、對手を不利に陷れて自分の方を有利にすることなのです。例へば、漁季になつて漁船が沖へ出る爲めに油が必要になる。その時に外國系の販賣會社が故意に油の配給を止めるとか、或ひはマッチを大量に買占めて國外に輸出させる。さうなると、油やマッチが國內に不足し社會が不安になつて國民が動搖するといつたやうなことです。

宣傳 は、謀略と密接な關係があり、同時に行はれるものです。例へば、今の例のやうにマッチの不足の謀略でも、油の不足の謀略でも、これは政府のやり方が惡いからだとか、戰爭の爲めだとか、如何にもまことしやかに宣傳して謀略の効果を大きくするためにやるのです。

スパイを防ぐにはどうするか

完全にスパイを防ぐといふことは實際にはなか〳〵困難なことです。從つて防諜は對手の國が諜報や宣傳や謀略にうんと金と時間と勞力をかけても、其の結果思ふやうにやれないやうにすることです。どうしてスパイを防ぐか、個人的に心掛けねばならぬことはいろいろあると思ふ。

◎先づ沈默を守ることです

『これは內密な話だが、君だけに……』と洩らした事は、實際は普通以上に早く傳はるものです。又『……ださうだ』と單なる噂を井戸端會議や理髮屋など人の集まるところでの漫談は、いはゆる『一犬虛に吠えて萬犬實に傳ふ』といふことと同じで、飛んでもないデマ宣傳になる、流言飛語は恐らくそんなところから出て來るのです。

それから沈默は口ばかりでない。日本人はあまりにも寫眞機イヂリが多いが、一般の風景や、市街地や、軍事上の要所とか工場地帶とか、又は鐵道、港灣、發電所、水源地などの寫眞はたとへ禁止されてゐないところでも撮影は遠慮すべきです。軍機保護法では、重要地區の地上二十米以上の高所から寫すことは禁じられてゐます。かうした寫眞や繪葉書が、爆擊の資料となり、對手國に利用されることになるからです。

近頃は、公務上のことを家庭へ歸つてまで話すやうな愚かな者はないと思ふが、色々な秘密が家庭の人から傳はる例もあるのです。

不用になつて捨てた書類や紙屑などから、重大な秘密を對手に取られたりしたこともある位で油斷は出來ない。

ニキビ吹出物でお困りの方に……

何よりも『にきびとり美顏水』をお勸めいたします。ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。

蚤蚊南京虫等の毒虫でカユい時

蚤・蚊・南京虫・家ダニ等の毒虫でカユい時にこの藥をつけますと、不思議なくらゐよく効きますので、小さいお子方のある御家庭などでは、とりわけ重寶がられてゐます。

美容藥としても

この藥は『藥用美顏水』とも言はれ、美容藥としても廣く愛用されてゐます。

定價四十二錢・六十三錢・一圓廿五錢
本舖　東京・大阪　桃谷順天館

◎次には對手を輕信しないことです

英國のスパイ學校の教科目の中に『情報は得ようと努めなくても、對手を信用させさへすれば自然に情報は流れて來る』と言つてゐるが、誰でも信用すれば秘密なことでも話したくなるのが人情です。由來日本人は人を信用し易い、殊に外國人だと無條件に崇拜する人もあるが、これは外國にとつては有利なことで、日本にとつては最も危險千萬な事です。

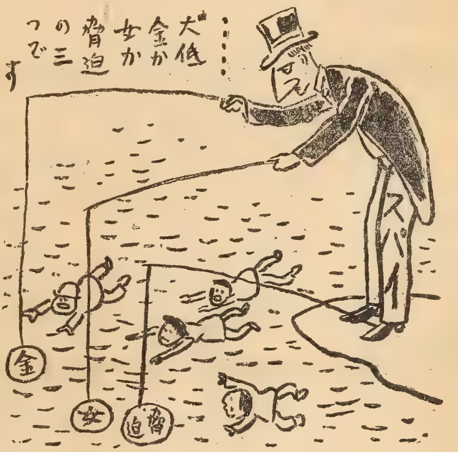
かつて英國の若い武官が日本を去る時、『日本位われ〳〵外國人にとつて有難い國はない、日本人は外國人を尊敬し親切である。女には惠まれて居り、有識階級の婦人まで手に入る、そして之を通じて金もかゝらずに情報が手に入る』といつたといふ話もあるが、この武官に飜弄された上流夫人が相當居つたといふので、警視廳も啞然とさせられた。外國人は『日本人は一度御馳走をしてやればす

ぐに何でも言ふことを聞く、實に安價だ』とよく言ふが、これは金に憬れ、外國人を尊敬するといふ觀念があるからで、誠になげかはしいことです。これに對抗するものは、我々の心の中に『我々は日本人だ』といふ誇りを持つより外はないのです。

◎それから私慾を捨てることです

金で釣られるといふことも私慾があるからです。スパイに利用された多くの事例を見ると、大抵金か女か脅迫かの三つです。金で買收したり女で籠絡する方法は言はなくとも分ると思ふが、脅迫の例でいへば、蘇聯はよく人質を使ふ、親や子を人質にして、言ふことを聞かなければ殺すとか、刑務所へ入れるとかの類です。

こんな話があつた。外國系の某會社の社員が、社の金を費ひ込んだ、外人は始めから知つてゐたが知らん顏して犯罪が或る程度進むのを待つてゐた。その社員は惡いとは知りながらも見つからぬのを幸に段々と罪を重ねて行つた。罪が相當進んだ時『罪に服するか、さもなければ言ふことを聞け』と脅迫されてとう／＼その社員は外人の手先になつてしまつたといふ。公私の別をよくわきまへてをればこんなことはない筈だが、結局、金も名譽も命も要らないと云ふ人であつて始めて國家の役に立つ人間だといふことが、防諜の場合には一ばん明瞭に言へるわけです。



◎又、所持品に注意することです

大切な書類の入つてゐる鞄など盗まれぬやう注意することは勿論です。十數年前、親日の一米人が某役所の紙屑を買つてゐた事もあり、又滿洲では軍隊や官衙の便所で使用した紙までも買ひ集めて消毒し、その中から秘密事項を探つてゐたといふに至つては、如何にスパイ合戰が眞劍なものであるかといふことに驚くより外はない。

だから、大掃除の時とか、轉居などする時いろ／＼なものを整理して屑屋に賣つてしまふことなど氣を附けねばならぬことです。

兎に角、誰でも外國を利するやうな材料は一切自分の手から放さないことが大切です。

◎言ふまでもなく諸規定をよく守ることです

秘密書類の取扱ひはかうせよとか、紙屑の處理はかうせよとか、許可なく寫眞を撮つてはならぬとか、その他いろ／＼の規則があるが、これを嚴重に守ることが防諜上最も大切なことです。大切な書類を送る時に、包裝が不完全のため破れて中身が見えたり、書留にすべき物をしなかつたために、もしも途中で紛失したらなどと、防諜の點から考へて見ると實に危險なことです。むしろ規定に強制されずに、進んで規則を守るやうにしたいものです。

（藤倉常三）

内服により凡ゆる化膿菌を殲滅し外科的手術を要せず頗る短期に治癒せしむる

劃期的新化學療法劑

アスタフィール
ASTAPHYL

アスタフィールは一基化合體（スルフォンアミド）「スルファミン」と四基化合體（スルフォンアミド）「ノイジロン」を含有し左記諸疾患の病源菌たる連鎖狀球菌・葡萄狀球菌・肺炎菌・淋菌・大腸菌等に對しズルフォンアミド劑の有する最高の殺菌力を發揮し（二種の藥物配合による相乘作用に依り）且副作用を極度に制限した（四基化合體の性能に依る）理想的新化學療法劑なり

【組成】アスタフィール一錠中には
スルファミン〇・一五瓦
ノイジロン〇・一五瓦を含有す

【適應症】急性慢性淋疾・産褥熱・丹毒・中耳炎・敗血症・肺炎・盲腸炎・流行性感冒・化膿性外傷・齒槽膿漏・面皰・婦人科諸疾患

【藥價低廉】三〇錠入 三圓五〇錢
六〇錠入 六圓

販賣元 東京・銀座
資生堂

製造元 東京芝公園
同仁製藥株式會社

滿洲事變十周年思ひ出物語

東宮公館

―敵將李杜の家―

木蘭良二

敵の名將李杜、丁超

一殺多生菩薩行――

これは日露戰役、奉天大會戰の後で、乃木將軍がひそかに口吟せられた詩の起句だと傳へられる。

一粒の麥、地に落ちて死してよく千粒の麥を生じ、一人の血潮戰場に流れて、よく萬民の安泰を築く。この信念の燃ゆるところ、戰爭の修羅場も亦、菩薩行なのである。

奉天戰から三十年足らず經つて、その城外の柳條溝に起つた一發の銃聲は、滿洲事變なる大旋風を引き起した。

これこそ實に全世界の舊體制を搖がす口火だつたので、その後のイタリヤのエチオピヤ征服と云ひ、日獨伊の國際聯盟脫退と云ひ、今度の支那事變と云ひ、又獨伊對英佛の大決戰と云ひ、あの一波が動いて萬波を呼んだものに外ならぬ。

思へば滿洲事變は、世界大の意義を帶びてゐたのだ。

その時のわが軍司令官本庄大將は、交戰の眞最中、奉天の瀋陽館の居室に佛壇を設らへて、香を焚き、軍服の上に袈裟をかけて、靜かに觀音經を誦してゐたと傳へらるゝ。

いゝ哉、この心掛！

軍隊も戰に勇なるのみならば、畢竟、土蠻の行爲のみ、砲聲の中に念佛する心があつたればこそ、それは舊秩序破壞と云ふ世界大の意義を帶び、乃木將軍の謂はゆる菩薩行となるのだ。

滿洲事變勃發からもう十年になる。

いろ〳〵な記憶が、歷史の靄にぼかされて夢のやうに薄れてくる時、

なほ鮮やかに思出されるのは、敵の二名將、李杜と丁超の俊爽たる面影である。

殊に李杜を思ふ時、芳蘭の花の脆く摧けながら、香のみは幾久しく殘るかの如き惜愛の情に堪へない。

彼は奉天省義縣の生れで、幼い時は軍營の給仕をしてゐたが、それから叩き上げて、わが士官學校にも學んだことがあると傳へられる。長い間、依蘭の鎭守使をしてゐたが、なか／＼思ひやりの深い男で、途中で乞食など見ると、二十兩、三十兩と云ふ大金を惠んだ。副官が驚いて、何か特別なわけがあるのですかと尋ねると、

『あれらも同じく、我が統治下の人民である。その中に、あんな糊口にも窮する貧民がゐるのは、我が政治の至らないためだ。』

と答へてゐた。

李杜は非常な親日家であつた。それがなぜ日本の敵に廻つたかの理由はよく分らないが、于琛澂や、李海青や、張海鵬のやうな綠林出の馬賊が、早く我に歸服して、上長の位に立つた。その下風に立つのを潔しとしない感情問題からだらうと云はれる。

彼を逸したのは、返す／＼も惜しい事であつた。

甕の清水

しかし幾ら惜しいと云つても敵に廻つた以上討伐せねばならぬ。

わが軍が依蘭城の攻擊にかゝると、さすがの名將も、皇軍の鋭鋒には當りかねて、退却した。

勢に乘つた諸兵は、城壁を乘りこえて、屋內に潛伏する殘敵の掃蕩戰に掛つたが、しかし李杜居住の公館に眞先に乘こんだ一部隊は、その庭の所まで行つて思はず足を留めて了つた。

彼等はそこに何を見たか。――

大抵の滿洲人家屋の亂雜で、不潔なのに引換へ、李杜公館の庭だけは、恰もお寺の境內でもあるかのやうに、塵ッ葉一つなく、箒目の鮮やかに掃き清められてゐた。

さすがにわが軍の猛者も、むざ／＼とそこへ土靴の痕をつけるに忍びない思ひをしたのだ。

しかし戰爭はそのやうな躊躇をゆるさぬ。そこで思ひ切つて屋內に入つてみると、いよ／＼驚いた。

便所も光る程みがき立てゝ、紙まで供へてある。

應接室から書齋も、裝飾品一つ亂れず、書物の背もきちんと揃つてゐた。灰皿も曇りを留めないやうに拭つてあつた。

臺所へ廻つてみると、大きな水甕には、いつでも飲めるやうに、汲みたての清水が滿々と湛へられて、柄杓までつけてあつた。

わが軍の將士は、思はず默つて顏を見合せざるを得なかつた。

『敵ながら感心なものですな。――どうして、かうも手のよく行き屆いたことをして、退却したのでせう。逃げるのに何もこんな手數の掛ることを、しないでもいゝやうに思へますがね。』

と、霜屋上等兵が云ふと、首を捻つてゐた小隊長の及川少尉は、

『さうさなあ。もしかしたら李杜は、ロシヤのドーホボール教徒の思想にかぶれてゐるのではないだらうか。』

と答へた。

及川少尉は一年志願出身の將校である。學校育ちのインテリゲンチャに、西洋の事情や文學などにも、相當の知識をもつてゐた。

『ドーホボール教徒つて何ですか。』

『一つの土俗宗教でね、まあ天理教とか、金光教とか云ふやうなものだが、それは感心な話があるんだよ。丁度、日露戰爭の頃、全世界の注目をひいたものだつた。』

及川少尉の話によると、ドーホボール教徒の一群は、ロシヤが日本と戰爭する理由がないと云つて、開戰に反對したのである。

政府でもその處置に困つて、ウラル山下の、農作物など何もできない磽确不毛の地に放逐した。かうすれば彼等教徒の一團は食物の缺乏から飢ゑ死ぬだらうと思つたのだ。

もし、彼等が現在の經濟組織に馴れ、金錢を使用してゐる人種だつたら本當に餓死したかも知れぬ。だが彼等は經濟を無視し、損得の計算は些ともしない。只、置かれたる境遇に安住する事を目標とする教徒である。だから勞力は些とも厭はずに、不撓の耐忍をつゞけて、山麓の不毛地を開拓し、一年の後にはそこから小麥の收穫があるやうにした。

一念ふるひ立てば、斧を研いで針にすることも出來る。瘦地から小麥を取る位は、奇蹟でも何でもない。

あての外れた政府は、今度はコサック騎兵を討伐に差し向けた。

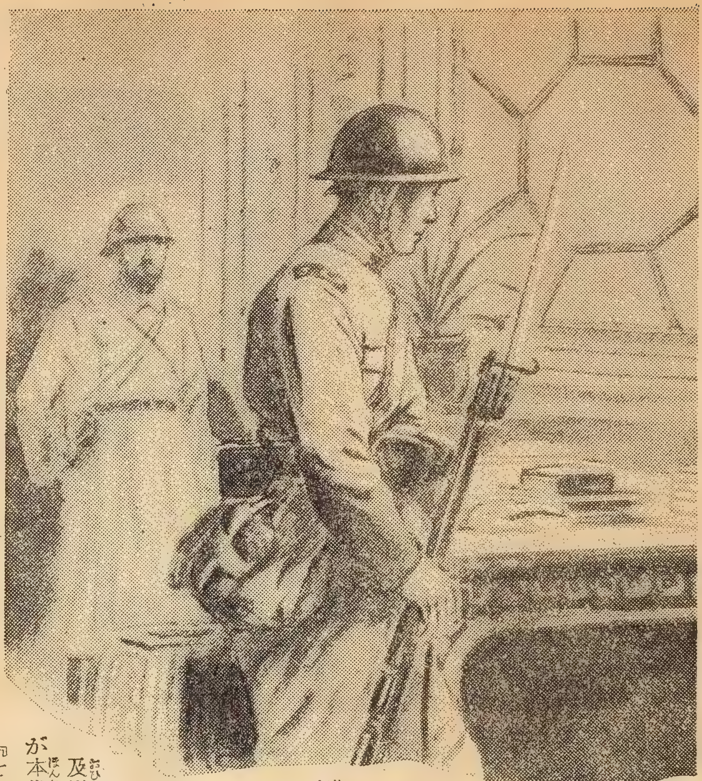
ドーホボール教徒は山へ逃げて行つたが、騎兵が闖入してみると、彼等の住居はどの小屋もよく掃除がゆき届いて、おまけに卓子の上には新らしくて眞白な布をかけ、その上に水を盛つたフラスコと、黒パンとが置いてあつた。

後で、コサック兵が教徒を虜にして、

『俺等は云はゞお前らの敵だが、その敵に向つて、お前等はなぜあんな念の入つた事をしたのか。』ときいたら、

『だつて、あなた方は、遠い所から、山奥に遠征してきて、お疲れにもなりお腹もすき、咽喉も渇くでせう。さう思つてしておいた食事の用意です。』

と云つた。それをきいたコサック兵の中には、その場ですぐにドーホボール教徒に改宗したものさへ出來た始末だつた。



及川少尉は云ふのである。

『ね、水甕に水を充たして、柄杓までつけておいてくれたところ、又家中のよく整頓されてゐる事、何だか似てるぢやないか。ロシヤと滿洲は蒙古を仲介にして、同じやうな風習もあるからね、李杜は恐らくドーホボールの眞似をしたのだらう。』

兵は、なる程、そんなものかと思つて、少尉の博識に感心した。

日本武士道の餘薫

間もなくそこへ入つて來たのが、今日、滿洲農業移民の父として名高い故東宮大佐だつた。

『そんな馬鹿なことがあるか。』

と、大佐は及川少尉の名論を、一蹴して了つた。

『それは君が、西洋の書物をよみすぎて、謂はゆる學問呆氣と云ふものになつてゐるから、そんな飛んでもない事を考へるんだ。李杜の、この立派なやり方は、お手本がもつと近い所にある。』

『さうでせうか。どこですか。』

『日本さ。』

『日本？』

『さうぢやないか。立つ鳥跡を濁さずと云ふことは三つ兒でも云ふ。李杜はつまり、跡を濁さずに立つた鳥なのだよ。』

及川少尉は默つたが、聞いてゐた兵は、なる程、さう聞けばこの方が本當らしいと思はざるを得なかつた。

『それにね。ロシヤは遠い。日本は近い。ドーホボールなんて宗教は本場のロシヤにも絶滅してから二十年にもなる。そんなものの感化をロシヤに行つた事もない李杜が、なんで受けるか。彼は、常にこちらでも日本人に接し、東京の士官學校へも來てゐた。最後を見苦しくしまいと心掛けたのは、これは武士道の教へぢやないか。李杜は、日本軍を敵として迎へるに當つて、武士の身嗜みを見せたのだよ。』

と云はれると、やつぱりその通りに違ひなかつた。
『しかし俺はこれを見て、少なからず嬉しいね。敵將がだらしのない事をして逃げてくれたのだつたら、俺等はそれを輕蔑するだらう。此の武士道的態度を取つてくれたのを見ると、敵ながら天晴れで、思はず頭がさがる。尊敬せずにはをられない。日滿協和と云ふことは、愛と尊敬から出發しなきや、うまく行くことでない。』
兵は、これには、一寸、頭を傾げた。はつきりした意識ではないけれど、滿洲人と云へば何だか、日本人よりも一段下の人種のやうに、心の中で冥々には思つてゐたのであつたから。
『相手を輕蔑してをつて、何が、信賴し合へる？ 俺は李杜に尊敬を感じ、李杜を通じて滿洲國民に改めて親愛を感じる。そしてこれを、此れからの俺の事業の出發點とする。李杜よ。君を敵に廻したことは惜しい。だが、君が敵に廻つてくれたばかりに、計らずも滿洲國民が、いかに立派な、尊敬すべき國民であるかゞ、一層よく分かつたのは有難い。』
公館の欄間に掛つてゐる李杜の大きな引きのばし寫眞に向つて、東宮大佐は、恰もその場にゐる者に對するやうに誓ふのであつた。

大陸の夢

東宮大佐は、この李杜公館に起臥することにきめた。
と云つて何も、自分が獨占しようと云ふのではない。上官たると部下たるとを問はず、又軍人たると地方人たるとを問はず、自分と志を同じうするものの自由な集合場、謂はゞ俱樂部にしたのである。

李杜公館。それはいつの間にか、東宮公館の名を以て呼ばれるやうになつた。
東宮大佐は大きな夢の持主である。
大佐の家は、群馬縣勢多郡宮城村の舊家で、國造の後裔だと云はれる。
その遠祖が、遠い神代に於てなされたと同じ聖業を、昭和の御代に於て、この大陸に實現したいと云ふのだ。
大佐は陸軍士官學校出の秀才で、寺內壽一將軍から、陸軍大學の試驗を受けよと何度もすゝめられたが、それには耳も傾けなかつた。
參謀肩章を吊りたい！ 閣下になりたい！ そんな夢は一切ないのだ。
十萬の英靈、二十億の軍費、日露戰爭の時、それだけの犧牲を拂つて、鬪ひ取つた日本の權益である。
これから日本人が、どし／＼、屯田兵のやうに移民して、子孫を殖やせば、二十年にして五十萬人にはなるだらう。さうすればロシヤももう東洋へ向つて、爪牙を伸ばすことが容易にできるものではない。』
日露戰爭の時の、滿洲軍總參謀長兒玉源太郎大將は、この意見を抱いてゐた。
だが、それは實現を見たか。否。その後の日本の對滿策なり、大陸經營なりが消極的で、兒玉將軍の夢の、十分の一も實現できてはゐない。
東宮大佐は、今からでは、少々遲いと思ふ。だが遲くても手をつけないよりはいゝ。兒玉將軍の夢を自分が受けついで實現し、將來は更

にそれを大規模に擴大しよう。

さう思つてゐる大佐には、陸軍隨一の登龍門たる大學も、何の魅力もなかつたのだ。

大佐は、三江漁夫と號した。それは黑龍江、松花江、ウスリイ江の三大河江沿岸の肥沃土開拓の父を以て任とするとの意味である。

それには『捨鉢の覺悟』が必要である。『捨石になる覺悟』が必要である。又『捨て身になる覺悟』が必要である。それで三捨居士とも稱してゐた。

この大佐の夢に、深い同感を以てくれたのが、滿洲國第二路軍司令官于琛澂中將である。

『あなたが、日本移民を送りたいと云ふのは、本氣の話なのですか。』

『あたりまへですとも。』

『そんなら、適當な土地を上げようぢやありませんか。』

『なに、くれる?』

肖像寫眞
（原板不要）
故人の肖像、出征將士の勇姿
—戰歿勇士の尊影は割引奉仕—
集合寫眞、素人寫眞、何んな原畫からでも立派に出來る、着衣變更等自由
價格低廉
新聞1/4頁大 二圓八〇錢
新聞1/2頁大 三圓八〇錢
新聞一頁大 五圓五〇錢
營業案內贈呈
扶桑社寫眞部
東京澁谷區幡ヶ谷七二四
振替東京一六五、五五五番
★代引御希望の方は原畫だけ御送り下さい★

『え丶。自分の支配下に頃合の農業適地が二萬町歩あります。佳木斯の東南孟家崗の近くです。そこへ日本農夫千戸を移住させて下さい。』

『千戸。二萬町歩なら、一家あたり二十町歩の地主になれますね。』

『それを無償で提供しますよ。』

『有難い。』

躍り上つた東宮大佐は、奉天北大營の日本國民高等學校長加藤完治氏、公主嶺の農業所長宗光彥氏などの同志を語らひ合つた。

しかし政府が仲々、この仕事に同意を與へてくれなかつたが、拓務大臣に理想と新思想の懷抱者である永井柳太郎氏が就任する事になつた。

永井拓相は、オックスフォード大學留學中も英國植民史を專攻し、且つ早稻田大學で永く植民政策を教授してゐたので、日本で植民事業に充分の理解と知識をもつ最初の大臣であつたと云つてもよい。

『よろしい。やりませう。』

と例の口をへの字に結んで、力強い承諾を與へてくれたのだ。

これが今日の滿洲農業移民のそもそもの起りなのである。

かうして移民村を繁榮させ、又ひいては滿洲國の隆盛に貢して、そして滿洲と云ふ强固な足場を作つておいたればこそ、今日の、この大仕掛な支那事變も遂行できたのだ。

國民は滿洲事變の意味を、よくよく嚙みしめて思はねばならない。

（をはり）

（繪・金子士郎）

薄毛、禿髮の惱みから…

ホルモンによる新方法で 濃い黑髮の催生へ！

手髮の發生促進と成育に、**ホルモン原素リポイド**が何よりも優れた力を持つてゐるといふことは**エル・ヤツフエ博士**の發表と實證によつて既に世界的に知られてゐる處です。この**リポイド**といふのは、皮膚と毛髮の構成に重要な役目をする**一種のホルモン母體**で、適量を毛根に與へれば、人體の總ての毛髮は高度の發毛力を得て毛の發生發育が旺んになり、同時に毛質を强めて病的脫毛や禿髮を防ぐといふものですが、理論だけでなく實際にこれを頭髮その他の毛が薄い人、禿頭病や拔毛烈しき人々に試みると、在來の方法で餘り效果が見られなかつたやうな人にも力强く發毛を促進させたり、手髮が濃く美しく伸長したり、病的禿頭などが治つたりしますので手髮の不滿をもつ人達に非常な喜びを與へてゐます。

此の有力な手髮生育促進**ホルモン・リポイド**を應用した手髮劑は、日本では『ミクロゲン』といふ名稱で發賣され、實驗者間でその效果が評判となつて居りますが、それは申すまでもなく、この**ホルモン**による『ミクロゲン』の作用が、今までの多くの刺戟的な養毛劑や毛生劑などとはまるで違つて素晴らしいからです。

生れつき薄毛の人、マユ毛や生え際が人並でない人、お産や大病で薄毛ハゲとなつた人、不自然な拔毛、フケ、折毛、切毛、惡性禿頭病、若ハゲ

カモジ禿その他毛髮の生育が不充分なため惱んで居られる人は、他に餘り類のないこのホルモン主劑の『ミクロゲン』をお試み下さい。

男子でも婦人でも『ミクロゲン』を用ひれば、

従來の方法によるよりもズット效果的に發毛力が旺盛となり、薄毛も濃く黒々と變化生長して毛質が丈夫に、不快なフケ、拔毛、パーマネント等による切れ毛も防がれて毛が艶々と美しく、相當惡質の禿頭病などにも早く黒髮の再生を見られる例が多いので實驗者は大層喜んで居ります。實例は數へ切れぬ程澤山ありますが、御參考までにホンノ一部を次へ掲げます。

★力強い發毛促進と養毛の實例★

效果の早いのに驚く

大分縣蒲江町　小野すみ子

私「ミクロゲン」普通劑を使用致しましたが效果の早いのに驚いて居ります。發育の早い所はもう一寸以上に伸び、短いのがあとから〱と發生して來ました。こんなに良い藥があるとも知らず今日迄どんなに惱んだか知れませんが、お蔭で今は生きかへつた樣な喜びです。

頭髮若草の如く生長

神奈川縣戸塚町　遠藤　重三

頭髮の脱落甚しく人前に出ることも出來兼ねて居りました處ホルモン毛髮劑「ミクロゲン」使用〇〇日間位にて頭髮春の若草の如く發生するに至りました『ミクロゲン』を愛用する迄はいろ〱高價な藥も使用いたしましたが、何等效果を見る能はず『ミクロゲン』も實は半信半疑にて使用のところ、非常なフケ性だつた頭も使用後は完全に治り、頭皮が見える位まで脱けた毛髮も日一日と發毛して濃くなりつゝあり、私の喜びは筆舌ではとても言ひ現はせません。

眉毛も頭髮も黒々と

名古屋市昭和區惠方町　谷川はな子

實は今までいろ〱使用致して見ましたがどれもこれも皆フケ取りに過ぎない物ばかりでした故『ミクロゲン』も始めは半信半疑で普通液をお願ひ致しました。最初眉頭へ試驗致しました處、愛用者の方の申されて居ります通り、暫く使用致しますと大分黒くなつた樣に思はれ、一生懸命使用して居ります內、此の頃では見違へる程黒々とした眉毛となり大喜びで居ります。その間勿論生え際にも使用して居りますが、只今では生え際も大變濃くなり、頭全體が黒々して來たと皆樣よりおほめを戴いて居る次第です。

笑はれた生え際が……

三重縣阿藝郡大里村　中村　實

貴堂より頂きました『ミクロゲン』使用日の淺いにも拘らず目に見えて發毛が促されて來まして大變喜んで居ります。今まで友達は『君の生え際は生れつきだから毛など生えるものか』と笑つて居りましたが、この頃は『ミクロゲン』によつて生え際一帶が濃くなつて來ましたので感心して居ります。私も鏡な見るのが樂しみで何度も見ては笑はれて居ります。

惡性禿頭に黒髮再生

朝鮮京城府南米倉町　岩村チヨ子

（殆ど丸坊主に近い惡性禿頭に實驗）早速強度劑を使用しました處大變氣持がよく、ドン〱拔けてゐた毛がピッタリと止り大變嬉しく思つて使用を續けました。

一方病院で太陽燈を十五分間づつ三日置きにかけてゐましたが『ミクロゲン』使用後二瓶目より初毛の樣なのがズンズン生え出しましたので、早く伸ばしたいためもう一瓶強度劑を使用致しました。お蔭樣で今では黒い毛が澤山生え早い所は二寸五分位、遲い所でも一寸位はありまして頭髮は全部生え揃ひ、もう二三ケ月もすれば一尺位に伸びると思ひます。これも『ミクロゲン』のお蔭と非常に喜んでゐます。

・毛髮生成ホルモン・リポイドを應用の發毛劑『ミクロゲン』は（普通液劑）が約一ケ月分量二圓八十錢、約二ケ月分量五圓。（強度液劑）が約一ケ月分量四圓、約二ケ月分量七圓五十錢、約三ケ月分十一圓（荷造送料何れも內地十五錢臺灣滿鮮支五十錢）一般には普通液劑で充分ですが頑固性の人は強度液劑をお用ひ下さい。發賣元東京市本郷駒込千駄木町十三・啓芳堂化學藥品（振替東京五一七四七番）あてに振替又はカハセで御送金になれば急送致します。又、東京市小石川區音羽町・大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二二九）でもお取次ぎ致します。

長篇時代小說

鶴龜武士道

白井喬二
齋藤五百枝畫

人間手毬

一

『フヽン。』

『ハヽン。』

鶴太郎と作馬は、暫く睨み合つてゐたが、到頭、何方からとも無く、鼻の先でお互ひに彈合つて、嘲笑ふのだつた。

今川作馬が、此處に現はれたのはお秀から聞いたのであらう。先刻鶴太郎は、往來でお秀に會つた。その時、隱し立てもなく剛右衞門を成敗に行くのだと告げた——だから、作馬は其れを聞いてこゝへ駈付て來たのだ。

それは直ぐ分る順序だつた。

鶴太郎も、作馬の顔を見て、すぐ、

（何だ、もう來たのか？）

と思つた。

只だ、そんな事とは知ら無い剛右衞門は、天の助けと人目も忘れ泣かんばかりに喜んだ。

『作馬樣、あ、有難うございますッ。』

『騒ぐなつ。』

作馬は苦々しげに、

『何だ其の態は。一度ならず二度三度、お前の醜體と來たら、それでも道場の主人か。剛右衞門、恥を知れ、恥を。』

兎に角く、味方の一人たる剛右衞門が、繩附に成つてゐる姿は、作馬としては堪へられぬ侮辱だつた。

相手が鶴太郎だから無理とは知りつゝも、斯う云つて罵らざるを得無いのだ。恥を知れ……云ひながら、ぐつと睨んで、

『胸糞が惡くなる！　何時でもお前はしてやられて居るでは無いか。及ばぬながらも、何故、一太刀報いようとせんのだ。』

『しました。報いようとしましたが……到底も〳〵。』

と頭を振つた。

作馬は、『馬鹿めが。』舌打して、忌々し相に鶴太郎に向つた。

『何故、剛右衞門と後家を縛るのだ？』

『うん、理由か？　おん前に云つても通用せん事だ。』

『何、通用せぬ事？　わしに通用せぬ樣な理由で他人を縛るといふ法があるかッ。』
『ある！　おん前には通用せんが、天下には通用する。云うて聞かさうか。神人共に許さぬ師匠殺しの罪と、人道の大敵姦夫の罪とだ、な？　此の二つながら兼備へてゐるのだが、定めしおん前の耳には響くまい。』
『何、師匠殺し？　師匠とは誰だ？』
『ほれ、その通り迂濶だ――益田道場の主人、益田勇次郎先生が先度急死したことをもう忘れたのか。』
『うむ……それは知つてる。知つてるが……』
作馬は、剛右衛門を振返つて、
『おい、お前は本當に其麼事をいたしたのか？』
『ぷつ、滅相も無い。』
剛右衛門は急いで否定した。
『い、云ひ懸りです。馬鹿々々しい……作馬樣、そんな唐變木の云ふ事を、一々取合つてゐたら、何を云ひ出すか知れやしません。あの時、醫者の玄宅も、食傷だとちやんと證明して居たぢや有りませんか。』
『ふむ――わしも然う聞いた。今頃……師匠殺しとは、些と突飛だな。』
『そんれ、矢つ張り通用せん、はゝゝ。』
鶴太郎は笑つた。
『……まあ好い。おん前に剛右衛門を裁いて貰はうとは、始めから思つては居らんで――おんれは、勝手に二人を引立てゝ行くのだ、好いか。』

前號までの梗概

鵜毛勝齋創案の大武藝、鶴龜道の達人たる紀ノ鶴太郎は、叔父切門桐之丞の主君酒井雅樂頭へ、秘文『鶴三教』獻上の爲、故郷野州から出府した。（鶴龜道秘文には、別に『龜二教』があるのだが、これは甲州谷村藩の劍道師範、加地龜太郎が所持して居る）
　すると雅樂頭の競爭者今川靜女正は、配下の惡浪人肝付剛右衛門を使つて、秘かにその三教の一部を鶴太郎から盜ませた。一體剛右衛門は奸惡な痴者で、切門家にあだをした許りか、或町道場の主を毒殺して後添の未亡人と通じ、孤子のお絹に魔手を延さうとする。武藝の本道は人道を踏む事だと信ずる鶴太郎は、これを見かねて始終剛右衛門を懲し、今はお絹とその乳母を、彼の母の隱れ家へ匿ひ、正義の保護を加へて居る。
　所で今川靜女正には、作馬と呼ぶ怪劍士の伜があり、これが前後五度、凡ゆる手段を盡して鶴太郎に挑戰するが、其度毎に勝負は互角以下でしかなかつた。業を煮した作馬はそこで、この上は逸早く『龜二教』を手に入れて將軍家に獻じ、鶴太郎の鼻を明かせようと甲州谷村の加地邸を訪れた所、これはしたりやつぱりそこへ鶴太郎も來て居る。
　しかも加地の話では、その秘文は江戸にあつて手元にはないとある。江戸での在所は果してどこか？　焦り立つた作馬は、自分に戀する腰元のお秀を使つて、心當てを探りかゝる。と其時、相手の鶴太郎は、早くも目途を立て終せた樣子で、それとは別に剛右衛門の邸へ乘込み、彼を搦めて奸惡を露かうとしたその矢先、又も現れて戰ひを挑んだのは、他ならぬかの作馬だつた。

『成らん！』
作馬も騎虎の勢ひでさう強く呶鳴り返した。

二

『成らんと云うても、然うは行かん。何時迄も埒を明けずに置いては、世道人心が闇になる……遠慮なく伴れて行くで！』
鶴太郎は斷わりざま、ぱつと庭に飛降りたかと思ふと、剛右衛門をもう鷲摑みにして二三間も向ふへ押轉がす樣にグィ〱と引立てゝ行くのであつた。
『あつ？　待てッ！』
作馬もその速さに、思はず烈しく叫びながら追つた。
『餘人は知らず、わしの面前で左樣な振舞は許さんぞ。道場の娘お絹や、乳母のお梶を攫つた場合は、非力な門人共ばかりであつたが、今日は、かくいふ作馬が相手だ――許さん！』
追縋つてさつと小手を振ると、剛右衛門の體が突然一間ばかりも後ろにグラ〱と蹣跚いた。
『うわッ！』
二人の技のために、前後に激しく往きつ戻りつ弄そばれながら、剛右衛門は悲鳴をあげた。
『何の。』
『うぬが！』
『渡してなるかつ。』
『當方こそぢやつ！』
伯仲の鬪技に用はれる剛右衛門は、恰で揉み苦茶だつた。
只だ、
『アッ、アッ。』
と悲鳴を斷續させて、逃げも出來ず、踏止まりも附かず、中間を溺れる人のやうに、蹌踉きあがくのだつた。
腕比べの道具なのだ。
鶴太郎が、
『こりや不可ん、剛右衛門が參つてしまふ。』
『それなら放せ。』
『おん前こそ放せ。』
『誰が――わしの方では、例へ死んでも渡さんぞ。』
『それでは可愛相だ。』
『ほれ、剛右衛門が……とう〱絶息した樣だ。』
『や、成る程。』
鶴太郎の方が、さすがに、ぱつと手をはなした。
『おゝ！』
よろよろッと作馬は、はずみを喰つて、二間ほど後ろに剛右衛門もろとも蹌踉いた。
ドタリと剛右衛門の體が、地響立てゝ飛石の上に倒れた。
『それでは仕方が無い、おん前に預けて行かう、看病してやつて吳れ。その內、亦改めて受取りに來るから。』

鶴太郎は、云ひ還すと早や垣根の外へスタ〱と出て行くのだつた。

『待てつ。まだ、申す事がある。』

作馬は、呼び止めた。

『何だ？　後家の事か？　後家もおん前に預けて行くで。』

『何を申すか――其方は、さきほど、路上で我が家の腰元に會つたであらう？』

『あゝ會つた。そんが何うした？』

『その時、龜道の在所が分つたと申した由だが、本當か？』

『本當だとも――大體、見當がついた。』

『ふうむ？』

作馬は凝と睨んで、

『飛龍閣の近くだと申すが、それも本當か？』

『あゝ、その通りだ。』

『然らば、其在所先が、富豪の邸宅とやらで、門閥の者と同道する必要があり、斯く云ふ今川作馬と一緒に乘込むといふ話は如何に相成つた？』

『あれは中止にした。』

『何？』

『中止にして、おんれが獨りで行く事にした。如何に門閥でも、師匠殺しの罪を意に介せぬやうな男と同道したのでは、天地神明に對して畏れ多い。だから、おん前と乘込むことは中止にした。今迄は、その心算でゐたが、最うそん用は無い。』

『おのれ……聞捨てならぬ雜言だ』

『でも、仕方が無い。怒つても、それが本當だから。』

鶴太郎は、ひらりと體を跳ねて、垣根を乘越えて外へ出た。

『それなら――これで御免。剛右衛門を置いて歸るが、おん前が勝つたと思ふと、飛んだ間違ひだでの。』

さう云ふ聲がもう向ふの方で聞えた。

酒井と今川

一

將軍家武道所に於ける武藝統一の企ては、着々進行した。日本傳統の武道を一丸と成して軍務の進路を築き、時代に添うた新しき武士道の精神を建設しようと云ふのが表面の主旨であつた。

然し裏面は、天下に散亂する武道書の蒐集に依つて、諸國武藝の消長を掌中に握り、靜謐の上にも、我世の安泰を謀らうといふのが目的であつた。――この事は、前にも屢〻述べたが、斯ういふ目的の爲めに過去四十年、既に大略の秘傳奥書の類は集つた。其數四千六十三冊の多きに上つたが、其の中で最初から着眼した鶴龜道の書が何うしても入手の運びに到らず、今日に於ては其れさへ揃へば、武道所に於ては先づ以て國家制定の

武道軍律を編案する事が出來るまでに成つて居るのだつた。

武道所の重臣阿部豐後守、小守壹岐守、奥江晴之介、島崎左近の四名は、近頃は寄ると觸ると此の件について協議を行ふが、こればかりは評定だけでは解決はつか無かつた。

『如何に致さうか――各〻方に、名案は無いか？』

阿部豐後守も、到頭、持て餘した樣に切り出すのだつた。

『はい、名案が有ります位なら。』

奥江晴之介が苦笑した。

『それは然うだが……最う、徒らに安閑としては居られぬ。將軍家へも、最近これで二度も日限を申して、何時も實現できずに居る。』

『困却致しましたな、全く。』

小守壹岐守が引取つて、

『……日限を言上いたしたは、拙でございましたな。』

『左樣、何分、今川靜女之正殿がはつきりと申すので。』

『それは、酒井雅樂殿も同じことです。矢張り、今にも手に入る樣に斷言申されました。』

一同は、

『はゝゝ。』

と笑つて了つた。

然し、笑ひ事では無かつた。

阿部豐後守が改つて、

『何うしたもので有らう。此の上、荏苒たらしめる譯には參らぬ――一體何故、斯樣に隙取るのであらう？』

『は。』

質問されても、自分が探索に當つてゐる譯では無いから、明答を與へる譯には行か無かつた。

一同、しばらく押默つてゐたが、

『左樣でございます……私が考へますに。』

島崎左近が分別臭く云つた。

『うむ？』

『これは、兩家に仰付けたのが惡いのでは御座いますまいか。』

『成程――爭ふからか？』

『はい。爭ひも致しますし……第一に、或ひは兩家に入手の分を合せますれば、既に揃つて居るのかも知れませぬ。』

『うむ〱。』

『然るに、互ひに嚴秘に附し、双方阻止し、妨害致して居りまするが爲、双互の手許に

僅か一滴数日かをる
月の友五百番香水
東京淺草鳥越一の七
月の友化粧園
振替東京三五〇八五番

あるも知らず、他所に存在いたすものと勘違ひいたして捜ね居る樣な節が無いとは申せませぬ。』

『や、大きに。うむ〳〵。』

『すれば、これは——甚だ差出釜敷き申條にございますが……速かに兩家の親睦を計り、互ひに打明け合つて蒐集に努めしめる事こそ、緊急かと存じます。』

『おゝ、それは無論さうだ。將軍家に於かせられても、兩家に申渡された抑〻最初のお考へは、矢張り、然うであつたに違ひ無い。協調であつたに違ひ無い。』

『は。』

島崎左近は肯頭いて、

『然るに、この十年ほど以前より兩家は犬猿も啻ならぬ仲に成つて居ります——おそらくこれは、競爭の結果かと存じます。而も、兩家の不和は年々度を加へ、今日に於ては一層激しく、屡〻如何はしき噂も耳にいたします位にございます。』

『然うぢや——わしの耳にも這入つてる。』

阿部豐後守は、其處まで聞くと何か決心したか、

『好矣、それでは俺が兩家を和睦する樣に計らはう。明日、當宅へ來駕を待ち、懇々と談じ合ひ、兩家併せて一事を成す底の精神を說いて見よう——何うも、御一同、御苦勞であつた。それでは……亦明日。』

豐後守は、長老らしく鷹揚に一禮したのであつた。

二

翌日、阿部豐後の屋敷に招かれて眞先きにやつて來たのは今川靜女之正であつた。

『いやもう、頓と御疎遠に打過ぎまして。』

靜女之正は、如才なく豐後守の前に兩手を突いて挨拶するのであつた。

『おゝ、ようこそ。』

豐後守も慇懃に迎へた。

『到來の川魚があるので、一獻參らせたいと存じたが、今日は御多忙とか？』

『はい、一寸、他用がございまして——然し、御用務ならば、何を措いても罷出なければ成りませぬ。早速ながら……承はる事にいたしませうか。』

『まあ、少しは落着いて吳れられ。』

豐後守は、わざと用件を避けて、

『實は、今一人こゝへ參る仁がある。貴殿と、三人鼎坐を描いて語りたいと思うてな。』

『は、左樣ですか。』

靜女之正は、ちらと豐後の顏を見て、

『三人寄れば文殊の智慧といふ仕儀ですか。』

『いや、徐々口が惡いな。』

豊後守も笑つて、

『但し、今川殿。』

『はい。』

『如何なる人が參らうと、何うか虛心坦懷で居て貰ひたい――わしが、考へあつて、特に設けた席だから。』

『は、それは最う申す迄も有りません。私は、左樣なことは一向平氣です。』

『うむ、是非さう云ふ事に……何、來て見れば、はゝあ、と貴殿も肯頭く人だ。』

其の時、座敷の裾に取次侍が畏つて、

『只今、御客人がお見えに成りました。』

と告げるのであつた。

『おゝ然うか、何うかこれへ。』

『はつ。』

取次侍が行つて了ふと、豊後守は、

『今川殿、見えたさうだ。』

『はあ――さて、誰人でございませうな？』

云つてゐる所へ、靜かな跫取で酒井雅樂頭が這入つて來た。

『おゝ、遲はり申した。』

『いや、何卒これへお通り下さい。』

『はあ――御客人か？』

雅樂がさう云つた時、座敷の今川靜女之正も振向いて、二人顔を見合せた。

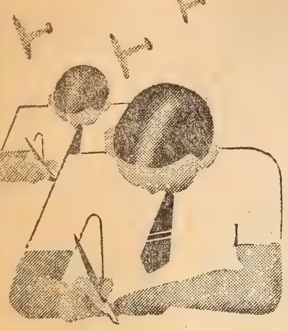
はつ、とした樣に靜女之正は顔色を變へた。

雅樂頭は、づか〳〵と上座に廻つて豊後守の隣に着座して、

『何うも御無沙汰ばかり……』

靜女之正の方にも、顔を向けて一寸默禮を交した。

豊後守は、わざと磊轟な調子で、



頭の……痛みと疲れに

ノーシン

ノーシンは、頭痛を速かに止める同時に、頭腦の疲れをグット恢復して頭をハッキリさせる獨自の作用を持つてゐます。而も常用すれば神經の榮養をよくし、心臓を強補しますから日日頭腦を酷使する現代人の頭腦藥として好適です

主効 頭痛・頭重 頭腦疲勞・頭內朦朧 のぼせ・二日醉 めまひ・船車の醉

三十錢・五十錢・一円

發賣元 荒川長太郎合名會社

『今日は、實はわしに魂膽がある。それは、一點の私心も挾まぬ、天下國家の爲の魂膽だ。目今、泰平の上にも泰平の礎を築くために、將軍家におかせられては日夜、心膽を惱まして居られる。御承知の武道制定の儀も、みな其れが爲めに他ならぬ。就ては、今日は折入つて御兩所に懇談いたしたい事があるのだ。』

『なるほど。』

雅樂頭は、莞々して、

『何なりと承はらう。』

『うむ――で、今川殿と武道書の件について、親しく打合せて頂きたいのだ。』

『はゝあ。』

『双方とも、滅私の志を以て、探索の進行を打明け合ひ、互ひに長短補足、二者一となつて、目的を達成する樣に――つまり、鶴龜道は一揃ひより無いのだから、何うしても兩家は和睦するより他は無い。』

『私の方では……』

と靜女之正が云つた。

『もう、間もなく揃ひます。』

『いや、わしの方でもぢや。』

と雅樂が、直ぐ切り返す樣に云つた。

『拙家の手一つで、鶴龜兩道首尾一貫して取揃ひ確實だ。』

『そ、それが不可んのぢや。』

豐後守は狼狽てゝ遮つた。

『……御兩所とも、然う思つて居らるゝが、それでは果しが無い。兩家が爭ふより、一心一體と成つて、榮譽を兩家で分擔されたが好いでは無いか。』

『いや。何。』

酒井雅樂も頑固だつた。

『……兩家とか、和睦とか、そんな事は私事ぢや。滅私と云ふからは、

何アに、例へ如何樣に爭はうとも構はん。ひつきやう、武道書を、將軍家へ献納さへすれば、それが奉公の誠と申すものぢや。』
『私も和睦など考へては居らん。』
靜女之正も、負けずに云ひ張つた。
『……天下の爲に、武道書を探して居るのでござるから――榮譽の分擔など、そんなケチ臭い事を考へては居らん。要するに、榮譽はわしの一家で獨占してお目にかける。』
『御兩所、まあ〳〵。』
『いや、面白い。』
雅樂も肩を昂てた。
『……今川殿とは、久潤の對面、幸ひ豐後殿の面前で、堅く誓はう。わしは十日以內に必ず龜道を入手して見せる。』
『なに、十日以內――大分、寛りとだな。私は五日でも好いが……では、當方でも十日の日限を誓約いたさう。雅樂殿、貴殿が若し負けたら？』
『勿論隱退だ――だが、其前にまづ、貴公の面前で髪を剃つて坊主に成らう！』
『面白い――然らば、拙者も、貴殿に先んじられる樣な事が、萬々一あつたらば、同じく坊主に成り申さう。』
『うーむ、よろしい。大いに面白い。』
『お忘れあるな！』
『勿論ぢや。十日目の子ノ刻九ツ（夜十二時）きつちりが刻限とせう。』
『承知いたし申した――場所は？』
『豐後殿には御迷惑でも、此處で再會とせう。』
『は、よろしい――では、酒井殿、金丁。』
『心得た。』
二人は、豐後守に言葉を指挾む餘裕も與へず、目の前でパチン〳〵と鍔口を鳴して、一瀉千里に和解どころか逆に金丁の誓約をして了つた。

花一合せ

酒井雅樂と今川靜女之正とは、直接談判で手詰の約束を取交したものゝ、鶴龜道を探索するのは自分では無かつた。

雅樂頭は切門桐之丞宅の紀ノ鶴太郎を當てにしての事であるし、靜女之正の方でも、自分の伜の作馬を當にしての事だつた。

行掛りの意地で、互ひに強氣に出たのであるが、亦實際に、双方とも自分の手に入るものと信じて疑は無かつた。斯ういふ氣風は、昔の大名はみな持合せて居たものである。自分は如何なる場合でも勝つと考へてゐたし、家來には、如何なる難題でも、命ずれば必ず果すものと考へてゐた。

切門桐之丞は、酒井雅樂から急使を受けたので、直ちに伺候したが、やがて歸宅した桐之丞の顏色は當惑に搔暮れて蒼白だつた。

『お歸り遊ばしませ。』

『うむ。』

女房に迎へられて、自分の居間に通ると、桐之丞は全身を持餘し氣味にどつかと坐つた。

『ふーん、鶴太郎はいかがいたした？』

『丁度只今、外から歸つて參りました處でございます。』

『自分の居間か？』

『はい、萩繪がお茶を持つて參りました――酒井樣では、何かこみいつた御用でも？』

『なに。』

桐之丞は輕く云つたが、

『何時もの事だ。今川靜女之正とひどく競合ひに成つたらしい。御沈着な方だが、時にへいぜいとは、別人の樣に氣短なお振舞があるのでのう……まあ、そこが大名の大名たる所ぢやらうがな。』

『さうすると、矢つ張り鶴太郎さんのやうなものですね。』

『はゝゝ。』

桐之丞も笑つた。

『左樣……鶴太郎も、あれはあれ成りに、一種の大名學を具へてゐる。はゝ、大名が、おん前、おんれと云うては可笑しからうが。』

『おほゝゝ、でも、聞馴れると決して耳障りに成りませんね。』

『それは贔負目だ。世間では通用せん――今に直るだらうと思ふが、自分で平氣だから困る。』

『平氣だから好いのぢや有りませんか……あんなに強くて、何から何まで出來て、天下無敵の侍ですもの、あのくらゐの拔道がある方がよろしうございます。』

『然うかな――其れはさうと、早速だが鶴太郎を此處へ呼んで來てくれぬか。』

『はい……でも、折角あつちで寛いでゐる所ですのに。』

『仕方が無い。遠慮してゐると、彼の先生、何時亦、プイと飛出して了ふか知れぬ。』

『おほゝゝ、全くですね。では呼んで參りませう。』

女房は座敷を出て行つた。

そして、鶴太郎のゐる居間に近づくと、鶴太郎と萩繪の朗かに話してゐる聲が聞えた。

『まあ、お腰元ばかりを招いて御馳走をするんですか？　そのお富豪のお邸で？』

『あゝ、然んださうな。毎年の吉例だと云ふことでな。』

『隨分風變りな御主人でございますね。』

『うむ、富豪といふ者は、金の用ひ途に困つて、色々と道樂を考へつくもんだからな。』

『然うね、お道樂半分と云ふところでせうね。』

『うむ……けんど、其邸に龜道の書が有るらしいから、此方に取つては耳寄な話だが、腰元ばかりの招宴に出懸けて行くわけには行かんで。』

『え？　龜道の書が其お邸に？』

『甲州の加地龜太郎が預けたといふのは、其の家らしいで。——何しろ、男なら門閥者で無ければ會はんと云ふ變物の主人だし……おんれも、色色考へた末一工夫こらす事になつた。』

『何んな工夫なんですか？』

『それはだ、萩繪樣も一度會つた事のある、ほれ、益田道場のお絹さんな。』

『はい。あなたがお救ひ出しなされました。』

『あのお絹さんが……腰元に化けて乘込んで呉れる事になつたのだ。』

『うむ。まあ……』

『當日うまく、龜道の在所を探り出して、手に入れて歸るからと、お絹さんが强つて賴むので、到頭おんれも許すことにした。』

『お羨しいわ、お絹さんは。』

萩繪がさう熟々と呟いた時、障子の外の母親が、

『あの、お話半ばで濟みませんが……鶴太郎樣、叔父さんが急に御用がある相ですから、一寸いらして下さい。』

と聲をかけた。

二

鶴太郎は桐之丞の前に額づいてゐた。

『只ん今、歸りました。いつも、掛違つておん目に懸りません。』

『いや、お前も大事に携る體、わしと始終顏を合せてゐる樣では駄目だ。會はん位が好いのぢや——時に、一寸話があるが。』

『はい。』

『いよいよな、短兵急な事になつて來た。只今、酒井邸へ伺候して來たが……雅樂樣と、今川靜女之正とが、阿部豐後守樣の面前で、又々衝突して了つたのだ。今度は、十日といふ日限を切つて、互ひに金丁の誓約までしたと申すのだ。どうもはや。』

『ふーむ、輕率千萬な。』

と鶴太郎もすぐ叱る樣に云つた。

『え？　輕率？　では、鶴太郎……こつちに勝つ見込が無いのか。』

『いや、勝つ見込みはあんます。あんますから、十日などと向ふに餘裕を與へて、そんがはあ、馬鹿々々しいと思ふのです。』

『然うかッ！ 輕卒とは、その事なのか。』

『うゝん。』

と鶴太郎は、頭を振つた。

『……輕卒というたのは、金丁を切つた事です。苟しくも、千石萬石の大名同志が、下侍のする金丁の誓ひを交すなどと、おのれを辱しめるも程こそあれ。大名たる者は、言個に非ず、衆の表たりと云ふ言葉があるではあんませんか。以後、愼しむやうに言上せられるが好えで。』

『はつ、成程！ それは、その通りだ――いや、全く……雅樂樣も、大量の仁だが、時々出來のわるい事がある。相手が今川靜女之正だからつい人格が乘移つて、其んな眞似をされたのだらう……鶴太郎、ゆるして呉れ。』

『何も、叔父樣を叱る譯では無いですが。』

『はゝゝゝ、いや叱られても好い。道理は一つだ。叔父も甥も無い。――そこで鶴太郎、只今申した十日の日限だが、どうぢやらう？』

『はあ、宜しうございます。』

鶴太郎は、うなづいて、

『成る可く、手荒な眞似をすまいと思へばこそ暇取りますが、愈々となれば、何アに大丈夫です……』

自信ありげに斯う云ふのであつた。

その時、向ふの部屋の縁口から娘の萩繪が、人目を忍んで密と家を拔け出してゐた。

そして、往來から程近いお絹の住んでゐる例の家を訪づれて、

『御免下さいませ。』

と呼んでゐるのであつた。

取次の家人が出て來ると、

『お二階のお絹樣に一寸お目に懸りたいのですが――あの……妾は、萩繪と申す者でございます。』

やがて萩繪は、同じ取次によつて二階へ通された。

『まあ、切門樣のお孃樣……先日は失禮いたしました。』

お絹は出てくると、今日も萩繪の閑雅な美しさに目を瞠りながら、然う云つて挨拶するのであつた。

萩繪も、お絹の凛つとした美しさに、思はず眩く仰いで、

『妾こそ失禮いたしました。あの……今日は一寸、お賴みがございましてお伺ひいたしましたの。』

といふ――。

襖が閉つてゐるが、向ふの部屋に鶴太郎の母親と、それから矢張り鶴太郎の救ひ出した、益田道場の乳母お梶が居るのであらう。……萩繪は、鶴太郎の母親と一緒に住んでゐるお絹が羨しかつた。

（こんな怜悧な女と比べて、妾なんか……）

迚も、とても、鶴太郎樣のお母樣に氣に入られる筈は無い――さう思ふのだつた。

『はい、何んな御用でございませう？』

『あの……妾、貴女のお供をさせて頂きたいのでございます。』

『え？ お供……まあ、どういふ意味でございませう。』

『はい。』

萩繪は、俯向いて、
『腰元のお宴會に、お絹様はお出でに成るのでございませう。妾も、腰元に扮りますから、御一緒にお伴れなすつて下さいませ。』
『まあ……萩繪様が、そんな。』
お絹は、聲を潜める様にして、
『それは、駄目でございます。妾一人でも、瀨踏みですもの、若しかの時は大變です。それに妾は、紀ノ様には、色々と御恩がございますのですから。御恩報じのためにと存じまして……』
『妾も……妾も鶴太郎様の爲にお盡ししなければなりません――元々父が、酒井の殿様から御下命を蒙つた事ですもの。鶴太郎様のお手助けするのは當然です。』
『でも……萩繪様まで、そんな事を成さらずとも。』
『いゝえ、妾、いたします。お絹様、是非お伴れ成すつて下さい――、若し、お絹様がお諾届け下さいませねば、妾、單獨でも、腰元に扮つて參る決心でございますの……いゝえ〳〵。』
『まあ、困りましたこと。』
お絹は當惑にかき暮れた。
二人は、しばらく押問答をしてゐたが、其の內に何とか意見が一致したものか、莞爾と顏を見合せて、
『――では、然う云ふことにね。』
『――えゝ、さう致しませう。』
と互ひに頷き合ふのであつた。

リウマチ せんき 神經痛の治し方

底の方から痛みを取る漢方排毒素自宅治療法

痛むから痛み止め、シビレるからシビレ押への服藥をすれば、スグ治る様に思つて居られる方が多い様ですが、これは水の流れを堰き止める様なもので、源の病原が治らない限り、幾らでも痛んで來るばかりか、却つて益々病勢が強くなつて來て、遂には全身足腰立たぬ様になる事が往々あります。

此の病氣の原因は血の檢査をしても分らない、體毒や老廢物又は色々の病毒が血の中に交り、どこか打つたり、冷たり、過勞したりして、弱つた所へ結滯して痛み出すものですから、其の毒素を小便に取り去つて治す、漢方排毒藥がよく治る譯であります。

本院は古くからこの漢方排毒素療法を、この病氣でお困りの方にお傳へして、喜んで頂いて居りますが、世間にはまだ〳〵この病氣のお方が、この良い療法を知られなかつたり、又折角この療法を知り乍ら、他の一時押への藥と同じ様に思つて信ぜられずに、苦しんで居らるゝ方も澤山ある事と思ひます。

五年も十年もの慢性になつた方にも、痛みの激しい急性の方にもよく効く療法です。當院では何もかも全部無料でお知らせして居るのですから、お困りの方は明日と云はず今すぐハガキで『漢方排毒素自宅療法送れ』と大阪府布施市四條通六四招福院藥房森隆造へ申込んで下さい。自宅で出來る様、詳しくお知らせします。

腰元の宴

一

今ならば、腰元慰安會とでも云ふので有つたらう。

田中角兵衞と云ふ御用商の邸で、毎年吉例と成つてゐた。御用商と云つても、江戸城直屬では無いが、諸大名に出入して、御調度方を務め、傍ら金融も承つてゐると云ふ評判だつた。

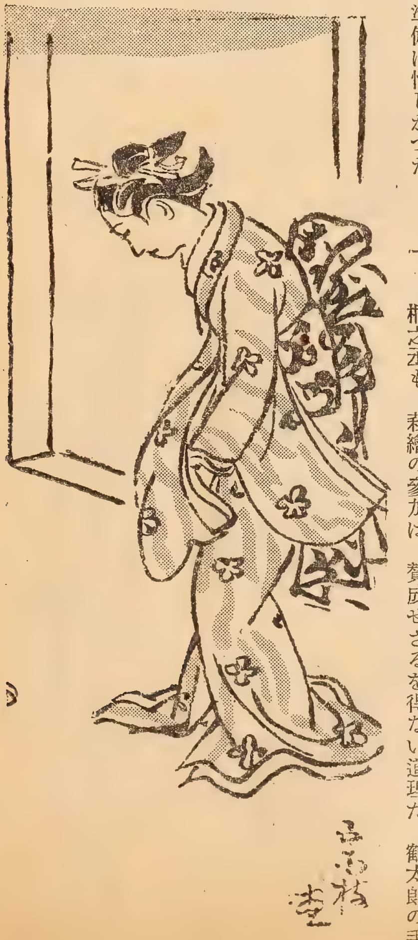
この邸が——實は、甲州谷村の加地龜太郎の妻の實家なのだ。今川作馬も、この事は木蓮屋敷の女中から聞出して知つてゐたが、生憎名前を聞はぐれて了つた。

さて、田中邸では今日が丁度、其の慰安會の當日だつた。朝から庭を掃き清め、座敷を片付け、大勢の腰元を招く準備に忙しかつた。

定刻に成ると、花の咲競ふ樣に着飾つて諸家の腰元が三々伍々集つて來た。

中には、御主人の乘物で得々とやつて來る者もあつた。何しろ、粒選の腰元が六十何人といふ多數、一堂に會して大盤饗應に預るといふ彼女等にとつて一年に一度の書入日だから、此處を先途と妍を競ふのは無理はなかつた。

田中邸の番頭は、下足番、受附と、それぞれ役目をきめて、最う有頂天だつた。



『はい、青山樣ッ。』

青山佐渡守の腰元が、先着だつた。

續いて、

『藤堂樣。』

『佐竹樣。』

聲々に呼はりながら、玄關から送り込んで行くのであつた。

『はい、酒井樣。』

聲に應じて玄關に上つたのは、萩繪とお絹であつた。

二人は、酒井雅樂頭の腰元に扮してやつて來たのだ。酒井家への手續は、大方切門桐之丞が執つたもので有らう。お絹では其の手續が執れないから、萩繪がそれを條件にお絹との同道を説き伏せたものと思はれる。

桐之丞も、萩繪の參加は、贊成せざるを得ない道理だ。鶴太郎の手

助けに成る事なら、切門家としては何を措いても行はなければならなかつた。

『ほう……』

美女に見馴れた番頭達も、萩繪とお絹の美しさに、思はず目を瞠つた。元來が、何方も侍としては中流の娘であるから、腰元に扮しても品格があつた。二人が玄關に上つた時は、何となく周圍を壓倒するやうに、ぱつと輝いた。

その時、續いて蓮歩を運ぶ砂の音がして、

『今川様ッ。』

と送り込む聲が聞えた。

今川靜女之正宅のお秀だつた。

お秀も逸早く今日の催ほしに應じたのだ。彼女の美しさは亦、續いて人目を惹いた。お秀は本當の腰元であるが、同家の若殿作馬と乳兄妹として育つただけに、矢張り並居る女性の中では一頭地を拔く美しさを持つてゐた。殊に……作馬を戀し、其の身を捧げて、すでに情を解する彼女は、其處に何とも云へぬ色氣に似て潤ひがあつた。

『ま！』

萩繪が、玄關の衝立の蔭へ歩み入つた時、

今川様ッ、と送り込む聲を耳にして、はつと振返つた。

(あゝ、今川と云へば、今川靜女之正に違ひない？ では矢つ張り向ふ方も？ ……さうだ、能くあの女の顏を見覺えて置かう)

萩繪は、さう思つて、凝つとお秀を見詰めた。

お絹は、數歩向ふへ歩み入りながら、

『萩繪様、早くいらつしやいませ。』

と呼ぶのだつた。

『はい……』

萩繪は、お秀を能く見覺えておいてからお絹の傍へ走り寄つた。

『お絹様。一寸……』

小聲で、私語いた。

『今川靜女之正の腰元も來てゐますから、用心しませうね——妾、顏を覺えておきました。あ？ そら、其處へ行く女。』

二

座敷は、一切男拔きであつた。

只だ、主人の田中角兵衛だけが出て、一同に挨拶した。

『今日は皆様、斯様な穢苦しい所へ、ようこそお越下されました。何の御待遇もできませぬが、何卒御ゆるりと御遊び成されて下さい。私達商人の安樂に暮せますは、皆貴女方主家の御庇護に依るところで有ります。と申して、御恩報じの何のと申す譯では更々御座いません。貴女様方に何とは無しに、斯様に集つて頂いて、何とは無しにお待遇をすることが、私の天命の様な氣持が致します。只それだけの事で、決して深い意味があるのでは御座いません。では、私はこれで引退りますから、後は御遠慮なくお寛ぎ下さいます様に——』

羽織、袴、白扇を構へて、これだけの口上を云つた。

腰元共は、ざ、ざつと、花園が一遍に搖ぐ樣に、お辭儀をした。

それから、愈々慰安會に入つた。

先づ、舞臺で餘興が始まつた。舞臺が終ると、今度は庭で始まつた。舞臺と庭と双互に、餘興が交されて、きやッ、きやッと嬌笑の渦を卷いた。

それから、中憩。

この間に、大廣間に膳部が揃つて、みな其處へ導かれて着席した。

角兵衛の女房おたつが出て、

『何卒、みな様、御召上り下さい。』

と挨拶して、自分も膳部の一つに就いた。

萩繪とお絹は、上席の緣寄に、二人並んでゐた。萩繪は今川家のお秀を目で捜すと、向ふ側のやゝ下つた場所に、ぱつと目立つ表情をして坐つてゐた。

『お絹様、あの方、——向ふ側です。』

『はい、妾も氣がついてをります。美しい女ですのね——まるで、若奥方と云つた風。』

『全くですのね……あの方、本當の腰元でせうか？』

『おほゝゝ、其れは然うでせう——眞逆、向ふまで。』

『然うね。——おほゝ、さあ頂きませう。』

なにげなく、二人は其麽ことを私語きながら、箸を取上げた。

御馳走は二ノ膳附で立派だつた。
御銚子で、お酒を注いで廻つたが、飲む者は少なかつた。それでも、段々陽氣になつて、彼方でも此方でも、優しい爆笑が起つた。
食事がすむと、女中頭らしい年増が出て、
『御粗末樣でございました。』
と挨拶して、小女を督勵して膳部を引いた。
その後で、また餘興がはじまつた。
今度は、琴、三味線、踊りなどの遊藝が行はれた。
『御別室に、少々御道具を陳べてございますから、お好きの方は御自由に御覽下さい。』
先刻の女中頭が、畏つて觸れた。
『萩繪樣。』
お絹が、
『あの女、ほれ彼方へ……』
『あ？　さう。御道具部屋でせう――　お絹樣、妾達も行つて見ませう。』
『では、萩繪樣、貴女だけ行つて見張つてゝ下さい。妾後から……』
お絹は、口を寄せて、
『女中頭に一寸話して見る事がありますから。』
『えゝ、では妾行つてゐます。お絹樣、直ぐいらつしやい。』
然う云ひ置いて萩繪は道具部屋へはひつて行つた。
果して、お秀が向ふに素知らぬ風で、花瓶の前に立つてゐる。
萩繪も、其の側へ行つてそつと佇んだ。

『結構な御花瓶ですこと。』
やがてお秀は、獨語を呟いた。
そして、今度は歩を移して屛風の前に立つた。
萩繪は、側近く息を殺して其樣子を窺ひながら、
（矢つ張り、他の事を考へてゐるのだ――）
と、何か熱い火にでも煽られる樣な氣持がするのであつた。
萩繪は、
（お絹樣はまだか知ら……）
振返ると、其處へ先刻の女中頭がスツと此方へ目當をつけたやうな足取で這入つて來た。
おや？
萩繪は、自分に用が有るのかしらと思つた。
女中頭は側へ來ると、
『貴女樣でしたね、今川樣は。』
かう、お秀に向つて云つた。
『はい。』
『何卒、此方へお出で下さい。御文庫は、今日はお見せしない事になつてをりますが……少々ばかりなら特別に。』
『はい、――有難う存じます。』
お秀は、女中頭に導かれて文庫の間とやらへ這入つて行つた。
（ま！　大變……）
萩繪は、はつとばかり立竦んだ。

（つゞく）

日・獨・英
發明特許

自力健康器の偉効!!

胃腸が丈夫に夜分は安眠

二木博士の學説を物理化
不老長壽・健康の大本!!

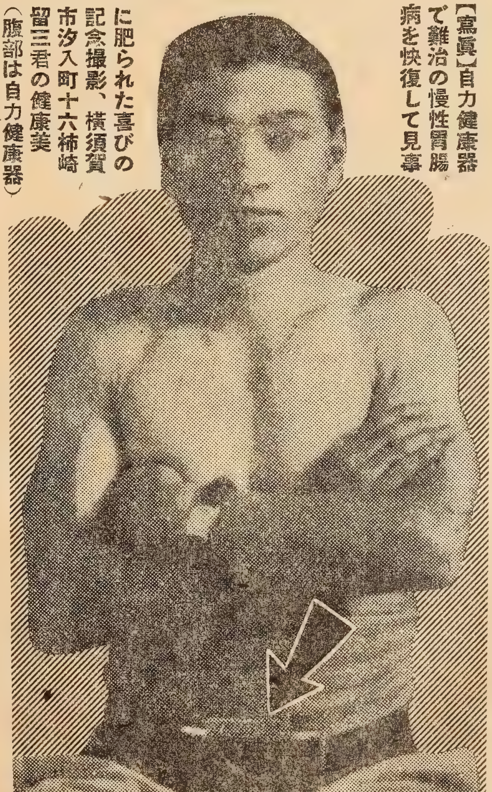
不老長壽、健康の秘法として、古來より傳はる坐禪や、靜坐法、白隱禪師の内觀の法等は、今日で云ふ所謂、呼吸法の一種なのであります。

これ等の呼吸法を近代醫學の立場から研究し醫學を基礎として創案されたのが、帝國大學教授、二木謙三博士の學説による呼吸法であります。

多年の胃腸病や神經衰弱、高血壓、動脈硬化症その他の難症が二木博士の呼吸法によつて救はれた實例は枚擧に遑なく、治療と健康増進、更に精神修養上、他に比類なき偉大なる其効は、識者の等しく驚嘆するところであります。

『自力健康器』は、この二木博士の學説を物

【寫眞】自力健康器で難治の慢性胃腸病を快復して見事に肥られた喜びの記念撮影、横須賀市汐入町十六柿崎留三君の健康美（腹部は自力健康器）



柿崎留三君

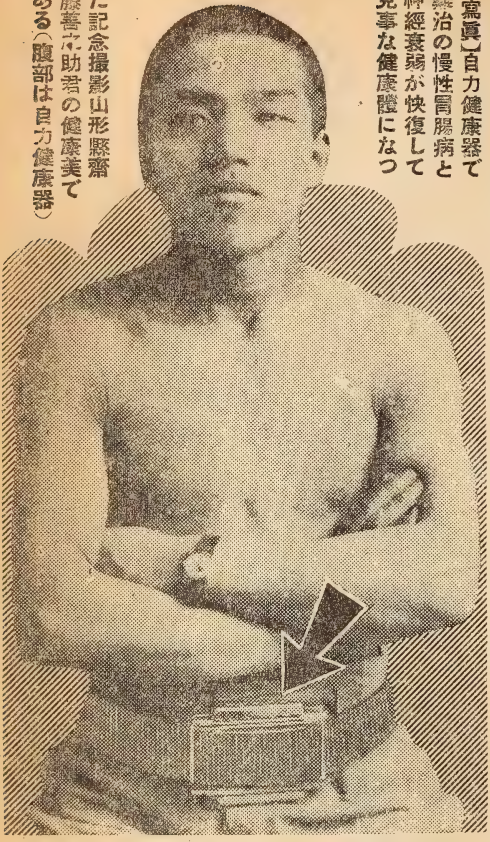
理化して、婦人や子供も手輕に使用出來る、日・獨・英・發明特許の最新醫療器です。

慢性の胃腸カタルが治り 二貫目も肥り大喜び

山形縣西村山郡西里村根際　齋藤善之助

私は本年二十四歳の青年であります。これまでは、慢性の胃腸カタルの爲め、藥も服み溫泉にも行つて治療を致しましたが、どうも思はしくないので困りました。身體は衰へて十二貫目ほどにやせて仕舞ひ仕事をするにも疲勞し、顏色も惡く毎日悲觀して居りましたが『自力健康器』を使用して見ると、一週間目頃には、下腹に何となく力が出來て氣分が良くなり、食慾も進み便通も毎日あるやうになつて只今では二貫目も肥つて青年らしい元氣者になりこんな嬉しいことはありません。

私は體驗から胃腸の弱い人には『自力健康器』ほど良いものはないと思ひます。厚く御禮を申上げます。



【寫眞】自力健康器で難治の慢性胃腸病と神經衰弱が快復して見事な健康體になつた記念撮影山形縣齋藤善之助君の健康美である（腹部は自力健康器）

齋藤善之助君

▲女も子供も（十二歳以上）使用は簡單
（藥も電氣も入らず妙）五分か十分ヅツ
（音を樂しみつゝ治る）一日三十分以上

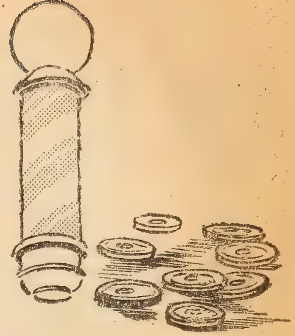
適應症

不眠神經衰弱・胃下垂・胃酸過多
食慾なき人・慢性胃腸カタル
便秘で困る人・慢性胃擴張症
下痢に惱む人・其他、一般病弱に奏効。
慢性胃アトニー・胸部病は、醫師の指導を要す。

自力健康器　定價 十二圓　新型 十四圓

東京神田駿河台二四
頒布元　國民保健振興會
振替東京七二一七番
電話神田（四二一〇・四七九四）

（申込次第『自力健康法』一冊無代郵送す）



こゝにも國策協力

坊主頭から出發

上野驛長　富田政助

理髮屋の內職？

それは、昨年の七月下旬のことだつた。上野驛內手小荷物扱所の一隅にある湯沸し所の前を通つた私は、思はず『おや？』と云つて足を止めた。湯沸し所といふのは、手小荷物扱所員のために呑み湯を沸してゐる、謂はば小學校の小使ひ室みたいな所なのだが、そこで、添野孝治といふ湯沸し所の係の者が、バリカンを片手に一生懸命に驛員の頭を刈つてゐたのだ。しかもその傍に置いてある蜜柑箱の上には、剃刀やブラシなどが並べてある。

添野といふ男が、最近、山田小荷物掛主任の申し出でで、荷扱手から湯沸し所の係に轉じた事は知つてゐたが、まさかそこで、理髮屋を開業しようとは夢にも思はなかつた。

『山田君！　添野が湯沸し所で理髮屋の內職をやつてゐるのを、君は知らないのかね？』

と、山田主任に言葉を强めて詰問したのだつたが、その時、山田主任から全ての事情を聞き知つた私は、却つて自分の輕卒を恥ぢないではゐられなかつたのである。內職どころか、それは四百三十八名の手小荷物扱所の全員が、非常時下の國策線に副はんとする赤誠の現はれに他ならなかつたのだ。

——その日から二十日ばかり前の六月二十七日の事である。『精神總動員はまづ手近な頭から。』とばかり、上野驛勤務の驛員で二十五歳以下の者は全部斷髮をする事になり、その斷髮式が構內の一室で嚴かに執行されたのだつたが、この時、手小荷物扱所の全員が、年齡に關はらず氣を揃へて一齊に丸坊主になつて列席した。全員、丸坊主になつて非常時下の職務に勵まうといふ意氣を示したのだつたが、その直後、山田主任は考へた。

坊主頭は長髮のやうに手入れなどの世話はいらない代りに、却つて頭を刈る回數は多くなるものだ。それでは、決して簡素經濟とは云へない。何とかして坊主頭にした意義を徹底させる方法はないだらうか？と、いろいろ考へをめぐらした末、ふと頭に浮んだのが、以前、理髮屋の職人をしてゐたといふ荷扱手の添野孝治だつた。

『さうだ、添野に賴んでみんなの頭を刈つて

貰はう……』
　だが、それは添野にとつて迷惑至極な話に違ひない。四百三十八人の頭である。一人が一月に一回づつ刈るとして、添野は一日に十何人の頭を刈らなければならないのだ。が——
——添野は氣持よくこの仕事を引き受けた。それまで、湯沸し所の係をしてゐた者と、職場を交替して、添野は同僚の頭を刈る事になつたのである。湯沸し所の仕事は比較的閑散だし、場所も理髪には好適な所だつた。バリカンや剃刀などの道具は、山田主任が自腹を切つて買ひ調へた。手小荷物扱所の者は、仕事を終へると、次ぎ次ぎに頭を刈つて貰ひにやつてくる。その數は一日凡そ十五六人、一人に三十分かゝるとして一日五、六時間の餘分な勞役なのである。が、湯沸し所の仕事に精を出しながら添野は、
『これも鐵道のためだ、國のためだ……』
と、朗らかに明るく、同僚の頭を刈り續けてゐるのであつたが、その時私を更に感動させたのは、全員が頭を刈つて貰ふ度に、湯沸し所に備へつけの木箱に五錢を投入する事になつてゐるといふ事だつた。名づけて國防理髪献金！　その金額こそ僅かではあるが、坊主頭に國防献金の誇りを感じながら働く事が出來るやうになつたのである。

　そして、その後の手小荷物扱所全員は以前にも増して仕事に精勵するやうになつた。勢ひ、業績が非常によくなり、間違や事故が少くなつた。そして、また、各自が仕事以外のあらゆる事で國策に協力せんと努めるやうになつたのである。
　この國防理髪献金箱は、一ケ年後の七月七日に始めて開けて見たら八十五圓貯つてゐた。一回が五錢、丁度千七百人分である。翌日早速陸軍へ献金したのであるが、これを一回五十錢の理髪料として計算して見ると、坊主頭で七百六十五圓の節約が出來たわけである。

荷札の針金

上野驛内の手小荷物扱所で扱ふ荷札は一日に六、七千枚を下らぬほどであるが、從來、この使用ずみの荷札は、そのまゝ纏めて捨て去つてゐたのだが、
『これは、勿體ない！』と、それに氣がついたのが、池田恒策といふ荷扱手だつた。荷札には細い針金がついてゐる。假令、くにやくにやに折れ曲つてゐようとも、これをそのまゝ捨て去るといふ法はない、物資の節約、廢品再生の主旨に反した大きな無駄だ、と、池田はその日から、その廢物の荷札の針金を一本々々ひきぬき、荷扱所の一隅で仕事の間を見ては、これを延ばし、百本づつ一束にして、同僚に使用させてゐたのだつた。それ

は、あの理髮献金が行はれるやうになつてから、十日ほど後に始められ、その事を山田主任が知つたのは、それから二月も後の事だつたといふ。そして、池田は、今もなほ默々として廢品の針金を延ばしつゞけてゐるのであるが、同じ荷扱手の勝又隣德といふ驛員は、使用ずみの貨物通知書を集めて、觀世撚りを作り始めた。これも、荷札と同樣に今まではみんな捨てゝしまつてゐたものだが、

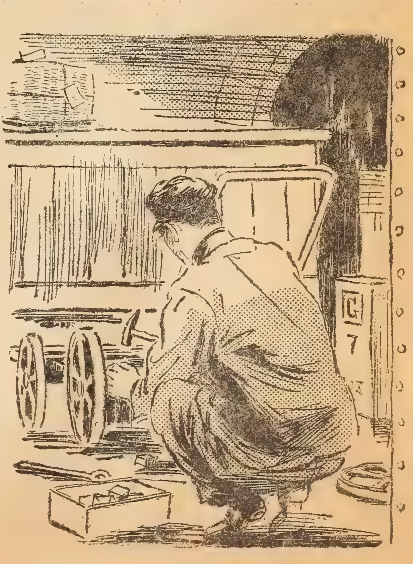
『こんな良い紙を捨てるのは勿體ない。さうだ。この通知書で觀世撚りを作らう。そして出札の方面で使つて貰はう。』

勝又も亦仕事の暇が出來ると、廢物の貨物通知書で觀世撚りを慥へ始めた。そして、半月ばかりの間に約千本の觀世撚りを作り、これを出札方面に持つて行つた。その後、約一年間、相變らず觀世撚りを拵へながら、今日に至つてゐるのである。

手押し車の修繕

さういふ具合に、國防献金をしながら丸坊主となつた手小荷物扱所の者は、物資の節約に、廢品の再生に、職務以外の尊い汗を流し、進んで國策に協力するやうになつたのだが、今年に入ると、鍵金四郎といふ手小荷物運搬用手押し車の配置世話掛の佳話が、また、私の耳に入つたのである。

手小荷物扱所には、三百五十臺の手押し車が常備されてゐるのだが、手押し車は故障が多い上に、修繕日數も長く、費用も決して安くはない。驛で調査した所によると、一臺の平均修繕日數は四十一日で、費用は三十七圓といふ事になつてゐた。そして、一月の故障臺數は平均五十臺。費用もなかなか大變だつたし、三百五十臺の車がいつも三百臺ぐらゐしか使へなかつた。鍵は、これに氣がついたのである。そして、約四ケ月間、手押し車修繕の研究を續けて後、今年の一月から、修繕に出す車を自分の手で皆修繕をするやうになつたのである。それまで四十一日もかゝつた修繕が、鍵によつて、一日か二日といふ嘘のやうに早く出來るやうになつた。故障した車は、かうして、次ぎ〳〵と鍵の手によつて修繕されて、直ちに再び職場に出動するやうになつたのだ。三百五十臺の車が、殆んどそのまゝ全能力を發揮する事が出來るやうになつたのである。しかも、修繕費は殆んどかからない。一月から五月までの間に、鍵は約三千六百圓の修繕費を節約した事になるのだ。そして、いまもなほ、彼は孜々と比較的仕事の暇な晝の時間を、手押し車の修繕に汗を流し續けてゐるのである。



國防理髮献金から出發した池田、勝又、鍵等のこの篤行、その事自體は、極く小さな事かも知れない。が、國策の線に副はんとする赤誠の現れとして見るとき、私は大きな感動を覺えないではゐられないのである……。

（伊勢良夫畫）

AT—193

化膿に内服・短期療法の確立

至純を誇る
日本最初の
二基ズルフォンアミド劑

アルバジル錠

アルバジルは二基のズルフォンアミドを基調として結合せる高分子化合體であつて、內服により、生體內に於て化膿性諸細菌に直接殺菌作用及び菌の發育防止作用を營む。又同時に人體自體にも、菌を侵害する抗菌體の發生を促す作用をも有するものとせられる。即ち病原菌に多角的作用を及ぼして之を掃滅するが故に、短期に根治して再發性がなく、全國大學・大病院の信望を集めてゐる。

連鎖狀・葡萄狀球菌・淋菌
大腸菌等による諸疾患……

★丹毒・癤腫・座瘡・面皰
★麥粒腫・淚囊炎・眼瞼炎
★中耳炎・扁桃腺炎・瘭疽
★急性慢性淋疾及尿路疾患
★產褥熱・腎盂炎・膀胱炎

廿錠—四　円
百錠—十七円
各藥店に有り

株式會社
山之內藥品商會
東京市日本橋區小舟町
大阪市東區高麗橋五

家庭詩

節米日

サトウ・ハチロー

毎日晝は節米と
家族會議できめたけど
一歩すゝんで日曜は
一日代用食とした

香りの高い味噌汁に
うでたジャガ芋朝飯だ
お皿にとつて父上は
みんなを見まはしやがていふ
『ドイツへ留學した頃を
ジャガ芋みると思ひ出す』

母と姉とが晝餉には

すゐとんつくッてさアどうぞ
『すぎた昔の震災が
思ひ出されてなつかしい』
祖父の言葉に家中が
うなづきあッて箸をとる

夕餉の膳のそばがきは
祖母の故郷の信濃もの
川中島や妻女山
祖母の話しを聞きながら
食べると信濃の山水が
胸にしづかに浮いてくる

代用食のたのしみに
かててくはへて思ひ出の
種はつきない節米日
うれしわが家に灯はともる

細木原青起畫

指輪

北林透馬

青年には『夢』が無ければ一日だつて生きては行けるものでは無いのだ。

だが『夢』にだつて色々ある。アメリカの青年には、とに角『有名』になつて、世の中の人間に持てはやされることが、一番大きな夢だらうし、イギリスの青年にとつては、好い教養を持つた『紳士』になつて、上流階級の人たちと同等につき合へるやうになるのが、最高の夢だらうし、いや、若しかしたら、もつと違つた『夢』を持つてゐるかも知れないけれど、そんな外國のことは何うでも好いとして、では日本の青年は、どんな素晴らしい『夢』に生きてゐるか？

言ふ迄もないこと、國家が當面してゐる運命の聖戰に、身を以て參加し、何ほどかの功績をあげて、武勳赫々、皇恩の萬分の一を報ずること、それ以外に、どんな『夢』があると言ふのだらう。

日本中の青年は、みんな一つの、同じ夢に生きてゐるのだ。銀座を歩いてゐる、流行型の洋服に身を固めた、時局をわきまへない非國民め、と老人たちから白い眼で睨まれさうな所謂モダンボーイだつて、その派手なワイシャツの裏には、同じやうな熱情をかくし、同じやうな夢をいだいてゐるのだ。その證據には、そんな青年たちに、一度赤い紙がやつて來れば、彼等は毅然として大陸に渡り、實に勇敢に、立派な兵士の一人として活躍してゐるではないか。

いや、そんなことを言ふのが、僕の目的では無かつた。僕は、たゞそんな青年の一人としての阿由葉全一君と、その妻のアヤコさんの、ちよつとしたエピソードを話さうと言ふのが目的だつたのだ。

と言つても、たいして珍らしい話ではない。全一君は、さう言ふ青年の、つまり流行型の洋服を着たモダンボーイの一人だが、これも彼が、或る化粧品會社の、宣傳部の仕事をしてゐるので、言はゞ仕事の上の必要から、さ

う言ふ『仕事着』を着てゐるにすぎないんだが、それが何うも、世話焼き好きの老人連からジロジロと睨まれると、ひどく氣になつて段々氣がくさつてきて、仕事を投げるやうになつてきた。

尤も、それにはもう一つ原因があるので、それは全一君が事變當初、實は召集を受け張りきつて入隊しようとしたのに、身體檢査でハネられて、即日歸鄕を命じられたと言ふ、それもあるのだ。

銃を取つて戰場に立つも、銃後にあつて自分の仕事に努力するのも、國家に盡す忠義の道に二つはない……と、その時、司令官殿に言はれ、その理窟だけは好く解つてゐるのだけれど、理窟だけでは割りきれないのが、今言つたその『靑年の夢』と言ふ奴で。

『ちえ、ヲカシくつて、女の子相手のオシロイやクリームのポスターなんぞ、大眞面目になつて書けるかッてんだ！』

と仕事を投げ出して、夜になると何處かへ呑みに出かけては、クタクタに醉つて歸つてくる全一君。

その情ない夫の姿を見るのが、妻君のアヤコさんにとつては、實に身を切られるやうに辛かつた。

其處で、ある時アヤコさんが考へたのだ。

『ちよッと、あなた。……とても好いことが

あるんだけれど。』

何だ、好いことッて？

と、あまり氣のりもしないやうな顏つきで、妻を見返した全一君に、

『實はね、あたし今迄あなたに默つてゐたけど、ほんとはね、ダイヤの指輪を一ッ持つてるのよ。』

『ほんとか？』

とまだ疑はしさうな夫の顏だつたが、

『ほんとよ。でもね、こんどゼイタク禁止でもうダイヤなんか、しちやア不可くなるッて言ふから、あたし、思ひ切つて賣つちまはうと思つて、今日、質屋へ持つて行つて見て貰つたのよ。』

『幾ら貸すッて言つた？』

『五百圓なら何時でもお引受けしますッて。』

『占めた。おい、それで二人で何處か旅行に行かうよ。僕は氣がクサクサして仕樣が無いんだ。愉快に遊んで、使つちまへよ。』

急に全一君張りきつて、膝を乘り出してくるのを、『えゝ。好いわ。でも、今なかなか世の中がウルサイでせう？ あなたみたいなモダンボーイと、あたしみたいなモダンガールとが、うッかり溫泉場なんかへ行つて、ぱッぱッとお金使つたら、きつとヘンに思はれて、警察へ連れてゆかれると思ふけど。』

『さうかなあ。』

『で、あたし考へたんだけど、此處であなた

がもう少し眞面目に仕事して、少し偉くなつて、お金も貯めるやうにして、二人で何處へ出掛けても、ひとに怪しまれないやうに、ちやんと準備工作をして、それからパッと電撃的に行きませうよ。……何う？』

『うん。さうか。なるほどねえ。』

もともと青年と言ふものは單純で、單純と言ふのは、簡單で純情で、と言ふことなんだから、その日から全一君、急に張りきつて仕事に精を出すやうになつた。

仕事に精出すだけで無く、あまりモダンボーイじみた服装は止めて、もつぱら温泉場へ行つても怪しまれないやうな人物になるやうに努力した。

人が足りず、仕事がありあまる世の中だから、努力さへすれば仕事は幾らでもあり、化粧品のほかにも色んなポスターの仕事があつて、全一君、急に忙しくもなり、忙しくなれば仕事も面白くなり、遊ぶ時間が無くなるから、貯金もドシドシふえるばかりと言ふことになつた。

かくて一ケ年、全一君夫妻の生活はゼンゼン面目を一新し、それにつれて性格も、容貌までも全く變つてしまつた。

もうアヤコさんと二人で温泉場へ行つても少しぐらゐ金を使つても、人に怪しまれるやうなこともあるまい。

『あなた、あたしの指輪、出しませうか。』

『指輪？』

言はれても、全一君、すつかり忘れてしまつたのか、ポカンとした顔をしてゐるので、

『さうね。そんなもの、初めッから無かつたわね。あたし達、結婚指輪だッてこさへやアしなかつたんですものね。』

アヤコさんは、ニヤニヤ笑つて、それッきり話題を變へてしまつたのだけれど、こんなお伽噺を、諸君は信じないと仰言いますか？

併し、青年は、簡單で、純情で、そして常に『夢』が必要だ、と言ふことだけは信じて頂けると思ふのだが。

（さし繪——小野佐世男）

如何なる星の下に

葵　龍之介

1

一九三九年——。

歐洲の空にたれこめた戰雲も知らぬげに、すが〳〵しく晴れ澄んだ晩秋のある朝だつた。

ゲルト中尉は、近頃にない晴々とした氣持で、机上に運ばれた手紙に目を落してゐた。今朝はいつもより多く、十通に餘る來信で、その中でも、すぐに彼の目を奪つたのは、一目で分る女文字の、而も桃色の封筒に收められた艶やかな書簡だつた。

それこそ、ロンドンに殘してきた彼の戀人メリーからのもので、中尉にとつては待望久

しいものなのである。

彼は、今次の戰爭が勃發するまで、學生としてロンドンに遊學してゐたが、それは僞りの姿で、その實は英國の秘密を狙ふドイツ陸軍の諜報部員だつたのである。

彼は、ふとした事からメリーと戀におちたが、その戀だけは僞りのものではなく、本國に歸つた現在でも、その愛情には以前といささかの相違もなかつた。

それだけに、彼は誰の手紙よりも先にメリーの便りを讀みたい氣持で、まつさきに手に取つたが、丁度その時、親友ダンケルマン中尉の出しぬけの訪問をうけたのである。

今日は二人とも久しぶりに休暇を與へられて、身も心ものび〳〵としてゐた。

『やー、居てくれたか……いや、君のお手柄は大したもんだぜ。きつと總統の耳にも入るだらう。その結果は、特別功勞章まちがひなしだ、羨ましいぞ!』

ダンケルマンはさう云ひながら、ゲルトの肩をポンと叩いた。

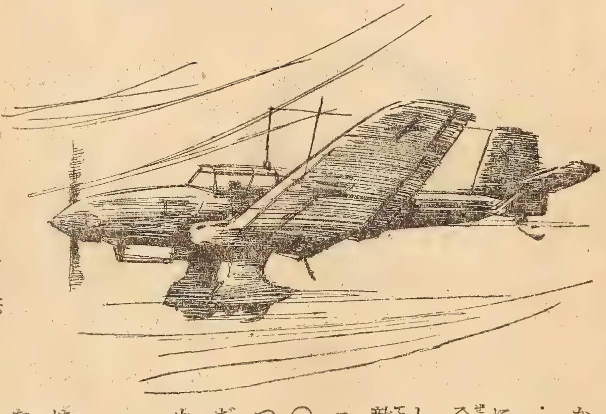
『うむ……ありがたう。』

これは昨日も一昨日も同僚からさん〳〵に聞かされた讃辭で、彼には別に耳新しいものではない。

『敵のA艦やB艇を見事に擊沈できたのも、元はと云やあ君の逞ましい諜報によるものだからなあ……それに昨日完全に爆擊し去つた敵戰艦ユニオン號(假名)だつてさうぢやないか……』

『……』

ゲルトは、そんな言葉をきくよりも、もう一刻も早くメリーからの手紙を讀みたい氣持で一ぱいだつた。だが、相手は、そんな彼の心中など一向無頓着で、



『おい、何を考へてるんだ。今日は二人で大いに氣焔を上げようぢやないか。君の出世の前祝ひと、ユニオン擊沈のお祝ひとを兼ねてね……』

ゲルトが默つてゐればゐるだけ、相手は彼の手柄をほめちぎつて、一人で騷ぎたてた。美しい友情ではあるが、この場合のゲルトには、むしろ有難迷惑だつた。

『君、一寸の間こゝで待つてゐてくれないか。一寸大事な用件を忘れてゐたんでね。』

ゲルトはさう云ひながら、目の前の手紙を摑むと、たまりかねたやうに椅子から立上つた。

『電話を一二本かける間だ、すぐ戻るよ……』

2

ダンケルマンから逃げだしたゲルトは、次の部屋へ駈けこむや否や、大急ぎで桃色の封書に鋏を入れた。

それには、紛れもない懷しい彼女の筆跡で次のやうに記されてあつた。

――おなつかしきゲルトさま。

何度お願ひしても許して下さらなかつたお父様から、今日やつとお許しが出ました。明日からはもう今までの弱い私ではございません。聯合軍附の篤志看護婦として、フランスの最前線へ行かして貰ふことになつたのです。私のこの氣持、お分りいたゞけますかしら……どんなに怖い思ひをしても、私は貴郎さまのお近くへ參りたいのでございます。軍籍にあるとおつしやつてた貴郎は、今ごろきつと軍人として前線に立つてゐられることゝ存じます。不幸な星の下に生れた私たちは、マヂノ要塞をはさんで對峙しなければなりません。でも私は、かうして遠いロンドンにをりますよりは、一歩でも貴郎さまのお近くへ行けますことだけで、どんなに嬉しいか知れないのでございます。もしかしたら、どんなはずみでお目にかゝれぬとも限りませんもの……。ではどうぞお健かに……とり急ぎ右御報せまで……。

メリーより

親愛なるゲルトさま

手紙はそれで終つてゐたが、そのそばに更に追伸としてかうつけたしてあつた。よほど急いだものと見えて、亂雜な走り書ではあつたが……。

——丁度この手紙を書き終へたところへ通知がまゐりました。私たちの乘艦はユニオン號ときまりました。でも出航の日は明かではございません……。

手紙を掴んだ彼の手は、小刻みにワナ〳〵とふるへ出した。そして、

『ユニオン號……ユニオン號……』

一度二度、口の中でつぶやくと、

『あゝ！』

思はず、悲痛な嘆聲をもらしながら、空虚の目を窓外に投げた。

心なしか二つ三つ、病葉が、ハラ〳〵と舞ひ落ちるのが見えた。

（さし繪——富田千秋）

青眼鏡の男

松浦泉三郎

溪流のせせらぎの中から、可憐な河鹿の鳴く聲が聞える。油蟬の喧しさの途絶えた森からは、時折蜩の聲が、けたたましく、だが幾分の哀愁を帶びて木靈する。

惣太には、しかしそんなものはどうでも宜かつた。彼はこの山峽の溫泉宿の展望臺から黄昏の山の靜寂を求めようとして昇つて來たわけではない。彼にはもつと切實な要求があつたのである。

せまい階段を昇り切つて、靜かに展望臺の片隅に視線を投げると、ちやんと目的物がそこに待つてゐた。籐製の寢椅子に仰向きに寢

て、團扇を顔に、安らかな鼾聲を立てて、例に依て例の如く、今日も二十番の肥えた客の姿が發見されたのである。客は東京から來てゐる實業家の安田氏で、毎日丁度ホテルの夕食時、この展望臺に全く人影のない時刻に、寢椅子を持出して、山の靜寂を味はひながら一寢入りするのを樂しみにしてゐた。

惣太は安田氏自身には用はない。惣太の用のあるのは、安田氏の懷中を膨らましてゐる紙幣入れなのである。まだ五百圓はある。惣太はさう睨んでゐた。

脫け毛に
新性能の
强力養毛料
ワカミヅ
フケ、カユミ等毛髮の障害を一掃して病的脫毛を止め、脫けた後に新毛の發生伸長を促すのが特長です。
井上・掛札兩先生創製　講談社商事部發賣
全國の信用ある藥店、化粧品店にあり

（こいつを逃しちやあ溫泉場稼ぎの腕ッこき湯宿の惣太の面にかかはらあ）

そして今、絕好の機會は遂に來た。全く無人の展望臺、寢入つてゐる安田氏、今だ、愚圖々々してゐる時ではない。

惣太はもう一度昇降口から周圍を見廻すと、すばやく安田氏に近付き、輕く片膝を床についた……と思ふと、もう、蛙を呑んだ蛇の腹みたいに膨らんだ紙幣入れは、安田氏の懷中から、惣太の懷中へ移行してゐた。安田氏は相變らず平和な鼾聲を立ててゐる。

（ざつとこんなもんだ）

ふん、知つてゐるのは一番星と俺位のものさ、と腹の中で凱歌を擧げながら、立上つてくるりと振向いた瞬間、

（あッ!!）

惣太は思はず叫ぶところだつた。昇降口に人がゐたのである。身體に合はぬ麻の夏服に、今頃何の積りか紫外線除けの青眼鏡をかけ、六尺近くもありさうな巨軀を、せまい昇降口いツぱいに膨らませて、無言で、凝と惣太を睨みすゑてゐたのである。

全身が凍る思ひだつた。

何といふ冷徹な、表情のない顔だらう。惣太はこの顔を、今まで二度程見たことがある。帳場の窓口で、何かこそ〱主人とはなしこんでゐた顔だ。その時、刑事だな、と惣太は睨んだ。彼は經驗上、かういふ顔は刑事以外には餘りない顔だ、といふことを知つてゐた。

大變な奴に發見されてしまつたものだ。逃げ場所は外にない。飛び降りれば下は溪流、彼の身體は巖石の上で、木葉微塵に碎け散つてしまふだらう。さりとてあの强さうな巨體に正面からぶつかつていつては、萬に一の勝目もありさうには思へない。

（どうすりやあいいんだ!!）

が、すぐに惣太は觀念した。跳びこんでこそ浮ぶ瀨もあれ、一か八か、一番さうだ、と決心すると、惣太はつか〱と步み寄つて、

『旦那』どうもつまらねえところをご覽に入

れちまひまして、えッヘッヘッ、どうも濟ンませんせん。』

『何かね？』

對手は、まるで始めて惣太に氣付きでもしたかのやうに、そッぽを向いて無愛想に答へた。ポケットから出した手、頑丈な下顎……

惣太は警視廳の强力犯に、似たやうな刑事のゐたことをちらと思ひ出した。

『えッヘッヘッ。』そしてもう一度狡猾な笑ひを笑ふと、落付け、落付け、と自分自身に言ひ聞かせながら『どうでせうねえ旦那、この野郎！ と來りやあ私も男、器用に腕を廻しますが、こいつを旦那の方へお納め願つて、今日だけは出來心ッてことで濟ましちやあ頂けますめえかねえ。へえ、二度ともう旦那方の前で、莫迦な眞似はしねえ積りですが……』

惣太は少し慄へながら、對手の掌へ紙幣入れを押付けて、言つた。

『二度と赦さんぞ！』

對手はどすの利く聲で言つて、紙幣入れを掌に納めた。救はれた！ 救はれた！ 惣太はほつとした。救はれた！ 惣太は對手の前へ膝まづいて拜みたい位嬉しかつた。

『えつ。そ、それぢやあ旦那……』

『早く行け！』

『へえ。』

ぴよこんと一つお辭宜をして、惣太は、追ひつめられた犬のやうに、一氣に階段を驅け

降りた。

全身から絞るやうに汗が流れ出した。が、對手は振向いても見なかつた。安田氏が大きく伸びをして起上つた。それからゆつくり降口へ――。

『失禮ですがこれは……』と、男が安田氏を呼止め、紙幣入れを示した。

『貴方のではございませんかしら。』

……靜かな聲である。

『あつ確かに。』

と、安田氏は慌てた。

『五百圓ばかり入つてゐる筈ですが、どうしてこれが貴方の手に……』

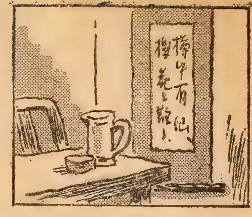
『今貴方から奪つた男が、私を警察の者と思ひ違ひして、渡して逃げたところです。』

『いやこれは〳〵。さうでしたか。いや、恐入りました。しかし貴方は署の方とは違ふのですか。實は手前もさう思つて居りましたのですが……』

『とんでもない。日本の警官に貴方、盲者のをる筈がありますものか……』

さう答へて、少し寂しげに微笑しながら青眼鏡をはづしてみせた男の目は、兩方共かたく閉されてゐた。

（さし繪――豐田耕三）



樽中有仙

鯱城一郎

1

『やあ、やつとるね。』

後ろから肩を叩かれたので、櫻井君は振り向いた。

『はつはは……いや、結構、結構、青年はその元氣がなくちやあならんて……儂もそこへ坐らして貰はう。』

さう云つて老人は櫻井君の卓子の向ひ側に腰かけた。櫻井君のちよいちよい立寄るビヤホールで何時も會ふ顔馴染みの老人だつた。

『儂は熱いところで一杯行かうかな。』

老人は日本酒を注文した。

『日本人は矢張り日本酒でないと氣分が出んよ、何と云つても米の精ぢやからね。』

老人は獨りで喋べつてゐる。袴を穿いて、元氣の良さそうな赭ら顔に、銀髪を光らせて至極御機嫌が良さそうである。

『然し、酒を呑むことは國策的ぢやないでせうね。』

櫻井君はビールを乾しながら云つた。

『飛んでもないこつちや、儂は寧ろ國策的ぢやと思ふね、第一君、節米運動になるよ。』

『へえ……』

『さうぢやないか、儂は酒さへ呑んでゐれば米は食べなくてすむ、朝一合の晝二合、晩は特に三合迄に決めてゐるが、それでこの通りぴんぴんしてゐる。』

『驚きましたなあ。』

『驚くこたあないよ、つまり酒そのものが榮養になる。酒を煖めるのに大した燃料は要らんし、調味料の必要もないだらう、それに手數はかゝらんしな。』

成程一局點からものを考へると、妙な理窟が成り立つものである。

『それにだ、君、酒からは日本精神が生れて來る。つまり天地正大の氣はぢやね、酒を呑まんことには分らぬよ、どうぢやね。』

『とするとビールでは日本精神にならんわけですな。』

『いや、いや、ビールはその何ぢやね、ドイツ精神の方ぢやね、それ、歐洲戰爭の時、ドイツがあれだけの困苦缺乏に堪へられたのも、もとはと云へばビールのお蔭ぢや、他の品物はなくなつても、ビールだけはまだ豊富にあつたからね、だから現にヒトラーは決してビールを禁止してゐないぢやないか。』

『成程……』

『はつはは……、どうぢや分つたかね、分つたら遠慮なしに呑まうぢやないか。』

その晩、櫻井君は老人の氣焔にあふられて良い氣持ちに醉つ拂つて、老人と握手をして別れた。

2

その後櫻井君が聞くところによると、その老人はある大學の漢學の講師をやつてゐて、連れ合ひはないさうだが、一人の息子さんが

目下出征中で、家には娘さんが居るきりだと云ふことだつた。ある晩、そのビヤホールへ櫻井君が出かけてゆくと、その老人は上機嫌で、卓子の上に唐紙を擴げ、太い筆を持つてホールの主人に揮毫をしてゐるところだつた。老人は潑剌たる筆を揮つて、二枚の紙にこんな文句を墨痕淋漓と書き上げた。曰く、『樽中有仙』、曰く『櫻花と散る』。そして上機嫌で酒を呑んで歸つて行つた。その後で、ホールの主人が櫻井君にこんなことを云つた。

『あの先生の息子さんが戰死をなさつたのださうですよ。』

『えッ、本當かねそれは……だつて、先生は普段とちつとも違はなかつたぢやないか。』

櫻井君は泰然として愉快さうに呑んでゐた老人の顏を思ひ出して、驚かずには居られなかつた。瞬間、一種の感激が身内を走つて、その老人が急に好きになつてしまつたのである。そんなことが緣で櫻井君はその老先生と交際をするやうになつた。老先生には綺麗な娘さんが居た。その兄を亡つて淋しさうな娘さんを庇護するのが櫻井君の務でもあつた。

ところが、それから間もなく、例によつて朝から酒を呑んでゐた老先生が、急に腦溢血でぽくりと死んでしまつたのである。

『君娘を賴むぞ。』

駈けつけた櫻井君に先生が云つた最後の言葉はそれだけだつた。

そして間もなく先生の娘さんと結婚することになつた櫻井君は、一周忌の晩先生を懷しむやうに、例のビヤホールへやつて來た。部屋の正面には先生の書いた『樽中有仙』の扁額がかゝつてゐた。

『先生がお亡なりになつたんださうですね。』

ホールの主人は驚いて側へやつて來た。

『さうだよ、あの額がいい紀念になつたわけだね。』

櫻井君はしみじみとその額を仰ぎ見た。

『全くですよ、然し、酒に仆れた先生は定めし御滿足だつたでせう。きつとお棺の代りに酒樽の中へ入つてあの世へいらしたに違ひありませんよ。』

『はつはは……、今頃は三途の川で一杯と云ふところかね。』

櫻井君はさう云つて、ジョッキのコップをその額に捧げた。

『今思ふとあの人のこゝへ來ての元氣な酒は息子さんの爲と娘さんの爲に呑んでゐたやうな氣がするね、醉ひながらも息子さんの武運を祈つてゐたに違ひないし、娘さんのお料理の手數を省かうとしてゐたらしいよ、そして、息子さんの戰死の報に接しての悲しみを醫す爲につい酒を呑み過ぎたんぢやないかね、どうも僕にはその父性の氣持が分るやうな氣がするんだ。』そんな話をしてゐる時に、がらりと表の戸が開いて老先生の娘さんの紀世子さんが顏を出した。

『あら、こゝにいらしたの、餘り呑過ぎちや駄目よ、お父さんみたいになつてしまふわよ。』

櫻井君はその言葉に彼女の愛と自分の責任を感じてはつと吾に返つた。

（さし繪――都竹伸一）

病毒性神經衰弱が治つて
血色がよくなり頭が輕くなる

（静岡）佐藤兵吾

（前略）どうしたものか始終、頭が押へつけられてゐる樣で氣持が惡く、憂鬱陰氣になつて、何時も不愉快なくらし方をして居りました。なにしろ夜は仲々眠れず、惡夢にうなされ食慾はなし、眼や口のまはりが時々ビク／＼動いたりして、物忘れがひどくなつて居るのですから、自分で自分の體や氣持を持ちあつかつてゐたのです。（中略）どんな藥をのんでも治らず、いさゝか自棄になつてゐたのですが、不圖コロイゲンの廣告で自分の症狀に思ひ當る處があるので試して見る氣になり、スグに買つてのみ始めて見ました處、體の調子がだん／＼よくなつて來て、日一日と頭が輕く、氣持が明るくなつて來、久し振りで熟睡でき、血色もよくなつて、病毒性の神經衰弱が治つてしまつた樣です。（後略）

夜は仲々眠れず惡夢にうなされ…

半身不隨・手足の痺れ薄らぐ

（群馬）尾崎秀夫

拜啓初夏の砌、貴所益々御隆盛の段大慶に存上候。扨て過日御依頼申上げ候コロイゲン早速御郵送下され誠に有難く深謝奉り候、小生事、昨秋、腦溢血にて倒れ申候。幸ひ生命は取りとめ候ものゝ、半身不隨に陷り、手足痺れ歩行意のまゝにならず、さながら生ける屍と相成候。其頃『高血壓、腦溢血は毒血に原因す』との貴所御掲載の廣告を拜見しコロイゲン御依頼申上げ候次第に御座候。服用後×日頃より手足の痺れ薄らぎ申候。其節の喜び御推察願上候。『この藥で治る』の或る力強き精神力を得、其後コロイゲンの服用を怠らず續け居り候が、次第に輕快の一途をたどり居り欣快に堪へざる次第に御座候。茲に深甚の謝意を表し、御報告申上候。敬具。

×××　×××

右お二人に非常に効果の有つたコロイゲンは、中村醫學博士の新研究に依る水銀と内服用六〇六號との合製々劑で、六〇六號の注射に自信の持てなくなつた今日、全く病毒治療に一新期を劃した大發明であります。このコロイゲンは注射と異ひ、無害な内服藥でありますから、誰でも簡單に續けて服用が出來ますから、血液と共に體の隅々迄、藥の効用が廻つて、徹底的に黴毒菌の絶滅が出來るのであります。其故、日滿兩國政府の專賣特許を獲得された信用ある殺菌驅黴内服藥でありますから同病でお悩みの方、お心當りのある方は至急左記へ御申越、御試用をお奬めします。

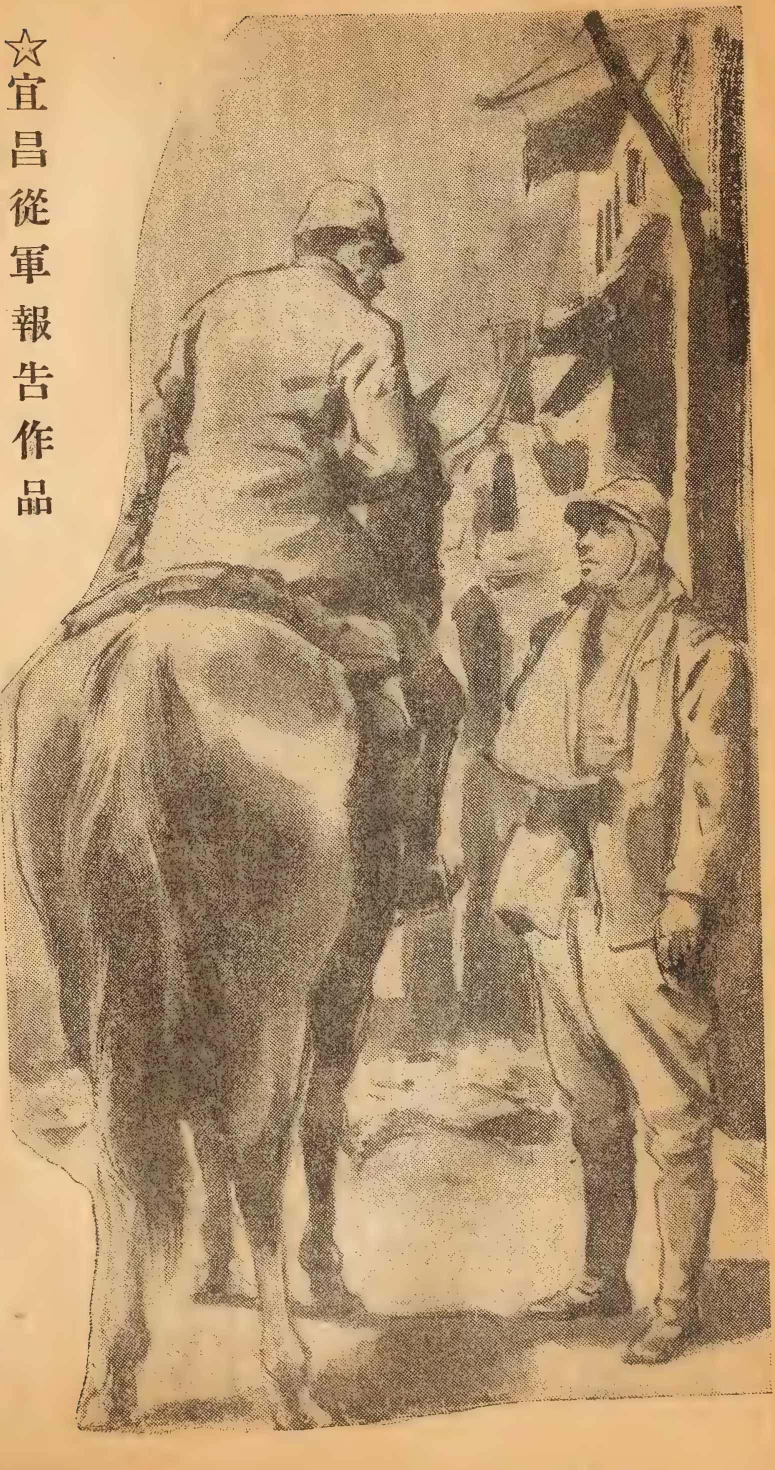
このコロイゲンは有名藥店にありますがまだ行渡らぬ地も多いと思ひます。御希望の方は東京市小石川區音羽町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二一九番）か又は直接發賣元東京市芝區高輪北町二五、原澤水銀研究所（振替東京八〇五二番）へ御申込み下さい代金引換御希望は二十錢切手前納下さい。密送いたします。定價二圓（一週間分）四圓（半月）七圓五十錢（一ヶ月）十四圓（二ヶ月）三十圓（五ヶ月）外用水劑（一圓二十錢）（二圓）外用泥狀（七十錢）小兒用内用（二圓五十錢）（五圓）効果詳細知りたき方は直接右發賣元へ三錢封入の上申込み下さい。

☆宜昌従軍報告作品

戰生少尉奮戰記
（せんせいせうゐふんせんき）

木村　毅

林　唯一　畫



（その一）

『戰場で戰死するのは、元より男子無上の名譽である。しかし戰場でセンセイするのはそれにも劣らない名譽であるだらう。九段の花と咲くこと、勿論、この上もなく尊い。しかし塹壕の中で泥まぶれになつて、彈藥盒に殘つた最後の一發まで敵を打つて、飽くまで屈しないのも、それに劣らず尊いのではなからうか。これこそ自分の信念なのである。』

士官學校を卒業して、隊に配屬されたばかりの見習士官三宮慶雄は、新任の挨拶と訓示とをかねて、中隊の兵に講話をしたが、左記の數言はその結論だつたのだ。

一體、どんな事を言ふだらうかと思つて、列兵の背後からそれを聞いてゐた中隊長は、この時、はてなと首をひねつたのである。

センセイ——

或は『宣誓』のことかとも思つてみたが、それでは少々意味がぴつたりしないし、第一、始めに云つた戰死と云ふ言葉とも釣合はない。そこで中隊長は、おい、見習士官と呼びかけて聞いた。

『その、センセイと云ふのは何のことか。』

『はツ。それは自分の新造語でありまして、戰つて死ぬのが戰死。戰つて生きるのが、これが戰生であります。』

『なに？　戰つて生きるんだつて。』

『はい、少々打たれようが、斬られようが飽くまで生きぬくと云ふ強い一念で燃えることであります。』

『アハハ。そんな言葉は、外のものには通用せんわい。』

と、中隊長が漆黑の鍾馗髭を浪立てながら反り返つて、豪快に放笑したので、思はず釣られて、中隊の兵全部がドッと笑ひだし、當人の三宮も頭をかいて笑つた。そしてその時から三宮には、戰生士官と云ふ綽名がついて了つた。

年はまだやつと二十そこ〳〵である。丸顏、大きな二皮眼。いつも微笑を絶やさないが、その笑ふ度に左の八重齒ののぞくのが、子供のやうな、又少女のやうなあどけなさを、表情に添へる。一口に云ふと、紅顏花の如きとでも形容するに適はしい青年だつた。

その上に、天はこの若者を惠むのに、まだ〳〵無上の寶を賦與してゐる。それは明朗で快活な性格だつた。三宮のやうな青年將校が一人加はつてくると、その隊全隊が快活になる。

今年、四月の晦日の午後のことである。三宮見習士官は、遠田と云ふ一等兵を呼んで云つた。

『おい、俺の髮を刈つてな。それから一つ髭をあたつてくれんか。』

遠田は、入隊前の職業が床屋ででもあつたか、バリカンの使用の巧妙さが、素人の域を脱してゐた。

『散髪はいゝとして、髭まで落して了ふんですか。』

と、遠田が、人の顔の事だのに、多少、異議を挾むやうな調子で問ひ返したと云ふのは、此れは必ずしも此の隊ばかりでなく、およそ出征してゐる者は、將校も兵も引つくるめて、髭はのび放題にして、繪本三國志に出てくる關羽のやうな形相をしてゐる者が多いからなのである。

それは、初めは戰ひが忙しくて、剃つてゐる暇がなかつたから伸びたのだが、中頃は恐らく無精も手傳うたであらう。しまひには、折角こゝまで伸びたものを、むざ〳〵剃るのは惜しいと云ふ多少愛惜に似た氣持も起る。もし命あつて、凱旋する日でもくるなら、此の素晴らしい髭を、一眼だけ母親に見せて、剃るのはその上のことにしたい——と、そんな事まで思ふやうになるのだ。

『だつて小隊長殿。』

三宮見習士官は、第二小隊長だつたのである。

『髭だけは大抵の者が殘してゐますぜ。あなたのも、眼につく程に伸びて來たぢやありませんか。』

『あゝ、それは分つてる。だが、俺ばかりはね。こゝで、その身なりはきちんと整へなきやならんわけがある。』

『どうしてですか。』

『だつて、明日、任官するんだよ。』

『はゝあ、成程。少尉に御昇進と云ふわけですな。辭令はもう出たのですか。』

『陸軍省から電報で達してきてゐるのだ。』

『それでは髭も剃らなきやなりませんですな。いや、お目でたうございます。さうと分れば今日のところは、一つ、念入りにやりますよ。』

そして約一時間をかけて、散髪から髭剃りまできれいに濟ますと、重ねて遠田は云ふのであつた。

『夜になつたら、軍服の肩章も襟章も、みんな付け更へておきませうね。』

『いや、いゝ。そいつは俺がやる。』

（その二）

此ればかりは、斷じて人手を借りたくない氣持だつたのだ。

なぜと云つて、此の『少尉』！

それはどんなに久しい間、自分の憧れてきた官位だつた事だらう。仇やおろそかで、なれたのではないと云ふ氣がするのだ。

三宮慶雄は、新潟市東堀通りの生れで、家は漆器商なのだ。小學校の三年の時、母を失つたが、これは彼の生涯に覺えた一番の悲しみだつた。が、しかし一面から云ふと、軍人志望がゆるされたのは、此のためだつたと云へない事もない。

母が在世だつたら、恐らくは家業を繼ぐことを強ひられて、

今頃は、黑前垂で店先に坐りながら、膳や椀の滑つこい肌でも撫で廻し客にお愛想の一つも云つてる所だつたであらう。だが彼は、小學校にゐる時から軍人になりたくて堪らなかつた。そんな家業を繼ぐ氣持などは、些ともなかつた。で、中學がすむと半分は、家の者に隱して士官候補生の試驗を受けたのだが、それが受かつてゐた時の、あゝ、あの歡び！

『ほゝう、受かつたとは素晴らしいな。なに、それ程なりたい軍人なら、なるのもよからう。』

と云つて、とう〳〵父が許してくれたと云ふいきさつだつたのだ。

　これで待望の將校になれるだけの段取りは確實にできたわけだが、しかし士官學校在學中、心配でたまらない事が只一つだけあつた。

　それは自分らが未だ少尉として任官しない先に、この事變が止みはしないかと云ふことだつた。

　止んだら大變だ。

　東亞新秩序の建設と云ふ世界的な大轉換期に直面し、しかも將校たるべき第一階段に確實に足をかけてゐながら、それに直接の參加ができないとなつたら、その殘念さは如何ばかりであらう。

　それればかりが何時も、念頭をとざす一朶の黑雲であつたが、幸か不幸か――いや、日本のためには不幸だつたかも知れないが、自分には非常に幸運にも、事變が存外に長びいてくれたので、それが片づいて了はない中に、どうにか學校も卒業し、そして自分の配屬せられる原隊は、第一線の漢水付近に駐屯してゐたのである。

　その夜は、そんな回想に耽りながら、天幕露營に蠟燭のあかりをたよりにして、背嚢の中から東京を立つ時、既に用意して買つておいた新らしい肩章を取出した。

　嬉しい。

　が、もし強ひて、物足りなさを一つ數へるなら、戰場だから命課布達式の正式に行はれない事である。

　これが平時なら、少尉に任官の時には、禮服を着用し、聯隊の兵全部が營庭に集つて、嚠喨たる喇叭の吹奏裡に、嚴肅に式が行はれるところなのである。

『それを、こんなに、只、肩章を付け更へただけで、少尉になるとは些とお手輕

わきが

家庭で手輕に美しく治る

お困りの皆樣御安心下さい。家庭で手輕に治せ、手術の心配のないヨクキク專門薬があります。ぜひ御用ひ下さい。着衣も汚さず手數もかからず、實驗者お喜びです。手紙下さい。別名にて親切に御知らせす。

神戸市福原山手新町角　辨天園

すぎるな。』
と心の中に思つてゐたら、あゝ、どこまで惠まれた三宮少尉である事よ。
その不滿などは帳消しにして、遙かに餘る大きな幸運が、不意に天外から落ちて來た。
俄然！ 漢水作戰が明日の早曉を期して行はれることになつたのだ。
明日と云つたところで、あと、もう一時間餘。二時間には足りないのだ。
さうすれば即ち五月の一日！
その頃は、故國に於ては、吹き流しの鯉と幟で祝はれる男の兒の祭り日ではないか。
三宮少尉に取つては初任官の日。そして軍としては漢口戰以後の大規模な漢水作戰がいよ／＼決行の火蓋を切る日である。
こんな重ね／＼のめでたい重大因緣の重なつた日を、自分の初陣の日として迎へた武將が、古往今來、只の一人でもあるだらうか。
三宮新少尉は、只わく／＼と胸が躍るのだつた。

（その三）

こゝで暫く、三宮少尉個人のことからは離れて、わが軍としては、なぜかう漢水作戰を起す必要があつたかを、概說しておくのが便宜であらう。
それは第一には、此處は重慶の玄關もしくは表庭にあたる重要陣地である上に今や彼等が命脈を保つ唯一の輸血路である赤色ルート、それから長江、又遙かに西南のビルマ雲南ルートの防衞線でもあつたのである。されば敵は此處を第五戰區と稱し、初めから兵備を堅固にしてゐた。
然るにわが軍は、漢口占領後僅かに去年の五月に一度、大打擊を與へただけで、爾後は、悉皆、鳴をひそめてゐた。
それを蔣介石は例によつて、日本軍はもはやそれ以上進んでくる餘力が無いものとの誤つた推測を立て、續々と兵力を增加して來た。もし今二三ケ月も放つておいたら、敵の兵備が非常に充實してくることが、偵察の結果分つたので、日本としては、さうならぬ前に、眞向から微塵に、叩き潰しておくのを得策とした。
第二には汪精衞の中央政權が成立したので、支那の民衆をそ

れに歸服させ、その勢力の及ぶ範圍を擴大しておいてやる必要もある。

第三には、銃後の日本人の中にはやゝもすれば自分の足許を忘れて、對岸の火災の歐洲戰爭にばかり氣を取られてる呆け者が無いにも限らぬから、さうした不心得者には、この際猛省を促さねばならぬ。

そこでこの作戰の總帥を拜命した○○部隊長は、軍司令部を漢口から西北方の應城まで進めたのである。

茲で、當時の敵の配備狀態を說明するのに、ざつと地理

的解説も加へるなら、此の漢水作戰の行はれたのは主として湖北省の襄陽道である。

襄陽道の中心を縱斷して漢口に流れ注いでゐるのが漢水河。これは別名を襄河とも呼ばれてゐる。隨つて河の東が襄東、西が襄西。——こんな事は贅説するまでもない。

敵の配陣を見ると、襄東を第一の陣構へとし、こゝだけで三十四ケ師、四十萬の兵を集注してゐた。總司令は李宗仁。そして部隊長を、東から守つた順に數へると、孫仲連、孫震、王纘緒、張自忠の五將領である。

第二の陣構へは、襄西——と云ふ中にも、河岸陣地を固めてゐたのだ。湯恩伯が指揮してゐた。

第三陣地は當陽附近。そして次に宜昌防衞の直接陣地と、みんなで四段の構へになつてゐた。總兵數は五十ケ師、約五十萬と見られた。

〇〇部隊長の作戰は、信陽、隨縣(隨州)、安陸の三都市から北に向つて行動を開始させたが、全軍、まるで疾風の枯葉を捲く勢で、敵を追撃しつゝ、五日には泌陽、八日には棗陽(さうやうと讀むべきだらうが、類似名の地名が多くて紛らはしいためか、軍ではかく重箱よみをしてゐるのである)を陷れ、ひきつゞき唐河及び白河河畔に敵を包圍して殲滅せしめ、十二日には早くも襄東平野の攻略は、片がついたのである。

茲で、讀者に篤と心得ておいて貰ひたい事は、この邊の奥地になるとむやみに敵が兵力を増強しては厄介だから、わが軍では適宜な時に叩きつけはするが、その地を確保しておく必要は些ともない。その點、上海や、南京や、漢口や、廣東などの要衝とは違ふのだ。

そこで掃蕩戰がすむと、さつさと軍をひき上げて了つた。

淺慮な敵は、これを吾が軍の退却とでも誤認したらしい。

第二線の湯恩伯は、今迄、第一線の友軍の潰滅するのを拱手傍觀して、應援もしなかつた癖に、日本軍がひくと見ると、麾下の兵、及び殘存の敗戰部隊をかき集め、十四日以來、白河を超えて南方に押しよせて來た。

この時である。重慶の放送局と、ルータアを初め援蔣外國新聞が、日本軍敗北のニュースを世界中にふり撒いたのは。

然し日本軍としてはまさに思ふ壺だつた。逃げる敵の追撃は厄介だけれど、懷に飛びこんでくる鳥を捉へるのは簡單至極である。それは哀れな窮鳥でなく、自分の戰勝を唄うて、意氣大いにあがつてゐる小面の憎い敵だから、憫れみなどかける必要は全くない。

敵は白河と唐河の間に十數ケ師、總數二十萬の兵を集注した。

頃合はよしと、わが軍は十九日の早曉、不意に反轉戰を起して、隨所に敵を破りつゝ二十二日には全く襄東の作戰をきれいに完了した。

この時のわが軍を雉子に譬へるなら、敵は蛇だ。蛇が身體に捲きついてくるまゝに任せておいて、急に羽撃きをして、それを寸斷したのであつた。

敵の數箇師は全滅し、名將張自忠もわが羽撃きの犠牲となつて、敢へなくも落命した。その他敵將の捕虜となり、又戰死した者も少くない。

このあたりでは又夥しい鹵獲品があつた。たとへば小川部隊の報告に曰く。白米七、〇〇〇俵、有刺鐵線四〇〇卷。被服五〇〇着。

北方〇〇兵團の報告に曰く、小銃彈三三〇、〇〇〇萬發。手榴彈四、〇〇〇。白米四、五〇〇俵。

これらはホンの一例だ。

敵は、物を殘すと日本軍に利用されるので、漢口、殊に岳州などには茶ッ葉一枚も遺棄してゐなかつた。それがこの戰鬪では到るところ此の多くの鹵獲品で日本軍の腹を肥やして呉れたのは、思ふに、まさか此の奥地まで日本が攻めこんでくる事はあるまいとの油斷から、安心して大量に貯へておいたものらしい。

此の小說の作者は或る時〇〇部隊長に直接聞いてみた。

『武器彈藥は軍ですぐお使ひになるでせうが、その米の處置はどうなさいます。』

『できる丈け川船で運ばせました。方々の兵の食つてるのは、その米が大部分です。』

『しかし兵隊の食糧としても餘るでせう。それは。』

『止むを得んから燒かせてをります。』

『惜しいですな。日本內地では節米までしてるのだから、內地へ送つてやる事はできませんか。支那から兵隊さんの送つてくれた米だと云へば、屹度喜んで國民の感激も違ひますよ。』

『それは重々考へないではありませんでしたがね。困つたことには輸送の方法がない。船の數が足らないのです。と云つて殘しておくと、むざ〳〵支那兵を給與するやうなものですから、どうしても燒くより外に仕方がないのです。』

武器彈藥の方だけは後送されて、〇〇に積まれつゝあつたが、巨大な寺院を倉庫代りにして、積んでも、積んでも、トラックは後から續々と彈藥箱を運びこんでゐた。

(その四)

それは素晴らしい戰果であつた。

だが、殘念だつたのは、折角、同じ〇〇部隊長の麾下に屬しながら、戰爭に參加できなかつた諸部隊だ。

それは北方に陣した諸部隊だけが、戰勝の快味を滿喫したので、南方にゐた者は、折角の饗宴にのぞみながら、御馳走にはとう〳〵ありつけなかつたやうな物足りなさを覺えた。

殊に張合ぬけを一番痛切に感じたのは三宮少尉である。

五月の月始め、男の兒の祭り、任官の日、そして晴れの初陣！　と重ね〳〵の縁起を内心に祝つて張り切つたのが、まるで肩すかしを食つた形だつた。

『いや〳〵、小隊長殿。さう悄氣たものでもないですよ。』と、それを慰めてくれるのは江口伍長だつた。

『どうしてさ。』

『戰爭は屹度まだありますよ。』

『だつて襄東地區の掃除はすんで了つたぢやないか。』

『しかし河向ふにはまだ大分、集結してるらしいですからね。』

『いや、河は當分越させない方針らしいんだよ。』

『でも、敵がボン〳〵打つて來ますから、放つてはおけますまい。今日も木原と片桐が水を汲みに砂原へ降りたら、十二三發見舞はれたつて云ひますよ。』

江口伍長は、何しろ上海戰以來の古强者だから、その勘に響いてくることは、却つて新少尉の豫測よりも、よく當ることがある。

果然、軍司令部では、襄西に集結した敵を擊滅し、長驅して要衝の宜昌まで突かうと云ふことに、作戰が一決したのであつた。

宜昌。――かりに漢口を大阪とすれば宜昌は神戸に當るとでも云はうか。漢口から又溯ること、三百八十海里、揚子江では六港の一に數へらるゝ貿易港で、湖北、湖南の大農庫を控へ、米、麥、生漆、桐油、綿花、豚毛の集散地として大切なばかりでなく、又實に四川貿易の中繼たる點に、一番重大な役割がある。と共にそこには絕好の飛行基地があつて、我が軍でこれを取つたら重慶爆擊には丁度もつてこいの距離だ。

なぜなら、漢口だと爆擊機だけしか重慶まで飛べない。戰鬪機が防衞に舞上つてきた時、戰ふのに餘計な骨が折れる。宜昌からだと、戰鬪機もらくに飛べるので、殊に海の荒鷲の前から垂涎しておかない所であつた。

今度はその宜昌まで取つちまはうと云ふのだ。

三宮少尉の屬する北村（勝）部隊にも、六月五日未明を期して漢水を渡れとの命令が下つた。そこで部隊は前夜のうちに、砂丘のうしろの窪地に集結したのである。

ダーン、ダーン。物凄い響と共に、赤い火の玉が闇を劈いて飛ぶ。後方陣地から重砲、山砲、迫擊砲が、交互に敵陣を制壓するのだつた。この渡河こそ一番の難作業で、これに多くの犧牲が出るだらうとの、わが見込だつたから、敵陣威嚇のため巨砲を打ちまくつたのだ。

この時三宮少尉は、何氣なく空を仰ぐと、夜露に濡れた冷たい鐵兜の庇の下から、鮮やかな銀河がのぞかれた。

三國志の昔から、漢水を舞臺に演ぜられた興亡幾多の歷史を見おろしてる、嗚呼、あの銀河よ！　ナポレオンは埃及遠征

に『見よ、スフィンクスは三千年の眼を以て、汝等の勇怯を眺めてゐるぞ。』と叱咤して、兵の士氣を鼓舞したと云ふが、あの銀河の眼こそは劫初以來、下界人間の行動を監視してゐる。だから卑怯であつてはならないと思ふと、思はず嚴肅の氣に打たれて、背骨の方にゾッと寒氣を覺えたのであつた。河邊の葦の穂先には螢の飛び交ふのが見えた。

對岸では時たまチエコ機銃の音がするし、曳光彈の光も走つた。

さらでだに六月は夜が短いのに、漢水のやうな奥地だと、これが更に短かく、夕暮は黎明につながつてゐると云つてよい。三時半には既に明るみ初めて、黎明の氣の中に白砂がくつきりと浮みだしてくる。

もし夜が明け切つたら、對岸から敵の狙ひ打ちの餌食とならねばならないだらう。部隊の兵の氣持は少々焦つてきた。

その時水上で、ブル／＼と、今迄耳にした事のない怪しい音が起り始めたのである。

渡し船のエンジンの響だつた。

『先頭隊、渡河準備。』

の號令が掛ると、只に先頭隊ばかりではない、今迄、凹地に息を殺してゐた全部隊が、思はず一齊に白砂の上に飛出して了つた。それだけ氣持が張り切つてゐたのである。

『不思議だな。敵は些とも打つて來ん。』

徵兵檢査や口頭試問にも安心

どもる方々が大喜び！

世の中に不思議なものは數あるが、ドモリもその一つとされて來た、病氣の樣で病氣でない。不具の樣だがさうでもない。

歌を唄ふ時や、言はなくともよい冗談口をきく場合は、何でもスラ／＼話せる。それでゐて一度改まると、口ばかりモグ／＼させて聞いてゐる方が氣の毒になつて仕舞ふ――そこで、かうした不幸な人々のために自宅で手輕に矯正の出來る方法を我國吃音矯正界の大恩人で、現東京吃音學院長内海養内氏が新研究をされた。

それは『新自宅矯正法』と云つて、日英兩國の專賣特許を得たもので、十五歲以上は重いドモリでも續々と治り、口頭試問や初對面の挨拶等も、普通人同樣にスラスラと樂に話せる樣になる。

詳細な學理的の說明書、全國の全快者記錄書上原博士の推奬文等を無代進呈されるから、東京神田駿河台二ノ四(中央大學前)正音研究所に年齡を明記し申込むとよい。

(寫眞は吃音學院長内海養内氏)

と、山北部隊長は首を捻りながら双眼鏡を取上げた。敵弾が來れば、兵は勿論、元の凹地にさげねばならなかつたが、どうやらその必要はなささうだつた。

渡河點は二ケ所に設け、共に二十艘の鐵舟が用意してある。先頭隊は乘船して、河を横斷し初めた。敵は何としてこれを迎へるだらうか。充分に手許まで引きつけておいて、機銃で薙射するのではなからうか。眞に息づまるやうな一瞬である。

と思ふと、やがて對岸に模糊たる河霧を劈いて、パッと赤火信號が光り、萬歳の聲が砂上をどよもして響いてきた。

渡河は成功したのだ。敵は一兵も殘らず逃亡してゐた。

それは渡し舟のエンジンの響を、何か新兵器と誤認して、怖氣づいたらしいのだ。丁度ドイツの電撃戰の噂で、新兵器出現の噂が支那軍にも傳はり、日本も何かそんなものを使ひはしないかとの恐怖が、敵軍を浮足だたせたのであつた。

『これは新版富士川の水鳥の羽音と云ふところだな。歴史は妙なことまで繰返すわい。』

三宮少尉はひとりで苦笑した。

幾何もなくして全部の輸送を終つた。あれ程、犠牲の多いことを心配してゐたのに、それこそ文字通りの無血渡河だつた。そして要衝の沙洋鎭を難なく奪取した。この部隊がこの作戰に擧げた最初の戰功である。

（その五）

正面へ塞がつてゐたのは、四川軍の一八八師と一九九師であつたが、之を撃破して翌七日には又李家城を占領した。

重慶はこの地域の戰況を重大視して、軍委員會副委員長の馮玉祥と政治部主任の陳誠とを作戰挽回のために急派したとの事が、わが無電に響いてきたけれど、それによつて敵軍の士氣の揮うた氣配は一向になく、軍司令部も逃亡して、後には喇叭手、それも漸く十歳になる小孩がうろ／＼してゐるばかりであつた。

翌八日は沼澤地を急行軍して十里餘を踏破し、黄昏近く（十九時）には問安寺の市街が、望見できる所まで來た。

『立派さうな町だな。みんな、今夜はあそこで、屋根の下に安々と眠らせてやる。もう一息だ。辛抱してゆけ。』

山北部隊長は馬の上から、かう云ふのであつた。實際、兵は昨夜も一昨夜も、一睡だにしないで戰鬪につゞく强行軍だから可なり疲勞してゐた。

みな、一刻も早く入城することを考へ、そのあたりに敵が居ようなどとは、大して思つてゐなかつたのである。

しかし城外約一キロの地點で、うろ／＼としてゐる敵兵一人を捕虜にした。手榴彈を一つ携へてゐたが、物資徴發にでも來た恰好である。

そして訊問を始めようとしてふと見ると西方三百メートル位の丘の上に敵將校二名が立つてゐる。彼等は自分の部下が捕虜になつたとは知らず、しきりに大聲をあげて呼んでゐるのであつた。

それで更めて南方を見ると、蒼茫と暮れなやむ夕景色の中に、約一

箇大隊の行軍縦隊が砂煙を立てゝ移動してゐる。
初めは味方らしく思へたので別に氣にしないでゐたのだが、部隊長が念のために、双眼鏡で仔細に觀察して、
『おーい、あれは敵だぞ。』
と叫んだ。『軍服の色が違つてゐる。』
その時は、西方にゐる二名の支那將校も、こちらを日本軍だと氣づいたらしく、あわてゝ、逃げだしたので、これは直ぐ射殺した。
この銃聲で、敵部隊は日本軍が間近に迫つてゐる事をさとり、すぐ後へ引返して陣地につき城門前の部落の蔭から輕機を並べて射撃し初めた。プツリ、プツリと唾を吐くやうな音を立てゝ、こちらの足許の地面に彈丸が食ひこんでくる。彈着はなか／＼いゝのである。
こちらも直ぐそれに應じて、戰鬪體勢を取つた。
『第一小隊は前、第二小隊は左、第三小隊は豫備隊。散れッ。』
と、中隊長の號令が掛つた。
三宮少尉の率ゐてゐたのは、第二小隊だつたから、號令通り左に散開したが、その左がクリークで、その時、大陸の眞夏の百三十度の夕日が、燃えさかる鎔鑛爐のやうな灼熱の色にそれを照らしてゐるのが、何と云ふこともなく、鮮やかに眼に映つた。
敵の射撃はます／＼激しくなる。
だが都合のいゝ事に、前面は、墓地で、圓い土饅頭が澤山並んでゐる。わが兵はそれ／＼に土饅頭を抱へるやうな恰好をして、敵彈が土饅頭の右を通りぬけると左へ體をかはし、左を通りぬけると右へかはし、丁度、丸木を楯に取つて鬼ごつこをする時のやうに巧妙に體をかはしてゐるのは、まことに器用なものだつた。
しかし雨霰と降つてくる敵彈の中だから、じり／＼と押し進んでゆくに從ひ、わが方でも損害がでないわけには行かない。
三宮小隊でも先任分隊長の江口伍長は、後頭部を打たれて即死した。千原上等兵も頭を打たれて即死、片桐一等兵は頭と足に敵彈を受け、遠田、鳥越の二人の一等兵は足を傷つき、その場に倒れたのである。
つゞいて三宮少尉も思はずアッと聲を發した。氣がついた時は溝の中に倒れてゐた。
すぐ衞生兵が二人とんでくる。そして服を切り開いて止血をしてくれたが、負傷したのは左手の、丁度力瘤のあたりだ。
『外には、もう當つてゐないか。』
『はあ、腕だけです。その儘じつとしてゐて下さい。すぐ擔架をもつて來ます。』
一人になつた時、少尉はそつと腕を動かしてみると、彈丸は肉を貫いたので、どうやら骨には何の障りもならないやうな氣がする。
いきれの熱い草の上に仰向けに寢こんだまゝ、空を仰いでゐると、一間ばかり上を、敵彈はヒユー／＼と唸つて、無數に通りすぎた。
その間に三宮少尉は靜かに思案をきめた。
おれは日本軍人だ、こんな事ではならない。腕肉を打ちぬかれた位で、後送されたら『彼奴、なりたての新少尉だから』と云つて笑はれるだらう。

それとも一つは、今までは、只支那がにくいとは思つたが、特定の支那人のどれが憎いと思つたことはない。

だが、張りきつてゐた身體を、かう傷つけられてみると、三宮少尉は、打つてきた奴――即ち前面の敵に滿身の憎惡を感じずにはをられなかつた。

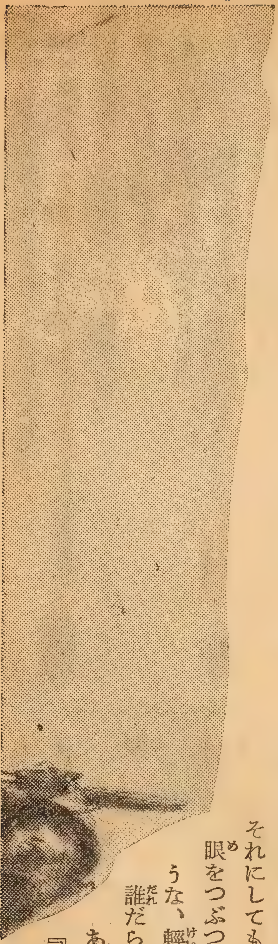
『おのれ仇を打たずにおくものか。』

この一念が勃然として湧くのであつた。

だから、間をおかず擔架をもつてきた衞生兵には云つた。

『俺は大丈夫だ。――もう一戰するからな。負傷した事は、中隊長にも部隊長にも默つとつてくれ。』

云へば部隊長は無理にも後退してこいと命令されるにきまつてゐる。だからそれを封じたのだ。



（その六）

しかし山北部隊長は後方の丘上から双眼鏡で見て、三宮少尉の負傷したことは知つてゐた。衞生兵が擔架まで運んだから後送されたものと思ひこんでゐた。

その間にも戰鬪は、いよ／＼熾烈となつて、わが軍はひた押しに敵を壓迫したが、地面が一間程の高さの段をなした所に行き當つた。

敵は上の壕の中から打ちおろす、わが軍は下から應戰する。こゝで鍔ぜり合ひの形になつて、こちらの前進が暫く阻まれ、いつ此處が突破できるものとも見當がつかなくなつた。既に日沒だとすると、このまゝ夜に入つて、決戰は明日に期しなくてはならないのかとも思はれた。

その時である。

一人の將校が彈んだゴム毬のやうに、ポッと段の上に飛び上つたのだ。

そして片手で劍を揮つて、前面に群る敵を薙ぎ退けながら、友軍に向つて何やら叫んでゐた。

屹度『早くつゞいてこい。』と招いてゐるのだらう。

これに勢を得て、兵も續々と壇を飛び上り、息をつく間もなくその陣地を占領して了つた。

それにしてもその將校の、何と云ふ美事な動作であつたらう。

眼をつぶつても、いつまでも鮮やかに瞼裏に殘つてゐるやうな、輕快な、そして果敢な動作であつた。

誰だらうと思つて、山北部隊長は後方陣地から眼鏡をあてゝ見ると、

『おや。』

と思はず不審の言葉を洩らさざるを得なかつ

た。それは負傷した筈の三宮少尉だつたからである。

そこへ、ダーン、ダーンと物凄い地響が二つ、續けざまにして、空中には土砂が眞黑な落下傘を開く。迫撃砲だ。

『あ、やられたな』

と云つて部隊長は土砂が自分の身に振りかゝつたやうな感じに襲はれながら思はず眼をつぶつた。

＊　＊　＊

こちらは三宮少尉である。

僅か數分間だつたのか。それとも長い〳〵時間だつたのか。――それは分らない。

とに角昏倒して、意識を失つてゐたのだ。

我に返ると、左肩に痛みを覺えた。見れば赤黒い血がブツ〳〵と音を立てて吹きだしてゐる。そこをやられたのだ。

それから片眼にヒリ〳〵と鹽氣がしみてしかたがない。動く右手をやつてみると、血がつく。

おやと思つて額から頭を撫でると、傷は頭の眞正面に受けてゐるのだつた。鐵兜はいつの間にか吹つ飛んで了つて、手のひら一面にべつたりと血糊がねばりつく。

『あゝ、殘念だ。頭をやられたんでは。』

と、その瞬間、三宮少尉の意識の中には、自分の死と云ふ觀念が稻妻のやうに閃めいて過ぎた。

いよ〳〵覺悟をすべき時がきたのだ。しかしこの場に及んでも三角巾をさぐつて、そのガーゼを頭と肩の上にあてて、血を留めるだけの手當は忘れなかつた。

それは生命の愛惜とか、命への執着とか云ふことよりも、むしろ日頃の訓練の結果、半ばは反射的作用として、さうしたのであつたらう。

よく、死の前には、自分の全生涯の思出がフイルムを迴轉するやうに、一時に思出されるものだと聞くが、三宮少尉には、別にそんな事もなかつた。

或は二十そこ〳〵で、まだ特に思出すやうな過去が無いからかも知れない。只、七つの時に亡くなつた母の面影だけが、あの世から自分の傷口を見つめながら、微笑んでくれてゐるやうな氣がした。

もう、全くの夜だつた。例によつて、今宵も銀河の影が鮮かだつた。

戰はもう濟んだのだらう。銃砲聲は收まつてゐた。

死を待ちながら三宮少尉は一時間ばかり橫はつてゐたが、なか〳〵死なないばかりか、却つてこの休息によつて氣力が頓に恢復したのを覺えた。氣持がしやんと直つてきた。

無事な右の手を土について、立つて見ると、結構立上ることができる。

又試みに歩いてみると、歩くことさへもできるのである。頭に觸つてみると、どんな風に負傷してゐるのかは分らないが、何だか頭蓋骨は大丈夫なやうな氣がする。その瞬間、

『こりや、俺は生きるぞ。大丈夫、死にはしない。』

と云ふ確信が腹の底の方から湧き上つてきた。

三宮少尉は、自分で千メートルも歩いて、やつと繃帶所をさぐり當て、そこで手當をうけて、それから野戰病院へ送られた。

檢診の結果、最初、左腕に受けた彈丸は、骨には少しの損傷も與へず、肉を打ちぬいてゐたのである。

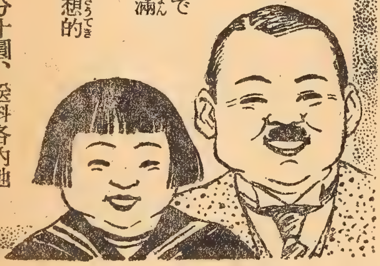
又、胸にうけてゐる小銃彈は、これももし背に突きぬけてゐたら致命傷だつたらうが、左の乳の上から、肩口へかけて、上へ通りぬけてゐて、內臟には何の故障も與へてゐなかつた。

それから頭に蒙つたのは、これはどうやら迫擊砲の破片らしい。鐵兜を眞正面から打ぬいて、それから前頭部の毛髮と薄肉を、ぐーと、短冊形に削り取つて行つた。だがこれも本人が感じてゐた通り、頭蓋骨にも、隨つて腦中樞にも、何の損害も與へなかつたのである。

熱は二三日間でた。その間には、時々、譫言も云つた。後で、
『俺は、何か恥しいやうな、人に聞かれちや悪いやうな事を云やしなかつたらうか。』
と、當番の衛生兵に聞くと、その答はかうだつた。
『いや、いや、別に。——只ね。時々、訓示でも與へる口調で、戰場で戰死するのは、男兒無上の名譽である。しかし戰場でセンセイするのは、それにも劣らない名譽である。センセイだ。センセイだ。俺は飽くまでセンセイだと、發作的に云つてをられました。少尉殿は入隊前、どこか、學校でも教へてをられたのでありますか。』
この衛生兵はセンセイを先生だと思つてゐるのだ。三宮少尉は病院へ來てから、初めて愉快さうに笑つた。

（その七）

問安寺の敵を掃蕩するのに丸二日を要して、それから更に前進にかかつたが、見ると此の部隊（北村勝部隊）は敵陣を目ざしての最尖端まで出てゐるのであつた。
そして北村部隊の中では、この山北部隊が、又先頭を承はつてゐる。
『よし、占めた。宜昌一番乘りはわが部隊だ。みんな、もう一元氣だしてくれ。』
部隊長は馬上から兵への慰諭と鼓舞とを與へた。
全體が宜昌一番のりを確信して、昨日までの靴の重みは、些とも感じない程、快速進撃をつゞけた。ともすれば踵裏に粘りつく沼澤地の泥土も、今はもう、些とも苦にならなくなつて來た。
そして宜昌を、今や二三里の前方に望む沈家店まで來た時——この部隊が一番長江沿岸に沿うて進んでゐたのが、不運だつたのである。
部隊は引返して白洋に集結中の敵を撃滅すべしとの急命に接した。
地圖で見るとその間二三里の距離は優にある。
『あゝ、ダメだ。これを往復したのでは、一

肥りすぎに‥
マイフオリン
最も權威ある評判のやせ藥！
マイフオリンの主劑は、定評ある甲狀腺エキスです。服用すれば、皮下に沈滯してゐる蛋白の分解を亢進させ、肥滿の原因である脂肪を燒解しますので、見ぐるしい肥滿症もほどよくやせることが出來ます。肥りすぎてお着付にも苦勞する方には、理想的なやせ藥です。
▲十日分三圓五十錢、二十日分六圓、六十日分十圓、送料各內地十錢他四十二錢、御注文は講談社代理部（振替東京六六二九）へ


番乘りは間に合はない。』

部隊長が口惜しがつたばかりではない、勢こんでゐた兵も殘念がつてゐた。

だが戰爭は一つの大きな交響樂だ。振られる指揮棒に背いて、自分勝手な音色を出すやうな事は、斷じてあつてはならぬ。

敵城の一番乘りは、快は卽ち快だが、それは個人的、乃至は部隊的な感情なので、そのために全軍の利害が、些つとでも犧牲になる事は、これは絕對にゆるされぬ。

部隊は肅然として兵をひいて、命ぜられた通り白洋の敵を掃蕩した。

この間に、天野、村井、石川、村田、松川、柴田、山岸、長谷川の諸部隊は、六月十一日早くも宜昌南端に到達し、猛攻を加へてゐたが、その午後五時、天野部隊の杉浦〇〇が率ゐる健脚部隊が、城內の一角に突入して、日章旗をあげた。一番乘りだ。

山北部隊はそんな事とは知らない。白洋の後退作戰はしたが、或はまだ一番乘りに間が合はないものでもないと思つて、大急ぎで引返して、十二日の午後宜昌郊外に到着した。

市街のかしこ此處、盛んに黑煙をあげて燃えて、銃砲聲も激しく聞える。

見ると、どこの部隊の兵か知らぬが、支那民衆の戸板を引つぺがした急造擔架に、一人の負傷兵をのせ、それを四人の兵がかついで、市の城壁の方へ急いでゆく。

い〱。』

と部隊長は呼びとめた。

『お前等、どこへゆく。』

『宜昌です。』

『その負傷した兵はどうしたのか。』

『はい。この城壁二三キロの所まで來て、腿を打たれて倒れました。しかしあれ程、譫言にまで云つた宜昌だから、その土を踏まずに後送されたのでは、これもさぞ無念だらうと思ひまして、自分等だけ引つ返して、今擔いで行つてやる所であります。』

『さうすると、宜昌は、もう占領したのか。』

『はい。昨日の夕方、うちの隊で入りました。』

そこで部隊長はその晩は、部隊を郊外に天幕露營させて、一兵も城內に入れなかつた。

よその隊の功を奪ふやうな事があつてはならない――

その積りだつた。

だが、占領したのは實は、わが領事館のある一角だけで、廣い市內のあちこちでは、頑强に敵が抵抗する。

そこで十三日には此の部隊も市街に入つて掃蕩戰に助力した。

宜昌關の正門を入つたところにある銀行の如きは、支那兵が厚い煉瓦壁に銃眼をあけて、その蔭から、街路を通るわが兵を射かけたので、こちらも多少の損害を受けたが、敵の作略を見破つてこれを包圍して了つたので、遂に彼等は白旗を掲げて降つたと云ふやうな挿話もあつた。

その夕方、山北部隊長が馬で、掃蕩後の市内を巡察してゐると、左腕を白い繃帯で吊り、左肩から胸へかけても繃帯を巻き、又頭も繃帯で包んだ上に戰鬪帽をのせた一人の將校が、重い軍刀を半ば杖代りにつきながら、歩いてゐる。

まるで半身以上が眞白なのである。繃帯のばけものと云ふ恰好だつた。

部隊長が、軍醫はなぜこんな兵を歩かしてゐるだらうと訝りながら、馬で後から乘りこして振返ると、

『おう。』

と思はず聲をあげた。『三宮少尉ぢやないか。』

呼ばれて少尉は直ちに嚴格な停止敬禮をした。

『あツ、部隊長殿。』

『貴官は――』

部下でも、親しみをこめて呼ぶ時には、貴官と云ふのが、この部隊長の癖であつた。

『あの中でよく、生き殘つてゐてくれたなあ。』

思はず馬から飛び降りて握手したが、兩眼の涙は、部隊長の頰から

專賣特許

待望の新製品出來！

高級 アイリス石鹼

健康な若肌を護る…獨特の美肌作用を持つた化粧石鹼、優秀な品質、高雅な香り、豐かな泡立ち…總ゆる點から見て天下一品だと美容界でも推奬！

（一個三十錢・有名百貨店にあり品切の際は大日本雄辯會講談社商事部へ）

も、少尉の頰からも傳ふのであつた。

『お蔭さまで命だけは取とめました。』

『しかしその恰好ではまだ惡いのだらう。なぜ病院を出たのだ。』

『いや、問安寺の野戰病院をひき拂つて、安陸まで後送すると云ふのです。あすこまで下げられては、又いつ戰線に加はれるかも分らないですからね、軍醫に、俺だけ退院させてくれんかと云ひましたら、暫く首を傾げてゐましたが、あなたが御希望なら別に引留めはしませんと云つてくれました。で早速病院をとびだして、一人でこゝまで歩いてきました。』

『そんな無茶をやつては、豫後によくないだらう。それに途中には敗殘兵もうよ〳〵してゐることだし。』

『いや、その點は大丈夫です。部隊長殿、自分は戰生少尉であります。』

と云ふと、山北部隊長も朗らかに笑つて、

『いや、さうだつた、さうだつた。そして貴官のやうな戰生こそ、戰死にもまさる榮譽に輝くのだ。』

と、又更めて握手し直した。

『さ、君は負傷者だ。この馬に乘り給へ。』

三宮少尉がいく度も辭退するのを、無理に自分の馬に乘せ、それを兵に鼻口をひかせて、宿舍につれ歸つたのであつた。

宜昌市は長江を隔てゝ、三角山と向ひ合つてゐる。

その稜線に退却した敵のうち出す小銃が、煎り豆の音のやうに聞えた。

（完）

慢性淋病の黒焼療法公開

あけび

あけびの黒焼は淋病によい、しかも一旦恢復すると再發の氣遣ひがない……この事實は古くからいひ傳へられてゐました。その効目は一度實驗した方は判つてゐても、中には『そんなもので淋病が治つてたまるものか』と一ぺんに片づけて仕舞ふ人があります。併しお薬だけは理窟よりも實驗です。多くの方に試されて、良いと認められた薬ほど力強いものはありませぬ。これ迄の經驗から割出して、恐らくこれ程効果的な療法は他にその類を見ないものと絶對の信用を博して居ります。次の記事が同病の皆様に御參考となり、少しでもお役に立つ處があつたら幸ひと存じます。(筆者)

慢性症で悩み抜いた擧句に偶然服んだ
あけび薬の効果的なのに感謝！

何が辛いといつて、ほんの假初の動機から淋病に感染し、いつまでも治らずに長びく程身を切られる様な苦痛はございません。どうせ治り切りにならぬものなら、いつそのこと放つて置かうか知ら……そんな氣持で毎日を憂欝な氣持で過してゐる方も決して少くはないと思ひます。初めの中は白檀油などを服んで居りますが、今更ながら驚いて洗滌をしたり、無闇に注入薬を用ひたりしてゐるうちにだん／＼重くなつて仕舞つて、焦れば焦るほど益々ひどくなつて『一時は全く何うなることかと思ひました』と言つて嘆かれる方がよくありますが、事實この病氣はかく／＼しくよくならず、多くの患者が一進一退の狀態で何うしたら治るのか見當さへつかず、腰が痛くつれるやうに感じて、不安のうちに毎日を送つてゐる位、苦しいことはございません。

ですから淋病に効くと云ふ薬は新薬といはず、家傳薬といはず新聞廣告を見たりしては手當り次第に試みては見たが、相變らず變な感じがして、それこそ言ふに言はれぬ不快な氣持は少しも快くならず、全治の望みは一片の夢と消えてやはり駄目と知つたときの落膽……身も心もガックリと挫けて、焦立たしい

日のみ過ごすといふ様な苦しい經驗を、如實に味つてゐる方はどんなに多いことでせう。

併し、良藥は思ひがけない處にあるもので黒焼のあけび藥がいゝと言つたら、或は本當にしない方があるかも知れませんが、お藥だけは理窟よりも實驗です。半信半疑でもいゝですから服めば効き目はキット判ります。淋毒を根本から死滅排出して仕舞ふので、藥が効いてくると一時その反應作用が起きますが大したことはなく、一日々々と効果を收め嫌な不快さも拭つた様に快くなり、尿は無色透明の綺麗さとなつて仕舞ひます。そして一旦快くなれば決して再發せず、その後は何の事もありません。蘇生の思ひとは全くこのことを言ふのでせうと、後になつて感謝されるといふ例は決してめづらしくはございません。

これが身の破滅とまで覺悟した淋病を
意外にも黒焼を服用して治療!

淋病は公然と人に話せぬ病氣だけに、苦痛を感じながらも、人には隱さねばならず從つて仕事を休むわけにもゆかず、醫者通ひをするにも人目を忍ぶといふ風ですから、時には病氣に惡いと知りつゝ無理をするので容易に治らず、一進一退の状態を繰り返してゐるうちに、いつとは知らず慢性に移行して仕舞ひ劇しい痛みのない代り、不快な感じは常に去らず、陽氣の變り目にはきつと再發して不快な異常感を覺え、尿はいつまでも透明にならず、一時は少し快くなりかけることもあるが仕事の方が忙しく、毎日夜業々々と身體に無理をするので養生も出來ないためか、すぐまた惡くなるといつた有樣で、自然、勤めも休み勝ちとなり、この儘の状態が長く續いたら結局は身の破滅、まるで暗い淵へでも引きずり込まれるやうな思ひで日を送つてゐる……といふ方々も決して少くはないと思ひます。

しかし黒焼のあけび藥を未だ服んだ經驗がなかつたなら、物は試しと思召してお試みなさいませ。その藥効については充分な根據があるので、必ずや豫期以上の効驗にきつとお喜びなされます。最初四五日のほどは何等の様子も見えないが、やがて藥の反應作用が現はれてくると自覺症状は次第に消失し、續いて服用した結果は一日々々と効果を收め、その黒焼も殘り少くなつた頃には何のこともなく、すつかり快くなつて仕舞つて、不快な感じも忘れた様になくなり、尿も綺麗で淋絲の影さへなく、やつと晴々しい氣持となる事が出來ました』とは服用した方のよく申される事ですが、毎日の仕事が忙しく碌な養生法を守れなくとも、黒焼のあけび藥をのむだけでそのまゝ快くなつて仕舞つて何のこともないとしたら此れ程の喜びは他にありますまい。

あけびも産地によつては効きも薄いので、本場の一番効目が強いといはれてゐる、伊勢の山奥に産する野生のあけびをわざ〳〵不便な同地方から取寄せまして、黒焼にして調製したものをおわかち致します。御希望の方は、東京市小石川區音羽町大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九番)へ御註文下さい。『あけび藥』は十五日分二圓五十錢、三十日分四圓五十錢、六十日分八圓、送料各内地十錢、其他四十二錢滿洲支部五十錢です。急送又は秘密を要する場合には東京市淺草區七軒町二、電車大通角(郵便局隣り)家庭生活研究會(振替東京四壹壹八貳番)へ直接に御申込み願ひます。(係り)

新作落語 箱根山

柳家金語樓

つけ焼刃、とやら申しまして、兎角にこの……身につかないといふものは、勝手の違ふものでございまして、

『どうだえ。立派になつたぢやアねえか。』

『本當にネエ。家の中が見ちがへるやうになつたよ。』

『何しろお前、今迄とは違ふんだからな。インチキ……ぢやアなかつた、殷賑產業てのか。乃公なんざア、熟練工だてんで、物スゲエ程モリ〳〵錢がとれる。以前のやうな、シミッタレな生活はしてゐられねえ、この椅子なんざアお前、廻轉椅子てんだぜ。な、斯う腰かけた儘グル〳〵廻るだらう。』

『チヨイト私にもかけさせてごらんよ。アラ、本當に、いゝ氣持のもんだねえ。』

『どうだ。乃公なんざア先から知つてゐたんだ。工場でも重役さんが、こんな椅子に腰をかけて、オーイ給仕、紅茶を持つて來ーい。……なんてのを見ては、ア、どうか乃公も一生に一度は、あんなのに掛けて見てえと思つてた。念願が叶つてめぐり會つたんだ。』

『親の仇みたいだねえ。けれども少し、このテーブルの横が淋しくない？……』

『ア、さう〳〵本箱を買ふのを忘れちやつた。』『ではちよいと間に合せに、下駄箱でも置いとかうか。』

『下駄箱……そこへ乃公が斯うして腰を掛けてゐれば、まるでそれぢやア玄關番だよ。早速デパートで見たのを買つて來らア。』

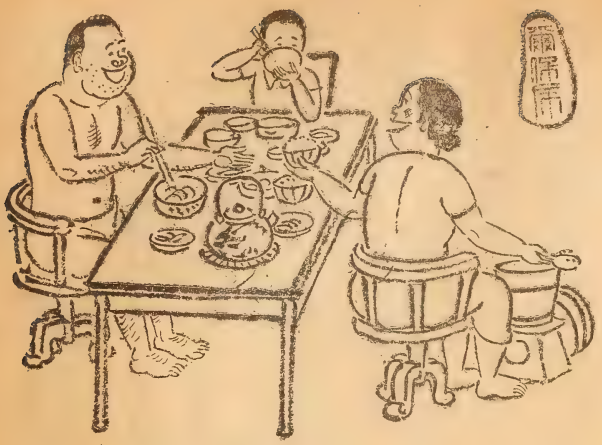
『けれどもお前さん。本棚なんぞを買つてどんな本を入れて置くのさ。』

『どんな本て……、讀めねえ本なんぞ飾つても仕方がねえ。金坊が好きだから漫畫の本か何かをウンと積めて、あとは何か埋草に、成るべく厚い嵩張つた本が好いな。』『電話帳なんぞどうだらうね。あれ隨分厚くつて、字もギッシリ一杯書いてあるよ。』

『電話帳……か。ア、それもいゝだらう。何しろ乃公は飯を食ふ時にも、このテーブルでやる事にするぜ。皆な西洋式になア。』

『それぢやア私達の椅子も買つておくれよ。何かえ。西洋式では女房や子供は、立つて御飯を食べるのかえ。』

『立つては食へねえよ。それぢやアお前と金坊のを買ひねえ。』『買ふんなら矢張り此廻轉



椅子がいゝよ。御飯をよそふ時だつて、スーと横を向いて、おはちをあけて茶碗へよそつて、又グルリと此方を向いて、サーと出せば便利だらう。グル〳〵廻りながら御飯を食べれば、運動になつて消化もいゝよ。運動といへばチヨイトお前さん。明日から一週間のお休み、こんな事はメツタに無いよ。どこかへ遊びに行かうぢやないか。久しぶりに浪花節芝居へでも……』

『オイ〳〵、情ねえことを言つてくれるなよ。金はフンダンに取れるんだ。えらい人たちの行く所へ行かうぢやねえか。歌舞伎座で活動を見るとか、帝劇で漫才を聞くとか、温泉場へ出かけるとか。』『アーラちよいと〳〵ヲンセン〳〵。それがいゝよお前さん。箱根山に温泉があるんだつてねえ。』

『あるともよ。昔から箱根山温泉といやア名高いものだぞ。雨が降らねえからつて、温泉は断水なんかにならねえ。薪炭が足りなくなつたつて、チヤーンと温泉は沸いてゐるんだとよ。』『アラマア。餘程いゝ仕掛になつてゐるんだね、そこへ行かうよ箱根山へ。』

『ア、行かう〳〵。いゝぞ。汽車は二等だな、寢臺か何かで、眠つてゐる中に箱根山の頂上へ着く。ズーツと見晴しのいゝ部屋で、温泉に入りながら、ビールでも呑んで……』

『お湯の中でビール呑む人があるかね。然しお金は一體、どの位持つて行つたらいゝだらうねえ。』

『金か、さうだな。一日千兩と見て、一週間だから、七千圓も持つて行くか。』

『そんなには要らないよ。お前さんも金坊も洋服だらう。』

『ア、お前は着物でいゝや、それも一番いゝのにしろよ。裾模樣か何か。毛皮のエリマキでもして……』『この暑いのにエリマキなんか出來ないよ、けれども、温泉旅館なんか、服裝や持ち物を見るといふから。』

『だからよ。出來るつたけ氣張つた扮裝をして脅かしちまへ。十本の指へ二つづつ指環をはめて、兩手へハンドバツグを一つづつさげて、草履もあの、キヤラメルのにしろよ。』

『キヤラメル……ア、エナメルだろ。』

『乃公なんざア、腕時計をして、鎖のついたのは胸へ飾つて、向ふへ行つて浴衣でも着てブラツとする時は兵兒帶へ、紐のついた奴を持つんだな。ア、それから、目ざましも一つ持つて行かう、あとは置時計に柱時計……』

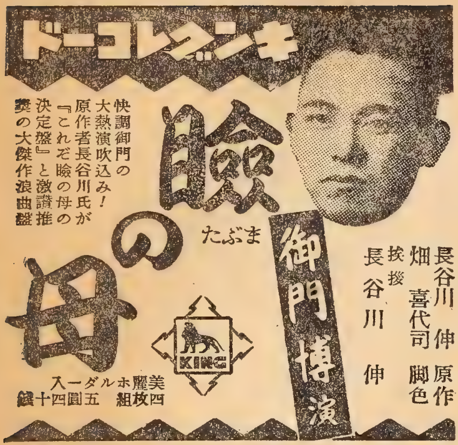
『時計屋の店開きみたいだね、そんなには要らないよ。』

『何しろ忙がしくなつて來たな。乃公はちよいと買物に行つて來る。その間に金坊に支度をさせとけ。』『アラちよいと今日出かける

のかえ。それは大變だ。……チョイト、金や、金坊や、いゝ所へ連れて行つて上げるから、支度をするんだよ。』『お母ア、活動か。』
『活動なんかぢやアないよ。箱根山温泉へ行くんだよ。』『チエッ、山なんかつまんねえな。俺ア海水浴がしてえや。』
『何言つてるんだよ、温泉へ行けば、お湯の中で海水浴が出來らアね。サア、この間買つたいゝ洋服を着て、向ふへ行つたら、華族樣のお坊ちやまのやうな顔をしてるんだよ。』
『フン、俺アそんな顔なんて知らねえや。』
『金坊ッ、俺アなんて言葉を使ふんぢやアないよ。今迄とちがつて、此頃では一月に、何百圓も取れる、高等熟練工の子供なんだから、言葉も品よく、自分の事は僕と言ふんだよ。』
『ぢやア、自分の事が僕で、お母ちやんの事は君かい。』
『莫迦だねこの子は、自分の親を君つて呼ぶ奴があるかね、私の事は……母上……母上は少しをかしいね。……奥さん……も變だし……ア、そら、裏の家の子が、パパだのママだのつて言つてるだろ。アレ〳〵、あれにおしよ。』
『フーン、パパにママか、一體どつちが、パパなの……』
『どつちがつて……それはお前……今お父さんが歸つて來たら聞いてごらん。私はどつちだつて構はないんだよ。お父さんの意嚮もあることだから、お父さんが乃公はママがいゝと言へば、私はパパだつて構やアしない。そら、お父さんが歸つて來たよ。』
『お父ちやん。ママがいゝの、パパかえ。』
『何を、乃公ア先刻飯を食つたばかりだよ、そんなにまんまを食へるか。』
『あんな事言つてらア。おまんまぢやアねえよ。今、お母アが、温泉へ行つたら、裏の家みたいに、お父ちやんやお母ちやんの事を、パパとかママとか呼ぶんだとさ。』
『ウン、ア、さうだとも、紳士だもの、紳士の子が、お母アや、ちやんはいけねえ。それは、ママやパパの方がいゝぞ。』『だからさ、お父ちやんの方がパパか、ママかえ。』
『そりやアその……パパでねえ方がママで、ママでねえ方がパパなんだ。どつちでも呼びいゝ方を言ひな。手近の方で返事をしてやるからな。オイ、ちよいと見ねえ。乃公ア、寫眞機を買つて來た。』『アラ、お前さんそんな物を買つて、寫眞なんか撮れるの。』
『そりやアその、撮れやアしねえけれど、温泉場へ旅行でもしようてえ客が、寫眞機の一つも持つてゐなくては見つともねえや。安くねえんだぞ、それが八十圓だ。』
『マア、高いもんだねえ。うつるかしら。』

『當り前よ、うつらねえ寫眞機てのはないや。寫眞機屋では、三圓以上の機械でしたら必らずうつりますと言やアがつた、三圓でさえ寫るんだ。八十圓ならそれだけ餘計うつる譯だ。支度は出來たんだな。』『ア、みんな今、トランクへ詰めた所だよ。荷物が少ないと、宿屋でなめられるからね。』

『ア、そりやさうだ。ウンと持つて行きな、トランクに柳行李、バスケット、信玄袋、簞笥に、鼠入らず……』『引越しをするんぢやアないよ。自動車が要るねえ。』



『ア、乃公が今拾つて來る。……オイ、自動車屋、チップははずむぜ。この荷物を積んでくれ。サア、金坊お前も乘りな。……オイ運ちやん、東京驛だ、二等待合室へ着けてくれ。』

『驛の中へは入りませんよ。乘車口の表玄關へつけます。』『當り前よ。御用聞きや出前持ぢやアねえから、裏から入る事は無えんだ。時に何かねえ運ちやん、今から乘つたら箱根山へは明日着くかね。』

『箱根山……』

『さうだよ。箱根山の温泉へ行くんだ。』

『ハー、箱根の温泉といふと、強羅ですか、宮ノ下、塔ノ澤……』

『何を言つてるんだ。箱根山だよ。甲羅だの棒の澤なんて、そんな處へ行くんぢやアない。』『お待遠樣、東京驛です。』

『オット御苦勞、サアこりやア祝儀だ。オーイ、赤帽々々。』

『ヘエ、どちら行きでございますか。』

『ア、箱根山だ。』『箱根山……』

『アレッ、皆な箱根山てえと考へやがる。昔からある箱根山だよ。此頃無くなつたか。』

『イエ別に、失くなりやアしませんが。』

『さうだらう。だからその箱根山の、温泉へ行くんだよ。』『ア、左樣ですか、では恰度、三十二分發の熱海行がありますから、それで小田原までおいでになつて、後はハイヤがよろしうございませう。切符を買つて參りませうか。』

『エ、お前さんが買つてくれるのかい、そりや濟まねえな。飛んだ散財をかけるなア……何、お金を頂くんですつて……さうだらう。どうも帽子の色と言ひ、赤の他人のお前さんが、汽車賃を出してくれる筈はねえと思つたよ。いくら位要るえ。二等だぜ、大人二人の子供一人だ。二百圓もゐるか。』『そんなには要りません。十圓もお預かりいたしませう。』

『少々こちらでお待ちを願ひます。』

『大丈夫かえ。逃げんなよ。』『逃げやアしません。すぐに買つて參ります。』

『オイ女房、何をしてゐるんだ、何を、どこかの知らない奥樣が、書いたものを渡したつて、ドレ〳〵見せな。ア、何か書いてあらア、何かの宣傳か何かだよ。ポケットへ入れといて、後でゆつくり見るとしよう。』『ヘエ、お待遠樣……おつりでございます。』

『ア、さうか、これで寢臺も入つてゐるのか。』『寢臺なんぞありません。小田原まで二時間位のものです。』
『何だ、イヤに近えんだな。何しろ乘つちまはう。ハヽヽ、割合にすいてらア。さすがに二等車だね、赤帽さん、ア、お世話でしたね。こりやアチップだ。ハヽヽ、どうだい金坊、二等の汽車へ乘つて嬉しいだらう。』『ウン、俺ア……ぢやアなかつた。僕はお辨當が食べたいなア。』
『ヨシ〳〵今買つてやるよ。ちよつと、あのーもし驛員さん。濟みませんが、辨當屋を呼んで貰ひたいんで……エ、東京驛にはありません。……チエッ、東京驛ともあらうものが、ダラシのねえ停車場だなア。』『チヨイとー、氣をつけなくちやアいけないよ。』
『何がよ。』『何がよつて、ズーッと見渡したところ、二等車へ乘つてるお客に、私たちみたいのはゐないよ。どうも何だか私たちヂロヂロ見られて笑はれてゐるやうな氣がするよ。第一、言葉をモウ少し、上品にしないと可笑しいよ。』
『さうか。ア、成程さういへば、人種が違ふやうな氣がするなア。第一、お前みてえなケバ〳〵しい服裝をしてゐるのは一人もゐねえや。今はこの、地味にくすんでゐる方が流行るのかなア。では言葉を氣をつけるかな。乃公は……てのがいけねえのか、エ、その、いけねえもいけねえ。ア、いけませんか……むづかしくなつちまやアがつたね、何、やアがつたもいけない。オイ、それぢやア手も足も出……ないよ。ア、身共は……』
『身共は可笑しいよ。』
『それぢやア、旦那は……』
『自分の事を旦那てのは變だよ。』
『さうか、では矢張り僕でやらう、時にきさまは。』『きさまはひどいよ。』
『ぢやア何といへばいゝんだ。』
『名前を呼ぶんだよ。花つて。』
『ハナ、……安つぽいな。』
『では、子をつけてごらん。』
『花子々々、どうもピツタリしねえな。』
『さんをつけては。』
『花子さん。……何だか隣の兒を呼んでゐるやうだが、マア仕方がない。花子さん。』
『ハー、何ざます。』『莫迦つ、花魁ぢやアないよ。何ざますて奴があるか、花子さん。』『ハア何御用で。』
『うめえ〳〵その意氣〳〵。』『アノー、一體何時頃に、小田原へ着きませうかねえ。』
『左樣、僕の考ふる所では、日のカン〳〵と照つてる中に、この列車は着く事ならんと、欲するねえ。』『ア、大へん調子が出て來たよ。金坊や、お前も何か言つてごらん。』
『アヽパパ、ぼく、腹がへッ……さうぢやアない。お腹がすいてもひもじうない。』
『千松みてえだな。』『ぼく。ホテルへ着いたら、サンドヰッチを食し度いです。』
『アヽうめえや〳〵。』『ネエ、ママー。』
『オウ、何だ何でえ。』『アレッ、お父ちやんパパとママと兩方やるのか。……今が旅行に一番いゝシーズンでありますねえ。』
『ア、さうだ〳〵。旅行にはこの、シーズンに限るであるぞよ。』
　お筆先みたいになつちまふ騷ぎ、よせばいいのに、勝手を知らない、洋風のホテルへ乘りつけまして、
『入らつしやいまし、お三人樣で。』
『一番特等の部屋はあるかね。』『エ、唯今特

別室は、皆ふさがつて居りまして、ハー外人が泊つてゐらつしやいます。』
『外人て何だい。』『ハー、米國の方で。』
『そんな斷つちまへよ。』『さうも參りませんので、では應接附のお部屋に致しませう。』
『成べく大きなのがいゝんだ。あすこはどうだえ。』『あれは食堂で。』
『食堂へ泊らうか。』
『食堂へは寢られません。……ボーイ、三百十七番へ御案内申上げて。』
『ハー、どうぞこちらへ……、お荷物はこゝへ置きます。御用の節はベルをお鳴らし願ひます。』
『ア、御苦勞さん。……どうだえ。きれいな部屋だなア。』『ちよいとお前さん。床が敷つ放しなのね。病院みたいだね。アラ、此方にも部屋があるよ。これ洗濯場かしら。』
『洗濯場、……そんなのが有る筈はねえ。こりやア子供の寢臺かな。それにしては布團も敷いてねえな、アツ、便所が傍にある、ハヽア分つた、腹工合の悪い奴がこゝへ寢るんだらう。』
『變だねえ。然し誰も來ないのね。』

『どうもサービスがよくねえな、お茶一つ持つて來ねえ。オーイ、姐さん。』『アラ手を叩いたつて聞えやしないよ。ベルを願ひますとか何とか言つてたぢやアないか。』
『ア、さう〳〵、こゝにベルがあらア。』

『コツ〳〵(ノック)……御免下さい。』
『オウ、留守ぢやアねえよ。入つてくんな。湯に入り度えんだがねえ。』
『ハツ、唯今、バスの用意をいたします。』
『アレツ、これ程のホテルで、風呂がねえのか。』『飛んでもないこと、溫泉ホテルで風呂のない筈はございません。』
『だつて、バスの用意をするといつたらう、乘合のバスへ乘つて、外風呂へ行くんだろ。』
『イエ、バスとはこの浴槽の事で、こちらからは水、こちらからは溫泉が出ます。』
『アツさうか。これが風呂かえ。しやがんだつて肩迄入らねえぢやアねえか。』
『イエ、仰向けに寢ますので。』
『アレ、笑ひながら行つちまやアがつた。桶は無し、上り湯はなし、着物をぬいで入れる籠もねえや。』
『兎に角お前さん先へお入りよ。』
『分つた〳〵。中へ入つて戸をしめると、アア成程、着物をかける所があるよ、よし、乃公が上つたら、代り合つてお入れ。』
『ア、ゆつくりお入りなさい。……アレ金坊や、あんまり遠くへ行くんぢやないよ。ア、、

そこの庭でお遊び、……ア、くたびれたね、腰かけてばかりゐるんで、何だか足がムクンで來たよ、それにしても良人長いお風呂だね……チョイト、お前さんまだかえ。のぼせちまふよ。アラ、開かなくなつちやつたよ。チヨイト、返事をして下さいよ。……オヤ〳〵、扉の下から、何か紙が出て來たよ、莫迦だねえ。風呂から手紙を出す奴があるかね。オヤツ、何だつて、「鍵で早くあけてくれ、むし殺されさうだ」サア大へん、チョイトウ、ボーイさーん。』『ハアどうかなさいましたか。』

『見て下さいよ、これが主人の、最後の遺書で……』『エツ、大へんなことになりましたね。外から鍵はかけられないのですがねえ。……ア、、ハンドルの横に、差込みの鍵がありますから、それをおかけになつたのではありませんか。……この事を書いて、入れて見ませう。』

『本字では駄目ですよ。片假名で分り易くね、大丈夫ですか。』『ア、大丈夫です、鍵の音がしてゐます〳〵、ア、開きました。』

『タハ、ア、ウーム。』『チョイト、お前さーん。しつかりして頂戴よう。水、水、水ですよ。……氣がついた。私の顏が分る？』

『ア、おどろいた、仰向けに寢るんだてえから、その通りにしたらお前、シヤボンでヌルヌルしてゐるから堪らねえ、ズルリと辷つて湯を二合ばかり呑んぢやつた、それもいゝがぬるいと思つて熱いのを出したら、これが出つ放しで、どうしても止らねえ。その中に湯氣で部屋ん中は、丸で見えなくなつちまふし頭はフラ〳〵、かゝつてゐなかつた鍵を、慌てゝかけちまつたんだ。』

萬事この調子、愉快にも保養にもなりません。二日もゐるとくさり切つて、

『お前さん、えらい所へ來ちやつたねえ。溫泉場へ來てゐる氣持がしないよ、あけてもくれても、牛とシヤモと玉子ばかり、可哀想に金坊も少しやせたよ、私は少しも早く、疊の上へ足を伸ばして、お香物でお茶漬が食べたいよう。』

『タハ、、お前もさうか、實は今まで我慢をしたが、乃公もモウ辛抱が續かなくなつた。ア、つく〴〵我家がなつかしいや、今からでも遲くはねえ。早く東京へ歸らうぢやアねえか。』『エツ、歸つておくれか、マア有がたいあたしや嬉しいよ。』

這々の體で歸宅いたしましたが、子供は兎に角、夫婦ともクタ〳〵になりまして、

『ア、どうも、がらにない事はするもんぢやアないね。アツ、坐れた〳〵、お前さん、疊、座布團……ハアーツ。』

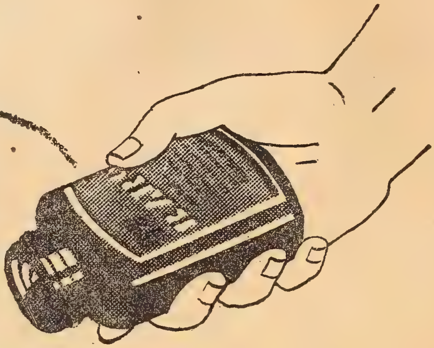
『泣いてゐやアがる。然しまつたく驚いたな。……ア、ポケツトから何か出て來やアがつた、ア、、これは行きがけに、東京驛でどこかの、奥さんみてえな人から渡された紙片だ。……何だと……時局を辨へて、無益な浪費はつゝしみませう。日本人なら、贅澤は出來ない筈、萬事簡素と儉約を守りませう……タハ、、これを見ろよ。』

『本當だねえ。道理で行きにも歸りにも、指環なんかはめてる人はゐなかつたよ。ア、早くこの紙片を讀んでゐたら、下らないお金をつかひ、窮屈な思ひをして、人に笑はれなくとも濟んだのにねえ。モウ〳〵これに懲りてこんな處へ使ふお金があつたら、金坊の貯金に廻したり、公債を買つたりしませうよ。贅澤したつて面白くも何ともないんだもの。』

『まつたくだ、ア、これを考へると、乃公ア働くのが一番面白いや。オウ、お前素足になるのか。』『エ、もう、足袋(旅)にはこり〳〵しました。』

（をはり）

急性
慢性
淋疾
に



淋疾 治療上、銀の強力な殺菌力と白檀油の鎮痛、利尿作用を結合して、銀の內服化を達成した本劑バロールは、治淋藥簇出の混沌たる今日に於て、愈々其の眞價を明示するに至つた。

藥理作用 銀と白檀油の相乘作用に因る多角的藥効が血液の循環を利用して體內深奧部の淋菌を殺菌すると共に尿中に析出して尿道及び其側管にも作用して徹底治療を圖る事が出來る。

優秀治驗 その優秀なる治驗成績は、急性、慢性の如何を問はず、又女子の複雜なる淋毒性疾患に對しても極めて短期醫治を營む事が報告されてゐる。

副作用無 本劑は銀を超コロイド化し、治効力を强力ならしむると共に、白檀油と相乘せしめて副作用を除去せる故、連續服用による治癒の迅速を期し得る。

藥價
一圓八十錢
三圓五十錢
五圓五十錢
十圓

大木合名會社
東京市神田區鍛冶町(振替東京五四〇番)
支店 大阪東區淡路町(振替大阪七七九五番)
出張所 北京東安門大草廠

京都帝國大學化學研究所 創製

バロール

傑物奇物

大倉桃郎

豊田耕三畫

ぼろ蚊帳綴り

若い血を包んだ顔だ。うまさうな色艶だ。それが枕に乘つかつてゐるのだ。

皿盛りの御馳走としてたかるのであらう。

眠りかけると――ぶん――と來る。どうもうるさい。たまらない。

弓術にかけては鍛錬した民部ではあつても、忍術者のやうな蚊の群れにせゝられては、動かずに防ぐ極意は無いのだ。

さりとて蒲團をかぶつては熱くるしい。猶更眠れさうもない。横着をきめては痒いところが増すばかりだ。已むを得ず起きあがる。家來を呼ぶのは氣の毒だし、夜更けの事だから自身で燈

火をつけた。
　蚊帳を検べると有つた〳〵。綻びも穴もある。人間の目には小さくとも飢ゑた蚊に取つては屈竟の大門だ。民部は糸を捜して來て繕ひをはじめた。大大名の弟ともあらう身が、寝そびれの蚊帳つゞりは風流とはいへない。我れながらわびしかつたが、穴の一つ一つを撮んで絞り、間に合せに括つてゐる所へ、
『まだ御寝なされませぬか。』宵の話相手の竹原勘十郎玄路が、次の間から起きて來た。
『何をなされまする。』手をついて息低くすかし覗いた。
『敵が入りこむのぢや。槍武者どもの夜討ぢや。』と、民部はくすりと笑ふ。
『ほう。蚊帳に損所がござりまするな。』
『ある。大手にもある搦手にもある。』
『どれ〳〵私が繕ひませう。』
『よいわ〳〵。そちは寝てゐたのであらう。かまはず引取れ。』
『御自身さやうな事をなさると知りながら、何で休めませう。私の方がちと器用でござります。お任せ下され。』
　勘十郎は手傳ひながらあきれた。
『や。こゝにもござりますな。ずゐぶんぼろ蚊帳となりましたな。保ちも保つたり、保たせも保たせたり、御辛抱恐入ります。是れは繕うても又破れますな。これではこの夏の凌ぎはとてもつきませぬ。明日にも新調致さねばなりませぬな。』
『さあ。それができようか。』
『兎も角も平太左衛門へ相談をかけてみませう。此始末を話したなら、蚊帳一張の新調ぐらゐは何とか成りませうから。』
『あぶないものぢや。』民部は苦笑した。
　民部紀雄は細川越中守宗孝の舎弟である。國守大名の骨肉であるから、大まかな生活もできさうなものであるが、實際はさうではない。現時の大名に經濟順調なのは滅多に無い。細川家も御多分に漏れない。いやそれ以上に財政困難である。肥後と豊後の一部とを併せて五十四萬石の領地を抱いてはゐても、それだけ世帯も大きく出費もかさむ。公儀から莫大の借金もしてゐるほどだから、内幕は頗る苦しい。
　自然經費節約で、民部への手當も極めて少額である。一文たりともうつかり使へない。小買ひの日用品すら不足を我慢してゐる狀態だから、まして蚊帳など買入れる餘裕は無い。新調するとなると、臨時の費用を引出さねばならぬが、それがなかなかむつかしい。
　勘定方がやかましいから、表面から請求したとて通してくれぬ。
　裏から運動して味をつけて貰ふほかは無いが、それも是れまでに度々手を焼いてゐるのである。

×　×　×　×

竹原勘十郎が、細川家上屋敷御長屋の堀平太左衛門方を訪問

した。

平太左は知行五百石で、當主越中守の用人である。勘十郎は二百五十石、芝白金臺の下屋敷附である。身分は少し劣るが平太左とは懇親な間柄である。

『今日は折入つてお賴みがあつて參つた。』

對面すると直ちに用件を切りだした。『民部樣のお暮らし向きについて、御相談に乘つて貰ひたいのぢや。』

『お暮らし向き？』と、平太左衞門は齡は若いが顏つきは重々しかつた。『ふむ。さぞお手薄でござらう。御儉約の上にも御儉約をなされてをられような。』

いかにも察してゐるやうに言つた。だが同情を匂はせたのではない。それとは逆に御儉約は當然――と利かせたのである。それくらゐは勘十郎も豫期してゐたゞけに、覺りながらも、

『申すまでもござらぬ。』と、負けずに逆に出た。『たとへば反古紙の餘白なども、切取り貯へておいて覺え書きなどの御用に使はるゝ、飯米一粒こぼれても丁寧に拾はるゝ。學問はお好みぢやが書籍の多くは借讀みをなさる。御幼時より附添の內山又助は久しく忠實に奉公した者、しかしつひぞ御褒美も出されぬ。此間も――何か遣はしたく思ひながらも、無い袖は振れぬ。ここに袴が一具あるが、是れを遣つては代りが無い――と又助に御述懷なされた。』

『ふむ。御苦勞にお慣れなされたな。』

『又助は淚を流して、その御一言こそ、眞の品を頂戴するより遙かに有難くと、御禮申上げた次第ぢや。』

『よい御挨拶ぢや。』

『又この間近郊御廻りの節、鼻紙をお持合せなさらず、御當惑の體ゆゑ、お供の木原惣兵衞が持合せの紙を、ぶしつけながら御用に立てた事もござる。それはまだしも、昨夜は眞夜中に、豫てお貯への糸屑で蚊帳の穴を綴つてをられた。糸屑もむだに棄てぬほどのお心がけ、しかも蚊帳は風にも破れさうに磨り減つてをる。潛り入る蚊は殿樣の御舍弟ぢやからとて用捨は致さぬ。此際蚊帳一張新調したいもの、其他御不足の品々もあり、臨時お手當のお下渡しを仰ぎたい。この儀を何とか御取次して下されぬか。』

勘十郎の大きい目が、壯氣の熱を盛つて底強く見まもつた。

『ふむ。』平太左もじつと見返した。

『殿樣のお耳に達してもらひたいのぢや。』

『これは內用ぢや。』

『さやう。しかし――』

『待て。內用の御取次は迷惑ぢやな。』ずばりと平太左は釘を打つた。

『事柄にもよらう。用人たるお手前として、これしきの事は含みがつかうかと存ずる。これは私曲を賴むのではないと存ずる。』

『しかし當時國用不足は誰も御存じ、上下を問はず質素儉約の折柄、民部樣は其手本ともならねばならぬ御身分、それが定額の御手當の外に臨時の費用を望まれては、御家の御制度が緩む。此お頼みが民部樣の思召しから出たとあれば、手前お目にかゝつて御意見を申上げたい。』

既に去年も、平太左は押しかけて民部へ意見した事がある。去年民部のために手當增額の取次を頼んだのは、他の者であつたが、意見の模樣は勘十郎も知つてゐる。又候押しかけられては民部が迷惑する。

『いや。さやうでは無い。』と、勘十郎は垣を立てた。『今日は手前一存で參つた。民部樣の御不自由を見兼ねて、お手前とは懇意にして貰ふ仲ぢやから、相談に參つた。』

『ならばお手前の御了簡ちがひであらう。此節勝手不如意は家中一統の事。民部樣へも諸事儉約を勸められてこそ、御家非常の御主旨にかなふと申すもの。然るに——』

『わかつた。此頼み引きこめる。』

『うむ。親友の仲ぢやから齒に衣被せず申す。是れがたとへ道理の聞えた頼みであらうとも、よし民部樣お直のお頼みであらうと、內用內々の御取次は手前一切お斷り申さねばならぬでな。』

平太左衞門はすげなく刎ねつけたあとで、

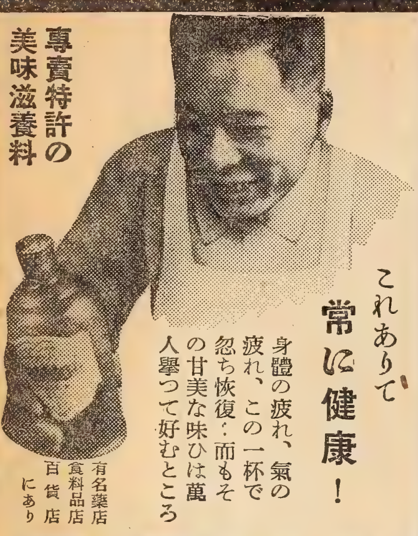
『さあ、內用は是れで切りぢや。それよりはお茶なりと進ぜよう。幸ひ他所より貰ひものゝ麥粉がござる。』

にこついていつもの親友らしく寬いだが、勘十郎は朗らかにはなれない。

『いや麥粉すゝりは贅澤ぢや。勿體無い。御免。』すばやく暇を告げた。

大手前龍の口の上屋敷を出ると、大名小路は夕日が消えかけてゐた。

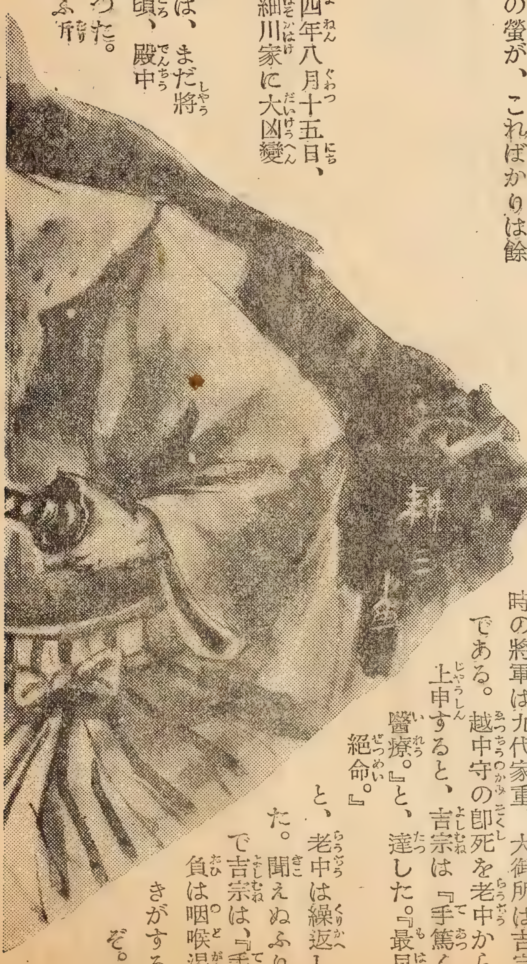
『ふむ。だん／＼言ふ事が頑固になる。まだ若いにまるで老人臭く。』外櫻田へ出ると忌々しく呟いた。爭ふにはこつちに理が薄いからおとなしく引取つたが、勘十郎もまだ若いのである。腹はむかついてゐた。途中で黃昏れて白金臺の下屋敷に歸ると、


これありて
常に健康！
身體の疲れ、氣の疲れ、この一杯で忽ち恢復：而もその甘美な味ひは萬人擧つて好むところ
專賣特許の美味滋養料
有名藥店
食料品店
百貨店
にあり
どりこの

民部は庭に出て涼んでゐた。
勘十郎を見ると、顔色を讀むやうにほゝ笑んだ。
『むだ足のやうぢやな。』
『御推量通り、面目ござりませぬ。』もぢつきながら勘十郎は手を下げた。多くは言へない。頭もしばしあがらない。
民部も何かに撲たれたやうであつた。しかし前以て諦めも用意してゐたのである。
『何事も足らぬを足ると、努めて思ひ直す事ぢやな。人間の望みに限り無し、望みの足るに限りあり。』
あつさりと笑つた。庭には田圃からの螢が、こればかりは餘るほど流れ入つて來る。

運命急轉

細川家の財政は容易に立直らぬ。
民部の窮乏も年々續くうちに、延享四年八月十五日、江戸城月並拜賀の當日に至つて、突然細川家に大凶變が降りかゝつた。
この日早朝登城した當主越中守宗孝は、まだ將軍へ拜賀の禮も行はぬうち、午前八時頃、殿中躑躅の間つゞき湯呑所わきの便所に入つた。
そこを出てお城坊主の介添で手水を使ふ所柄、そこらは薄暗い場所であつたが、そこにうろついてゐた寄合板倉修理が、背後から拔討に越中守へ斬りつけた。
顧く眞向へ二の太刀を打込んだ。疊みかけて無茶斬りに斬伏せた。
若年寄板倉佐渡守に遺恨があつて發狂した修理であつた。人違ひをされた越中守こそ災難である。不運な即死を遂げた。
越中守には子供は一人も無い。無くては細川家斷絶であるが、舍弟は三人ある。その中の民部紀雄を、虫の知らせか去年、假の養子として願ひを出してあつた。
時の將軍は九代家重、大御所は吉宗である。越中守の即死を老中から上申すると、吉宗は『手篤く醫療。』と、達した。『最早絶命。』と、老中は繰返した。聞えぬふりで吉宗は、『手負は咽喉渇きがするぞ。



醫藥と湯漬を與へよ。』と、命じた。

これなら鈍感でも覺れる。老中は越中守を重傷者として待遇し、特典を與へて乘物を殿中へ入れて引取らせた。

以後二日は自邸療養の形式として、其間に豫ての假養子に細川家相續の恩命を達した。

嘗ては古蚊帳の穴綴りを自身でした民部紀雄は、部屋住の窮乏生活から一躍して、五十四萬石の當主に据ゑられた。任官して細川越中守重賢と稱した。急轉不可測の運命であつた。この年三十歳である。

主人の代が更ると臣下の役向にも更迭がありがちである。重賢は急激の人事異動はさしひかへてゐたが、これは誰もの氣にかゝる事だけに、家中には早くも豫想、臆測の噂が流れてゐた。

『竹原勘十郎はお氣に入り者ぢや。今に出頭するであらう。』

これも噂の一つであつた。

『堀平太左衛門はどうぢや。あれは殿と同齢ぢやが、相性とは申せまい。好い事はあるまいぞ。』

これも噂の一つであつた。

平太左衞門はこの以前に、用人はやめられ小姓頭に轉じてゐたが、その小姓頭の地位も危ふからうと見る者が多かつたのである。

× × × ×

『政治はむつかしいものぢや。粘りついた鳥もちのやうぢや。俄かに大國の主となり、今更當惑する事が多いぞ。』

越中守重賢は國政についての此頃の心勞をふと漏らした。

夜咄の相手は竹原勘十郎である。

『健康もすぐれず、氣力の薄いためかな。どうも難儀ぢや。隱遁したがよいかとも思ふ。』

心細げに嘆息した。

その主君の顏を勘十郎は不安をためて見まもつた。

『思ひもかけませぬ。いつに無き御心弱き仰せでござります。たとへ御持病はあらうと御氣力は薄くとも、御自身のお働きは無くとも、人材を選んで御信任、お委ねあれば御國政なに困難がござりませうぞ。』

諫めながら目頭が暗くなつた。

『すぐれて賢明の御器量と、豫てよりお見あげ申してをりましたに、それほど肝小さき御分別か。隱遁などとは何事ぞ。假りにも口にすべきお言葉か。あさましい思召でござりまする。御卑怯な――』

ぽたりと涙がおちた。

『申した。』と、靜かに重賢はうなづいた。『それほど眞向に、我等に嚙みつくのは其方だけであらう。その口を後々までも變へまいな。』

『長い目に御覽下されませ。』

『うむ、其方へはなじんだ目ぢや。我等のこの目に耻をかゝすまいな。』

『申したき事は、首は飛ばうとも默つてはをりませぬ。』

『ならば眞劍を申し聞かさう。我等家を嗣いで三年になる。其間眠つてはをらぬ。諸侍の人情行狀、見えるだけは見ておいたが、政治を任せたき人物はまだ見當らぬ。もつとも家老より推薦の者が一人ある。是れは我等も成程と思はぬでもないが、其方は言ひたき事を思うた儘に申す。其方に心當りの人物は有るか無いか。』

『ござりまする。一人。』

『それは。』

『御家老より推薦なされたのは如何やうの人物か。それは伺ふに及びませぬ。殿。』と、勘十郎のついた手がのめるやうに傾いた。『堀平太左衞門を御拔擢なされませ。』

『平太左衞門――』と、重賢の顏面がおもむろに引きしまつた。案外であつたのである。

『五十四萬石の政治を肩にして、腰の崩れぬ者、このほかに私には存じ寄りがござりませぬ。』

『其方自身はどうぢや。家老より推薦の者が其方であつたらどうぢや。』

『盲人に私が見えませうか。私が私を知るほどに誰が私を知りませうぞ。私が螢なら平太左衞門はあれでござりまする。』

むし暑い夜である。重賢はだまつて扇を鳴らした。庭樹には今勘十

郎の言葉の夏の月が、此光りは顔は――といふやうに輝いてゐた。
『考へてみる。』とあつて重賢が言つた。
『この勘十郎を御覧ある殿の目に、勘十郎は決してお耻はかゝせませぬ。女の姿や食物の味には、好き〴〵もよろしけれど、これは重職の選任。愛憎親疎の曇り無しに、器量才能を本として、私は申上げるのでござりまする。』
『考へてみる。』と、重賢はその場では決心がつかなかつた。
世間は百數十年來無事太平が續いてゐる。どの大名の家にも太平腐れの宿弊がある。細川家は大大名だけにそれが大きい。それが積もつて先代以來財政難の苦境にも陷つてゐるのである。切りぬけるには制度からして大改革を施さねばならぬが、それは是れまで安逸の幸福にゐた重臣たちには喜ばれない。大大名だけに故障も大きい。
實行には大英斷を要する。
それを認めてゐる重賢であるが、斷行は主人のみの力では覺束無い。改革の立案にも適材を要する。ほしいのは膽力と知識と誠實との持主であるが、注文通りに兼備した人物はとなると、選任に迷はねばならなかつたのである。
『お考へはいかゞ。』
數日の後である。夜咄の相手に出た勘十郎が、主從水入らずの膝を進めた。
この頃の夜咄にむだ話はない。いつも國政の改善を練るのである。その相手には多く勘十郎が召される。現在の勘十郎は知行四百五十石

少年少女の家庭讀物
世界名作物語
講談社版
十四冊發賣中
どれも全世界評判の名小説、お子様方の情操教育にぜひお與へ下さい。
◎三國志物語（野村愛正著）
◎クオレ物語（池田宣政著）
◎ソロモンの洞窟（高垣眸著）
◎アンクル・トム物語（北川千代著）
◎小公女（水島あやめ著）
◎乞食王子（太田黒克彦著）
◎三銃士（山中峯太郎著）
◎ロビンソン漂流記（南洋一郎著）
◎トム・ソウヤーの冒險（佐々木邦著）
◎家なき兒（久米元一著）
◎鐵假面（江戸川亂歩著）
◎あゝ無情（池田宣政著）
◎寶島（高垣眸著）
◎巖窟王（野村愛正著）
全國書店にあり、一冊一圓五十錢、選擇御自由！（講談社發行）

に進められて、重賢の腹心、言はゞ秘書、顧問として信用されてゐるのである。

『平太左衞門ではやはり、お氣に召しませぬか。』と、重ねた。

重賢は澁つた。

『平太左は内心退身したい模樣ぢやと申す者がある。』

『何不足がござつて。』

『役替りの時からのやうぢや。』

『なるほど元が用人、今は小姓頭。しかし是れは御先代樣御生前に役替りとなつた事、殿へ對して不平は無き筈でござりまする。』

『無くとも現役は欠伸ものぢやなどと、他にも不滿を漏らしをるさうぢや。且又——』

『は。』

『其方も覺えがあらう。我等が部屋住の頃其方其他が平太左に頼み事をして、一切斷られた。斷つたのを脛に傷もつやうに、平太左は狐疑するやうぢや、さやうな輕薄魂では頼みにはなるまい。』

『心得ました。私この場では平太左衞門を庇ひだては致しませぬ。これより平太左へ押しかけ膝詰めに虚實を質しまする。退身の所存が實ならば譜代の恩を忘れた不埒、又私も見損ひの

不調法、生かしておけず生きてもをれませぬ。お目付を一人お副へ下され、直ちにお遣はし下されませ。』

『立退けば立退かせてよいのぢや。去る者は惜しまぬ。其方は我等に無くてならぬ。たゞ虚實を確めたくば參つてみよ。太刀など拔いては不忠ぞ。』

重賢は戒めた。

勘十郎は詰問の證人として、目付瀬木重太夫同道で平太左衞門の長屋へ乘込んだ。

『お手前には御家を立退く模樣が見えるといふ噂がある。殿のお耳にも入り御不審なさる。實否を確めに參つた。』

繕はずにぶつかつた。

夜中不意の押しかけ詰りであつたが、平太左衞門は驚く色は無かつた。おもむろに目を閉ぢおもむろに開いて、おもむろに怒氣を含んだ。

『殿が御不審とあるのぢやな。』

『いかにも。』

『ならば何も申さぬ。只今にも討手を頂きたい。』

『ならば眞實立退く所存であつたか。』

『御推量に任せる。』

『所存が無くば申開きがあらう。』

『恐かな事を言はるゝ。既にお疑ひが殿のお心にある。心の疑ひは口では解けぬ。およそ疑ひには實證は無い。解くにも證據は無い。解いても疑ひはお心に殘る。所詮は手前に行屆かぬ所があればこそ、お疑ひもかかつたのぢや。御奉公の懈怠と恐入る。御處分を仰ぐのが清しからう。討手、切腹いづれなりとも、謹愼して重ねての御沙汰を待たう。』

勘十郎は目付を見た。目付は默つたまゝに首肯いた。

『ならばこれで。』と、勘十郎は打切つた。

『手落ちはないか。』と、平太左衞門はうすら笑みを浮べた。『既にお疑

ひのかゝつた手前ぢや。隙を潜つて何時立退くやも知れぬ——とは思はぬか。この首討つて歸られい。』

『無用ぢや。これが手前なら隙は潜らぬ。』

勘十郎は監視も殘さず引きあげて、ありのまゝを復命した。

口約の隱居扶持

堀平太左衞門勝名は、間も無く用人に拔擢された。

一度擧用してからの重賢は、平太左を深く信用した。事毎に意見を求めて、宿弊釐正の實行に着手した。やがて平太左の器量手腕を見屆けた上で、知行を千五百石に進め、役料千五百石を加へて、三千石の大奉行に据ゑた。愈々國政を委ねたのである。

用人には竹原勘十郎を選んで。

『其方は猛氣が過ぎて、邪曲を責むるに鋭かつた。眼前用捨無く耻を與へる傾きがあつた。以前はさうであつたが、此頃は胸廣く和いでまゐつて、評判もよい。推擧する者も多い。我等も嬉しく思ふ。以前加增を遣はしたかつた節に其方辭退したゝめ、其儘に過ぎてをつたが、此度は受けねばならぬぞ。』

内意を諭して重賢はその加增の額を達しかけた。その刹那に、

『殿——』勘十郎は底強く蓋を打つた。『御加增は誰も望みまする。しかしながら私は殿の御繼統の初めよりお側に奉公、いつもお話相手を致しました。何事を申上げたかは殿は御存じながら、よそ目には御寵愛に甘えて、他を讒訴するか、よからぬ事をお勸め申すか、我慾を願ふかとも見えたでござりませう。私の口を疑ひ、或ひは恐れる者も有つたかと存じます。それ故御加增は此前にも辭退致しました。此度とても同樣にござりまする。』

『此度は事柄がちがふ。其方が推薦した平太左衞門が、其方の見た目狂はず、一國無双の人材であつたのぢや。賢者を推擧する者を其賢者より重んずるのは古法にもある事ぞ。』

『さやうには私は思へませぬ。賢者が大祿を給はる時には誰も目をつけて、愈々尊敬致しませうが、無能者への御加增は誰も目をつけて嘲みの種と致しませう。それは恐れませぬが私、心に耻ぢまする。』

『いぢけた事を申す。罪あれば罰し功は賞する。我等の賞罰に曇りはない筈ぢや。』

『この勘十郎に何てがらがござりましたか。御代々食祿を頂く御恩を思ひ、見聞の事柄をありの儘にお耳に入れたまで、嘘、詐を申さなんだまで、當然の事。なみの御奉公にござります。殿。勘十郎めは御褒美負けは厭やでござる。』

『ならばえこひいきの加增と申すか。』

『申さねばなりませぬ。』

『しかと然うか、盲恩賞か。』

『不當の恩賞、金輪際お受けは致しませぬ。』

『たはけ者が。』

重賢は叱つた。だが憎めない辭退である。

『それほど嫌ふなら加增は取止める。代りに何ぞ望め。』

『思ひつきませぬ。』

『望め。』

『有難く存じまする。過分の御仁愛に甘えて、勘十郎め只今、したゝか慾が出てまゐりました。おはづかしうござりまする。』

『人にもよる。其方の慾なら大きうふくらめて出せ。』

『只今考へまするに、大功のある者は重賞を頂き大身富貴となりまするが、その器量は二代三代とは續きませぬ。子孫にはよく馬鹿者が出まする。まして私は只今も殿が仰せられた通りのたはけ者でござる。』

『う。』重賢はあやふく噴飯さうとした。

だが勘十郎は眞面目である。

『たはけ者の私の子孫は輪をかけて、大たはけとならうも知れませぬ。知行も召しあげられ路頭に迷うたなら何と致しませう。若し私が長壽にて百歳にもなり、養うてくれる働きが子孫に無き節には、殿。その時には私へ隱居の御扶持を頂きたうござる。』

『程の遠い願ひぢやな。』

『どうやら私は百歳までも生きさうにござりまする。』

『我等はそれまで生きさうもないぞ。』

『どうぞ御長壽なされて、只今の願ひをかなへて下され。』

『よし／＼。その時には隱居料五十人扶持を必ず遣はさう。』重賢は可笑しげに約束した。

恩賞はおそろしく延期となつた。

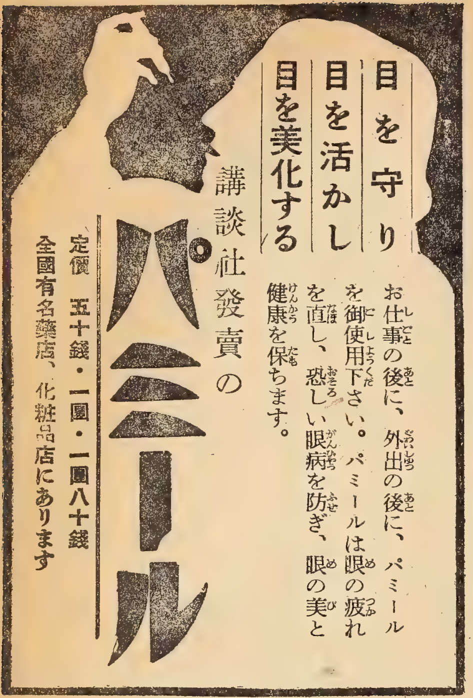
窮乏危急であつた細川家の財政も、重賢の奮勵、制度改革、平太左衞門の善政、その他の人物の登用によつて、やうやく順境に立直つた。

重賢は稀なる賢君として、肥後の鳳凰と世間に傳稱された。平太左は中老を經て家老に進み、本知三千五百石の大身となつた。

しかし竹原勘十郎玄路は、用人として內務の奉公にも剛直の諫言にも、功勞は多かつたのであるが、他は認めても自身は首を振つた。晩年までには幾度か、加增の內諭が主君からあつたが、前言を固執して受けなかつた。

たゞ直言の奉公に滿足して、天明五年六十八歲の主君が、その十月に卒去した時、百歲の主君を見ぬ哀しみには沈んだが、口約の隱居扶持の立消えには未練は無かつたのである。

（をはり）



○新らしい生活のために、奢侈贅澤品をやめませう。

脂肪顔の悩みを去り色白の清々しい若肌になる天然洗粉

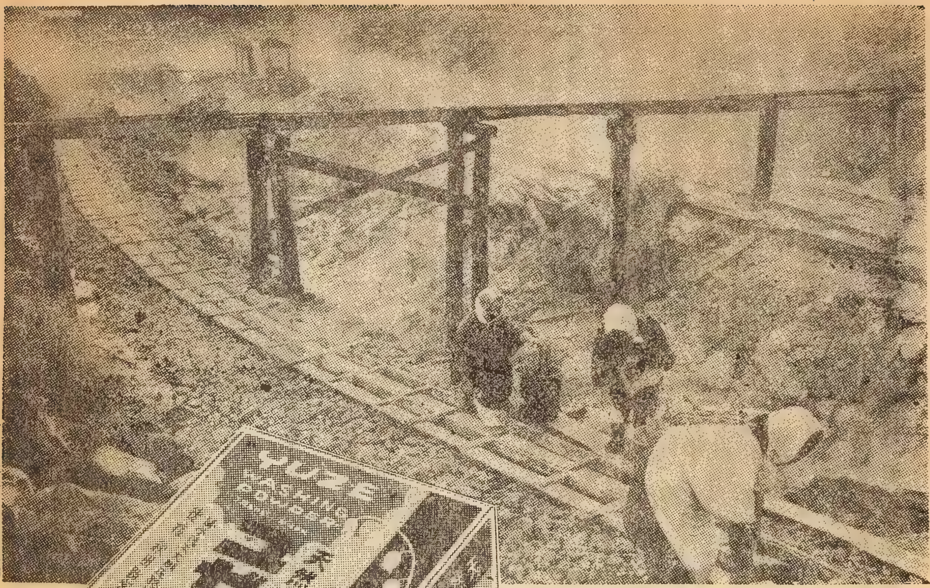
◇美人郷から皆様へ◇

清楚なそしていつも垢抜けした美しいお肌を保つ上に、一番障害となるのは、何んと云つても脂肪顔の悩みです。鼻のまはりや額の邊が不氣味に脂肪ぎつて來るのでは、どんなに素晴らしいお化粧でもたまるものではありません。それに脂肪性の方は、所謂『脂肪焼け』と云つてお肌が鉛色に光り、それが秋になつても治らず一層悩まされます。

それには先づ何よりも洗顔をまめになさるのが一番よいのですが、然しこの脂肪性の方は何うした譯か非常に荒れ易いのです。脂肪性で荒れ易いと申しますと、一見大變に反對のやうですが、然しそれは實際なので、從つて、無闇に質の惡い石鹸や洗粉で、一日に何回も洗顔すると、ズン〳〵肌が荒れて肌目が荒くなり、小皺やたるみが殖えて、めつきり衰えが、眼立つて來ますが、斯うした脂肪性の方は、絶對に肌の荒れない軟性の『コロイド洗粉』として今大評判の、秋田の美人郷特産『天然ユゼ洗粉』で洗顔なさいませ。一日に何回洗顔されてもこの洗粉だけは絶對に肌荒れの心配がないと云ふ今までに類のない軟性洗粉で、それは從來の製品とは全く異つた純粹のコロイド洗粉だからです。

この『コロイド』と云ふのは、全成分が顯微鏡で五百倍に擴大しなければ見えないと云ふ非常に細かな微粒子のことで、斯う云ふ特別の分子から成り立つてゐる洗粉は、世界中にも全くないので、『ユゼ洗粉』が唯一つ有るだけです。ユゼ洗粉で洗顔すると、脂肪顔の悩みは實に氣持ちよく解消し、サラ〳〵とした爽快感が得られ、而もお肌はいつも艶々とした若肌を保ち、日焼けを去り、垢抜けした色白の美しいお肌となつて、いつも朗かな氣分で仕事にいそしむ事が出來ます。

最近は薄化粧による清楚な美顔法が尊ばれるやうになつて、地肌そのものを生かす新工夫が要望される時代なのですから、洗顔法こそは美顔の土臺であり基礎であります關係上、斯うした軟性の極上品を撰定して常用なさる事が最も望ましいのです。



全國の女子青年團の皆様や、女學校のクラスの方々が團體で『ユゼ洗粉』を指名され御愛用になれてゐるところが最近非常に増加して來ましたが、つまりこれは時局柄何も彼も清楚本位の美顔法が浸潤して來た結果で、誠に喜ばしいことです。

『ユゼ洗粉』は秋田縣鹿角郡湯瀬の特産品で、原料は美人郷『玉川』の溫泉の中から採集される『天然コロイド』でありますから人工を加へることなく初めから全くの眞正コロイドなのでありまして、日本中こゝだけしか産出しない特産品なのです。從つて、村の郷土産業として村役場後援の下に企業化して賣り出した製品だけに、何も彼も實質本位でお値段もお安く、殊に奥羽アルプスのリリバレー(谷間の百合)の芳香を配合して、一層その魅力を發揮させ美人郷の名と共にどこまでも親める感觸のよい洗粉に造られた、文字通り天下一品の洗粉です。どうぞ是非本品の御愛用により、脂肪顔の悩みを忘れ、清々しい美肌になつて下さいませ。

お値段は五十錢、徳用八十錢の二種で、全國有名藥店化粧品店デパートにありますが、萬一品切の時は東京市麻布區霞町二十二番地ユゼ商會(振替東京六七四番)又は東京市小石川區音羽町三丁目十九番地大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九番)へ御申込みになれば直ぐ御送り致します。送料は二個までが內地十錢、海外四十二錢で御座います。

將棋上達の秘訣

勘所の摑み方

——筋違ひ角の攻擊法——

八段 花田長太郎

前項では我流戰法の一ッとして『金開き』の攻擊法を研究しましたが、今月號では同じく我流『筋違ひ角』の攻擊法を説明することにします。

『戰譜』

七六歩、三四歩、二六歩、八八角ナル、同銀、六五角、五八金、七六角、七八金、三二金……(第一圖面)

『説明』

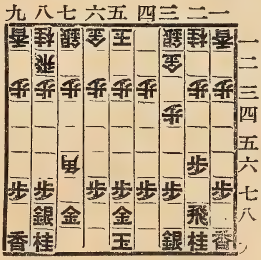
抑々『筋違ひ角』とは如何なる戰法を言ふか? 角を四五又は六五へ打つ奇襲の戰法を言ふのです。(普通角は五五の位に相通ずる様に打つ、例へば六六角とか四六角とか)。

次ぎに『筋違ひ角』戰法の勘所は何か? 最初に一歩得をしてその歩を以て種々作戰しようとの奇道戰法です。

ですから譜の様に直ちに角の交換から、六五角打と所謂筋違ひに角を打つたのです。その結果として後手方目的通りに一歩得する局面となりました。

第一圖面(後手三二金まで)

先手 持駒 角



後手 持駒 歩

『戰譜』

四八銀、四四歩、四六歩、二二銀、四七銀、三三銀、五六銀、五四角、六六歩、五二金、七七銀、六二銀、六五歩、四一玉、六九玉、八四歩、六七金右、八五歩、六六金……(第二圖面)先手方よし。

『説明』

『筋違ひ角』攻擊に忘れてはならない勘所があります。それは——

筋違ひ筋に飛車先を突くな

と言ふことです。その實例として、四八銀と締るかはりに試みに二五歩と突き出してみませう。

◆誤つた攻擊法

二五歩、五四角、二四歩、三三金、二三歩ナル、二七歩、三八飛、二三金、三六歩、三三金、五六歩、六四歩、七七銀、二二飛、六六銀、二八歩ナル、同飛、二六歩、三八銀、三六角……(變化の甲圖)後手方よし。

大體敵が奇襲の戰法を採つて來た場合は、それに釣り込まれず自分は正しくじつくり駒組して徐々に攻擊してゆくといふ心得が肝要です。右の二五歩の攻擊法も敵の急戰に歩調を亂して、二四歩突きをあせつたためまんまと敵にしてやられる結果になつたのであります。

變化の甲圖(後手三六角まで)

先手 持駒 角歩歩

後手 持駒 歩

では、飛車先の前を突かずどう指したならよいか! それは譜にあるとほりに、まづ自陣の整備を嚴重にすることです。それから徐々に敵の攻擊力の中心、筋違ひ角に壓迫を加へてゆくことであります。

即ち、四八銀は陣容を引締めると同時に敵角壓迫の目的も持つてゐます。

と敵も四四歩と突き出し四三角引の含み。この角としては四三角と直り、そして敵の八、九兩筋を狙ふことが最も賢明なる方法であります。

先手方は着實に徐ろに銀を捌いてゆきます。四六歩、三二銀、四七銀、三三銀、五六銀……この五六銀の處他に

第二圖面（先手六六金まで）

五六歩と突く變化の手段もありますが、それは別に說明いたします。

こゝで後手方は敵の四八飛廻りに備へて五四角と引き、と先手方は六六歩、五二金、七七銀、六二銀、六五歩……敵角の活動の餘地を無からしめました。かうして敵角をジリ〳〵と逼ひつめ、以下自分の金、銀を自在に捌き、有利な地位が占められる譯であります。

變化の戰法

前項で五六銀と上つた處五六歩と突き出したらどんな結果になりませう？

『戰譜』

五六歩、六二銀、三六歩、四一玉、七七銀、四三角、五五歩、八四歩、五六銀、八五歩、六六歩、五二金、六九玉、三一玉……（變化のA圖）

『說明』

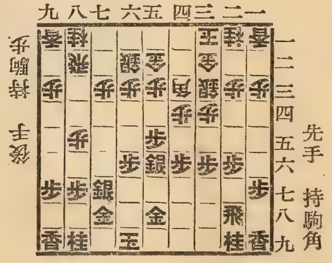
この五六歩の意味は模樣を大きく採り、全體的に敵を壓迫してゆく方法であります。この意味から五六歩、六二銀の時三六歩と突いて置きます。これは敵の三五歩を防遏する一方、三七桂と跳ねる含みであります。

四一玉、七七銀、四三角、五五歩……

先手方は一分の隙もなくジリ〳〵と敵角を壓迫してゆきます。こゝで後手方八四歩と突きました。これは適宜の處置でありまして、八四歩の處五二金なら五六銀、八四歩、四八飛、と角頭を猛襲されます。即ち、八四歩は早く八四飛と浮飛となる用意なのです。

五六銀、八五歩、六六歩……これは前にも述べた樣に角道遮斷の目的であつて、五二金、六九玉、三一玉……これから愈〻決戰が開始されます。

變化のA圖面（後手三一玉まで）



『戰譜』

四八飛、八四飛、六五歩、一四歩、六七金右、一五歩、六六角、八二飛、七六銀、七四歩、四五歩、同歩、三五歩、同歩、五四歩、同歩、四五銀……（變化のB圖）先手よし。

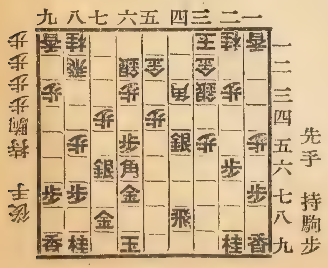
『說明』

戰鬪開始――敵の角頭を狙つて、四八飛、これこそ敵の最弱點です。と敵も防禦の八四飛、次ぎに六五歩と突くのが肝所で――この六五歩を怠つてゐると、九四歩、九六歩、九五歩、同歩、九八歩、同香、八六歩、同銀、同飛、同歩、九八角ナル……とされて先手方面白くありません。これで六五歩の角道遮斷が如何に重要か判つたでせう。

一四歩、六七金右、一五歩、六六角……この角打も攻擊の肝所の一つ、即ち敵飛を擊退すると同時に、これが四筋破壞の原動力となるのであります。

八二飛、七六銀……この銀は意味深長、それは五六銀は早晩四筋攻擊のために六筋の守りが薄弱になります。その時の用意。七四歩の處八六歩も考へられますが、八六歩なら同步、同飛、七九玉、八二飛、八四歩、……次ぎに八三銀打で飛車の捕獲となるのです。以下棋譜の如く指し進めば、奇襲『筋違ひ角』の戰法も何の其の見事これを粉碎することが出來るのであります。

變化のB圖（先手四五銀まで）



亞細亞の鬼

大下宇陀児

嶺田弘 画

キングレコード

9月新譜

傑作盤ぞろひ

製造發賣　大日本雄辯會講談社

邦樂

童謠

南京よいとこ
お神輿ワッショイ
幼稚園行進曲
JOAKうたのおけいこ　お山でホーイ

小澤美枝子　飯持惠子　秋田喜美子　大塚百合子　高安貞子　金子のぶ子　山元淳子　井上尚子　中根庸子　飯持惠子　小澤美枝子

繪本式アルバム入
二枚一組（八吋盤）
一圓七十錢

朝日新聞社撰定

興亞行進曲

永田絃次郎　長門美保

行進曲『興亞』　陸軍軍樂隊

流行歌

唄ふ松島詩子さん

廣東の踊子

松島詩子

絶讃の『上海の踊り子』の第二部作、細川潤一會心の傑作。第一部より數等優つた曲と唄。凄い評判です。

（片面）

黄昏の南海

林伊佐緒

黄昏せまる南の海の情緒を巧みに現した名曲、林伊佐緒得意のルムバ調。

愛國流行歌

武勳赫々歸還した　近衛八郎氏

續あゝ我が戰友

近衛八郎

今事變が生んだ不朽の名作『あゝ我が戰友』の近衛八郎が、滿三ケ年の戰ひの庭より歸還第一聲。感激の名曲です。

（片面）

花嫁軍歌

三門順子

主題歌

松竹大船映畫『若草』

若草の歌　林伊佐緒　佐々木郁子

夢みる乙女　横山郁子

歌謠物語

富町京之助脚色

南京の花賣娘　靜田錦波　（二枚一組　三・四〇）

俗曲

滿洲ぶし　直代　尺八、三味線、ギター、ピアノ入

白頭山ぶし　直代　尺八、三味線入

(1.70)

漫談

オッサンの國定忠次　高勢實乘

(1.35)

キングレコード

既發賣傑作盤

（戰友三部作）
- 涙の戰友 樋口靜雄
- 若い戰友 筑波高
- 街の戰友 兒玉好雄
- 樂しき明日 明日待子
- 重い泥靴 筑波高
- 父なきあと 松島詩子
- 南京の花賣娘 岡晴夫
- 廣東の花賣娘 岡晴夫
- 上海の花賣娘 岡晴夫
- 國境に陽は落ちて 樋口靜雄
- 上海の踊り子 松島詩子
- 宮本武藏の唄 樋口靜雄
- 出征兵士を送る歌 キング歌手總出演
- 紀元二千六百年 永田・長門
- 愛馬進軍歌 永田・長門
- 愛國行進曲 永田・長門

日本テレフンケン愛好家協會

世界序曲名盤集

第二輯 豫約募集

選曲委員

堀内敬三氏 村田武雄氏 山根銀二氏
大田黒元雄氏 牛山充氏 藤田不二氏
柿沼太郎氏 野村光一氏 青木謙幸氏
中村善吉氏 あらえびす氏 有坂愛彦氏

- ▲歌劇『セビリヤの理髪師』序曲 ロッシーニ曲
- ▲喜歌劇『ジプシー男爵』序曲 ヨハン・シュトラウス曲
- ▲歌劇『椿姫』第一幕前奏曲 第三幕前奏曲 ヴェルディ曲
- ▲序曲『輕騎兵』 スッペ曲
- ▲歌劇『ウインザーの陽氣な女房達』序曲 ニコライ曲
- ▲歌劇『カルメン』第一幕前奏曲 第三幕前奏曲 ビゼー曲

規定

募集期間―昭和十五年八月十五日―九月十五日迄
會費―毎月三圓三十錢也。六ケ月完了
申込金―申込と同時に三圓三十錢を拂込むこと。これは最終會費に充當致しますが、中途解約の場合には返戻いたしません。
レコード―十二吋盤（特別レーベル）六枚。毎月一枚宛配附
配附―九月十五日より第一回分を申込順により配附。以後毎月一枚づつ。但し希望により全曲同時頒布の要に應じます。

特典―特製美麗アルバム及び解説書第一回配附盤と同時に贈呈します。

東洋永遠の平和を確立するため、自ら亞細亞の鬼と號しつゝ、國事に奔走してゐた間宮戻太郎は、その運動の手段が過激だつたため、一時捕へられて獄に下り、のち、その獄を脱走して行方不明になつてしまつた。

爾來十數年の歳月は夢と流れて――。

今や戻太郎の忘形見間宮和子は、美はしく明るい性格のお孃さんとなつた。さうしてこの和子を中心にして、疑問の女性園村夫人や、Ｚと自稱する怪人などが、何事か頻りと暗躍し出したのであつた。

この結果、歸還兵田代壯吉の經營する建築事務所のうちでは、身許不詳の一美人が慘殺されたし、壯吉が北支戰線で手に入れて來た、間宮和子幼少時代の寫眞が何者かのため奪はれたり、また再びその同じ寫眞が、當局を愚弄するが如くにして、和子のもとへ送り返されて來たりなどした。しかもこの直後、銀座裏の酒場バフースに於ては、掏摸の常習犯福井太一が、怪人Ｚの手によつて毒殺されるといふ事件が起つたのである。

當局の憤激、敏腕畑中警部補の活躍――。

當局は、太一毒殺事件からして端緒を掴み、漸く怪人Ｚだけを逮捕したが、調べて見ると怪人Ｚは呂愛淵と稱する支那人だつた。さうして呂愛淵は、太一毒殺の顚末だけ、兎も角自白したけれど、勿論まだ餘罪の見込み十分である。取調べに際して、果して彼はいかなる秘密を吐くことであらうか。

死美人の正體

押しが强いといふか圖々しいといふか。

先きに酒場バフースへ、外國婦人に變裝して行つた時と同じやうに、また今殊更に日本語が下手なふりをして見せて、答辯を拒否しようとしてゐる呂愛淵である。

が、もとよりこの男、日本へ來てから十數年になつてゐるといふ。やらせたら、大阪辯と東京辯との使ひ分けぐらゐはお茶の子で、俳句か川柳の一つぐらゐ、即座に作つて見せるかも知れない。

係官達は、忌々しく思つて舌打ちをした。

『オイ、呂愛淵――』

『へエ。』

『お前は、そんな白ばつくれたことをいつてゐて、しまひまでそれで押通せるつもりか。』

『へ、へ、へ、どうですかな。』

『どうですかなぢやない。日本の警察は、そんなに甘いものぢやないといふことを、よく辨へてゐるがいゝぞ。』

『へエ。』

『太い奴だ。その人を馬鹿にしたやうな顏附は何だ！』

腹を立てゝ、ピシャリと平手を見舞つたほどだが、呂愛淵は

蛙の面に水といつた顏附。まだニヤリ〳〵笑つてゐるといふ始末である。

係官達は、また彼を諭したり宥めたり。

『しかしな呂愛淵。お前も思ひのほか往生際が惡いぢやないか。奇術小屋の親方になつて、まんまと世間體を胡魔化してゐたり、女裝して堂々と銀座へ現れたり、なか〳〵お前は度胸のある奴だ。が、お前もそれだけの惡黨だつたら、年貢の納め時が來た時にや、もつと立派にするもんだぞ。』

――この時分に、例の田代壯吉と間宮和子とのもとへは、怪人Zの逮捕されたことが、無論もう當局からして通知されてゐる。

『和子さん。大快報ですよ。怪人Zがつかまりました！』

『よかつたわ。あたし、新宿の裏路地で、一度だけZの顏を見てゐますわ。時々、夢の中であの顏を見て、怖い思ひばかししてゐたんですもの。』

うち揃つて彼等は、當局へ出頭して來たのであつた。

來て見て、いろ〳〵Z逮捕の顚末を聞くと、何しろ酒場バフースでの太一殺しなどは、壯吉も和子も初耳である。彼等は今更にまた驚きを大きくし、

『あたし、何だかよけいに怖くなつて來た氣がするわ。一體この事件、どこまで行けば納まりがつくのでせう。厭なことや恐ろしいことが、この先にも、まだ澤山に起つて來るのではないでせうか。』

怯えた眼附で和子がそつと囁くのを、

『いや、心配しちやいけません。あなたは元氣でゐらつしやい。なアに、僕がついてゐるぢやありませんか。ハヽヽヽ。』

わざと冗談めかして壯吉が、快活に笑つて見せるのだつた。

彼等は當局と同樣に、イヤ、或は當局以上の熱心さをもつて、事件全體についての眞相が、早く明らかになればよいと思つてゐた。

それからのち、首を長くして、呂愛淵の取調べが進行するのを待つてゐた。

やがてしかし――。

往生際の惡さから、さん〳〵に當局を手間取らせはしたが、さすが不敵の呂愛淵も、既に太一を毒殺したことだけ自白してゐる。且又その太一が、はじめこの男の手先に使はれて、田代壯吉の懷中を狙ひ、例の問題の寫眞を奪はうとしたものであることも、十分にも早知り拔かれてゐる。

『どうだ！　もういゝ加減で觀念をせぬか。お前は間宮和子の寫眞をなぜあんなにしてまで欲しがつたのだ。それについて理由がないとはいはせんぞ。寫眞には、一體どんな意味があつたのだ。えゝ、オイ、呂愛淵！』

と根氣づくで責め立てられて、漸く參つてしまつたものらしい。

彼は、少しづつ從順になつた。

天邪鬼であつたり我儘をいつたりしなくなつた。それから遂にある日のこと、やはり寫眞のことを突つ込まれた時、どうした加減か急に喋べり出した。

『エヘ、ヽ、ヽ、どうも毎日御手數ですね。恐れ入りました。——イヤ、今日は折角だから、その寫眞のこと話しませうか。ありや、實は、もう要らなくなりました。私の方からは送り返した筈でしたがね、エヘ、ヽ、ヽ。』

『さうだつたな。——しかし、何故だ。あゝやつてはじめはひどく苦勞して手に入れた寫眞を、あとで要らなくなつたといふのは。』

『どうも、エヘ、ヽ、ヽ、困りましたな。勘違ひされると閉口ですよ。有りていのところは、はじめ寫眞を手に入れたのはこの私ぢやないのでして。』

『えッ！』

『嘘オいつてるのぢやござんせんよ。なるほど、私は掏摸の太一に吩咐けて、歸還兵の田代壯吉から、寫眞を奪はうとはしましたがね、こいつは御存じの通りで、あまりうまくは行かなかつたんです。結局、田代建築事務所へ忍び込んで、家探しをやらにやならぬといふことになつたんで。』

『判つてる。そこまでは判つてる。さういふわけだから、寫眞を手に入れたのは、お前だといふことになるではないか。』

『違ひますね——。えゝと、面倒臭いな。言つちまひませう。私は、あれぢや大損しました。實は、例の園村夫人に見事してやられてしまつたのです。』

『フーム。』

『私は、建築事務所の家探しをやらうと決心しました。そいから先づ、事務所の連中を、外へ誘き出す方策を樹て、いろ〳〵細工したんですが、この細工で、鎌倉の園村夫人の名前を使つてやりました。これも御承知の筈だが、園村夫人の名前で、田代壯吉を鎌倉まで呼び出したといふわけです。——ところが、こいつがひどく不味かつたんです。園村夫人が、自分の名を使はれたと知ると、早くも私が、建築事務所の家探しにとりかゝつたのだと氣がつきました。あの女ア、拔目のない奴です。鎌倉の海濱ホテルで田代壯吉に會つた直後、田代が東京へすぐに歸らないで愚圖

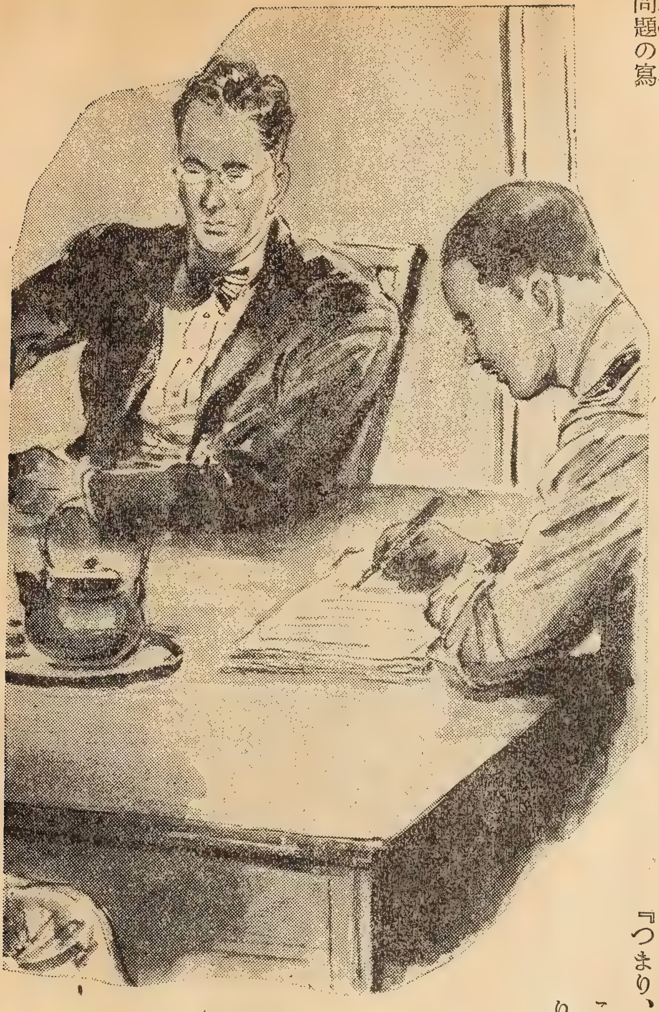
大陸の悪疫
マラリヤ熱の豫防と治療
本林の
キナエン丸
本劑の主藥は鹽酸キニーネにして間歇熱の特效藥なり
大阪市西區四ツ橋
本林丁子堂

ついてゐる間に、早くも東京へ自動車で來て、事務所へ乘り込んで來やがつたんです。』

『ほう。』

『こつちは、油斷してゐました。私と、私の相棒になつてゐたある女と二人で、事務所のうちを引つ搔き廻し、どうやら戸棚のアルバムから、問題の寫眞を見つけ出すことは出來たんだが、するとそこへ、園村夫人の一味がふいにやつて來たんです。一人ぢやありません。多勢一緒にです。――こつちは敵ひませんでした。私は逃げ、女は殺され、寫眞も向ふへ奪られてしまつたんです。』

『待て。――だとすると、あの事務所で殺されてゐた怪美人は……』



『つまり、今いつた私の相棒ですよ。えゝとこいつもついでに喋つちまふか、ありや、羅芳晨といつて支那の女です。最近に、ある秘密な手段で、日本へ密航して來た女ですよ。』

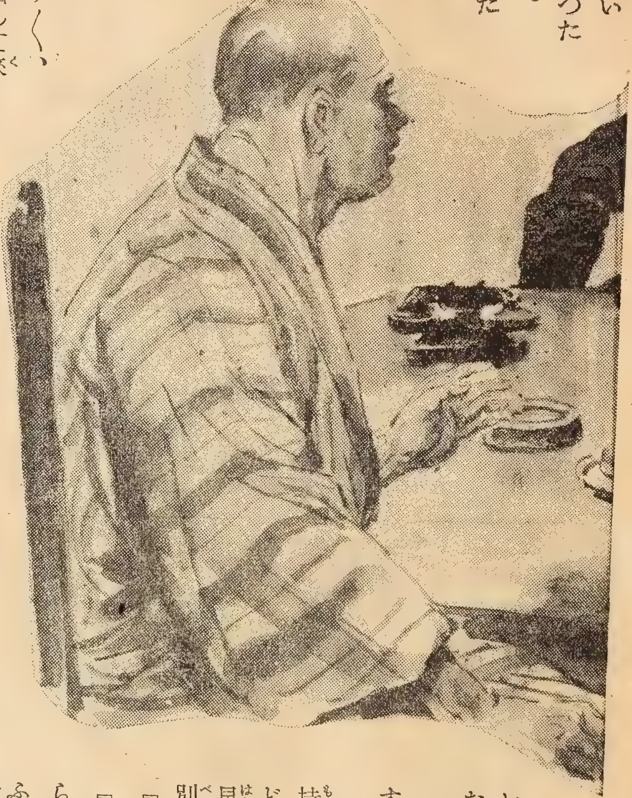
『フーム。』

係官達は、呻り聲を立てゝゐた。

あゝ今や漸くにして、謎の女性園村夫人のことについても、何かいろ／＼と判りかけて來た。さうしてあの死美人の正體が、やつとこゝで呑み込めた。調べても／＼、その身許が不明だつたのは無理もない。彼女は、密航して日本へ渡つて來てゐたもの

である羅芳晨といふ、支那の女だつたといふのである。

待ち焦れてゐた眞相が、今やだん／＼と明らかになりさうなので、呂愛淵の口から出る一つ一つの言葉は、何か貴重な寶石のやうなものが、コロリ／＼、眼の前へ轉がり出して來るやうな氣持だつた。さうして呂愛淵の方でも、一つ何か喋つたとなると、あとは總て聯絡のある事柄なだけに、續けて次を言はなくてはならぬといつた調子になり、半ば燒け糞な顏附をして、それからまた喋り出して行つた。



謎の日本人

『まアね、お判りでせう。あの寫眞を、はじめ手に入れたのが、私ぢやないつていふことは、あらましそんなやうなわけだつたんですがね。』

『よし。よく判つた。――が、それだとすると、寫眞はそれからどうしたんだ。』

『へエ、今もいつた通りで、園村夫人に持つて行かれてしまつたので、こつちはどうするもかうするもなかつたんです。早いとこ言ひますと、私と園村夫人とは別派なんで……』

『ウム。』

『つまり二派に別れて、あの寫眞をどちらかが早く手に入れようとしてゐたといふことなんですよ。それで、まんまと寫眞を奪られてしまふと、私は散々な體たらくです。どうも口惜しくて堪りません。それからは、仕返しをするつもりで、あの女のあとを付け廻しました。そしてそれが、あの新宿裏の事件になつたといふわけでしたよ。』

『なるほどな。ぢや、あれは、別派同志の鞘當てといつたやうなものか。』

『へヽエ、さうですその通りです。私があとを付け廻してゐた

らあの女が、間宮和子を誘拐しようとしてゐたので、橫から邪魔をしてやり、今度は寫眞ぢやない、寫眞の本人の間宮和子をこつちへ橫奪りしようとしたところ、そこへまたもう一つ邪魔が入りました。思ひもよらず田代壯吉が飛び出して來たから、園村夫人も逃げちやふし、私も雲を霞といふわけだつたんです。――そのあと警察ぢや私達をつかまへようといふので、馬鹿に大騷ぎをしてゐたやうですが、ところで寫眞は、それからずつと後になつて、園村夫人から私のところに、御叮嚀にも送り屆けて寄來しましたよ。』

『ほう。それはまたどうしてだ。』

『羅芳晨を殺してまで折角奪つて行つた寫眞だけれど、もう用がなくなつたんです。その寫眞で、目的の大體は達したんです。それで、私を揶揄ふつもりで、もう用のなくなつた寫眞を送つてよこしたわけなんですが、こいつを受取つて見たところで私の方も、もう寫眞には用がありません。ちよつとまア、警察を揶揄つてやらうといふ氣が出たものだから、よせばよかつたのに私の方でも、こいつをまた、間宮和子のところへ、送り返したといふわけなんで……』

事件の形は、次第にハッキリして來てゐる。

少なくとも、田代壯吉が北支から歸還して來て、掏摸に懷中を狙はれ出して以來起つた事柄については、その大體の筋道がどうやらこれで明らかになつてゐる。

もつとも、それだけの筋道でも、內容はかなり複雜だから、一試みにそのうちの重要な部分だけを、繰返して順序立てゝ見るならば、

一、呂愛淵と園村夫人とは、間宮和子幼少時代の寫眞を、田代壯吉から奪はうとした。

二、そのため呂愛淵は掏摸の福井太一を手先に使つて見たが失敗し、のち、支那から來てゐた羅芳晨と共に田代建築事務所へ忍び込んだところ、そこへ園村夫人の一味が來たゝめ、羅芳晨は殺されたし、問題の和子の寫眞は園村夫人に奪はれた。

三、次に園村夫人は、新宿で和子を誘拐しようと企て、それを呂愛淵が邪魔しようとした時に、田代壯吉が現はれて和子を救つた。

四、さうしてこの事件後、和子の寫眞は、園村夫人にとつても呂愛淵にとつても不用のものとなり、和子のもとへ送り返されて來たのであつたが、この時、掏摸の太一は呂愛淵に對して反抗的な態度に出て、當局へ何か密告する氣配が見えたので、呂愛淵はこれを毒殺してしまつた。

――と、いふやうなことになるのであつたが、さてしかし考へると、問題はまだ澤山に殘つてゐる。

第一、あとで不用になつたほどの和子の寫眞を、はじめは羅芳晨を殺してまで奪ひ合ひしたのだといふ、この根本の理由が何もまだ判つてゐない。係官は、容赦せず、その點をすぐ續

いて呂愛淵に詰問した。

さうして、も早やぶれかぶれ呂愛淵は、次のやうに說明し出した。

『へエ、なるほど。そこんとこが呑み込めないのは、もつともですよ。が、こりや、羅芳晨のことを詳しく話さねえと判らないんですよ。イヤ、それよりか、支那の匪賊のことについて、少しばかり知識が必要なんです。早い話、日本ぢや一口に、支那の匪賊つてことをいつてゐます。ところがその匪賊は、全體で六十萬はゐるでせう。さうしてそれが大體二色に分れてゐて、六十萬のうち二十萬が共產匪賊、あとの四十萬が、只の匪賊です。

『ほう。』

『ところで、今までも話のうちへ出ましたが、あの歸還兵の田代壯吉が、北支で討伐に行つたのは、この共產匪賊の一隊でした。〇〇の部落で殲滅された時に、こいつ等はひどく勇敢な抵抗をしたさうですが、これは共產軍の匪賊だつたせゐですよ。但し私はさういふことを、あとで羅芳晨から聞いて知つたのですがね。』

『フム。』

『羅芳晨は、ある紹介狀を持つて私のところを訪ねて來た女で、この女の話したところだと、今いつた共產匪賊の一隊に、實は只の無賴漢の癖に共產匪賊らしい顏をして、こつそり紛れ込んでゐた男があり、この男が、衞林圭といふ奴だつたさうです。』

『おゝ、さうか、衞林圭――』

『名前を御承知のやうだがその衞林圭といふ奴は、亂暴者で呑んだくれで、仕方のない奴だつたといふことです。が、こいつがなぜ共產匪賊のうちに入り込んでゐたかといふと、これは、共產匪賊のうちにもう一人、日本人が紛れ込んでゐたんだといひます。さうしてその日本人を、衞林圭は狙つてゐたのだといひます。』

『待て。そりや、聞き捨てにならんことだぞ。日本人が、共產匪賊の中に入つてゐるなんて、そんなことは有る筈がない。そりや何か間違ひぢやないか。』

『イエ、間違ひぢやありません。確かです。』

『フーム。證據か何かあることか。』

『證據つて別にありませんが、さうですね、やはり羅芳晨の話で判つてゐることがありますよ。何でもその日本人は、ある事情のもとに已むを得ず匪賊の中にゐたもので、むろん表向きは、劉芝宜とかいふ名を名乘つて、支那人に化けてゐたさうです。さうしてこの劉芝宜が、その時は日本軍のため、非常に役に立つことをしたさうです。』

『ほう。』

『はじめ、その匪賊部隊は、鐵道を破壞しようとしてゐました。が、劉はこれをひそかに日本の警備隊へ報知してやり、同時に

この匪賊が、どれだけの裝備を持ち、どれだけの人數から成立つてゐるか、これを詳しく知らせてやつたといひます。それからまた、あとで討伐隊がやつて來ると、匪賊は風を喰つて逃亡したが、劉は、匪賊の逃げて行く先きを、一々討伐隊に知らせました。ある時は、それとなく部落民に、自分達の行先きを話して置き、ある時は、民家の壁へ判じ繪を書いて、この判じ繪からして、匪賊の逃げた先きが、あとから來る日本の討伐隊には、すぐ判るやうにして置いたのだといひます。お蔭で、討伐隊は、索敵行動が樂だつたでせう。逃げても〳〵、あとを迷はずに追撃し、つひに例の〇〇の部落まで、匪賊を追ひ詰めてしまつたんだといひます。』

『………』

『でしかし、最後の部落へ辿りついた時に、匪賊隊でも氣がついて、劉の行動を怪しみ出し、結局劉を私刑に處してしまつたといふことまで判つてゐるんですが、但しこの日本人の本當の名前といふものは、どうも判つてゐないらしいんです。たゞまアそんなわけで、日本人に違ひないことだけハッキリしてゐるので……』

『よし。よく判つた。これは驚くべき話だが、その點はあとでまた調べる。——えゝと、そこでその日本人を、衞林圭が狙つたといふのは。』

『ヘエ、それは、その日本人が、間宮和子の寫眞を持つてゐたからです。』

『フーム。』

『日本人が、なぜそれを持つてゐたか、これは不思議にもわけが判りません。が、兎も角も、例の寫眞を持つてゐて、これを衞林圭が奪はうとしてゐたわけです。面白いことには、衞林圭は、そのことを羅芳晨から色仕掛で賴まれたのだといひます。惚れてゐたんでせう。寫眞を奪つて來さへすれば夫婦になるといふやうな約束で、衞林圭はこの共産匪賊に加擔し、さて、その日本人を絶えず狙つてゐたものらしいのです。——ところが、今もいつた通りで、遂にその日本人は、日本の討伐隊が愈々匪賊を攻撃し出した直後に、日本人であることが曝露したゝめ私刑にされ、この時衞林圭は早くもその日本人の穿いてゐた靴を奪つて逃げたさうです。といふのが、日本人はその寫眞を、靴の底に入れて隱してゐて、こいつを衞林圭は知つてゐたわけです。奴は、寫眞を手に入れてから喜んだことでせう。すぐ部落を逃げようとすると、どつこい、日本の討伐軍が來てゐる。これで遂に戰死してしまひ、さてそのあとで田代壯吉が、衞林圭の手に握りしめられてゐた、この寫眞を見つけたといふことになるんです。』

『なるほどな。それでどうやら、寫眞の經路や衞林圭のことはよく判つたやうだ。——が、そこで寫眞が、どうしてそんなに必要だつたのか……』

『羅芳晨の話だと、それは、間宮和子を探し出して、支那へ連れて行くためだといふことでした。』

『ほう。』

『斷つときますが、間宮和子をなぜ支那へ連れて行くのか、その理由は羅芳晨が話さなかつたので、私もよく知らないのです。しかし、間宮和子を支那へ連れて行くことは絶對に必要だといつてゐました。さ

うしてしかも困つたことには、はじめ羅芳晨は、間宮和子の名前さへ知らなかつたんです。』

『といふと?』

『和子の幼少時代の寫眞だけがあつて、名前も判らず、どこに住んでゐるのかもハッキリしない。たゞまア、東京の麹町邊にゐるといふだけのことで、しかも和子を探し出さなくちやならなかつたんです。勢ひ、寫眞が必要になつて來ました。その寫眞には、和子の住んでゐる家が一緒に寫つてゐる。だから、寫眞を見て、それと同じ家を麹町で探し出したらいゝといふことになつたんです。つまり、和子を探し出すための手懸りとして、あの寫眞にはひどく重大な値打があつたんです。』

『ウーム、判つた。ぢや、あとでそれが要らなくなつたのは……』

『お察しの通りです。寫眞が手に入ると、園村夫人が、すぐにもう和子の家を探し出しました。それから、名前もよく判り、和子を支那へ連れて行く段取りとして、例の新宿での誘拐事件となりました。――が、もう寫眞は、必要がなくなりましたからね。』

物語を、はじめからよく記憶してゐる讀者がをられたとしたら、今や、一つ〳〵強く思ひ當ることがあるに違ひない。

あの時の壯烈な匪賊殲滅戰の蔭には、かくもいろ〳〵と錯綜した秘密が横はつてゐたのである。あゝ、しかしながら、中でも特に注意すべきことは、あの匪賊の中に、氏名不詳の一日本人がゐて、討伐隊のため、いろ〳〵と便宜を計つたといふことである。その日本人は、

腸疾患にビオフェルミン

強力乳酸菌を主劑とし之に糖化菌を配せる藥劑にして腸内に於て有害細菌を死滅せしめ、腐敗及び異常醱酵を防止するほか、腸機能を正常ならしめ、消化を促進し、便通を調整するにより、腸疾患治療と豫防に賞用せらる。

傳染性腸疾患たる腸チフス、赤痢、疫痢の豫防保健にも好適す

【適應症】腸カタル、下痢、常習便秘、鼓腸、小兒下痢、乳兒綠便、消化不良、脚氣のほか動脈硬化症老衰症等の治療と豫防。

粉末と錠劑、各地藥店にあり

發賣元 大阪市道修町 株式會社武田長兵衛商店

製造元 神戸市二番町 株式會社神戸衛生實驗所

のちに匪賊のため私刑に處せられてゐる。この日本人は、果して何者であつたのだらうか。

呂愛淵は、だん／＼そこまで喋つて來て、しまひには、喋り草臥れたといふ顔附だつた。

彼は、最後につけ加へた。

『……イヤ、しかし、これでもう私も、知つてるだけは言つちまひましたよ。もう話すことはありません。――但し、もう一つ園村夫人のことは、警察の旦那方も、これから注意しなくちやいけませんね。あれはいけない女です。何も用がなくてホテルへなんか泊り込んでゐて、外人と

交際があります。蔭で外人が糸を操つてゐるに違ひないです。そもそも、私とは別派になつて、間宮和子を誘拐しようとしてゐたのが、その外人の差金なんでせう。もつとも、それがどういふ外人だか、イヤ果して外人が關係してゐるかどうか、そこは私も確かめちやない。が、早いとこ言へば、私は本來大して關係がなく、たゞ羅芳長が、金を持つて來て賴んだから、一緒に仕事のお手傳ひをしたまでだが、どうやら園村夫人も同樣で外人かなんかのお先棒に擔がれ、いろ／＼働いてゐるんだと思ふのです。あんた方も私だけをつかまへたつて、大したお手柄ぢやござんすまい。せい／＼まア、あの女にしてやられない用心が肝心ですね。エヘ、、、。』

言はれるまでもない。

當局としては、今度こそ園村夫人を逮捕しなければならない。

呂愛淵は、なるほどいろい

ろ知つてゐたが、羅芳晨にしろ園村夫人にしろ、間宮和子を誘拐して支那まで連れて行くのが目的だつたといふのに、その目的についての理由は何も知らなかつた。これを判らせるためには、園村夫人をつかまへることが、一段と必要になつて來てゐるのだつた。

だが、それは、果してうまく行くかどうか――。

戰友

もう、夏のはじめだつた。

桐の梢を透かして、青い陽ざしが縁に落ちてゐる。

狹い縁先に坐つて、和子はパチリと菖蒲を切つた。それから、首をちよつと傾げて花の向きを眺め、指先きに水を掬つて莖を撓めた。

瀨戸の水差し、鋏、青銅の薄端が、やゝ雜然としてそこに置いてある。和子は、床の間の花を生けてゐるのだつた。

どこかで、飛行機の音がする。

檐先きを見上げて、ぢつと雲のあるあたりを眺めてゐると、

『和子さん――』

奧で、母親の聲がした。

『はい。』

『あなたね、お花の餘つたのあるでせう。』

『えゝ、ありますわ。』

『持つて來て下さい。佛樣へ供へるのですから。』

『はい。』

一瞬、暗い影が顏を横切つたが、和子は默つて菖蒲の餘りを手にもつて奧へ立つて行く。

近頃は、和子の母親は、一日にいく度となく佛壇の前へ行つて、ぢつと坐つてゐるのが常だつた。

無理もないが、當局での呂愛淵の申立てがあつて以來、こゝの家の親子にとつては、もうハッキリと判つてしまつたことがあつた。共産匪賊のうちに紛れこんでゐた日本人のことが、他人には謎であらうとも、この親子にとつては謎でない。その日本人は、和子の寫眞を靴の

底へ隠して持つてゐたといふ。それこそ、他人ではない、間宮戻太郎であるとしか思へないのだつた。

刑餘の罪人戻太郎は、も早、死んでゐるのである。しかも、匪賊の手で私刑を加へられたのである。

十數年、消息のない良人の行方を案じ暮らして來た妻は、改めて深い嘆きの底へぶちこまれた。十數年、いつかは父に會ふ日もあらうと、それを樂しみにして來た子は今やその希望を斷ち切つてしまふよりほかなかつた。

『でもね、母さんは、もう泣くまいと決心しました。お父樣が、どんなに非業な最期を遂げられたことかと思ふと、母さんは、自分自身の血や肉を、ギリ〳〵と斬り苛なまれるやうな思ひなの。だけど、我慢します。我慢しなくちやならないのです。むろんお父樣は、何か深い事情があつて、そんな匪賊の仲間に入つてをられたのでせうけれど、ともかくお父樣は、討伐隊のためいろ〳〵と便宜を與へて、そのあと死んで下すつたのです。痛ましくても、日本人らしい立派な御最期だつたでせう。軍人と同じことです。さうして軍人のことを考へたら、母さんが泣いては申譯ありません。お父樣よりもつと立派な働らきをなすつた軍人が、澤山に戰死されてゐるのですから。』

母親は我子に言ひ諭すやうにしながら、しかしやはり涙を齒で喰ひ縛つた。

さうして、毎日、佛壇の前へ行つて坐つてゐるのだつた。

――母の部屋を出て來ると、和子はまた縁へ坐り、ボンヤリ考へ込んだ。

虻が、光つて庭を飛ぶ。

どこかで、紙芝居屋さんの聲がする。

さうして、ふいに、玄關のベルが鳴つた。

立つて行くと、

『あら――』

壯吉である。

壯吉は、なぜか、ひどく元氣さうな顔附をして、急いで來たのだらう、額の汗をふきながら、そこに立つてゐるのだつた。

『和子さん。今日はね、ニユウスを持つて來ましたよ。』

『まア。』

『といふのはですね。實は僕、もつと早く伺ふつもりだつたんです。仕事を片付け事務所を出ると、バスの停留所でひよこりと珍らしい奴に會ひました。出征中、同じ分隊にゐて死線を一緒に越えた奴です。名前は野本成美つていつて女のやうな名前だが、隊ぢや、重爆つていふ綽名を進呈してゐたくらゐのでつかい男です。お互ひに、やア〳〵といふわけで、嬉しかつたですよ。二人で、抱き合ひたいくらゐでした。お互ひの健康と元氣とを祝して乾盃しようといふことになつたが、時局ですね、眞晝間祝盃も上げられん。今日ばかりは、非常時が恨めしくなりました。口惜しいなアつていつて、泣く〳〵紅茶飲みに行きました。この氣持、解りますか。』

『えゝ、解るわ。嬉しかつたでせうね。』

『紅茶飲んで二時間、粘つたです。腹がガブついたが話が盡きない。戰地のことを思ひ出し、死んだ戰友のことを言ひ、今度一緒に九段へ

お參りしようと約束しました。それから、奴は、深川の大きな材木屋の伜で素晴らしい金持です。支那へ今度は背廣着て行つて、何か事業をやりたいなんていふし、こつちは、いろんなこと話してゐるうち、つい、例の事件のことが出てしまひました。和子さんのことも、ついでに話しちやひましたよ』

『あらア……』

『構はんです。死線を越えた仲だと、何でも話せるのです。が、そこで事件の話をしてゐると、例の呂愛淵のことやなんか今度は當局が新聞にも發表させなかつたから、奴はみな初耳で、とても面白がりました。そしてしかも、途中でとても耳寄りなことを言ひ出しました。問題の匪賊と鬪つた時のことです。奴は、あとで部落へ入つた時、非常に不思議な光景を見たんだといひます。』

『……』

『ある民家へ入つて見ると、そこには敵の主力がゐたらしくて、多數の死體が遺棄してあつたが、その中に、奇妙な死體が一つあつたのださうです。奴のいふところだと、その死體は、チエコの機銃に身體を縛りつけられてゐて、どうやら日本軍の彈丸でやられたのでなく、日本軍がそこへ突入する前、匪賊自身の手で殺されたらしいことが判つたので、はじめは部隊長が、變な死體だといつて氣にしました。もつとも、氣にしたつきり、あとはそのまゝになつたさうですが、その死體は、しかも新しい上等の靴を穿いてゐて、その片方の靴が脫がされてゐたんだといひます。あゝ、和子さん。顏が蒼くなりましたね』

『あたし……』

『イヤ、しまひまで聞いて下さい。――で、これは、勿論、私にとつても、ドキッとするやうな話でした。呂愛淵の申立て通りのことが事實あつたのです。それこそ、あなたのお父さんに違ひないと思ひました。それから、こつちも猶詳しく、あなたのお父さんのことを話して見たが、するとその男が、死體の顏をまだ多少は見覺えてゐる氣がする、何しろ變つた死體だつたから、印象に殘つてゐるといふんでした。

(小說) 淨らかな虹　倉田百三著

新政治體制下、農村の行くべき道

農本主義を信奉して農村の改革にひたむきな熱情を寄せる理想家肌の一青年を主人公とし、其の眼によつて自由主義社會を完膚無き迄に批判させ乍ら、人間性の眞實の姿は結局農本に之を求むべし、と結び、著者の高邁な理想を描く。新政治體制下、農村の向ふべき所を明示せる農民文學の雄篇。(定價一・六〇、送料〇・一〇)

東京市小石川區音羽町
大日本雄辯會講談社發行
(振替東京三九三〇番)

そして、顏の大體の輪廓とか特徴とか、さういふものを訊いて見ると、何だか僕、妙な氣がして來ましてね。――オヤ、お母さんも出ていらつしやつた。あ、今日は。』

母親は、襖の蔭から、身を乘り出して來てゐた。壯吉の聲が奥まで通る。ぢつとしてはゐられなかつたのである。

『田代さん、まアよく……』

『あゝ、話を聞いてをられたんですね。が、まア待つて下さい。僕も、まだ斷言は出來ないんです。あなた方を、喜ばせたいとは思ふけれど……』

『えゝ、大丈夫です。――それで、その方、何と仰有つたんですか。』

『まア、一口にいへば、結局は和子さんのお父さんと、そこで匪賊に殺されてゐた人物とは、どうも顏が違ふといふ氣がするのですよ。但し、重爆――ぢやない野本は、こつちの顏を知らないし、僕は僕でその死體を見てゐない。ハッキリしたことは判らないけれど、ともかく話し合つて見て、二人共、こりやもつと吟味をする必要があるといふことになりました。お宅に、寫眞がありましたね。』

『えゝ……』

『どうも、この事件、寫眞にひどく緣があるので驚いてゐます。が、例の羽子板を抱いた和子さんの寫眞ぢやない。額にした和子さんのお父さんの寫眞です。あれを、僕借りて行きたいと思ふのです。いゝでせう。』

『構ひません。構ひませんとも。どうぞ。』

強い心、強い身體をつくる鍛錬の秋

兒童教育も新體制、課外讀物の使命愈々重大

可愛いお子様の將來のために眞劍な御檢討をお願ひいたします。

秋、新學期、勉強の好季節、それだけに、課外讀物の感化力は一そう絶大です。從つて子供の讀物も時局と

幼年倶樂部

◎勇ましい少年戰車兵の寫眞、幼年科學、飛行機の畫集、奇拔な動物の物語、感

『行つて、野本に見て貰ふのです。それが一番早いと思ひましてね。野本も、深川へ歸つて、僕を待つてゐてくれる筈ですし、それからあなた方も、どうですか、一緒に行きませんか。野本の話を聞いて見たいでせう。』

さう言はれなくとも、行かずにはをられない場合である。さすがに母親は、

『いゝでせうか知ら。私達までお伺ひしても。』

といつたが和子は、

『お母様つてば、痩我慢しなくてもいゝのよ、こんな時に――』

叱るやうにして母に答へた。

生けかけた菖蒲は、そのまゝ、手桶に突つ込んだ。

ハンドバッグが見付からない。――あつた、棚にあつた。パラソルは、……要らないわ。ハンケチ、ハンケチ、お母様、和子のハンケチ、どこいしまつちやつた？……ねえ、お母様、早くしてよ……ええ、何ですねえ和子さん……あなたこそ、顔はもういゝぢやないの。母さんは今、お父様の寫眞を包むもの、探してるんだもの……

麹町から深川まで。

焦る心を乗せてタクシーは走つた。

野本材木店――。

木場である。

がつしりした店構への、紺の暖簾に風が流れてゐる。

重爆事、野本成美は、壮吉のため、酒の用意をして待つてゐた。

ともに進まねばなりません。お子様方は容易ならぬ興亞日本の次代を背負はねばなりません。どんな難局も切り開いてすゝむ建設的な魂とたくましい智慧と勇氣とが絶對に必要です。今日それを養つておくと同時に、勉學に興味を與へ、大事な知識を注入し、學課の成績をも進め、立派な子供の育成を念願として、あくまで教育的に面白くと、親心をこめて苦心編輯するのが、講談社の子供雑誌です。ぜひ近所の書店で實物を御覽下さい。

心な親子の話、やさしく出來る兒童劇、そのほか繪やお話や、漫畫などいろいろ發表。

少年倶樂部

◎陸軍大臣賞と朝鮮總督賞に輝く當選作文をはじめ、近衞内閣の話、勇ましい荒鷲物語、愉快な話、感心な話、學校美談、その他いろいろの新計畫發表。

少女倶樂部

◎航空日を記念する感激紙芝居や竹田敏彦先生の戰線視察報告、大科學者ファブルの少年時代、自動車グラフなど、少女の心を淸め愉快に明るくする計畫澤山。

國つよくして、民はじめて幸福なり

子供の國策協力記事各誌にあり

新學期、雑誌週間

記念の十月號（九月九日前後發賣）

定價各五十錢（全國各地書店にあり）

發行所　大日本雄辯會講談社

講談社の繪本

可愛いお子様へのお土産、御褒美として理想的！各册五十錢!!

▲海の大畫報（附）海の面白ゐばなし
▲山中鹿之介（附）尼子十勇士
▲漫畫と軍國繪物語
▲辨慶と義經（附）子供銃後美談
▲蛤姫と鼠の嫁入（附）オトギエバナシ

▲漫畫とニコニコ學校
▲西郷隆盛（附）盡忠美談
▲孫悟空と八戒（附）頓智ばなし 智惠ばなし
▲漫畫と動物繪話
▲相撲畫報（附）相撲 面白繪話

此の外に、支那事變童謠童話、偉人英雄孝子孝女、子供知識繪手本など、様々の繪本が百數十種も發賣されて居ります。各地有名書店で販賣

講談社の繪本

『一緒に來て貰つた。これが和子さん、さうしてお母さんだ。』

『やア、それは、よく。――イヤ、田代君から、聞きました。さアどうぞ。』

さうして三人は、貯材池の水と鋸屑との匂ひがぷーんと來る奥の座敷へ通された。

野本成美は、なるほど大きな男である。

顔も、拳闘選手のやうに獰猛で、おまけに頬には戰地でうけた彈丸の痕がある。そして笑ふと、子供のやうな顔になつた。

『まア、挨拶はあとだ。寫眞を持つて來た。十年以上前の顔だが。』

『さうかね。ともかく……』

大きな手で戻太郎の寫眞を受け取り、それから野本は、明るい眼附だつた。

『ウム。』

『どうだい、野本君――』

『分隊長殿。こりや、違ひますよ。』

『違ふか！』

『違ふね。僕は、違ふと斷言する。この寫眞にある顔は、失禮だが相當に長い顔だ。例の死體は、確かにもつと丸い顔だつたと思ふ。』

『フム。』

『自慢ぢやないが、僕は大抵の人間、一度顔を見たら忘れやせん。ほかに能はないが、そのことだけ、よく人に賞められる。しかも、あれは印象が深い。』

『本當だね。』

『本當だ。』

和子は、『お母様！』といつた。

母親は、『有難うございました。』と思はずいつた。そしてハンケチを眼へ押しあてゝしまつた。

（つゞく）

吉川英治著 三國志

支那五千年の文化興亡の中に燦として輝く不滅の名作三國志は、巨匠吉川の筆に新しき生氣を放ち讀書子を熱狂せしむ、待望の第二卷出づ！

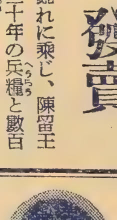
卷の二 群星の卷 いよ〳〵發賣

大評判の卷の一『桃園の卷』の後を受けて愈々卷の二。後漢の靈帝崩御後の亂れに乘じ、陳留王を皇帝に擁立し、自らは位人臣を極め、長安の郿塢城に美女八百を日夜侍らせ三十年の兵糧と數百萬の兵を擁して天下を狙ふ奸臣董卓、その寵將にして好色の豪傑呂布、宮庭の衰微を嘆ずる大臣王允、更に國の爲二八の乙女心を主人に捧げる絶世の美女貂蟬等々。猜疑、策略、不信、凡ゆる背德の亂世に關羽、張飛の兩豪傑を從へた、正義の鬪將劉玄德の活躍はいよ〳〵目覺しい。朝の勝利、夕に敗北、群雄豪傑興亡の歷史は展がる。

卷の一 桃園の卷 卷の二 群星の卷 發賣 以下續刊

一冊一圓二十錢（送料内地十錢、朝鮮、臺灣、樺太、南洋、滿洲、支那十二錢）

東京大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）



菊池寛

何でも面白く讀ませる點に於て、大衆作家中、吉川英治氏に及ぶ人はない。そのうるほひの多い文學的筆致と、あらゆる人物に、魂と熱情とを吹込む點に於ても、吉川氏は獨特の長技を持つてゐる。『三國志とは』、支那の大衆の間に於て日本の忠臣藏に匹敵するほど永久に人氣のある讀物である。そこに活躍する人物は今もなほ支那の大衆に親しまれてゐる。面白い讀物と云ふ以外支那の民族性を研究する意味から云つても一讀すべきものだと思ふ。

南を想ふ

西條八十

秋の渚にたたずみて
歸る燕を眺むれば、

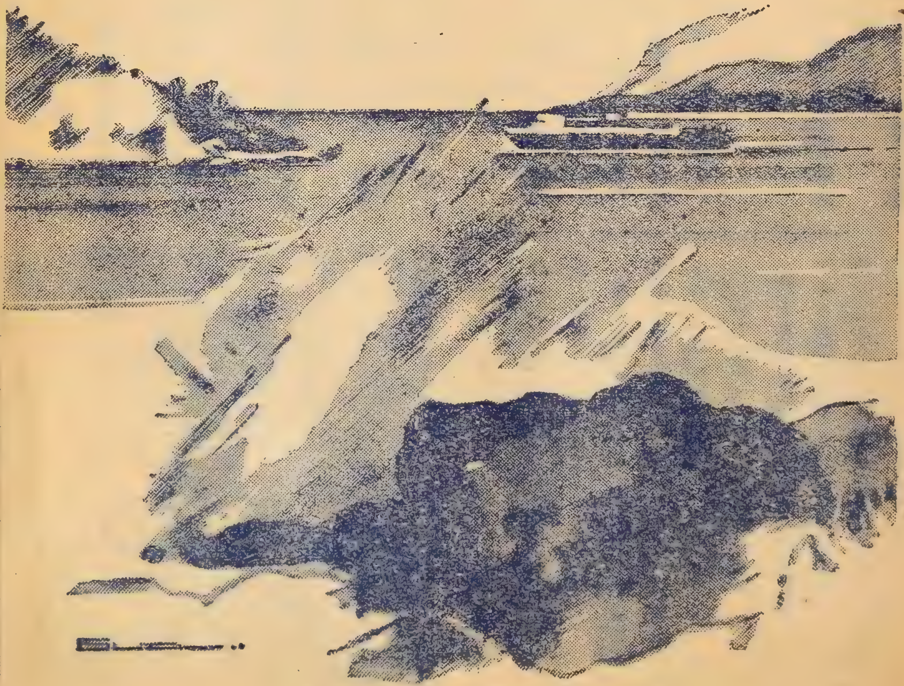
淼々青き波がしら
こころ、南を想ふかな。

むかし、天竺德兵衛や、
はた、仁左衛門長政が、
大志を乘せて漕ぎいでし
賴りはかなき一葉舟。

蓮の花さく流沙川、
椰子の呂宋を夢にみて、
鼻唄うたひ渡りたる
かれらの膽の圖太さよ。

燕が歸る島々に
故舊の靈はいま招く、
ああ、南進の大壯圖
新日本に蘇生れ。

鈴木義治畫



(岡譲二の靴磨安吉)

映畫小説

闘ふ男

朝倉貞夫

(原作・萩原四郎)

一

暮れなずむ夏の黄昏どき——

銀座裏の街角に店を張つてゐる靴磨きの安吉と留造の目の前に、

『お二人ともずゐぶん御精が出ますこと』

云ひながら慣々しく近づいて來た美しい女があつた。

うち見たところ二十歳前後としか思はれない若々しさだつたがそれにしては物腰や動作が落付きすぎてゐたし、紫がかつた粋な明石の單衣を着て、白い襟足を大きく見せてゐるあたりは、どうやら粋筋の女でもあるらしい。

古い言葉だが、まるで掃溜に鶴といつた感じで、靴磨きの知合にしては、いさゝかそぐはない對照だつた。

『留造さん……』

あたりを憚るやうな女の聲に、留造は思はず仕事の手を休めて顔をあげると、

『おゝ、お蔦さんですかい。どうも變だと思ひましたよ、いきなり目の前が明るくなつたんでねえ……おい兄貴！』

ポンと傍の安吉を小突いた。安吉は留造に云はれるまでもなく先刻から氣づいてゐたが

『あゝ、今日は……』

初めて氣がついたやうに顔をあげた。

『昨日はほんとにありがたうございました。いくらお誘ひしても、來て下さらないので、私の方から出かけて來ましたの。そしたら、ほら……』

(花井蘭子のお蔦)

お蔦と呼ばれた女は、云ひながら右足をソッとあげて見せた。なるほど日和下駄の前鼻緒が切れてゐる。

『あつしが直してあげやせう』

氣の早い留造が、すぐに手を出さうとしたが、丁度そのとき、

『おい、賴むよ』

通りがかりの客に仕事を促されたので、下駄の修繕は安吉が引受けねばならなかつた。

靴磨きの前に美人の出現――ちよつと珍らしい風景なので、あたりは見るまに人だかりになつた。その時、

（寫眞向つて左廣澤虎造の留造）

『おう、磨いてくれ』

周圍の人たちをおしのけるやうにして、ズイと前へ出てきた男が、横柄に靴をつき出した。四十がらみの、デップリ太つた、人相の良くない男である。

『一寸お待ち下さい、今すぐすみますから』

目をあげた安吉は、いやな奴がと思ひながらも、つとめて言葉靜かに云つた。

『早くして貰ひてえな。俺ア急いでゐるんだ』

『…………』

『おい靴磨き、お前は下駄屋の廻し者ぢやあるめえ。そんな物ア、いゝ加減にしろよ』

『でも旦那、順番がありますんで……』

『ようし、ぢや磨き賃を倍やらう、そうれ十錢玉だ。早くやれ』

男はポケットから十錢玉を抛りだした。ムッとした安吉は、

『旦那、御冗談でせう……磨きは五錢と書いた通り……いくらお錢を倍もらつたつて、後の人を先にや出來ません……お急ぎならどうかよそへ行つておくんなさい。さ、この錢はしまつておくんなさい。天下の廻り物をやたら投げたりしちや勿體ねえ』

注意すべき相手である位は、先刻承知の安吉だつたが、若氣の至りで、どうにも腹の虫がをさまらなかつた。

『おう、若藏、いやに賣出すなあ……名前は何てんだ？』

男がギロリと目を光らせるのを、安吉は見向きもせず、

『靴磨きにや名前なんかありませんよ』

云ひながらセッセと鼻緒をすげつゞける。

『やい、若藏、面ア覺えとくぜ、あとで吠面かくなよ』

『そりや一體、なんの事なんです』

『馬鹿野郎！』

叫びざま、いきなり足をあげて道具箱を蹴ると、くはへてゐた煙草を叩きつけて、そのまゝ立去らうとした。

『ちよいと！』

―それまで蹲まつたまゝじつと樣子を見てゐたお蔦が、堪りかねたやうに立上つた。

『おゝ俺かい』と、男は振返つて、

『なあんだ、お前お蔦さんぢやねえか』

『私がゐると知つての難題ぢやありませんの。淡路家の親分さんにしちや、藝が細かすぎますわ』

『な、なんだつて？』

お蔦は、とび散つた道具類を默々と拾ひあつめてゐる安吉を、劬るやうに眺めながら、

『おとなしく商賣をしてゐる人に、いくら親分でも、あんまり亂暴ぢやありませんか』

『何、俺のやつた事に文句があるつてのか』

『文句なんか云ふ柄ぢやありませんが、でも餘り弱い者いぢめはなさらない方がいゝでせう』

『しやれた事をぬかすねえ。俺が何をしようと、手前なんかの知つた事かい……それとも他に何か俺に云ひてえ事でもあるつてのか』

『憚りさま、今さら云つたところで、どうなるもんですか。それとも親分の方で何か氣になる事でもあるんぢやないの』

お蔦の言葉は、明かに何か含むところがあるらしかつた。

『やい、變にからんだ云ひ方をしやがつて、なめやがると只ぢやおかねえぞ』

『そりや、こつちで云ひたいことですよ』

『何ツ、このすべため！』

男は矢庭にステッキを振上げた。

『あツ！』

お蔦が身を避けようとした瞬間、

『危えツ、旦那……亂暴なことをしちやいけねえ。まともに喰つた日にやあ死んぢまひますぜ』

聲と一緒に安吉の體がのびて、淡路家の利腕を力一ぱい押へつけてゐた。

『ち、畜生、離しやがれ！』

『いけませんよ、旦那が初手から無理なんだ……ねえ、こんな所を他人に見られちや、顔のきいた旦那の名折れだ。今日は默つて歸つて下さい。ね旦那、みんな笑つてますぜ』

あたりは何時のまにか黒山のやうな人だかりだつた。

『覺えてやがれ！』

意外な反擊にあつて、内心秘かに怖れをなした淡路家鶴吉は、辛うじて虚勢を張つたまゝ、折柄の暮色の中へ消えるやうに呑まれていつた。

二

やがてお蔦も歸り、人だかりも散つてしまふと、安吉はぼんやり坐つたまゝ、じいつと暮れ切つた空を眺めてゐた。

これが、何か考へごとをする時の安吉の癖みたいなもので、それをよく知つてゐる留造は、ふと氣づいたやうに、

『兄貴、俺ア一寸煙草を買つてくるぜ』

云ひ殘して、その場をはづした。

一人になつた安吉は、次々にめまぐるしく湧き起る想念を、どうにかして一點にまとめようと焦つたが、さう思へば思ふほど混亂するばかりだつた。

一面識もない淡路家と自分とが、何かお蔦を中にして結ばれてゐるやうに思はれる。だが、別に何一つ思ひ當ることも記憶にない。

お蔦と安吉はともに北海道の生れで、子供のころよく遊んだ幼な馴染だつた。それが、つい一週間ほど前、十年ぶりでヒョツコリ出會つて、今日でまだ三度目の對面である。

二度目に會つたのは昨日だつた――さう思つた時、安吉の腦裡に電光のごとく閃いたものがあつた。

（さうだ、事によるとあの事件に淡路家が關

係してゐるのかも知れん……)

それは昨日のこと、安吉はお蔦の弟で今年十歳になる章を、ある曲馬團から腕づくで助け出して、お蔦の家へ送り屆けたのである。

なぜ安吉がそんな事をしなければならなかつたか。云つてみれば、是と信じたことに向ふと止むに止まれぬ男の血が然らしめたのであるが、それには安吉が十年ぶりでお蔦に會つた最初の日に、お蔦自身の口から洩れた次の如き意外な事實を記さねばならない。

(やい若藏、面ア覺えとくぜ。あとで吠面かくなよ)

(向つて右より鬼頭善一郎の淡路家鶴吉とお蔦及び安吉)

その意外な事實とは――彼は今、涙ながらに語られたあの時のお蔦の言葉をまざ〳〵と思ひ浮べてゐた。

『――私たちのやうに藝者などをしてゐる者は、百人のうち九十九人までが何か不倖せなものを持つて生れて來てゐるんですわ……安吉さんが東京へ行つて間もなく、私の兩親は次々に亡くなつてしまひました。私十五でしたけれど、三つになつた弟をかゝへて、もうその日から食べるのに困るやうな始末でしたの。私は仕方なく弟を遠い親戚にあづけて、東京へ出てきました。別れる時に私を慕つて泣き叫んだ弟の顔を、私は寢た間も忘れることができず、五年ばかりたつた或日矢も楯もたまらなくなつて、とう〳〵弟に會ひに行きましたの。でも、それがいけなかつたんですわ、一ケ月ばかり一緒に暮して東京へ歸つて來ると、すぐ後から追ひかけるやうに手紙が來て、章がゐなくなつた、お前のあとを追つて家出したらしい――つて云ふのです。私びつくりして直ぐ飛んで歸りましたが、それつきり行方が分らないのです。

それからやつと……この頃になつて、曲馬團にゐることが分りました。夢中で家をとびだして迷子になつたところを、曲馬團に拐かされたんですわ。私さつそく行つてみますと、確かに章に違ひないのです。それでいろ〳〵と先方へかけあつてみたけれど、向ふでは違ふ、人違ひだの一點ばりで、會はしてもくれません。悲しくなつて或日知合のお客にお話すると、その人は快く引受けてくれました。

でも、いつまでたつても弟はつれてきてくれないし、先方へ掛合ひにゆくたびに、やれ足代だ運動費だと云つて、持つて行つたお金も相當なもんですが、揚句のはてが、よく調べてみるとやつぱり人違ひだつたつて云ふんです。よくある手ですわ、その人が先方に買收されたんですわ、その人が誰だつて仰有るの？　それだけは云へませんわ。私が頼んだんですもの、そりや恨みたい氣持にもなりますけど、人を恨むより、そんな人に大切なことを頼んだ自分を恨めしく思つてゐますの……』

一徹な安吉が、それを聞いて默つてゐられなかつたのも無理はない。お蔦にも默つたまま、いきなりその曲馬團へ出向いた彼は、荒くれ男を二三人毆り倒して、章をつれ出してきたのである。

が、それはともかく、その知合のお客といふのが、事によると先刻の淡路家といふ男ではあるまいか、いや、きつと彼奴に違ひない――ふとさう氣がつくと、安吉は突然激しい憤りに五體を震はせた。

弱い女の純情を弄び、その上金錢までも捲きあげた卑劣な漢――さうした社會惡を見逃すには、彼はあまりにも正直であり正義感の強い若者だつた。――

と、その時、彼の目の前にヌッと突出された靴があつた。安吉が習慣的に磨きにかゝらうとすると、

『おい、一寸そこまで顔を貸してくれ』

低いがドスの利いた聲と一緒に、ズンと肩先を小突かれた。

人相の良くない男の顔が二つ――瞬間、安吉の顔はグッと引緊つた。語るまでのことはない。それが誰の使であるか位のことは、すぐに想像ができた。

彼はポイとブラシを投げて起上ると、無言のまゝ男の後について行つた。

つれ込まれた所は、ビルとビルの蔭に挾まれた空地で、一方の板塀の近くには建築用材がうづ高く積上げられてある。

『俺ア淡路家の若え者だが、てめえ昨日は面白えことをしてくれたさうだなア、誰に頼まれてやつたんだ』

豫期した通りの言葉だつた。が、安吉はわざと知らん顔で、

『何の事だい、そりや』

『白ばつくれんな！　あの一件についちや、家の親分が仲に入つてる事ア、承知の上なんだらうな』

安吉は、こんな連中を相手に何を云つても無駄だと思つたが――ふと氣がつくと、いつのまにか用材の蔭から二人三人と人影が現れて、安吉を包圍するやうな態勢を作つてゐる。その中には、昨日會つた曲馬團の太夫元も、呼込みの若い者も、それから先刻の淡路家鶴吉までが交つてゐた。

その連中を見廻して、ニッと笑ふ安吉。

と、ズイと前に出た鶴吉が、

『やい、俺の面ア忘れやしめえな』

と、殺氣を漲らして睨めつけた。

安吉は、笑つたまゝで、

『ふん、俺の感じた通りだ』

『何だと？』

『やつぱり手前たちア同じ穴のむじなだつたつてことよ』

『何ッ！』

云ふより早く躍りかゝつた鶴吉――だが、安吉は少しも驚かなかつた。抑へてゐた闘志

を一ぺんに爆發させて、鶴吉の伸びた手の下を飛鳥の如く掻いくゞると、間髪をいれずにガンと激しい一撃を相手の顎にくらはした。

『野郎ッ！』

とりまいてゐた何人かゞ一齊に挑みかゝつたが、親分を倒された彼らは、まるつきりダラシがなかつた。頼まれてする喧嘩と、心の底から燃え上る正義の闘志とでは、數の大小など問題でなく、一人逃げ二人去りして、やがて全部の者がコソ〳〵と姿を消してしまつた。

三

安吉が仕事場へ歸つてきたときには、留造はセッセと道具類を片づけてゐたが、

『兄貴、ずゐぶん長く待たせたぜ、一體どこへ行つて來たんだ』

『うむ、ちよつと知合が來たんでなア』

案じ顔にさう云つた。

仲間に心配をかけまいと、安吉は喧嘩のことには一言もふれなかつた。

『そんならいゝが……ところで、兄貴、今夜はどうするんだよ、さつきの話ぢやお蔦さんは待つてゐるに違えねえぜ』

『………』

『章をつれ戻してくれた心祝ひに、どうしても一緒に食事がしたいつて……行つてあげなよ、兄貴』

『俺ア、いやだ』

安吉は、ぶつきらぼうにさう云ふと、そゝくさと道具を片づけ始めた。

『どうしていやなんだい』

『うるせえ、俺ア歸るぜ』

荷物をまとめると、安吉は不機嫌さうにサッサと先にたつて歩きだした。ハテナと首をかしげながら、留造も後からついて行つた。

さつき淡路家が歸つたあとで、いくらお蔦がすゝめても、決して行くと云はなかつた安吉だつた。兄貴は柄にもなく恥かしがつてゐる――留造はあのとき簡單にさう解釋してゐただけに、何としても腑におちかねた。

やがて、家とは名のみのあばら家へ歸つた二人は、すぐに食事にしたが、留造がまだ未練がましく、

『可哀さうに、今ごろお蔦さん、御馳走こさへて待つてゐるだらうなア……』

獨り言のやうに言ふのを聞きとがめた安吉は、

『まだ云つてやがるのかッ』

今にも毆りつけさうな氣勢を示した。

『な、なんにも云つてやしねえよ』

やけ氣味に澁茶をガブッと呑みほした留造は、『俺ア、風呂へ行つてくるぜ』

プイと立上つて、

〽強いばかりが男ぢやない
　これほど慕ふ妾のこゝろ
　どうしてお前にや通じない……

三度の飯よりも好きな浪花節を即興に吟みながら、膨つ面で家を出て行つた。

それを見送つてゐた安吉は、ゴロリとその場に寢ころんだ。

『強いばかりが男ぢやねえか、ハハハ……だが俺ア、貧乏はしても眞面目な仕事が好きなんだ。お蔦さんが藝者でなけりやなア……』

半分口の中で獨り言を言つた途端、

『こんばんは……』

表に透きとほるやうな女の聲がした。

（あ、お蔦さんだ）

彼はドキリとして飛び起きた。

（安吉が連れ込まれたのは或る建築工事場だつた）

やがて、薄汚い食膳に向ひあつて二人は、顔を見合せるとお互に固く押しだまつて無言の行をつゞてゐたが、やゝあつて、

『どうして來て頂けませんの、何かお氣にさはることでも妾したのでせうか……章が、小父さん／＼つて、とても待つてるんですけど……』

お蔦はさう云ふのが精一ぱいの努力だつたらしい。そのまゝあとは涙ぐんで押しだまつてしまつた。

そのいぢらしい姿を、じつと見てゐた安吉は、

『お蔦さん、俺ア本當のことを云へば、あんたたち姉弟を見るのが辛いんだよ』

それも確かに理由の一つではあつた。

『え、どうしてですの』

『早いもんで、俺も郷里を飛出してからまる六年、東京へ出て一人前になるまでには、どんなに家が戀しくなつても歸つちやならねえ、手紙も出すんぢやねえと心に云ひきかせて、どうやらその意地だけは守りつゞけて來られたが、いつになつてもこんな情ねえ暮しきり出來ねえんでさあ。

だが、郷里にや年とつた兩親と、今年十八になる筈の妹がゐる……あんたと出會はすまではそれほどでもなかつたが、あんたに弟さんを思ふ優しい心を聞かされたり、目の前にそれを見せつけられたりしたら、つく／＼今までの自分といふものが情なく考へさせられちやつた。親にも妹にも何一つ人間らしいことをしてやれねえ自分に、つく／＼愛想がつきたんだ。今ごろこんな事を云ひだしたつて遲いかも知れねえが……』

『…………』

『だが、あんたなら俺アのこの氣持も、きつとわかつてくれる筈だ』

安吉は柄にもなくしんみりとして、傍の灰皿から吸ひさしの莨をつまみ出した。

『わかりますわ、よオくわかりますわ、でもさう氣づいたら今からだつて遲くないぢやありませんか、手紙を出すなり、一度歸つて會つてくるなりなさるといゝんですわ』

安吉は、それに大きく頭をふつて、

『一度は俺もさう思つた。だけど駄目だ。親父もお袋も、この不孝者をどんなに恨んで怒つてるか知れやしねえ。今ごろのめ〳〵と歸つたつて、家の閾なんか跨がしてくれるもんですか』

だが、お蔦は一生懸命だつた。

『いゝえ、そんなこと無いと思ひますわ。安さんがさうして心配していらつしやる以上、郷里の皆さんはそれ以上に安さんのことを案じてゐるに違ひありませんわ。生意氣のやうですけど、肉親の愛なんてそんな生やさしいものぢやないと思ひますの。……それに、私のやうに心にもないお化粧暮しとちがつて、仕事だつてちつとも恥かしくないんですもの……』

『と云ふと……?』

『だつてさうぢやありませんか、私などには詳しいことは分りませんけど、お國の非常時で、節米だ贅澤品の禁止だと云ふのに、派出なお座敷着をきて、お酒のみのお相手をして生きてゆくなんて、考へるとほんたうに情なくなつてしまひますわ。そりや、お金に不自由はしないかも知れないけど、心の方がよつぽど大切だと思ひますの。私なんとかして一日も早くこんな稼業やめてしまひたいと思つてゐますわ。何だか心までダラけてゆくやうに思へて、とても堪らないの。それを思ふと安さんの方がどれほど立派だか……』

さう云ひかけて、お蔦は急に咽喉をつまらせた。

『ありがたう！』

安吉が大きく頷くと、

『郷里へだつて、大手をふつて歸れるぢやありませんの……』

お蔦の言葉に、安吉は次第に心の安定をとり戻したやうに、その顔までが晴れ〳〵と輝いてきた。故郷へ歸る希望が生れたばかりではない、お蔦が今の生活に決して滿足してゐないことを知つたのも、何より嬉しかつた。

『ほ、ほんとに、さう思つてくれますか』

『思ひますわ』

『お蔦ちやん、俺アおかげで永い間の重荷がとれちやつた。ありがたう……俺ア心から禮を云ふぜ』

お蔦と二人きりで語るなどといふことは、何年ぶりであらうか……磨かれてすつかり美しくなつてゐるお蔦に、安吉は最初まぶしいやうなものを感じたが、今やつと、昔ながらの親しさをとり戻すことができた。

四

〽雪と氷に閉された
荒野も山も白樺の
林も丘も一様に
春めぐりくる北の國
見渡す限りの平原に
低く涯なく雲はとぶ……

車窓や汽船の上から眺める四邊の風物は、すべてが彼にとつて懷かしいものばかりだつた。六年ぶりに故郷の落合驛に降立つた時には、さすがの安吉もジーンと目頭の熱くなるのを覺えて、一本の木、一つの建物にまで昔の記憶を呼び戻しながら、一番あとから改札口を出ようとした。が、その時、

『おや？』

彼は思はず叫んで、その場に釘づけになつた。出口の柱の傍に、顔を掩つて泣きじやくつてゐる娘と、それをなだめすかしてゐるら

しい中年男の後姿が目についたのだ。

咄嗟にさう氣づいたが、近づいてみて更に――あッ、淡路家！

愕然とした。蒼白な横顔をみせて泣きしづんでゐるその娘こそ、彼が夢寐にも忘れえぬタツタ一人の妹ではないか。

いきなり飛出したい氣持をおさへながら、何氣なくそばに近づいてゆくと、どうやら妹は金のために賣られてゆくらしい。もう諦めたやうにトボ／＼と淡路家の後について待合室の方へ歩きだしてゆく。

安吉は思はず駈けだして、ニユツと淡路家の前に立ちはだかつた。

『な、なんだ、てめえ！』

呆然と目をみはる淡路家の鼻先に、

『親方、盡きねえ御縁だね……北海道の果でお前さんに會へようたア思はなかつたぜ』

激しい憤怒を抑へて、冷く云ひ放つた。

『おう……』

意外とも意外、まさか安吉に會はうなどとは考へてもみなかつた淡路家は、安吉以上に驚いたらしく、反射的に二三歩後退したが、その咄嗟の場合にも娘を引寄せることを忘れなかつた。

『田舎者を口車にのせて、はした金で娘をあつめる……いや、それもよからう。だがなア、その娘だけア、お前の自由にやさせねえよ』

その聲に、娘はハッとしたらしく面をあげ、食入るやうに安吉の顏を見つめてゐる。

『な、なんだと……餘計なくちばしを入れやがると、今度こそ手前……』

『今度こそどうしようてんだ。證文を見せろ、金さへ返しや文句は無からうぢやねえか』

『ど、どうしようが、手前なんかの差金はうけねえ』

口で虚勢を張りながら、淡路家は娘の肩に手をかけて、早くも逃げ腰を見せた。

『おう待てッ！』

血相變へて淡路家の肩口をひつ摑んだ安吉

『話の様子はあらかた聞いた。金から起つた問題は、金で解決つけようぢやねえか』

云ひながら、グワンと一發喰はせると、よろ／＼つと崩れかゝつた淡路家は、恐怖の色をうかべながら、口惜しげに内ポケットから證文をとりだした。

この様をじつと見つめてゐた娘は、突然、アッと思ひ出したやうに、

『おゝ、兄さん！』

狂氣のやうに叫んで駈け寄つた。

〽夢ぢやないかと暫くは
　わが目疑ふ妹も
　やがて一聲兄のそば
　待つてゐました永の年
　會ひたかつたと縋りつく……

×　×

話變つて、こゝは安吉の家の前――

年老いた父親の周助が近所の人たちに圍まれて男泣きに泣いてゐる。涙を拭ふその拳には、たつた今來たばかりの召集令狀が握られて……。

『おう、あの不孝者のおかげで、いゝ死恥をかゝされますわい……折角お國への御奉公ができるちふのに、今ごろ何處で何してゐやがるか……』

近所の人たちも慰めやうもない面持である。その時突然、向ふの道から、

『お父つアーん！　お父つアーん！』

たつた今安吉に救はれた妹のお鈴が、狂氣したやうに駈けこんできた。

『おゝおめえ、どうして歸つて來たんだ……東京の旦那は、ど、どう……』
涙の目をあげて不審げに訊ねる父親の言葉を皆まで云はせず、
『兄さんが歸つてきたんだよう』
はア〳〵と肩で息をはずませながら、お鈴が甲走つて叫べば、
『なにッ、安が歸つてきた?!』

淡路家に連れられたお鈴は……（清水美佐子）

『うん、東京の旦那にお金返してくれただよ。俺アと一しよに、そこまで歸つて來たけんど、お母さんが死んだこと話したら、家さ歸る前にお墓詣りする、お前は先に歸れつて……』
『えッ、そ、そりや、本當か?』
父親は思はず娘の兩肩に抱きついた。
『ふんとだとも、今に歸つてくるよ』

『ほう、そか〳〵……』
感極まつた父親は、ボロ〳〵涙をこぼしながら、
『馬鹿野郎、安のバカヤラウが、うめえ、うめえところへ歸つて來やがつた、ハハハ……』
泣顔を無理にも笑はうとしたが、老の兩眼からは、なほも涙がとめどなくはふり落ちるのであつた。
丁度そのころ、墓地から悄然と出てきて、細い土手道を歩いてゐた安吉は、ふと一臺の自轉車にぶつかつた。
『あ、あんた、下場の安さんぢやナ』
自轉車の主が慌てゝ降りながら聲をかけた
『えゝ、さうです』
『あ、やつぱり安さんか、わたしを覺えてるなさるかナ、それ役場の……』
『あゝ、德さんでしたなア』
『ハハ……』と急に改まつてお辭儀をしながら、『いや今度は又お目出度いことで……この村で丁度十五人目でがすよ』
『何の話です、そらア』
安吉がポカンとしてゐると、
『アレ、召集のことですよ、あんた、わたし

や最前あんたの家へ赤紙持つて行きましたがナ』

『えッ、召集!? ほ、ほんとですか?』

安吉は、思はず徳さんの肩をムンズと摑んで、喜びの聲をあげた。

『おゝさうですか……有難え! 俺も漸くお役に立つた、お役に立つた! 徳さん有難う』

言ひながらサッと上衣をぬいだ安吉は、もう後をも見ずに一散走り、わが家めがけて駈けだして行つた。

五

それから二年の月日が過ぎた或晩――

『うめえもんだ、廣澤天華は將來の大者だ』

『うむ、それにしても、人の熱心ほど恐ろしいものは無えナ。二三年前までは銀座で靴みがきをしてゐたさうぢやねえか』

ゾロ〱と寄席から出てゆく人たちが、口々にほめそやしてゆくのを、安吉は嬉しげに聞きながら、その廣澤天華の留造が出てくるのを待つてゐた。

安吉が出征してゐるうちに、留造はすつかり咽喉をみがいて、今では押しも押されもしない東都隨一の花形浪曲家と謳はれるやうになつてゐた。

安吉をモデルにして作つた『闘ふ男』――それが天華の十八番で、安吉自身も、今夜初めてそれを聞いての歸りなのである。

そこへ留造が、りゆうとした藝人姿で駈けだしてきた。

『やあ兄貴、濟まねえ、勘辨してくれよ、今ぢやあれが俺の飯のネタなんだ』

『濟むも濟まねえも……思はず泣かされたぜ……それにしても巧くなりやがつたなア。あの頃はお前の聲にほと〱惱まされたが……修業つて恐ろしいもんだなア』

歸還した安吉は、一旦郷里に足をとめて、今日上京したばかりだつた。

『みんな兄貴に勵まされたおかげよ。俺は本當に有難えと思つてゐる』

二人は何かしみ〱としたものを感じて、思はず顏を見合せたが、留造はふッと思ひだしたやうに、

『勵まされたつて云へば兄貴、あのとき別れて丸二年、陰になり日向になつてこの俺を勵ましつゞけてくれた人があるんだ。丁度いゝや、これから行つて會つてやつてくれねえか』

『よからう、音痴みてえなお前を、こゝまで仕上げてくれた人だ、誰か知らねえが、俺も會つて禮が云ひてえ』

『ありがてえ兄貴が一緒だつたら……先方様もどんなに喜ぶことか……』

留造は誰に云ふともなく云つて、そつと目頭をおさへた。

『おや、お前泣いてんのか』

『うれしいんだ。俺の浪花節を兄貴に聞いてもらへるなんて……俺ア何が嬉しいつて、こんな嬉しいこたアねえ……それに……』

『それに、なんだ』

『いや、そのことは云ふめえ、さ、行きやせう』

と、留造は先に立つて歩いて行つた。

恩人の家といふのは、そこからさまで遠いところではなかつた。やがて玄關に案内を乞ふと、すぐに出て來た女――

『あつ!』『まつ!』

二人は思はず驚きの音をあげた。看板は小唄師匠となつてゐるが、それこそ忘れもしないその後のお蔦だつたのである。

茶の間へ通された安吉が、ふと壁を見るとそこにはいつか留造に與へた自分の寫眞が大きく引伸ばして飾つてある。

『お蔦さんはね、あれから毎日陰膳すゑて、今日の日を待つてゐるんだぜ、兄貴』

留造がしんみりと云つた。そこへ、

『お待たせしました』

顏を直したお蔦が、泣きだしたい衝動を抑へながら、靜かに手をついて、

『このたびはお目出度う存じます』

『ありがたう……留の奴がえらくお世話になりましたさうで……』

『いゝえ、そんなこと……』

じつと見交した目と目には、云ひ知れぬ感激の涙が光つてゐる。それつきり、何も云へなくなつてしまつた。それは、樂しいけれど何か耐へがたい沈默だつた。その空氣を察した留造が、

『章坊がゐたら、どんなに喜ぶだらう……殘念だなあ』

安吉もホッと救はれたやうに、

『さう云へば、章坊は……？』

『はい、いま夏休みなので臨海學校へ行つてますの』

（お父つぁん、うそだと思ふだら出てごらんよ）

『そらいゝ、眞ッ黑になつて歸つてくるでせう』

『あの子も毎日、小父さん〳〵つて云つて、お歸りになるのを待つてをりましたの』

それは、章に託して云ふお蔦自身の胸の中でもあつた。

安吉は、感慨深さうに、そのまゝ默つてしまつた。

又しても息づまるやうな沈默……折からの夜風に、窓の風鈴がリリリンと鳴つた。

お蔦は座にゐたゝまれないやうに、つと立ち上ると逃げるやうに隣座敷へ姿を消したがやがて、齒をくひしばるやうな啜り泣きの聲が洩れてきた。

『兄貴……嬉しいんだよ。お蔦さんは、なんにも云へねえほど嬉しいんだよ……』

そばから留造が、つぶやくやうに言葉をそへた。

安吉は胸が一ぱいだつた。何も云はずに、だまつて目をそらすと、もう一度、壁にかゝつた自分の寫眞をふり仰いだ。が、その寫眞も、すぐ涙ににじんで、ボーッとかすんできた。

隣室からは、なほもお蔦の嬉しい咽泣の聲が聞えてくるのだつた。

（終）

藝界噂話

妹代用品

松竹大船の『若草』の病院のセットで、齋藤達雄の扮する父親の臨終場面を撮影中、看病してゐた娘役の春日英子は、先にロケーションの爲め、死際に會へなかつた亡妹のことが思ひ出され、到頭本當に泣き出してしまつた。その爲この場面は、思ひも寄らぬ迫力百パアセントの撮影となつたが、ベッドに横はつて、せい〴〵汚い老人に扮してゐた齋藤も、涙を催して、

『君、無理もない。うんと泣き給へ。構はんとも、僕を妹さんだと思つて、思ひきり泣き給へ。』

春日英子

とは、きたない妹もあつたものだが、監督始め一同、この光景には胸を打たれたといふ。これが本當の劇中劇といつていゝ。

銃後の女性

日活多摩川には女子銃後會があり、興亞奉公日には、一同揃つて撮影所で君が代を奉唱し、謹んで皇軍將士の武運長久を祈ることになつてゐるが、あの可憐な乙女役として評判の風見章子は、この朝はお新香に御飯だけで過ごし、遙かに前線將士の苦闘をしのぶ習慣である。

風見章子

撮影のない時は、彼女は先づ第一に日活から出征してゐる勇士達の家族を訪問し、それから靖國神社と明治神宮へお參りする。そしてその足で銀座に行き、いろ〳〵苦心して慰問袋の品々を買ひ整へる。夕方家へ歸つて、慰問文の作成にとりかゝるのだが、

『あたし、作文が下手なので、本當にお恥かしいのよ。』

と、いつてゐるが、どうしてなか〳〵の名文章を書く。風見など銃後の女性として恥かしくない乙女といつてよろしからう。

支那は廣い

日滿支一體は先づ銀幕から——と、ばかり、このところ大陸のスターの來朝しきりだ。例の滿映の花形李香蘭は、『支那の夜』で壓倒的評判をとつたが、八月は歌舞伎座に堂々名優猿之助と共演し、九月早々再び長谷川一夫と組んで『北京の舞姫』に共演する。なほこの作品には、上海銀幕の明星汪洋が特別出演することになつてゐる。ところが、李は北京語、汪は上海語より知らぬので、通譯がゐないとさつぱり意志が通ぜぬといふ。

李香蘭

『ウーム。同じ支那語でもそんなに違ふものかなア。』と、長谷川、今更のやうに感心してゐる。

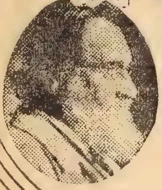
萬年青年

俳優の年齡は他人の目からは全く判らぬものとされてゐるが、自家用自動車を國策に應じて廢した市村羽左衞門、電車に乘つては老人達に自分の席を讓つてやつて、

『今の若いものはどうもいけねえ。年寄に席を讓ることを知らねえからな。』と云つてゐる。或る日、知人と一緒に乘つた時も年寄に席を讓つてゐたが、この知人その老人を見ると、五十五、六歳の婦人。席を讓つて若い男らしい顏をしてゐるのが、今年六十七歳の羽左衞門なのには惘れたと云ふ。

金澤醫科大學前細菌學教授
醫學博士　兒玉豐治郎先生監製

活性乳酸菌フラビン複合劑



液狀カルド

包　裝

250g……¥ 2.50　500g……¥ 4.50

液狀培養技術の特殊性！

カルドはメチニコフ博士の學說に正依し之に多年の科學的研究を加へ、從來製劑至難とされたる特殊乳酸菌の液狀培養に成功せる液狀活性乳酸菌劑で、液狀・活性の故に「一瓦數億」の生菌體が旺んに「發生機の乳酸」を分泌する。

發生機・乳酸の活動性！

液狀カルドの生菌體より生成さる、乳酸は發生機の乳酸であるから其の作用は頗る活動性であり、腸內腐敗醱酵抑制作用の强大なるは勿論、彼の『筋力の源泉は發生機の乳酸なり』と云ふ最新學說の證する如く、筋力の源泉として能く全身並に胃腸筋肉に活動性エネルギーを與ふ

フラビンとの複合性！

『フラビンとチアミンは胃腸細胞の機能を正常に維持せしむるための重要因子なり』とはステツプ氏等の新學說であるが、液狀カルドの活性乳酸菌は酵母の約三倍量に相當するフラビンとチアミンとを生成するから之等兩物質と發生機乳酸との複合的相乘作用に依つて極めて進展性の効果を示現する。

適應症

胃カタル・胃酸過多症・胃潰瘍・十二指腸潰瘍・胃液缺乏症・胃アトニー・胃擴張・胃下垂症・大腸カタル・下痢・小兒消化不良症・綠便・粘便・血便・常習便秘・腸チブス疫痢・赤痢・蕁麻疹・腸性吹出物・腸結核・虛弱體質

東京神田（中央大學前）內海合名會社　振替 東京 9613番

航空日　九月二十八日

『航空日』が制定されました。今年は九月二十八日です。
此の日を迎ふるにあたり、わが荒鷲の奮戰物語を茲に掲げました。支那事變に、滿蒙國境戰に、武勳赫々たる無敵空軍に、國民擧つて感謝しませう。

奇蹟の生還

湊　邦三

筆村爆撃

敵陣地爆撃の命令が下つた。
指揮官山代大尉操縱の一番機、續いて二番機、三番機が轟々たる爆音を響かして、〇〇基地を飛出した。
昭和十三年十月十六日――。
日本では菊が咲きはじめて、朝晩は薄ら寒さを覺える秋中頃であるが、亞熱帶の南支那は眞夏のやうな暑さで、深い藍色の空に、灼熱した太陽が廻轉いてゐるのだ。
爆撃の目的地は、英領香港と南支第一の大都會廣東とをつなぐ鐵道廣九線の筆村、そこに支那軍が築いてゐる防禦陣地だ。
海軍航空隊の三機は、筆村の上空へ現れると、一番機が發した爆撃の合圖と共に、海の荒鷲といふ文字通りに、獲物を狙つて舞下りて行くやうに、急降下爆撃を開始した。
敵の機銃陣地から、パッ〳〵と白煙が上るのが見えだした。
爆彈を落して、急上昇に移ると、それを追駈けて、曳光彈が白い煙の尾を曳いて上つてくる。
敵陣地では、高角砲も打ちだしたらしい。引裂いた綿を投げたやうに見えるのは、砲彈が空中で炸裂したのだ。

『命中！』
偵察員の聲が傳聲管を傳はつてくると、間もなく、推進器の轟々たる爆音の底からドーン！　鈍い音が聞えてくる。敵の機銃陣地へ爆彈が命中して、爆發したのだ。
一番機が舞上ると、二番機が突込む。
三番機が旋廻して、目標めがけて急降下に移ると、爆彈を落した二番機が、獲物を攫つた鷲のやうに舞上つてくる。
『あッ！』
三番機の操縱員江口三等航空兵曹は愕然となつた。
『おいッ、推進器が止つたぞ！』

江口操縦員の聲を傳聲管で聞く迄もなく、菊池偵察員は推進器が止つたことに氣が付いてゐた。

一瞬、森となつた中から、今迄、推進器の爆音に掻消されてゐた高角砲の炸裂する音や、豆を煎るやうな機銃の響、僚機が落した爆彈の爆發する音が、一齊に聞えてきたからだ。

時刻は午後四時頃、高度は〇〇〇米——。

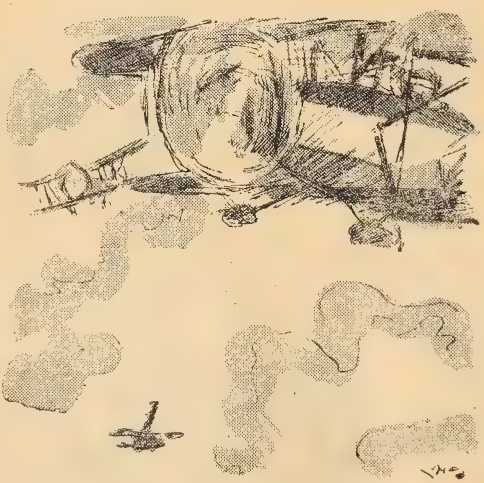
江口操縦員は菊池偵察員や鎌田通信員にそのことを告げると、直に發火系統や燃料系統の故障個所發見に務め、燃料ポンプを押して見たりしたが、判らない。

推進器の廻轉を失つた飛行機は、見る〳〵降下しはじめた。

その時、一番機と二番機は、敵陣地上空を縦横に飛翔して、爆彈を落してゐたが、三番機から故障が起きたといふ通信を受取ると、指揮官山代大尉は爆撃の中止を命じて、降下しはじめた三番機を追うて行つた。

十月十二日に、陸軍の大部隊がバイアス灣に奇襲上陸して、廣東進撃を開始してゐたが、この時はまだ廣東は陥ちてゐないし、珠江の水路を扼してゐる虎門要塞も陥ちてゐない。で、この附近には敵兵が充滿してゐるのだ。

一番機と二番機は、故障を起した三番機が敵地に不時着した場合、蝟集してくる敵兵を、殘りの爆彈を落して追拂ふ爲に、萬一、三番機が自爆を敢行した時には、その最期を見屆



ける爲に、爆撃を中止して後を追うたのだ。

高度千米で、一番機と二番機が追付くと、三番機から通信がきた。

『手段を盡せども、故障個處發見されず、自爆す……』

傳聲管を傳つてきた通信員の聲に、見れば、三番機からは、二人の搭乘員が機體から乘出して、袂別の手を振つてゐる。

自爆決行

江口操縦員は必死になつて故障個處の發見に務めたが、最早、絶望と知ると、殘りの爆彈を抱いて、敵陣地へ突込んで、自爆する決心をしたのだ。

『自爆するぞ！』

彼は菊池偵察員、鎌田通信員に覺悟を告げると、親鳥のやうに追付いてきて、見護つてくれてゐる一番機と二番機へ、菊池偵察員と共に、袂別の手を振つたのだ。鎌田通信員は此の窮迫した間にも、自若として、自爆決行の最後の通信を基地や僚機へ送つてゐた。

三番機は機首を下げて、敵陣地めがけて、彈丸のやうに急降下をはじめた。

その瞬間、江口操縦員の眼に、日本にゐる懐しい父の顏が、母の顏が浮んで、最後は、天皇陛下萬歳！　を叫ぶだけだ。

千、九百、八百、七百……敵陣地が急速力で飛上つてくる。

一番機と二番機は、上空を旋回して、僚機の最後を悲しく見護つてゐたが、三番機が高度七百六十米に達した時だつた。

死んだやうに音のなかつた推進器が、突然、爆音を發して廻轉しはじめた。

（あツ、助かつたツ！）

江口操縦員は無我夢中で、操縦桿を引いた。

飛行機は空氣の抵抗に、機體にグン！と衝撃を受けて、水平になり、軈て機首を上へ向けた。

『萬歳々々ツ！』

風を劈る推進器の凄じい爆音に消されたが、江口操縦員と菊池偵察員は、込上げてくる嬉涙と一緒に萬歳を叫ぶと、機體から乘出して、一番機と二番機へ千切れんばかりに叉手を振つた。

一番機から、指揮官山代大尉の命令が、二番機へきた。

『三番機を護つて、基地へ歸れ。』

自爆の覺悟で、七百六十米まで突込んで、奇蹟的に助かつた三番機が、二番機に護られて、筆村の上空から基地へ向ふと、一番機は殘りの爆彈で急降下爆撃を開始した。

暗記送信

二番機に護られて、三番機が基地へ歸ると、江口、菊池、鎌田三名の搭乘員は、隊長山内少佐に報告した。

寡默實行は、海軍の傳統で、部下の訓練に怒聲は發しても、喜びの色や哀しみの色は滅多に見せない、精悍な山内少佐であつたが、流石に歡びの色を漲していつた。

『良く歸つた、天祐だ。』

言葉は少いが、其内には、江口操縦員が愛機の故障に死を覺悟して、從容として自爆を敢行しようとした精神を賞め、自爆寸前で助かつた部下の幸運を、自分も一緒に歡んでゐるのだ。

『鎌田――』

續いて、山内少佐は自分の前に並んでゐる三名の搭乘員の中の鎌田通信員を注目して、

力強い聲でいつた。

『良くやつた、偉い！』

山内少佐が鎌田通信員を特に賞めたのには理由があつた。

筆村上空で、推進器が止つた刹那から、僚機へ、基地へ、刻々、三番機から通信があつたのであるが、今、搭乘員の報告を聞くと、

基地にゐて受取つた通信が、一字一句違つてゐないのだ。

高度〇〇〇米、推進器に故障を生じ、飛行不能……との最初の通信から、高度千米、手段を盡せども、故障個處發見されず……自爆敢行の通信も、高度七百六十米で奇蹟的に助かつたことも、正確に、基地へ通信されてゐたのだ。

非常の場合に備へて、紙片へ書いて渡すのでない、傳聲管から來る聲を暗記して通信する――暗記送信――は、練習の時にでも難しいのに、鎌田通信員は見事やつてのけたのだ。

しかも自爆を決行すれば、他の搭乗員諸共に微塵となる運命を荷ひながら、自若として、急降下して行く機上から、正確な通信を續けてゐたのだ。

鎌田通信員は航空一等兵、十八歲の少年であつた。

『これは、なか〳〵出來ん！』

鐵のやうに訓練して行く爲には、賞むべき部下の行動も、容易に賞めない山内少佐が、三名の搭乗員が敬禮して立去ると、精悍にも剽輕にも見える顎の山羊鬚をしごいて呟いた。

『自爆と聞けば、心が動搖する筈だ。それを通信に沒頭して、座席から動かうとしなかつた鎌田は、賞められて良い！』

與へられた職務を忠實に遂行する以外には、生もなく死もなく、念頭に、何物もない、鎌田通信員の態度こそは、立派な軍人精神なのである。

（さし繪―多賀正）

飛行靴通信

山村邦利

漢口作戰の最高潮時とも云ふべき昭和十三年十月六日のことである。

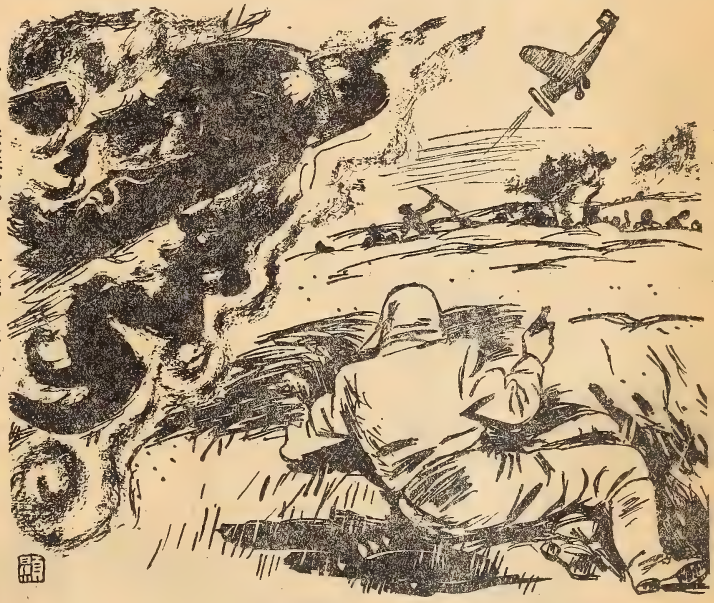
我軍は揚子江を挾んで、右岸と左岸から相呼應し、一路漢口を目指して進撃し、大別山山脈の峻嶮を踏破し、京漢線の要衝信陽に迫つた。敵軍は最後の首都とも云ふべき漢口の危機を知るや、信陽を中心に數十萬の兵を配して、その東方渝河に於て我軍の猛進を阻まんと、半永久的の堅陣を築いて必死に防戰する。

これより先十月五日早朝から、五里店附近に於て渝河を中に敵軍と對峙してゐたわが〇

〇部隊は敵軍の頑強な抵抗に遭ひ少からず苦戰に陷つてゐた。何しろ敵は、此處を最後の一線と恃んでゐるだけに、新手の後續部隊が怒濤のやうに殺到し、間斷なく反擊の砲火を浴びせかけるのだ。戰は正に白熱化した。

この時、〇〇飛行基地に待機してゐた岡澤中尉は、〇〇部隊に協力して、對地攻擊をなすべしとの命を受け、直ちに柳田曹長の一機と共に出動した。時に十月六日午前四時三十分！ 全速力を以て五里店附近の上空にさしかゝつた岡澤機は間髮を容れず超低空の地上掃射を浴びせた。地上部隊もこれに呼應して一齊に火蓋を切る。敵軍はわが荒鷲の出現に極度に狼狽したものゝ、岡澤機目がけて死物狂ひに猛擊を集中するとその中の一彈が、不幸にも岡澤機の機關部に命中した。ビュッと噴き出す火焰、しまつた！ と思つたが、剛膽な岡澤中尉は、自若として掃射の手を緩めず、消火に務めたが火焰は愈〻燃え熾るばかり、最早これまでと覺悟をした岡澤機は火柱を上げながら河原目がけて不時着した。

其處は敵塹壕の直前で、友軍の最前線からは三百米も離れてゐる地點である。この態を見た敵は、餌物を狙ふ猛獸の如き態勢を示して、一齊に十字砲火を浴びせた。咄嗟に身を伏せた岡澤中尉は、素早く腰を探つた。と手に觸れたのは一挺の拳銃である。勿論この場合役に立つ武器ではないが、死力を盡して戰ひ、愈〻最期の時が來たならば、この拳銃によつて立派に自決しようと云ふ悲壯な覺悟だつたのだ。



岡澤機の不時着を目擊した柳田曹長は、如何なる犧牲を拂つても編隊長を救はねばならぬと、群がる敵に果敢な地上掃射を浴びせる事四回。だが、頑強な敵は少しもひるまず岡澤中尉目がけて殺到して行くのだ。かうなれば友軍の地上部隊に救援を賴むより仕方がない、だがこれを報ずべき通信筒がないのだ。萬事休す！と思つた瞬間天啓の如く柳田曹長の腦裏に閃いたのは、自身のはいてゐる飛行靴を通信筒に代へることだつた。素早く飛行靴を脫いだ柳田曹長は鉛筆の走り書で、

『隊長、前方〇〇米の敵前に不時着す、御協力を乞ふ。』

と認めるや、友軍の上を地上すれすれに飛び、サッと見事に投げ落した。と、待ちかまへてゐたかの樣に友軍の步兵が飛び出して來て其飛行靴を拾ひ上げた。

『これでよし！』

勇躍敵上空に機首を廻らせた柳田曹長は、再び地上掃射の釣瓶射。流石の頑敵もこの儘沈黙するかと見えたが、その時飛來した敵彈三發は、無念！　柳田曹長の胸板を貫いた。

『あッ！』と叫んだなり背後にのけぞつた柳田曹長は、氣丈にも、ぐッと機首を下げるや、死力を揮ひ起して地上掃射に向つたが、致命的な胸部の重傷である。遂に力つきた柳田曹長は、そのまゝ敵陣に突入するや、壯烈な自爆を遂げたのであつた。

この壯烈な光景に、戰友の弔合戰とばかりどッと蹶起した地上部隊は、渝河の波濤を壓する喊聲を擧げて突進し、阿修羅の如き勢ひを以て敵陣に突入、忽ち頑敵を潰走せしめたのであつた。そして、その二日後十月十一日には堅陣を誇る信陽を陷し、二週間後の十月二十七日には曠古の大戰果とも云ふべき武漢三鎭の攻略を完遂したのである。

危機に臨んで些も狼狽せず、機轉の飛行靴通信を以て編隊長を救ひ、頑敵を慴伏せしめた勇士柳田曹長の英靈は、この武漢攻略の情報に定めし莞爾と微笑んでくれた事であらう

（さし繪―伊東　顯）

感激の輸送機

ノモンハン飛行場から前線へ向はうとする時のことだつた。大草原の遙か彼方から赤十字の自動車が一臺走つて來た。見ると前線で負傷した勇士が〇名乘つてゐた。負傷兵はそこから飛行機で野戰病院に送られるのである。飛行機は丁度〇人しか乘れない輸送機だつた。

ところがその日は〇〇部隊の參謀が、同乘することになつてゐたので、結局一人の負傷兵が殘らねばならなかつた。

『どうぞ、參謀殿、お乘り下さい。』

輸送係の下士官がさう云つた。

『うん。』と云つて參謀が乘らうとしたが、自動車の中を見るとまだ一人の負傷兵が殘つてゐる。

『なぜ、あの兵は乘せないのだ？』

參謀が詰問すると、

『はつ、あの兵は明日空輸することになつてゐます。』

下士官はきつぱりと答へた。

『一名だけ殘すことはない、乘せてやれ！』

『いえ、どうぞ、參謀殿が……』

『俺はわかつてゐるが、一名だけ殘すことはよくない。』

『でも、さうしますと參謀殿が……』

『俺は乘らなくともよい、重傷者をこのまゝにしておけるか、命令だ、早く乘せてやれ！』

さう云ひ放つと、參謀は見渡す限り大草原の眞只中へ駈け出して行つた。

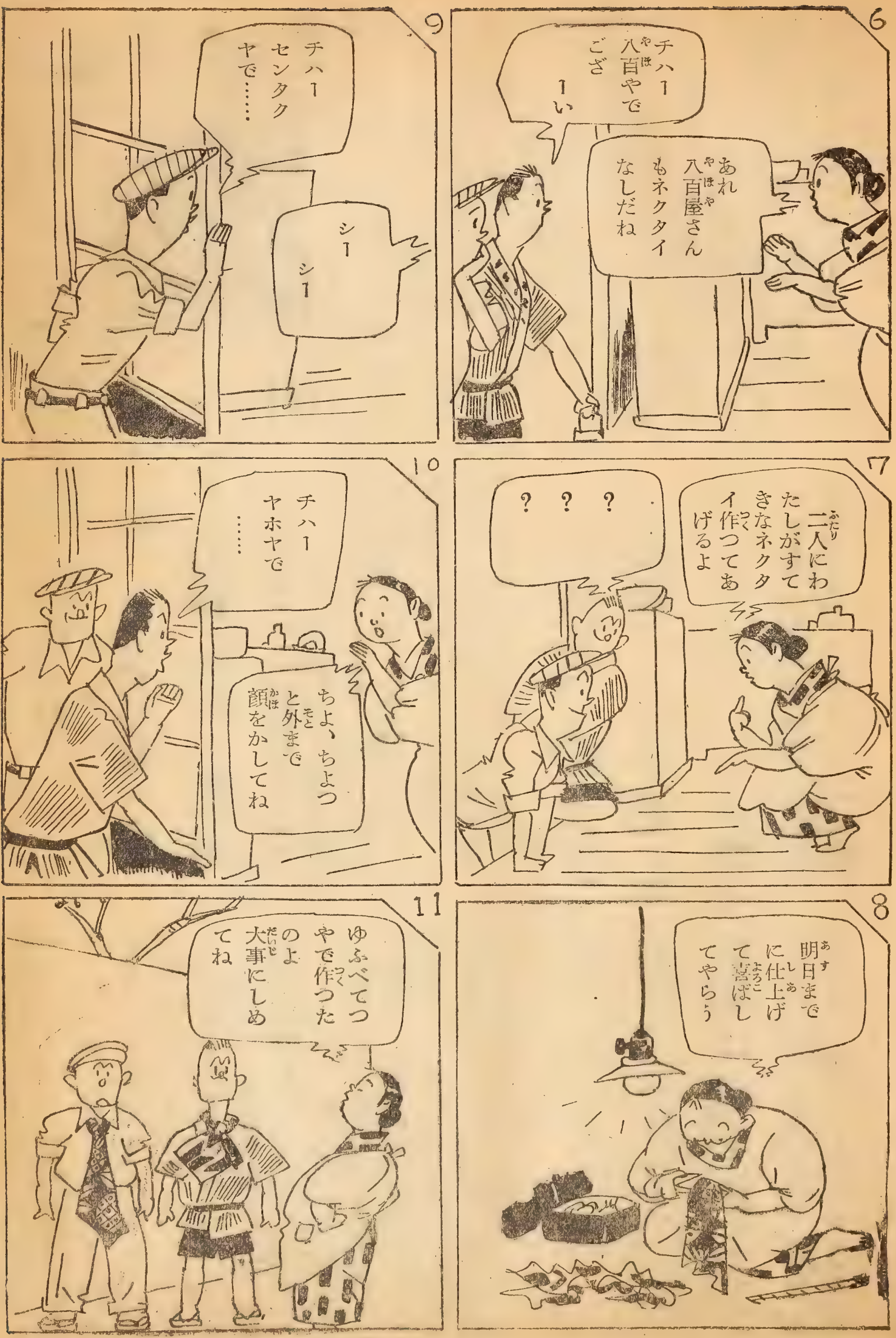
自動車の中の負傷兵は、顎に繃帶して仰向けになつてゐたが、參謀が駈け出して行つた刹那、起き上りながら繃帶を徐かに顎から兩眼の上へ持つて行つて、參謀の後姿に向つて敬禮した。

並居る者の眼には涙が光つてゐた。

かくしてその輸送機は、人々の感謝と感激を乘せて、プロペラの音も勇ましく、病院に向つて飛立つて行つた。

（井口靜波）

お勝手天下
川原久仁於
1
奥さん何おつくりなつてますだ
廢物利用で旦那さんのネクタイつくるのよ
2
どうこんなすばらしいのが出來たわ
まあ大したものですね
3
とてもよく似合ふでせう
手製とは見えんね
4
さてわたしも誰かにこしらへてやりたいが……
5
オヤ洗濯屋さんネクタイしてないね
買つてくれる人がないんでねへ、へ、へ


6
チハー八百やでござーい
あれ八百屋さんもネクタイなしだね
7
二人にわたしがすてきなネクタイ作つてあげるよ
？？？
8
明日までに仕上げて喜ばしてやらう
9
チハーセンタクヤで……
シーシー
10
チハーヤホヤで……
ちよ、ちよつと外まで顔をかしてね
11
ゆふべてつやで作つたのよ大事にしめてね

民族優生の大敵

頭はボケ氣が變になり
子孫まで惱ます惡質遺傳の因
恐ろしや病毒・酒毒の慘害

此の圖はドイツに於ける『丈夫な良い子を産めや殖せ』の宣傳ポスターです。

近年の統計を見ますと、年々生れる赤ちやんの數がだん／＼少くなつて來ます。それだのに身體の滿足でない弱々しい赤ちやんや精神の薄弱な低能兒や不良兒のみが多くなり、殊に馬鹿や氣狂ひなどが目に立つて殖えて來ました。厚生省の調べによりますと、昭和元年に六萬餘であつた精神病者が昭和十二年には九萬餘となり、今ぢや十萬餘に上つてる事でせう。『産めよ殖せよ』も結構ですが、斯うした惡質遺傳病者の年々殖えるのは近頃矢釜しく叫ばれてゐる民族優生の上にも非常な惡影響を與へますし、前途を考へると眞に憂ふべき現象と申さねばなりません。

ではナゼ斯のやうに惡質遺傳病者が多くなるのかと申すに、其の原因の最も主なるものは病毒と酒毒＝**ふる血**＝でありますことは病理學上から論じても實際的に見ましても毫も疑ふ餘地がありません。つまり斯うした毒があると、生命の源泉である血液が濁つて其の働きが鈍り、血行が妨げられて榮養の供給が不充分となりますから、全身的に衰弱を來たし、やがて種々なる惡性病の發生となり、果ては頭の最も大切な智能の中樞や身體の根幹とも言ふべき脊髓が侵されて忌はしき精神病者や手足も利かず大小便も人手を借りねばならぬと云ふ哀れな姿ともなるのであります

そればかりか、親に**ふる血**があると其の毒が生殖細胞に害を與へたり、胎兒に傳染せしめたりしますから、生れる其の子が白痴だつたり不具だつたり、それでなくとも何處かしらに缺點があり到底滿足な子寶を儲けることは出來ません。ですから民族優生への第一步は『**ふる血**を取る』から踏み出さねばならぬと申しても過言ではありますまい。

のぼせ、めまひに惱み軀はだるく
夏負けして手足が痺れ夜分眠れぬ人
―先づ血液に御注意―

＝**ふる血**＝病毒、酒毒、煙毒其の他種々なる毒素の綜合毒＝がありますと、先づ現はれるのは右標題のやうな腦症狀や神經症狀であります。斯うした前兆時代に**ふる血**を取

つて血液を綺麗にしますと、後の心配はスッカリ無くなりますが、其の儘捨てゝ置いたり一時押への對症療法などで間に合せて置いたりすると、早くて二三年、遲くも十年廿年の後に猛然として毒性を發揮し前記のやうな悲慘事を惹起しますから早く**ふる血**を取る心掛けこそ肝要でありませう。當研究所では古方醫學の治病原理を再檢討し、更に最新の病理學や藥物學等に新研究を加へ、最も効果的なる**ふる血**新療法を發見しました。

のぼせ、めまひも薄らぎ
安眠出來て頭もハッキリと

熊本縣上益城郡　福田キミ子

福田キミ子様

先日は御親切に『ふる血療法』書御送り下さいまして又其の上御見舞迄頂き重ね〲の御厚志誠に有難く厚く御禮申上げます。內容を拜見させて頂きますと餘りにも私の病狀に似て居りますので早速試用分を近所の藥局より買求めて服用致しました處、最初の內は左程變りもありませんでしたが、少し續けて服用致し居りますと何時の間にか永年苦しんで來ましたのぼせや、めまひが薄らいで、夜分は安眠出來て頭もハッキリし、毎日のお仕事も大變樂に愉快に出來る樣になりました。これも**フルチ錠**の御蔭と感謝して家內一同喜んで居ります。今後は御禮のしるしとして私と同樣に惱んで居られる方に一人でも多く御進めするつもりで居ります。

因に**フルチ**錠の藥價は十一日分三圓、二十二日分五圓、五十日分十圓、全國有名藥店及一流デパート或は東京市小石川區音羽町、大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）にあります。尙詳細は下記、古醫學研究所より無代進呈する『ふる血療法』書の一讀によられたし。

『ふる血』おろしに

フルチ錠

主治効能

病毒、胎毒、脊髓癆、中氣、**血壓亢進症、半身不髓症、心悸亢進症、甲狀腺腫、腦神經衰弱、リウマチス、神經痛、ヒステリー症、**頭痛、腺病、常習便秘、貧血。

藥價

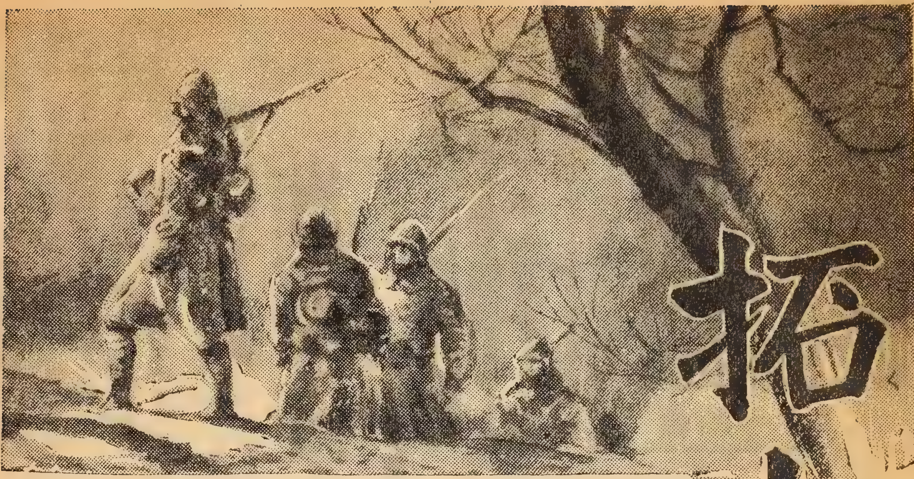
十一日分　三圓
二十二日分　五圓
五十日分　十圓
家庭徳用　二十圓
送料　內地十錢、其他四十二錢

無代進呈

ハガキで古醫學研究所へ御申込みになると古醫學から再檢討『病毒排除血液循環ト**ふる血**療法』並にこの療法で救はれた方々の全快禮狀集を無代進呈します

申込所

東京市京橋區京橋一の二〇
古醫學研究所
振替東京六五三〇八番
電話京橋(56)二五八四番



拓土の妻

竹田敏彦
富永謙太郎繪

地主と中間商人の搾取から農民を救ふべく、眞摯な組合運動を續ける森川勘治に、井田幸江は心からの敬愛を寄せ、その爲には、地主の息子佐野通夫の求婚も固く拒んだ。だが彼女の父で中間商人の喜兵衞は、當然勘治に反感を持ち、彼の襲撃さへ企んだが、反對に法に觸れて自殺しかゝる所を、皮肉にも勘治に救はれた。所が其後、農民の疲弊は愈々高まるので、勘治は決然、大陸に渡つての開拓を志し、組合の後事を、あげて佐野通夫に託した。通夫はこの以前、勘治の潔い心に打たれて更生し、幸江への執心も綺麗に斷つてゐたのだつた。

かくて、滿蒙移民の父加藤完治氏の武裝移民團に加はつた勘治は、雄々しく北滿に渡つて佳木斯屯墾隊の一員となり、加藤氏の盟友で、同じく移民の先達たる東宮鐵男大尉の指導下に、銃火の洗禮をうけながら、移民報國の一路へ驀進する身となつた。

一方、新時代の新運動に敗けた井田喜兵衞は、鄕黨の實業家田安に媚びて故鄕を賣る氣になる。而もその田安の次男俊介は、一目幸江を見るや否、執拗な求婚を迫るのだ。軈て勘治を追つて大陸に渡る念固い幸江は、止むなく始終を通夫に告げて救ひを求めた。

すると通夫は、喜兵衞を訪うて、幸江との縒が再び戻つたからと、改めての求婚を

切り出したばかりか、自分の父へもその様に言ひ拵へる。急場を救ふ爲の苦肉の策略なのである。所が噂を聞いた田安の方では、それでは此方の次男の要求を無にするのかと責めて來た。喜兵衛は果然惱みに陷ちたが、それにもまして、幸江の胸は惱み痛む。

謎の決心

田安の旦那を送り出して、座に戻つてきた喜兵衛は、放心したやうに、腕を組んで考へ沈んでゐたが、

『さうだ、若旦那に、何もかも打開けて……』

溜息とともに呟いた。そして

『しかし、俺はもう死んでも、この土地にはゐたくねえ……』

吐き出すやうに、獨語した時だつた。

『お父さん……』

廊下から聲をかけて、幸江が顏を出した。

『何だ、馬鹿に遲かつたぢやないか。』

喜兵衛は、どぎまぎして向直つたが、

『濟みません……』

と、幸江は、父親の前に手を突くと、崩れるやうに頭を下げた。

『お父さん、私、田安さんへ嫁きますわ。ですから……』

喜兵衛を見上げた潤んだ瞳は何か悲壯な決意に燃えてゐた。

『えツ……』

喜兵衛は、怪訝に眼を瞠つたが、

『今日まで、お父さんのお氣持も知らずに、私、我儘ばかり申しまして……』

幸江の聲は切なげに顫へた。

喜兵衛は、却つて、悸つとした風で、幸江の顏を凝視したが、

『幸江、お前は、わしと田安の旦那との、話を聞いてゐたんだね。』

『いえ。あの私、別に聽かうとして、聞いた譯ではありませんけど……』

幸江はへどもど答へたが、喜兵衛は、

『さうか……いや、俺も實はお前の心を汲んで、定屋へ義理を立てようと思つたのだが、さうなると田安さんの方では、この家屋敷を引受けるどころか、肥料代まで綺麗に淸算してくれといふ。きつい話なんだ。今夜のところは、こゝ一兩日考へさせてもらふことにして、歸したが……』

『濟みません。いつも〳〵私のことで、お父さんに御心配ばかりかけまして……』

幸江の瞳は、ほろりと濡れた。

『でも、私が田安さんへ嫁きさへすれば、お父さんも東京へ出られますし、何もかも好都合に運ぶでせう。私もう決心してゐますから……』

『うむ、しかしね……』

喜兵衛は、小首を傾げたが、

『それや、俺だつて、お前が可嫌なところへ、强つて遣らうなどと、無理なことは言ひたくねえ。お前を仕合せにしたければこそ、色々考へもし、苦勞もしてゐるんだが、お前が俺の立場を考へて、田安へ嫁つてくれるといふのなら、お父さんの重荷も下りる譯だ……實は今も、俺は今日の話を、定屋の若旦那に打開けて、言ひ難いことだが、金策のことを相談してもみようかとも思つてゐたところだが……』

『無駄なことだと思ひますわ。』

幸江は、躊躇の色もなく打消して、

『通夫さんがその氣でも、大旦那が何と仰有いますか、それに何處でも現金となりますと……』

『それもさうなんだよ……』

喜兵衛は、腕を組んで考へてゐたが、

『しかし、幸江……』

再び怪訝な顏を上げると、

『お前も、俺の苦しい心中を察してそれほどまでの決心をしてくれたのなら、ひとつ改めてお父さんが、訊ねておきたいことがあるんだが、正直に答へてくれるだらうな。』

『えゝ、何でも申上げますわ。』

幸江は、氣輕に微笑さへ泛かべた。

『正直に答へてくれるな。』

喜兵衛は、念を押して急に容を改めたが、

『他でもないが、お前はその前に、森川の勘治と、何か約束ごとでもしてゐたのではないかね。』

何と思つたか、突然こんなことを訊いた。幸江は、はつとして眼を伏せたが、喜兵衛は、幸江の羞みに燃える顔を讀み取るやうに覗き込んで、

『最初定屋の若旦那の話を、お前があれほど、嫌つてゐたのは勘治といふものがあつたからだと、お父さんは、睨んでゐたが、間違つちやゐなかつたらうね。もう過ぎ去つたことではあらうが、すこしわしにも考へがあるで、眞個のことを訊きたいのだよ。』

幸江は、輕い吐息を吐いたが、

『どうぞ、もうそんな古いこと、忘れていたゞきたうございます。もうあの人は、遠い滿洲へいらしつて……』

『それで、勘治のことは、諦めたといふだかの。』

幸江は、默つて答へなかつたが、暫くして、

『ほんとに今日までは、我儘ばかり申しまして、お父さんや、お母さんにも、濟まないことだと後悔してゐます。きつと心を入れ替へまして、嫁けと仰有るところなら、決して不足など申しませんから……』

『さうか……』

喜兵衛は、深い感動をこめて頷くと、ほろりと涙を滲ませた。そして、しばらく、默然と幸江の顔を見守つてゐたが、

『それでは、默つて田安へ嫁いでくれるといふのだね。』

『え、……』

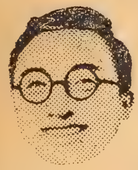
『さうか、濟まんが、よく言つてくれた……』

喜兵衛は、それでもほつとしたやうに言つて、

『お前が、その氣になつてさへくれゝば、お父さんも東京へ出て一旗擧げることも出來るし、第一、俺は、死んだつて、もうこの土地にはゐたくねえんだし。』

喜兵衛の顔は、次第と輝いて、

『それに、將來のことを考へると、田安へ嫁くのは俺らのためだけでなく、結局お前の爲にも仕合せだと、俺はさう信じてゐるだ。それや、若い時は誰しも、心の迷ひといふことはあるものだが、田安は小諸でも指折りの資産家だし、當人の俊介さんは、洋行もしようといふ人物だから、俺は勿體ないくらゐに考へてゐる。好き嫌ひは一時のこつた。今にきつとこのお父さんに、禮を言ふ日もくるといふものだよ。はつはは……』


人の知らぬまに
遠耳が
聞えたし不思議がられる名器のニュース
コマク破れがスグ數倍、絶對人目に見えず勞働も入浴も出來る明朗鼓膜・日英米特許星野醫學博士御發明、最遠症や唖者が齒でも耳でも聞えるホシノフォン等。
【説明書進呈】大阪市東區内久寶寺町南側 明朗社

喜兵衛は、もう嬉しさうに相好をくづした。

その翌日の夕方——

幸江は、學校の歸り道を、千曲川の土手を降りると、組合の賣店の方へ歩いてゐた。

通夫に逢つて、父親の危場を救ふために、心ならずも田安へ嫁かねばならなくなつた事情を、詫びずにはゐられない氣持だつた。しかし、自分と勘治のために、一身の迷惑も顧みず、思ひ切つた擬装の縁談まで持込んで、田安との話を斷切つてくれようといふ、通夫の氣持を思ふと胸が詰まつた。

『でも、こんなことを言つたら、通夫さんはどんなに驚いて、端たない女と蔑みなさるだらう……』

幸江は、足の歩みも鈍つたが、

『あら、まあ……』

突然、びつくりしたやうに顏を上げて、空の一角を仰ぎ見た。

森の上に、この四五日、めつきり白くなつた八ケ嶽の稜線が、繪のやうに美しく夕空に浮び出してゐるのだつた。

幸江は、しばらく、うつとりと見惚れてゐたが、

『さうだ、そのうちに、直ぐ私のほんとの心も判つていただける時がくるんだから……いゝわ。』

何か深い覺悟の色で、再びさつさと歩き出した。

『組合長は、居ねえでがすよ。』

賣店の奥から、顏を出した

當番の青年が、幸江の顔を見ると頭を下げた。

『あら、もうお歸りになりましたの。』

『佐助さんとこでがすよ。お稲さんが首を縊つて、自殺をはかつたといふ騒が持上つて……』

『まあ……』

幸江は、思はず叫んだが、

『でも、お稲さんは村を逃げて、行方が知れなかつた筈ぢやありませんか。』

『さあ、事情は判りませんが、何でも、首に繩を巻きつけて、背戸の松の木から飛び降りたんださうですが、運よく命は助かつたやうに聞きましたよ。』

『まあ……』

お稲さんも、やはり島田さんのために、同じ苦勞をしてゐなさるのだ。或は、自殺もそんな氣持だつたかも知れない——幸江は、何か悸つとしたやうに眼を伏せたが、その眼前には、先驅移民として、北滿の曠野に雄々しく戰つてゐる、勘治と島田の顔がちらついた。

魂となつて

とつぷり暮れた疎林の上に、淡い月影が冷たい風に揺られてゐた。

幸江は夢中で歩いてゐたが、林の道を左に折れ、お稲の家の窓明りが、間近く眺められてきた時であつた。

『幸江さんぢやありませんか。』

突然、前方で聲が聞えた。

幸江は驚いて、顔を上げたが、

『あら……』

近づいてきた團服の青年は、通夫だつた。幸江も足早に歩み寄つて、

『お稲さんが、大變ださうぢやありませんか。』

『今、そのことで行つてきたんですよ。傷は腰を打つたぐらゐのもので、大したことはないですが、全く、どうも困つたことですよ。』

通夫は、慨嘆するやうに言つて、梢にかゝつた夕月を仰いだ。

『事の起りは例の酌婦に賣るの、賣らぬの騒ぎからなんです。これも僕が勘治君から引繼いだ事務の一つだつたものですが、お稲さんは、島田君が勘治君と相談の上、上田の製糸工場へ入れてあつたんですよ。それを何うして嗅ぎつけたものか、佐助さんが今朝飛込んで行つて、嫌がるお稲さんを、腰に縄をつけるやうにして、引戻してきたんださうですが、さつき父娘で諍ひの最中、お稲さんはくわッとなつて背戸へ飛び出すと、松の木へ登つて、首に縄を巻きつけて飛び降りたんですが、幸ひ途中で縄が切れて死ねなかつたんださうですよ。』

『まあ……』

『佐助さんにしても、せつぱ詰まつてのことには違ひなからうが、もうちやんと百圓で酌婦に賣る約束で、手附金まで取つてあつたんださうですよ。』

『まあ……』

幸江は、思はず瞳を潤ませた。

『僕は、さつきも思ひ切り、佐助さんに言つてやりましたが、いくら親でもこれほどの犠牲を、子供に強ひる權利はありませんからね。お稲さんが死を以つて抗議しようとしたのは當然だ。死なれては元も子もないぢやないかと言つてやつたら、さすがに暗然としてゐましたよ。』

『……』

幸江は、言葉を合はせる勇氣もなく、ぢつと通夫を見つめてゐた。

『それや、娘を金に替へなければならないやうな、親も氣の毒な立場で、誰が悪いといふよりも、村全體が浮かばれないやうな、情勢が悪いといふ外はないのです。しかし、それだからといつて、そんな不徳が、無條件で、許さるべきことぢやありませんからね。僕、その時に言つてやつたんです。それほど金が欲しいのなら、お稲さんは、僕が買はう。さう言つて、三十圓の手附金を置いてきましたよ。』

通夫は、昂奮の眉を上げたが、

『幸江さん、僕は、あなたやお稲さんを、森川や島田の手に引渡すまでは、身を以て責任をつくす決心でゐますよ。』

『まあ……』

幸江は、はつとして眼を瞠つた。一々胸を刺すやうな通夫の言葉だつた。

『擬装緣談といふ非常手段まで取つて、あなたを田安の手へ渡すまいとしてゐるのも、僕の責任の完遂のためなんです……いや、あなたや森川への友情といふよりも、國策への協力といふ僕の國民的感情からなんです。つまり、森川や島田は、わが大和民族の大陸進出といふ重要國策の先驅者として、北滿に骨を埋める覺悟で出かけて行つたのです。東洋平和の捨石に甘んじようといふ、彼等に對する我々の何よりの報謝は、今後一人でも多く、移民を送り出すより外にはないのです……いや、もつと大切なことは、彼等に立派な配偶者を送ることですよ。森川や島田に、あなたやお稻さんを、立派に引渡すことですよ……』

通夫は、幸江の顏を覗き込むやうに微笑したが、

『僕は、今もお稻さんに言つてきたのですが、あんた方もその氣で、しつかりしてくれなければ駄目ですよ。骨を埋めるなら北滿で……下らぬ感情に囚はれて、自殺を企てるなんて、以ての外だ、國家の不忠者だと叱つてきたんだが……』

『ほんとうに……』

幸江は覺えず出かゝつた聲を吞んだ。それはお稻さん一人の事ではない——幸江の顏が月明りに向いてゐたら、通夫が驚き訝んだらうほど、幸江の顏は蒼白めて、苦しげに表情を歪めてゐた。そして、かすかに顫へる聲で、

『私だつて、し、叱られてゐるやうな氣がいたしますわ。』

詫びるやうに、切なく、通夫の顏を仰いだ。

『いや、僕の氣持が判つていたゞけばいゝんですよ……しかし、いゝ晩ですね……』

通夫は、さば〳〵した風で、月を仰いだが、

『あんたは、これからお稻さんを見舞つて下さるのですね、あんたとお稻さんとは、まあ、言はゞ、同じ運命を擔つた婦人同志ですから、よく言ひきかせて、慰めて上げてくださいよ。ぢや……』

『あら……』

幸江は、周章てゝ聲をかけたが、通夫は、聞えぬげにすた

キングレコード
KING
近衞八郎歸還第一聲
三ケ年に亘る戰野から赫々の武勳をたてゝ歸還した近衞の元氣な聲をおきゝ下さい
流行歌
續 あゝ我が戰友
（片面）花嫁軍歌……三門順子唄

すたと歩き出してゐた。その後姿を幸江は、ぢつと見送つたが、

『もし今あの人に、父の急場を救ふため、田安へ嫁く決心をしたなどと言つたら、それこそ、何と言つてお怒りになるだらう……』

何かほつとした氣持でもあつた。

それから、しばらくの後だつた——

『何しろ、お孃樣、これは親を親とも思はねえ業突くばかりでごぜえやすで、死なうたつて死なれねえんでさ。ほんとに、人騷がせなこつて……』

幸江は、佐助の聲を聞き流して、お稻の寢てゐる部屋へ足を踏み入れたが、煤けた五燭燈の薄暗い灯影に、お稻は蒲團に顔を埋め、かすかに啜り泣きの音が聞えてゐた。

『あら、どうなすつたの。』

幸江が、聲をかけても、お稻は氣付かぬ態だつたが、

『お稻さん、私……幸江ですのよ。』

『あら……』

お稻は、びつくりして顔を上げた。そして、

『まあ、お孃樣……』

恥かしさうに蒼ざめた頬を染め、眞赧に泣き濡れた瞼を見つめた。

『お氣分は、いかゞですの。』

『もう、何ともないんですけれど……』

お稻は、ちよつと眼を伏せたが、

『私、ほんとに馬鹿でございますの、定屋の若旦那も、そんなことでお國のために北滿とかで、命を投げ出して働いてゐる島田に申譯がないぢやないかと言はれたんですけど、やつぱり一人になると、悲しくて、切なくてもう、どうにも……』

『ほんとに……女の氣持は、誰しも同じことでございますわ。』

幸江は、やさしくお稻の肩に手を置いたが、暫くするとお稻が突然、

『ねえ、お孃樣……』

何か躊躇の色で、幸江の顔を眺めた。

『こんなことを申上げても、どうぞお氣にさへないでくださいまし……實はうちのお父さんたら、あなたも小諸の田安さんとかへ、縁組が決つたなんて申しまして……』

『あら、いゝえ……』

瞬間、幸江はどぎまぎ眼を伏せた。それを見ると、お稻は周章てゝ、

『いゝえ、私、決してお孃樣のお心を、疑つたりなどしてはゐませんけれど……』

必死の面持で遮り、

『うちのお父さんは、そんな拵へごとを言つて、私の責道具に使ふんですの……井田さんのお孃樣だつて、森川さんの爲に、一時は定屋さんの縁談まで振切つたが、やはり御兩親の急場を見兼ねて、田安さんへいらつしやるんだ。お前だつて、滿洲くんだりへ流れて行つた島田のことなんか綺麗さつぱり忘れて、親に孝行ができないのか……と、いい加減な出鱈目を言つては、私を責めるのでございますよ……いくら親でも、私口惜しくて……』

『…………』

『でも私、考へましたの。こんな態ぢや、生きてゐるうちは、どうし

たつて滿洲などへ、行けさうな氣がしませんの。それでいつそう、死んでしまつて、魂となつて、島田さんの……』

『えツ……』

幸江は、思はず叫んだが、

『お、お稻さん……』

聲を顫はせて、抱きつくやうに、お稻の手を握り締めた。

恐しき文屑

その夜――

小諸の田安を訪ねた喜兵衞が、歸つてきたのは、九時過ぎだつた。

『ぞく／＼するねえ。』

喜兵衞は、茶の間へ上つてくると、寒さうに炬燵へもぐり込んだが、

『田安さんの方は、どうでした？』

お島が、待構へてゐたやうに、喜兵衞の顏を覗いた。

『勿論、上々吉だよ。』

喜兵衞は、につこりして、

『實は定屋への義理立てもあつて、あんなことを申しましたが、幸江が進んで是非こちらへ、嫁らしてくれと言ひ出しましたのでと、話したもんだから、旦那もおかみさんも、當人がその氣ならと、大變な喜びやうで、こちらぢや少し眩しかつたぐれえだ。』

『ふんとにな……』

お島もにんまりした。

『旦那は、近いうちに、お前に幸江を連れて、東京へ行つてくれと、えらい乘氣でな、その時、田安のおかみさんも一緒に行つて、婚禮の衣裳なんかも見立てゝくると、かういふ話だ……なあ、幸江は仕合せ者だぞ。』

『ふんとにな……』

『えゝ時はえゝもんで、俊介さんは、いよ／＼二月にニユーヨークとかの支店詰になつて、洋行なさるんださうだ。それで俊介さんは、一月中に式を擧げて、幸江をニユーヨークへ連れて行くつもりでゐなさるんださうだ。ニユーヨークといへば世界でも一ばんの町ださうで、滿洲行なんかとはてんで話が違ふでのう。幸江だつて仕合せだよ。』

『さうとも……』

『そして、俺等は俺等で、また花の東京へ洋行だよ。はつはは……』

喜兵衞夫妻が顏を見合せて笑聲を出した時だつた。突然入口が開いて、

『旦那……』

吾作が周章てた調子で顏を出した。

『何だ、吾作……』

『旦那、佐助さんとこのお稻がね、首を縊つて、死に損なつたさうでがす。』

『お稻が……』

喜兵衞は思はず苦笑した。彼は、甲州屋を本部にして、森川一派の組合運動に抗爭した當時、お稻に情報を盗まれてゐたらしい不覺を思出したのであつた。

『それが、旦那、親爺の眼の前で、いきなり背戸の松の木へ驅け上つ

て、首に繩を卷いて飛び降りたさうでやすが、繩が切れて死に切れなかつたんださうでがす。』
『しかし、お稻は、島田が滿洲へ行く前に、隱して行つたんぢやなかつたかね。』
『そんな話でやすが、何でもお稻が、上田の工場で働いてゐるところを、佐助さんが嗅ぎつけて、またぞろ酌婦に賣らうとしたんださうでがす。それで……』
『親も親だが、子も子だね。』
喜兵衞は、ふんと鼻で笑つたが、
『旦那……』
吾作は、何か眼顏で押へて、
『靑年團ぢや大變でがすよ。佐助は國賊だ。村を追ひ出せと怒鳴り立てゝゐやすぜ。』
『國賊？』
喜兵衞は、急に眼を尖らせたが、
『俺ら、むづかしいことは判らねえが、何でも、島田は滿洲移民の決死隊の勇士だ。かりにもその勇士の許婚のお稻を、いくら親でも酌婦に賣つて贅澤しようなんて、國賊的行爲だといふのださうですが、旦那、俺らも聞いてみればそねえな氣もしやすが、さうでねえでがすかな。』
吾作の眼が、喜兵衞には、何か自分を詰問するやうに眩しかつた。
『うむ……』
喜兵衞は、視線を外らしてお島に顏を向けたが、
『幸江はゐるかね。』
『まだ歸らねえだよ。』
お島も、はつとしたやうに喜兵衞の顏を窺つた。
『歸らねえ？』
『校長先生のとこかも知れねえと思うてゐたで……』
『仕樣がねえな。もう十時ぢやねえか。』
喜兵衞は、邪慳にお島を睨んだ。そして、まさかお稻の眞似をするやうな、幸江でもあるまいとは思つてみたが、何かやはり不安になつた。あれほど嫌つてゐた田安へ、自分の方から嫁ぐと言ひ出した、幸江も何か覺悟してゐるのではなからうか――喜兵衞は雲のやうに湧く不吉な豫感に落着いてゐられなくなつた。
『吾作、お前、一走り校長先生のとこへ行つてきてくれ。』
喜兵衞は、いら／＼した風で立上つて廊下へ出たが、座敷へは入らずに、何を思つたか一人で、とん／＼と、二階へ上つて行つた。
『仕樣がねえ……』
いま／＼しさうに呟いて、幸江の居間へ入つてゆくとパチンと、電燈のスヰッチをひねつた。
机の上も、本棚も、何時ものやうにきちんと片付いてゐて、机の抽斗を開けてみても、別にこれといふ異狀がなかつた。
『俺も、どうかしてゐるぞ。これが神經衰弱といふ奴かな……』
ぼんやり本棚の書物の列を眺めてゐたが、
『おや……』
本の間へ突つ込んだ紙片らしいものが眼についた。

『何だ？』

引拔くと、書簡箋の書き差しだつた。喜兵衛は急いで眼に近づけたが、

『あッ……』

びつくりして聲を立てた。

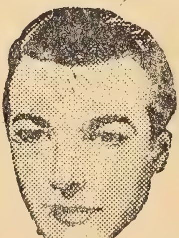
森川樣……。

幸江の美しいペン字が、喜兵衛の眼の前に躍つたのだつた。

森川樣、先日、山邊さんから通夫さんへ屆いたお手紙を拜見させて頂きました。この十七日の朝、大部隊の匪賊が、佳木斯の郊外を襲撃してきて、大激戰がありましたさうでございますね。あなた樣もその時に、援兵に出動なさつたさうですが、私、その時の勇ましいお姿を想像しまして、東洋平和の捨石となり、北滿の曠野に骨を埋めると仰有つた崇高なお心が、ぱつと眼の前で輝やいたやうな氣持がいたしました。森川樣、あなたと私の間には、形式的な口約束何一ついたしてはゐませんでしたが、でも、とつくに私の心は、永久の良人として、片時も離れずあなたのお傍に、傅いてゐるつもりでございます。實は、許されることでしたら、今でもお側に飛んで行つて、御一緒に村のためお國のために、東洋平和の捨石にさせて頂きたいのですが、今では、そちらの規則もございますことで、時の到るを待つてゐましたが、實は、私の身の周圍は、全く眞暗なのでございます。私の心を知つてくれますのは、佐野さんお一人でございます。いや、その佐野さんにも現在の私の悲しい覺悟だけは、お

青春期神經衰弱と其の療法

男子の生理的缺陷即ち性神經衰弱は、全身精力を衰退せしめ、病弱早老を招くばかりか精神的に及ぼす影響は一層甚だしいものがあつて、漸次頭腦の働きが鈍り、記憶力思考力は頓に衰へ、極度の神經衰弱症狀を呈する。



そればかりか、男性の特質たる勇氣、膽力、剛健、進取の氣性が次第に失せて、所謂中性的な性格に一變し、終に精神的偏屈者となつて世に立つことも出來ず、實に一生の大不幸を招くに至る。

この男性最大の缺陷たる青春病の治療は、從來適切なる療法少なく、却々救はれ難いものとされてゐたのであるが『ポリツク療法器』の出現により、遂に惱みは美事解消さるゝに至つたのである。從來の實驗者は數十萬に達し、悲嘆の底に沈淪して居た人で救はれたものも多い。又海外輸出も益々盛んである。本器の發明を知らぬ人は、今のうち急ぎ使用し、青春を取戻して立派な男性の資格を備へらるゝやうお奬めする。療器に關する詳細並に若き男性の心得置くべき『醫學知識』を解り易く說いた說明書をハガキで御申込次第無代で密送致しますから、これだけは是非一讀して男性醫學に關する新知識を得られよ、キツト世の中が明るくなります。

東京市芝區神谷十八ノ二號

東京新療法研究所

わかりにならないかも知れません。森川様。私はいつそ一思ひに、まゝならぬ自分の命を絶つて、濁つたこの世の絆から離れ、自由な魂となつて、あなたのお側——北滿の曠野へ飛んで行かうと決心いたしましたの。えゝ、きつと參りますわ。それも遠いことではありません。只今父の陷つてゐる或る苦境さへ拔越しましたら、すぐに〳〵參りますわ。

森川様、その前に、幸江が最後に、涙で申上げて置きたいことが……

手紙は、そこで切れてゐた。

『やつぱり、さうだつたか……』

喜兵衛は、放心したやうに、手紙を凝視めて唸つてゐた。

生首の門

『匪賊だつて、馬鹿に出來ねえ。なか〳〵やるぞ。』

武装移民團の佳木斯警備は、十二月に入ると、いよ〳〵緊張を加へてきた。

血も凍る連夜の警備。

逐へども盡きぬ匪賊の集團。

果然、移民團員の間には、何か言ひ難き陰欝な氣分が漲つてきたのである。

或る夜——

それは、十二月二十二日の深更、突如佳木斯の東方第一下士哨に匪賊の大集團が襲來して、戰鬪は拂曉まで續き、移民團到着以來の激戰を交へた直後のことだつた。

勘治は、警備から交替してきて、溫突で暖を取りながら、薄暗い電燈の灯影で日記をつけてゐると、どや〳〵と足音がして、向ふ側のストーヴを取卷いたと思ふと、

『それは、それとして、どうだい諸君、給與がなつとらんぢやねえか。』

『ひでえな……』

『それよりも、俺達は一體何しに、はる〴〵こんな處へ連れて來られたのか。開墾はなか〳〵始まらないぢやないか。』

『匪賊なんて蠅のやうなもんだ。追へども追へどもだ。わざ〳〵こんな土地を選んで、肝腎な開墾は、出來るのかね。』

『おい、島田、お前は默つてゐるが、滿足しとるのかい。』

『俺か、俺は信州の山猿だからな。はつはは……』

島田は頓狂に笑つたが、

『給與と言や、第五班の誰やらが、東宮先生に陳情したさうだよ。すると大尉殿は、何にも仰有らずに、ぢつとその男を眺めてゐたが、貴様、虱が湧いたな、どれ……といきなり服の裏を返して見られたさうだよ。はつはは……』

『何だ、虱扱ひか、へつ、へつ……』

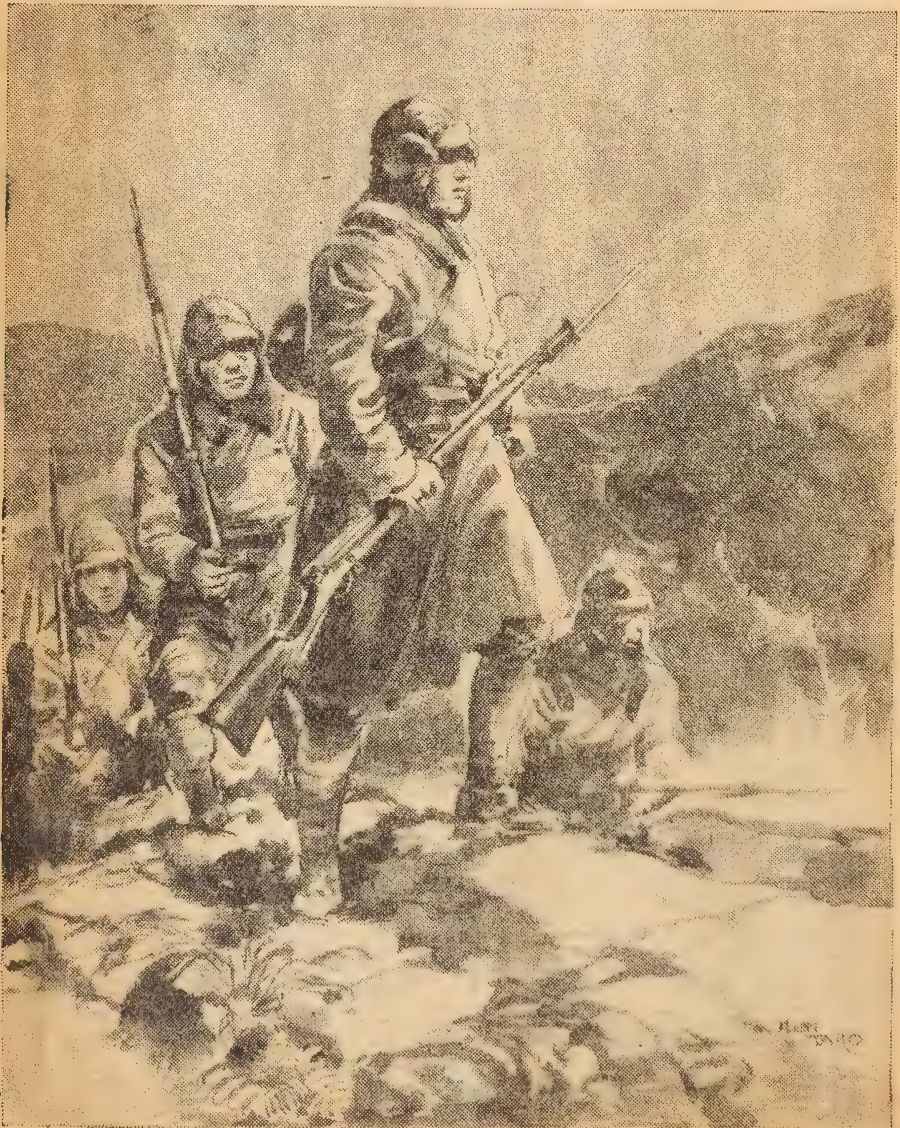
不滿を押しつぶしたやうな笑ひが、がらんとした粮棧（敷物倉庫）の中に響いた。

勘治は、その夜の日記に『全隊に漲る惰氣は、斷乎一掃せざるべからず』と記したが、武裝移民團が、團員の氣分一新策として、永豐鎭に先遣班を入植せしめることになつたのは、勘治の進言にも負ふところがあつた。

明くれば、昭和八年二月十一日——

紀元節の佳き日。

移民團では、此の佳日を期して、いよ〳〵先遣班を入植せしめることになり、精鋭をす



ぐつて混成一個中隊を編成し、熊谷大尉を先遣司令官に、農事指導員として山崎砲兵中尉外一名を隨行させることになつた。

春とは名のみ。北滿の奥地は、零下三十度の極寒の眞つ只中である。午前五時、選ばれた勇士達は、曉闇を衝いて營庭に整列した。東方遙かに皇居を拜して、天皇陛下の萬歳を三唱し奉ると、

『諸君！』

市川隊長の聲が、凛として響いた。

『銘せよ、昭和八年二月十一日！　此日こそ、祖國日本の搖ぎなき建國の礎たる佳節であるとともに、我が大陸移民にとつても永劫に記念さるべき佳き日である。諸君は、今から、祖國大日本帝國の光輝ある建國記念日をトして、北滿の曠野に新日本を建設すべき永豐鎭に入植するのである。大陸新日本建設の偉大なる歴史は、今、諸君の第一歩から始まるのである。行け、堂々と行け！』

部隊が意氣揚々と營門を進發して、佳木斯南門を出た時だ。

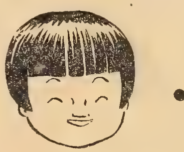
『萬歳！　萬歳！』

期せずして、盛んな萬歳の叫びが、北滿の朝風を搖がせた。

そこには、東宮大尉が待受けてゐた。しかも吉林軍千五百の先鋒に立つて、所謂東宮公館の猛者で編成された『東宮常勝隊』を引率して、大尉は馬上豐かに、颯爽と待受けてゐたのである。

腰間に、三尺の秋水を佩いた常勝隊の猛者振りに接して、移民團の勇士も、更に勇氣百倍したのであつた。

長蛇の列は、先づ東宮常勝隊を先頭に、次が移民隊、殿を吉林軍が承つて、寒風つんざく曠野を、入植地永豐鎭めざして行軍を開始

良い子！強い


戰時下の最大急務!!

子供の血を作れ、肉を作れ、然も最も大切なる父母の務めは、子供の魂を作ることなり、魂の糧を與ふることなり。

『講談社の繪本』は、次の時代を背負ふお子様方の、人格の向上、心身の鍛錬、知識の涵養等、樂しみ乍ら愈々立派になるやう苦心して編輯して居ります。今月は次の三冊が新しく出ました。誰方も大切なお子様方の爲ぜひお與へ下さい。

定價五十錢（送料三錢）

第二學期用

算術、讀方、作法、修身、唱歌、綴方、圖畫、手工など、お子様方の豫習復習の補助、學力增進のもととなるやう工夫致しました。

した。

佳木斯を出て、果てしなく續く丘陵の波に乘り、南東指して行くこと三十四粁で、横道河子に達する。部隊は、その日の午後、此地に到着して一泊することになつたが、部隊がそこに進行を停止すると、東宮大尉は、移民隊の先頭へ馬を走らせてきたが、

『森川伍長、森川伍長はゐないか。』

と、大聲で叫んだ。

大尉は、松花江を下る船中で相語つたあの夜から、森川勘治の名を記憶してゐたのだつた。

『はつ……』

勘治が進み出ると、

『設營班長を命ずる！　決死隊だぞ、いゝか。十名の隊員を選んで、卽時永豐鎭に向つて强行軍を敢行し、明日本隊が到着するまでに、宿舍割をして置くのだ。わかつたか！』

『はつ……』

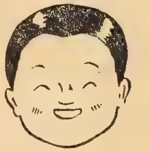
勘治は、顎髯の大尉の顏を注視した。その瞳には、この絶大の信賴に應へる感謝の念が燃えてゐた。

彼はすぐ各班から決死隊員を選んで、横道河子を出發した。その中には、山邊も島田もゐた。

『今夜こそ、匪賊の巣窟へ飛び込んで行くのだ。』

誰の顏にも、悲壯な決意が溢れてゐた。

めざす永豐鎭は、横道河子から更に二十四粁、峠を二つ越えると、地形は緩やかな傾斜を作り、これを南へ、草原の濕地を降り、峠から

子！繪本の子！


荒鷲の大爆撃、猛牛戰車隊の活躍、決死隊の敵前渡河、砲兵隊の猛射等、世界に比類なき我が陸軍を、美しい繪と感激深き記事によつて紹介した繪本。

定價五十錢（送料三錢）

明朗健全なる漫畫、興味深くて教育的な讀物など今迄世にありふれた漫畫繪本とは異つて、眞に隅隅まで子供を良くしたいとの念願に燃えた繪本!!

定價五十錢（送料三錢）

此の外に既刊繪本百數十種!!御選擇自由!! 各地の有名書店にあり。

●發行所　東京小石川　大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

十五粁、國道に沿つて草原の盡きたところの一寒村がそれであつた。

やがて、北滿の曠野はとつぷり暮れて、一行は默々と峠から濕地を降りつゝあつた。

その時だつた。

『おい森川君……』

山邊が、勘治と肩を並べて囁いた。

『君が永豐鎭一番乘りの班長を承つたのは、必ず北滿にG村建設ができるといふ、吉兆だよ。』

『俺もそんなことを考へてゐたんだが……さう言へば、この邊の景色が、どこか俺達の故鄕に似てゐるぢやねえか。』

『似とる、似とる、そつくりだよ。』

山邊も懷かしさうに、星明りに起伏した丘陵を眺めやつた。

一行は、目的地に近づくに從つて、疲れも忘れて緊張し、嚴しく警め合ひながら、進んだが、

『たうとう來た。』

『えらい處だな。』

疲れた足を踏みしめて、ほつとしながら、部落の北門にかゝつた時だつた。

『あッ!』

先頭の一人が叫んだ。

『何だ、何だ!』

『ほら、生首だ。』

『あッ……』

門を仰いで、思はず眼を背けた。ほのかな星の明りの中にも、荒繩で吊り下げた生首が、鬼哭啾々、恨めしげに一同を睨んでゐるではないか。

『うむ、地獄の門だ。』

『血の洗禮だよ。はつはは……』

冗談らしい笑聲も、不氣味に響いて、さすがの勇士達も荒膽をひしがれた。

それも道理、當時永豐鎭は、紅槍會匪の巣窟だつたので、人家二百戸の三分の二は、土民が避難して空家となつてをり、中央通りには櫛の齒の拔けたやうに、商家の燒跡が慘ましく眼について、部落全體が、ひつそりと、さながらの廢墟と化してゐた。

『地獄に違ひねえよ。』

『猫の子もゐねえ。』

一同は、銃劍を閃めかしながら進んでゐたが、

『しつ……』

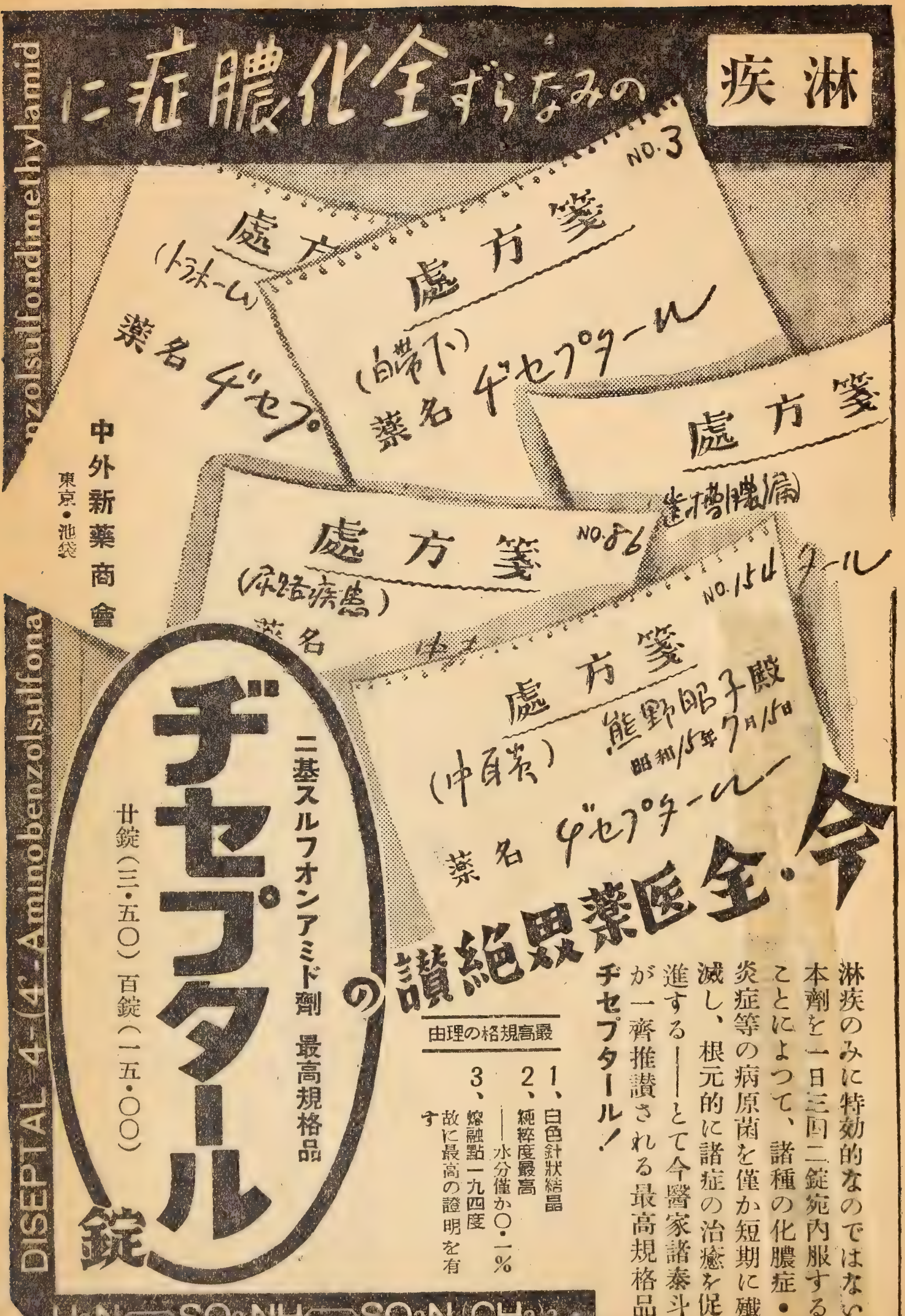
瞬間、よろめくやうに横合ひの軒下の暗から、飛び出した黒い人の影!

『こらッ……』

先頭の一人が、飛鳥のやうに飛びかゝつて行つた。

（つゞく）

開拓の先驅者としての勘治らの苦鬪は續く。然るにこの『拓士の妻』たるべき幸江が自ら田安家に嫁くといふ。彼女の本心は何處に?


淋疾
のみならず全化膿症に
DISEPTAL 4-(4'-Aminobenzolsulfona
nzolsulfondimethylamid
處方箋 NO.3
(白帯下)
藥名 ヂセプタール
處方
(トラホーム)
藥名 ヂセプ
處方箋
處方箋 NO.86
(尿路疾患)
藥名
NO.1514 タール
處方箋
(中耳炎) 熊野昭子殿
昭和15年7月15日
藥名 ヂセプタール
中外新藥商會
東京・池袋
ヂセプタール錠
二基スルフォンアミド劑 最高規格品
廿錠（三・五〇）百錠（一五・〇〇）
今・全医薬界絶讃の
淋疾のみに特効的なのではない本劑を一日三回二錠宛内服することによつて、諸種の化膿症・炎症等の病原菌を僅か短期に殲滅し、根元的に諸症の治癒を促進する——とて今醫家諸泰斗が一齊推讃される最高規格品
ヂセプタール！
最高規格の理由
1、白色針狀結晶
2、純粹度最高——水分僅か〇・一％
3、熔融點一九四度
故に最高の證明を有す
H2N—◯—SO2NH—◯—SO2N(CH3)2

國策協力の實例　（懸賞募集一等當選）

惰眠を醒ます板鐘

祖國振興隊長年隊長　牧翁の奮闘實話

宮崎縣西諸縣郡狹野小學校長　白川馨

（牧兵吉翁の早起警報板を打ち鳴らす元氣な姿）

板鐘の主

雲表に聳ゆる聖峯高千穗を朝夕仰ぎ見る山紫水明の山村、宮崎縣西諸縣郡高原町狹野。狹野といへば、人皇第一代神武天皇が御誕生遊ばされた皇子原があり、天皇が御幼少の日を御過し遊ばされた土地であつて、今では狹野神社を建立されてゐます。言ふまでもなく、官幣大社宮崎神社別宮、常に參拜の人が絶えず、更に高千穗峯を抱く霧島山は國立公園の一つであり登山者にとつてこの狹野口は宮崎縣側登山口として有名な土地であります。

この狹野の里に數年前から、其の音も床しい板鐘が朝毎に鳴り響いてゐます。どんな風雨の日も、嚴寒の朝も、此の板鐘は、夏ならば四時半、冬季には五時半に、村人達の靜かな眠りを醒ましてゐます。勿論町の中央町役場には新時代のモーター・サイレンがありますものゝ、此の狹野までは遠隔のためによく聞えないのです。狹野の里に、この板鐘が鳴

り響くやうになつてから今日迄、數年の歳月は夢のやうに流れ去つて行きました。この板鐘の主こそ、我が宮崎縣が天下に誇る祖國振興隊中の長年隊隊長牧兵吉翁であります。

翁は、本年七十二歳の高齢であり乍ら、精神的にも肉體的にも其の元氣さに於てはなほ壯者を淩ぐものがあります。今から足掛四年前支那事變が勃發の頃から、我が牧兵吉翁は、まづ精神の振起は早起よりとの信念のもとに、直ちに自費を以て板鐘の取付を行ひ、村人の惰眠をさます朝の警鐘を鳴らし始めたものです。

『醒めよ、活動の朝は明けたり。』

と、朝毎に鳴り響く此の鐘の音は、物靜かな山村の人々に、幾多の感動と激勵とを與へたものです。この生活改善のために、早起奬勵のために盡瘁された牧翁數年間の功績を證明するものは、本年六月十日、『時の記念日』に、翁が、此の地方にて唯一人、左記の如き表彰狀を授けられた事であります。

表彰狀

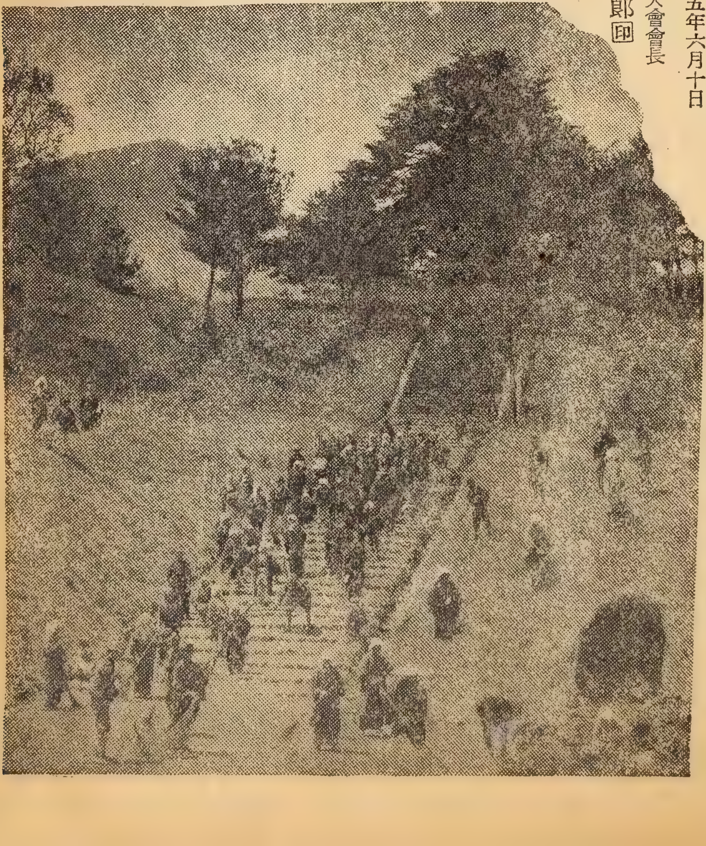
牧兵吉殿

貴下夙ニ生活改善ニ努メラレソノ實行ヲ促進シ社會民衆ニ裨益スルコト少カラズ仍テ宮崎縣學務部長ノ推薦ニ依リ茲ニ之ヲ表彰ス

昭和十五年六月十日

財團法人生活改善中央會會長
伯爵 林 博太郎 印

この牧翁は今迄ほんとにあらゆる人生の苦難を突破して來た百戰錬磨の勇士であり、今では村内でも屈指の資産家であり、悠々自適閑雲野鶴を友として、世俗の外に超然として居られる身分であり乍ら『この國家非常時に、老人でも一役買つて出でねば。』と身を挺して社會奉仕の第一線に出て、活動を開始されたものです。今では、小學校の兒童達の生きた手本として、學校では訓話の材



(寫眞は聖地皇子原に淸掃奉仕する長年隊員、遙か後方の山は高千穗峯)

料となり、兒童達も『あの牧翁に負けてはいけない。』と、翁を敬慕し、その颯爽たる活動振りと、不屈不撓の精神力に鞭打たれてゐる有様であります。

この山村で、牧翁の朝起警鐘が始まると前後して、我が宮崎縣では、縣知事相川勝六氏が祖國日向の振興を目指して、宮崎縣祖國振興隊の組織に着手しました。着々として、各地に振興隊の結成を見るやうになり、縣下を擧げて、各種奉仕事業に、軍人遺家族の援護に、荒蕪地開墾に、資源開發に、振興隊旗の下、幾萬の隊員は流汗淋漓の勤行を始めたものです。

長年隊の誕生

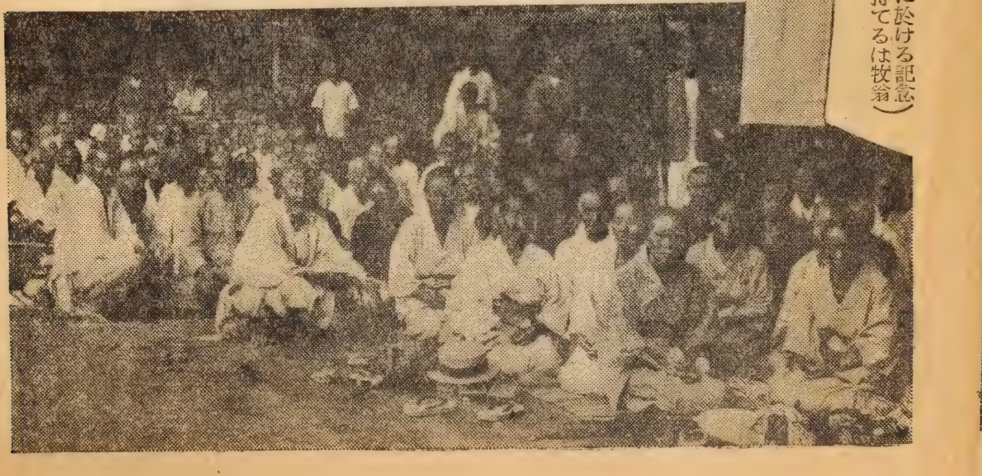
この時です。何でこの縣下擧げての壯擧を意氣軒昂の牧翁が默視しませう。直ちに翁は村内の六十歳以上の、所謂還暦の男女に呼びかけて、老年乍らこの祖國振興隊に合流して社會國家のために、老後の御奉公をしたいと申出でました。縣でもこの老年達の奇特な行爲と其の意氣に動かされて、こゝに祖國振興隊長年隊なるものが誕生したわけです。この長年隊には、特に縣知事即ち祖國振興隊統監隊旗が授與されまして、長年隊の集團行動の時などには、この隊旗を先頭に押し立てゝ活動してゐられます。

牧翁の、その後に於ける隊員の指導誘掖に盡される努力は、並大抵のものではありませんでした。學校道路等の掘開に、田畑の開墾に、或は神社聖域の清掃奉仕に、時折この長年隊員を召集して一生懸命の活動を續けてゐられます。五月半頃の狹野神社社務所參道改造にも此の長年隊の出動奉仕がありました。神社側としては、此の老人達の奉仕に幾許かの慰勞謝禮を贈つたところ、丁度、村の小學校の奉安殿建設が決議されてゐる矢先でもあつたので、直ちに此の報勞金を、この奉安殿建設費へ寄附されました。村では此の御芳志が此の事業の上に、一層の光彩を添へたことをいたく感謝してゐます。

牧翁の奮闘

長年隊員の數は、現在百八十名で、最年長

（長年隊創設一周年に於ける記念總會、後方帽子を持てるは牧翁）



者は八十八歳であります。昨年、國策として百億貯蓄が叫ばれるや、長年隊ではこれ又、老人は老人なりで相應の協力を惜しむべきでないとして、直ちに、この貯蓄强調運動に乘り出し、非常な熱を以て、その實行を促しました。そして立派な成績を收めました。先づ牧翁は、長年隊員中には無學のために、又は其他の理由で社會の情勢について認識の無いものや、無關心の者もゐるからとの理由で役場より社會主事、組合より專務理事、學校より學校長(筆者)の來援を求めて、部落毎に、隊員を集めて國勢の現狀や事變の推移等より說き進めて、貯蓄の必要や其の方法についてお互に膝突き合せて協議を重ねて歩き、遲き時は午後の十二時頃までも老の身を厭はず、貯蓄奬勵に懸命の奮闘を續けられたものです。古來『至誠神に通ず。』と言ひ『至誠にして動かざるなし。』とも言ふ通り、この翁の至誠奉公の精神は、隊員の大賛同の裡に、約一週間巡回奬勵の日が續きました。

老人仕事で一千圓

今まで貯金通帳を持つたこともなかつた幾人かの老人達までも、みんな眞新しい貯金通帳を手にして興亞の歩武を進めることになつたのです。それから僅々六ケ月を經た本年の春には、この長年隊員の各人が、桑條剝皮、草履作り、廢品蒐集等の老人仕事に依つて得た些細な金を貯蓄した額が、何と一千圓を超過したのです。一口に一千圓といへば何でもないのですが、其の裏には、血のにじむ隊長の活動と犧牲と意氣地が潛在することを忘れてはなりません。牧翁はじめ隊員一同は、この結果をみて今更の樣に吃驚したものです。

今年の春も狹野神社の櫻並木の下で、春季總會を開催した長年隊員は、

『今後一層國策に協力し、老人だとて遊んではゐまい。でも身體に氣をつけて、一日でもこの榮え行く聖代に長生しよう。』

と重ねて固い申合せをしました。來賓も隊長も隊員も此の調子なら近き將來に、一萬圓貯蓄達成祝賀會も出來ると語り勵ましつゝ篤行者の表彰等を行ひ、共によろこびの總會を盛會裡に終りました。

村の信用組合でもこの長年隊の貯金だけは特別取扱ひをして、好利率の利子配當をしたり、時折、開催の長年隊會の時など老いたりと雖も國策の第一線に乘出して、祖國のために奮闘するこの愛すべき隊員の方々に、御見舞や奬勵金や感謝狀をおくつて、この美擧を推賞しその發展を祈つてをります。今年の五月でしたか、本縣の門川といふ村にも此の長年隊と同樣な長年隊が出來ました。牧翁はこの門川隊の出來たことを知るや、我が事のやうに喜び、

『私は、こんな團體が、各地に出來てくれてこそ滿足です。一人でも共鳴してくれる人が出來たことが有難いです。年齡から考へても分る通り名利なんか念頭になく、只社會國家のために奉公が出來る間は、うんと御奉公さしていたゞくのです。』

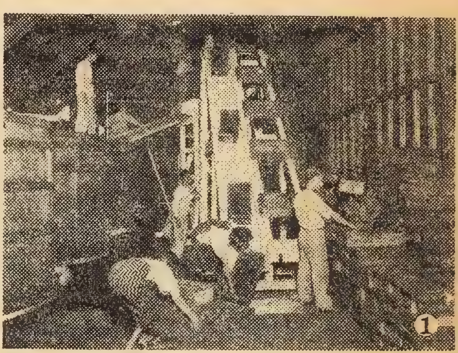
と元氣よく話されました。翁は現在狹野神社の神事奉仕のことにもつくされてゐます。私(筆者)は昨年の四月、この村の小學校長として赴任して來ましたが、この特異な長年隊の活動と其の心意氣に感じ、就中この隊長牧兵吉翁の篤行に敬服し、こんな環境が、私の學校教育の上にも、光明となり恩惠ともなつてゐることを感謝してゐるものです。(終)

美味滋養
ぶだう酒

赤玉ポートワインはかうして出來る

内地著名の優良葡萄產地から穫れた美味にして榮養豊かな原料葡萄です。

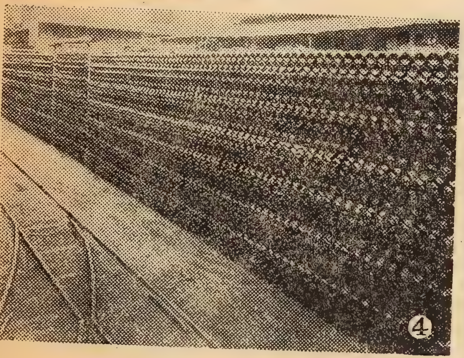
本舗　株式會社　壽屋



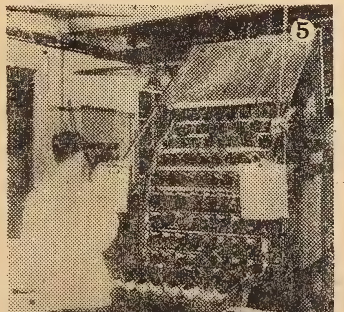
(1)原料葡萄は、ごらんの通り破碎機にかけて、豐かに湛へた汁を採取し、これを醱酵させて、赤玉ポートワインの原液を造ります。

(2)見上げるばかりの大樽。その大樽の山。この中に各地の直營農場や作業場でつくられた純良無比の原液がなみなみと湛へられてゐます。

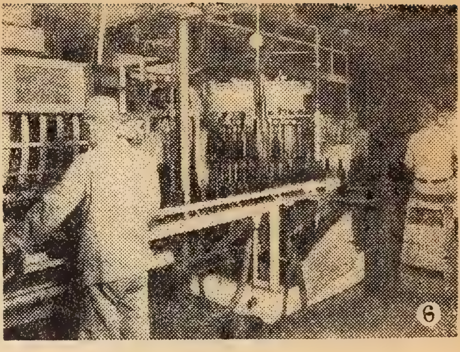
(3)税務署の査定をうけた葡萄酒は、かうした所に貯藏され、熟成を待つてをります。清淨にして行き屆いた管理のもとに



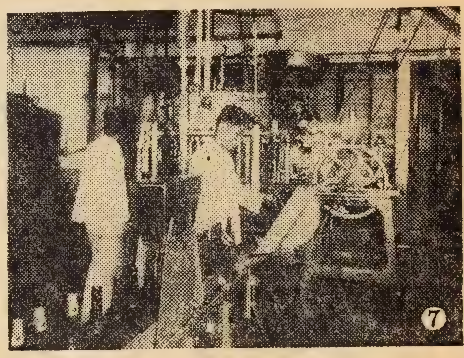
(4)驚くべき瓶の集團ではありませんか。一寸見たゞけでは、何千何萬あるか見當もつきかねます。こんな集團が幾つかあるわけです



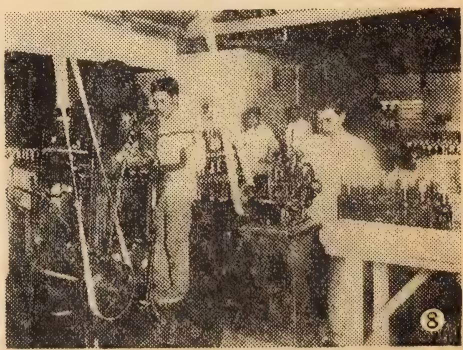
(5)こんどはその瓶をかうした洗瓶機にかけて、チリ一つ殘さぬやうに洗ひます。で、この洗瓶機の一日の能力は五萬本であります。



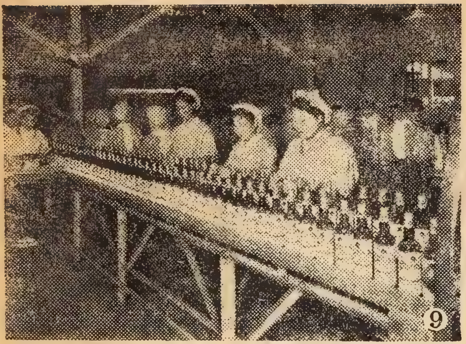
(6)綺麗に洗ひ上つた瓶が機械的に送られて來る。一方貯藏庫から送られて來た葡萄酒がこれまた機械的に片つ端から詰められます。



(7)瓶詰機をはなれた瓶の中には芳醇な赤玉ポートワインが一杯滿ちてゐる。これに王冠を打たねばなりません之は王冠打ち機です。



(8)王冠打ちがすむと今度は口貼り作業で、口貼り機が熟錬者の手によつて巧みに操作され、面白いほどグングン能率を上げてゐます



(9)さあ、愈々お化粧も仕上げになると、何といつても優しい女工さんの天下です。鮮かな手際。これは本貼り作業の一部です。

(10)これは外貼作業。能書や説明書を一寸當てたかと思ふと外紙がくるつと巻く。これで皆様のお手元へゆく晴れ姿が出來上りました

(11)此處は研究室。あらゆる設備に萬遺漏なく不斷の研究努力がなされてゐます。さればこそ赤玉ポートワインの純良なのも當然です

講談

長英と三次

大島伯鶴
中一彌畫

長英開業

天保年間開明の醫者の魁といはれましたのは奥州水澤出身の高野長英。名を讓、號を瑞皐と申します。この先生は長崎に渡來せられました蘭醫シーボルトといふ人の門下、尤もこのシーボルトといふ人は和蘭人ではない。獨逸人です。英米の事情にも精通し、日本に來られて、長崎に鳴瀧學校といふ校名の下に、蘭醫學の教授をすることになつた。希望者がぞくぞくと鳴瀧學校に集りましたが、始めから終りまで蘭醫學を研究し續けたのは長英を除いて外にないのでございます。

長英、功成つて江戸へ歸つて參りました。麹町の隼町に開業を致しまして、故郷に殘した母親を呼寄せましたが、さて店を開けてみたけれども更に患者が來ない。國表から呼寄せて、若黨として召使つてゐる八藏といふ、洵に忠義者で、水澤にゐた頃は作男、叔父玄齋の藥箱持として召使つてゐた男ですが、忠實に働

いて呉れる。

八『旦那、どうしてかう病人が來ねえんでせうな。』

長『馬鹿野郎、病人が來ないで結構ぢやないか。世間がすべて無事泰平、こんなお目出度いことはない。醫者が忙しいやうぢやいかんよ。さういふことを口に出して言ふもんぢやない。寺の坊さんが、どうも檀家に不幸がなくちや金にならねえと口に出して言つたらどうだ。その寺の坊主は叩ッ殺されるぞ、アヽどうもどこそこの御隱居は達者でお目出度い。早くお陀佛になればいゝ、といふのは腹の中だ。醫者だつてさうだよ。世の中の人がみな健康でお目出度い。』

八『アヽさういふもんかね。』

長『さういふもんだ。義理でもさういはなければいけないよ。』

八『厄介なもんだね。』

まるで患者が來ないけれども、長英先生は平氣なもの。すると或日のこと、

○『エヽお願ひでございます。』

八『なんだね、お前樣は。』

○『こちら樣はお醫者樣でございませうか。』

八『アヽ醫者だよ。』

○『私は丁度一昨年から身體の工合が惡くなりまして、もう八方のお醫者に掛つて見ても、どうも思ふ樣に癒りません。あんまり不思議でなりませんから、賣卜者に見て貰つた所が、巽の方角の醫者に掛れと、かういはれました。それから磁石を以てだん〳〵辿つて見ると、こちらが巽に當ります。世間で聞いて見ると、あんまり評判のよくないお醫者樣だが、兎に角物は念晴らしで、藥を一服戴きてえんでございますが……』

イヤ怒つたのは八藏で、

八『馬鹿にしやアがつて、待つてろ……旦那樣、俺に暇を下せえ。』

長『なんだ、突然に暇を呉れとは。』

八『馬鹿々々しいたつて、今これ〳〵斯う〳〵だよ。』

長『それが大事ぢやないか。』

八『俺は今斷るべえと思つたけんどな。それでも旦那樣の耳に入れなければ惡かんべえと思つて……』

長『アッハヽヽ、さういふ患者が一番大切だ、早くこつちへ上げろ。』

八『さうかね……こつちへ上んなせえ。』

○『御免下さいまし。』

長英ニコ〳〵笑ひながら、

長『オヽお來でなさい。巽の方角の醫者に掛れと賣卜者に見て貰つたら云はれた、ウーム。賣卜といふものは當るわ。』

○『左樣でございますか。』

長『ウム、お前さんはね、もう三日持たないよ。』○『エッ。』長『もう迚も助からない。』○『そりやア大變……』

長『だが併し、その方角がいゝ爲めに助かる、アッハヽヽ、サアもつとこつちへおいで。ドレ〳〵先づ脈を取つて見て、この脈の動いて居る内は大丈夫。』

○『左樣でございますか。』

やがて袋から取出したのが聽診器、天

保年間に聽診器なんてものを持つ醫者はございませぬ。これはシーボルトから卒業する時に貰つて來たもので、いきなり鳩尾の所へあてがはれたから驚くまいことか、眼を白黑やつてゐましたが、

長『イヤ宜しい。五日分の藥を上げる、水藥と粉藥。』

○『ハイ。』長『これを服んで若し五日で癒らなかつたら、癒るまで藥代は一文も要らぬ。宜しいか。五日で治つたらば心持だけ、お前さんの氣に入つた物、假令果物でも菓子一つでも持つて來ればそれで宜しい。サアこれを持つておいで。』

これが五日でケロリと治つた。この二年以來苦しんで、八方の醫者に掛つて癒らないのが、僅か五日で治つたんですから、サアこの患者がそこら中觸れて歩く。

○『何しろね、隼町の高野長英といふ人は、耆婆扁鵲の生れ更りですね。盲人は直ぐ眼が開いて、躄は直ぐ腰が立つといふ、實に不思議で、私は五日で……』

△『さうですか。それでは。』てんで、マアそれからそれへと吹聽するから、サア長英の玄關先は急に忙しくなる。

藥禮三百兩

ところで長英といふ人は、貧乏人からは藥禮を貰はない。そればかりではございませぬ。家庭の事情を見、よほど困窮して居るなと思ふと、米、味噌、醤油を自ら提げて持つて行つてやる、生神樣です。その代り金持からは澤山に藥禮を取る。雲州松江の城主松平出羽守樣、どうも身體の調子がお惡くて、お抱へのお醫者では思ふ樣に癒らん。高野長英の評判を聞いたんで、一ッ長英を聘んで見ろといふので、長英は御殿へ上りました。御拜診を申上げて、三日の投藥でケロリと治つた。出羽樣大層お喜び、

出『成程、長英は天下の名醫、早々治療代を遣はせ。』

御家來が委細承知と、袱紗包に包んだのが三日の藥代です。流石に出羽樣ですから、さうどうも吝つたれなことも出來ませぬ。目錄に三十兩を添へて、長英の邸。

長『オヽ、コレハ／＼お來でなさい。どうですかお殿樣は。』

家『お蔭樣を以ちましてすつかり全快致しまして、もうそれは奥方樣を初め若殿樣、そのお喜びは一方ではございませぬ。又家來一同も先生に宜しく申上げて呉れとのことで。』

長『それはマア結構なことで、お目出度うございます。』

家『就きましては先生、甚だ不躾ではございまするが、藥價は何程でございませうか。』

長『ア、それは／＼御叮嚀に……左樣、エ、出羽樣は何萬石で在らつしやる。』

家『エ、十八萬三千石――』

長『ア、左樣か。さうすると割がいゝな。』

家『ハヽア、どういふ譯で割が宜しいので。』

長『ア、三百兩頂戴しよう。』

家『エヽツ三百兩……』
長『二十萬石になると五百兩戴く。僅かな所で三百兩で、七掛になつて居るな。』
家『七掛……してどういふ妙藥を御投劑になつたのでございませうか。』
長『イヤナニ大した藥でもない、元價二十八文かな。』
家『二十八文が三百兩……』
長『アヽ一寸お待ち下さい。藥が病ひを治すと思ふと違ふよ。醫者が治すんだよ。失禮ながら出羽侯のお命が三百兩で買へますか、エヽ安いものではないか。あなた方腰に帶するお刀をどう見なさる。一兩か二兩で買へる刀が何千兩積んでも手に入らぬ名刀もある。同じ刀だよ。ウワッハヽヽ。藥が治すんぢやない。長英が治すんだ。高いと思ふならば一文も要らん。サアその理由はこゝに二冊帳面がある。一方は施療としてある。貧乏人の方、これは藥價を貰はないで、尚、米、味噌、醬油までも貢いでやる。その代り御身分ある方からは多分に頂戴するが、これは寄附金と書いてある。收支償はざれば人間はやつて行かれない。ある所から貰はなければ、長英は金の生る木を持つて居るんぢやない。貧乏人を助けることが出來ない。少し高いけれども高貴のお方だ。三百兩位何でもない。高いといふならばお金は要らぬ。その代り貧乏人の方へ……』
家『ちよ、一寸お待ち下さいまし、そ、それは洵に困る。』
長『アッハヽヽ、どちらでも宜しい。』
這々の體で出羽守家來、立歸つてこの趣を殿樣に申上げると、流石の殿樣もそれは高いと仰しやつた。けれどもどうも仕方がない。三百兩は遣はしたが、眞實貧乏人を助けてゐるかゐないか、隱密をつけて置け、若しその金を長英が己れの贅澤の費用に充てるやうであつたら、町奉行に命じて縛つてしまへ。三百兩取られた口惜しさに、絕えず隱密が隼町の周圍をうろ／＼し、見張つてゐるのでございます。長英虛心平氣、何等わだかまりがない。相變らずドンツク木綿の着物に、朴齒の下駄、萠黃の風呂敷包をぶら下げて病家を廻つてゐる。丁度十二月の中旬過ぎ、ヒューッといふ吹く風の中、
○『お賴み申します。お願ひでございます。』
八『ドーレー。』この頃は八藏もすつかり馴れ込んで、丸行燈を貼り付けたやうな小倉の袴を穿いて出てくる。
○『お願ひでございます。』
八『何だい。お前病人か。』
見ると年の若い二十一二、瘠せぎすな

講談社の繪本
●漫畫とお伽噺大會
上品な漫畫、童畫、教訓的な讀物によつて、兒童を喜ばせながら、明朗健全に指導する繪本。定價五十錢、各地の書店にあります。

小粋な男で、印半天の洗ひ晒し、この寒空にたつた一枚、手拭を引裂いて眞中を結んだ奴をクルッと巻付けて、空脛を出して素足に藁草履、水髪を繩で結へ、百舌の巣のやうに月代が伸び、ショボ〳〵髭の生えた、が小粋な男です。病人ではない。

○『私は病人ぢやねえんで、どうか靜かにして呉んねえ。もう三日も飯を食はねえ。芋の粥で命をつないでゐるんですから。』

八『情けねえ奴が來やアがつたな。何だてえんだ。』

○『私は桃園町の豆腐屋と薪屋の路地を入つた所の小汚ねえ長屋に住んでる叩大工の三次てえもんです。親一人子一人でございますが、母親が去年から患らつてるんで、マア最初の内は近所の人に賴んで仕事にも行つてましたんですが、だんだん母親の病氣が重くなつて、仕事にも行かれなくなつた。その内にマア代物のある内ははつたり賣つたり質に置いたりしましたが、終ひには命から二番目の疊夜具まで質に叩込んぢやつて、どうにもならねえんです、今もいふ通り芋のお粥でこの三日をつないでるやうな仕末、ところが母親のいふには、三公、お前が年季をあけて歸つて來たばかりに、阿母がこんな病氣になつちまつて、考へてもお前に氣の毒だが、死ぬ命は惜しまねえがせめてお前に嫁でも貰つて、孫の顏でも見て死にてえ、就いちや隼町に大變な名人のお醫者があるてえことを、先刻隣りのお内儀さんから聞いたが、そのお方から藥を一服戴いて來てくれないか。かう母親が泣いていふもんですから實はお願に上つたんでござんす。藥禮も右から左へ上げてえが、上げられねえ。どうでござんせう。母親の念晴らしに、藥一服戴かして、若しそれで死んだら諦めもつくでせうし、さうなれば私も一生懸命働いて、藥代は年賦にでも月賦にでもしてお拂ひ致しますが、一つお藥を戴く譯には參りますまいか。』

八『馬鹿野郎。』○『へエ。』八『なぜ早く來ねえんだ。うちの先生は、貧乏人と聞くと喜んで飛んで行く。丁度今宅にお在でになる。あの桃園町の豆腐屋と薪屋の間の路地を入つた所だな。先生は直ぐお見舞下さる。早く歸つて掃除でもして待つて居れ。』

三『ほ、本當でございますかい。』

八『誰が嘘を吐くものかい。早く歸れ。』

三次喜んで、横ッ飛びにとんで歸つた。

貧乏長屋

長英といふ人は大勢のお弟子もその後取立てましたが、常にお弟子に、

『醫者の本分は貧しい生活の者から迎ひが來たらば、早急に駈け付けて行つて診てやれ。といふのは平素は丈夫なやうでも、一たん病氣に罹れば一度に重くなる。そこへ行くと中産階級以上の者は、平素榮養が十分攝れてゐるから、病氣になつてもさう急激には來ない。さう慌て

て行く必要はないが、貧乏人だけは早く駈け付けてやれよ。』

といふことを常に教訓して居られた。三次は家へ飛んで歸つて參りまして、

三『阿母、喜んでくんねえ。お醫者樣が來るぜ。』母『エッ。』

三『ア、有難え〳〵。お隣りのお婆さん、お隣りのお婆さん。』

婆『なんだい、三ちやん。』

三『あのお醫者樣が來て吳れるよ。』

婆『さうかい。マアそりやアよかつたねえ。何でも貧乏人なら直ぐ行つてやるつて話は聞いたが、ちッと此處までは道が遠いから、どうかと案じてたが、マア三ちやん、よかつたねえ。』

隣り近所の人達も、わが事のやうに喜んでくれる。これが人情。三次は、一生懸命、七輪の下など、たきつけてる所へ、

『大工三次の家は此處か。』

ヌウッと入つてきた坊主頭。三次は飛び上つて喜色滿面、

三『阿母、先生が來て下すつた。……どうぞこちらへ。』長英先生ヅカ〳〵と上つて周圍を見わたし、

長『ハヽア成程、こりやア貧乏人だね。何もないな。あの壁の所が二ケ所白くなつてるのは、簞笥があつて茶簞笥があつたんだな。第一疊が無えぢやねえか。母親の所だけ一疊あつて、後はみな賣つちまつたんだな。貴樣は一體どこへ寢て居るんだ。』

三『エヽこゝへ寢て居るんで。』

長『ハヽア貴樣道樂があるな。飮むか、打つか、買ふか。』

三『冗談いつちやいけません、私は博奕は嫌ひだし、酒もね。それは建前か何かあると一杯やらうてんで、友達に誘はれて嫌や〳〵ながら二杯や三杯は飮んだこともございますが、第一女なんてえものは振向いても見たことはねえんでございます。』

長『噓を吐け。それでなくちや斯うなる筈はないよ。あんまりひど過ぎる。』

婆『アノモシ〳〵、この三ちやんは、それはこの近所で評判の堅物でございまして……』

といふ聲にひよいと見ると、壁に大きな穴があいて、隣りから婆さんが首を出した。長英驚いて『これは化物屋敷だな。』と思つた。

長『さうか。イヤ近所の人が證人になるのならばそれでよし。所で三次。』

三『ヘイ。』

長『四百四病の病より、貧ほど辛いものはない、といふ。なア、この病人はな。病氣でなくてもこの態たらくを見ると、病人になるよ。マア病人なんてえものは、假令木綿の蒲團でも、綿だけでも充分入れて、軟らかい蒲團を被せて、さうして枕頭へ三ッ組の蓋物があつて、一番下が水飴、眞中が金平糖、その上がマア白砂糖か何か入つてるものと決つてるんだ。分つたか。それで俺は藥を盛りに來たんだが、心裕かといふものは病人に非常に力をつけるものだ。』

三『ヘイ。』

長『で、わしは貧の病ひを先に治してやる。ソレ小判が五枚、これを遣るから早速疊を入れて、新しい蒲團を敷いて寢かせろ。お前も寒くないやうに疊の上に寢ろ。お前が病氣になれば、この病人はどうなると思ふ。』

三『エ、、エヘ、、、有難うございます。年季のあけた小僧上りで、今まで小判なんぞ見たことはねえんでございます。これが小判といふものでございませうか。後で木の葉になりはしますまいか。』

長『木の葉などになりはしねえ。』

三『阿母、先生が貧の病ひを先に治すといつて、小判を五枚下すつた。』

母『アッ、三公や、小判を五枚下すつたてえか。お前の親父はな、棟梁株で立派な大工、お得意樣だつてお出入りが三軒も四軒も、横山町邊りにお店があつて、隨分大きな仕事もしたが、御勘定を戴くと、みな博奕に取られてしまつて、五兩と纏まつて持つて歸つたことがねえ。それが爲めに仕手方の方への支拂ひも出來なくて、隨分阿母は駈けづり廻つたこともある。十八からお前の親父の所へ嫁に來たが、樂てえものは一遍もしたことがないが、ア、その小判てえものを見せてお呉れよ。』

三『ソレ見ねえ。かう光つてるだらう。阿母。』

母『エ、それが小判か……ア、成程、小判といふものは、貧の病ひに效驗がある、私はもういゝ心持になつた。床上げを……』

三『早や過ぎるよ。阿母。』

これから長英が毎日來て診てやる。それも、この頃では患者が大勢で、中には三次のやうな貧乏人も多いから骨が折れる、がいやな顏もせず長英は何から何までめんだうをみてやります。先頃神田一ッ橋の全國醫師大會が開かれました折にも、かうした長英先生の行ひこそ眞の醫者の手本である、我々も先生の後をついで、貧乏人を斷るやうなことはなく、患者があれば千里の道も遠しとせず民衆の指導救濟を心がけようではないか、何よりも犧牲的奉仕的精神を發揮すべきである。と決議されましたが、長英のやうな醫者が全國に現れるのも近いうちのことでありませう。全く四百四病の病ひより貧ほど辛いものはないとはよく云つたもの、とん〳〵と工合が好くなつて、此頃では三次も方々から引張り凧、親孝行てえものは有難いもので、

〇『三次、オイ、俺の仕事場へ來て呉んな、その代り手間は二割増しだ。』

△『俺ン所は三割増しだ。』

だん〳〵良い仕事をさして貰ふ。終ひには親父の代のお店が復活をする。さうなると自分の家から若い者が辨當箱を持つて出て行く。

今日はどういふことに組織されて居るのか知りませんが、昔の大工さんはあの用心籠といふものに辨當箱を入れて仕事場へ運ぶ。さうして辨當を食つちまつて、空辨當になると、その

下に木屑や、木ッ端をそつくり詰め込んで持つて歸る。棟梁株になると薪にも困らなかつたもので。そこで長英が考へました。錢廻りがよくなると、賭博などを覺えて又母親に苦勞をさしてはいけない。幸ひ長英の家にゐてよく働いてゐる、上總生れのお安といふ女中がゐる、讀書き算盤が出來、器量だつてさう惡くはない。仕事もしつかりやる。三次は何しろ眼に一丁字もない、子供の時から手習なんぞしないのですから、これは三次の女房に宜からうてんで三次に話をすると渡りに舟、三『先生がこれと見込んで下さるならば。』長『それでは……』と、こゝに嫁入道具は長英が買つて充てがつて、三次の所へ嫁にやる。夫婦仲は睦まじい。嫁姑の間も睦まじい。一家の圓滿は富貴の本でございまして、家から弟子達が十何人も仕事場へ行くやうになり、大通りへ立派な家を持つ、これも先生のお蔭、これも先生のお蔭と、朝夕隼町の方へ手を合せて拜む。寢るにも足を向たことがないといふ有樣でございます。

意外な相談

すると時は天保十一年正月の二日でございます。三次の吉例はてえと、元日に夜の明けない内に長英の所へお年玉を持つて行く。先生はまだ寢てゐらつしやる。そこで一旦家へ歸つて、二日方々年始廻りを濟まして、最後に隼町の家へ來て、長英に會つて去年の禮をいふ。長英は、

長『マアお目出度う。よく來た。』

てんで一杯飮ませる。それがマア三次の吉例でございます。そこで又三次の偉いことは、大暴風雨があると、弟子達を五人でも六人でも連れて、夜の明けるまで家の周圍をクル／＼廻つて、塀が風のために既に倒れさうになると、鎹を打込んで止めて來る。長英朝起きて、

長『アヽ、昨夜の暴風雨、この塀が持つまいと思つたが、よく持つたな。』

と表へ出て見ると、鎹の新しいのが打つてある。

長『ハヽア三次だな。感心な奴、大概な者ならば、飛んだ風でございます、私がすつかりやつて置きました、大丈夫でございます、とか何とかで手柄顏をしたがるものだが、これでなくては人間はいかん。嬉しい奴だ。』

と獨り長英も北叟笑んで居りました。

丁度今申上げる正月の二日、この頃は印半天の百枚も重ねて、その上から緞子の裏の附いた羽織、平打の腹掛は咽喉へくびり込みさう、紺の川波の股引、斯ういふ扮裝で年始廻りに出た三次。

後に附いて居るのが前髮立ての小僧、印半天は新しいが、肩揚があるから大紋が七分三分になつてゐる。誂らへの腹掛でないから、これは少しぶら下つて居りますが、新しい股引、紺足袋に突ッ掛草履。

小『棟梁、まだ五六軒廻るんですかい。』

三『なんだな、手前くたびれたな。』

小『大丈夫ですよ。』

三『瘦我慢するない。足を引摺つてるぢやねえか。今日はこれで家へ歸んな。』

小『棟梁はどうするんです。』

三『俺か。俺はこれから麴町の先生の所へ御挨拶に行つて、一杯御馳走になつて來るんだ。手前は家へ歸れ。』

小『ぢやア棟梁、歸つていゝのかい。』

三『歸つたらお内儀さんにさういひな。棟梁は隼町のお屋敷へ行きましたと、それから手前は湯にでも入つて、お内儀さんに小遣を貰つて、どつか遊びに行け。下らねえ所へ入るんぢやねえぜ。分つたか。』

小『ぢやア棟梁御免なさい。』

三『アヽ、歩いて行きやがらア。』歩かない奴はございませんが、小僧の行く後ろ姿を見送つて、自分は隼町へ行かうと、丁度麴町六丁目の所へ出ます。角を進む所に、ゴテ〳〵とビラが貼つてある。新しい天ぷら屋だ。

三次は子供の時から、この天ぷら屋の前はどうしても通り越せない。母親に駄

駄を捏ねて、隨分困らした事もあつた。三次が、

三『アヽ、美味さうだね。馬鹿にいゝ蝦があるね。ア、美味さうだよ。穴子のいいのもあるぜ、新店だな。いつ出來たんだらう。……ア、こたへられねえや。どうせ隼町へ行けば御馳走になるんだけれども、こいつは前を通り越せねえ……さうだ、御隱居樣は天ぷらがお好きだから、お土産に持つて行かう。御免よ。』

〇『いらつしやーい。三十六番さーん、御案内ーイ。』

三『オヽ、姐さん。』

女『へーイ、何に致します。』

三『上天で一合燗けて吳んな。熱燗に賴むぜ。溫燗はいけねえぜ、天ぷら一人前いゝかい、早場に賴むぜ。』

女『へーイ……三十六番さん、天さしで御酒臺。』

△『イヨー。』と返事がある。

女『お待遠樣……。』

三『オヽ、有難え〳〵……ア、ナ、三年前

ヒゲ剃後に

是だけは是非心得置くべし

ヒゲ剃り後の颯爽たる美しさは男性美の最たるものですが、ヒゲ剃り後は眼には見えないが皮膚面に無數の小さい傷が出來、そこからバイキンが入ると、カミソリ負けは勿論、濕疹、丹毒等の皮膚病を起す懼がありますから殺菌力の無い普通の化粧水やクリーム等をつけておくのは危險です。最近、ヒゲ剃り後に科學的新强力化粧水、明色アストリンゼンが盛んに愛用されてゐます。明色アストリンゼンは普通の化粧水と違つて强力な殺菌作用があり、而も無刺戟でつけた後がとても爽快で、カミソリ負けや皮膚病を防ぎます。明色アストリンゼンはまた肌の美容劑が惜しみなく配合されてありますからキメを細かにツヤを增し男性美を倍加します。アストリンゼンは普通の化粧水と違つて皮膚細胞に活力を與へる作用があり、また皮膚を荒す原因となる石鹸のアルカリ分を中和する作用もつて居りますから、ヒゲ剃り後にアストリンゼンは世界的常識となつてゐます。アストリンゼンは婦人のお化粧にも無くてはならぬものですから、明色アストリンゼンは大抵のお宅の鏡臺の上にはのつてゐる筈です。

▲定價 一瓶 五十三錢・化粧品店・藥店にあり

本舖 東京・大阪 桃谷順天館

のことを思ふと、食ふや食はずといひてえが、食はずや食はず、すんでに母親は凍え死するんぢやアねえかと思つたが、隼町の先生のお蔭でどうやら斯うやら一人前の大工になれさうだ、ア、勿體ねえ、有難え、……オ、〱もう少し燗けてくれよ。少し溫いぜ。それから二人前お土産だ。賴むぜ、…………熱ツ、又熱燗といへば沸え立たしてやがる……ア、少し酒が水ッぽいや。どうもこの頃の酒は惡くていけねえ……』

ひとり言を云ひ〱飲んでゐる、向

ふの隅で三人連れの客が、これも、酒がまはつたとみえて、眞赭な顔。

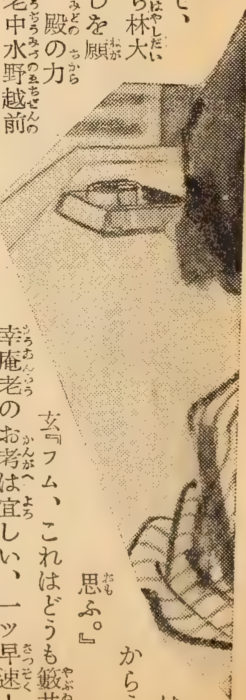
○『ア、ところで籔井一幸庵老はどういふお考で。斯くいふ三門玄庵はだ、高野長英といふ者がこの山の手に居つたならば、吾々の生活狀態を見てもお考が付くだらうが、既に吾々の生活が奪はれたといふことは無論のこと、殆ど今日、患者といふ患者は一名も參らぬではござらぬか。死活問題になつて參つたが、どうだ、高野長英を何とかして亡き者にする工夫は……』と、穩かならぬ話をはじめた。

三次がハッと顏色かへて聞耳たててゐるとは知らず、相手の者は、

一『サアサそれだ、どうもその殺人といふことはちと穩がでないが、何とかして長英をこの江戸から追出す工夫はあるまいかな。』

玄『サアそれはどうも吾々の力には及ばぬが、併しながら無論漢學者は西洋學者とは反對なものであるから、吾々漢方醫者の肩を持て下さるのは當然だと思ふ。それで鳥居甲斐守殿にお縋りして、鳥居甲斐守殿から林大學頭殿にお執成しを願つて、林大學頭殿の力を借りて今の御老中水野越前守殿を動かすんだな、それより方法はないだらうと思ふ。老中の力があつたならば、長英をこの江戸から追出す位なことは、何等難事ではなからうと思ふのである。』

一『ウーム、で例年の三日の寄合はどこにしよう、山の手でするとなれば、長英にも招待狀を發しなければならぬ。あれも矢張り醫者の組合の一員だからね。併し長英に來られては事面倒、最もこれは秘密にやらなければならぬが、先づ愚老の考では、深川の八幡前の富岡といふ寄合所。これは諸藩の者の寄合ふ所であるが、これは愚老が一寸知合であるから、どうだ、ここへ組合の者が殘らず集る事にしたら。それなら長英が來られる道理はなからうと思ふ。』



玄『フム、これはどうも籔井一幸庵老のお考は宜しい、一ッ早速！』

一『ぢやア廻狀は今夜の中に廻さう。』

そこ迄、じーつと聞いてゐた三次、

三『ウーム、この前を通り掛つて、天ぷらが食ひたくなつたのも、こいつは神樣のお引合せぢやアねえか。飛んでもねえ奴等が相談してやがる。あの大恩ある高野先生を江戸から追出さうなんて、飛んでもねえ事だ。よし。見やアがれ、どうするか。』

と前にあつた煙草盆を取つて三次は立上らうとしたが、

三『待てよ。こいつはいけねえや。いくら恩人の爲だと云つたところで、人を殺さうといふなア考へものだ、だが、考へてみれアあいつ等は長英先生の敵といふだけぢやねえぞ、新しい學問を學んでよ、

人助けの藥を盛る、貧乏人は皆な、神さまのやうに思つてゐる。とりも直さず、お國の爲にもなくちやアならねえ先生を、汝たちの儲にならねえからと云つて殺さうなどとは、とんでもねえ化け物だ。恩人の爲てえよりは、世の中のため人のため、やつぱりこいつア、やつつけよう。だがこんな坊主ツくりを二人や三人叩ッ殺したつて、人殺しの兇狀は同じことで、磔刑は免かれさうもねえ。こゝは一番我慢して、明日朝深川八幡前の富岡へ寄合で集つた所へ飛込んで、鑿と玄能一挺あつたら、どんな欅の堅節でも穴をあける。こいつを集つた醫者ツぽうのドテッ腹に叩ッ込み、頭を叩き潰したら、大概は參るだらう。どれ程集るか知れねえが、死人の山を築いた上、立派に名乘つて御所刑にならう。』

漸く決心をした三次、ポン〳〵と手を拍つ、

女『へーイ。』

三『勘定……イヤ土産なんぞ要らねえ。』

一分の金を投り出して、その儘パッと飛び出した。

議論をしよう

ガラ〳〵ピシャツ。

母『誰だえ。マアなんてえ格子の開け方だよ……なんだい、三次ぢやないか。……どうしたの、息を切つてさ。お前、犬にでも追はれて來たのかえ。』

三『阿母。』

母『なんだえ。お前、飲んで來たな。』

三『ウム、阿母、なんだか大層粹な服裝だね。銘仙づくめかなんかで、ねえ、黑の繻子の帶をしめてさ、エヘ、、乙に氣取つてるな。阿母、お前氣でも違つたのかい。』

母『何も氣取つてる譯でも何でもないけれど、お前がせめても七草までは小ざつぱりした服裝でゐて呉れろといふから、私は勿體ないと思ふけれども、着てゐるんだよ。着てゝ惡いといふなら、不斷の着物……』

三『オットット、勘違ひしちやいけねえよ。阿母、三年前はどうだつけなア。』

母『そりやア隼町の先生のお蔭で、救はれたんだよ。今改めてお前がいふまでもない。朝に晩に隼町の方へ掌を合はせて、拜まない日はないぢやないか。』

三『その恩を阿母、知つてるかい。』

母『それを忘れてなるものかね、三公。』

三『さうかい。それで俺も安心した。阿母、三次の死ぬ時が來たんだ。』母『エッ。』

喘息

百日咳に

——講談社の『喘息エキス』を服用あれ

本社發賣の『喘息エキス』はお蔭樣で非常な評判です。發作の起りかけに本藥を服用すれば烈しい咳を止め啖を切り、呼吸を樂にして苦しみから免れます。習慣性や副作用なく服みよいのでお子樣の百日咳には一番です。(定價一圓三〇、二圓五〇、四圓八〇、七圓) 講談社の喘息エキスと御指定の上藥店でお求め下さい。

三『事情を話せばこれ〳〵斯う〳〵、阿母、何事も因縁づくだ。なア。』

母『ア、三公、この通りだ。阿母は――マア何といふ感心な心懸だらう。それでこそ本當の人間だ。立派に死んでくんな。』

三『さう阿母が云つて呉れりやア、何にも心殘りなく恩返しが出來る。たゞお安だが、あいつはまだ年は若えんだし、なア、それこそ女鰥に花が咲くといふから、家へ引留めておいちや氣の毒だ。あいつは阿母、離縁して……』

母『三公、お前、そんな下らないことを云ふんぢやない。臺所で泣いてるよ……お安や、泣くんぢやないよ、こつちへお來で……三公や、お前離縁なんてえことをいふと、お安は身を投げて死ぬよ。』

三『エッ、冗談いつちやいけねえや。好きな所へ嫁……』

母『それが違ふんだよ。お前、もうお安は四月だよ。』

三『エッ、姙娠か……フーム、そいつは俺も知らなかつたな。』

母『だからね、お安と私は生れた子供を育てて、お前の後繼を拵へるから、後に心を殘さないで、立派に恩返しをしてお呉れ。』

三『さうかお安、てめえを泣かして濟まなかつたな。勘辨して呉れ。俺は知らなかつたんだ。ぢやア何分共に母親の身を賴むぜ。俺アこれから、深川へ行つて張り込むんだ。』

母『お前はまた今日は、先生の所へ例年の吉例の御挨拶に……』

三『ウム、まだ今年はお目に掛らねえ。』

母『だから餘所ながらお暇乞に行つて、子供が生れたら何分賴む、位なことはそれとなく、先生の耳へ入れて置きな。それでないとお前、犬死になるから。』

三『ウームさうか。ぢやアお暇乞かたがた、お目に掛りに行つて來よう……お安……何を泣きやがるんだい。泣くことがあるか。しつかりして腹の子供を大きくして、俺の後繼を拵へてくれ。な、それが俺の一生の賴みだ。』

親子夫婦三人、水盃を致しまして、腹掛の大鑿一挺に玄能を手拭に包んで、丼に、……隼町の先生の奥座敷。

長『イヤー三次、イヤお目出度う……アア舊冬は又何かとお世話になつた……イヤ〳〵さうでない。併しいゝ春だなア、……アヽ三次、お前が來るだらうと思つていつもの通り吉例だ、料理を取寄せて待つてゐた。アツハヽヽ、マア一杯やれ、サア。』

三『へエ、へイ。』

長『なんだ、何をモヂ〳〵してるんだ。』

三『エ、先生、女房がもうボテと來たんださうで。』

長『ア、さうか。それは知らなかつた。』

三『エ、、私も知らなかつたんです。母親のいふには、四月になるてんで。』

長『ぢやア來月は帶だ、ウム〳〵それは目出度いな。男だといゝがな。』

三『エ、私もさう思つてるんでございます。でマアさういふ譯でございまして、もう母親もあの年で、大して長えこともねえだらうと思つて――先生も御存じの通り、大工てえ稼業は、高え足場の上にあがつての仕事、どんな粗相でそれ切りにならねえとも限らねえんで、さうなると母親なんぞあの年ですから、屹度直ぐと後からくツついて來るだらう。後に殘つた女房と餓鬼が、定めて路頭に迷ふことになりませうが、どうかそんな事があつたら、先生何分どうぞ……』

長『三次。』三『へイ。』

長『貴樣、今日は何日だと思ふ。』

三『へイ。』

長『今日は正　月の二日だぜ、縁起でもないことをいふな。醫者でも三ケ日は患者が來ないぞ。……ア、分つた。貴樣どつかで喧嘩か何かして來て、男の立たない事があるんぢやアねえか。』

三『じよ、じよ、冗談――』

長『ぢやア何だ。――貴樣は長英に物を隱すのか。三年前、貴樣……』

三『そ、それをいはれると、私は齒が立たねえんだが、こいつは先生聞かねえで……』

長『イヤ聞かなければ承知しない。』

三『弱つたなア……ぢやア先生、お話致しますが實はこれ〳〵斯う〳〵。』

長『ウーム、さうか。ワツハヽヽ、己れの非を棚に上げて長英を謀る。よし、三次、お前一人はやらない、俺も一緒に行く。』

三『それが先生困るんで、先方は何しろ八十何人、先生の御身に萬一の事が……』

長『心配するなよ、長英常に腰に帶する虎徹の脇差、あれは伊達には差してはゐない。だが併し、俺は喧嘩口論は望まない。蘭方と漢方の孰れが是であるか非であるか、彼等と説を戰はして見ようではないかな。さうして彼等が長英の議論に服する事が出來ない場合、若し腕力に訴へて來たらそれに應へようではないか、學者といふものは決して腕を揮ふものではない。な、舌あり筆あり、さうだらう。』

三『へイ。』

長『兎に角俺も一緒に行かう。それ程迄に長英を思つて呉れるのは忝ない。』

と長英は三次を家に泊めて置きまして、その夜は、大酒家ですから先生飲み通し、三次は一睡もせず、何も食はない。

長英と華山

三『先生、もういゝ加減にしておくんなさいな、もう朝になります。』

長『貴樣も中々大膽なやうでも、一寸氣が小さいな。一滴の酒も咽喉を通らぬ。』

三『エ、どうも酒どころぢやありません。私は討死をするんですから。』
長『何も無理に、さう死にたがることはないぢやないか。生れずば死なざらましを何なるに、死にに生れし身にやあるらん、生れるといふことがあれば死ぬるといふことがある。な、形あるものは壊れる。始めあれば終りを生ずる。これが自然の理だ。だから死ぬといふことを恐れることはないが、併し無理に死ぬことはない。何年でも長生をして後死ぬるといふのが、人間の徳だ。アッハヽヽ、併しマア騒ぐなよ。』
三『先生、醉ッ拂つて來ちや困るな。』
到頭夜が明けました。奥様や御隱居、八藏には何事も告げません。不斷は木綿の着物ですが、今日は黄八丈の着物に黑縮緬の紋羽織、虎徹の脇差、紺縮緬の襟卷を首に卷いて坊主頭、三次を連れて深川櫓下の中清といふ料理屋へ上り、まだ時刻が早いからと、いやがる三次に酒を飲ませる、藝妓など大勢呼んで正月景氣だからと無理に飲ませられて三次、何しろ昨夜から飲まず食はずなもんですから、はじめの勢どこへやら、バッタリそれへ倒れるとグウー、グウー。
長『ア、御苦勞々々、イヤこいつを起すと一寸困る事があるんだ。イヤ洵にいろ〳〵御苦勞だつた。では、女將、皆なにこれを祝儀に——俺は一寸用足しに行つて來る、目が醒めたら便所へ行つたとか何とかいつて、外へ出さないやうにしてくれ。』

わきが專門藥

蘭 香

お困りの方も、これで御安心です!!

わきが專門藥『蘭香』は、皮膚やお身體に副作用のない塗布水藥で、御用ひになれば、どんなに效目があるかお判りになります。尚續けてお用ひになれば、永い間お困りになつた『わきが』でも、嫌な惡臭から脱れることができます。どうぞ『わきが』患者の一番お困の昨今、無色で、皮膚や衣類を汚さず、手輕に家庭で秘密に治療ができる本劑こそ見逃せません。藥價二圓送料内地十錢他四十二錢 發賣元 東京小石川音羽大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九)

白毛 赤毛 薄毛 脱毛 に

養毛料『イセビ』

白髪止養毛新劑『イセビ』は、實際に白髪で困つた方が、御自分の白髪を治さうと苦心研究の結果創製されたもので、創製者自身滿足な効果をあげて居られるばかりでなく、愛用者も擧つて感謝を寄せられて居ります。イセビは直接毛根に作用し、根本から毛質をよくし、白髪、赤毛等を治し、切毛、癖毛、ふけ、かゆみにも効果があり、發毛を非常に促進する作用もありますから毛髪の惱みを眞から救つて呉れます。その上副作用の心配がありませんから、どうぞお困りの方は至急に御試用下さい。藥價小瓶(約一ケ月量)一圓十錢、大瓶(約二ケ月量)二圓送料各内地十錢、發賣元 東京小石川音羽大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九)

長英中清を出まして、八幡前の富岡の表へ來ると、ズッと八十何足の下駄が並んでゐる。

長『ア、山の手の醫者の寄合があるかの。』

○『エ、ございます。』

長『ア、籔井竹庵といふ醫者が、遲れ馳ながら駈け付けて參つたと……』

世話人『ア、それで何かい、皆な頭が揃つたな。皆な一人殘らず集つて八十四人……ア、宜しい。それで色々とこれから議題を出すが、それに就いて各〻の御意見も伺はんければならぬのであつて……エ、ナニ籔井竹庵、そんな醫者は知らんぞ、籔井竹庵てえのは。八十四人頭が揃つてる、それに一人……』

○『なんだ／＼、籔井竹庵てえのは。』

ガヤ／＼云つて居る所へ、

長『ア、籔井竹庵、改め隼町に住ひする高野長英、やはりお組合の中の一人、御招待に漏れて居るやうだが、手前は各〻と籍を同じうするにも拘はらず、何のために今日御招待がないか。一應各〻の御意見を伺ふために罷り越した。』

長英がズイと入つて來た時は、一同面色變つてドッと總立ち。長英が座敷の眞中にピッタリと坐り込んだ時には、手も足も出ない。けれども若い連中は、

○『やッちまへ。』

と腕力に訴へようとした所へ駈け付けて參りましたのが、丁度八幡樣に參詣をしての歸り途、高野長英とは一面識した切りだが、莫逆の交りある三州の畫家渡邊崋山、中へ入つて仲裁を致します。この渡邊崋山といふ人と長英が意氣投合するやうになりましたのは、長英が世界の地圖といふものを大きくして、已れの部屋に置いて、絶えずこれを眺めて世界の事情の研究に努めてゐるといふ話を聞いて、渡邊崋山が、是非その地圖を拜見したいと訪ねて來た。訪ねて參りました時に、サア御覽下さいと座敷に通したが、その時に長英はお茶一杯出さなかつた、渡邊崋山は徹夜でその繪圖の前へ坐つた切り、翌朝まで眺めてゐた。長英もその次の間の机に靠れ、書見をして横にならぬ。どつちも寢ずに夜を明かしたといふ變り者。この人が中に入つて納めたから町醫の連中、どうすることも出來ません。その上、松平出羽守さまから、長英につけられた隱密が、逆に肩を持つて長英の潔白を證明いたしましたので、町奉行の方でも、手がつけられません。三次が醉をさまして驅け込んだ時には、もう納りがついてゐた。それからといふものは長英と渡邊崋山が非常に密接な關係になり、小關三榮などといふ學者が友達になり、後に『西洋夢物語』といふ本を著述し、牢獄に投ぜられ、最後に長英は青山で立ち腹を切つて死にましたが、明治の御代となりまして、畏れ多くも明治天皇の思召に依り、勤王家に列せられ、有難くも正四位の贈位を賜つて、醫學界の先驅者として敬はれてゐるといふ。大工三次に名醫長英の一席はこの邊を以て終りと致します。

ビタミンCの本體がエル・アスコルビン酸として確認されその純粋の結晶が合成されるに到り、今まで認識されなかつたC榮養の缺陷が次から次へと明らかにされ醫學界の注目の的となりビタミンCは俄然榮養界の寵兒となるに到りました。

病床にある方

高い熱が續いたり、慢性の病氣で顔色が蒼い、力脱けがして病氣の回復が捗々しくない…と言ふやうな方は體内にビタミンCが足りないのだと言ふことが明らかにされて居ります。病氣をすると體内に發生した病菌と闘ふためにCの需要量が平素の二、三倍にも增加致します。一方に於て食物の量は減らされ、しかも生物拔きの生活をするため益々Cの不足を起し病氣負けし易いものです

こんなとき ビタミン アスコルチンが要る

人工榮養兒

母乳が足りなかつたり、或はそれが與へられない場合牛乳や煉乳、粉乳、おもゆ等の人工榮養品で赤ちやんを育てますと、そのまゝでは乳兒榮養に重大な缺陷をもたらします つまり發育が鈍り病氣に罹り易いものですが、その大きな原因の一つはこれらの人工榮養品の中には發育のため、また外來の病菌に對する抵抗力を强めるため一日も缺かしてならぬビタミンCが殆んど含まれて居らないと云ふ事實に因るものです

過勞の生活

スポーツマンのやうに筋肉や身體の機關を活潑に活動させる時、殊に炎天下で活動する場合など汗と一しよに體内のCがどんどん排泄されます。筋力的作業ばかりでなく頭腦を酷使する場合などにもCは多量に必要です つまりCは病菌と闘ふため或は發育のため必要である許りでなく潑剌たる健康生活を營む上に缺くべからざる活性の榮養素なのです。

大陸生活

滿洲や支那の極地で生活をして居る人々や、大陸を永く旅行をする者はとかく食慾が減り、齒齦が浮いて、手足の節々が痛んで健康を害い易いものですが、それは大陸では新鮮な野菜や果物が自由に得られないためビタミンCの缺乏となつた一つの現れと見られます。旅行者が野菜代りにバックの中にC劑を持つて行かれるのは手輕にこの大陸に不足なC榮養を充實せんとする意味に他なりません。

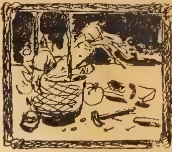
純粋のC結晶

アスコルチンはそのまゝ注射の出來るビタミンCの結晶を錠劑及び粉末としたものでその一瓦が新鮮レモン約二個に相當するCを含みますから一日一・五乃至三瓦（錠劑なら五、六錠）の微量で充分です。果汁のやうに腐敗の恐れや或はその中の刺戟性夾雜物等のため胃腸を害ふ心配はありません

二五瓦…參圓參拾錢　一〇〇錠…參圓六拾錢　藥店百貨店にあり

東京市日本橋區本町　株式會社　田邊元三郎商店・大阪市東區道修町　株式會社　武田長兵衛商店

銃後に人あり



シミツタレナ旦那様

古刹妙本寺をぐるりと取巻くいはゆる妙本寺山を北に背負つた、鎌倉市名越の高臺に、栽松山房といふのがあるが、この邸の主人は、慶應元年生れ、今年七十六歳の老翁だ。

彭洋と號して書をよくし、また臺水と號して俳句も作る。書風は中村不折畫伯と同じい六朝の系統、句は荻原井泉水、河東碧梧桐氏等に師事したといふだけに、極めて奔放な自由型で、何れも堂々たるものである。

といへば、終日閑雅な書齋で白髯をしごきながら、松籟の音を友に筆硯を弄してゐる姿を想像するであらうが、事實はそんな文人墨客風な、生やさしい人物ぢやない。文字通りの晴耕雨讀で、かん／＼照りつける眞夏の陽ももののかは、古浴衣で造つたモンペ、――このモンペは、旣に十年も前から翁が、卒先提唱してゐたもので、昨今の流行を眞似て用ひ始めたものでは決してない――を着用、野菜畑の草むしりもすれば、糞尿の汲み出しもやる、正に矍鑠たるものだ。

訪れて行くと、今日も今日とて殘暑の中を、裏の雜木林で盛んに薪を伐つてゐる。

『運動ですか。』と、うつかり訊くと、

『冗談いふない。薪を造るんぢや冬の用意にな。』と、忽ち一喝されてしまつた。

翁の說によれば、冬薪を造るほど馬鹿なことはないのださうである、秋伐れば葉が付いてゐる、葉も立派な燃料ではないか、有効な肥料にもなるではないか……。

『ほら、ご覽。わしの處では落葉も無駄にはせん。みんな集めてあの通り堆肥にしとる。おかげで野菜は自給自足さ。あくまでも健全財政ぢやよ。アハハハ……』

眞赤に色づいたトマトや、よく實つた茄子や、大根やが一面に作られた菜園の中を、翁に從つて勝手口まで來ると、肥つた女中さんが鉈を振りあげて、ポカン／＼と蜜柑箱を叩き壞してゐた。

それを見ると翁は、すぐさま金鎚兼用の釘拔を持出してきて、女中さんが割つて拋り出した板の小釘を拔きにかゝつた。一本一本、丹念に拔いて行くのである。

『まだ新しい釘ぢや。勿體ないからな。』

拔き終へると翁は、懷から紙片を取出してそれを丁寧に包み、モンペのポケットにをさめた。さうして、歩きながらいつた。

『女中は、ケチな旦那さんと思うとるぢやらうが、ケチだらうがシミツタレだらうが構ふものか。他人の蔭口を氣にしとるやうなざまで、この非常時局が乘つ切れるかい。な、さうだらうぢやないか。アッハハハ……』

銃後に人あり

日常の萬事がこの調子で書齋に於ても翁は、紙でも封筒でも必ず裏がへしして使ひ、決して無駄は出したことがないといふ。

『講釋はその位でよからう。まあ、おあがりなさい。お茶でも――といひたいところぢやが、お茶なんかありはせん、水でも差上げよう。水つたつて君、水道の水ぢやぞ。戰地の兵隊はみんな、支那兵の死體のブク〲浮いとる河の水を飲まなきやならんといふぢやないか。それから見れば寧ろ贅澤といふもんぢや。』

が、汲んで出されたのは、さすがに水道の水ではなかつた。

『今日は特別サービスぢやよ、な』

翁は、傍らにつゝましく控へた老嫗を顧みて、晴やかに笑つた。

――いや、老嫗などといつては失禮だ。元文相荒木貞夫大將夫人の令姉で、國防婦人會神奈川縣本部長として縣下十六萬のエプロン部隊を統率、鎌倉分會長をも兼ねてゐる銃後女性界の重鎭であり、現に○○要塞司令官の要職にある陸軍中將宣時氏の母堂たるイツ子夫人である。

――と、うつかり筆が滑つて夫人の方を紹介してしまつたから、勢ひ老翁の假面もこの邊で脱いで貰はねばならないことになるが、この老翁こそ誰あらう、經理學校教官經理局建築課長、朝鮮軍經理部長を歴任、現に正四位勳二等功四級の退役陸軍主計總監、井出治將軍その人なのである。

何しろ、選ばれて獨墺に留學、ベルリン大學で五年間財政學を修めて歸つたといふ、軍部きつての財政學者だつた人だけに、今日のやうな、非常時局に對する心構へは、とうの昔からちやんと出來てゐたわけで、今更驚くでもなければ、あわてるでもない。鐵のやうな意志を以て悠々と實踐。あつぱれ國策生活の順應者――といふよりも寧ろ、熱烈なる指導者として身をもつて、銃後人を叱咤してゐる。まこと銃後に人あり、切に健在を祈りたい。

（上野料一）

東京驛頭の感激

或る朝の東京驛頭――

例によつて、出征軍人歡送團が二組、手に手に日の丸の小旗をうち振りながら、赤襷の勇士をとり圍んで、聲を限りに歌つてゐた。それは傍目にも美しい盛大な見送りだつた。

と、その一團に近く、これはまた意外にも人目をはゞかるやうにした、見送る人とてない侘しげな出征兵士があつた。恐らくその兵士の妻でもあらうか、年のころ二十七八の貧しげな女が、二三歳の子供を背に負うて、右の手には五六歳の女の子をつれてゐる。見送る人といへば、たつたそれだけだつた。

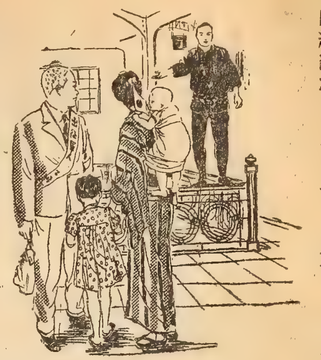
何も知らぬ背中の子が、手に持たされた小旗を玩具代りに振つてゐるのも、いつそ目に痛い風情である。

他の二組にくらべては餘りにも違ひすぎた見送りで、目撃者の誰もが、ひとしく目に熱いものを感ぜずにはゐられなかつた。

と、その時、突然、地下道へ拔

銃後に人あり

ける降口の柵の上へ、スックと突つ立つた男がある。『魚清』と襟に染めぬいた印絆纏からして、すぐに元



氣のいゝ魚屋の若い衆であることが知れた。

――どうするつもりだらう……。誰もの目が怪訝らしくその男に向けられると、

『皆さん！ どうか私の云ふことを聞いて下さい……』

と、その若者は、眞劍な顔であたりを見廻しながら

『あの方も尊い出征軍人です。私は、さつきから見てゐたんですが見送りの人もゐないやうです。私は、淋しくなりました。元氣に歌つて、送つてあげたいんです。生意氣のやうですけれど、皆さん、どうか、こゝへ集つて下さいませんか。』

その聲が終るか終らぬうちに、朝とは云へ人足の多い東京驛のことだ、あつちからも、こつちからも、中には向ふのホームからも、續々と駈け集つて、忽ち黒山の一團となつた。中には洋裝の女もある。

『皆さん、ありがたうございます。では、私が音頭をとらして頂きます！』

逞ましい若者が、高い所から、目に涙さへ浮べて、愛國行進曲を絶叫すれば、それに和して、怒濤のやうな合唱が捲き起つた。旗も幟も持たぬ人々は、帽を振り手を拍つて、懸命な合唱だ。

『あ、ありがたう、ございます。』

幾重かの人垣にとり巻かれた中で、見も知らぬ出征軍人は、たつた一言さう云つたきり、あとはもう顏も上げえなかつた。傍の妻も餘りの感激に、兩手を顏におしあてたまゝ、聲を呑んで泣きつゞけてゐた。

『萬歳！ ばんざーい！』

魚屋の若者の頬にも、數十の見知らぬ人々の顏にも、感激の涙が滂沱と迸つてゐた。

片假名便り

（木島　博）

『この手紙を一年生の兒童に代筆させてくれと仰言るのですね、それは何う云ふ理由でですか。』

大森第四小學校の佐藤訓導は、差出された紙片の文字を眼で追ひながら、怪訝げに訊いた。その紙片にはこんなことが記されてあつた。

オテガミアリガタウゴザイマシタ、ワタクシモゲンキデガッカウヘイッテヲリマス、オトウサンモオクニノタメニシッカリックシテクダサイ。

先刻から佐藤訓導の前に項垂れてゐた中年の婦人は、理由を訊かれて、はッとしたやうだつたが、軈て決心したらしく涙ながらに語り出した。

この婦人は、東京市大森區大森町九ノ四二五二に住んでゐる成川さくさんと云ひ、良人の彦一氏は附近でも評判の實直な大工さんだつたが、今事變で應召の名譽に浴し〇〇部隊の一等兵として出征し

銃後に人あり

た。

家族はさくさんの他に、長女はつ江さん(十三歳)英吉君(七歳)ふさ子さん（四歳）の眼に入れても痛くない可愛い盛りの三人子供があつた。健氣なさくさんは良人の留守中愛兒を病氣にでもしたら、それこそ良人に顔向け出來ないと、貧しい家事の切盛りをする傍ら、何呉れとなく子供の面倒を見てゐたが、いたいけ盛りの英吉君が、ふと風邪を引いたのが因だつた。夜の眼も寝ずに看病した甲斐もなく、急性氣管支炎を併發し、儚なく昇天してしまつた。

『英ちやん！　お前は！……お前は！……』

と、愛兒の亡骸に取縋り氣も狂はんばかりに歎き悲しんださくさんだつた。だが、せめてもの慰めは、人力の限りを盡して介抱したことだつた。

『いつまでも悲しんでゐて銃後の務めを疎にしては、良人に申譯ない！』

やうやく悲しみの底から起ち上つたさくさんだつたが、流石に戰地の良人に英吉君の死を報せてやれなかつた、それは、愛兒の死を知つたら、良人の働きが鈍りはしまいか、若し氣遲れでもするやうなことになれば御國に對して不忠者になる——かう考へたさくさんは、良人への便りには涙を隱して『英吉も元氣で學校に通つてゐます、今日は書方で甲をいたゞいて歸りました』等と、僞りの手紙を書き送つてゐたのだ。すると、それから間もなく戰地から、英吉君宛に手紙が來て『お父さんは毎日元氣で働いてゐる、この頃英吉の手紙が來ないので、お父さんは何んなに淋しいか判らない。すぐ手紙をおくれ』と云つて來た。

　さくさんの胸は張り裂けさうだつた、いつそのこと英吉の死を打ち明けてしまはうかとも思つた。併し、今報せたら、これまでの苦心も無駄になる——悶々と惱んだ揚句ふと考へついたのが、英吉君の文字に似せてそれらしい手紙を書き送ることだつた、二枚三枚、さくさんは書いては消し書いては破り何枚反古にしたことだつたらう、けれどそれは所詮大人の文字だつた。その結果思案に餘つたさくさんは、英吉君の受持訓導だつた佐藤さんにお願ひして、一年生の兒童に代筆して貰つたらと、その相談に來たのだつた。

　聞き終つた佐藤訓導の眼には白いものが光つてゐた。出來ることなら僞りの手紙を書いて彦一さんを安心させてやりたいと思はぬではなかつたが、遲かれ早かれ知れることである、かう考へた佐藤訓導は、

『こんなことは何時までも隱しおほせるものでありませんから、萬事私にお委せ下さい。』

　と諭して、その翌日峰岸校長に相談した。そして〇〇部隊長宛にさくさん一家の事情を打ち明け、『折を見て英吉君の死を成川一等兵にお傳へ下さい』と依頼の手紙を書き送つたのだつた。軍國の妻のこの涙ぐましき心意氣こそ銃後を培ふ愛の温床であらう。

（池上三十三）

笑話倶樂部

大きな蟇口

（鹿兒島縣　田知行義隆）

都會から歸つた娘がハンド・バッグを提げてゐるのを見て、

爺さん『婆さんや、娘が大そう金持になつて歸つて來たゞよ。』

婆さん『どうしてよ、爺さん。』

爺さん『だつて見ねえ、あの大きな蟇口を。』

婆さん『なるほどな、あんだけ膨れとるから、よつぽど錢が入つとるだらう。』

（下關市　青柳　繁）

獅子ツ鼻

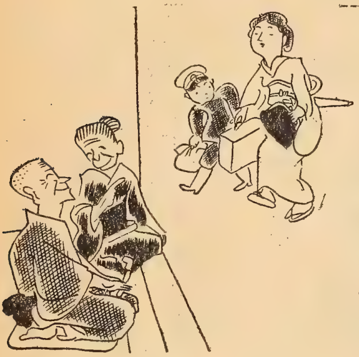
A夫人『おや〳〵、ばかにおめかしして何處へお出かけですの?』

B夫人『まあ鼻の向いた方へ參りますわ。』

A夫人『あら、短氣なことなさるもんぢやありませんわ、あなた自殺なさるおつもりなのね。』

B夫人『ゴ冗談おつしやいよ、どうして?』

A夫人『だつて、あなたのお鼻、天國へ向いてるんですもの……』



子供は實際家

六つになる坊やに、

母親『五つから四つとると、あといくら殘る?』

坊や『うん、……拇指が殘るよ。』

（靜岡縣　村木靜夫）

渡りに舟

身投げをしようとしてゐる女を捉へて、

強盜『どうせ死ぬなら金を出せ。』

女『金はないから命をとつて下さい。』

（滿洲　石澤政典）

陣中和歌

いさゝかの菓子を與へし我なるに子らは喜び慕ひ來りぬ

（北支・鬼山寅治）

白々と地上を染むる月影に我儼然と銃持ちて立つ

（南支・柴田幸一）

すべて夢

甲『君、今までに一番嬉しかつたのは何時だい？』
乙『債券が一萬圓に當つた時だよ。』
甲『へえ！一萬圓當てたんかい。ぢやア一番殘念だつたことは？』
乙『それが夢だつたとさ。』
甲『?!』
（高知市　濱崎圭史）

むづかしい

女中『奥さま、飯ですだよ。』
奥樣『まあ、言葉の惡い。これからは飯と言はずに御飯を召上れと言ふのですよ。』
次の時間に、
女中『奥さま、あのウ…飯上れ。』
（東京市　湯野川忠成）

不經濟

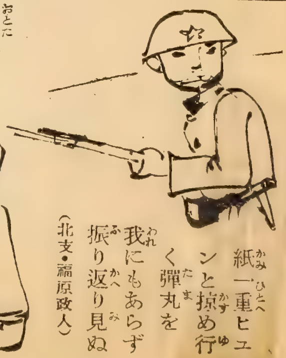
甲『君、動物園にゐる獸の中で風邪を惹かせたら國家として一番不經濟なのは何だか知つてる？』
乙『さア、分らないね。』
甲『キリンさ。』
乙『どうして？』
甲『だつて、あんなに長い首に濕布を卷いたら、人間の何十倍もかゝるぢやないか。』
（靜岡縣　しげる）

恰好の巣

電髮の彼女が散歩してゐると雀の群がやつて來て、
A『おい、兄弟代用品時代だ、丁度いゝ物があるぜ。』
B『さうだ〳〵當分これを借りるとしよう。』
（大阪市　寺內勝藏）

どちらもどちら

甲『散々手傳しといて一文もくれないとは君も隨分けちんぼだね。』
乙『僕はまた、君が友達に手傳つて、報酬を求めるやうなけちんぼとは思はなかつたもんだからね。』
（福岡縣　森信）



紙一重ヒユンと掠め行く彈丸を我にもあらず振り返り見ぬ
（北支・福原政人）

音立てゝ味噌汁すゝる若き兵一月ぶりとさま〴〵語る
（北支・朝倉理三）

溫突にざこねの友と思ひ出の自慢話に故郷語りぬ
（滿洲・石井新一）

岡けんぢ畫

食慾のすゝむ秋！ 胃腸强化の秋！

天高く馬肥ゆる秋！うんと食べてうんと太るにも、夏の衰弱を回復して健康を增進するにも今が絶好の季節であります。が、うんと食べたからといつて必ず肥えるとは限りません、もしもあなたの胃腸に障害があれば、折角の榮養分も吸收されず無爲に排泄されるばかりか、過食、偏食の結果は却つて症狀を惡化させるやうなことにもなります。

一體私共が健康を保持し、體力を充實するために一日どれだけの榮養素を攝らねばならないかと申しますと、年齡、體重、活働の種類、氣溫等によつて一樣ではありませんが、通例體重一瓩につき安靜時で三〇—三五カロリーとせられてゐます（榮養學上の一カロリーとは一瓩の水を攝氏一度だけ溫めるに必要な熱量のことであります）從つて體重五〇瓩の成年男子が一日に要するカロリーは安靜時で一五〇〇—一七五〇カロリー、輕い作業に從事する場合で二〇〇〇—二五〇〇カロリー、筋肉勞働に從事する時では二五〇〇—三〇〇〇カロリーとなる譯であります。女子ではその約八〇パーセントと言はれてゐます。

そしてこれらの榮養素は、所要のカロリーさへあれば何を食べてもよいといふ譯ではなく、含水炭素、脂肪、蛋白質の適當な配合に無機鹽類、ビタミン等の榮養素をも含んでゐなければならないのは申すまでもありません。今假りに一日二五〇〇カロリ

ビタミン A	ビタミン B1	ビタミン B2	ビタミン C	ビタミン D	ビタミン E	食品名	水分	蛋白質	脂肪	灰分	百瓦中の熱量
						あか貝	82.04	15.79	0.45	0.72	65
						いわし	70.25	21.39	6.72	1.64	140
						さんま	(生干)	23.65	8.54	3.72	171
++	++	++	+++		+	いなだ	76.65	20.90	1.10	1.25	90
						いな	——	20.40	2.55	1.54	105
+	++	+	+			ぼら	72.00	21.97	4.27	1.17	122
++	+	++	+++	+		さば	72.50	21.10	4.88	1.52	123
						このしろ	73.34	20.45	4.78	1.45	120
						鮭	——	16.80	7.90	0.99	138
++	+	+	++		+++	はぜ	79.13	18.35	0.50	2.02	86
						車えび	——	6.20	0.31	0.68	28
	+					たこ	——	17.07	4.51	1.42	109

ーの榮養素を攝取しようとすれば、蛋白質八〇瓦、脂肪九瓦、含水炭素五二〇瓦の割合となり、食品にして凡そ米飯一五〇〇瓦(約十椀)牛鳥肉又は魚肉一〇〇瓦、豆類又は製品一〇〇瓦、野菜三〇〇瓦、果實一〇〇瓦、砂糖二五瓦といつた分量であります

　ですから、痩せた人が肥えるためにはそれ以上のカロリーを攝らねばならない道理でありますが、さうした人に限つて食慾が振はないとか、消化が惡くて胃腸につかへるとか、折角食べてもすぐ下痢する……などといつたことが多いため、種々の榮養食も效を奏さないばかりか、夏の衰弱さへ容易に回復し得ないものであります。これらは大抵、前からの胃腸病や夏の急性胃腸カタルが充分癒り切らずに慢性の經過をとり胃腸粘膜の炎症から分泌や蠕動機能が異常になつたり、胃腸筋が弛緩して無力狀態となつてゐるものでありますから、かうした胃腸障害を除くことが榮養回復の基素工作でなければなりません。事實、胃腸障害さへ除いてやれば機能は活潑になりますし、消化酵素の分泌も正常になりますから、態々消化劑、榮養劑等に頼らずとも、日常食物中の豐富な榮養素がズン〳〵消化吸收され全身の榮養は期せずして充實されて來るものであります。

　かうした胃腸障害の合理的な治療には、今治療藥アイフが一番賞用されます。何故なら治療藥アイフには病源、對症二重に働く作用があり、主藥が胃腸內壁の病變部に沈着して炎症を癒やし、粘膜を强め、弛緩を引緊め、分泌や蠕動機能の異常を整へると共に、腸管內の有毒物質を吸着して體外に排出する等、廣汎な病源治療を營み、併せて胸やけ、噯氣、惡心、胃痛、腹痛、下痢、嘔吐、消化不良、食慾不振等の諸症狀をも消退して機能の恢復を速め、榮養、健康を增進せしめるからであります。

　因に治療藥アイフの藥價は四日分七十五錢八日分一圓五十錢十七日分三圓重症用特製五圓十圓十五圓三十圓等で各地有名藥店にあります。發賣本舖は大阪東區淸水谷西之町順和商會（振替大阪三四五番）

十月の食品と榮養價

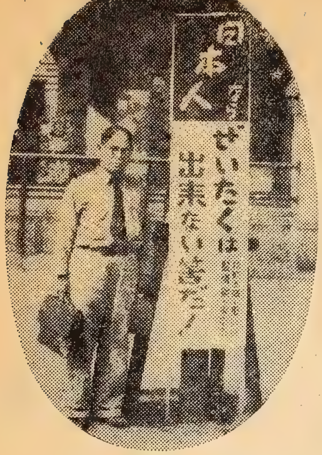
食品名	水分	蛋白質	脂肪	含水炭素	纖維	灰分	百瓦中の熱量
松茸	84.51%	3.73	0.76	12.78	—	1.00	73
初茸	—	5.80	1.01	0.56	1.28	0.65	35
しめじ	—	1.48	0.08	1.89	—	1.40	14
キャベツ	90.11	1.83	0.18	5.04	1.65	1.18	24
冬瓜	97.42	0.26	0.02	1.72	0.35	0.23	7
甘藷	66.28	1.35	0.19	28.77	2.48	0.93	112
ほうれん草	93.91	2.30	0.27	1.65	0.57	1.30	15
里芋	85.20	1.40	0.08	14.70	0.63	0.99	49
連根	85.39	1.70	0.08	10.86	0.84	1.13	46
小松菜	92.62	2.51	0.52	1.18	1.79	1.38	17
らつきよ	(酢漬)	0.80	0.21	9.00	—	7.88	41
栗	57.89	2.90	0.38	36.49	1.12	1.22	147

「銃後よ頑張れ」

在米日本人は叫ぶ

遊佐敬三

筆者遊佐氏は、明治三十五年骨を開拓地に埋めようとの決意も固く若冠二十四歳にして渡米、爾來三十有八年營々たる努力の結果、農園監督にまでなつた方、現在は聖市銃後奉仕會顧問、アラメダ邦語學校の最高責任者である。また『半僕』の雅號によるへなぶり、隨筆等は汎く在留邦人間に知られてゐる。この程、在米邦人の血の苦闘史を一書に纏めて出版、海外同胞として皇紀二千六百年を紀念しようとて歸朝せられた。大陸經營に全力を擧げてゐるこの際、排日の嵐の中にあつて今日を築き上げた開拓の先驅者の雄叫びをお聞き下さい！



（遊佐氏）

カリフォルニヤは日本本州と同じ位の廣さの所だ。そこに十五六萬人の日本人が散在してゐるが、皆母國を憶ひ、日本人としての誇を持ち、一致團結して生活してゐる。私はまづ我々が排日の嵐の中に在つて如何にして今日を築き上げたかといふことから語つて見たい。

開拓者精神

サンオーキン・リバアの河下に『死の土地』と呼ばれ、捨てゝ顧られない沼地があつた。そこへ行くと人間は直ぐマラリヤなどの悪疫に罹つて死ぬのである。

そこへ敢然と飛び込んで行つたのが牛島謹爾氏を中心とする一隊であつた。悪疫と闘ひながら彼らはやがてそこへ堤を築き、所々に州を造り上げた。さうしてそこへ薯、玉葱などを植ゑつけたのである。明治二十二三年頃のことだ。勿論犧牲者も澤山出したが、そのお蔭で、今ではそこはカリフォルニヤで最も

良好な農耕地の一つになつて、一エーカー何百弗の値段である。州にはそれ〲名前がつけてあり、その間を船で通ふのである。

×　　×

愛知縣の生田見壽といふ人はカリフォルニヤで米をはじめて作つた人だが、北カリフォルニヤの荒蕪地を數年間米が作れるかどうかを實驗したのち、見込がついたので米作事業をはじめた。はじめは在留邦人が金を出し合つて手で作つてゐたが、一九一三年に日本人が大擧して移住して來て、いよ〱大規模にやらうといふので、コルサといふ町の銀行の頭取に會つて、

『米を作りに來たんだから、金を貸してくれ。』

と申し込んだ。

『何處で作るんだ。』といふから、

『この邊で作るんだ。』といふと、

『冗談ぢやない。』

と一笑に附してしまつた。無理もないのだ。何しろそこは昔ながらの何十萬エーカーといふ鹽地で、一エーカー一弗でも買手がなく、鴨の群などが飛んで來て遊んでゐるといつた所だつた。そこで米を作るといふのだから相手にされないわけである。

しかし、こちらは何年もかゝつて實驗した上でのことなので、

『水があつたら必ず出來る。サクラメント河から喞筒で水をあげてくれ。そして土地を提供してくれ。その代り利益の三分の一をやる。』

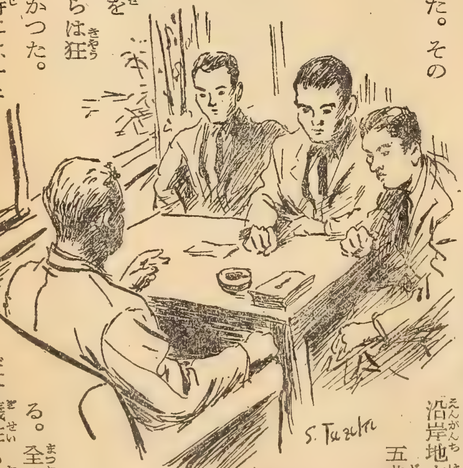
と熱心に談じ込んだものだ。その熱意が通じたものか、

『よし、やつて見よう。』

といふことになつた。

ところで、その結果はどうだ、一エーカーから六十弗平均の收穫があつたのである。水に七弗位かゝつたから、十三弗位の純益を彼らに得させたわけだ。彼らは狂喜した。むろんこちらもよかつた。

かくして、前歐洲大戰當時には一エーカー一弗にもならなかつた土地が、わづか十年經たない中に眞靑な綠野に生れ變り、二百弗餘の値段を呼んだのである。



×　　×

南カリフォルニヤには『帝國平原』と呼んでゐる所がある。酷熱不毛、人つ子一人行かない土地であつたが、そこへ日本人が飛び込んで行つて、瓜、トマト、西瓜、メロン（これは特產）等を生產して、毎年數百萬弗の利が上る土地に仕上げてしまつた。中加地方プレスの葡萄、桃等の栽培も同じこと、また、沿岸地方の一エーカーが十五弗から二十弗の値段であつた土地から數百弗の野菜類を生產するやうにしたのも日本人だ。

我々日本人は、彼ら白人に耕作できない土地へ飛びこんで行つたのである。全くの突擊隊だ。それだけ犧牲も大きかつた。今までに『平和の戰士』として散つた三千五百の無緣佛があるが、それは皆二十代の若さであつた。

× ×

我々在留邦人は常につぎのやうな自信と誇りを持つてゐる。

『カリフォルニヤを緑野にしたのは日本人だ。』

事實もしカリフォルニヤから日本人が全部引上げたと假定したら、全米の白人の食膳から野菜、果物類が姿を消してしまふのである。さればこそ、かつて白人が日本人の實績を見て恐れ、『加州を白人の手に保て』と叫んだ時、日本人は堂々と反撃したのだ。

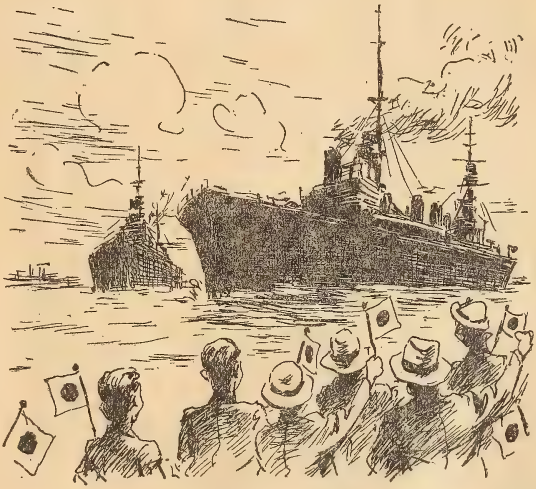
『加州を緑野に保て！』

彼らは人種のことを云爲してゐるが、我々は土地を生かしたのだといふ日本人の主張である。彼らもこれだけはどうしても認めねばならぬ。だから、一九三九年の萬國博には、各國人が米國に貢献した統計を掲げ、農業では日本が一番だと發表してゐる。

農業日本の傳統は、かくして、いかに排日を叫ぶ米人をも、事實に於いて屈服せしめてゐるのである。

在留日本人の意氣

在留日本人は何事に於いても彼ら白人に負けぬといふ自信と意氣を持つてゐる。一二の實例を擧げると、日本人の第二世は白人の子供よりずつと學校の成績がよい。又、不幸にしてアメリカの國法違犯に問はれた者が在留他國人に比してずつと少い、といふよりも殆んどないといつてよい。特に日本人として誇り得るのは、その中に破廉恥罪が一つもないことである。



又文化的に見ても、十五萬の同胞が日刊を十、週刊月刊合せて五六十種の新聞を出してゐるし、出版した單行本も六百種に及んでゐる。數百の日本語學校、宗教團體（教會）もある。これを散在してゐる十五萬の日本人が、一つになり力を協せ、他人の手を些しも借りずに自治的に經營してゐるのである。而も皆裸一貫から叩き上げた者ばかりだ、僅かに三四十年の間にかうした文化を作上げたのだ。

母國を憶ふ心

そんな風にして、苦鬪に苦鬪を重ねて自分の生活を築き上げた在留邦人が、而もその上に如何に祖國に貢献してゐるか。半世紀も經たぬ中に、日本に送つた金、持ち歸つた金は十億圓を突破してゐる。關東大震災の時に送つた金丈でも二百五十萬弗だ。その上新聞には『國産買うて國富を増せ』と標語を掲げて、日用品は殆んど本國の物を使つてゐる。

支那事變が勃發するや、南カリフォルニヤでは飛行機を二臺献納し、いま、もう一臺献納するまでになつてゐる。この程、靖國神社へ今までの三倍位の御手洗も献納した。献金

も相當の額に上つてゐるし、慰問袋もずゐ分送つたが、その外に今事變勃發直後の昭和十二年九月から、私の主唱で月掛献金といふのを始めてゐて、これは現在の會員約二萬人、毎月一人一弗以上必ず納めることになつてゐる。第二世達で、道に落ちてゐる煙草の銀紙を拾はぬ者は一人もないといつてよい。

――それは皆祖國愛から出發したものだ。この在留邦人の母國を憶ふ氣持は本國人の想像もできぬほど眞劍なものだ。日本の練習艦隊が寄港するやうなことでもあれば大へんだ。數百哩もの遠隔の地から第二世を連れて自動車で乘りつけてくる。そして艦が見えると日の丸の旗を振りながら感激の涙を流すのである。『悲壯なる歡喜』といふより外に語はない。

艦が錨を下せば、例へばオレンヂ何十箱といふやうに各自が出來るだけの物を兵隊さんに上げる。兵隊さんが上陸するとウンと御馳走をする。それは在留邦人にとつてこの上なく樂しいことだ。而もその樂しさの中でどうしてもわけの分らぬ涙が流れてくる。――ジヤツプ〱といぢめられてゐる在留同胞のこの氣持は母國の人にはわからないと思ふ。

三十八年の體驗から

この頃は日本から滿洲や支那へ行く人が大分あるやうだが、私はその人々に申し上げたい。『行つたら土につかまれ、どこまでも土に喰ひついて動くな。』これが在米三十有餘年の私の結論だ。

私は昔噺の『桃太郎』や『浦島太郎』の思想――あの歸つてくるといふ考へは根本的にいけないと思つてゐる。これからの日本人は、苟も大陸へ發展しようとするなら、その土地の土の中へ骨を埋める覺悟でなければならぬ。『旅の恥はかき捨て』といふ諺があるが、これが一番いけない。私は三十有餘年『到る所を清くせよ』といふモットオを掲げて生きて來た。もし金儲けをして歸らうといふやうな氣持だつたら、特に粘り強い支那人にいろんな點で敵ひつこないし、まして日本民族の世界發展など覺束ないと思ふのだ。

それから又、私は無産者だけが大陸へ渡るのではだめだと思ふ。都會に集中することの好きな有識有産階級の人達が、まづ移住の範を垂れなければならぬ。學者だつて、北京などへは行きたがらぬ現狀ではないか。こんなことではだめだと思ふ。

また日米の外交問題に關聯して、『在米日本人は引上げろ。』などといふ者もあるが、私の考へではむしろ捨石とすべきだ。アメリカは大きな豐かな國なので、人民は平和を好み、強制徴兵は彌次られてゐる現狀だが、もし日米關係が最惡の場合に立至つたなら、その時日本は『俺の方から在留邦人を引上げはせん。既にお前の國の社會組織の一分子になつてゐるのだから、追ひ出すなり何なりとしてくれ。』といふべきだ。それでこそ強い外交だと思ふ。在留邦人もその位のことはみんな覺悟をきめてゐるのだ。

銃後の人々へ

さて母國に歸つて見て特に強く感じたことをありのまゝに言はせて貰ふと、一般に豫想してゐたほど緊張味がないといふことだ。國を擧げての大戰爭の最中に、なんだか國民がちり〱ばら〱になつてゐるやうに思ふ。それから一部の人々は妙な錯覺に陷つてゐるの

ではないかといふ氣がする。

日清日露兩戰役には、國力を賭した戰爭だといふので、國民がみな眞劍そのものであつた事はその時代の人なら誰でも知つてゐる。

所が前歐洲大戰で日本は儲かつた。それ以來戰爭は儲かる物たといふ觀念が何處かにこびりついてゐるのではあるまいか。

例へば、平和産業が軍需工業に變つた。變つたのは何故か、國を擧げての戰爭だからだ。それなのに、變つたから眞劍にやらねばならぬといふのでなくて、儲けようといふのではないか。勿論全部が全部さうとは思はぬが、しかしたとひ一部でもそんな考への人間がゐたら大へんなことだと思ふ。

海外に在つて一日として母國のことを忘れたことなく、眞劍に働いて來た在留邦人の一人として、私はこのことを一番遺憾に思ふのだ。終りに近作のへなぶりを一つ附加へておかう。

○吾が國の吾といふ字を忘るなよ
　勝つも敗くるも吾が心柄

（をはり）

頑張り音頭

内田つとむ

外米たべても　代用食でも
氣持一つで　山海珍味だ
一番大事は　心掛だよ
思へ　戰地の　あの苦勞
　サアサ　皆で　手に手をとつて
　ここだ　一息　頑張れ〳〵

狐の襟卷　錦紗の着物
着たい欲しいは　人情だけど
生れた時には　裸ぢやないか
飾る錦は　この心
　サアサ　皆で　手に手をとつて
　ここだ　一息　頑張れ〳〵

マッチ一本　紙一枚も
生かして使へば　尊い資源
千丈の堤も　蟻の譬喩だ
無駄は國賊　身の破滅
　サアサ　皆で　手に手をとつて
　ここだ　一息　頑張れ〳〵

光は東に　亞細亞は夜明け
伸びる日本は　東亞の盟主
今だ　キリリと　心を締めて
意氣で乘切れ　荒海を
　サアサ　皆で　手に手をとつて
　ここだ　一息　頑張れ〳〵

染めたのが他人に感附かれぬ

三共の白毛染ベナン

三共 Sankyo

劇毒物を含まぬ自然色染毛劑の完成!!

同じ白毛染を使つても、染めたのがハッキリ判る様では何んにもなりません。在來の劇物ヂアミン含有の白毛染は其藥質上どうしても染上りが黒過ぎて俗に謂ふ『烏の濡羽色』を呈し、眞に不自然な醜くさを免れません。處が今回『藥の權威』三共株式會社の研究室から生れ出た **特許** **無害** 白毛染『三共ベナン』はどなた樣にも恰度その御年配に相應しい樣に如何にも自然の色調に染上る特徴が評判でありますが、實は製作者の並々ならぬ苦心も玆に拂はれて居ります。

其上『三共ベナン』は在來のヂアミン劑の樣に劇毒物を含まぬ故御常用につれて不知不識の間に内臟に種々不快な障害を誘起する樣な危險もなく、用法簡易で藥液を煮たりする手數も要らぬ等の諸點は前述の染上り効果と共に今迄どんな白毛染を使つても御不滿だつた方も『三共ベナン』で初めて滿足遊ばされたと言ふ澤山の實例のある次第であります。

—定價小45錢・大65錢—

㊟全國の藥店・化粧品店で取次いで頂けますが、直接振替にて販賣元・通信販賣部宛に御用命下されば内地に限り送費無代にて急送致します。（振替東京二七五七七）其他は送料樺・臺は廿七錢、鮮・滿は四十二錢。代引注文は御辭退申上げます。

總販賣元 東京・室町・三共ビル 泰昌製藥株式會社 振替東京二七九七七番

三共株式會社製造發賣

明朗小說

若奥さん大出來

南達彦

津田穰畫

新入生徒

語學、習字、ミシン、裁縫、一何によらず初めて教師の家を訪ねるをり、ハア〳〵と肩で息をしながら、ひどく亢奮して玄關を入るといふのは尠い。

だが衣枝だけは特別だつた。軒に出た獨語教授の突出式の看板を見上げると、

『あつた。こゝなら近い。』と、一種異樣の底光をおびた眼を、一つ、ぱちりと瞬いて、看板の文字どほりかう獨語した。

獨語教授——むろん、いふまでもなくドイツ語の教授で、獨りごとの先生ではない。

なぜ衣枝が、ドイツ語の先

生をみつけてこんなに亢奮してゐるのか、譯はあとで分る。

『ごめん下さいませ。』

『アー、ベー、ツエー、デー、エー、エフ、ゲー、ヨツト、カー。』

座敷の方角から、生徒の一人がドイツ語の字母を讀んでゐるのが、何かかう間が抜けて聞えてくる。

『ヨツト、カー、エル――。』

『ごめん下さい。』

『誰？』

『あたし。』

と自宅へ歸る時の習慣で思はずかう云つて、衣枝は、さう〳〵こゝへ初めて來たのだと氣がついた。だいぶ常軌を外してゐるやうなあんばいである。

ヨツトと生徒がいふと先生らしい聲で

『オツト。』といひながら立ち上つた。

玄關へ主人らしい三十五六の眼鏡をかけた人が出てきた。

『どなたとおたづねして、私と仰言るからフラウ（妻）かと思つた。』

先生はワイフと云はず、獨逸語を使つて、

それこそ本當に獨語した。

『家のフラウが、とき〴〵表から入つてきてごめん下さいと、詐すもんだから。』

獨語の多い先生である。

『失禮しました。』

ペコンと女學生のやうなお辭儀をして、衣枝は肩先で一度小さな息をした。

『ドイツ語を、敎へて頂きたいんですの。』

『さうですか、入門からですか。』

『はあ、ごく初歩からお願ひ申したいと思つてをります。』

『さうですか、ぢやアいつからでもおいでなさい。明日からで

も明後日からでもいつでも。月謝は三圓です。ヒザツキは御免除します。こんな時節ですからね。』

『先生。』

初めて會つたばかりだが、もう衣枝は永い間の知己のやうにさう稱んだ。一時も早く先生になつてもらひたいらしい。

『明日まで待てません。今日から教へて頂けませんでせうか。』

『そりやいつからでも私の方は構ひませんが。ぢや今日からつてことにしてお上りなさい。』

座敷に通ると、二十二三の男の生徒が一人ゐて足を出しながら手でもんでゐた。先生と衣枝が入つてゆくと慌てゝ足をひつこめた。

『先生のお宅、男女共學ですの。』

『塾だから仕方がないですよ。』

『皆一緒に教へて頂くんですか。』

『いや個人教授です。』

衣枝は女學校を卒業したばかりで、若々しくて美しい。それに大柄な銘仙を着込んでゐるから、わきの男弟子は急にそはそはして、

『ぢや今日は、この位で又今度來ます。』と中腰になつた。

先生が今度は急に慌て加減で、

『もう一寸をつてもらひたいんですが。』

『さうですか。』

『フラウが煩さいんでな。家の奴、とても燒餅やきだから。』

『まあア。』衣枝は先生のあけすけな物の云ひ方に、一寸呆れて苦笑ひをもらした。

市場の買出しから、奥さんが歸つてくると待つてましたと云ふやうに、男の生徒が風呂敷に本を包んで歸つて行つた。

『先生、ドイツ語は、人の話をするのが分るやうになりますのによつぽどかゝりますかしら。』

奥さんの方を氣にしながら、衣枝はなるべく大きな聲できいた。

『まあ半年かゝるでせう。』

『もつと早く上達できませんでせうか？』

『大變お急ぎのやうですね。何ですか、向うへでもお行きになるんですか。』

『向うつて――』

『ド、ドイツですよ。』

美しい娘を前にして、少々上つてゐるか先生は吃つて、何だか都々逸と云つてゐるやうに聞えた。

『いゝえ。』衣枝は小刻みに二三度首を振る。

『ぢやあ――？』

『先生、あたしね、スパイしたいんです。』

『スパイ？　へえエ、スパイといふとどんな方面の――』

先生は事の意外さに眼を瞠つた。そこへ奥さんがお茶を持つ

て座敷へ入つてきた。
『けふ見えたばかりの新しい生徒さんだ。』先生は紹介した。
『坂口衣枝と申します、どうぞよろしく。』
『私家内でございます、よろしく。』
先生は話の續きを始めた。やつぱり心持眼を瞠り氣味となつて、
『スパイと仰言ると一體どんな方面の――』
『實は私の夫なんですの、夫を私がスパイするんでございます。』
先刻先生が云つたやうになか〳〵の燒餅やきらしい奥さんは、『夫』と衣枝から聞いてもうこの若さで家庭を持つてゐたのかと、意外に思ふと同時にホッと安心した樣子だ。
『まあ、旦那さまをスパイなさるつて一體どういふ譯でございますの？』奥さんが訊く。
『私結婚して一月足らずにしかなりませんが、夫に何か秘密があるらしいんですの。』
『まあ……で、それとドイツ語とにどんな關係がありますの？』
『時々夫の友達が――男の友達です――遊びに參りますと二人でなんだか外國語でひそ〳〵と語り合つてゐるんでございます。何か大變重大な秘密らしいんです。』
『まあ……』
『一體何をあんなにひそ〳〵と私達に解らない外國語で話し合つてるの、と私何度も夫にきかうとしましたが、却つて夫に恥をかゝしても惡いし、夫も又、一度私が一寸その事を云ひかけると、何でもない〳〵と慌てゝ話をそらせてしまひました。私、不安でならないからそつと今度夫のお友達の來たとき、二人の話をきいてどういふ秘密か何の話か探らうと決心したんです。』
『しかし――』
と先生は少し苦笑しながら、
『そのあなたの旦那さんとお友達が話してらつしやるのを、ドイツ語だとどうして御斷定になりましたかね？ あなたは失禮乍らドイツ語を全つきりご存じないと仰言つてるんだから、聞いただけでさう斷定はできますまい。』
『いゝえ、最初私には、ドイツ語だとは勿論、フランス語かロシヤ語かそれともスペイン語か一さいわからなかつたのでございます。私の友達にそつと二人の話を襖の外から聽いてもらつたんです――私の友達少しドイツ語を習つてた事がありますので。』
『成程、するとそのあなたのお友達の方がドイツ語だと斷定なすつたわけなんですね。ぢやあ、旦那さまの話してらつしやるドイツ語の意味も解る筈ぢやないでせうか。』
『ところが友達には、意味がわかりません。ホンの一寸習つたくらゐだものですから。……私の夫も夫の今申した友達も法科出でドイツ語をやります、一つはそれからあの秘密の囁きをド

イツ語だと斷定もしたんです。』

『本當に家庭の中に、夫が妻に、何か匿し事をしてるなんて平和を缺く因になりますわね。』

奥さんは衣枝に同情した。

『アウス、ニヒツ、ヴィルト、ニヒツ。(火のない處に煙は立たず)。』

先生もドイツ語で云つた。尤もこれは衣枝には何の事か解らなかつた。

『私、いつそ何も知らないでゐる方がいゝかとも思ひますの、夫を信じてゐたいと思ひますの、でもさう思ふ下からやつぱり心配でならなくなつて參ります。夫に訊いてもハッキリとは答へてくれませんし、私の友達はドイツ語を習つたとは云つてもほんの少しで、皆目話を聽いても意味はちんぷんかんぷんですし、たとへ解つても他人に夫の秘密なんか知られたくありませんもの。私、自分でドイツ語を習つて自分の胸の中にだけ、夫の秘密を納めてゐたいんです。』

『やはり旦那さまを愛してらつしやるのね。』

奥さんはもう一度同情の眼差を送る。

『いやよく解りました。では、でき得る限り速成でお教へしませう。すぐ始める事にしませう。』

先生は早口になりがちで教へ始めた。

『さあ字母をやりませう。アーベーツェー、デーエーエフ、…

…だが、お宅、お留守にしてゐられていゝんですか。』

『大丈夫です、晩七時にならないと歸つてきませんから。お菜、お蕎麥のカケにしちやひますから――』

くたびれ儲け

『やあ奥さん、新婚日猶淺く、いよ〳〵益々ごきれいですな。』

日曜の朝、少し寢起きのむくんだやうな衣枝の顏を見て、夫の友達の川逢が、こんなおせじを云つてゐる。

『あらいやですわ。あたしまだ、髮もゆつてゐませんし、お化粧も。』

兩手で衣枝は顏を抑へてし、なをした。だが心の中は、今日こその意氣で一ぱいだ。

家庭を持つて、川逢の訪ねてきたのは今日で三度目だつた。夫とひそ〳〵ドイツ語で話しあふのはこの男なのである。今度來たらその時は、と衣枝は夫の留守の間、どんなに一心不亂にドイツ語を勉强したか、よろしく讀者の皆さんお察しを乞ふ。けふで三月になる――女學校にゐたとき、試驗の始まる前だつて、こんなには勉强しなかつた。

『いゝ天氣だね。』

夫が云つてゐた。

『邪魔をしたんぢやないかね、奥さんとアベックで、散歩なんかに出るところを。』

『いや、さうでもない。』

裏の空地で、洗濯をする風に、ガチャ〱ポンプを押して、盥をゴトンと大きく置いてから、そつと衣枝は、はだしで臺所から茶の間へ上つた。

茶の間には、泥足の迹が三つ四つもついてゐる。夫の秘密をかぎ出すのはなか〱に骨が折れる。

そーつと火鉢のひきだしをあけると、中から衣枝はドイツ語の字引を出した。勉強の甲斐あつて一寸した簡單な會話なら、もう衣枝は曲りなりにもわかるやうになつた。

『衣枝、衣ちやん。』

夫が、井戸端にゐると思つて大きな聲で呼んだ。

衣枝は拔足で臺所をとほつて、はだしで井戸の側から、

『ハアイ、只今、呼んだでせう？』と云つた。

『呼んだよう、お茶だ。』

『ハイ、たゞいまあ。』

座敷へお茶を淹れかへに出ると、もう一度井戸端へ行つて、ガチャン〱とポンプを押してから、又もとの臺所。

『――――』

川逢が囁いた。

『――――』夫が答を返す。秘密の囁きだ！

衣枝はドイツ語の字引を握つて、ハッとなつた。汗で字引が濕り氣を浮べてゐる。夫と川逢が案の定、秘密らしいひそ〱聲のドイツ語で話をしだしてゐるのだ。

『――――』川逢が又云つた。

『――――』夫は何か答へた。

まだ娘々と、素足の足を一寸片つ方あげながら、中腰で隣の座敷へ、きゝ耳を立てゝゐる衣枝は、なか〱艶めいた風情である。本人、但しそれどころでない。

賀川豊彦著 三大小說

日輪を孕む曠野 定價一・〇〇 送料〇・〇九

祖國を後に、日輪を孕んで天與の恩寵に誇る滿蒙の新天地に活躍する青年の生活を中心に、著者の抱懷する大陸政策を織り込んだ理想小說。大陸文學の雄篇。

第三紀層の上に 定價一・五〇 送料〇・一〇

第三紀層地帶東北地方の山村を舞臺に、純愛に生きる若い男女が、如何にして貧困と病苦と迫害とを克服して幸福な境涯に達したか。著者の熱情溢るゝ感激の理想小說。

海豹の如く 定價一・五〇 送料〇・一〇

著者が漁民の生活を改善せんとする熱意に燃えて全國に亙つて漁村の實情を精査し、此の資料を驅使して社會改良の理想を盛つたのが本書。海洋國々民必讀の名小說。

東京市小石川區音羽町
大日本雄辯會講談社發行
（振替東京三九三〇番）

『おーい。』
座敷から、夫が又呼んでゐる。
『ハアイ、呼んでえ？』
『お菓子買つといで。』
夢中で茶簞笥のひきだしから、五十錢札を出すと、片手で握つて玄關を出ながら、今のは何語だらうと、そればかり考へて歩いた。
『奥さん。』
『あら。』
横町の店屋の前で呼んだのは、獨逸語の先生伊地知さんの、あの奥さんだ。
『グーテンモルゲン（お早う）。』
奥さんはドイツ語で云ひ〱笑つてゐる。
『グーテンモルゲン。』
『イヒ、フロイエ、ミヒ、ジー、ツー、ゼーヘン。（お目にかゝつて嬉しいわ）。』
奥さんも聞き憶えのドイツ語らしい。
『イヒ、ダンケ（ありがたう）ヴィー、ベジンテン、ジー、ジヒ？（御機嫌いかが）。』
『巧くおなりになつたのね。もう伯林へ行つて八百屋で買物ができますわ。』
『それほどでもございませんわ。』
『ところが八百屋では通じて、雑貨屋で忘れたりもしましたつてね。』
ホッ、と衣枝は、吐息をついて、ぺたんと一度坐つた。
何のことか、丹精して習つたが、どうも二人の話はドイツ語ではなささうなのだ。
『こんちやあ。』
裏口へ魚屋が來た。衣枝はそーつと立ち上ると、忍び足で臺所口を出て井戸端から、
『あら、お魚屋さん？』

『そんなところですわ、たぶん。』
『で坂口さん、旦那さんのお友達とかその後お見えになつて？』奥さんは聲をひそめた。
『今、宅に來てますの。』
『まあ。そして何か內證話をして？』
『えゝ、だけどあたしゲンナリしちやつたんです。だつて折角習つたのに、夫と友達の話ドイツ語と違ふんですもの。』
『あーらま、ドイツ語ぢやなかつたんですか。』
『傘屋さんでしたわ。』
『骨折損、まあつまらない。お氣の毒さま、月謝損なすつたわねホヽヽ。で一たい、何語？』
『それ、私にわかりません。』
『まだ旦那さんのお友達、お宅にいらつしやいますの？』

『えゝ、ゐます。あたし、お菓子買つておいでつて云はれたんですから、お客さま家で待つてますわ。』
『ご注意が肝要よ。奥さん。』
『どうしてです？』
『あなたにお菓子買ひにやらせて、そのあとで大つ平に、秘密の話をするんですよ。日本語で。』
『まあ、そんな推察、やはり奥さん功を積んでいらつしやるわ。』
『ご挨拶だわね、ホヽホ、私、あなたのやうなネンネエの……あら失禮、學校出たての若い方が、夫からいゝやうに遇らはれてるの見ると、私おせつかひな性分でやきもきしちまふんですよ。そつと私行つて、何語だか聽いてみませうか。』
『でも、なんだか――』
『大丈夫、跫音立てないわよ。

私、足の土ふまずがないから、歩く時音しないの。』
『猫みたいですこと。』
『さうよ。おまけに熱いものが食べられないときてるから、いよ〱猫みたいよ。大がい聽いたら、フランス語かドイツ語か、スペイン語かチエッコ語か、何語か、わかりますよ。』
　衣枝は奥さんと裏口に來た。それから奥さんは臺所の入口で、そつと下駄を脱いだ。
『まあア。』
　奥さんは臺所から茶の間の方へ、四つん這ひでキリンか何かのやうな恰好でのそ〱と這ひだした。
　いきなり臺所口の衣枝の方を向いて、大きく眼をひらいた。ときどき頭を振つては、耳を襖ごし座敷へ傾けた。
　そろ〱と奥さんは行く時と同じ姿勢で引返してきた。笑ひながら這つてくる。這ひながら『解つた』といふ標に片手をあげた。奥さんは息のやうな小聲に變つて、
『わかりました。』と囁いた。
『何語です？』と衣枝も小聲で問ひ返す。
『支那語です。』
『まあ、支那語ですか。』
『あんなドイツ語がどこにあるもんですか。あなたのお友達、ほんたうに駄目ね、あれをドイツ語だなんて云つて。あれはあきらかに支那語ですよ。』
　門と玄關との間の空地へ二人は來た。

『支那語で、何と云つてました？』
『私のは、支那語だとわかることはわかるんですが、さあ、意味となると——』
　衣枝は意味のわからなかつた方がよかつたと思つた。あの女は君にあひたがつてゐるとか、例の待合の勘定はどうするつもりだとか、そんな意味の話だとしたら、夫の辱を他人にさらすことになる。
『ねえ、かうしません？　奥さん。』
『かうつて、どんな。』
『私の友達に大倉さんつて學校友達がゐるのよ。その人、支那に二年もゐて、ペラ〱ッと支那語喋れるんですよ。大倉さんに來てもらつて、いつか又、旦那さんの友達の來たとき、支那語の意味を聽いてもらつたら。』
『ご深切は嬉しいですけど私よしますわ。』
『さうオ？』
『そんなことしてると、幾らだつて夫の秘密廣まつちやふんですもの。』
『それもさうだけど。』
『奥さんお一人でもうたくさん。』
『ぢや、もうお諦めになるおつもり？』
『あたし自分で習ひますわ、支那語。』
『まあ愕いた。あなた全く精力家ねえ。支那語を又エービーシー、ぢやない、チーチーパーパーから勉强するお覺悟なの？』
『えゝ。』

新婚晴天

『一個人。』と先生が讀本をよむ。
『一個人。』と衣枝が反唱する。
『日本語の一、これはイーです。二はアル又は兩で三はサン。』
『四はスーで五はウーでせう？ 先生。』
『よく知つてますな。』
『だつて昔麻雀やりましたもの。』
『成程。一個人は一人の人といふ意味で、一個男人、男人は男です。男子です。』
夫を秘密をもたない男人にしてやりたいと衣枝は思つた。
『女人。』と先生が讀む。
『女人。』
『さう。女はヲンナです。』
惱みのない女になりたいものである。
『六個學生、六人の學生、十一個錢。』
『十一個錢。』
『十一個のお金、二十個朋友、二十一人の友だち、といふ意味です。支那語で數は人でも花でも馬でも石炭でも、個です。』
夫は世の中で只つた一人の朋友だ。
『今度は、何々で、何々にて、といふときは是を使ふ。いゝですかね、十二個月是一年。』

松島詩子唄
流行歌
廣東の踊ッ子
圓熟松島の第二巨彈！『上海の踊り子』をグット拔いた素晴しさ！
御愛聽下さい
時雨音羽作詞
細川潤一曲編
片面
黄昏の南海
林伊佐緒
田村和夫作詞
多紀英二曲編
47024
1.85

キングレコード

『十二個月是一年。』

『さう。十二の月で一年、十二ケ月で一年といふ意味です。七天是一個禮拜。』

『七天是一個禮拜。』

『さう。天は日のことで一天は一日です。』

あゝ一天も早く夫の秘密を――

『禮拜は日曜の意味です。七日で一つの日曜――七日で一週間。』

そよ風に、軒に吊られた支那語教授の看板がカタ〳〵と鳴つてゐる。衣枝は毎日この支那語の先生の家に通つてゐた。

あんなおせつかひの座敷へのこ〳〵這ひ上るやうな奥さんなどが又ゐてはと、警戒したから、今度の先生の家では、もう支那語を習ふ譯を、明かさずに濟ましてゐた。

『この頃、よく蕎麥のカケを食はせるね。』

夫が笑つた。

『ウフヽ。支那そばの方が好きぢやない？』

『なぜ笑ふ？』

二人とない大事な夫だが、何か妻にかくす内證事を持つてゐるのだと思ふと、一寸にくらしい氣もする。

『お蕎麥、支那語でなんていふの？』

『ワンタン、いやラーメンかね。』

『お蕎麥一つつて、支那語でどういふの？』

『知らないよ。』

『まあ白つぱくれて。男つて本當に狸ね。』と衣枝は思つた。

漠然と、別だん對象がなくて、物事を習ふのはあまり進歩が速くない。毛絲の編もの一つだつて、ゆく〳〵手藝の先生になるとかそれで家の經濟の足しにする、と考へると、巧くなりやうが違ふのである。

その點、人間は割とゲンキンである。何分目的が、夫の秘密をスパイするといふので、これははげみといふのではなくて、一時も早くといふ一種の焦り

で、衣枝の支那語は上達が速い。

『辛苦 來 位。』（今日は）

塾へゆくと、この頃は生徒同士、こんな挨拶さへできるやうになつた。

家で夫と、食事をしてゐて、

『吃過了。』（おしまひ）

などと、思はず云ひかけてドキッとした。こみ入つた話ででもなかつたら、まあ、十中半分くらゐまで意味が解るのだ。

早く川逢が來ないかと、日曜のくるたび衣枝は待つた。或る晩だ。

『今度の禮拜——』

おつと危い。

『今度の日曜いつ？　明後日？』

『さう。』

『この頃、あの人來ないわね、川逢さん。』

『きつと會社が忙しいんだらう。そんなことはどうだつていゝが、君、君の學校ぢやドイツ語を教へたのかい。』

『いゝえ、あら、まあどうして？』

『變だな。』

『なにが變？』

『今日ラヂオが妙にゴトンゴトンいふから機械の後の蓋をあけたら、その中の緣のところから、ドイツ語の本が出てきたのさ。』

『あら。』さつと衣枝は蒼くなつた。

『小さな字引も一緒に、眞空管の向う側に立つてた。』

『ソアツ失敗つた。まあ、私大失敗。』

『ドイツ語をやつてたの？』

『えゝ、實は一寸あなたにないしよで。』

『どうしてかくすんだ、僕に。立派なことぢやないか。悪いことを亭主にかくすのはわかるが、いゝことをかくすのは、その氣持わからんぞ。』

『悪いことなのよ。』

『ドイツ語を習ふのがか、へーえ愕いた。』

『まあ困つちやつた。シヤッポ脱いだわ。ドイツ語の外に支那語も習つてるのよ、かうなつたら余は白狀いたす。實在多禮（恐れ入ります）。』

『あれ〳〵。』

『實は――』

衣枝は委細を云つた。とたん、夫はのけぞるやうにして笑つた。うしろへ手をついて、片足をあげて笑つた。

『ユクワアイ、ユクワアイ、冗談もいゝ加減におしよ。僕に秘密があつて耐るか、秘密のヒも僕にないよ、ヒのない處に煙は立たずだい。』

『だつて川逢さんと何か外國語で――』

『あれは川逢語だよ。言葉を一つ〳〵逆さにして云つてたんだ。』

『ンまあア、あーら嫌だ。』

『けふはいゝ天氣、これは、ハキヨウ、イー、キテン、となるんだ。奥さん――は、サンオク、お父さんはサンオトー、やきもちやきはキヤチモキヤ、大失敗はシッダイパイ、どうだ奥さん。』

『敗けたあ。で、一たい何云つてたの？』

『川逢の奴がね、いつも奥さんまだ腹はふくれないのかときいてゐたんだ。』

『あらいやだ。』

『サンオク、ダーマ、ラハ、クレフナイカーだ。そこで、僕がかう答へる――ダーマ、ノソ、ハイケナイ。まだその氣配ない。その外にもいろ〳〵夫婦間の露骨なことを訊く。的確に姙娠する方とか、そんな方面の生理問題とか。……さういふ大變露骨な話だから、日本語をカモフラージして話したんだ。』

次の休日、久しぶりの川逢氏來駕だ。さつそく、夫と二人獨特の川逢語を實演してみた。

十日程經つた或る夕方、いそ〳〵と衣枝がチヤブ臺を拭いてゐると夫の御歸館――歸るなり、

『おい、敗けた。今度は僕が君に敗けた。』

『なんなのよ。』

『僕會社の轉任で支那へゆく事に決つた。』

『あらッ。』

『支那人と、ドイツ人に取引するんだ。君が二ケ國語を少しでもやつておいて、迚も大出來だ。僕も速成でドイツ語と支那語を習ふ。君の方が一足先だつたよ。ユクワアイ！』

『ユクワアイ！』

送別の日、夫は衣枝の二人の先生、ドイツ語と支那語の先生を招いた。

『イヒ、フロイエ、ミヒ、ジー、ツー、ゼーヘン。（よくおいで下さいました）。』衣枝はドイツ語の先生にかう挨拶し、支那語の先生へ支那語でかう云つた。

『不敢當實在勞駕得很（よくお越し下さいました）。』（完）

標語

○勤儉節約進んで國債應募

○迷ふな流言、愼め無駄口

胃酸過多

錠劑は嚙まねば效かぬ

胃酸は少な過ぎれば食慾がなくなり、多過ぎれば所謂胃酸過多症となつて最後は恐ろしい胃潰瘍ともなる。だから胸やけや噯氣が出たり、食後又は空腹時に心窩部の邊りが烈しく痛むからといつて重曹劑やありふれた制酸劑を濫用するのは愼しまねばならない。

チエリオは從來の藥劑と異なり餘分の酸丈け取除く作用があり、而も長時間續けて效くから服用すれば食慾や消化に何等の障りなく健康胃に恢復することが出來る。殊に獨特の嗜味を施してある故錠劑は嚙まねば效かぬと云ふ藥の原則通りに充分嚙み碎いて服用することが出來從て效果が迅速で確實である點も本劑の誇りとする處である。

【主治效能】胃酸過多・宿醉 胃潰瘍・十二指腸潰瘍・急慢性胃腸カタル・醱酵性下痢・慢性下痢 消化不良・過飲過食・食慾不振

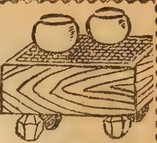
制酸・吸着・解毒新劑

チエリオ

藥價 三〇錠入 五十錢 六〇錠入 九十錢

味の素直系
東京市京橋區寶町二丁目
寶製藥株式會社
振替東京六五〇七七番

丈夫で働け國のため



實力養成『筋の發見』

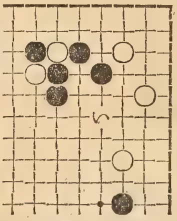
七段　瀨越憲作

碁の筋とか急所とかいふものは、さう澤山あるものでありません。勿論限りの有る事であつて、然もそれは列擧しようとすれば出來るほど、案外少い位ですが、さてこれを抽象的に説くといふことは、不可能ではないけれど、恐らく無意味に近い。何といつても多くの實例に就いて、片端から征服して行くのが一番確かであり、廻り遠いやうでまた習得の近道でもあるのです。

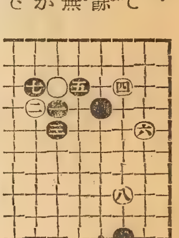
本號からはその『筋』若しくは『急所』の代表的なものを選んで研究し、且つ一々應用問題として類型を揭げ、讀者の把握を確かめて行きたいと考へる。此の方針を當分の間續ける豫定であります。

第一圖　これは置碁の實戰に於いて常に見受けられる所。本來白は『い』の點に早く補つてゐなくては成らぬ形であつて、此のまゝでは不完全なのですが、その缺陷を黑が如何に咎めて行くかの問題であります。

一體第一圖は、第二圖の手順から導かれるのですが、それでも知られるやうに、實際問題としてこれは黑の手番である。だから第二圖白八に續いて、直ぐにも黑から打つて行く事は出來る譯です。然し他に好い處、大場が澤山あるとすれば、互にその方を先づ打ち、從つて白が第一圖『い』を一時保留する場合は隨分あり得るのであります。所が一時の保留ならいゝけれど黑が打つて來ないのを見越して、白が若し以時までも手を加へずに置いたならば如何するか。實際置碁では、白たる者はさう正しい本手ばかり打つてゐては間に合ふものでありません。だから黑に打たれたら困るなと承知しながらも、守つてゐる餘裕の無いのが普通である。そこで黑から打つ急所はといふと、第二圖に於ける六の二路下であります。その點に黑に打たれると、白は兩斷を免れず、全體が連絡して無事を得ることは望まれません。



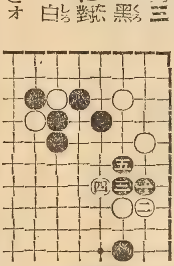
（第一圖）



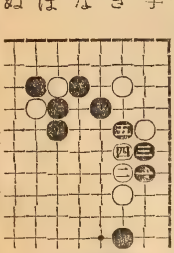
（第二圖）

第三圖　黑一に對し、白二とオサへれば、黑は三、五と曲つて宜しい。此の曲りそれ自身は一般に排斥される愚形ですが、此處は勿論これに限るので即ち例外であります。

斯く遮斷されると、隅は隅で獨立して後手で活きてゐなければならぬから二以下の方の不安と浮動はいふ迄もありません。白二を三の方からオセば如何かといふと、これは第四圖黑五迄となる。



（第三圖）



（第四圖）

第四圖　は五の次に白が三の二路上に引いた時、黑は一の一路下へ渡つてしまふので、得失の關係は凡そ第三圖と似たものであります。

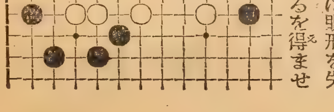
更に第四圖白四を以て五とすれば如何――第五圖黑五、七である。

第五圖　黑五、七と實利を收めつゝ白を攻めるぞと打つのです。白が怠れば、黑『い』白『ろ』黑『は』白『に』黑『ほ』で、此の白は眼形を失ひ、裸身で中原を彷徨せざるを得ません。黑の優勢は明白であります。

（第五圖）

第六圖　本圖は前例の應用問題である。黑から打つ筋を、十分に考へてから次の解説に進んで下さい。

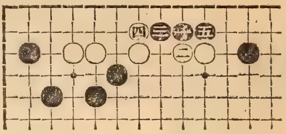
第七圖　急所は此の一か、三かである事が



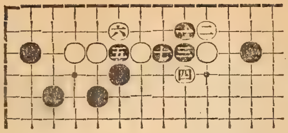
（第六圖）

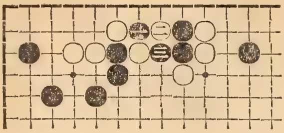
誰方にも合點されたらうと確信する。

白二乃至黑五で、白は全然根據を失つてしまひました。白二の手で五からオサへ込めば次の二圖です


（第七圖）

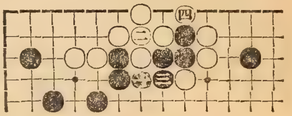
第八圖　黑三乃至七に、白が窮する。七に續いて七の一路下を白がオサへれば黑は無論六の一路右をキルし、又七の次に六の一路右を白がツゲば、黑は七の一路下に突出す迄である。


（第八圖）

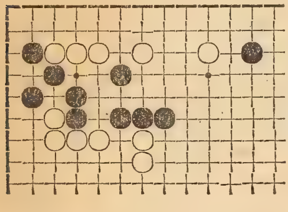

（第九圖）

本圖黑七の手で、手筋からいふと第九圖一と先づキリ、同圖白二黑三としたい意味もありますが、それは黑一を白がトツた所から、第十圖黑一乃至白四で、白は兎も角も一旦渡ることが出來ますから、渡らせない第八圖の方がこゝでは優るものと言はねばなりません。

さて初め第七圖一の手で三の方にオケば如何なるかといふと、それも立派に成立する筋なのですが、次にもう一つ類型を掲げますから其の方で說く事にしませう。


（第十圖）

第十一圖　明らかに第六圖に似た形です。黑から打つ急所或ひは筋も從つて同樣でなければなりません。なほ本圖も第六圖も共に互先の實戰から採つたものでありますが、少し注意すれば此のやうな形は常に出來る事を知られるでありませう。

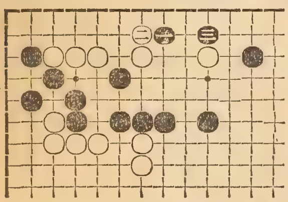

（第十一圖）

第十二圖　黑一が一つの筋である。もう一つは前例の如く一の一路右にオクのですが、其の方は讀者の研究にお委せしたい。前例とはほんの少しばかり工合が違ふけれど、本圖の方は白が殆んど封鎖されてゐるやうな形なので差は寧ろその關係に存する事です。

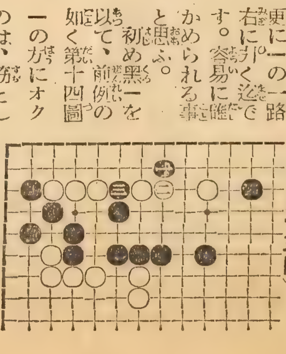
此の一の筋が、前例に於いても成立するのを、重複を避けて省略し今本圖の方で示すのであります。

黑一白二ならば、黑三とトビツケて渡つてしまふ。根據を失つた此の白は出路が殆んど塞がれた形であるだけに凌ぎを見出す事はまづ困難でせう。それだけに又此の一が、前例に於けるよりも一層有効となる理であります。なほ第六圖に就いて、本圖一とオク方の筋を、考へて見て下さい。

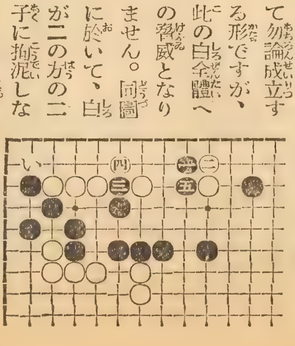
白が本圖二の手で若し一の一路下からオセば、次圖黑三と透かさず突出して宜しい。


（第十二圖）

第十三圖　黑三の次に、白が三の一路上にオサへれば、黑は一の一路左をキッてから、更に一の一路右に引く迄です。容易に確かめられる事と思ふ。


（第十三圖）

初め黑一を以て、前例の如く第十四圖一の方にオクのは、筋として勿論成立する形ですが、此の白全體への脅威となりません。同圖に於いて、白が二の方の二子に拘泥しなければ、黑五の次に白『い』としても、大半は治まる事が出來ます。即ち此の白が封鎖されてゐると居ないとで、そこに前例第六圖の場合との差が現はれて來るのであります。


（第十四圖）

富士漫畫會場

街頭の見合

せんば太郎

『自粛カードを渡されるやうな娘、お前の嫁にやわしや反對ぢや。』
『勿論ですとも、お父さん。』

防空演習

岡田晟

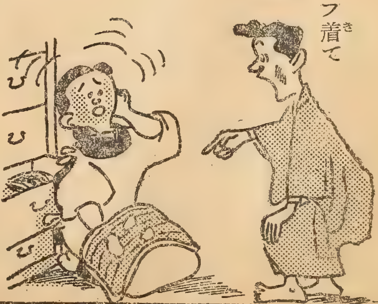
そゝつかしい玩具屋の親爺さんが、防毒マスクを間違へました。

漫謠漫畫 これは不經濟

富田幸夫

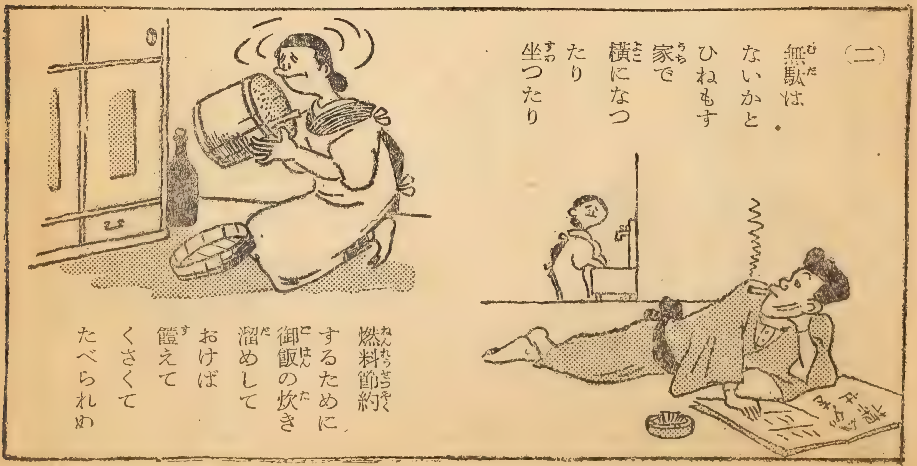
（一）

わざわざス・フ着て
純綿を大事に
藏つておいた
はよいが
虫に喰はれて
着られない

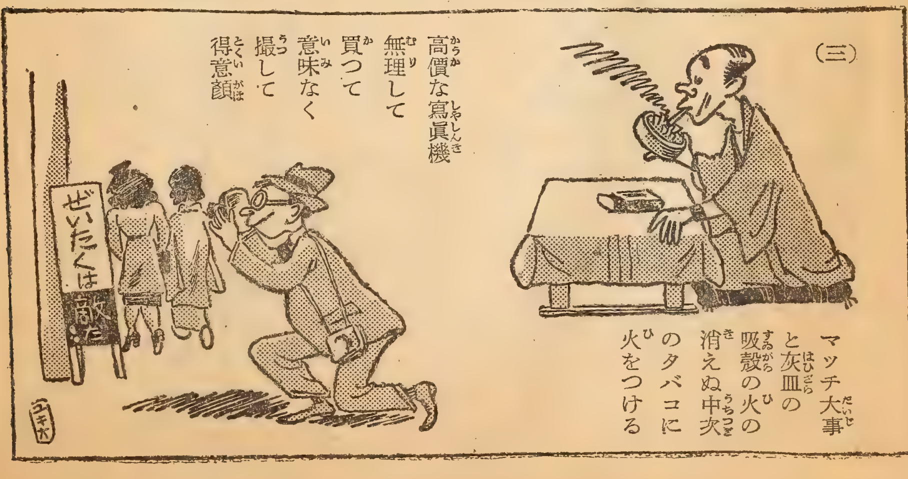


代用食では
お腹が空く
と三人前程
平らげる

恰好は同じでも……志村つね平
1
2
映畫劇場
名畫上映中
今週の映畫とてもステキよきつと
1
電車賃の節約と健康のためだ。かけて行かう
2
寝呆してゐておくれちやつたまつてくれ——


（二）
無駄は、ないかとひねもす家で横になつたり坐つたり
燃料節約するために御飯の炊き溜めしておけば饐えてくさくてたべられぬ

影芝居
牧とらを
1
面白い芝居を見せてやるからみんな呼んどいで
2
そーれはじまりはじまり
3
ヤッ
エイッ
ナーンダ面白くないのッ
4
アッ大變だッ首を斬られたッ
ヤラレタッ
ヤッ
5
まア〱びつくりしたそんな仕掛がしてあつたの
ほんとに首を斬つたと思つたのかい


（三）
マッチ大事と灰皿の吸殻の火の消えぬ中次のタバコに火をつける
高價な寫眞機無理して買つて意味なく撮して得意顔
ぜいたくは敵だ
ユキホ

血壓中樞の狂ひさへ止めれば
高血壓・中風も易々

◆これまでなかつたホルモン療法の發見！

血が濁るとか、動脈が硬くなるとかは、全く枝葉の問題で、高血壓や中風の本當の原因は『ホルモンが缺乏して血壓中樞（急所）が狂ひ出すからだ』と云ふ眞に驚くべき新學說が最近、有名なリツケル教授により發見されました。それ以來と云ふものは、特殊なホルモンを補給して、この急所の狂ひを止めねば病氣はドウしても治らぬと云ふ新事實が世界的に認められて來たのであります。

こゝが血壓の中樞

このスバラしい新學說をそのまゝ應用し、血壓の急所に直接に作用して病源を治す唯一の特殊強力ホルモン劑『ヤギクラミン』が今度初めて、倉上醫學博士により發明されました。

それ故、之を服めばホルモンは直に血に溶込んで狂つた急所に達し、その故障を止めますから血壓は易々と下り、憂鬱な不眠癖や頭重、耳鳴、肩凝、眩暈、動悸、息切れ等は勿論、手足のシビレや舌もつれを始め、永年の中風も初めて快方に向ひ出したと云ふ拔群の好成績が次々と續出してゐますが之こそ、これ迄の的外れな療法と根本的に異り、『特殊ホルモンの力で狂つた急所を治す！』と云ふ偉大な效果を物語る何よりの證據でありませう。

實話

血壓中樞の狂ひを止めて 私は初めて丈夫に
―血壓下り安眠出來、頭痛や耳鳴もサツパリ―

（山口縣德山市東區舞車町一八一八 郵便事務 河村義太（五十三歲））

拜啓　ヤギクラミン服藥十日目、本日の容體御通知申上ます。本日血壓を計りまして實に驚きました。服藥當日邊りは百九十でありましたが、本日は十日目で百五十に降下しました、につれて頭も大變よくなり頭のイタイのは丸でコロリと止まりました。次第々々に夜が大變よく眠られ出し、朝目が覺めた時の氣持のよい事何んとも申し樣ありません。この樣な事は二三年此の方初めてゞあります。初めてヤギクラミンの廣告を拜見しました時は、矢張り之も今迄のと同じかも知れんと思ひましたが實に感心しました。之全くヤギクラミンのお蔭と私を始め家內一同喜んで居る次第です。藥が切れぬ中、後御註文連服致す考へです。二伸、耳鳴りも大變よくなり、トギレが餘程遠くなりました。（發表御承諾濟）

尚、**ヤギクラミン**の定價は十日分三圓五十錢、廿日分六圓五十錢、卅日分九圓五十錢(德用)十七圓五十錢、送料內地十五錢、其他四十二錢です。發賣元・東京市目黑區洗足驛前三號、原理化學研究所藥品科(振替東京八四五一一番)か講談社代理部(振替東京六六二九番)へ御注文下さい。代金引換は內地のみ扱ひます。

★(東京)伊勢丹、東橫、高島屋、白木屋、松坂屋、松屋（橫濱）野澤屋外全國有名藥店に有り。

★(代理店)東京・玉置、大木、大阪・高橋

説明書送呈

長篇小説

徳川家康

鷲尾雨工
志村立美畫

岡崎の挨拶

『岡崎への使者は、山口、そなたに申しつけるぞ。』
織田信秀は、山口惣十郎弘孝を指名した。
よほどの度胸がなければ務まらない役目なのである。
むろん山口は、決死の覺悟で引受けて、使命を果すべく岡崎城に着いた。
『予が對面する。』
松平廣忠は、尾張からの使者を引見することになつた。山口惣十郎が導かれた。
敵意と、殺氣とが、物々しく漲る。
だが山口は怯まずに、
『主君信秀の言葉のまゝに申上ぐる。御嫡男竹千代殿のお身柄は、たしかに信秀お預かり申した。されば今に於いては、御當家も、今川の一味を離れ、尾張と和睦なされて、水魚の交はりをせらるべし。しかしながら、もし此事叶はずとござらば、御幼息の御一命はなきものと思召せ。至極口上は簡單でござれど、結果は重大なるべし。——以上が、主君の申入れでござります。』
と、のべた。
これに對して、廣忠が答へた。
『奇怪なる申入れを聽く。なにが故に松平廣忠、わが子を織田家へ人質に送らうや？　そもそも三河と尾張、境を接して領土を爭ひ、戰ひを挑みしこと幾十度ぞ。かくいふ廣忠にとつて、信秀殿は宿敵なり。亡父淸康以來、小勢を以て織田家の大軍に對抗し、軍を破りし事、數を知らず。つひに一度も雌伏せざるは、これ即ち三河武士の武勇の致す所でござる。愚息竹千代こと、仔細あつて今川家へ參る其の途中、大慾無道の戸田五郎が、緣邊の誼みをも思はず、人非人の面の皮厚がましくも鹽見坂にて盗みとり、其方へ送りつけたる次第ゆゑ、毛頭、廣忠が差出

したる人質にあらず。われらは駿府の今川家との舊好、だんじて變ずべきではござらん。廣忠は、義を知る者でござる。いかで一子の愛情に溺れて、怯懦にも不義の振舞をなさうや？　愚息竹千代の生死存亡は、ひとへに織田殿の心に委せらるべし。いさゝかも恐るゝ所なき廣忠なりと、歸つて此旨、申されい！』

あくまで思ひ切つた返答であつた。

これでは山口惣十郎も、再應述ぶべき辭が見つからなかつた。

『長居は無用ぢや！』

と、廣忠が云つた。

（粘つたとて効はあるまい）

使者の方でも、さう思つたので、そのまゝ古渡の城に立歸つて、しかじかと松平家の强硬な態度を、信秀に報告におよぶと、折しも傍にゐた吉法師信長は、なにが氣に入つたのか、特別に愉しさうな容子で、

『うッわッはッはッは！』

と、突拍子もない高笑ひを、まさしく爆發させた。

前號までの梗概

三州岡崎の城主松平廣忠の奥方於大の方は鳳來寺山峯の藥師に參籠祈請して、一子竹千代を生んだ。此時寺僧の計らひで、この若君こそ眞達羅大將の化身だといはせた爲、岡崎城内は『天下人生誕』の歡びに湧いた。

所が、噂を聞いた駿府の今川義元は大きに氣色を損じ、無法にも廣忠に強ひて、於大の方を離別させてしまふ。これを見た於大の方の實兄で、刈谷の城主水野信元は、いたく廣忠の怯懦を怒り、俄かに、松平の宿敵たる尾張の織田信秀へ款を通じるし、岡崎城内にも主君の行爲を憤る者が出たばかりか、廣忠の有力な一族松平忠倫も、急に岡崎への出仕を廢止するに至つた。

そこで廣忠は、刺客を送つて忠倫を暗殺するなどの非常手段を用ひたが、さういふ紛亂は、一段と今川義元に、岡崎彈壓の念を固めさせ、遂に若君竹千代をば、駿府へ人質に出せとの要求を出す。時に廣忠は、同國田原戸田家の於登姫を後妻に迎へた砌だつたが、抗ふ術もなく義元の命に從ひ、新妻の弟五郎政直に託して、竹千代を駿府に送り出した。

すると途中政直は、鹽見坂で岡崎方の護衞を出し拔き、竹千代を拉して遠州灘に漕ぎ出し、遠く熱田の豪族加藤圖書助の邸へこれを連れ込んだ。寧馨兒竹千代の一身を、尾張の織田信秀に託さう遠大な計畫からである。

所がその圖書助の邸へ、飄然飛込んで來た織田吉法師（後の信長）は、委細を聞いて竹千代に異常な興を覺え、遮二無二これを裸馬に乘せて連れ出した。さうして翌日、父信秀の館へ、憂ひに滿ちた政直が挨拶に出た席上へ、傍若無人な態度で、竹千代諸共再び現れて來る。

狐馬の注文

『喫驚させるではないか。なにが左樣に可笑しい？』

信秀は、睨みすゑて、

『馬鹿な！』

と、つぶやき添へた。

『わッひひひ！』

こんどは引き笑ひをして、吉法師が、

『馬鹿は親ぢ殿、あなたですよ。』

と。――云はせも果てず、

『なに、親父だとッ？』

父が、眼をむく。

『わたしは馬に乗つてゐる。狐馬ですからね。然るに父上は、鹿に乗つていらつしやる。』

『た、戯氣つ！』

叱られても一層莞爾として、

『鹿の脚は、細すぎて、危うござる。』

吉法師は、嘯いたのである。

『默れ！』

『いけません。わたしが默つた日には、父上がお困りです。』

『困るものか！』

『ちがひます。親父殿は鹿に乘つて――』

『おのれ、また申すかッ！』

『今川、松平の聯合軍が、押寄せた場合を、怖れていらつしやる、と云ふのが、お氣に召さなければ、すくなくとも苦に病んでおいでだ。岡崎の小びを囮にして、誘へば、三河が味方になるものと、お考へになつたのが第一に、鹿乘り馬の御思案だつた。松平の廣忠といふ男は、いはゞ骨がらみの恐怖今川病患者ですから、駿府へ人質に出すつもりの竹千代を、わたしたちに取られたので、よけい今川には頭が上がらなくなつてゐる。小びの命を犧牲にしても廣忠は、自分の家を保つ爲に、今川の先棒を、死物狂ひに擔ぎますよ。ですから岡崎勢を先陣にした駿・遠・三の大軍が、いよいよ攻めて來たとなれば、尾張一國では、駄目だ。防ぎがつきませんとも。敗けますよ、うッわッはッは！』

またぞろ吉法師信長は、哄笑した。

『これこれ、笑ふとは何事ぞ！　防戰の覺束ないのが、なんで可笑しい？』

信秀は、老臣たちの前もあつた。で、一入聲を、きびしくした。

『敗けてはお困りでせうな？』

なんといふ奇問だ――まるで他人事のやうに。

『當然すぎた事を申すなッ！』

『困るものかと、父上は仰有つたくせに。』

『さつきとは話が違ふぞ！』

『同じことです。』

吉法師が、ふたゝび嘯いた。

すると父の方が折れて、

『なにか對策でもあるのか？』

と、訊ねた。

背負つた子に淺瀬を教はる、といふ。ましてや是れは、若冠十四歳といへども、すでに體格は魁偉、堂々たる成人を凌ぎ、馬術、水練、射撃、刀槍、跳躍、力技と、ありとあらゆる武術において、師は置けども師に就かず、ほとんど學ばずして體得するといふ不思議な天禀を具へてゐる吉法師だ。奔放不羈で、常軌からは飛んでもなく逸脱してゐるこんこん馬ながらも、父としては勿論、この場合、意見を徴さずにはゐられなかつたのである。

『あつたら聽かう。』

『聽いて呉れますか？』

『む、申せ。』

『お天氣が變はるかも知れん。』

『要らぬことを云はずと！』

『父上は、お斷りになつた。』

『なにを？』

『去年、美濃の齋藤道三が、むすめの濃姫を、吉法師の嫁にしたい、と申込んできた時のことです。』

『あゝそのことか。あの腹黑い大惡黨めが、娘を餌さにして、尾張の國を釣らうとしをつた。うつかり其手に嵌まつたら最後、燒いて喰はれるか、煮て食されるかぢや。さうはさせぬと決然、斷つたのが怎うした？』

『取消すのです。』

『なんぢや、取消すとは？』

『斷つたのを取消して、縁談を戻すのです。』

『ほう、異なことを申すのう！』

『わたしは妻が欲しくなつた。去年も、多少欲しくないことはなかつたのですが、十三では若干早すぎると思ひました。それで、あの時は默つてゐましたけれど、御覽のとほり、この體格では、もう妻帶の適齡ですよ。で、嫁を貰ふとすればですね――』

『待て。嫁を貰ふのは結構だが、なにも好きこのんで、極惡無道の稻葉山の入道と、縁組みを、致すに及ばぬではないか？』

『それは親ぢ殿の考へで、吉法師の分別は反對でござる。つまり、大いに好きこのんで、齋藤道三のむすめ濃姫に、求婚いたす。』

どうやら冗談ではなささうなので、父は云ふまでもなく、重臣らは、啞然として顏を見合はせた。

だが吉法師は、頓着なしに、

『油賣の、天秤棒を擔いだ一介の行商から、大國美濃の主になつた道三は、ずゐぶん沒義道はしても傑い奴に違ひないのです。だけど、わたしは道三入道が、異數の成功者だから、豪傑だから、といふので縁組をしようと思ふわけではありません。わたしが氣に入つたのは、去年、道三の奴が、那古野の吉法師

に姫を呉れるのは、尾張一國を織田家の手から奪つて、稲葉山領に併合するためだ、と云つたさうですが、そこですよ。能くも吐いた！　掠れるものなら掠つて見ろ！　おれこそ濃姫を貰ひうけて、先方が望みの婿引出を逆に、こちらで美濃の國を奪つてやる。わたしは現に、その心算になつたのです。』

さう云ふのだつた。

父は、内心ひそかに舌を捲きつゝ、

『じつに亂暴な話だな！』

と、見つめる。

『戰國の世ですから。』

吉法師が、平然と答へた。

『しかし、戰ふなら婚姻など、せぬ方が遙か增ではないか？』

『いゝえ違ひます。婚姻しないことには、美濃との戰に身が入りません。』

『變はつてゐるのう、どこまでも！』

父は益〻、愕ろく一方だ。

『濃姫は美い女だと云ひますからね。これが不器量なら道三にしても、大きな顎は、叩きますまいし、わたしも眞平ですが、美い女だけに、賣られた喧嘩は買ひたい。』

『呆れた事を申す！』

『でも御安心なさるがいゝ。なんぼなんでも祝言匆々、合戰は起りません。しかも今川家では、尾張が美濃と婚姻で繋がれば、さう早急に大軍を動かして、攻めて來るやうなことは無いと思ひます。だから駿府牽制にも役に立ち、やがて將來、美濃併合の土臺にもなる婚姻なら、父上にも御異存はない筈ですが、いかゞですか？』

『まあ待つて呉れ！』

『反對御意見のあり樣がない。』

と、吉法師が、まつしぐらに押す。

父は、たじたじとなつて、

『少しは考へる餘裕がなければ――』

片手を、支へるやうに差し出すのであつた。織田彈正忠信秀は、當時割據の群雄のあひだに伍して、たしかに水準をぬく器だつた。神道主義とも稱すべき信念を堅く持し、神を敬ふことを以つて、政治の根柢と考へ、農耕を重んじて民力を涵養することが、とりも直さず軍國を勃興させる所以だと信じた。從つて尾張は、面積狹小にも拘はらず、富裕だつた。そして兵農が一

やせる

肥り過でお困りの方へ嬉しい御便り
ふとり過で、色黒くニキビ・ソバカス・吹出物でお困りの方へ減食やあらゆる手段でヤセぬ私がフトシタ機會に合理的療法を奨められ、溺るゝ者はワラをも摑む心理で半信半疑ながらも實行中之がよく効き便秘は治り氣持よく、日增に全體ヤセ姿勢伸び毒素排除で美肌となり白く垢拔し以來人樣に劣らぬ容姿態で明朗です。試した誰方も驚喜する方法を此際無代秘密に敎へます。スグ問合せ實行し均整した眞の男女特有の姿態美を發揮なさいませ。
東京市荒川區日暮里町四ノ一〇一八　向上寮

致した。もしも信秀といふ人物なかりせば、尾張の國力は、はるかに充實を缺いたにちがひなかつた。むろん尾張の地味は肥沃だ。木曾川下流の沖積層が、土地の大半を占めてゐるからである。しかし如何に豐饒な國土も、支配者に其人を得なければ衰へる。してみれば信秀を、一箇の英雄といつても決して間違ひではない。

だが、この父にして猶、吉法師の超凡さの飛躍には、跟いて行けないのだつた。

輕術訓練

わづか十四といふ若冠で、驚くべし、天下稀有の梟雄、齋藤道三に對して、吉法師は、四つに取組んだのである。

げに香木は双葉より夙に芳ばしとかや。吉法師信長のごとき卓拔無双な天才に、たまたま遭會つたのみならず、竹千代は、これに愛撫された。またなき寧馨兒として慈しまれた。

これは竹千代にとつて、なんたる好運だつたらう。數奇な運命にむかつて、竹千代こそは感謝しなければならない。假に境遇が、もつと順調であつたとせば、尾張に寓して、吉法師と相見る機會は持たなかつたであらう。母の於大の方と生別する悲痛を甞めることの代りに、岡崎の城内で平穩無事に育つたでもあらう。又もし戸田五郎の横取りに逢はなかつたなら、渥美半島の田原から一路平安に、駿府へおくりとゞけられ、すぐに今川家での人質生活が始まつたであらうに、狂瀾の波濤は、竹千代に絶好な試練をあたへた。

異常天才の狐馬的愛撫の撫は、撫でるのではなくて、ひッ叩くことであつた。

『やい小びッ、これでもかつ!』

ぴしやりッ——と、頬ッぺたを、赤くなるほど平手で叩きつける。

氣に入らぬと、容赦なく痛めつけ、ごく端的に力と意氣で、鍛へ上げようとした。

吉法師の慈しみは、どこまでも嚴しい武斷教育を授ける事だつた。

『おれには男兄弟だけでも、十人ほどある。親父はまだ四十で、脂肪ぎつてござるから、このさき幾人ふえるか、知れたものではないけれど、まづ見切りをつけてもいゝと思ふ。どの道、碌でもないのが生まれるに、きまつてゐる。よくも斯う低能ばかり揃つたものよ。だがおれは、兄弟の不作九度つゞきの埋め合はせが、竹千代そなたが來てくれたんで、一ぺんに出來てしまつた。そなたなら俺の弟だと云つても、一向不釣合でないと思ふ。そなたは慥かに物になるぞ。しつかりやれ!』

さう云つて勵ますのであつた。

まつたく吉法師は、九人の兄弟に對する愛情の總〆高以上のものを、竹千代にむかつて傾注した。

けれども竹千代にとつては、それが有難迷惑であつた。そして扈従たちは、はらはらと、氣の揉めることのみ續いた。

あまりにも激しすぎる訓練だつた。どんなに負けじ魂でも、六歳といふ歳は歳だから無理だ。

でも吉法師獨特の考へ方には、いはゞ無理といふ觀念は、なかつたと云へる。

熱田の加藤屋敷から、竹千代主從の宿が、那古野城下の、萬松寺。天王坊に移されて以後は、吉法師は一日のうちに、何度も城から見えた。

『躾けに都合が宜いな。』

場所が接近してゐるだけ吉法師には好都合だつたに相違ないが、竹千代の方は遣りきれなかつた。熱田にゐた間は、兩三日おきに辛い想ひを忍べば、それで濟んだのに、すぐ膝元の萬松寺内に住むやうになつてからは、のべつに泣かなければならない。

しかし竹千代は、泣くと云つても、それは心で泣くだけのことで、たとひ泪はほろほろ溢れても、斷じて普通の泣き方はしないのだつた。

『む、感心だッ、怺へろ怺へろ！』

と、吉法師が、いつも鼓舞する。

竹千代は、氣が遠くなるくらゐ痛い目にあつても、へこたれなかつたのである。

だが附添ふ家來たちが、青くなつて、へこたれたことが、いく度あつたか。

『お荒ッぽいにも程がある！』

面色暗澹として、石川與七郎が呟く。

『滅茶をおさせになる。どう考へても、あの若殿、こんこん馬の異名に背かず、お頭の働きが、御健全ではないといふ極はめが附く、のう！』

と、平岩助右衞門も、毎日のやうに繰返した。

『あれでは必らず、お怪我をなさいます。私はとても見てはをられません！』

小姓の鶴之助は、おろおろ聲で戸田五郎に訴へて、荒仕込みの緩和を願ふやうに、すがるのであつた。

で、戸田五郎は、たびたび吉法師へ、

『道理な心配だと存じますので——ちと、お手柔らかに、願はれますまいか？　ひよいと、頸の骨でも折りましては、主人おもひの彼等に氣の毒でもござるし、竹千代どの自身も、片輪にまでなつては怎うかと思はれますし、さし出がましうはござりますが。』

と、哀訴におよぶのだつたが、毫も効き目がなかつた。

『大丈夫。おれが太鼓判を捺す。』

吉法師は、保證するといふのであるが、狐馬の太鼓判では、いくつ捺された所で、心許なさに、なんで變はりがあらう。

いはんや、そのあとが悪い。

『どう間違つても、手足の一二本も挫くか、蝶番ひを外すか、腰骨に罅のいるぐらゐが關の山だ。それも成人とちがつて、育ち盛りのあの小びのことだから、それしきの怪我なら、たちまち治つてしまふ。輕術といふ技は、骨が固まつてからでは、上達の見込みが薄いからな。』

やれやれ、これでは藪蛇の形だ。戸田五郎は、さう思ふほかなかつた。

ほんたうに根氣よく、吉法師は、竹千代に輕

術の訓練を與へた。

『どんな武術でも、これが土臺になるのだ。』

輕術といふのは、木登り、飛び降り、逆立ち、逆立ち歩行、懸垂、反り身、幅跳び、高跳び、宙返り、等々を總括した名稱だつた。竹千代はまづこれを習つたのである。

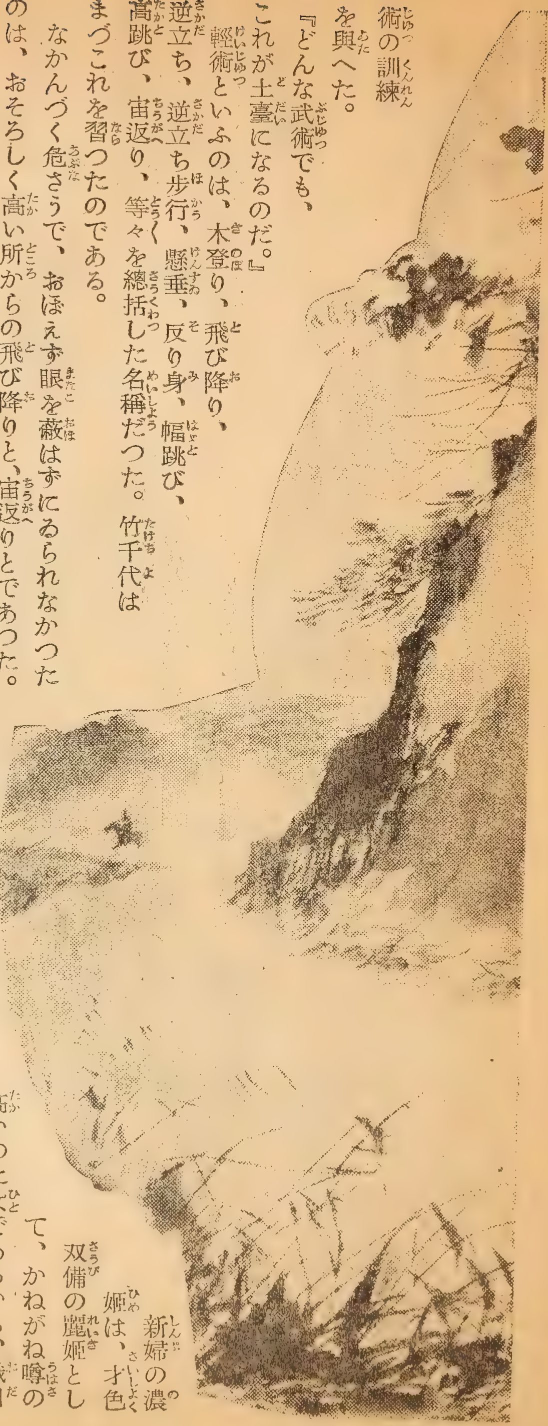
なかんづく危さうで、おぼえず眼を蔽はずにゐられなかつたのは、おそろしく高い所からの飛び降りと、宙返りとであつた。

吉法師娶る

その年が暮れて、竹千代七歳の新春が來た。天文十七年である。

正月早々。春氣初めて動く節分明け。尾張那古野の城は、花嫁御寮をむかへた。

美濃の大守、稲葉山（のちの岐阜）城のあるじ齋藤道三入道の息女が、輿入れをして、織田彈正忠信秀の嫡嗣、吉法師信長と華燭の典をあげたのだ。



新婦の濃姫は、才色双備の麗姫として、かねが噂の高かつた女であるから、織田の家中の人々は、吉法師の傅役・平手中務をはじめ、誰もが、

（これからはなんぼ若殿も、お行儀をお愼みなさるだらう。今迄のやうに頓狂な擧動をあそばしたら、お嫁樣は吃驚なされて、逃げてお歸りになるであらうから）

と、思つた。

『自らお望みで、濃姫は美い女だから、と仰有つたさうぢや。だから流石の狐馬樣と雖も、新奥樣に御愛相をつかされるやうな眞似は、なさるまいぞよ。』

『いかにもな。あれで狂氣じみた御行狀さへ止めば、ほんたう

にお偉い若様なんだが。』

若殿の新婚第一夜は、古渡でも、那古野でも、城の内外、城下町の巷の隅々にかけて、人の對話は、この噂で持ちきりの態であつた。

翌朝。

竹千代の寓居、萬松寺の天王坊でも、

『のう石川。』

と、戸田五郎が、與七郎數正に呼びかけて、微笑した。

『なんで御座るか？』

『なんだではないよ、樂が出來る、今日からはな。』

『あゝ、その件でござるか。全く壽命の縮まる想ひでしたが、吉法師様も昨夜お芽出度く御婚姻をあそばして、天下の强豪、美濃の齋藤を舅御にお持ちの、天晴れ若殿におなりでは、まさか悪童三昧でもござるまいによつて、たしかに今日以後は我々の竹千代様も、ほつとお息繼ぎが出來ようといふものです。根ッからのお悪氣ではなくとも、あれでは實に亂暴きはまる。わたしらは、どんなに齒嚙みをして、口惜しさを怺へてきたことか、荒仕込みにも猛訓練にも、埒といふものがござるからなあ！』

これが遠慮勝ちな人質生活でなかつたらと、石川與七郎は、憮然として愚痴を洩らすのであつたが、いましがた上座で、朝御飯をたべたばかりの竹千代が、

『ちがふよ、おれの考へは。』

と、云つた。

『ほう？　和子様のお考へは？』

與七郎が質すと、

『吉法師様はお城から、今日もきつと、お見えになるよ。』

竹千代は、さう答へた。

『今日も？　――こちらへですか？』

と、與七郎が、訊き返す。

『む。だから、やつぱり樂はできないよ。でも、竹千代は、ずゐぶん辛くつて、ときどきは泣きべそもかくけれど、ほんたうは、とても愉しいの。』

同時に、心のなかでも、はつきりと、

（あれが眞底からの深切といふのだらう。吉法師様ほどに有難い人は、ないのかも知れない）

と、思ひさへした。

そのとき、南にあいた庭の木戸を、はげしく叩く音が聞えた。

『拔けろ、おーい拔けろ！』

特色のある聲音は、まさしく吉法師信長に紛れもない。

『それ見な！』

竹千代がほゝゑむのであつた。

白・ねず・赤茶

平岩助右衛門は、鹽見坂での負傷の名殘の跛を、ひき摺りながら庭へ出て行つて、ぎいーつと木戸をあけると、吉法師よりも馬の首が、まづぬーうと這入つて、鼻面を、助右衛門の頬のあたりへ押しつけた。

助右衛門の顔が、しかむ。

吉法師は、愛馬の鞸のほかに、乘替へ馬を二頭つれてきたのである。どちらも逞しい雛と騣だ。そしていづれも手綱だけで、鞍を置かない裸馬だ。

眞先に胴の白い鞸――それから淡色の毛並みの美しい雛と――全身赤茶色の騣とが、ぞろぞろ庭へ入つてきた。馬丁は一人も隨いてゐない。

戸田五郎を始め室内の者どもは、おもはず目を見張つた。

(やあ、これは又なんといふ事か? 御婚姻の第一夜が、明けたばかりの花婿殿が、お供もつれず、御單身で、しかも裸馬を三疋……おまけに御身裝はといへば、餘寒はすぎても膚ざむさの冬と變はらぬ朝冷えを、平氣の平左で、つんつるてんの浴衣一枚――夏すがたではないか!)

戰時生活の相談相手として大歡迎

婦人倶樂部十月特別號

記事も小說も口繪も日本一の大充實、その上左の附錄つき

國策二大附錄

(別册)**實用毛糸編物全集**(慰問編物と繕ひ方も發表)

(別册)**燃料と食品の經濟寶典**(主婦方大喜び)

發賣は十六日(スグ賣切れになりますから、今から近くの書店へ豫約を申込み下さい。呉々もお早く願ひます。)

吉法師が、

『どう、どう!』

と、馬を制した。

三頭の、白、ゝ、ねず。赤茶の馬が立停まると、

『おーい竹千代。今日は、いゝ所へ伴れて行つて遣るぞ!』

日ごろに增さる明朗な調子で。

緣先に突立つたまゝ戸田五郎へ、

『おれは女覓いたよ』

と、云つた。

だが、さう云つた吉法師の言葉の意味が、戸田五郎に解らなかつた。

『――?』

『なんだ、お許までが、鐵砲彈におどろいた鳩みたいな面をして、はツはツは!』

『しかし……めまいたとは、一體なんの事でございますか?』

『知らんのか。無學の奴だな。』

吉法師は、ふたゝび笑つて、

『きのふ、三つ女增しを女覓いたのだよ、おれが。』

さう云はれて漸く戸田五郎は、合點が行つた。

三つ年上の女を、娶つたといふ古語なのである。

『あゝ成程々々――これはすつかり申しおくれて

しまひました。昨日の御婚儀、寔にお芽出度う存じあげまする。』
その尾について、室内の一同が、
『祝着至極！』
と、お辭儀を、うやうやしくする。
だが竹千代だけは、一緒に頭を下げずに、つかつかと進み寄り、縁側の突端に兩手をついて、
『わたくしも、嬉しいのです！』
さう云ひつゝ、ぢつと見上げた。
『む、さうか。』
吉法師は、頷くが早いか、
『さあ來い！』
と、いきなり竹千代の躰を、小脇に、横抱きに、輕々と提げたと見るまに、ひらりとわが身を躍らせて、愛馬驒の背に跨がつた。
そして、戸田五郎を顧みて、
『おことには、その騅を貸してやる。』
すぐ騎れといふ言葉は略して、石川與七郎へも、
『そなたは駿だ。』
と、聲をかけた。
いづこへ伴れて行く積りであらう？
もはや吉法師と竹千代をのせた驒は、木戸外へ、出てしまつたので、
『行くか？』
『參りませう！』
戸田五郎と、石川與七郎は、氣をそろへて騅と、駿にとび騎つた。
乘り慣らはぬ裸馬ではあるが、戸田にせよ、石川にせよ、士技には人後におちず鍛へた筈の青年武士だ。三河ざむらひの名譽にかけても騎りこなさなければならない。
いづれ劣らぬ駻馬と駻馬。
嘶き合ふと齊しく、天王坊の庭木戸が後へ流れた。
『續けいッ！』
と、街道を先驅する馬上の吉法師が、叫んだ。
乾燥した道路に、濛々と土煙が立つ。
その土煙を追つて、五郎を乘せた騅が驅ける。
騅の蹴上げる埃を浴びつゝ、遲れじと與七郎が、月毛を疾驅させる。
そも初めから物に憑かれ氣味の兩人ではあつたが、すでに斯うなつては、これこそ謂はゆる騎虎の勢ひ、どこへ行かうと、
（えゝ儘よ！）
たゞ街道を驀進する土煙を、追ッ驅けるほかないのである。
盲ら滅法だ。
どこを目ざして、すつ飛ぶのか白ま弓、弓弦放れた矢のやうに——。

毒舌

『ふたりとも後れた、やうですね。』
と、竹千代が、吉法師の懐で云ふ。
『なあに後れたつて、まがひつこのない一本道だよ。』
『どこへ、いらつしやるの？』

さつきから、何度も訊いてみようと思ひながら、默つてゐたのであつたが、一本道だと云はれたのを機つかけに、竹千代は尋ねた。
『小びは、云はぬが花つて事を、知つてるか？』
『云はぬが花？　それは知つてゐますけれど――』
『行く先へ行きついて見れば、解るのだ。』
『變だなあ！』
『なぜさ？』
『だつて、東の方へ、もうずゐぶん來たやうですもの。』
『ふーむ、方角が解るから感心だ。』
非常な速さで走る馬上の會話だから、聲が、風で掠れる。
『でも、いつも參る木曾川の方角とは、ちやうど、あべこべですから、東の方へ行くのだと思ひますの。』
『えらいよお前は。――だが東へ行くのが、なぜ變なのだ？』
――東へ行けば、三河でせう！』
『む、もう三河へ來てゐるよ。こゝから眞直ぐに、お前の親父の城下、岡崎へは四里しかないが、そこまでは行かん。』
吉法師は、さう云つてから間もなく、ぐいッと手綱を繰つて、疾驅する馬を停めた。
『騅と騢を、待つてやるのだ。』
『よッぽど後れたらしい。』
竹千代は、馬の向きが變はつたので、五郎と與七郎がやがて追驅してくるであらう道筋へ、目が屆いた。

各方面で絶讃大好評

冒險探檢叢書

夏なほ寒き……スリルと興味！

架空の夢物語でもない、小說でもない、悉く我等が先人の血の滲むやうな努力と犧牲とによつて齎らされた偉大なる報告書だ。本書の價値も興味も又玆にある。

未開境蠻地探檢記　澤田謙著
征空冒險記　中正夫著
猛獸狩冒險記　小山莊一郎著
山岳征服冒險記　久野豐彦著
南北極地探檢記　加宮貴一著
海洋冒險探檢記　池田宣政著

各冊分賣
價一圓五十錢
送料内地十四錢

東京・小石川・振替東京三九三〇
大日本雄辯會講談社發行

かなり後れたと云つても、駿馬の速力で、その距離を割れば、待つ間は怎れほどの時間でもなかつた。

やがて戸田五郎の騅が馳せつけた。

『尾・三の國境を越えて、どちらへ？』

と、五郎が訊ね問うた。

怪訝な面持なのであるが、吉法師は、それに答へて、

『國ざかひを越えても、こゝは刈谷だ。』

なんの事もなげに云ふ。

『おゝ刈谷の城下でござりますか。』

五郎は、落葉疎林の隙から透けて見える一構への平ら城と、それを繞る城下町の家並みの屋根をながめた。

東三河に生まれた戸田五郎にとつては、西三河も極く端の刈谷は、いまが初めての土地であつた。で、間もなく追ツついて來た與七郎へ、

『おうい、刈谷だぞうこゝは――』

と、喚はつた。

しかし與七郎は、岡崎者だけに、同じ西三河の地理は知つてゐたので、

『こゝが刈谷なら、なにが怎うなのでござるかッ？』

と、はなはだ佛頂面だ。

その脹れ顏を、見のがさぬ吉法師が、

『やアい、不平くな馬鹿野郎つ！　不平くと後に、引ッ込みが附かなくなるぞ。』

持ち前の辛辣さで、叱つた。

だが與七郎にしてみれば、內心はともかく表面は戸田五郎に向つて、刈谷なら怎うしたと云つただけなのだから、馬鹿野郎と叱られては一層おもしろくない。

『吉法師樣つそれがしはもうこの邊で、引込みたうござりますが――』

『ちえゝ吠ざくない、笊頭野郎のオッちよこチョイめ！　おれはな、嫁を貰つた心祝ひに、竹千代にも嬉しい想ひを、させて遣らうと思つたから伴れて來たのだ。なにを醉狂にお前らと、刈谷くんだりまで競べ馬をするものかよ！　ぷッ、これほど云つても解らんのか、まだ！　そんなオタンチのカサゴ野郎なら、去せッちまへ。なあ小び。小びにも用は無いだらう？　岡崎へ、追ッかへしてしまへ！』

吉法師の毒舌に、與七郎は脣を嚙んだ。

（えゝあんまりだ！）

口應へも、抗らひも、出來ないのが無念だつた。顏が、眞青になつた。

だがしかし、吉法師は、存分に罵つてしまふと、すぐけろりと、誰が罵倒したかといふ狀で、

『去せるのが厭なら、跟いて來い。』

と、云ひすてゝ、乘馬の首を、ぐるり城下町の方へ、ふたゝび向けた。

けれども今度は、速驅けではなかつた。

五郎の騅と、與七郎の騢が、ならんで續いた。

邂逅

刈谷の城は、おもひ設けぬ吉法師信長の訪づれに驚かされた。

『美濃の大守、齋藤家の御息女が、たしか昨日お輿入れになつた筈だ。それをなんと若殿が、御祝言の翌くる日に、眞夏姿で、裸馬で――ほほう！』

城主の水野下野守信元は、亡父忠政のあとを相續して以後、ますます尾張とは親善な誼みを固めてゐたのである。領地が、織田領と岡崎の松平領の中間に挾まつてゐる關係上、もし今川・松平の聯合軍が、尾張へ攻め寄せる場合は、防禦の第一線に立たなくてはならない。最も困難な位置にある。だが勿論、それは覺悟の前だ。

『なに、竹千代をお伴れになつたと？』

信元は、さらに驚きを重ねた。

骨肉の甥である竹千代が、那古野の萬松寺に人質ぐらしをすることになつたと聞いた時のことだが――會つてみたい。發育ざかりゆゑ、見ちがへるやうになつたであらう。あゝ自分さへ、かう懷かしいのだ。ましてや生みの母である於大は、天地にかへて愛しい我子を、どんなに見たからう。逢ひたからう。――さう思ひはしたもの〻、於大は離別された母である。和子とはいひながら竹千代は、松平廣忠の嫡男なのであるから、今日は敵味方だ。尾張に質となつてゐる敵將の子を、輕々しくわが子ぢや、わが甥ぢやと云ふべきではない。水野信元は、自分で萬松寺を訪ねることも遠慮してゐたのだつた。

『あゝそれはそれは、なんたる御深切であらう！』妹於大が、どんなに喜ぶだらう！　これこれ早う、報せてくれ。む、すぐさま書院へ、參るやうに申せ。なに、構はん構はん！　えゝ御免蒙れ、そこは名うての吉法師殿ぢや。浴衣一枚、裸馬でお越しの若殿ではないか。身粧ひなどは無用と申せ、申せ！』

信元は、於大の心のうちを推察すると、自分の胸が、わくわくした。妹へは實に同情の深い兄者だつた。

『いよう水野殿、しばらく！』

と、吉法師が、大あぐらのまゝで、信元を見るなり云つた。前に二度ほど、ほんのちよいと會つたきりの間柄でしかないのだが、まるで百年の知己みたいである。

『若殿には、一段と御濶達にて――』

信元は、慇懃に會釋をした。

『叔父さま！　御機嫌よう。』

と、竹千代がお辭儀をした時、襖口に現はれたのは於大だつた。

おゝその刹那よ！

おぼえず叫び聲が、於大の喉をついて迸つた。それは母の本能の、抑へても堰き敢へぬ發露であつた。

『わ、和子つ！』

さりながら、叫び聲といつても、どれほど大きな聲音でもなかつた、にも拘はらず、和子つ――と呼んだその母の聲こそは、なんに譬へ樣もなく竹千代の魂を、烈しく、つよく搖り動かした。

むべなるかな此の母と子は、世の常の母子以上――はるか以上の緊密な繋がりによつて結ばれてゐた。さう云つても斷じて間違ひではな

いのだ。母と子の、血につながる本能的な愛情の上に、なほ幾多の加はつたものがある。峯の薬師の申し子――それが竹千代だ。この子ある所以は、すなはち此母があつたからである。

『おゝお母ア様つ!』

走り寄るために、つと立つ子の背後へ吉法師の、がつちりした掌が觸つた。そして撫すかの如く、輕く叩いて、

『それ嬉しからうが、たんと喜べ喜べ!』

さう云つたかと思ふと、ぐいッと竹千代の小さい躰を、於大へ向けて押したのであつた。

機みを食つて竹千代は、よろよろと母のそばまで蹣けて行つたが、

『おゝ!』

卒中
中風の多くは◀腎臓◀から!

…それは腎臓と血行系統とが不離の關係にあるため高血壓から脳溢血や狭心症を起すので、腎臓病は進行すると尿の出惡く浮腫がでるが、さうなる前少しでも思當る人は唯一の南洋産專門藥「二十五絃」を服用しその利尿藥效で腎臓機能をなほし血壓を下げるのが何よりの根本安全策である。

「二十五絃」の藥價は十日分一圓八十錢、一月分五圓、藥店に品切の節は發賣元、東京麴町區二番町六ノ五、南洋生藥研究所(振替東京八〇八三七)又は講談社代理部(振替東京六六二九)へ送料内地十五錢、植民地四十二錢を添へ直接御註文を。

送呈 ハガキで前記發賣元へ申込次第美本「諸名士體驗集と自宅療法書」を無代進呈。

『おゝ!』

と、ばかりに、抱き寄せる母と、取り縋る子の、手と、躰とが、犇と絡みつき、まるで一つに溶け合ふかのやうに――。

だが此時、吉法師信長は、いきなり座を立つた。

『水野殿。いつでも構ふことはない、遊びにおいでなさい。野狩、川狩――獲物は、ふんだんにござるよ。待つてゐるから――そんなら御免。』

去りかけるので、あわてた信元が、

『やあ、どうなされまする? お待ち下され、吉法師殿――若殿つ。』

と、呼び留めながら、これも立ち上る。

あと振りむいて、吉法師が、

『七日ほど經つたら迎へに來る。竹千代を、それまで預かつてほしい。』と、云つた。本當に自分だけは直ぐ歸る氣らしい。

『まあまあ、左様にお急ぎにならずとも、およろしいではござらぬか。なんの風情とてもござりませぬが……』

『だから迷惑ぢや。おれの方には、大いに風情があるのだから、はッはッは!』

『でもござりませうが、お茶一つ差上げませず……あゝ若殿、それでは餘りに本意なう存ぜられます……』

信元は、吉法師のうしろに跟いて、書院を出て行つた。

『いや御好意を無にするやうだが――』

吉法師は、中門廊に乗りすてゝ置いた驒の、繋ぎを解いて、

『嫁が、待つてゐる。』

(つゞく)

日本科學界の誇り
無線界の父横山英太郎氏

海野十三

東京牛込見附の遞信博物館へいくと、誰の目にも留まる珍らしい形の壁掛け電話機がある。横に、くはしい説明がついてゐて『TYK無線電話機』と銘がうつてある。

TYK無線電話機！

『あゝ、TYKのことなら、昔、聞いたことがあるよ。』

と、今日のよき年配の方は、たいてい、それを知つてゐられる。

明治四十五年――今からざつと三十年前にあたるが、このTYK無線電話機が、わが國に誕生したのである。TYKは、その發明者の名前であつて、Tは故鳥潟右一博士、Yはこの傳記の主である横山英太郎氏、そしてKは、これも故人の北村政治郎氏の頭文字であるのだ。

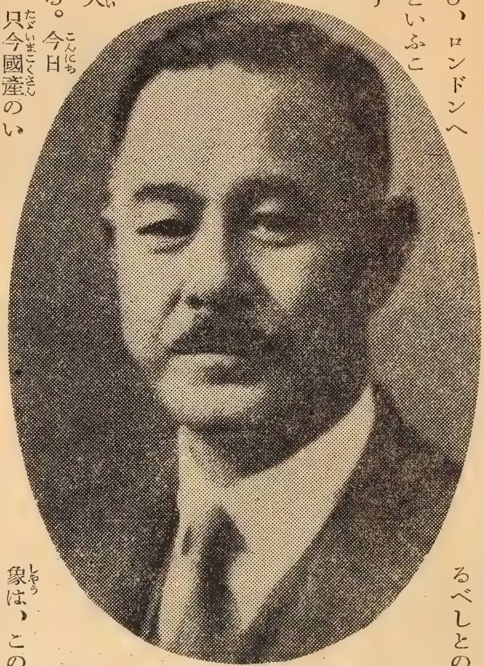
無線電話すなはちラヂオ――といつてしまへば、今日の人には、さまで不思議な感がしないであらう。ラヂオ放送を知らぬ者は、誰一人としてゐないであらう。どんな地方へいつても、三歳の小兒であつても、ラヂオを知らない者はない。内地の聽取者四百萬人を超え、それほど普及したラヂオであるが、そのラヂオが、今から三十年前、世界をあつといはせたTYK無線電話機の發明から始まつて今日まで一聯の絲を引いてゐるのだといへば誰しも、TYKの昔をふりかへらずにはゐられないであらう。

この無線電話機は、横山さんが、年齒わづかに三十歳のときの發明である。そして、それは、單に無線電話機が、我が國にも出來て歐米並みになつたといふのではなく、當時、世界各國に無線電話機なるものが全然珍しくこのTYK式のやうにはつきり纏つたものは殆んど無かつた頃の話である。

今こそ日本も、東亞共榮圏の主として世界の樞軸をなしてゐるが、明治四十五年頃の我が國は、はつきりいへば三等國か四等國であつた。殊に、科學方面においては、海外から機械にしろ學問にしろ直輸入して、すべてこれを模倣してゐる狀態であるから、洵に情けない時代のことであつた。そのころ、日本の科學が、歐米と肩を並べるなどとは、思ひも懸けないことだつたが、只一つ、無線電話機に關しては、その頃夙くも、日本は歐米と殆

んど同一水準にまで達してゐたのだ。TYK式無線電話機を、日本遞信省の三技師が完成した！

さういふ飛報は、諸外國の研究者を愕かすに充分だつた。中でも愕いたのは、英國マルコーニ會社だつた。ぜひ、ロンドンへ持つて來て見せてくれといふことになつた。そしてたうとう機械は、若き部員土岐重助氏によつて、ロンドンへ搬ばれたのであつた。國産科學機械が、世界學界の大殿堂ともいふべきロンドンへ行つたのだ。明治大正の境目の時代にである。今日をふりかへつてみよう。只今國産のいかなる機械が、さやうに物珍らしくロンドン或ひはベルリンで迎へられてゐるか。しかも交通至便となつたこの今日に！　皆無だ！　三十年前には、TYK式無線電話機が、堂々とロンドンまで渡つていつたのである。英國マルコーニ會社では、これを買ふつもりに見えたが、私の觀察では、例の老獪英國の天性を發揮され、機械の中のいゝところだけ吸收されて、商談は破れたのだと信じて疑はない。國力の相違で、なんとも仕方のないことだつたが、日本の科學力こそ恐るべしとの印象は、このとき十分に英國人の頭に植ゑつけたに違ひない。日露戰役に大勝した直後に、英國には、早くも恐日病患者が現はれたといふが、その戰役後十年ほど經て、向ふへ渡來していつたこのTYK式無線電話機などは、更に恐日病の英國人を多からしめたことであらう。



横山英太郎氏

その後、TYK式無線電話機が、それ以上の進歩をしなかつたことは、當時のわが工學界その他の歐米崇拜的精神が、阻んだのであらうと思はれる。さういふ有害なる精神は、今日盛んに芟除せられつゝありとは云へ、未だに根強く根を張つてゐる。わが國の先覺科學者の尊き發明は、かういふものの害をうけて、發明はされながら、多くはいつの間にか遺棄されてしまつたのである。今から云つても、もう遲いが、瞼を閉ぢれば、さういふ先覺科學者の業蹟が、苔蒸したまゝ、累々と横たはつてゐるのが、はつきり見える。

Tの字鳥潟博士は、それから十一年ほどして若き生涯を閉ぢ、Kの字北村政治郎氏は、日本放送協會の技師長として放送事業に貢獻したが、これまた今から六年ばかり前に、みまかられ、Yの字横山英太郎氏のみ、今も斯界に飛躍してゐられ、現に、國際通信株式會社の技術研究所長の重責に居られるのは、洵に心強い極みである。

横山氏の功績は、TYK式無線電話機のみに停るものではない。右の國際無線に入社せ

られる前の二十五年間を、遞信省電氣試驗所において、無線工學のために盡されたが、氏の指導よろしきを得て、かの大放送事業が開け、海外向けの無線電信や無線電話網の擴充が成り、また軍用無線通信機の發達が助けられて、間接ながら、今日の大陸に於ける大捷の素因をなしてゐる。この邊のことは、一々記すには、あまりに問題が廣く且つ大きい。

しかし私が、横山氏について、更に大きい尊敬の念を禁じ得ないのは、氏の徹底した國家觀念にある。氏は、二十五年の官界生活の間、常に長として、若き技術者を率ゐてゐたが、その技術者の出入は、きはめて頻繁であつた。部内で、四五年勉強して、鳥渡仕事が板について來たなと思ふと、この若き技術者は多くは、間もなく遞信省を出ていつて、民間の無線事業に身を投じた。もちろんそれは、いづれも横山氏の世話によるものであつた。

『さう出入りがはげしくては、役所の仕事がうまくいかんでせう。』

と、苦言を呈する者も尠くなかつたけれど、氏は、

『いゝや、この方がいゝのですよ。』

と、笑つて應へた。

鳥潟右一博士

なぜ、そのやうなことをしたか。これについて横山氏は、かう書いてゐる。

『私は、部員の人を、一つ仕事に專心何年間も就かせるといふことを避けました。これは無線といふ仕事が、廣く一般事業界から見ますと、全體として小さい仕事だと考へますが、その小さい仕事の中に、また專門を作るといふと、いよ〳〵狹いものとなつてしまふと恐れたのです。この人は眞空管の專門、またこつちの人は水晶だけの專門といふ調子には、現在の日本の狀態では受け入れる事が出來ない。吾々として、一般的に送信も受信も共に識り、何事でも判るといふ風にやつてゆかねばならぬと思ひます。無論、身につく知識は廣いけれども薄くなりませう。これは鳥渡疑問があるやうに感じるでせうが、日本の現在の狀態では、この方がいゝのではないかと思ひます。

北村政治郎氏

無線の全般に亙つて相當の知識をもつてゐて、仕事に差閊へのないといふ人が求められてゐるのですから、無線技術の全般に通じてゐなければ損であると考へ、一つことを永くやることを避け、次から次へと仕事を換へてゆくやうに皆さんを指導したつもりでありました。これは勿論、私の在職中の我國無線界の現狀に基いて執つてきた方針でありまして、今後年月を經て、無線の仕事が大きくなつてくれば、其の時には無線の各小部門について專門的學識を持つた人物が必要となつてくることでありませう。さうなれば、此の方針も漸次改められなければならぬことは、云ふま

でもありますまい。

まあこんなわけで、私としては、國家の爲め、皆さんのお爲めと念じつゝ仕事をやつて來たつもりであります。斯うして第四部に居られた人達が、外部へ出て、巧くやつてゆけるやうになるといふことが、乃ち私の努力の酬いられたことになるのであつて、これは將來に於て、だん／＼解つて下さること〻思つてゐる次第です。言はゞ、私は皆さんのために「高等小使」として働いて來たつもりです。私は敢へてさう申したい。』

これは、昭和七年八月、氏が退官にあたり部下に餞けとした言葉の中の一節である。

この年代に於て、既に技術を國家の寶と見る徹底した考へでもつて、國家として最も爲めになるやうにと、技術者をどし／＼民間に送つた氏の見識には、まことに敬服の外ないのであつて、氏は教育者としても爲政者としても、非常に勝れた信念と手腕の持ち主であることが分る。

氏の部下でありし人にて、今日博士號を有する者が四名、いづれも年歯若き人揃ひである。また、民間に出でて活躍をしてゐる有能の士は、一々數へるに遑がない。その氏は、博士を何囘も固辭して受けず、依然として工學士の列に名前を置いてゐるのも、その人柄が窺はれて床しい限りである。

『科學大臣』といふものが、もしもわが國に置かれる時節が來たら、信念からいつて、見識手腕からいつて、氏こそ最も適任者の一人であらう。

（終）

人體に關する豆知識

脈搏は幾つあれば健康か

血液が心臟から、大動脈の中へ押し出されると、血管壁を押し擴げて、波動のやうに進んで行く。それで動脈に觸れ易いところに指をあてると、脈を打つのが感じられるのである。

これを脈搏といふが、年齡別に見た、一分間に於ける平均脈搏數は次の通りである。

胎兒―一五〇　生兒―一四〇
三歳―一〇〇　五歳―九四
十歳―九〇　十五歳―七八
二十五歳以上五十歳迄―七〇
六十歳―七四
八十歳―八〇以上

骨の數は幾つあるか

人間の體には總數二百二十三個の骨があるが、もし舌骨、胸骨等の骨を一々分離して數へあげれば、二百三十二個となり、更に齒の三十二枚を骨として加へるならば、二百六十四個となるのである。

これらの骨は、次のやうに四つの大きな效用がある。

一、人體を支持する（背柱、骨盤等）
一、體腔の大切な臟器の保護（頭蓋骨、肋骨等）
一、運動機關の主軸となり筋肉を附着さす（長骨、短骨等）
一、赤血球の製造所となる（骨髓）

皮膚の面積はどの位あるか

人間の皮膚の面積は普通の成年者の場合は、大體一・七平方米（約一疊半）だといふ。そしてその約二十分の一が普通露出してゐて、あとは常に衣服に蔽はれてゐる。

皮膚の厚さは、いくら面の皮の厚い人でも七・五厘から九厘位なのである。

時局早わかり問答

新體制になつて世の中はどう變るか

丸山幹治

◎まづ政治の方面から伺ひますが、政黨が無くなつた、これからの議會はどういふ風になるでせう。

× まづ議員の議席が變りますね。今までは各政黨別になつてゐたのが、今度はイロハ別かなんかになるでせう。

それから從來は議會が開かれると、まづ大臣の演説があつて、それに對する質問演説が數日行はれた。質問演説といふけれども、實際は政府を攻撃したり、大臣の施政演説に對して擧げ足をとつたりしてゐたものですが、今度は、この質問演説も恐らくなくなるでせう、從つて本會議は、非常に少くなります。

從來の本會議は、傍聽人に聞かせる政談演説のやうなもので、議事とは殆ど關係のない事でかなり時間を潰してをりました。併し今度は、政府の提出した法律案なり豫算案なりを最初に本會議に掛けます。けれども從來のやうに長くはやらずに分科會が中心になると思ひます。分科會の委員にはなるべく專門家が任ぜられて、政府にその法律の内容なり、豫算の内容なりに就て、質問する譯です。何れ大臣の演説はあるけれども、國民の代表として、よりよく國民が納得するやうに、上意下達の意味から、いろ／＼質問することになります。從つて從來のやうに華々しい雄辯を振ふといふやうなものはなくなるでせう。そして、代議士は自分の選擧區に歸つて、その議會の報告をするといふことになります。議會といふものは、今までのやうに政府に對立するものではなくて、政府と協力して、天皇の大權を翼賛するものであるといふ觀念ですね、それが新しい議會の精神なのです。

◎代議士は、やはり今までのやうにして選擧されるのでせうか。

× 從來の各政黨の公認候補といつたものは

當然なくなる譯ですが、やはり代議士は選擧に依つて選ばれるでせう。今のところは、さし當り從來の議員が、議會新黨といつたものを作るのだけれども、新體制の下では議員の内容も變へなければならない。從つて選擧法も當然變へなければなりません。實は政黨の解消といふ事も、一つには政府が選擧法の改正を行ふといふ爲もあるのです。從來の政黨は、自分の黨派に都合のいゝ選擧法しか作らない。選擧區にしても、大選擧區、中選擧區或は小選擧區と、いろ〳〵に變つて來てをりますが、要するに大政黨が自分の黨派に都合のいゝやうに作つた。

例へば甲郡は政友會が多い、その隣りの乙郡は民政黨が多い、といふ場合、これを一つに併せて選擧區を作ることになれば、政友會の方は當選率がいゝけれども、民政黨の方は惡いといふことになると、民政黨がこの選擧區の組替へをやる場合には、自分の黨派の當選率がよくなるやうに選擧區を組むことになります。その他選擧法の内容が總て黨派本位といふことになる、だから國民はいゝ代議士を選ぶといふのではなくて、氣に入つても入らなくても、要するに政黨の押しつけた候補者を選擧しなければならないといふ仕組になつてゐたのです。

併し今度は政黨が解消した以上、それが出來なくなります。何れ今度の政府が考へてゐる選擧法が實施されることになれば、今の代議士の中には當選出來ないやうな人も出て來るかも知れません。

◎すると、どんな選擧法が出來ますか。

× 選擧法に就てはいろ〳〵な考へ方があります。近衞公は必ずしも反對黨をなくすつもりはないといつてをりますが、一つの議會新黨になるのですから、事實上反對黨はなくなる譯です。そこでどうして候補者を決めるかが問題です。政黨は解消しても、今までの政黨の勢力をその儘議會新黨の中に持込んで、前の民政黨から何人、前の政友會から何人と候補者を立てるんでは、新體制でも何でもない。近衞公のいふやうに襖と障子を取拂つたといふだけで、部屋は依然としてその儘といふことになります。それではいかぬので、候補者の選定方針をどうするかといふことは、つまり新體制の大きな國民組織で決ることになるでせう。

◎新體制になると内閣はどうなりますか。

× 内閣の更迭といふことも從來とは變つて來ますね。今までは反對黨が内閣を潰して代つて内閣を組織するといふ風であつた、最近では殆ど政黨内閣はなかつたけれども、それでも、個人的に政治上の意見を異にする

者が新しく內閣を組織する、といふ風になつてをりました。ところが新體制になると國民の政治的意見は、さう分れてゐません。渾然と一つになつてをるのですから、反對意見もないわけです。從つて從來の內閣のやうに更迭理由といふものはなくなります。併しいつまでも同じ人間が總理大臣で、同じ人間が大臣であるといふ譯ではない。同じ意見、同じ政策、同じ目的にしても、政治のやり方の上手下手がある、又政府と國民がぴつたり一致する場合も一致しない場合もあります。從つて外部から反對せんが爲に反對するといふのでなくても、內部に於て政治を批評することは自らあるのです。批評することが出來る以上は、國民がこの內閣では駄目だ、といふ聲を擧るのは當然です。たとへそれが攻擊の形で現れないにしても、上意下達、下意上達といふことが新體制の目的なんだから、國民の間にこの內閣では不滿だといふ聲があれば、政府は輔弼の任を完うすることが出來ぬといふことになり、結局責任をとつて、辭職が行はれることになります。

◎どんな人が總理大臣になるのです?

× 近衞公は新體制が出來ても、新體制の總裁が必ず總理大臣になるといふのでは、幕府みたいな存在にならないかと疑問を持つ人もある、それでは日本の國體に反するから、必ず總理大臣になつたものが新體制の總裁になるといふやうにしようではないか、といふことを考へてゐるやうです。つまり新體制の總裁が總理大臣になるのでなく、陛下から親任された總理大臣が新體制の總裁になる。さうすれば日本の國體にも反せず、幕府的のものにもならないといふことになります。

しかし幕府的といつた組織は日本では出來る心配はないのです。ドイツのナチスに於ては一つの黨派が卽ち國家であつて、その黨派の總裁が政治の最高指導者で兵馬の權も握つてゐる。日本では統帥權といふものが、嚴として存在し、又、司法權が獨立し、何れも、陛下の大權に屬してゐるのですから、どんな新體制になつても、すべては陛下の最高御意志の下に運行される。その邊はナチスなどとは根本的にちがふ譯です。

◎新體制になると、大臣の數が少くなつたり、又、各省が統合されるといふやうなことはありませんか。

× 政黨も經濟機構も、いろ〳〵な團體も統合されてゐる今日、行政機構の改革は當然あるべきことですが、少數大臣制と各省の廢合といふことゝは別に考へる方がいゝですね。少數大臣制といふのは國務大臣と行政長官の分離といふことになるのです。今の各省大臣は皆國務大臣です。國務大臣は憲法上では平等なもので、總理大臣も他の大臣も全く同

じで上下がない、憲法には總理大臣といふ文字はありません。皆陛下が御親任になる譯です。さういふ國務大臣が十二、三人もをるのだから、時には纏まりのつかない場合もある。俺は內務大臣だとか、俺は農林大臣だとかいふ考へが拔けない。國家全體のことより、省のことを强く考へる閣議なども互に自分の省の報告をして贊成を求めるといふだけで、餘所の省のことに關しては反對もしなければ批評もしないといふ傾きがありました。これでは可けない、國務大臣といふからには、國家全體のことを考へなければならない。そこで內閣の機構を改造して、國家全體のことを考へる本當の意味の國務大臣を少數作る。外交のことも、國防のことも、産業のことも、教育のことも、要するに最高の國務を少數の國務大臣が考へて決める。さうして各省の長官は國務大臣でなく、行政長官にすれば國務大臣の決めたことを實行する役人といふことになり今までの繩張り爭ひや何かはなくなる。國務大臣と各省の長官とを區別することによつて、始めて政治の統一といふことがうまく行くのです。

◎すると、內務大臣とか外務大臣とかいふ名前はなくなるのでせうか。

× 多分行政長官の方は大臣とはいはずに、やはり長官といふ風にするのだと思ひます。憲法に國務大臣といふ文句がある以上、大臣といふ文句を使ふと、國務大臣と混同します。この行政機構の改革といふことも、今度の新體制の一つの重要なる問題として、準備委員會の協議に上ると思ひます。

◎次に民間のことですが、統制が、だんだん强化されて、會社、商店などでも、今までのやうな、やり方では立ちゆかなくなりましたが、個人の事業といつたものは、今後どんな心構でいつたらよいのでせうか。

× 一言で云へば、公利優先の精神で經營せねばならぬといふことです。そも〳〵新體制運動が急激に進んできたのは、世界の情勢が急激に變つてきた。ヨーロッパ戰爭でドイツが電擊的に勝利を得て、イギリスやフランスのやうなデモクラシーの體制では、到底今後の國際情勢に對處して行くことは出來ない。全體主義的な强力政治を行はなければ日本の使命を達することは出來ない。といふことが國民一般に痛感されたからのことである。

新體制の目的は國際情勢の急變に對處して日本がこれから東亞の新秩序を建設して、東亞共榮圏を作つて行くには、どうしても强力政治を行ひ、所謂國防國家を建設しなければならないといふことです。新體制の目標がそこにある以上、國家の經濟力といふものは非常に重要になつて來ます。何としても經濟力を伸ばさなければなりません。それも自由主義の時代のやうに單に個人の利益を圖つてをつたのではいくら金持が出來ても國防國家に出來ない。だからあらゆる經濟機關をどうしても國防國家の目的に適するやうにしなければならぬ。各自が國家の爲に則ち公益を先にするといふ風にしなければならぬ。私の利益を圖るのでなく、すべて社會の爲に國家の爲にやるのだ。といふ考へにならなければだめです。

◎さうすると、個人の事業や職業までも國家が管理するやうになるのでせうか。

× 全部國家は管理するといふのではない。唯國家全體として見た場合には、例へば小賣商人が多過ぎるといふやうな場合には統合を命ずる場合もあるでせう。

現に事業會社で統合されたものも出來てゐますが、私有財産も認めてゐますし、個人の創意といふことも認めてゐますし、又競爭がなければ物の發達、進歩といふものがなくなる。唯、我利々々的な競爭は統制する、國家本位、公益本位にやるやうに指導する、産業界の再編成といふことになりませう。

◎從來の考へ方の中には、たゞ儲ける爲に商賣をする、事業をする、そして大きく儲けた者が所謂成功者として尊敬される、といつたことがあつたと思ひますが、これからの商賣、これからの事業といふものは、各自儲けることが目的ではなく、豆腐屋なら豆腐を世間の人に供給するのが第一の目標、會社なら會社で社會の利益になる、國家の爲になるといふことが存在理由であつて、個人の利益を擧げるのは第二義的なことだといふことになるのでせうか。

× 考へ方としては、さうあつて欲しいものです。しかし、生活の爲に働くといふのも立派なことです。

現在では、ドイツだつてイタリーだつて國民の生活を國家が保證してゐる譯ではありません、各自の働きに依つて各自の生活を立ててゐるのです。又、豆腐屋の例でいへば豆腐屋は自分の生活を維持する爲にやつてゐるので、利益を得る爲にやつてゐるのではない、といふこともいへるのです。その他の事業でも同じことです。唯それが競爭が激しくなつて、無用の競爭をする、又範圍を越えて所謂我利々々主義になれば競爭といふことを認めてゐても、押へねばならぬ。公益が本位になるけれども、かといつて私益を全然無視してはゐない、その邊が共産主義と違ふところで私有財産は認めるのです。如何なる全體主義の國の政治でも、或は經濟機構に於てもそれは認めてゐるのです。だから極く大ざつぱにいつて見れば、國家の爲によく稼いで、國防の爲には食ふものも節約して、贅澤をしないで奉仕する、税金が高いとか、生活が不自由だなどと今はそんな不平をいつてゐる時代ではないのだ、國防國家の建設の爲には、それくらゐのことは甘受しようではないかといふ風に國民全體が考へて行かなければならない國防が十分でなかつたならば、如何に文化が發達してもフランスのやうになつてしまふ。

我々の最大の幸福は日本の國に生れたことだ、國家の爲に必要とあれば商賣がへも喜んでしよう、事業も會社も進んで提出しよう、況んや利益が少くなるくらゐは何でもないことだ。大いに稼いで大いに税金も納めようし公益を先に、利益はその次にといつた考へで、安心して各自の仕事に精を出すのが、新體制下の我々のつとめだと思ひます。（をはり）

爆彈を飲む日本兵

馬島俊積
西塔子郎 畫

約百名ばかりの敵敗殘兵の一隊が、折柄の夕闇を利用して、〇〇村に潛入しつゝあるといふ情報が、老支那人によつて齎された。

『よしツ！　警備隊は直に出動準備ッ！』

情報を聽終ると、警備隊長の鈴木少尉は、傍の原田軍曹をかへり見て、命令を下した。

忽ち警備隊内の其所此所に、活氣あるザワメキが起つた。銃劍の觸れ合ふ音や、背嚢の軋る音、軍靴で土を踏む音に混つて、きびきびした號令が矢繼早に夕闇をつらぬいた。久し振の討伐に皆勇んでゐる。準備は瞬く中に出來上つた。

『隊長殿ッ！　出動準備終りました。』

原田軍曹が何時ものハキ〳〵した口調で報告を終ると、

『よしッ！　〇〇村へ出發ッ！』

鈴木少尉は、軍刀の柄をぐつと握つて、再び命令を下した。

『前へッ――進めッ。』

鋭い號令と共に、部隊はザク〳〵と規則正しい軍靴の音をさせて動き出した。

『松下上等兵！　晩飯迄には歸るから、ウンと御馳走をこしらへて置いてくれ。勇敢な日本兵を餓死させては、申譯ないからな。』

隊の先頭を歩いてゐた鈴木少尉は、衛門の所まで見送りに出て來て、討伐に參加出來ぬので羨しさうに見てゐる炊事當番の松下上等兵に、ニコ〳〵笑ひながら、慰め顔に云つた。

『はッ！　承知しました。――一ッ吃驚する樣な御馳走をこしらへて置きます。』

松下上等兵は、不動の姿勢をとつて云つた。

『おい〳〵、吃驚する樣な御馳走つて、此間みたいに、味噌汁の中から豚の蹄が出て來るのなんて、謝るぜ。』

原田軍曹も横から、クス〳〵笑ひながら云つた。

『いやア、これはどうも……』

松下上等兵は苦笑して、頭を掻いた。

『それより、これを頼むよ。』

酒好きの軍曹は、左手で猪口を持つ恰好をして置いてから、慌てゝ少尉の後を追つた。

隊が村はづれを左へ折れて、見えなくなつてから、松下上等兵以下三人の兵隊は炊事場へ歸つた。

『皆が歸つて來るまでに、ウンと御馳走をこしらへて置くぞ。』

三人は一生懸命に飯を炊き、馬鈴薯の皮をむき、雞を絞め、豚肉を切つた。土間に火をおこして大きな鍋を掛けた。クツ〳〵と音をたてゝうまさうに煮たつてゐる。炊事も一段落ついたので三人で火をかこんで、後は隊の歸りを待つばかりだ。

『やア、すつかり煮えたぞ。うまさうな匂だ。早く歸つて來れア好いに……』

さう云つて、松下上等兵が鍋を土間におろした時、チラッと支那兵の姿が窓を横切つた。ハッとして二人の兵隊が立上つた。

『待てッ。』

松下上等兵が片手で二人を制した。銃は手の屆く所になかつた。

何かするどい支那語の叫聲がしたと思つたら、敗殘兵が銃劍をきらめかして七八人雪崩れ込んだ。隊の留守を狙つたのだ。

間髪を入れず、

『動くなッ。』

物凄い顔をした松下上等兵が、得意の支那語で裂帛の氣合を掛けた。

瞬間支那兵達は、はッとして立どまつた。その隙に、

『貴樣達はこの爆彈が目に見えぬのかッ！　一歩でも動いて見ろッ。これを火の中に放り込んで、貴樣達は木ッ葉微塵だぞッ。俺達はどうせ死ぬんだ。命が惜しければ動くなッ。』

松下上等兵は、すつくと立上つて、一升瓶大の爆彈を、火の上で振かぶつてゐる。

その物凄い氣合に呑まれて、入つて來た支那兵達は銃をかまへた儘、床に釘付けされた樣に立つてゐる。

『その爆彈を下さなければ撃つぞッ。』

支那兵の一人が、勇敢に叫んで銃をかまへようとした時、

『馬鹿ッ、撃つなら撃つて見ろ。俺が前に倒れると同時に、この爆彈は火の中に落ちて破裂するぞッ。』

必死の睨に壓倒されて、その支那兵は力なく銃を下した。

松下上等兵は意地惡く、爆彈を火の上でスーッ〳〵と何度も落しさうにして見せた。その度に支那兵達は、目をつむり、身をちゞめてヒヤ〳〵してゐる。

『武裝解除しろ。』

充分威嚇してから、松下上等兵が目くばせすると、二人の兵達は支那兵に近よつた。

流石に一寸抵抗しさうな素振を見せたが、すかさず松下上等兵が爆彈を火の中へ放り込みさうにすると、それからは支那兵もとうとうあきらめて、おとなしく武裝を解除された。

やがて軍靴の音が次第に近づいて、隊が歸つて來た。

『おや、どうしたんだ。』

鈴木少尉と原田軍曹が炊事場の異樣な光景を見て、異口同音に尋ねた。

『はッ、留守中に珍客です。』

松下上等兵は、はじめてニッコリ笑つて、爆彈を撫でつゝ一部始終を話した。

『フム〳〵。』

と、一々頷きながら聞いてゐた少尉は、
『さうか、それはよかつた。實は討伐に出たもの〱皆逃げた後だつたので、ガッカリして歸つて來た所だ。——今日の手柄は松下上等兵に獨占された譯だな。アハ、、、。』と、愉快さうに笑つたが、急に眞面目になつて、
『所で、その爆彈は何所で手に入れたんだね。』と、不思議さうに聞いた。
『アハ、、この爆彈ですか？』
思ふ壺である。松下上等兵は如何にもをかしさうに笑つた。
『これは酒ですよ。』『えッ、酒？』
少尉は吃驚した。
『え〱、酒です。内地からの慰問袋の中に入つてゐたんです。爆彈型の錻力罐です。實に上手くこしらへてあります。暗がりで見るから益々本物そつくりです。』
といひながら、指で器用に彈くと、ポコンポコンと音がした。
『ぢや、支那さん達は酒に腰を拔かしたッてわけなんだね。アハ、、、。』
『アハ、、、。』と、皆腹を抱へて笑つた。
『軍曹がお待かねの樣だから、早速お燗をしませう。』
原田軍曹がお酒と聞いて、目をかゞやかしてゐるのを見てとつた松下上等兵は、氣をきかして、早速爆彈を火の中へ入れた。
驚いたのは支那兵達である。
『ワッ。』といつて、目をつむつて、そこへへたばつてしまつた。が、何時までたつても破裂しさうにもないので、恐る〱目を開けて見ると、原田軍曹がニヤニヤ笑ひながら、爆彈の蓋をとつて早速一杯きこし召してゐる。
やつと爆彈の正體を見極めた支那兵達の顔は、蓋し見物だつた。
（をはり）

『視力保存の合理化』
代理部へお申込次第
無代で差上げます
視力を強める
内服 エモヂン療法
服んで風味よく、目に見えて視力が強くなるので實驗者が大喜び！ 多數實驗者より効果を確認され、いよ〱大好評！
人體が過勞になると體力が衰へて色々の障害が起ると同樣に、眼が過勞になると視覺機能に生理的障害を起し、ケノトキシンと云ふ疲勞物質が蓄積される爲めに、視神經は弱り、近視となり或は亂視を起し色々の視力障害の原因となつて來るのでありますが視力增進劑エモヂンの發見により、不要を服用すれば神經細胞の新陳代謝を促し、分泌解毒作用を助け、疲勞物質の排泄をよくし、血脈を通じ、筋肉を強くし、視神經の疲勞恢復を早め、視力を增進する等上記の障害に對して醫療的に強力な作用を持つことが證明されたのであります。藥價は低廉服用は容易、効果は既に數萬の愛用者が實驗ずみです。ゼヒお試し下さい。
▲近視眼 ▲老眼 ▲亂視 ▲遠視眼 ▲一般弱視
（藥價）十七日分 一圓八十錢、五十五日分 四圓（送料内地十錢其他四十二錢）
御注文は——東京・小石川・音羽 大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）へ

防諜
小說

花の露臺（はなのテラス）

北林透馬
富田千秋畫

敵、銃後に
潜伏す！
見えざる
スパイを
警戒せよ！

防諜思想に缺けた新庄ゆきは、無意識の中に憎むべきスパイの魔手に踊らされた！　彼女の歩んだ道は……そしてその結果は……？

今は輸入も販賣も禁止されてしまつた三千圓の高級カメラ、コンタクスと、一個二圓五十錢の、銀座の露店で賣つてるボックス・カメラとでは、おなじカメラでも隨分の違ひだが、同樣に、編輯室の青テーブルにをさまつて、社說がなんか書いてゐる論說記者や、ロンドンやベルリンに特派されて、ヒトラーに會つたり、チャーチルに會つたりして、華々しい『會見記』などを、署名入り、寫眞入りで第一面に掲載される花形記者と地方の警察などを廻つて、コソ泥や萬引のタネを漁つてゐる通信員とではおなじ『新聞記者』でもちよつとした違ひである。

給料にしたつて……いや、給料などは何うだつて好いとしても、仕事の華やかさや、重要さと言ふやうなものが、天秤にかけて計量されてるやうで、それを考へると、津田猛は、つくづく情ないやうな、腹の立つやうな氣がしてくるのだ。

津田は決して警察まはりの通信員では無く、れつきとした海事掛りの記者なのだが、所屬してゐる新聞社が地方の二流紙で名前を言つても知らないやうな存在だから、たまたま淺間丸や新田丸で外國から歸つてくる所謂名士にインタービウをとりに行つても、名刺を出すと、ふゝんと鼻の先であしらはれてしまふし、日本の新聞のことなど知らないやうなアメリカ人やドイツ人を相手では、かんじんの語學に自信が無いので何うにもならず、決して自分を二圓五十錢のボックス・カメラだなどとは夢さら思はなかつたが、併し事實は、手も足も出ない情ないやうな狀態であつた。

新聞記者になんぞ、なるんぢやアなかつた……と、後悔に似たものを感じることもないでは無かつたが、と言つて、他にやつてみたい仕事もなし、もともと好きで選んだ道なのだから、今更誰を恨むことも無い。

『びつくりするやうな、素晴らしいスクープ（特種）をやつて其奴を土産に、一流の社へ飛び込まうか……』

まづそれよりほかには、出世の機會はあるまい、と思はれる。

夜明け前の入港があり、五時前から波止場へ出かけて、つめたい風に吹きさらされて三時間あまりもねばつてみたが、たいして目ぼしいタネも無く、睡いし、腹は減るし、すつかりくさつた津田猛が、波止場にちかいボンド・ビルの二階のレストラン『オクラホマ』の扉を押したのは、三月の初めの、晴れあがつた朝で、食堂の壁の、陶器のお皿の形をした時計が、丁度片假名のノの字のやうに、八時十分を指してゐた。

『お早いですね。今日もディライですか？ 大變ですねえ。』

ぷうん……と挽きたての珈琲が、すがすがしい匂ひをたゞよはせ、テンダーでは顏見知りのボーイが、如才無く聲をかけたが、津田は、うん、と不愛想に頷いて、帽子を投げるやうに置くと、どかり、と窓際の椅子に腰をおろした。

オクラホマは、波止場近くの外國商館の勤め人相手のレストランなのだが、アパート住ひの獨身者たちの便宜をはかつ

て、朝は八時前から店を開き、簡單な朝食をサーヴィスしてゐたが、津田がこんなに朝早く顏を出すのは、いつもディライの入港の時ときまつてゐる。

『あゝあ、月給貰ふのも、樂ぢやねえや。』

それでも熱い珈琲に喉をうるほし、めだま（ハム・エッグス）にトーストで腹が出來ると、やつと人心地がついたやうになり、津田はそんな冗談を言つたが、

『でも津田さんなんか、仕事が仕事だから、張合ひがあつて好いですよ。僕等みたいなしがないボーイぢやねえ、まつたく仕樣がありませんや。』

笑ひながらボーイが、何か取りにパントリィの窓へ首を突込んだ時、津田の横のテーブルにゐた若い女が、すいと立上つた。

若い女、と氣がついたのも、實はその時なので、いつもならば四人や五人のサラリーマンらしい男が、食事をしてゐないことは無かつたのに、その朝は、何う言ふわけだか一人も客が無く、津田が入つて行つた時には、誰もゐなかつた。いや、居なかつた、と思つたのは津田の錯覺で、ほんたうはたつた一人、その若い女がテーブルについてゐたのだが、大きな鉢植ゑのハマオモトの向ふ側に、向ふむきに腰かけてゐた水いろの洋服と同じいろのキャップ・ターバンが、葉のみどりいろに溶け込んでゐたのだらう。

おや、と思はず津田は呼吸を呑んだのだがその女の横顏には、さうさせずには置かない何か異常な蒼さがあり、表情があつたのだ。

何かある！ と職業的な第六感にぴんと來たものがあり、つられるやうに津田も立上つたのだが、その物音に、女が振りむいた。

蒼い、と言つても、まつたく血の氣を失つた人間の顏の蒼さを、見たことのない者には想像もつかないだらうが、何か脊筋が、ぞうッとするやうな氣味の惡さで、瞳ばかりが眞黑に、おほきく、無表情に輝いて。——

死を想ひつめた女の顏、と言ふものを、津

田は初めて見たわけなのだが、その時は、無論それとは知らずたゞ射すくめられたやうに、津田は、ぢつと身を固くした。

女の口が、痙攣するやうに動き、何か言つたやうだつたが、津田には聞き取れなかつた。

次の瞬間には、音も無く、まるで何かの影のやうに、すうッと窓に近づいた女が、普通よりも幾分低い、その窓わくに足をかけるとはらりと身を躍らして、宙に飛んでゐた。

水いろのスカートが、蝶の翅のやうに擴がり、つめたい風が津田の頬を打つた……やうに感じた。

椅子を蹴つて窓に飛びついた津田が、乗り出すやうに窓外を見た時には、ポプラの影を長くひいたアスファルトの舗道に、朝の陽をいつぱい浴びて、水いろのスカートが、ふうはり、クッションに置かれた一枚のハンケチのやうに、美しく映えてゐた。

自分で自分の眼を疑つてみずにはゐられないやうな、一瞬の出來事であつた。

——自殺だ。

弾きとばされたやうに、津田は身をひるがへし、階段を馳け降ると、戸外にとび出してゐた。

『君、君、何うした！』

抱きあげた津田の胸に、女は氣を失つて、ずつしりと、美しい肉體の重量感があつた。

商館員や會社員の出勤時間には、ほんの僅か早かつたのか、街にはあまり人影も無かつたし、あまりに唐突な出來事が反つて人の眼には、それとハッキリは映らなかつたのでもあらうか、街の反對側を歩いてゐた人たちは、足をとゞめて振りむいてみる者もなかつた。

たゞ、二三間先を歩いてゐた、商館の小使らしい老人が、びッくりしたやうに馳け寄つて來たが、

『何でも無いよ。好いんだ。好いんだ。』

追ひのけるやうに烈しく頭を振つてみせ、女を抱いて立上つた。

自動車は……と見まはしてみたが、いま時、この時間に、こんな所をうろうろと流してゐる圓タクなど、ありやうも無かつた。

『病院は何處が近い？　知らないか？』

津田の跡から飛び出してきたボーイに訊ねると、

『病院なら、直ぐ裏に島村さんがありますけど。……何うするんです？』

『この女は俺の知つてる女なんだ。誰にも默つてゐて呉れよ。好いか？』

念を押すと、學校時代にラグビーをやつてゐた、腕の力に物を言はせ、津田は女を輕々と抱きあげると、ボンド・ビルの角を裏通りのはうへ曲つて行つた。

2

突き刺すやうな劇しい足部の痛みに、新庄ゆきは、ぎくりとして眼を醒した。

『何うしました。氣が附いた？』

のぞき込むやうにして、さう言つた者があつたが、痛みは口もきけないほどで、ぐいと頰をゆがめ、ゆきは齒を喰ひしばつた。

さうだつた、あたしは窓から飛び降りたんだつけ……。

堪へ難い足の痛みと同時に、それとは全く關係無く、頭のなかには、昨夜以來の出來事が、キレギレのフィルムのやうに、途切れ途切れに、けれどハッキリと、よみがへつてきてゐた。

クラーク・ダン。會社の支配人。スパイ。あたしはスパイの手先に使はれたのだ！

外事係りの若い刑事の顏……。新聞の社會面に大きく扱はれた記事……。賣國奴……。自分の寫眞……。寫眞……。

突かれたやうに跳ね起きようとしたが、そのゆきの肩を、かるく壓へた者があつた。

『駄目ですよ、動いては。』

齒を喰ひしばつたまゝ、微かに首を動かすと、すぐ其處に男

の顔が、若い日本人の男の顔が笑つてゐた。
『昂奮しちやア不可ません。心配しなくつても好いんだ。……解つてるんですよ。安心し給へ、新庄さん。』
津田猛は、ディライの船などにまはつてゐたので、その日の朝の新聞を見てゐなかつたから、窓から飛び降りた女の顔を見ても、すぐにそれとは解らなかつたのだが、擔ぎ込んだ島村病院では、受附に居た看護婦が、
『あら、このひと。……今朝の新聞に出てるひとだわ！』
ひと眼見ると、頓狂な聲で叫んだのを、
『餘計なこと言ふな！』
一應叱りつけるやうに言つて、診察室へ女の肉體を運び込んでから、津田は受附に引返して、看護婦の手から新聞を、引つたくるやうに取つて擴げて見ると——

憎むべきスパイの暗躍
魔手に踊らされた賣國女

A新聞地方版のトップに、いつもの二本見出しで、横に寫眞が、大きなヨットの、ヨットの上と下に、圓で圍んだ外國人の顔と、若い日本の女の顔。
上のはうの外國人の顔にも、何處か見おぼえのあるやうな氣がしたが、下の、ヨットの左側に、すこし上向きかげんに、明るく笑つてゐる若い女の顔は、確かに今自分の腕に抱いてきた女のそれに、まぎれも無かつた。
嚙みつくやうに一氣に讀みくだして行つた記事の内容は、P・D商會の支配人クラーク・ダンと言ふ男が、昨年の秋以來、數回にわたつて東京灣の灣口附近をヨットで乘りまはし、嚴重に撮影を禁止されてゐる軍機保護法地域を、精巧な望遠レンズ、赤外線フィルムなどを使用して撮影したものを、外事課員と憲兵隊の活躍に依て探知し、充分な證據を握つて昨夜山手の自宅から逮捕連行した、と言ふのだ。
因みに同人は、同じ會社のステーグ・タイピスト新庄ゆきと言ふ十九歳の少女を、常にヨットに同乘させて、『戀のヨット行』を裝つて、巧みに人の眼をカムフラージュしてゐたと言はれ、新庄ゆきも昨夜、アパートから連行されたが、これは別に事情を知つて助力した、と言ふわけでも無く、特に同人と情交關係なども無かつたらしいから、直ぐに釋放される模樣であるが、併したとへ事情を知るにせよ、知らぬにせよ、スパイの手先になつて賣國行爲を演じたことは甚だ遺憾なことで、近代女性の外人崇拜

劍道讀本

野間恒著　講談社發行　定價一・二〇　特製二・〇〇

著者が精進と體驗とを基とし古今劍聖の秘傳秘書を涉獵し劍道全般に亙る解説を試みたる名著、説く所『心劍の一致』の妙境より劍道を論じ、處世修養の大道を説く、劍道讀本にして且つ好個の人生讀本！

【文部省推薦の名著】

病はまことに歎かはしい限りである。云々。

『あんた新聞社のひとね。……ねえ、やつぱり、この女のひとなんでせう？』

津田の胸につけた海軍記者の Press マークをじろじろ見ながら、看護婦は好奇心に鼻の穴をふくらませてゐたが、

『違ふよ、あれは僕の從妹なんだ。ヘンなことを言つちやア駄目だぜ。』

怒つたやうな顔を見せたが、内心津田はドキンとしてゐた。

――さうだつたのか。此奴一寸した特種だぞ。

昨夜おそくか、今朝早くか、いづれにせよ何處の新聞社も氣づかない時間に、女は釋放されたんだらうが、それが『オクラホマ』の二階から飛降り自殺を企んだ、なんてのはセンセーショナルだ。好し、ひとつ調査つて、素晴らしい記事をこしらへよう。俺にもソロソロ、運命の神さまが、笑ひ顔を見せ始めたらしいぞ。

『君の從妹だつてねえ。なかなか美人ぢやないか。……階段でも踏みはづしたのかい。足くびをちよいと挫いただけで、たいしたことは無いさ。びつくりして、腦貧血を起してゐるんだ。安靜にしておけば、すぐに氣が附くよ。』

診察室へ這入つてゆくと、顔見知りの若い代診先生が、消毒液の匂をプンプンさせながら、振向いて、津田に笑ひかけた。

『朝つぱらから、どうもすみません。』

『そのへんに空いてる病室は幾らでもあるから、何處でも勝手に使ひ給へ。遠慮は要りませんよ。』

言はれるままに津田は、女を抱へあげ、診察室につづく病室の一つに、それを移したが、女の、新庄ゆきの、死んだやうにぐつたりと氣を失つてゐる肉體は、へんに生溫く、何か頬の火照つてくるやうな感じであつた。

新しいベッドにゆきを寢かせると、津田は看護婦を去らせ、ポケットに突込んで置いた、女のハンドバッグを取出した。

コンパクト、ハンケチ、マックスファクターの口紅と粉白粉、

せきに喘息エキス

血の滲む體驗の所産！

創製者村瀨喘息研究所主村瀨良吉先生自ら、七顛八倒の苦しみ二十年の難症を征服した血の滲む體驗から生まれた喘息エキス。百日ぜきにも特効あり。

―本藥の特長―

▲發作を未然に防止
▲發作を中途で緩和
▲咳を止め痰を切り
▲よく安眠出來る

藥價 一圓三十錢、二圓五十錢、四圓八十錢、七圓
各地信用ある藥店にて販賣

お申込次第『喘息と治療』拜呈。

東京・小石川・音羽
大日本雄辯會講談社商事部

オデオン座のプログラム、弗入れにはクチャクチャになつた十圓紙幣が二枚、手帳……と、ハンドバッグの內容に變つたものは無かつたが、手帳の裏にはローマ字で、達者な署名がしてあつた。Miss. Y. Shinjo.

手帳を開いて讀まうとした時、ううん、と苦しさうにうめきをあげ、ゆきが、突然眼を開いたのだ。

『何うしました？　氣が附いた？』

あわててハンドバッグから取出したものを、もとに返しながら津田が顏をのぞき込むと、ゆきは、ぎしぎし音のするほど强く齒を嚙みしめながら、起きあがらうとした。

『駄目ですよ、動いては。』

その肩をおさへながら、津田が强くさゝやいた。

『昂奮しちやア不可ません。心配しなくつても好いんだ。……解つてるんですよ、安心し給へ、新庄さん。』

新庄さん、と名を呼ばれて、ゆきは、一瞬、足部の痛みを忘れたほどにも驚きながら、

『誰ですの、あなたは！　……新聞社のひとね！』

『いや、僕は、通りがかりの、さつき偶然オクラホマにゐた者なんだが心配しなくつても好いんですよ。此處では誰もあなたを知りはしません。あなたは、僕の知合ひだと、從妹だと言つて、誤魔化して置いたから、大丈夫です。』

ゆきは顏をあげて、あたりを見まはしながら、

『何處ですの、此處は。……警察ぢやア無いんでせうね。』

『病院ですよ。あなたは窓から飛降りて、足を挫いたんだ。たいしたことは無いさうです。』

ゆきは、默つたまま、ぢッと津田の眼を見つめてゐたが、やがて、ほつと息を吐いた。

『すみません。……新聞社の方か、警察の方かと思つたのです。さうぢや無かつたのですね、あなたは。』

蒼ざめた頰は無殘なほどやつれ、眼ばかり病的に大きくひらかれてゐるゆきの顏は、新聞の朗らかな笑顏とは別人のやうで、足の痛みばかりでは無い、昨夜以來の劇しい心の苦しみを示してゐるやうで、津田にも、ちよつと正視出來ないやうな感じであつた。

『併し、それにしても、何うしてあんなことを……窓から飛降りたりなんか、したんですか。』

『生きちやアゐられませんわ。あんなに

講談社の繪本

●日本の陸軍　（附）銃後童話　兵隊さんと子供

飛行機、戰車等の活躍を始め、世界に比類なき我が陸軍の事が、小さいお子樣によく分る繪本。定價五十錢、各地の書店にあります。

大きく新聞に出て。……寫眞まで出てしまつて。……もうあたし、街を歩くことも出來やしませんわ。あたしは、なんにも知らなかつたのに。』

『新聞は、僕も今、見たけれど。……あなたが自殺しようとしたのはそれだけの理由なんですか？』

『ほかに、どんな理由が必要だ、と仰言るの？ ……あたしが馬鹿だつたんです。あたしは、あの人に欺されたんです。あたしは、愛されてゐる、と思つてゐたのに！ 悲しい、滑稽な己惚れにすぎなかつたんだわ。』

『ぢやア、あなたは……？』

『聞かないで頂戴！ もうこれ以上、あたしを苦しめないで頂戴！ スパイの手先に使はれて、欺されてゐるとも知らないで、何もかも男に捧げてしまつた、愚かな娘の顔を、そんなに珍らしさうに、じろじろと見つめないで頂戴！』

3

問題の女飛降り自殺を企つ
スパイ事件後報

既報、英國人クラーク・ダンのスパイ事件關係者として昨夜外事課に連行取調べを受けた○○商會タイピスト新庄ゆき(十九)は特に本事件には深い關係の無いことが判明したので説諭の上、本日早朝釋放されたが歸途山下町レストラン『オクラホマ』にて朝食を取つた際突然同家二階から街路目がけて飛降り自殺を企てたが但し生命に別條は無い模樣である。

なほ同女は姓名を秘して某病院に入院中であるが、本社記者はいち早く居所を探知し本社獨占左の如き會見記を得た。

『クラーク・ダンはあたしの戀人です。あたしは彼を愛してゐました。彼もあたしを愛してゐて呉れたと信じてゐました。あたしは彼に眞劍な愛情を捧げ、何もかも與へてしまひました。その彼が恐ろしいスパイだと知つて絶望的になつてしまひました。今朝早く警察から歸して頂いたのですが、一晩ぢう眠れなかつたので疲れきつてゐたし珈琲を飲まうと思つて「オクラホマ」へ寄つたのです。「オクラホマ」であたしは今朝の新聞を見ました。あまりにセンセーショナルな記事、その上あたしの寫眞まで出されてしまつて。……あたしはもう街を歩くことも出來ないと思ひました。この上日本人の女として生恥を晒らしたく無いと思ひ突嗟に決心して二階の窓から飛降りたのです。あたしのやうな女は生きてゐても仕方がありませんもの……』

ゆきのちよつと眠つた隙をうかがつて、津田は隣りの病室にとび込み、此處まで一氣に原稿を書いてきて、ふと鉛筆をとめた。

——こんな事をして好いのか知ら……

新聞記者の常識から言へば、こんなことは當り前すぎるほど當り前なことだし、大いに職務に忠實な所以でもあるわけだが、併し……

自分がこの記事を送れば、夕刊に出るだらう。物見高い世間の奴等は、またまたわッと騷いで、新庄ゆきはもう一度スキャンダルの上に

素裸にされるのだ。

ゆきが自殺を企てたのは、自分の行爲を恥ぢてでもあらうけれど、やつぱりそれが新聞に出て、大きくセンセーショナルに取扱はれたことが重要な原因だ。と言ふことは津田には好く解つてゐた。

それで無くても、このほんの二十時間足らずの間に、かぼそい少女の肩には支へきれないほどの重荷を背負はせられた彼女、その爲に自殺まで企てなければならなかつた彼女を、この上あさましい曝しもののやうな目にあはせて、好いのか知ら……

新聞記者には、報道の任務がある。その尊い天職の前には、下らない人情やセンチメンタリズムは禁物だ。

併し、報道の任務なんて、そんな尊い天職であらうか？ たかがスパイに弄ばれた哀れな少女の身上を報道するのが、そんなに立派な仕事であらうか？

その爲に誰ひとり利益を得るものもない、大衆の卑俗な興味に媚びるだけの、下劣なコンマーシャリズムにすぎないのではないか？ 而もその蔭には、ひとりの少女を死以上の汚辱に陷れると言ふ犧牲を要求されるに於ては！

──だが、これが俺の大事な出世のチヤンスなんだぞ。

津田は、强ひて心を鞭打つやうに、もう一度鉛筆を取りあげたが、もう駄目だつた。

原稿をつかんで立上り、隣室の扉を開いてのぞき込むと、眼を醒してゐたのであらう、ゆきが顏をむけた。

すつかり平靜を取りもどしたらしいゆきの、澄んだ、寶石のやうに綺麗な眼が、ぢつと津田を見つめ、すこし羞らひを含んで笑つてゐた。

その綺麗な、なにか心の底まですがすがしくなるやうなゆきの瞳にぶつかると、津田の心は、たわいもなく、砂のやうにくづれてゆくのを何うすることも出來なかつた。

『新庄さん、僕を輕蔑しないで呉れ給へ。』

──何ですの？ それ……

津田がつかんで差出した原稿を、ゆきがいぶかしさうに見上げた。

『僕は出世をしたかつたんだ。かんべんして呉れ給へ。……僕は、あなたが憎んでゐる新聞記者の端くれなんだ。』

微かな驚きを見せて、ゆきの眼がきらりと光つたが、默つてベッドから手を差出すと、津田の手から原稿を取り、くるりと顏のむきを變へると、ゆきは原稿を、一枚一枚、顏にかざすやうにして、讀み始めた。

『僕はそれを、あなたが眠つてゐる間に、隣りの部屋で、泥棒のやうに呼吸をひそめて、こつそりと書いたんだ。あなたに知れないやうにそれを社へ送るつもりだつたんだ。夕刊の特種にして、僕はその特種を土産に、何處かもつと好い一流の社へ移らうと、そんな淺間しいことまで考へてゐたんだ。僕は……』

『好いぢやないの、お出しになれば。』

向きなほつたゆきが、靜かな聲で言つた。

『あなたは名記者ね。あなたのお書きになつたとほりだわ。あたしなんて、ほんとに生きてゐても仕樣のない女なんだわね。』

『皮肉を言ふのかい、君は……』

『皮肉ぢやアない、本氣で言つてゐるのよ。この記事一つであなたが出世出來ると仰言るんなら、喜んであたし、あなたの特種になつて差上げるわ。あたしなんて、もうこの上、何うなつたつて同じことなんですもの。スパイの情婦……。これ以上の侮辱なんて、あるわけ無いんですもの。』

津田はゆきの手から原稿を、ひつたくるやうに取ると、いきなり引き裂いて、床に叩きつけた。

『それ以上僕を侮辱しないで呉れ給へ！』

『侮辱なんかしやアしないわよ。あなたも氣の弱い方！　この世の中で出世するには、それぢやア少し氣が弱すぎるわよ。』

ゆきの頬に、ちらりと微笑に似た影が浮んだが、すぐに消えた。

『考へてみれば、日本人なんて、みんな氣が弱くつて、みんな人が好いんだわねえ。この頃の娘は、外人崇拜病だの何だのつて言ふけれど、そんな病氣を流行らしたのは、言はば明治以來の、國家的方針みたいなものぢやア無いのか知ら……。學校で敎はることも、世の中の色んな施設も、ヨーロッパの國はみんな先進國で、たとへばイギリスの政治は世界一で、ドイツの化學は世界一で、フランスの美術は世界一で、と何もかもそんな風に敎育されてきたんですもの。此頃になつて急にあたし達ばかり責めたつて、無理だと思ふのよ。……そりやアあたしも馬鹿だつたわ。あたしはあのひとが、自動車に乘る時に先に乘せて呉れたり、エレベーターへ乘ると帽子を取つたり、街を歩く時に腕をとつてエスコートして呉れたりするのを、みんなあたしを尊敬し、あたしを愛してゐて呉れるからだ、と思つたんだけど、さう言ふことは、あの人たちにとつては、あたし達がタクアンを喰べたり、足駄をはいて歩いたりするのと同じやうに、單なる習慣にすぎなかつたのね。それとこれとを混同して、あまり男に親切にされつけない日本の娘が、口の巧い、美貌の西洋人に欺されて、貞操まで奪はれてしまつたからと言つて、同じ日本人が、そんなに威丈高になつて、高飛車に罵り散らすこともあるまいと思ふんだけれど。……日本人なんて、ほんどに、みんな人が好いんだわね。』

『解るよ、君の言ふことは。併しね……』

『あたし、自己辯護をしてゐるんぢやアないのよ。あたしだつて、あたしみたいな女が、これから何んな生き方をしたら好いか、解つてゐるつもりよ。……考へたのよ、今。はつきりと解つたわ、どんな生き方をしたら好いのかつてことが。それから、どんな死に方をしたら好いか、と言ふことも。』

4

人ひとりの運命を犧牲にしなければ出來ないやうな出世なら、そんなものは願ひ下げにしたはうが好いさ――

『だが併し、あの特種は、ちよつと惜しかつたな。』

みすみす取り逃がしてしまつた『特種』も惜しかつたが、あのまま別れて、それつきり消息を絶つてしまつた、新庄ゆきと言ふ女が、心に強い印象を殘して、更に忘れ難い氣持であつた。

何うしたらう、あの女……

病院を出て、ベンド・ホテルで一緒に夕食を取り、さよなら、さよなら、と右と左に別れたのだが、その翌日、津田がアパートに訪ねた時は、ゆきはもうアパートを引拂つて、姿を消してゐた。

會社のはうは、無論やめてしまつてゐたし、それつきり手掛りが無くなつてしまつたのだが。

オクラホマの飛降り事件は、津田がおさへてしまつたので、まつたく世間へは擴がらず、從つて、新庄ゆきの名も、浮氣な世間からは間も無く忘れ去られてしまふことだらう。

『何うしたんだ。ヘンに此頃、元氣が無いやうぢやないか。』

仲間の記者に冷やかされるほど、目立つて津田は、虚脱したやうにうつろな瞳になつてゐた。

あれほどセンセーショナルに扱はれたクラーク・ダンのスパイ事件も、取調べの進捗につれ、東京灣口の軍機保護法地帯のカメラ撮影と言ふ以外には、眼ぼしいスパイ行爲もあがらず……いや、實際は、新聞雜誌を通じての合法的な情報輯集の事實は、幾らでもあるのだが、どうもこれだけでは『合法的』であつて、何うにもならず、結局のところ、あまり大したことも無く、ケリがつきさうになつて、これも世間の浮氣な興味からは、輕く見離されさうに見えてゐた。

斷つて置くが、これは何も人々がスパイ事件を輕視したり、好いかげんに考へたりしてゐるからでは決して無いのだ。

ただ歐洲戰爭以來、矢鱈にでつちあげられた荒唐無稽のスパイ・ローマンスの噓八百が、映畫や小説を通じて世界ぢうにバラ撒かれた結果、スパイと言へば變裝して秘密設計圖を盜んだり、軍需工場に爆藥を仕掛けて爆破したり、そして最後は銃殺と來ないと、何だか物足りないやうな氣がする、と言ふ、それだけのことなのだ。

合法的な情報輯集や、東京灣のカメラ撮影が、軍需工場の爆發よりも、更に恐ろしいスパイ行爲だと言ふことが、理窟では解つても、何だか何うも、ぴーんと胸に、本當に恐ろしく迫つて來ない、なんてことがあるとすると、噓八百のスパイ映畫も飛んでも無い力を持つてゐると言ふべきだが。

相手が交戰國の人間なら、立派に銃殺

講談倶樂部連載
『南海游俠傳』に寄す
加藤武雄

『南海游俠傳』は、作者近來の傑作であるばかりでなく、文壇を通じての、注目す可き佳品であらう。俠客にして詩人、詩人にして勤王の志士、といふ日柳燕石の、多角的な性格と複雜な環境を描く可く、作者の多彩な筆と精透な史眼とは、最もこれに通じてゐる。此の篇の如き、此の作者にしてはじめて書き得るところで、又、時局的に見ても、最も時宜を得た作品であると思ふ。

講談倶樂部十月號評判讀物
日本劍人傳 柳生石舟齋 吉川英治
時代小說 黑潮鬼……角田喜久雄
現代小說 鐵の花嫁……竹田敏彥
現代小說 新生の歌……加藤武雄

ものだけれど、實際はとに角として、名前だけは第三國になつてゐる英國の人間では、まさかズドンとやるわけにもゆかないので、國外追放と言ふことにきまり、クラーク・ダンが山手の自宅へ、歸宅を許されて歸つて來たのは、四月初めの暖い午後であつた。

ダンは山手の丘の小さな家に、日本人の家政婦とコックを使つて、さゝやかに暮してゐたのだが、ダンがスパイと知れて逮捕された日に、家政婦もコックも、暇を取つて出て行つてしまつた。

一ケ月近くも、惠む人も無く、荒れるにまかせたダンの家は、玄關に大きな蜘蛛の巣がかかつてゐたが、パゴラにからんだ蔓薔薇は滿開で、薄い薔薇色の花が、いつぱい咲いてゐた。

新聞記者にも跡けられず、ダンは自分で、自動車を運轉して歸つて來たのだが、一ケ月ぶりで見た自分の家と、家を掩ふやうに、いつぱいに咲きみだれた薔薇の花の美しさに、ちよつと呼吸をのんで、見とれてゐた。

ほら、こんなに薔薇が美しかつたか知ら。

玄關へのぼつて、扉に鍵をさそうとすると、扉は音も無く內側に開いた。

『おう、ユキ。……何うしましたか、あなた!』

暗い玄關の內側には、いつものピンクの洋服を着て、新庄ゆきが立つてゐた。

『お待ちしてゐましたのよ、あなたのお歸りを……』

にっこり微笑つた。ゆきの顏。……ゆきが自分を待つてゐて呉れようとは、意外であつた。

一ケ月ちかい外界との隔絶に、すつかり氣が弱くなつてゐたのか、ダンは、美しいゆきの姿に、激しい愛情を感じたらしく、ゆきをしつかりと抱きしめた。

『ユキ。わたしは、あなたに、會ひたかつたよ!』

そのクラークの胸を輕く突き離すやうにして、ゆきが、

『お話は、後刻でゆつくりうかがひますわ。さあ、着換へを遊ばさなくては。』

『ユキ、あなたは、わたしを信じてゐるね。あなたはわたしを、憎みはしないだらうね、……ねえユキ、それを聞かしてお呉れ。』

『あたしは、あなたをお待ちしてゐたのよ。それがあたしのお答への全部。』

ゆきは後を向くと、寢室のはうに歩いて行つたが、その少しびつこを引く足取りの不自由さに、ダンはすぐに眼をとめた。

『何うした、ユキ。あなたの、その足は。』

『何でも無いの。これもあたしの、お答への一ツかも知れないけど。』

『何うしたのですか。事故ですか?』

『今は言へません。』

笑つたが、翳のある笑であつた。

部屋着に着換へたダンは、どつかり、肱掛椅子に腰をおろし、ゆきの入れた珈琲を、美味さうに飲みほした。

『あなたが、わたしを待つてゐて呉れようとは、ほんとうに意外たつたよ、ユキ。』

『そんなに意外か知ら。あたしはあなたを、此の家にゐて待つ義務があつたのよ。』

『あなたはわたしを憎み、わたしを捨てて何處かへ逃げてしまつたらうと考へてゐました。……何故、待つてゐたの？』

『あなたはこれから、何うなさるおつもりなの？　あたし、それをうかがひたいの。』

『香港へ行きます。』

『あなたが國外追放にきまつたと言ふことも、今日あたりお歸りになると言ふことも、それから多分、香港へおいでになるだらうと言ふことも、あたし領事さんから聞きましたけれど。……香港へ行つても、あなたのお仕事をお續けになるんでせうね。』

『仕事？』

ダンの眼が、ちよつと光つたが、すぐに笑ひにまぎらしてしまつた。

『解りません。それは。』

『あなたのお仕事は、香港へ行つても、やれますものね。……さう、解りました。それだけおうかがひすれば、好かつたのよ。』

部屋の隅にある化粧臺の前に立つて、ゆきは引出しを探つてゐたが、やがてくるりと振りむくと、その手には、かつてダンが買ひ與へてやつた、小型の婦人用モーゼルが握られてゐた。

『何だ、ユキ。そんなものを持つて……』

『あなたを射つのよ。』

北村小松編
防諜とスパイ實話
恐るべきスパイの實體を見よ！
而して全國民防諜の戰士たれ！
全國民を戰慄せしめた英人スパイ群の大檢擧は何を語るか？或は假面の下に、或は合法的に戰時日本は國際スパイ群の巣窟だ。本書は元警視廳外事課長小川氏が凡ゆる例證を擧げて恐るべき彼等の活動を暴露し、如何に防諜の途を講ずべきかを敎へ、附するに支那事變、滿洲事變、歐洲戰亂の背後に躍るスパイ祕話を集め、もつて全同胞に一大警告を與へた問題の書である。（定價一圓五十錢送料内地十錢）

木村毅編
國際スパイ實話
歐洲大戰から滿洲事變に到る列國スパイ暗躍史上の華と云ふべき驚倒の大實話十二篇——命も貞操も省みず、國際舞臺の陰に躍る物凄い間諜戰を見よ！（定價一圓五十錢送料内地十四錢）

北村小松著
燃ゆる大空
キング三百萬讀者を唸らせ、日本陸鷲の絶大なる援助の下に映畫化された問題作！熱涙、感激、以て航空界の眞髓に通ずべく、以て日本人の誠に泣くべし。（定價一圓二十錢送料内地十錢）

東京小石川　大日本雄辯會講談社　振替東京三九三〇

『冗談は止めなさい。危險です。』

ゆきの表情に、何か只ならないものを感じ、ダンは狼狽して立上つたが、

『動いちやア駄目よ。あたしが、馳けてゆくミエフアードを射殺することの出來るのを、あなただつて御存じでせう。』

『氣が狂つたのか、ユキ、人を射てば、自分も射たれるのだぞ！』

『あたしは、もう死んでゐるのよ。自殺した女なのよ。自分の死ぬとなんか恐れてゐやアしない！ ……あなたを殺すのよ。あなたを、殺すのよ。あなたを、そのまゝ香港にやることは出來ないわ。あたしこの二週間の間此處に居て、あなた方のお仕事、スパイの研究をしました。あなたはスパイの、小さなエージエントの一人にすぎないのね。香港には、あなた方エージエントの上に立つて、本國にあるデイレクターと連絡を取つてゐるオルガナイザーがある。あなたは、其處へ行かうと言ふんでせう？ ……スパイは證據を殘さない。見たもの、聞いたもの、盡く頭腦に刻み込んで、決して形に殘しては置かない。それが近代スパイの戰術なんだわね。あなたの頭腦のなかには色んな記錄と、色んな統計が、鋼鐵のレター・フアイルのやうに、整然とフアイルされてゐるんだわ。そんな危險な人を、そのまゝ香港へやるなんて、飛んでも無い事ぢやアないの。たゞ、日本の紳士的な法律が、その危險なレター・フアイルを射ち殺してしまふことが出來ないのが、殘念なのよ！』

急に狡さうな笑ひを浮かべ、ダンが、へんに悠然と椅子に腰をおろした。

『つまらん眞似は止めなさい。そのとほりだ。うつかりわたしを射つたりすると、日本の法律だけでは無い、わたしの國の紳士的な法律も默つてはすまさんだらう。』

『國際問題が起る、と言ふの? でも、クラーク、安心なさい、あたしはあなたの情婦なのよ。戀に狂つた女の痴情の、果の兇行なら、ピストル騒ぎも、珍らしいことぢやアないわ。……解る?』

『馬鹿な!』

言つたが、心の狼狽は隱しきれず、ダンの額は、水のやうに色を失つてゐた。

『こんなヘンなものを出して、お芝居がかつた眞似をしたくは無かつたんだけど、やつぱり道具立だけは、ちやんとして置かないと、面白くないと思ふのよ。……御覧なさい、露臺には薔薇の花がいつぱいだわ。空は晴れてゐるし、こんな日に、戀に狂つた女が、情夫をモーゼルで射殺するなんて、とてもロマンテイックぢやアないの。』

足で、ダンがテーブルを蹴つた。

音立ててテーブルが倒れ、珈琲ポットと茶碗が、床に落ちて碎けた。ゆきが、それに氣を取られ、ひと足ひいた時、隙をねらつてダンが、逃げようと、露臺に飛び出した。が、

背後から、ゆきが、續けざまに三發射ち、その二發が、肺と心臓を見事に射ち抜いて、ダンはそのまゝ、聲も立てずに、露臺に昏倒した——

森閑とした眞晝で、ひつそり、小鳥の聲もない。

馳け寄つて、ゆきはダンを抱き起したが、ダンの呼吸は全く絶え、胸からは、薔薇よりも赤い血が、泉のやうに流れ出し、みるみる露臺を、花のやうに染めて行つた。

ダンの肉體を露臺に横たへ、ゆきは立上つて、放心したやうに、暫くぢつとそれを見おろしてゐたが、軈て薔薇の花を折つて、ダンの胸の上に投げると、ふたゝび部屋に引返し、ぐつたり椅子に身を投げかけ、眼を閉ぢた。

全身から力と言ふ力の抜け去つてゆくやうな、そのまゝ深い穴に引き込まれてゆくやうな、恐ろしいやうな空虚であつた。

かうしてゐては不可ない。あたしには、まだ大事なことが、一番大事なことが殘つてゐるのだ――

立たうとしたが、もう立てないやうな氣持であつた。不可ない。これでは不可ない。

ゆきは弱々しく頭を振り、やうやく椅子を立つて、部屋の隅の卓上電話を取りあげた。

ダイヤルを廻す手が、ぶるぶる震へ、幾度もやりなほした後に、やつと通じた津田猛のアパート。

夕刊をすまして、朝刊の〆切までの間を、津田は幸ひに、アパートで晝寢をしてゐた。

『津田さん？　あたしです。解りますか？……新庄ゆき』

受話器を傳つてくるゆきの聲に、津田は一瞬耳を疑つた程だつたが、

『新庄さんか、何うしたんです。何處にゐるんです。僕はずゐぶん貴女を探したんだけどなア』

『あたし、今、クラーク・ダンの家にゐます。解る？　クラークは、今日歸宅を許されたの。……それで、あたしあなたにお會ひしたいんだけれど、直ぐに來て下さらない？　あなたに、是非差上げたい贈り物があるの』

『贈り物？』

『あなたはこの前、あたしの爲に、大事な特種を犧牲にして、出世の機會を棒に振つておしまひになつたわね。今日は、そのお禮に、あたしがあなたに素晴らしい特種を差上げようと思ふの、だから、直ぐに來て下さらない？』

その聲には併し、何か普通でないものが感じられ、津田は不安になつてゐた。

『行きます。すぐ行きますから、そのまゝ待つてゐて下さい。』

受話器を掛けようとした時、

『ちよつと。津田さん、ちよつと待つて頂戴。あなたに今、面白いものをお聞かせするわ。……好く聞いていらつしやいよ。』

ゆきの聲が終るか終らないうちに、ぴーんと何か硝子でも割つたやうな金屬的な音が甲高く響いた。

『解る？　戀に狂つた女が、情夫を射殺して、次手に自分も死んでゆく音なのよ。……情痴の果の無理心中。……明日は、この山手の丘から街ぢうに、スパイ女の新しい醜聞が擴がつてゆくわね。露臺は、薔薇の花が眞盛りよ。とてもロマンティックだわ。せめてあたし達の醜聞も、薔薇の花にでも飾つて貰はなければねえ。』

ゆきの笑ひ聲が糸を引いて、それが微かに吸ひ込まれるやうに消えた時、何か重いものゝ床に倒れる、鈍い音が津田の耳を打つた。

『新庄さん！　何うしたんです、新庄さん……！』

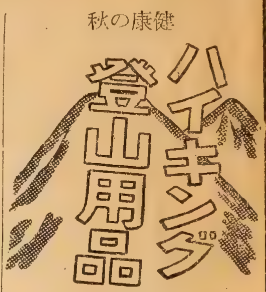
受話器を握つたまゝ、色を失つて、津田はへなへなと床に膝をついてしまつたが、津田の眼には、眞赤に咲いた美しい薔薇に圍れて、新庄ゆきの美しく笑つてゐる顏が、油畫のやうに鮮かに見えてゐた。（終）

スパイの手に乘るな
――二二頁の防諜記事を是非御覽下さい。

特選品特價御奉仕

東京・小石川・音羽
大日本雄辯會講談社代理部
（振替東京六六二九）

健康の秋



リユックサック

別製八圓、特製五圓五十錢（送料各内地四十四錢其他四十九錢）

魔法瓶

溫度不變、ベークライト製
特價四圓二十錢（送料内地三十錢其他七十五錢）

登山ナイフ

特價一圓二十錢（送料内地十錢其他四十二錢）

双眼鏡

B號三圓五十錢（送料内地二十一錢其他五十五錢）

急救箱（醫療藥品詰合せ箱）

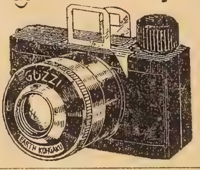
特價二圓八十錢（送料内地三十錢其他七十五錢）

グッチー

寫壇の寵兒！　超弩級小型

グッチーはマッチ箱より小さいカメラですが、固定焦點、シャッター二十五分の一及びバルブ、二十ミリ角十枚撮りの性能を有する總金屬製の優美堅牢品。初心者にも美しい引伸寫眞が得られるので大評判です。

●**特價五圓五十錢**。專用ケース一圓、フイルム一本二十五錢、ヒルター二圓。送料（フイルムは六本まで）各内地十錢、其他四十二錢）

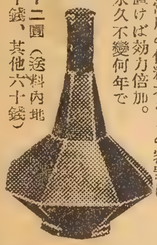


ラドン化粧水器

專賣特許　見違へる程美顏になる化粧水が水で出來ます。

ラドン化粧水器は中に純正ラヂウム原が裝置してあり、水を入れて數時間置くと放射されたエマナチオンが水にとけ込み自然の化粧水になり、その化粧水は皮膚の代謝機能を旺んにし細胞を若返らせますから、これを用ひますと荒症色黑等種々の惱みを除き、見違へる程美しく致します。常用の化粧水もこの容器に入れて置けば效力倍加。效力は永久不變何年でも御使用出來ます。

●實費十二圓（送料内地三十錢、其他六十錢）



手品材料

▲三種組合せ（銀貨の消滅昭和の不思議、讀心術）七十錢▲三種組合せ（飛行のサイコロ、掌の怪力、變心術）一圓五十錢▲五種組合せ（トランプ空中より、銀貨の消滅、飛行のサイコロ、昭和の不思議、空色カード）二圓五十錢、以上送料各内地十錢其他四十二錢、

●申込次第カタログ進呈

捕鳥用カスミ網

色々の小鳥が一度に數十羽生捕れる面白い捕鳥網

●特價長サ三間三圓六十錢、四間四圓八十錢、五間六圓、六間七圓二十錢、七間八圓四十錢、十間十二圓（巾は六尺）（送料各内地十錢其他四十二錢）

革の更生液　革の友

古くなった靴、鞄、ランドセル、手袋その他革製品なら何でも新品のやうに色揚げし、若返らせる新發明液。時局柄切におすゝめ致します。

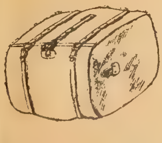
●特價五十錢。（送料内地十錢其他四十二錢）茶、黑の二種あり御指定を乞ふ

ふとん袋（五枚入）

愛讀者皆樣の御家庭へ特におわかちする特選木綿の堅牢生地で、旅行、移轉になくてはならぬ重寶品です。

特價御奉仕で手持僅少ですからお早くお申込み下さい。

●特價十三圓二十錢（送料内地二十五錢其他六十五錢）



ホタル電燈

電池不要の懷中電燈

ハンドルを數回廻せば强力な電氣が起きて明るい光を發するスバラシイ懷中電燈。構造堅牢で永久使用出來ますから、非常時家庭に、登山に、旅行に、特に戰地にて大重寶です。

●**特價九圓六十錢**（送料内地二十錢其他四十五錢）

ヴァイオリン

提琴家諸先生折紙つきの代理部特選ヴァイオリン。
（獨習書附屬品一切つき）

●特價一號七圓、二號九圓五十錢、三號十五圓、四號十九圓、五號二十五圓。（送料各内地一圓二十錢、其他二圓十錢）

編輯後記

秋冷を覺える頃となりましたが、大陸では皇軍將兵が北に南に惡戰苦闘をつゞけてをられます。私共はこの勞苦に深く感謝の誠を捧げると同時に、戰線の將兵に負けない元氣と努力で、銃後を固く護り、國策完遂に協力いたしませう。

× ×

世界の情勢は刻々に變り、世の中は日一日と進展しつゝあります。國際情勢も益々難しくなつて來ました。東亞建設の途上にあるこの重大な時局に處して私達同人も雜誌の使命の如何に大きいかを具に痛感し、懸命の努力をつゞけてゐる次第です。

× ×

お待ちかねの大林清氏の大作『時代の尖兵』(風濤の改題)は、愛國の熱情にあふれた感激深い讀物と思ひます。次號は又大場面の展開で更に面白くなります

『戰生少尉奮戰記』は、木村毅氏が宜昌作戰從軍の報告作で、日本軍人が如何に強いかを如實に物語る讀物と思ひます。

× ×

外國スパイの暗躍が如何に恐るべきものであるか、防諜が重大な問題になつてゐる時、防諜小說や防諜記事を揭げた意圖を是非おくみとり下さい。來る航空日(九月二十八日)に因んでわが荒鷲の奮戰物語や、滿洲事變十周年に際し、その思出物語をも揭げました。

海外にある同胞が祖國を如何に案じてゐるか『在米日本人は叫ぶ』はその動靜を知るに足るべく、然も銃後に一段の緊張を促す話と思ひます。

本誌はあらゆる記事に小說にすべて時局下にふさはしい雜誌として、又新體制に處すべく、今後一段の努力を傾注する覺悟で居りますから、この上とも一層御支援をお願ひいたします

御注文の仕方

○本社發行の書籍雜誌を御愛讀下さる方はお近くの書店でお求め願ひます。每月豫め御申込み置き下されば、賣り切れになつて御手に入らぬやうなことはございません。

○お近くに書店のない場合は直接本社へ御注文願ひます。

○本社への御注文はすべて前金に願ひます

○御送金は振替貯金が一番安全で且送金代が安くすみます。(振替貯金用紙は郵便局にあります、その使ひ方も局でよく敎へてくれます。本社の振替口座は東京三九三〇番です)

○郵便爲替や郵便切手代用でもよろしいのですが、郵便切手代用の場合は必ず一割增に願ひます。

○爲替券や切手を封入した場合はぜひ書留郵便に願ひます。

○代金引替と集金郵便とは勝手ながら取扱ひません。

○御注文書には、書籍名、雜誌名及び何月號からといふ事をハツキリお書き下さい

○御住所とお名前は、ぜひ楷書で書いて下さい。

○御注文は大日本雄辯會講談社營業部宛に願ひます。

○代理部への御注文は大日本雄辯會講談社代理部宛に願ひます。代理部の振替口座は東京六六二九番です。

㊝本號定價 金七十錢

送料（內地（第三種）……三錢 / 外國……三十二錢）

尙――朝鮮、臺灣、樺太、滿洲、支那に於ては、現地組合の公認賣價を認めます。

豫約購讀料金（本社直接）送料共

普通號 一冊	金七拾四錢
六ケ月分	金四圓貳拾錢
一ケ年分	金八圓貳拾八錢
外國一ケ年分（滿支以外）	金拾貳圓九拾六錢

◎臨時增刊發行の場合は右の料金以外に代金を頂きます。

◎特大號で定價、送料を上げた場合はその分だけ右の料金の外に拂込んで頂きます。但し滿、支以外の外國は拂込むに及びません。

昭和十五年九月三日印刷納本（富士第十三卷）
昭和十五年十月一日發行（第十一號）

每月一回 一日發行

編輯兼發行人 木村喜市

印刷人 渡邊一郎

東京市小石川區東古川町十番地

印刷所 中外印刷株式會社

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

發行所 株式會社 大日本雄辯會講談社

振替口座 東京三九三〇番（本社） 東京六六二九番（代理部）

電話 牛込(34) 代表（五三〇〇(5) 六二〇〇(55) 六三〇五(5)） 長距離六三〇五 宿直用六二一五

元取次店 東京堂・東海堂・北隆館・大東館

禁複製

本誌に揭載せるものは無斷にて轉載し又は單行本に上梓し、或は脚色・上演・映畫撮影・放送その他一切の複製行爲を爲す事を禁ず

頭と身體の疲れた時
何よりも良いと喜ばれます

池袋驛東口
アサヒ薬局　一ノ瀬伊惣喜

私共薬局でも効果のきまり切つた新薬や賣薬等の販賣には何の苦勞もありませんが、その人の體質に依つて時々反應の違ふ榮養劑などお奬めする場合はなか／＼苦心致します。その意味で私共が安心してお奬め出來、特に頭や身體を極度に使ふ方々から何よりも良いと喜ばれて居るのは、信州伊那の谷特産鹽澤家傳の養命酒であります。

元來養命酒は滋養強壯劑として、頭や身體を極度に使ふ方、胃腸が弱くて食事の進まぬ方、神經衰弱のやうで夜分眠れぬ方、根氣弱く息切れする方、肺や肋膜の弱い方、貧血冷え込みの方産前産後の婦人等凡て病弱虚弱の方々へお奬めして大變喜ばれて居りますがとりわけ頭や身體が疲れて困ると云ふ方々からは養命酒を飲むと頭が迚もハツキリし、身體が活氣付いて仕事に疲れぬと感謝されて居ります。

養命酒の評判が益々高くなり、年々賣行きが増して行くのは品質が良いのと、定價が徳用瓶四圓、大瓶三圓、携帶用一圓五十錢になつて居て、滋養強壯劑としては大變割安である爲と、釀造發賣元が信州伊那の谷大龍館である關係上愛飲される方が非常に信用され一度お試みになられた方は丈夫になつてからも仕事に疲れぬと引續き愛飲される結果だと思ひます。

HUZI
Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansya Co., Ltd. Tokyo, Nippon.

大正五年九月十五日第三種郵便物認可 昭和十五年九月三日印刷納本 昭和十五年十月一日發行（毎月一回一日發行） 富士 第十三巻 第十一號 (停)定價金七拾錢（送料三錢）

ラキサトール錠

從來は美容の内に顧みられもしなかつた健康といふ要素が、今では最も重視され素肌の健康美が專ら尊重されてゐますが素肌の美しさが通じの加減によつて直接影響を受ける事は余り知られてゐない様です。

便秘になると腸内の毒素が血液中に吸收され忽ち地肌を荒らし容色を曇らします

秋立つと共に、又々悩みは増えませんか…………兎角、全身の好調に乘じ食慾の進む爽涼の今こそ美肌を蝕む便秘の害は一入に感じられます。

ラキサトールの緩和な作用によつて、一日一回の正しい通じをつけ體内の淨化を計ることが…………健康の要諦です。

10錠・四〇 50錠 一・五〇 100錠 二・五〇

シオノアスピリン製造元

株式會社 **塩野義商店**

大阪・東京・奉天

HUZI
Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansya Co., Ltd. Tokyo, Nippon.

大正五年九月十五日第三種郵便物認可　昭和十五年九月三日印刷納本　昭和十五年十月一日發行（毎月一回一日發行）　富士　第十三卷　第十一號　㊫定價金七拾錢（送料三錢）

ラキサトール錠

從來は美容の内に顧みられもしなかつた健康といふ要素が、今では最も重視されて素肌の健康美が專ら尊重されてゐますが素肌の美しさが通じの加減によつて直接影響を受ける事は余り知られてゐない様です。

便秘になると腸内の毒素が血液中に吸收され忽ち地肌を荒らし容色を曇らします。

秋立つと共に、又々惱みは増えませんか………兎角、全身の好調に乘じ食慾の進む爽涼の今こそ美肌を蝕む便秘の害は一入に感じられます。

ラキサトールの緩和な作用によつて、一日一回の正しい通じをつけ體内の淨化を計ることが………健康の要諦です。

10錠・四〇　五〇錠　一・五〇　一〇〇錠　二・五〇

シオノアスピリン製造元
株式會社　塩野義商店
大阪・東京・奉天

"THE HUZI" (Export No. A2) Made in Nippon (Japan)

軀が肥る

痩體が嫌でも肉付く

戰線では携帯口糧一ツだけで體力を保持される事があります。その小型の携帯口糧にイースト菌といふ微生物を配した品があります。イースト菌は消化を助け體力を増す菌です。

陸海軍御用達研究所の光栄を有する京都府宇治所在のマルキイースト菌研究所は、陸海軍の御用以外に、病弱者の希望に應じて一般にも新鮮菌を分讓してゐます。銃後の國民にとつて何より大切なのは健康であります。平素胃腸が弱く何を喰べても消化が悪く、體重が輕くて體力乏しき人は新鮮イースト菌をのみ――自分も家人も隣人も驚ろくほど肉付をよくし元氣な身體になつてください。イースト菌は名譽ある研究所の謹製品ですから、誌上に薬品式效能はならべませんが、新鮮イースト菌の瓶詰は、瓶の中より菌を取り出して再び培養する事が出來る品でありますから、生きた藥とも申されます。これをのむと――疲れ弱つてゐる人體の機能『はたらき』が刺戟を受けて新しく活動をはじめます。だから慢性の胃腸衰弱などは面白いやうに回復して今度は飯を多く喰べるので周圍の者が氣を揉む場合もありますが、消化が進む結果だから食滯の心配はなく喰べた食事は血となり肉となるので體重は計るたびに増えます。

新鮮イースト菌は別に肺肋膜の特效藥と稱した事はありませんが、寢てゐる病人でも消化が進むと回復力が何倍にもなるので衰弱が蘇がへります。寢るほどでないブラブラ病人なら、新鮮イースト菌の作用が病弱體を消し飛します。病人でなくても常に過勞する人や平素病弱な人は用ひてください。陸海軍御用達研究所の謹製品ですから、純良菌を嚴選して差上げます。何人も安心してお申込みあれ。

服菌希望者は次の手數を我慢して下さい。大阪京都附近は菌種の優良を認め自發的備付け薬店多き故求められたく、其他大都市はデパート藥品部か大藥店にあり。近處の藥店にイーストと指定し取寄せ依頼も可です。

品切れ地方は御手數でもハガキに『富士』で見た旨を記し東京か大阪の直配部に申込次第遠地も早く着くやう急送します。送料は頂きませんから到着後金二圓をお支拂ひ下さい。『但し海外定價は内地の二割増』二圓瓶にて體力は充分に回復しますが、大量服菌を望む人は金五圓の徳用瓶を申込まれるも可です。

◇東京市京橋區銀座西八丁目六ノ三八『土橋電車停留所際』　イースト菌關東直配部

◇大阪市東區道修町二丁目四ノ七『堺筋平野町電停西側』　イースト菌關西直配部

◇研究と培養――　京都府下・宇治・招徳閣

HUZI
Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansya Co., Ltd. Tokyo, Nippon.

大正五年九月十五日第三種郵便物認可　昭和十五年九月三日印刷納本　昭和十五年十月一日發行（毎月一回一日發行）　富士　第十三卷　第十一號

ラキサトール錠

從來は美容の内に顧みられもしなかつた健康といふ要素が、今では最も重視され素肌の健康美が專ら尊重されてゐますが素肌の美しさが通じの加減によつて直接影響を受ける事は余り知られてゐない樣です。
便秘になると腸内の毒素が血液中に吸收され忽ち地肌を荒らし容色を曇らします

秋立つと共に、又々惱みは增えませんか………兎角、全身の好調に乘じ食慾の進む爽涼の今こそ美肌を蝕む便秘の害は一入に感じられます。
ラキサトールの緩和な作用によつて、一日一回の正しい通じをつけ體內の淨化を計ることが………健康の要諦です。

10錠・四〇　50錠 一・五〇　100錠 二・五〇

シオノアスピリン製造元
株式會社 塩野義商店
大阪・東京・奉天

定價金七拾錢（送料三錢）

良い藥を安心して買ふ方法

諸官立病院各大學病院で使用してゐるだけでも藥の良さは充分保證されてゐる譯だが、その上試藥を試用してみて此の藥ならと確信がつけば、お買ひ上げを願ふのですから、これ程安心してお手當出來る藥は先づ他にない

諸官立各大學病院採用

無代進呈＝試藥・治療書（坐藥・軟膏各一圓二十錢より全國藥店デパートに在り）

痔に

ヘモロスが官立病院大學病院で推奬使用せられて高度の治療成績を擧げてゐるのは、ヘモロスが卓越せる藥理作用を具備してゐる證據ですから、此の際、試藥を取り寄せ其の成分が如何に優良であるかを醫師に聞いてみても早判りだし、倘使用の効果を確めてから續けてもよいのですから至急**ハガキ**で試藥を申込まれよ！　無料で送呈します。

醫學博士　張　房雄先生創製

ヘモロス

東京・城東・龜戸驛前

大興製藥合名試藥係

振替東京五一八九七番

Date Due 9-1900

JUL 19	OCT - 9		
JUL 22	OCT 14		
JUL 25	OCT 17		
JUL 29	OCT 1[illegible]		
AUG 1	OCT 21		
AUG 7	OCT 25		
AUG 14	OCT 30		
AUG 17	NOV - 7		
AUG 24	NOV 13		
AUG 30	NOV 16		
AUG 31	NOV 22		
SEP - 4	NOV 28		
SEP - 9			
SEP 14			
SEP 19			
SEP 23			
SEP 28			
OCT - 3			